

連 合 総 研

JAPANESE TRADE UNION CONFEDERATION
RESEARCH INSTITUTE FOR
ADVANCEMENT OF LIVING STANDARDS

ワーキングプアに関する連合・連合総研共同調査研究報告書Ⅰ
— ケースレポート編 —

～ 困難な時代を生きる120人の仕事と生活の経歴～

財団法人

連合総合生活開発研究所

ワーキングプアに関する連合・連合総研共同調査研究報告書
ケースレポート編

～困難な時代を生きる120人の仕事と生活の経歴～

連合総合生活開発研究所

はじめに

近年、格差の拡大、労働現場の疲弊などが進む中で、働く貧困層（ワーキングプア）の問題が社会問題として大きく取り上げられるようになってきました。しかし、「ワーキングプア」について、わが国の政府はいまだに、その定義も定めておらず、政府の諸統計から実態を探ることは難しい状況にあります。

連合総研では、ワーキングプアの実態を把握することを目的として、連合非正規労働センター・総合政策局と共同で、2009年1月に「働く貧困層（ワーキングプア）に関する調査研究委員会」（主査：福原宏幸大阪市立大学大学院経済学研究科教授）を設置いたしました。

本調査研究委員会では、雇用形態、年収等に注目して対象となり得る地域・集団を検討したうえで、聞き取りおよびアンケート調査を行うことによって、労働条件、社会保障適用の問題、また生活問題の現状を中心に、ワーキングプアの実態に迫ることを企図しました。

具体的には、既存のワーキングプア研究についてのレビューを行い、その検討を踏まえて、アンケート調査「困難な時代を生きる人々の雇用と生活の実態調査」および聞き取り調査を企画し、生活困難者等の支援を行っている労働組合、NPO等の全面的な協力を得て、2009年7月から12月にかけて両調査を実施しました。

委員会としては、これらの調査研究の結果を2冊の報告書にまとめることといたしました。1冊は、120人におよぶ聞き取り調査対象者の生の声を集めたケースレポート集です。もう1冊は、研究委員会メンバーが聞き取り調査およびアンケート調査の結果について分析を行ったものです。本報告書は、このうち、第1冊目のケースレポート集にあたります。

聞き取り調査にあたっては、これまでの職歴を中心に、調査対象者個々人の生活史をひも解くことにより、これらの人々が現状に至るまでの経過にも迫るように努めました。

本報告書が、労働組合関係者をはじめ各方面において、ワーキングプア問題解決に向けた今後の検討の素材として、参考になれば誠に幸いです。

おわりに、本報告書の刊行にあたり、極めて難しい内容の調査であったにもかかわらず、惜しみないご協力をいただいた、聞き取り調査対象の方々、調査対象者をご紹介いただいた関係諸団体の方々および、委員会の福原宏幸主査をはじめ各委員、オブザーバー、そして、聞き取り調査を行っていただいた調査者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

2010年6月

財団法人 連合総合生活開発研究所
所長 薦田 成

「ワーキングプアに関する連合・連合総研共同調査研究報告書Ⅰ－ケースレポート編－」について

本報告書は、連合総合生活開発研究所の「働く貧困層（ワーキングプア）に関する調査研究委員会」における研究成果の一部（聞き取り調査結果）を取りまとめたものである（本聞き取り調査結果およびアンケート調査結果を踏まえて、研究委員会メンバーが分析を行った報告書を別途刊行予定である）。

この調査研究委員会は、大阪市立大学大学院経済学研究科の福原宏幸教授を主査に、2009年1月に発足し、2010年3月までに12回にわたり委員会を開催した。

< 研究委員会の構成 >

1. 委員

（主査）

福原 宏幸 大阪市立大学大学院経済学研究科・教授

（委員）

西田 芳正 大阪府立大学人間社会学部・准教授

樋口 明彦 法政大学社会学部・准教授

村上 英吾 日本大学経済学部・准教授

吉中 季子 大阪体育大学健康福祉学部・専任講師

2. オブザーバー

西村 博史 労働調査協議会・主幹研究員

3. 事務局

（連合非正規労働センター）

山根木晴久 総合局長

岡田 孝敏 局長

小島 輝信 次長

杉山 寿英 前部長（現総合労働局労働条件局部長）

（連合総合政策局・生活福祉局）

小島 茂 総合政策局総合局長

篠原 淳子 生活福祉局長

伊藤 彰久 生活福祉局次長

菅村 裕子 前生活福祉局職員（現総合総務財政局総務局職員）

（連合総研）

龍井 葉二 副所長

成川 秀明 客員研究員

麻生 裕子 主任研究員

山脇 義光 研究員

<聞き取り調査を行った調査者：所属は2010年3月時点、五十音順>

麻生裕子（連合総研）／安藤友也（大阪市立大学経済学部）／飯間望（大阪市立大学経済学部）／伊谷厚志（大阪市立大学経済学部）／伊藤彰久（連合総合政策局生活福祉局）／稲垣吉裕（地域・研究アシスト事務所）／内田龍史（大阪市立大学大学院文学研究科）／海老一郎（西成労働福祉センター）／岡田孝敏（連合非正規労働センター）／河相仁美（大阪市立大学経済学部）／川野英二（大阪市立大学大学院文学研究科）／木下匠（大阪体育大学健康福祉学部）／清瀧亮（大阪体育大学健康福祉学部）／久保啓子（連合非正規労働センター）／桑田侑布子（法政大学社会学部）／小島輝信（連合非正規労働センター）／小谷伊沙子（堺市役所）／後藤嘉代（労働調査協議会）／篠原淳子（連合総合政策局生活福祉局）／柴田剛（エスアイ協会）／島津文佳（大阪府立大学人間社会学部）／菅村裕子（連合総合総務財政局総務局）／鈴木麻耶（大阪府立大学人間社会学部）／住田一郎（西成労働福祉センター）／谷口翠（大阪市立大学経済学部）／田淵貴大（大阪大学大学院医学研究科）／壇上亜都子（サービス・流通連合）／丹波史紀（福島大学行政政策学類）／堤圭史郎（大阪市立大学都市研究プラザ）／妻木進吾（大阪市立大学大学院文学研究科）／中尾結実（大阪体育大学健康福祉学部）／西川純代（大阪体育大学健康福祉学部）／西田芳正（大阪府立大学人間社会学部）／西村博史（労働調査協議会）／畑中浩介（大阪市立大学経済学部）／東沙也加（大阪市立大学経済学部）／樋口明彦（法政大学社会学部）／廣岡夢里恵（法政大学社会学部）／福原宏幸（大阪市立大学大学院経済学研究科）／堀口祐毅（大阪府立大学人間社会学部）／前田梨沙（大阪府立大学人間社会学部）／松浦彩佳（大阪市立大学経済学部）／松本典子（駒澤大学経済学部）／水野有香（大阪市立大学大学院経済学研究科）／村上英吾（日本大学経済学部）／安江鈴子（新宿ホームレス支援機構）／山下詩織（大阪市立大学経済学部）／山根正幸（連合非正規労働センター）／山脇義光（連合総研）／吉田昌哉（連合総合政策局生活福祉局）／吉中季子（大阪体育大学健康福祉学部）／四井恵介（地域・研究アシスト事務所）／陸光杰（大阪市立大学大学院経済学研究科）／若松司（大阪市立大学都市研究プラザ）／渡辺寛人（法政大学現代福祉学部）

ワーキングプアに関する連合・連合総研共同調査研究報告書 I

— ケースレポート編 —

～困難な時代を生きる120人の仕事と生活の経歴～

— 目 次 —

はじめに

「ワーキングプアに関する連合・連合総研共同調査研究報告書 ケースレポート編」について

調査研究報告書 の概要	1
ケースレポート事例要約	19
ケースレポート	35

調査研究報告書Ⅰの概要

福原宏幸

はじめに

この『ワーキングプアに関する連合・連合総研共同調査研究報告書 - ケースレポート編 -』は、2009年8月20日を皮切りに12月初旬までの約3カ月半の期間をかけて実施された働く貧困層（ワーキングプア）の聞き取り調査120ケース（男性86ケース、女性34ケース）を取りまとめたものである。

ワーキングプアをめぐる問題は、経済格差の深刻化や貧困者の増加が問われだした2005年前後から、同じように指摘されはじめた。また、これに関連して、ワーキングプアの中であって最も困難な生活状況に置かれている、「住居喪失不安定就労者」（いわゆる「ネットカフェ難民」）をめぐるいくつかの実態調査が、2007年頃に実施されている。それらによって、若者を中心とした「ネットカフェ難民」の就労と生活の困難が浮き彫りにされた。そして、労働界においても、政治の舞台においても、この問題はひんぱんに取り上げられるようになった。

このような状況の中、連合および連合総研は、「働く貧困層（ワーキングプア）に関する調査研究委員会」を共同して立ち上げ、独自の調査を開始することになった。研究委員会では、一言にワーキングプアといっても実際の就労と生活の実態には多様性があり、かつ彼らが問いかける社会的な問題に対する政策もまたそれに照らし合わせて再構築される必要があるとの観点から、実態調査を行うこととなった。具体的には、このような多様性を明らかにするにあたって、アンケート調査と聞き取り調査の2つを並行して実施することになった。

これらの調査のうち、聞き取り調査によって得られたワーキングプアのケースを取りまとめたのが、このケースレポート報告書である。この報告書では、彼らの置かれたきびしい就労と生活の現状をつぶさに明らかにしているが、これによって求められる新たな政策についての議論を深める資料となるものとして、ここに刊行することにした。

以下では、この調査の目的、調査方法、そして調査結果の概要を紹介していこう。なお、聞き取り調査結果にアンケート調査結果を加えた調査全体については、研究委員会メンバーが分析を行い、別途、近日中に、研究報告書として取りまとめて刊行する予定である。

1. ワーキングプア調査の目的と調査方法

(1) 調査目的

これまでのワーキングプアをめぐる研究では、一方で、ワーキングプアの実数や割合を問う調査研究が実施され、マクロ的な観点からその要因を明らかにする研究が取り組まれてきた。他方、ワーキングプアの人々が、具体的にどのような困難に直面し社会から排除されて

いるのか、これを問う調査もまた進められてきた。後者については、とりわけ、ワーキングプアの形態（最もきびしい形態のひとつ）であるネットカフェ難民について、厚生労働省『住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査』2007年、NPO釜ヶ崎支援機構『若年不安定就労・不安定住居者聞き取り調査』2007年などがある。同様に、母子世帯の働く母親に関する調査も多く報告されている。

この研究委員会では、一言にワーキングプアといってもその就労や生活は多様であり、したがって彼らが抱える困難にも共通した問題と個別的な問題があることから、ワーキングプアの存在形態とその困難の多様性を明らかにする調査をめざすこととした。このような観点を踏まえて、アンケート調査と聞き取り調査の2つの調査を組み合わせ、次の3点を明らかにすることをこの調査の目的とした。

第1の目的は、ワーキングプアの人たちが、どのような理由で、現在の不安定で低賃金な仕事に就かざるをえず、また困難な生活に直面せざるをえなかったのか、ワーキングプア一人ひとりの幼少期から調査時点までの生活歴と職歴の具体的な実態把握を通して、この点を考察することにある。ここでは、幼少期の家庭環境、学校教育への関わり方と学歴、学卒後の社会への適応、そしてまた彼らを支える家族・友人・職場の人間関係などの社会的つながりのあり方や程度といったものが問われることになる。

第2に、今日の就労と生活の具体的な実態把握を通して、彼らがいま抱えている困難を明らかにすることも、本調査研究の目的である。当事者の目からみて、日々の仕事の確保や継続といった問題、あるいは生活をやりくりするための方法、たとえば就職先についての情報の獲得、住居の確保、解雇など困難な事態に直面した時に利用できる諸制度や相談相手はなにかなど、これらの具体的な営みを考察する中で、彼らが生きていく上で抱えている困難を明らかにすることを目的とする。

第3に、社会と経済の仕組み自体が、こうしたワーキングプアの人たちを支えるものとして機能しているのかどうかを考察する。とくに労働市場において適正な労働条件を確保されていない、あるいは（同時に）社会保障制度の適用を受けることができないといった雇用と生活保障上の排除の実態を具体的に示すとともに、これを考察することを目的とした。

これらの点についての詳細な分析は、別途刊行予定の研究報告書の中で詳しく扱うことになるが、以下においても、可能な範囲でこれらについて整理しておきたい。

(2) ワーキングプアの定義

調査の実施にあたっては、まずワーキングプアをどのように定義するのかが問われる。とはいえ、日本にはワーキングプアの公式の定義はない。これに対し、アメリカや欧州諸国においては、定義が設けられており、時系列の推移も明らかにされている。アメリカでは、労働統計局によって「1年間に少なくとも27週間、労働力であった（働いているか求職しているか）が、所得が公式の貧困ラインを下回る者」と定義されている。ここでは、求職活動を行っている失業者もワーキングプアとして把握され、また所得水準は労働者個人の所得を基

準として定義されている。他方、欧州連合では、一般に「就労している個人であるとともに、彼/彼女が属する世帯の所得再配分後の可処分所得が国民全体の等価可処分所得の中央値の60%以下である者」と定義されている。欧州の場合、失業している貧困層とワーキングプアは概念上、区別されている。これは、失業者に対しては失業保険、さらには失業扶助による所得保障が機能しているとの理解が背景にあるからである。また、貧困は、生活の基礎単位である世帯所得を基準にしている。

このような定義の違いに照らして日本のワーキングプアの現状を考えた場合、ワーキングプアには単身者が多いとはいえ彼らだけに限定できない多様性があることや、多くの低賃金の主婦パートが男性稼ぎ手モデルのもとに形成された世帯に属していることから、世帯所得額が一定の水準以下にある世帯に属する就労者とするのが妥当であろう。また、雇用保険から漏れ落ちている人たちにワーキングプアが多いことから、失業者を含めてワーキングプアと定義することが妥当である。さらに、ワーキングプアの貧困の閾値は、これまでのワーキングプア率の推計調査の多くが依拠してきたのと同じように、生活保護受給額を基準値とすることとした。ただし、実際の調査においては、大まかな基準値を設定することが妥当と考え、単身世帯の場合には年収200万円以下をワーキングプアとし、これに年収200万円以上300万円未満の人たちをその予備軍として位置付け、これも調査対象とした。複数の稼働者がいる世帯においては、年収300万円以下の世帯に暮らしている者をワーキングプアとし、世帯年収300万円以上400万円未満の水準で暮らしている者をその予備軍として、これも調査対象とした。なお、60歳以上の高齢労働者については年金問題など別途検討すべき課題を含むことから、今回は対象外とした。

(3) 調査方法と調査項目

調査は、アンケート調査と聞き取り調査の二種類でもって行った。アンケート調査では、現在の仕事あるいは求職者については最近まで就いていた仕事の内容、最後の学校を出てから現在（あるいは直近）の仕事までの大まかな経験、現在の生活状況、結婚の状況、現在の住環境、家族、友人・知人、社会保障制度、社会サービスとのつながり、子どもの頃の生活状況、将来の展望、政府等への要望などの項目について質問した。

聞き取り調査では、最後の学校を出てから今までの職歴とそれぞれの仕事を辞めた理由を中心に、15歳頃および最後の学校時代の学校生活や家族との関係、最初に就職した仕事のこと、現在の暮らしぶり、2008年から2009年にかけての1年間で経験した大きな変化、そして現在の仕事や生活について困っていることや要望などを聞いた。

アンケート調査における調査対象者は、連合・連合総研ならびに研究委員会メンバーが協力依頼できる労働組合、就職支援や生活支援にたずさわる団体などから紹介していただいた。回答者は、東京と大阪およびその周辺の府県居住者が中心であるが、それらの地域だけにとどまらず全国から回答をいただいた。調査票の分析にあたっては、これらの回収票の中からこの研究委員会におけるワーキングプアの定義に当てはまるものを選別し、対象とした。こ

の回収のサンプル総数は1,238票であり、このうち、620票が本研究委員会でのワーキングプアの定義に該当し、これを分析の対象とした。

聞き取り調査においては、2つの方法で対象者を選び出した。一つは、アンケート調査票を使って聞き取り調査に応じていただける方を募集し、快諾をいただいた方の中からワーキングプアの定義に当てはまる人を選び出し、後日（原則として）調査員2名が直接に会って対面で聞き取り調査を行った。もう一つは、協力団体から直接に対象者を紹介していただいて、（原則として）調査員2名による対面で聞き取り調査を実施した。実施場所は、東京と大阪を中心にその周辺地域、および一部、名古屋でも行った。

(4) 調査対象者

今回のアンケートおよび聞き取り調査では、調査対象者は、労働組合、支援団体を通じて紹介していただいたケースが圧倒的に多いことから、回答者の属性に偏りがある。とりわけ、聞き取り調査対象者には、アンケート調査回答者以上に偏りがあると思われる。

聞き取り調査にもとづくこの調査報告書では、調査を実施した場所を基準に、それぞれを東京調査、大阪調査、名古屋調査と呼ぶ（北海道出身で、現在も北海道で勤務する方が東京で調査に協力していただいた場合などもあるが、調査実施場所を基準として東京調査の中で扱っている）。聞き取り調査対象者数は東京を中心とした地域から58人（東京調査）、大阪を中心とした地域でも同じく58人（大阪調査）、名古屋で4人（名古屋調査）、計120人である。

東京調査では、個人加盟ユニオンのメンバー、産業別組合、生活困窮者支援団体および、若者自立支援団体から紹介された者、無料低額宿泊施設入居者、さらに地方の公務部門の非正規職員の労働組合員などが含まれている。大阪調査では、58人中34人は2つの自立支援センター（それぞれ少し異なった機能を持つ）の入所者である。また、福祉施設での非正規雇用者の実態把握としていくつかのケースをフォローするとともに、母子世帯の働く母親についての調査を行うために12ケースを確保した。また、ごく少数だが、ワーキングプアの定義から外れているかもしれないケースが含まれている。たとえば、東京9は、本人の年収は50～100万円、世帯収入は「わからない」と回答しており、この調査におけるワーキングプア定義である世帯収入400万円未満という基準を超えている可能性がある。しかし、これもまた貴重なケースであることから、ここに掲載することとした。

したがって、この聞き取り調査のケース全体の構成およびその分析によって得られた特徴には偏りがあり、決してワーキングプア全体を代表するものではない。この点に留意しておく必要があるだろう。とはいえ、ここで示された各ケースは、まちがいにワーキングプアの具体的な存在の一つひとつであり、その考察から彼らの抱える問題を明らかにできるものと考えている。

以下では、聞き取り調査によって得られたケースレポート120件について、その概要を明らかにしていきたい。また、本報告書では、すべてのケースレポートの要点を整理し取りまとめた「ケースレポート事例要約」を作成し、資料として掲載しているので、あわせて見てい

ただきたい。

なお、以下の分析にあたっては、ケースレポートの他に、当該調査対象者のアンケート調査票も活用している。

2. ケースレポートの分析

(1) 全ケースの概要

はじめに、全ケースの概要を述べておこう。図表1は、性別・年齢階級別の構成を示している。120ケースのうち、男性は86ケースで全体の71.7%を占め、女性は34ケースで28.3%であった（以下の図表において、単位の記載がないものは、すべて人数である）。

年齢階級別の構成では、男女とも25歳以上40歳未満の年齢層に8割前後が集中しているが、20歳代では、男性（29.1%）に比べ女性（38.3%）の方が多く、対照的に40歳以上では男性が女性よりも10%弱多いといった構成になっている。

図表1 聞き取り対象者の年齢構成

	20歳以上 25歳未満	25歳以上 30歳未満	30歳以上 35歳未満	35歳以上 40歳未満	40歳以上 45歳未満	45歳以上 50歳未満	50歳以上	計
男性	8 9.3%	17 19.8%	16 18.6%	24 27.9%	14 16.3%	6 7.0%	1 1.2%	86 100.0%
女性	4 11.8%	9 26.5%	9 26.5%	7 20.6%	2 5.9%	3 8.8%	0 0.0%	34 100.0%
計	12 10.0%	26 21.7%	25 20.8%	31 25.8%	16 13.3%	9 7.5%	1 0.8%	120 100.0%

以下では、ケース全体の特徴を4つの観点から明らかにしていきたい。それらは、初職とそれに就くまでの生活、初職から現在職（あるいは現在の失業）に至る経緯、世帯類型、家族、友人・知人とのつながりの変容、雇用保険、健康保険、年金の加入状況である。

(2) 初職とそれに就くまでの生活

学歴構成を示した図表2をみると、男性には中学卒業・高校中退の者が31.4%と多い。これに対し、女性には高校より上位の学校を卒業した者が多く、専門学校卒業9人、短期大学卒業6人、大学卒業が6人であった。

図表2 聞き取り対象者の学歴

	中卒・高 校中退	高校卒業	高校より 上位の学 校中退	高校より 上位の学 校卒業	計
男性	27 31.4%	34 39.5%	7 1.2%	18 20.9%	86 100.0%
女性	5 14.7%	5 14.7%	3 8.8%	21 61.8%	34 100.0%

図表3 聞き取り対象者の初職

	学校を出 て正規職 3年以上	学校を出 て正規職 3年未満	非正規職	自営業	計
男性	30 34.9%	17 19.8%	38 44.2%	1 1.2%	86 100.0%
女性	7 20.6%	12 35.3%	15 44.1%	0 0.0%	34 100.0%

正社員の安定した雇用身分は雇用の継続性によって支えられることから、初職においていかに安定した職を確保するかが重要となる。この初職の雇用形態を示したのが、図表3である。学校を出て、初職で正規職に就いた者は、男性で54.7%、女性55.9%でほぼ同じ水準であったが、正規職の継続が3年未満で終わってしまった者は女性に多い。また、初職でいきなり非正規の仕事に就かざるをえなかった者の割合は男女とも44%強であった。これと直接に比較できる適当なデータはないが、たとえば2009年の全国の非正規比率が33.4%であったことと比べてみても、この数値自体高いといえるだろう。

この初職において、非正規職を選択した（あるいはせざるをえなかった）背景にどのような事情があったのだろうか。この点を、子どもの頃の世帯構成と当時の家庭の暮らし向き、学歴の3つの要因との相関関係を通して調べてみた。それを示したのが図表4である。

これをみると、普通世帯あるいは母子・父子世帯で、暮らし向きが普通以上であり、かつ、高校より上位の学校の卒業の割合は53.8%、57.1%であるが、これは他の世帯類型と暮らし向きの組み合わせに比べて高い。これに対し、普通世帯あるいは母子・父子世帯で暮らし向きが苦しかった者においては、高校より上位の学校に進学した者の割合が極端に少なくなっている。しかも、いずれの場合も最も多い割合を占めているのが中学卒業・高校中退であった（40.0%と53.8%）。この他、聞き取り調査の対象者には、義理の父・母と同居して子どもの頃を過ごした者が6人いる。それらの世帯の暮らし向きも苦しいところが多く、こうした世帯の出身者の場合、高校より上位の学校へ進学した者はおらず、ほとんどが中学卒業・高校中退でとどまっている。なお、このケース数はわずか6件であることから、この事実を一般的なものとして理解するにはさらに検討が必要であろう。

このように、世帯の形態と家庭の暮らし向き、とりわけ後者の暮らし向きが学歴に大きく関わっていることがうかがえる。しかし、今回の聞き取り調査においては、その学歴が安定した初職につながっているケースは多いとは決していえない。高校より上位の学校を卒業した者39人中、正規職に就いたのは20人（男性で18人中8人、女性で21人中12人）であった（図表5）。非正規の仕事に就いた者の事例をみると、男性では、大学を卒業した時期がちょうど就職氷河期にぶつかった（東京5）、精神疾患を抱えていた（東京12）、希望職種へのこだわりや芸能活動に専念するなどの夢追い型（東京9・32、大阪47・56）、留年によって就職活動のタイミングをなくした（東京14）といったケースである。女性では、就職活動の失敗（東京6・13・41、大阪50）や、契約職員として福祉職に就職したケース（大阪48・52・55）

などがある。また、この図表5に示されているように、中学卒業・高校中退と高校より上位の学校中退の場合には、非正規職への就職者がいっそう多くなる。

図表4 初職前の世帯構成と暮らし向きを組み合わせた学歴と初職の構成（男女計）

世帯構成+暮らし向き	学歴構成		初職			
	学歴	計	%	正規職	非正規職	自営業
1. 普通世帯+暮らし向き普通以上	高校より上位の学校卒業	21	53.8%	11	10	
	高校より上位の学校中退	2	5.1%	0	2	
	高校卒業	13	33.3%	10	3	
	中卒・高校中退	3	7.7%	2	1	
	小計	39	100.0%	23	16	
2. 普通世帯+暮らし向き苦しい	高校より上位の学校卒業	5	8.6%	1	4	
	高校より上位の学校中退	5	14.3%	2	3	
	高校卒業	11	31.4%	10	1	
	中卒・高校中退	14	40.0%	6	7	1
	小計	35	100.0%	19	15	1
3. 母子・父子世帯+暮らし向き普通以上	高校より上位の学校卒業	4	57.1%	3	1	
	高校より上位の学校中退	1	14.3%	0	1	
	高校卒業	1	14.3%	1	0	
	中卒・高校中退	1	14.3%	0	1	
	小計	7	100.0%	4	3	
4. 母子・父子世帯+暮らし向き苦しい	高校より上位の学校卒業	0	7.7%	0	0	
	高校より上位の学校中退	1	7.7%	0	1	
	高校卒業	5	38.5%	4	1	
	中卒・高校中退	7	53.8%	3	4	
	小計	13	100.0%	7	6	
5. 義母・父のいる世帯+暮らし向き普通以上	高校より上位の学校卒業	0	0.0%	0	0	
	高校より上位の学校中退	0	0.0%	0	0	
	高校卒業	1	100.0%	1	0	
	中卒・高校中退	0	0.0%	0	0	
	小計	1	100.0%	1	0	
6. 義母・父のいる世帯+暮らし向き苦しい	高校より上位の学校卒業	0	0.0%	0	0	
	高校より上位の学校中退	0	0.0%	0	0	
	高校卒業	1	20.0%	0	1	
	中卒・高校中退	4	80.0%	2	2	
	小計	5	100.0%	2	3	
7. 祖母と叔父の世帯+暮らし向き普通以上	高校卒業	1		1	0	
8. 児童養護施設	高校卒業	1		1	0	
	中卒・高校中退	1		1	0	
9. 世帯構成あるいは暮らし向き不明		17		7	10	
	合計	120		66	53	1

図表5 学歴別にみた学卒後の初職の雇用形態（男女計）

	学校を出て正規職 3年以上継続	学校を出て正規職 3年未満継続	非正規雇用	自営業	計
中卒、高校中退	9 28.1%	5 15.6%	17 53.1%	1 3.1%	32 100.0%
高校卒業	19 48.7%	11 28.2%	9 23.1%	0 0.0%	39 100.0%
高校より上位の 学校中退	1 10.0%	1 10.0%	8 80.0%	0 0.0%	10 100.0%
高校より上位の 学校卒業	8 20.5%	12 30.8%	19 48.7%	0 0.0%	39 100.0%
計	37 30.8%	29 24.2%	53 44.2%	1 0.8%	120 100.0%

(3) 初職以降の職業経歴

正規職であれ、非正規職であれ、就職して以降、さまざまな職への転職を繰り返す、あるいは雇用形態を変える者が、聞き取りの対象となった人たちには多いことが明らかとなった。

図表6と図表7は、これらの経路を雇用形態に即して整理したものである。左端の初職を起点として、現在の雇用形態に至る途中の経路を簡単に図式化して示した。また、現時点でたどり着いた最終の雇用形態と、調査時点におけるその仕事への就労の有無、さらにこれまで経験してきた主な雇用形態を示した。その結果、調査対象となったワーキングプアの人たちがたどった職業的な経路には、いくつかの類型があることがわかった。

男性の場合、第1の類型は、正社員を起点として、途中転職を繰り返しながら（その回数は人によって異なる）、最終的に正社員にまた戻っていく人たちである。しかも、そこには正社員をやり変わっていくパターンと非正社員を交えながら再び正社員へと戻っていくパターンがあった。しかし、いずれの場合も、正社員として勤めていたとはいえ零細な事業所が多く、さまざまな社会保険への未加入、あるいはその実態があいまいなケースが多く、必ずしも安定した正社員だとはいえない。また、これに分類される人数は9人と少ない。

第2は、正社員から非正社員に移り、その後は一貫してさまざまな非正規職を移っていく経路である。86人中38人（44.2%）と、最も多くの人々がこれを経験している。

第3に、非正社員からいったん正社員となるがふたたび非正社員に戻るパターンを、11人が経験している。

図表6 男性がたどった雇用形態の経路

初職	途中の経路	最終職	現在の仕事の継続	登録型・日雇い型派遣の経験	建設日雇いの経験	アルバイトの経験	その他非正規職の経験	ケース	ケース数		
自営業	→アルバイト →正社員5カ所15年→	契約社員	失業中	なし	なし	ある	契約社員	東29	1 1		
正社員	→退職→正社員→ →退職→正社員と非正社員 (日雇い派遣等)の繰り返し→ →退職→複数の非正規社員→	正社員 短期の正社員 正社員 正社員	失業中 失業中 就労中 失業中	なし ある ある 大9、22、	なし なし なし なし	なし あり あり 大15,22,30	なし あり あり あり	なし 契約社員 契約社員 契約社員	大13,31,35 東57 東11 大9、15、22、30	3 1 1 4	9
	→退職→複数の非正規職→	登録型・日雇い型派遣 建設日雇い アルバイト アルバイト 契約社員 臨時社員等	失業中 失業中 就労中 失業中 失業中 就労中	このみ: 東30,名2 大18,19,21,33,36 東33、大23 東7,38,54,大25,29, 名1,大2,10 東36	名3 このみ:なし 大29,38 東3,大10 東24	東17,19,25, 26,44,58, 大4,8,37 東33,56,大12, 17,23 アルバイトのみ: 東53 大阪11	東17,19,25,26,30,44,58, 名2,3, 大4,5,8,18,19,21,33,36,37 東33,56,大12,17,23 東7,38,53,54,大25,29,38 東3,28,名1,大2,10 大11 東36:期間工	東28:期間工 東36:期間工	東49 東9,14,34	18 5 7 5 1 2	38
	→複数の非正規職→	正社員 正社員	就業中 失業中	東9,34		ある	ある	嘱託職員	大49 東9,14,34	1 3	4
	→いったん正規職 →複数の非正規職→	登録型・日雇い型派遣 登録型・日雇い型派遣 アルバイト	就労中 失業中 就労中	東2,47 東1,4,27,42,48, 名4,大14 ない	東2 東4,42,名4, 大28 ない	東2,47 東1,4,42,48,名4, 大14,28 ある	名4:契約社員 ない	東5:常用品派遣 東55:契約社員 大20:期間工	東2,47 東1,4,27,42,48,名4, 大14,28 東46	2 8 1	11
	→複数の非正規職→	登録型・日雇い型派遣 建設日雇い アルバイト アルバイト 契約社員 非常勤講師	失業中 失業中 就労中 失業中 就労中 就労中	東43,大1,16 大6,7,20 東31,32,大32,34, 56(家庭教師派遣) 大3 東20,大53	全員	東43,大1,16 東55,大6,720 全員ある 全員ある 大51,53	東5:常用品派遣 東55:契約社員 大20:期間工 全員:契約社員 非常勤講師	東5,43,大1,16 東55,大6,7,20 東31,32,45, 大24,27,32,34,47,56 東18,大3 東20,大51,53 東12	4 4 9 2 3 1	23	
										86	

図表7 女性がたどった雇用形態の経路

初職	途中の経路	最終職	現在の仕事の継続	登録型・日雇い型派遣の経験	パート/アルバイトの経験	契約社員の経験	その他非正規職の経験	その他	ケース	ケース数	
正社員	→退職→ →退職→非正社員→ →退職→複数の正社員職→ →非正規職→	正社員 正社員 正社員	就労中 就労中 失業中	あり				母子世帯 DV,母子世帯	東49 大43 大42	1 1 1	3
	→退職→非正規職→	登録型派遣 登録型派遣 日雇い型派遣 パート/アルバイト パート/アルバイト 契約社員 臨時職員 個人請負	就労中 失業中 失業中 就労中 失業中 就労中 就労中 就労中	東8,16 あり あり 東52,大45 大41	あり 全員 全員		東35:常用型派遣 あり	東16;夫婦子供 DVと監禁、路上生活 東10,大45:DV+母子世帯 大44:母子世帯 大26:腎臓移植 大41:母子世帯 大58:母子世帯、多重債務	東8,16 東15 東16 東10,35,37,52, 大44,45 大26,41 大57 東23 東40,大58	2 1 1 6 2 1 1 2	16
	→いったん正規職→ →複数の非正規職→	パート 登録型・日雇い型派遣	就労中 就労中	あり あり	あり あり			母子世帯	大50 東39	1 1	2
	→複数の非正規職→	登録型派遣 アルバイト 契約社員 臨時職員など	就労中 就労中 就労中 就労中	全員 大39	東6,41, 大46 全員 東50 東21	東6 大55 全員		東41、大46:母子世帯 大39,40:母子世帯	東6,41,大46 東13, 大39,40,54,55 東50,大48,52 東21,22	3 5 3 2	13
											34

そして最後に、一貫して非正社員のままであるケースが23人と、これも比較的多い。この場合、一つのグループは学卒後数年しか職業経験をもっていないケース（東京18、大阪27・47）、あるいは引きこもりなどによって正規職への就職をあきらめているケース（東京12・20・25）がある。また、これとは全く異なって、短期の登録型派遣労働を長く続けてきたケースも目立つ。しかし、押し並べて、登録型および日雇い型の派遣、建設業の日雇い労働、そして短期のアルバイト仕事が、組み合わせあって構成された労働世界がそこにはある。

女性の場合も、ほぼ同様の類型、傾向がある（図表7）。

調査時点における就労状況についてみる（図表8）と、聞き取り調査の対象となった女性の場合は、現在も就労中であるケースが多い。男性の場合、調査時点で仕事を継続している者は、32.6%であったのに対し、女性では85.3%となっている。男性の割合が低いのは、聞き取り対象となった男性の従事する仕事の多くが製造業と建設業であり、近年の景気変動の影響を直接に被った分野であることが影響していると思われる。一方、女性は、生活保護の受給と合わせて就労しているケースが多く、「生活保護から抜け出たい」という本人の意思とは裏腹に、生活保護を受給しつつ就労しえる雇用環境が形成されつつあるように思われる。加えて、契約職員としての福祉職、学校など自治体関係の臨時職員・非常勤職員である場合も多く、彼らの仕事は低賃金であるとはいえ、ケースレポートに示された彼らの職歴（東京21・22・23・24）から判断して、登録型派遣やアルバイトに比べれば相対的に雇用は安定していることも大きな要因であろう。もちろん、そうはいつても、正社員との間の身分保障に大きな違いがあることから不安定であることに違いはない。

なお、この図表8からは、求職者に占める失業手当受給者・受給予定者の人数を把握することができるが、それはわずか5人と少ない。ただし、これ以外に、東京34・42と大阪37は、失業手当を受給していたがその期間が満了した後も次の仕事に就けないでいる。

図表8 調査時点における就労継続等の状況

	就労中	求職中 (失業手当受給 中・受給予定)	求職中 (失業手当なし)	求職準備中 (臨時就労)	病气療養 中など	計
男性	28 32.6%	4 4.7%	36 41.8%	11 12.8%	7 8.1%	86 100.0%
女性	29 85.3%	1 2.9%	2 5.9%	0 0.0%	2 5.9%	34 100.0%

正規職に従事していたにもかかわらず、なぜそれを辞めてしまったのだろうか。この点を明らかにするために、その理由を拾い出し整理してみた。それが図表9である。これを見ると、男女ともに、「労働条件や職場の問題」が最も多くなっている。また男性では、それに次いで「勤務先会社の都合」が多くなっており、女性では「家庭生活の理由」が多くなっている。この他、「離婚など家族とのトラブル」「家族の看護・介護」といった事情や本人の交通事故などによる長期の休職をきっかけとして勤めていた勤務先を辞め、以後正規職に就けなくなるといったケースも見逃せない。

図表9 正規職を辞めた理由

理由	男性	女性	計	理由	男性	女性	計
【勤務先会社の都合】	(19)	(3)	(22)	【家族との関係が理由】	(6)	(5)	(11)
人員削減で解雇	4	3	7	家族とのトラブルを理由に退社	4	0	4
会社の倒産による解雇	7	0	7	同棲相手のDV	0	1	1
廃業による解雇	3	0	3	家族の事情により	1	0	1
仕事が激減して給与が出なくなった	5	0	5	家族の看病・介護	1	4	5
【労働条件や職場の問題】	(46)	(10)	(56)	【家庭生活が理由で】	(2)	(9)	(11)
上司・同僚との人間関係	22	5	27	出産・育児	0	4	4
過重労働、長時間労働	9	3	12	結婚	0	3	3
あまりにも低賃金で	10	1	11	家事との両立を図るために	0	1	1
社会保険が何もなく	4	0	4	子どもの生活習慣のため	1	0	1
賃金の遅配	0	1	1	勤務地が遠すぎるので	1	0	1
危険な仕事なので(仕事中に大けが)	1	0	1	勤務地変更指示に従えなくて退社	0	1	1
【当事者と会社との関係】	(10)	(2)	(12)	【健康問題が理由で】	(8)	(2)	(10)
会社の将来展望に不安	4	1	5	健康上の理由あるいは長期入院	3	1	4
仕事にやりがいを見出せなくて	2	1	3	事故による長期入院を理由に	3	0	3
技術が身につかない仕事だから	1	0	1	母の死による不眠症で仕事に支障	1	0	1
転籍出向の拒否で自主退職	1	0	1	精神疾患	1	0	1
条件の良い仕事が見つかった	1	0	1	体調の不良	0	1	1
仕事のミスで会社に多大の損害を与えたため	1	0	1				
【個人と仕事の関係】	(8)	(2)	(10)	【その他】	(1)	(0)	(1)
求められる技術が習得できず	1	0	1	暴力団の勧誘から逃れるために	1	0	1
いろんな仕事を体験したくて	2	0	2				
他の仕事がしたい	3	1	4				
自由になりたいと思って	0	1	1				
仕事自体がいやになって	1	0	1				
遅刻が常習化したので解雇	1	0	1				
				合計	100	33	133

図表8に示した現在の就労および求職等の現状を、個別に詳しく示したのが図表10、11、12である。図表10では、調査時において就労している者の聞き取り調査対象者全員に占める割合と、その雇用形態の内訳を示した。図表5に示したように初職で正社員に就き3年以上継続していた者は37人いたが、調査時では正社員であった者はわずか4人と大きく減少している（男性では東京11、大阪49、女性では東京49、大阪43）。東京11・男性は、中古車販売会社の契約社員から正社員になったばかりの者で月15～20万円の収入を得ている。大阪49・男性は、社会的な活動領域に関わっているという意味で、例外的な存在かもしれない（月17万円）。東京49・女性は、ベビーシッターの会社で正社員として4年勤務している（月14～15万円）。大阪43・女性は月収20～25万円で病院の検査技師をしている。いずれも、正社員であるとはいえ、賃金水準は必ずしも高いとはいえず、最も高い大阪43でも年収300万円未満であった。

図表10 調査時点において就労している者の雇用形態

	正社員	非正社員	非正社員、内訳					個人請負	計	就業者/全員
			登録型・日 雇い型派遣	建設 日雇い	アルバイト・ パート	契約 社員	嘱託・非常 勤職員			
男性	2 7.1%	26 92.9%	4 14.3%	0 0.0%	16 57.1%	4 14.3%	2 7.1%	0 0.0%	28 100.0%	28/86 32.6%
女性	2 6.9%	25 93.1%	5 17.2%	0 0.0%	13 44.8%	4 13.8%	3 10.3%	2 6.9%	29 100.0%	29/34 85.3%
計	4 7.0%	51 89.5%	9 15.8%	0 0.0%	29 50.9%	8 14.0%	5 8.8%	2 3.5%	57 100.0%	57/120 47.5%

図表11 調査時点における失業者の直近の雇用形態

	正社員	非正社員	非正社員、内訳						計	失業者/全員
			登録型・日 雇い型派遣	建設 日雇い	アルバイト・ パート	契約 社員	嘱託・非常 勤職員	非正社員 ・詳細不明		
男性	11 19.0%	47 81.0%	24 41.4%	9 15.5%	7 12.1%	4 6.9%	0 0.0%	3 5.2%	58 100.0%	58/86 67.4%
女性	1 20.0%	4 80.0%	3 60.0%	0 0.0%	1 20.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100.0%	5/34 14.7%
計	12 19.0%	51 81.0%	27 42.9%	9 14.3%	8 12.7%	4 6.3%	0 0.0%	3 4.8%	63 100.0%	63/120 52.5%

図表12 調査時点における失業者の現在の活動状況

	求職中	その他	その他、内訳					計	失業者/全員
			職業 訓練中	臨時 就労	ボランテ ィア活動	専門 学校生	病気 療養中		
男性	40 69.0%	18 22.1%	1 1.7%	11 19.0%	1 1.7%	1 1.7%	4 6.9%	58 100.0%	58/86 67.4%
女性	3 60.0%	2 5.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 40.0%	5 100.0%	5/34 14.7%
計	43 68.3%	20 17.5%	1 1.6%	11 17.5%	1 1.6%	1 1.6%	6 9.5%	63 100.0%	63/120 52.5%

図表11では、調査時に失業している者が直近にどのような雇用形態のもとで仕事をしてきたかを示した。失業者が職をなくした直近の時点での雇用形態は、登録型・日雇い型派遣、正社員、建設日雇いそしてアルバイト・パートの順で多い。とくに男性においては登録型・日雇い型派遣と建設日雇いに従事していた者の割合が高く、これらに関連する業界での人員

削減の凄まじさを物語っているとみることもできよう。

図表12では、調査時において失業していた人たちがどのような活動を行っていたかを示している。自立支援センター・無料低額宿泊施設への入所や支援団体による支援を得ている者が多いことから、求職活動の一手手前の段階で、ひとまず健康回復や生活のリズムの取り戻し、さらに新たな能力の獲得に向けた取り組みを行っている者も多いことが示された。

また、聞き取り調査では、ワーキングプアは、職場の中でさまざまな種類の仕事を担っていることが明らかとなった。これによって、とくに製造業の職場において、オートメーション化にともなう労働の二極化、フレキシブル化という状況の中で、ワーキングプアと呼ばれる人々に任される職務内容は単純労働を中心とするものであることがある程度明らかとなったし、派遣先会社の正社員や派遣会社社員とどのような関係を取り結び、処遇されてきたのかについて、それを推測しえる発言のいくつを得ることができた。しかし、全体的には、こうした派遣労働やアルバイトの職場などでの労働者間のつきあいについては、多くを語ってくれなかったように思う。

(4) 収入の有無と稼得賃金水準、住居

図表13は、聞き取り対象者たちが調査時直近1カ月に収入等を得たかどうかを聞いた結果である。

また図表14は、稼得収入のある者が実際に稼いでいる金額（調査時点の直近1カ月の収入額）を整理したものである。調査前の1カ月の期間内に失業した者はわずかだが収入があったために、また本人の就労所得とあわせて生活保護費を受給しているケースがあることから、図表8に示された就労状況別の人数と、図表13に示された人数は一致しないことに注意を促しておきたい。図表13にある就労体験による収入は、賃金収入といいきれない要素を含んでいる。就労体験は、自立支援センター等への入所者が対象であり、ここでは居住スペースと食事が提供された上で、今後の就労に向けた準備として実施され、収入はその対価という位置付けである。これによって得られた収入はまた、今後の就労活動のための資金といった意味ももっている。一般の就労を行う男性で平均14.4万円、女性が13.9万円である。母子世帯の母親で就労している場合の多くに、稼得収入と別に生活保護費と児童扶養手当等の支給がある。

図表13 調査直近1カ月の稼得収入およびその他の収入の有無

	稼得収入 のみの者	生活保護など(一部稼得 収入のケースあり)	失業手当 受給中	就労体験 による収入	収入なし	計
男性	29 33.7%	13 15.1%	5 7.0%	11 12.8%	28 31.4%	86 100.0%
女性	22 64.7%	10 29.4%	1 2.9%	0 0.0%	1 2.9%	34 100.0%

図表14 就労者の直近1カ月の収入

	5万円未満	5万円以上 10万円未満	10万円以上 15万円未満	15万円以上 20万円未満	20万円以上 25万円未満	不明	計	平均賃金
男性： 一般の就労	2	4	9	9	5	0	29	14.4万円
男性： 就労体験	1	4	5	0	0	1	11	9.5万円
女性： 一般の就労	1	6	6	3	6	0	22	13.9万円

注：平均賃金は、各区分の平均値をとり、それを前提に算出した。

図表15は、彼らの居住場所を示している。男性では、はじめに述べたように今回の調査の聞き取り対象者の特性もあり支援施設が最も多くなっている。次いで民間賃貸住宅が多く、女性では民間賃貸住宅が多い他、親の持ち家などを借りている場合もみられる。この他、特徴的なこととして、男性にはわずかであるとはいえ、「社宅・社員寮・住み込み」といった不安定な住居や、「ネットカフェ・路上・友人宅」など住居そのものが失われている状況がみられた。

図表15 住居等現在の居住場所

	民間賃貸 住宅	公営住宅	親の所有 する持ち家	社宅、 社員寮、 住み込み	支援施設	ネットカフェ、 路上、 友人宅	計
男性	29 33.7%	2 2.3%	3 3.5%	3 3.5%	45 52.3%	5 5.8%	86 100.0%
女性	20 58.8%	4 11.8%	5 14.7%	0 0.0%	5 14.7%	0 0.0%	34 100.0%

(5) 世帯類型、家族、友人・知人とのつながりの変容

次に、世帯構成と家族とのつながりなどをまとめた。世帯構成（図表16）での大きな特徴は、男性では圧倒的に単身世帯が多かったことにある（95%）。女性では、単身世帯と並んで母子世帯が多い。

また、親やきょうだいとのつながりを整理したのが、図表17である。とくに男性において、家族とのつながりが「よくない」「連絡しない」と回答したケースが40.7%に達した。このつながりが途切れている状況は、一つは初職に就く前からそうであったケースもあるが、多くは就職後ゆるやかにつながりが希薄化している。それらの要因には、親からみていつまでも「まともな仕事」に就けないでいる子どもを不甲斐ないとみる価値観や、経済的な依存関係に端を発したものなどがある。また、この2つの要因は密接に絡みながら、親子の関係を希薄化させていく。たとえば、「自分が正社員の仕事に就けないことで小言をいう父親の世話になりたくないという思いがあったために、実家には帰りづらかった。そこで、……、寮や住み込みの仕事を探すために大阪府にやってきた」（大阪36）という発言は、その典型といえるだろう。

図表16 調査時点における世帯の構成

	単身世帯	普通世帯	親との同居世帯	母子世帯	計
男性	82 95.3%	1 1.2%	3 3.5%	0 0.0%	86 100.0%
女性	16 47.1%	3 8.8%	3 8.8%	12 35.2%	34 100.0%

図表17 両親など家族とのつながり

	よい、 あるいは 頼れる	連絡のみ、 あるいは 頼れない	よくない、 連絡しない	その他、 不明	計
男性	16 18.6%	26 30.2%	35 40.7%	9 10.5%	86 100.0%
女性	19 55.9%	4 11.8%	4 11.8%	7 20.6%	34 100.0%

次に、友人・知人とのつながりはどうなっているのだろうか。図表18をみると、男性に「相談できる友人・知人がいない」「いまは連絡を絶っている」ケースが多い。これは、男性に単身世帯が多いこと、就労の場をひんぱんに移るケースが多いことなどとの関連が想定できる。

図表18 友人・知人の有無、つながり

	相談できる 友人・知人 がいる	今は連絡を 絶っている	相談できる 友人・知人 はいない	不明	計
男性	52 60.5%	4 4.7%	22 25.6%	8 9.3%	86 100.0%
女性	29 85.3%	0 0.0%	3 8.8%	2 5.9%	34 100.0%

また、職場での信頼できる関係や組合、支援団体とのつながりの有無を述べたケースを拾ったのが図表19である。ただし、聞き取り調査では、これらの質問を必須項目としたわけではないため、語られなかった事例が多くあると思われる。また、聞き取り対象者には、組合や支援組織とのつながりをもつ人の数が多くみられたが、これは調査の協力団体からこれらの人を紹介していただいたことによる。しかし、重要なのは、こうした組織とつながっている人数の多さではなく、彼らが支援団体を通してあらためて人とのつながりをもつことができ、かつ、それによって自らの抱える問題の解決の糸口を見いだしたという点にある。

また、図表19からは、男女ともに、「会社や職場に信頼できる関係がある(あった)」との発言を行ったものが少ない。同様に、「職場の労働組合とのつながり」もまた4件のみである。これらは、彼ら非正社員の、仕事を通じたつながりの希薄さを物語っているように思われる。

図表19 職場や社会組織とのつながり（重複回答）

	会社や職場で信頼できる関係がある(あった)	職場の労働組合	個人加盟の労働組合	支援組織・地域住民とのつながり
男性	3	1	12	23
女性	5	3	3	6

図表20 家族、友人・知人などとのつながりと、世帯類型の相関関係 男性

両親あるいはきょうだいの関係	+	相談できる友人	幼少期の世帯類型	→ 現在の世帯類型	ケース	ケース数
よい、あるいは頼れる	+	いる	普通世帯	→ 単身世帯	東:12, 20, 24, 32, 44 大:28, 35, 47, 49, 56	10
			普通世帯	→ 両親と同居	東:9, 25	2
			普通世帯	→ 一人親と同居	大:51	1
			普通世帯	→ 普通世帯	東:46	1
			母子世帯	→ 一人親と同居	東:45	1
よい、あるいは頼れる	+	連絡しない、いない	普通世帯	→ 単身世帯	東:31	1
連絡のみ、あるいは頼れない	+	いる	普通世帯	→ 単身世帯	東:2, 18, 26, 30, 36, 38, 42, 47, 58 名:2, 3 大:2, 12, 21, 25, 36	16
			母子世帯	→ 単身世帯	大:10, 32	2
連絡のみ、あるいは頼れない	+	連絡しない、いない	普通世帯	→ 単身世帯	東:1, 5, 28, 34 大:11	5
			母子世帯	→ 単身世帯	大:18, 24	2
			母と別居世帯	→ 単身世帯	大:4	1
よくない、連絡しない	+	いる	普通世帯	→ 単身世帯	東:7, 11, 17, 19, 29, 33, 57 大:37, 53	9
			母子世帯	→ 単身世帯	名:1, 4 大:20, 22	4
			義父・母との世帯	→ 単身世帯	東:43, 48 大:3, 14, 17	5
			児童養護施設	→ 単身世帯	東:53	1
よくない、連絡しない	+	連絡しない、いない	普通世帯	→ 単身世帯	東:3, 27, 56 大:1, 2, 6, 9, 27, 30, 38	10
			母子世帯	→ 単身世帯	大:7, 8, 15, 16, 19, 29	6
両親死去	+	連絡しない、いない	普通世帯	→ 単身世帯	大:3	1
不明					東:4, 14, 54, 55 大:23, 31, 33, 34	8
						86

図表20、21は、家族とのつながりの有無と友人・知人とのつながりの有無の組み合わせが世帯構成と関連があるのかどうかを調べたものである。男性では、単身世帯以外の世帯類型のもとで暮らしている人は全員、家族はもちろん友人・知人とのつながりもあることがわかった。単身世帯の中には、「家族：連絡のみ、あるいは頼れない」+「友人・知人：いない」のケースが8件、「家族：関係がよくない、連絡しない」+「友人・知人：いない」のケースが16件、合計24件と多いことに注目しておきたい。女性の場合、これらに当てはまるケースは東京51の1件のみとなっている。このように男女間では、身近かな社会的なネットワーク構築の実態に大きな差があることが明らかとなった。

図表21 家族、友人・知人などとのつながりと、世帯類型の相関関係 女性

両親あるいは きょうだいの関係	+	相談 できる友人	幼少期の 世帯類型	→ 現在の 世帯類型	ケース	ケース数		
よい、あるいは頼れる	+	いる	普通世帯	→ 単身世帯	東:8, 21, 22, 35, 37, 50 大:48, 52	8	18	19
			普通世帯	→ 両親との同居世帯	大:55, 57	2		
			普通世帯	→ 母子世帯	東:41 大:42, 44	3		
			母子世帯	→ 母子世帯	大:39, 40	2		
			母子世帯	→ 一人親と同居	大:26	1		
			母子世帯	→ 普通世帯	大:50, 54	2		
よい、あるいは頼れる	+	連絡しない、 いない	普通世帯	→ 単身世帯	東:13	1	1	
連絡のみ、 あるいは頼れない	+	いる	普通世帯	→ 単身世帯	東:23	1	4	4
			普通世帯	→ 母子世帯	東:10, 39	2		
			母子世帯	→ 単身世帯	東:49	1		
よくない、連絡しない	+	いる	普通世帯	→ 単身世帯	東:6	1	3	4
			普通世帯	→ 母子世帯	大:41, 45	2		
よくない、連絡しない	+	連絡しない、 いない	普通世帯	→ 単身世帯	東:51	1	1	
両親死去	+	いる	普通世帯	→ 母子世帯	大:58	1	2	
両親不明	+	いない	児童養護施設	→ 単身世帯	東:52	1	2	7
不明					東:15, 16 大:43, 44, 46	5	5	
						34		

(6) 社会保障制度とのつながり

私たちの暮らしは、さまざまなリスクにさらされていることから、これに直面した時のセーフティネットとして社会保険制度がある。ここでは、雇用保険、健康保険、年金保険の3つを取り上げ、それぞれへの加入状況を聞いた。それをまとめたのが、以下の図表22、23、24である。

いずれの社会保険についても、男性の未加入率が際立って高いことが特徴的である。また、今回の調査対象者の多くが、自立支援センター、民間の支援組織、そして労働組合などの支援を得られる状況に至ったことから、これまで国民健康保険や国民年金に加入してきたが滞納が続いている人に対しては、保険料納入免除の手続きを取ったケースが多くみられる。それでも、国民年金などでは、依然として滞納率が高くなっている。いずれにしろ、社会保険未加入者の多さ、社会保険に加入していても保険料を払えないでいる人がきわめて多いことなどがわかった。これは、ワーキングプアの問題に対して、今日の社会保障の基本である保険原理が機能しえないことを物語っている。

図表22 雇用保険の加入状況

	加入	失業手当受給予定・ 受給中・満了	未加入	不明	計
男性	12 14.0%	7 8.1%	61 70.9%	6 7.0%	86 100.0%
女性	15 44.1%	1 2.9%	15 44.1%	3 8.8%	34 100.0%

図表23 健康保険の加入状況

	勤務先 健康保険	配偶者健保 被扶養者	国民 健康保険	国保・親の 扶養家族	国保加入 ・滞納	国保加入 ・免除	未加入	不明	計
男性	9 10.5%	0 0.0%	11 12.8%	5 5.8%	5 5.8%	7 8.1%	38 44.2%	11 12.8%	86 100.0%
女性	12 35.3%	1 2.9%	6 17.6%	1 2.9%	1 2.9%	2 5.9%	8 23.5%	3 8.8%	34 100.0%

図表24 年金保険の加入状況

	厚生年金・ 公務員共済 年金加入	厚生年金第 3号被保険者	国民年金 加入	国民年金加 入・親族支払	国民年金 加入・滞納	国民年金 加入・免除	未加入	不明	計
男性	9 10.5%	0 0.0%	4 4.7%	1 1.2%	15 17.4%	12 14.0%	28 32.6%	17 19.8%	86 100.0%
女性	13 38.2%	1 2.9%	3 8.8%	0 0.0%	0 0.0%	12 35.3%	1 2.9%	4 11.8%	34 100.0%

ま と め

この120件に及ぶケースレポートの概要を紹介してきた。そこで明らかとなったことからを、最後に整理しておきたい。

第1に、子どもの頃からの生育歴が、聞き取り対象者たちの今日の状況に深く影響していることが明らかとなった。子どもの頃の家庭の経済的環境や親の離婚・再婚といった家庭状況の変化が、学校教育の修了に、そしてその後の初職に影響を及ぼしている。また、それらは、間接的にその後の不安定な雇用、低所得と社会とのつながりの希薄さ、そして社会保険制度などへの未加入に影を落としている。とくに、中学卒業と高校中退の若者、また引きこもりの状況にあった若者においては、学校をはじめ社会への関わりが中途半端であったことから、社会に出る準備が十分になされずに、就労の世界へ放り込まれていく、あるいはそこに踏み込めないでいる状況が見出された。いわば、社会への参入に向けた準備段階の時点で社会的な関係が中途半端にしか形成されなかったという問題が、そこにはある。このことは、「子どもの貧困」についての検討の重要性を示唆している。

第2に、初職に就いて以降の仕事をめぐる問題である。初職が正規職であれ非正規職であれ、その後転職を繰り返す（あるいは繰り返さざるをえない）という「雇用の不安定さ」がまず見てとれる。しかも、短期雇用を前提とした派遣労働などが典型であるが、この不安定さによって技能や就労経験の蓄積がなされず、その結果「労働における周縁性」すなわち単純な繰り返し労働、企業内での低い評価、低賃金をもたらすことになる。そして、そのことがさらに強く彼らを「雇用の不安定さ」に固定していくといった悪循環の構造がそこにはある。その結果として、彼らは、ワーキングプアという状況からの脱出の糸口が見い出せず、職業生活やその後の人生の将来像も思い描くことができない状況に追いやられている。

第3に、社会的なつながりが希薄であり、場合によっては切断されるという特徴も見逃せない。労働における周縁性と雇用の不安定さは、貧困をもたらすだけでなく、すでに示したように、家族、友人・知人、企業組織、地域社会とのつながりの弱体化をもたらしている。こうして、周縁性、不安定さそして貧困が常態化する傾向を生み出している。このことはまた、当事者たちの社会からの孤立、そして精神的な不健康をもたらし、なかには深刻な抑うつ状態やさまざまな精神疾患を患う者もみられた。

このことは、彼らが仕事や生活の問題で困難な状況に陥っても、また、契約途中の雇い止めが派遣会社によって一方的に示されても、これらに対する自らの思いを声に出して発言する機会や場そのものが、奪われてきたことを示している。すなわち、日本における非正規雇用をめぐる諸制度や社会そのものが、彼らをそのような状況に追いやったといつてよいだろう。

第4に、既存の社会保障制度は、雇用保険、医療保険、年金保険などの加入状況をもてわかるように、ワーキングプアの人々の困難を前にして機能不全に陥っている。ここから問われるのは、セーフティネットの再構築の課題である。これまでの社会政策の中心であった社会保険だけに頼るのではなく、現金給付やサービス給付、就労に向けた具体的な道筋（職業訓練や資格制度、個人のニーズに合った職業紹介など）の提示、そして自治体やNPOあるいは労働組合などによる地域でのきめ細かい支援活動への公的なバックアップも含めたトータルな施策が必要とされていることを物語っている。

最後に、この第4の点に関連して、次のことが明らかとなった。今回の聞き取り調査においては、社会活動を行っているさまざまな団体や労働組合から聞き取り対象者を紹介していただいた。このことは、ワーキングプアの人々を支援する活動が広がりはじめていることを示すものである。また、その活動を通して、それらの団体が当事者の抱えている困難の解決と支援を行い、かつ新たなつながりの構築がはかられていることがわかった。これらは、ワーキングプア問題解決に向けた重要な一つの取り組みである。これらの活動をいかにサポートとしていくのかといった点も重要だろう。

この120人の聞き取り対象者の証言は、現代日本の社会と経済のあり方に対する問いかけとしての位置を占めている。それと同時に、これらの証言自体が深刻さを増すワーキングプア問題の解決について多くの示唆を含んでいる。このことから、このケースレポートをきっかけに、多くの政策論議が行われることを願っている。

最後に、聞き取りに応じていただいた皆さん方に心からお礼を申しあげたい。自らの人生の生々しい体験を他人に語るということは、勇気のいることだと思う。しかし、今回、この調査の趣旨をご理解いただき、一人ひとりから貴重なお話をお聞かせいただいたことに、心から感謝を申しあげたい。また、この調査では、多くの方々に聞き取り作業にたずさわっていただいた。一人ひとりの長時間にわたる語りにも耳を傾け、ていねいに聞き取りを行い、これをレポートとしてまとめる作業は、根気のいるたいへんな作業であったと思う。記して感謝申し上げます。

ケースレポート事例要約

注:表中の「—」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
東01	男	31	4人(両親、妹、本人)	大変苦しかった	中卒	求職中	環境が変わると、激しく喘息	単身	無料低額宿泊所	関係希薄、親には頼れない。	いない	—	雇用保険未加入 国民健康保険加入・免除 国民年金加入・免除	強い不安。派遣で働きたい。
			【職歴】	中学校卒業→焼鳥屋・店員(アルバイト、1年)→鉄工所・生産(正社員、1年)→電気工事店・電気工(正社員、3年)→土木建築会社・作業員(正社員、2年)→警備会社・警備(アルバイト、1年)→更生保護施設→自動車部品メーカー・検査(登録型派遣、3年半)→鋳造会社・生産(登録型派遣、1年半)→短期の登録型派遣を転々(1年)→路上生活(途中で2回の入院を経験)→自立支援センター(2カ月)→無料低額宿泊所(数日)→警備会社・警備(アルバイト、6カ月)→現在、無料低額宿泊所入所/求職中										
東02	男	39	4人(両親、弟、本人)	大変苦しかった	中卒	あり	よい	単身	無料低額宿泊所	ある/連絡程度	いる	—	雇用保険未加入 国民健康保険加入・免除 国民年金加入・免除 生活保護受給中	不安なし。職業訓練希望。
			【職歴】	中学校卒業→職業訓練校(溶接免許取得、半年)→土木建築会社・左官工(アルバイト、1年)→土木建築会社・水道工(アルバイト、1カ月)→土木建築会社・型枠工(アルバイト、3~4カ月)→ガス会社・現業(正社員、12年)→土木建築会社・鷹(日雇い、数日)→緊急一時保護センター(半年)→路上生活(3年)→自立支援センター(数カ月)→現在、無料低額宿泊所入所中/生活保護受給中(5年)→(生活保護受給開始後)清掃会社・清掃(アルバイト、短期間)→清掃会社・清掃(登録型派遣、1年半)→ポスティング会社・ポスティング(登録型派遣、2年半)、現在に至る										
東03	男	32	5人(両親、兄弟2人、本人)	大変苦しかった	中卒	求職中	抑うつ・アルコール依存	単身(離婚2回)	無料低額宿泊所	関係は一切途絶えた	いない	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	人間関係の構築に強い不安。住宅の確保希望。
			【職歴】	中学校卒業→土木建築会社・左官工見習い(正社員、半年)→短期のアルバイトを転々(2年)→土木建築会社・作業員(正社員、1年半~2年)→土木建築会社・作業員(4~5カ月)→水商売・店員(正社員、9年)→土木や警備の仕事(2年)→社会福祉法人宿泊所(1カ月)→現在、無料低額宿泊所入所中(1週間)/求職中										
東04	男	34	5人(祖母、両親、姉、本人)	苦しかった	中卒	求職中	よい	単身(離婚1回)	緊急一時宿泊施設	連絡していない(1年弱)	—	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 健康保険・不明 年金・不明	一時的に生活保護を申請。再就職を強く望んでいる。
			【職歴】	中学校卒業→スーパー・店員(アルバイト、4年)→居酒屋・店員(アルバイト2年、正社員3年)→土木建築会社・作業員(日雇い、6年)→実家の資源回収会社・現業(家族従業者、2年)→自動車部品メーカー・生産(登録型派遣、2年)→路上生活(3カ月、途中で日雇い労働を経験)→拘置所(3カ月)→路上生活(2カ月)→現在、緊急一時宿泊施設入所中(2週間弱)/求職中										
東05	男	27	3人(両親、本人)	—	大卒	求職中	—	単身	民間賃貸住宅	ある/援助拒否	いない	支援団体とのつながり	雇用保険加入(失業手当受給予定) 国民健康保険加入 国民年金加入	人とのコミュニケーションが苦手であるが、それを改善し、製造業の正社員を希望。
			【職歴】	大学卒業→釣り具メーカー・生産(常用型派遣、10カ月)→工作機械メーカー・生産(常用型派遣、9カ月)→重工業メーカー・生産(常用型派遣、数カ月)→直接雇用嘱託社員(1年)→工作機械メーカー・生産(常用型派遣、1年)→自動車部品メーカー・生産(常用型派遣、1年)→一時的な生活保護受給を経て、現在失業手当受給中/求職中										
東06	女	36	3人(両親、本人)	普通	専門学校卒(IT系)	求職中	—(体調不良による離職経験あり)	単身(離婚1回)	民間賃貸住宅	関係悪化	いる(メールのやりとり)	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入 国民年金加入・免除 生活保護受給中	就労意欲あり。生活の安定希望。
			【職歴】	専門学校卒業→電気機器メーカー・生産(アルバイト、1年)→電気機器メーカー・生産(契約社員、断続的に5年間)→電話会社・オペレーター(アルバイト、10カ月)→結婚・離婚→自動車部品メーカー・生産(登録型派遣、2カ月)→自動車部品メーカー・検査(登録型派遣、10カ月)→ゲーム機器メーカー・生産(登録型派遣、1カ月)→自動車部品メーカー・生産(登録型派遣、4カ月)→ガス給湯器メーカー・生産(登録型派遣、1カ月前)→自動車部品メーカー・検査(登録型派遣、4カ月)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、2週間)→緊急一時宿泊施設(2週間)→現在、生活保護受給中(受給開始後2カ月)/求職中										
東07	男	24	3人(両親、本人)	普通	大卒	求職中	よい	単身	民間賃貸住宅	関係悪化	いる	個人加盟ユニオン・政党とのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険未加入 国民年金加入・免除	演劇の継続、就労への不安。
			【職歴】	大学卒業→神社・団体職員(正職員、3カ月)→事務職(アルバイト、4カ月)→出会い系サイト運営会社・データ入力等(アルバイト、4カ月)→ネットカフェ・店員(登録型派遣、8カ月)→ネットカフェ・店員(登録型派遣、6カ月)+新聞販売会社・新聞配達(アルバイト、2カ月)→現在に至る										
東08	女	30	?人(両親、本人、きょうだいは不明)	普通	短大卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	ある	いる	—	雇用保険加入 勤務先健保加入 厚生年金加入	正社員になりたいが、その見込みを考えると不安。
			【職歴】	短期大学卒業→情報処理サービス会社・事務(正社員、8カ月)→水産加工食品メーカー・事務(正社員、5年)→IT商社・事務(登録型派遣、3年)→非鉄金属メーカー・事務(登録型派遣、1年半)、現在に至る(登録型派遣の仕事に就くようになってからはスーパーで試飲デモンストレーターのアルバイトをかねもち)										
東09	男	28	?人(両親、本人、きょうだいは不明)	普通	大卒	求職中	よい	単身 両親と同居	実家	親からは、理解をえている	多くの友人がいる	個人加盟ユニオンの中心的存在/前の仕事仲間とのつながりも	雇用保険加入(失業手当受給中) 国保加入・親族支払 国民年金加入・親族支払	出版関係の仕事と社会運動を続けていきたい。
			【職歴】	大学卒業→フリーター(アルバイト・日雇い派遣、2年4カ月)→出版業・編集(ワーカーズコープ組合員、1年半)→現在、失業手当受給中(受給開始後3カ月)/求職中										

注:表中の「—」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいとのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
東10	女	28	4人(両親、姉、本人)	普通	専門学校卒	あり	よい	母子世帯:本人と2歳の子ども、両親と同居	実家	両親と関係は悪くないが家を出たい。一方で、そうなる子ども世話が大変。	いる	支援団体とのつながり	雇用保険加入 国民健康保険加入 国民年金加入 児童手当 児童育成手当(自治体独自)	認定看護師の資格取得を目指したので、最先端の医療現場にいたいと思う。
			【職歴】 専門学校卒→公的医療機関・看護師(正職員、4年10カ月)→出産・育児(1年3カ月)→特別養護老人ホーム・看護師(パート、4カ月)→病院・看護師(パート、1年2カ月)、現在に至る											
東11	男	27	5人(父、姉、祖父母、本人)	苦しかった	高卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅(父親と同居)	祖父母と良好。父・姉との関係は良くない。	いる	個人加盟ユニオンとのつながり	雇用保険加入 勤務先健保加入 厚生年金加入	仕事の継続を希望。
			【職歴】 高校卒業→ガリンスタンド・販売(正社員、5年)→デパート・事務(登録型派遣、9カ月)→デパート・事務(登録型派遣、3カ月)+ホテル・接客(アルバイト、3カ月)かけもち→ホテル・接客(アルバイト、1年3カ月)→不動産会社・営業(正社員、5カ月)→個人加盟型労働組合の協力で未払い賃金を獲得→レストラン・接客(アルバイト、3カ月)→中古車販売会社・営業(正社員7カ月)、現在に至る											
東12	男	28	3人(両親、本人)	普通	大学院修士卒(博士中退)	あり	精神疾患	単身	公団住宅(親からの仕送り)	良好(親から仕送り)	いない	個人加盟ユニオンとのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入 国民年金加入・免除 障害基礎年金受給	精神障害者に対する仕事はとて少ないが、大学院の知識を活かせる教育関係、NPOでの仕事を希望。
			【職歴】 大学院修士課程修了(2年)→大学院博士課程進学(1年未満)→病気のため帰郷(後日、大学院博士課程退学)→高校・教員(非常勤職員、2カ月)→大学・研究生(1年)→学習塾・非常勤講師(アルバイト、2年7カ月)、現在に至る											
東13	女	30	7人(両親、祖父母、姉、弟、本人)	普通	大卒	あり	抑うつ傾向	単身(パートナ→死別)	民間賃貸住宅	あり(母親への仕送り)	いない	個人加盟ユニオンとのつながり	雇用保険加入 国民健康保険加入 国民年金加入 遺族共済年金(2007年10月～5年間)	服飾の技術を活かし正社員希望。
			【職歴】 大学卒業→回転寿司店・接客(アルバイト、1カ月)→アパレル会社・倉庫整理および洋服直し(アルバイト、10カ月)→アパレル会社・洋服直し(アルバイト、9カ月)+洋服直し店(個人経営)・洋服直し(アルバイト、9カ月)かけもち→アパレル会社・洋服直し(アルバイト、半年)+洋服直し会社(スーパー併設店)(パート、半年)かけもち→洋服直し会社(スーパー併設店)・洋服直し(パート、7カ月)→洋服直し店(個人経営)・洋服直し(アルバイト、4年9カ月)、現在に至る(労働条件改善を求めて個人加入労働組合に加入し、交渉するも改善されず、近々退職予定)→別の洋服直し会社に就職予定											
東14	男	36	—	—	大卒	求職中	—	単身	路上生活	数カ月前にしばらく実家に泊まっていた。	—	—	雇用保険未加入 国民健康保険加入 国民年金加入・免除	—
			【職歴】 大学1年間留年(決まっていた就職が白紙に)→大学卒業→喫茶店・店員(アルバイト3年半、在学中からのアルバイトを継続)→スーパー・清掃(アルバイト、2年)+ファーストフード店・店員(アルバイト、2年)かけもち→ホテル・事務(正社員、2年7カ月)→ホテル・事務(正社員、1年)+居酒屋・店員(アルバイト、1年)かけもち→無職(数カ月、失業等給付受給)→飲食チェーン店・店員(正社員、4年)→無職(2カ月)→緊急一時保護センター(1カ月)→自立支援センター(2カ月)→現在、路上生活中/求職中											
東15	女	28	4人(両親、姉、本人)/高校生の時両親別居	大変苦しかった	高卒	求職中	よい	単身	民間賃貸住宅	別居している母親に仕送り	いる	仕事の関係のつきあい	雇用保険加入(失業手当受給) 勤務先健保加入 厚生年金加入	不安。コンピュータスキルを活かした仕事希望。
			【職歴】 高校卒業→警備会社・現業(正社員、2年)→ホームページ制作会社・事務(アルバイト、1年)→事務請負会社・事務(アルバイト、1年)+お見合い会社・電話受付(アルバイト、1年)かけもち→不動産会社・事務(正社員、1年)→大手企業・事務(登録型派遣、6年)→現在、失業手当受給中/求職中											
東16	女	33	—	普通	専門学校卒	あり	よい	夫婦世帯本人、夫子ども2人	民間賃貸住宅	配偶者に相談する	いる	同僚の派遣社員	雇用保険加入 勤務先健康保険加入 厚生年金加入	仕事と家庭の両立希望。今の派遣会社から正社員に転換したい。
			【職歴】 専門学校卒業→金融関連会社・事務(正社員、4年)→金融関連会社・事務(正社員、3年)→結婚・出産・育児(2年)→銀行・事務(パート、3年)→パソコン周辺機器輸入代行会社・事務(登録型派遣、8カ月)→金融機関・事務(登録型派遣、5カ月)、現在に至る											
東17	男	42	5人(両親、兄弟、本人)	大変苦しかった	高卒	求職中	よい	単身	民間賃貸住宅	両親、兄弟音信不通/連絡は可能	いる	個人加盟ユニオンとのつながり	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入 生活保護受給中	職業資格取得を希望。しかし、生活保護ではそれがうまくいかない。
			【職歴】 高校卒業→ガラス仲卸問屋・現業(正社員、3年)→建築会社・作業員(正社員、1年)→路上生活(短期間)→ハウスクリーニング会社・清掃(アルバイト、1年)→運送会社・運搬(正社員、8年)→建設会社・作業員(1カ月)→運送会社・運搬(正社員、4年)→新聞販売会社・新聞配達(アルバイト、3年半)→新聞販売会社・新聞配達(登録型派遣、2年弱)→自動車メーカー・検査(登録型派遣、6カ月)→現在、生活保護受給中(受給開始後3カ月)/求職中											

注:表中の「-」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
東18	男	21	4人(両親、妹、本人)	苦しかった	専門学校卒	求職中	精神的ストレス	単身	民間賃貸住宅	離婚した実母・実父と電話で話している	いる	個人加盟ユニオンのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入・免除 国民年金加入・免除 生活保護受給中	将来に不安、悲観。ゲームのプログラマー志望。
			【職歴】 高校卒業→アニメ関係専門学校中退(新聞奨学生退職)→ゲーム関係専門学校卒業→フリーペーパー配布会社・運営スタッフ(アルバイト、2カ月)→倉庫会社・仕分け(アルバイト、2カ月)→無職(2カ月)→派遣村相談→現在、生活保護受給中/求職中											
東19	男	35	6人(両親、弟、祖父母、本人)	普通	大卒	求職中	よい、一方で、対人コミュニケーションへの不安。	単身	民間賃貸住宅	正規職に就いていないことに理解が得られず、疎遠に。	いる	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入・免除 国民年金加入・免除	フィナンシャル・プランナー試験結果待ち。社会的活動をしているNPO職員になりたい。
			【職歴】 大学卒業→印刷会社・営業(正社員、3カ月)→ファーストフード店・販売(アルバイト、4カ月)→パン製造販売会社・生産(正社員、3カ月)→引越会社・建築会社(日雇い派遣、1週間)→古書店・販売(アルバイト3カ月、正社員3カ月)→コンビニ・販売(アルバイト、1年)+コンビニ・販売(アルバイト、1年)かけもち→DVD販売店・販売(アルバイト、8年)→携帯電話会社・オペレーター(登録型派遣、3カ月)→インターネットプロバイダー・オペレーター(登録型派遣、3カ月)→資格取得専門学校・添削指導(登録型派遣、3カ月)→現在、失業手当受給中/求職中											
東20	男	32	4人(両親、姉、本人)	普通	高卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	両親、姉ともある	NPO時代の友人がいる	NPO時代の仲間とのつながり	雇用保険加入 勤務先健康保険加入 厚生年金加入	現状に満足。
			【職歴】 高校卒業→予備校(6カ月)→ひきこもり生活(7年、若者就労支援NPOのカウンセリング受講)→専門学校(6カ月)→若者就労支援NPOの就労支援プログラム受講(1年)/仕事体験プログラム(遺跡発掘・清掃)+鉄道会社・事務(登録型派遣、1カ月)→人材サービス会社・事務(アルバイト3年、契約社員1年8カ月)、現在に至る											
東21	女	36	7人(両親、祖父母、姉2人、本人)	苦しかった	専門学校中退	あり	よい	単身	民間賃貸住宅(両親と同居)	ある	いる	職場の労働組合とのつながり	雇用保険加入 公務員共済加入	仕事への責任感強い。父の年金に頼った生活に不安。
			【職歴】 専門学校中退→役所・事務(臨時職員、1年強)→市立学校・事務+役所・事務(ともに臨時職員、15年)かけもち(1、3学期は市立学校、2学期は役所勤務)、現在に至る											
東22	女	35	5人(両親、妹、弟、本人)	苦しかった	短大卒	あり	よい	単身	一戸建ての持ち家(両親と同居)	ある	いる	職場の労働組合とのつながり	雇用保険加入 公務員共済加入	仕事への責任感強い。正規職員となることを希望。
			【職歴】 短期大学卒業→市教育委員会・学校事務(臨時職員、2年)→市教育委員会・学校事務(非常勤職員13年、制度変更のため臨時職員から非常勤職員へ)、現在に至る											
東23	女	37	3人(両親と本人)	景気変動の影響を受けやすかった	短大卒	あり	喘息	単身(離婚1回)	民間賃貸住宅	父とつながりがある(母は他界)	いる	職場の労働組合とのつながり	雇用保険加入 公務員共済加入	現在の給与での生活に不安。父との同居希望。
			【職歴】 短期大学卒業→私立保育所・保育職(正職員、2年)→民間企業・事務職(正社員、1年強)→公立保育所・保育職(アルバイト、3カ月)→私立保育所・保育職(正職員、1年半)→公立保育所・保育職(臨時職員、11年)、現在に至る											
東24	男	45	4人(両親、祖母、本人)	普通	高卒	あり	よい	単身	一戸建(両親と同居)	よい	いる	職場の労働組合とのつながり	雇用保険加入 公務員共済加入	安定した生活希望、職業訓練への意欲あり。
			【職歴】 高校卒業→陸上自衛隊・自衛隊員(正職員、4年)→土木建設会社・運転手(日雇い、6年)→タクシー会社・運転手(正社員、4年)→タクシー会社・運転手(正社員、2年)→町役場・運転等の現業(嘱託職員、10年)、現在に至る											
東25	男	32	4人(両親、妹、本人)	普通	大卒	なし/専門学校生	抑うつ傾向	単身	持ち家(一戸建)に両親と同居	親から仕事をするように言われるが、普通に会話ができています	いる	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入 国民年金加入	専門知識を得て安定職に就くことを希望。
			【職歴】 大学卒業→住宅会社・営業(正社員、4カ月)→引きこもり(8カ月)→公務員受験専門学校入学・中退(10カ月)→引きこもり(1年半)→古書店・販売(アルバイト、1年半)→職業訓練校・ITスキル(3カ月)→半導体関連商社・営業(トライアル雇用、3カ月)→書店・販売(正社員、1カ月)→携帯電話会社・営業事務(登録型派遣、6カ月)→情報通信会社・オペレーター(登録型派遣、2カ月)→インターネットプロバイダー・技術サポート(登録型派遣、1カ月)→現在、専門学校通学中											
東26	男	31	5人(祖父、父、兄2人、本人)	大変苦しかった	中卒	求職中	糖尿病	単身	民間賃貸住宅	弟、妹との連絡がある	いる	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入 生活保護受給中	高齢者福祉の仕事希望。弟、妹の面倒をしっかりみたい。
			【職歴】 中学卒業→中華料理店・店員(正社員、4年)→相撲部屋・調理等(力士見習い、1年)→整体院・整体師見習い(アルバイト、1年)→暴力団事務所・組員(2年)→露天商(5年)→建設会社・作業員(正社員、数カ月)→建設会社・作業員(登録型派遣=違法派遣、2年)→路上生活→年越し派遣村→現在、生活保護受給中/糖尿病の治療中											
東27	男	29	5人(母、祖父、兄2人、本人)	苦しかった	定時制高校卒	なし/病気療養中	精神疾患/喘息	単身	民間賃貸住宅	母死亡後、連絡の取れる家族はいない	友人との関係は希薄	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入 生活保護受給中	職業訓練をつけて、自立を希望。
			【職歴】 高校卒業→建設会社・溶接工(正社員、約1年)→建設会社・とび(正社員、約2年)→自動車メーカー・運搬(登録型派遣、6年4カ月)→電気機器メーカー・検査(登録型派遣、3カ月)→派遣村→現在、生活保護受給中/精神疾患の治療中→今後、職業訓練受講予定											

注:表中の「-」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
東28	男	42	5人(両親、妹2人、本人)	普通	高卒	なし/職業訓練中	よい	単身	民間賃貸住宅	妹のみ定期的に連絡	いない	-	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入 生活保護受給中	職業訓練中だが自分の将来を描けない。
			【職歴】	高校卒業→建設会社・防水工(正社員、約1年)→ガス配管会社・配管工(正社員、約2年)→検数事務所・現業(アルバイト、約2年)→自動車メーカー・生産(期間従業員、6カ月)→造園業・造園師(アルバイト、約2年)→造園業・造園師(アルバイト、約2年)→建設会社・運転(アルバイト、約5年)→牧場・現業(アルバイト、約2年)→短期のアルバイトを転々(約6年)→農業(アルバイト、約1年)→派遣村相談会→現在、生活保護受給中/職業訓練受講中										
東29	男	48	6人(両親、姉、弟2人、本人)	良かった	高校中退	なし/病気療養中・就労支援ボランティア活動	うつ病	単身	民間賃貸住宅	父死亡、母行方不明、きょうだい連絡なし	いる	支援団体を自ら立ち上げ	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入 生活保護受給中	とにかく不安。就労支援ボランティアでの仕事を希望。
			【職歴】	高校中退→建築会社・自営(事業主、2年)→自営業廃業→土木会社・作業員(アルバイト、1カ月)→建築会社・作業員(アルバイト、3カ月)→運送会社・運転助手(正社員、2年)→溶接会社・溶接工(正社員、2年)→入院・手術→運送会社・運転手(正社員、5年)→運送会社・運転手(正社員、2年)→測量会社・測量師見習い(正社員、4年)→アルバイトを転々(1年)→土木建築会社・作業員(正社員、3年)→パチンコ店・店員(アルバイト、6カ月)→新聞販売店・新聞配達(アルバイト、3年)→運送会社・運転手(契約社員、6カ月)→運送会社・運転手(契約社員、6カ月)→運送会社・運転手(契約社員、4カ月)→運送会社・運転手(契約社員、2年)→運転代行会社・運転手(アルバイト、2年)かけもち→運送会社・運転手(契約社員、1年弱)→生活保護申請・却下→運転代行会社・運転手(契約社員、数カ月)→派遣村→現在、生活保護受給中/病気療養中、支援ボランティア団体を立ち上げ活動中										
東30	男	36	5人(両親、兄、妹、本人)	苦しかった	高卒	求職中/基金訓練受講中	よい	単身	民間賃貸住宅	父疎遠、兄と連絡あり	いる	-	社会保険・不明 生活保護受給中	一刻も早い生活保護から脱却、自立希望。
			【職歴】	高校卒業→電気機器メーカー・設計(正社員、5年)→実家の自動車整備会社・自動車整備(家族従業者・4年)→自動車部品メーカーZ社・設計(登録型派遣、数カ月)→自動車メーカーY社・設計(登録型派遣、3カ月)→自動車部品メーカーZ社・設計(登録型派遣、1年)→自動車部品メーカーZ社の100%子会社X社・設計(常用型派遣、2年強)→母親の看病(無職、3年)→日雇い型派遣(1年)→派遣村→生活保護受給→現在、訓練・生活支援給付金受給中+基金訓練(ビルメン)受講中										
東31	男	29	?人(両親、本人、きょうだいの有無は不明)	-	専門学校卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	ある	-	-	雇用保険加入 勤務先健康保険加入 厚生年金加入	安定雇用希望。
			【職歴】	専門学校卒業→放送会社・事務(アルバイト、3カ月)→地方銀行・事務(登録型派遣、1年8カ月)→スーパー・店員(アルバイト、3カ月)→無職(5年5カ月)→若者自立塾(1年8カ月)→キャリア・コンサルティングNPO・事務(アルバイト、1年8カ月※若者自立塾の在塾期間8カ月を含む)、現在に至る										
東32	男	27	?人(両親、本人、きょうだいの有無は不明)	普通	大卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	両親と連絡しあっている	いる	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 健康保険未加入 国民年金加入・免除	普通の会社で働くのか、社会貢献のために働くのか、迷っている。
			【職歴】	大学卒業→農業・作業員(アルバイト、3カ月)→ベンション・従業員(アルバイト、1カ月)→在宅介護サービス会社・福祉(準社員、1年1カ月)→ホームレス支援NPO・食堂店長(アルバイト2カ月、正職員2年3カ月)→引越し会社・作業員(日雇い型派遣、2カ月)→運送会社・運搬(登録型派遣、4カ月)→引越し会社・作業員(登録型派遣、1カ月)→石鹸製造会社・運搬(登録型派遣、2カ月)→さまざまな日雇い派遣→通関手続き代行会社・事務(登録型派遣、2カ月)→運送会社・運搬(登録型派遣7カ月、アルバイト1カ月)→以降、現在まで3つのアルバイトをかけもち/①ホームレス支援NPO・給仕(アルバイト、3カ月)+②ホテル・受付(アルバイト、3カ月)+③飲食店・給仕(アルバイト、3カ月)										
東33	男	37	6人(両親、兄2人、弟、本人)	苦しかった	定時制高校卒	求職中	よい	単身	民間賃貸住宅	実家追放後、家族とは絶縁状態	いる	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 健康保険未加入 国民年金加入・免除 生活保護受給中	2種運転資格の取得とそれを活かした安定職。
			【職歴】	高校卒業→自動車メーカー・検査(正社員、2年)→運転代行会社・運転手(正社員、5年半)→運輸会社・運転手(業務請負の一人親方、10年)→倉庫会社・倉庫整理(日雇い派遣、半年)→建設会社・運転手(アルバイト、8カ月)→建設業の飯場・建設土木作業員(日雇い、4カ月)→現在、生活保護受給中(6カ月、一時的に契約社員を経験)/求職中										
東34	男	32	4人(両親、兄、本人)	苦しかった	大卒	なし	精神障害(詳細不明)	単身	民間賃貸住宅	両親との電話連絡	いない	支援団体とのつながり	雇用保険加入(失業手当受給満了) 国民健康保険加入 国民年金加入・免除	不安、自立への自信喪失。
			【職歴】	大学卒業→無職(3カ月)→電気機器メーカー・生産(登録型派遣、9カ月)→電気機器メーカー・生産(登録型派遣、9カ月)→失業手当受給+職業訓練(ITスキル3カ月+実習2カ月、計5カ月)→釣具卸会社・事務および営業(正社員、2年)→健康保険傷病手当金受給(7カ月)→失業手当受給→メッキ会社・生産管理(正社員、1年強)→失業手当受給→現在、NPOのボランティアをしながら、今後の人生について模索中										
東35	女	29	4人(両親、本人、弟)	共働きでかなり裕福	大卒	あり	自律神経失調症、偏頭痛	単身	民間賃貸住宅	2007年病気で降親との関係修復	いる	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入 国民年金加入・免除	会社という組織になじめなかったことから、雇用されない働き方を見つけないと諦めている。
			【職歴】	大学卒業→イベント会社・営業(正社員、1カ月)→医療器具卸会社・事務(正社員、8カ月)→保険会社・貿易事務(常用型派遣、2年)→商船会社・貿易事務(常用型派遣、3カ月)→物流会社・貿易事務(常用型派遣、3カ月)→電子部品専門メーカー・事務(紹介予定派遣3カ月→正社員1年半)→食料品店・配送(アルバイト、半年)→コールセンター・オペレーター(パート、数カ月)、現在に至る										

注:表中の「—」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
東36	男	48	3人(両親と本人)	普通	大卒	あり	よい	単身(離婚1回)	不当解雇を理由に前職社員寮に住み続けている	長女と連絡、元妻とはない	いる	支援団体とのつながり/職場に労働組合を立ち上げ	—	社会保険労務士希望。子どもの養育費のために少しでも給料の良い仕事を希望。
			【職歴】			大学卒業→学習塾・講師(正社員、4年)→公立小学校・教師(正職員、17年)→自動車メーカー・生産(派遣社員1年、期間従業員1年半)→失業手当受給(3カ月)+役所(臨時職員、3カ月)→役所・事務(非常勤職員、7カ月)、現在に至る								
東37	女	30	3人(両親と本人)	比較的裕福	大卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	親との連絡週1回	公務員時代の友人	支援団体とのつながり/前の職場の同僚とのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入 国民年金加入	年齢や経験から応募できる仕事が多くない。
			【職歴】			大学卒業→国家公務員・現業(正職員、3年2カ月)→出版社・編集(正社員、1年1カ月)→母親の看病(5カ月)→地元新聞社・データ入力(アルバイト、10カ月)→求職活動(6カ月)→単発アルバイト(3カ月)→出版社・校正(アルバイト、1カ月)、現在に至る								
東38	男	37	8人(両親、兄弟5人、本人)	父の転職後生活苦	高専3年次中退	あり	精神的ストレス	単身	民間賃貸住宅	両親とは疎遠、兄弟と連絡	いる	支援団体とのつながり	雇用保険加入 勤務先健康保険加入 厚生年金加入	ファイナンシャルプランナーの資格を活かした就労困難者の支援を希望。
			【職歴】			高等専門学校3年修了中退→国家公務員・事務(正職員、9年)→建設会社・事務(正社員、9カ月)+ファミリーレストラン・調理(アルバイト、2カ月)かけもち→建設会社・事務(正社員、数カ月)→(建設会社からの出向)旅館・フロント(正社員、数カ月)→新聞販売店・配達と集金(正社員、2カ月)→コピー機メーカー・保守電話受付(登録型派遣、1年4カ月)→失業手当受給(6カ月)→職業訓練(ファイナンシャルプランナー)→日雇い派遣(1カ月)→コピー機メーカー・オペレーター(登録型派遣、3カ月)→損害保険会社・事務(登録型派遣、3カ月)→電話会社・営業事務(登録型派遣、6カ月)→運輸会社・荷物仕分け(アルバイト、4カ月)→電気機器メーカー・オペレーター(登録型派遣、1カ月)→情報処理会社・運搬(登録型派遣、3年目)+ファミリーレストラン・接客(アルバイト、4カ月)かけもち、現在に至る								
東39	女	42	4人(両親、妹、本人)	ややゆとりがあった	専門学校(看護学校)中退	あり	よい	母子世帯/本人、子ども2人(10歳、7歳)	民間賃貸住宅	母親は死去。父親とは距離を置きつつ付き合っている	子どもの保育園時代の母親仲間と親戚のような付き合い	—	雇用保険加入 勤務先健康保険加入 厚生年金加入	子どもが高校生になったときに教育の場を与えられるか不安。
			【職歴】			専門学校中退→レストラン・ウェイトレス(アルバイト、1年)→レストラン・ウェイトレス(アルバイト、1年)→不動産会社・事務(正社員、7年)→育児期間(2年、この間に失業手当受給)→生命保険会社・電話オペレーター(登録型派遣、3年)→育児期間(1年)→生命保険会社・電話オペレーター(登録型派遣、1年)→生命保険会社・電話オペレーター(登録型派遣、5年)								
東40	女	25	4人(母、弟、妹、本人)	比較的裕福	大卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅(家賃親負担)	ある	趣味の仲間	—	雇用保険未加入 国民健康保険加入(親負担) 年金・不明	作業療法士資格の取得が目標。
			【職歴】			大学卒業→電子部品商社・事務(正社員、1年)→マッサージ店・施術(アルバイト・1カ月)→マッサージ店・施術+専門学校(4カ月)→専門学校+フィットネスクラブ・ダンスインストラクター(業務請負、9カ月)、現在に至る								
東41	女	34	3人(両親、本人)	—	専門学校卒	あり	よい	単身(死別1人、子ども1人)	民間賃貸住宅	ある	友人はいる(メール、電話程度)	—	雇用保険加入 勤務先健康保険加入 厚生年金加入	安定した正規雇用を希望。
			【職歴】			専門学校卒業→パソコンスクール(6カ月)→通信会社・事務(常用型派遣、4年)→結婚・出産・育児(短期のアルバイトを経験)→保険会社・事務(登録型派遣、3年)→電子機器製造会社・事務(登録型派遣、6カ月)→銀行・事務(登録型派遣、8カ月)→銀行・事務(登録型派遣、7カ月)→保険会社・事務(登録型派遣、4カ月)→保険会社・事務(登録型派遣、5カ月)、現在に至る								
東42	男	34	6人(両親、兄2人、妹、本人)	決して裕福ではなかった(苦しかった)	専門学校中退	求職中/失業手当受給	よい	単身	民間賃貸住宅	両親にたまに電話。きょうだいとはない。	いる	個人加盟ユニオンとのつながり	雇用保険加入(失業手当受給満了) 国民健康保険加入 国民年金加入・滞納	パソコン関係の販売員希望。目の前のことで精一杯。将来をイメージできない。
			【職歴】			専門学校中退→情報処理代行会社・現業(アルバイト3年、専門学校在学中より継続)→パチンコ店・店員(正社員、6カ月)→警備会社・警備(アルバイト、4年)→新聞販売会社・新聞配達(アルバイト、半年)→警備会社・警備(アルバイト、短期間)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、7~8カ月)→日雇い派遣(6カ月)→建設業・建設土木作業員(日雇い、1カ月)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、2カ月)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、1年半)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、2カ月)→自動車部品メーカー・検査(登録型派遣のちに準社員、計4年)→失業給付受給(6カ月)→現在、労働金庫就職安定資金融資/求職中								
東43	男	29	4人(父、義母、義理の弟、本人)	苦しかった	高卒(美術系)	求職中	よい	単身	民間賃貸住宅	父・義母の住む家に居場所がない。	いる	個人加盟ユニオンとのつながり	社会保険・不明 生活保護受給中	自分が経験した仕事ならなんでも。
			【職歴】			高校卒業→ファミレス、コンビニ、ビデオ店などをかけもち(アルバイト、計8年)→自動車メーカー・検査(登録型派遣、2年)→自動車メーカー・運搬(登録型派遣、半年)→警備会社・警備(アルバイト、数日)→電機部品メーカー・検査(登録型派遣、2カ月)→現在、生活保護受給中/求職中								
東44	男	35	5人(両親、きょうだい2人、本人)	—	専門学校卒	求職中/失業手当受給	よい	単身(離婚1回)/別居する子どもが一人	民間賃貸住宅	ある	地元の友人がいる	かつての職場の仲間とのつながり	雇用保険加入(失業手当受給中) 国民健康保険加入 国民年金加入	これまで経験してきた仕事。正社員を希望。
			【職歴】			専門学校卒業→配電盤製造会社・組立(正社員、1年)→電気工事会社・電気工(正社員、2年)→パチンコ屋・店員(正社員、2年半)→警備会社・警備員(正社員、2年半)→飲食店・店員(アルバイト、1年)→自動車部品メーカー・検査(登録型派遣社員、5年)→自動車メーカー・生産(登録型派遣社員、3カ月)→現在、失業給付受給中/求職中								

注:表中の「—」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
東45	男	35	4人(母、兄、弟、本人)	大変苦しかった(父他界)	中卒	有/建設業アルバイト	よい	単身	公営住宅	母、兄、弟と同居	いる	個人加盟ユニオンとのつながり/職場に労働組合を立ち上げ	雇用保険加入 勤務先健康保険加入 厚生年金加入	強い不安。母、兄弟を養う生活は苦しい。
			【職歴】			中学校卒業→牧場にて競馬騎手のトレーニング(4年)→建築資材運搬会社・事務5年、のちに運搬11年(アルバイト、16年)、現在に至る								
東46	男	44	?人(親、本人、きょうだいの有無は不明)	—	専門学校中退	あり	よい	配偶者、子ども3人	民間賃貸住宅	ある	いる	個人加盟ユニオンとのつながり/職場に労働組合を立ち上げ	雇用保険加入 国民健康保険加入 国民年金加入	不安定な仕事に不安、しかし、年齢のこともあり、これに代わる展望は見いだせず。
			【職歴】			専門学校中退→建築会社・内装工(アルバイト、1年)→建築会社・クリーニング(アルバイト、2年)→ビル解体工事会社・工事管理(正社員、4年)→ビル解体工事会社・工事管理(正社員、2年)→ビル解体工事会社・自営(事業主、約1年半)→廃業・短期のアルバイトを転々(2年)→建築資材運搬会社・運搬(アルバイト、4年)→チラシ宅配会社・ポスティング手配(アルバイトのちに正社員、1年半)→建築資材運搬会社・運搬(アルバイト、7年)、現在に至る								
東47	男	40	3人(両親、本人)	大変苦しかった	大学中退	あり	うつ病	単身	民間賃貸住宅	母と連絡	いる	個人加盟ユニオンとのつながり/派遣労働者の組合の中心的存在	雇用保険未加入 国民健康保険加入・滞納 国民年金加入・滞納	アルバイト先の親方から大見習いに誘われている。
			【職歴】			大学中退(新聞奨学生を経験)→アポイントセールス会社・営業(アルバイト、3カ月)→ファーストフード店・弁当売りなどの短期のアルバイトを転々(3~4年)→飲食店・ウェイター(正社員、1年)→飲食店・ウェイター(正社員、2年)→レストラン・バーテンダー(正社員、3年)→ラウンジ・バーテンダー(正社員、5年)→失業給付受給→バー・バーテンダー(正社員、1カ月半)→コンビニ・店員(アルバイト、2年)+日雇い派遣(2年)、かけもち→日雇い派遣(4年)→引越し会社・現業(アルバイト、数カ月)+建築会社・大工見習い(アルバイト、数カ月)+日雇い派遣(数カ月)のかけもち、現在に至る								
東48	男	39	5人(義父、母、兄、弟、本人)	大変苦しかった	定時制高校中退	求職中	精神疾患(による退職経験2回あり)	単身	民間賃貸住宅	弟とのみ連絡あり	高校時代の友人/組合の仲間	個人加盟ユニオンとのつながり	社会保険・不明 生活保護受給中	個人タクシーの資格取得試験準備中。
			【職歴】			高校中退→家業手伝い(6カ月)→コンビニ・店長(準社員、数カ月)→家電量販店・販売等(アルバイトのちに正社員、4年)→電気工事業・自営(事業主、5年半)→時期運転手のアルバイトとかけもち→タクシー会社・運転手(正社員、6年)→治療のため無職/生活保護受給→家電量販店・販売(登録型派遣、数カ月)→ケーブルテレビ会社・営業(登録型派遣、数カ月)→現在、生活保護受給中/求職中+個人加盟ユニオン加入								
東49	女	26	3人(母、弟、本人)	普通	専門学校卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	親との連絡あり	いる	個人加盟ユニオンとのつながり/職場に労働組合を立ち上げ	—	結婚のための安定した収入もなく将来に不安がある。
			【職歴】			専門学校卒業(在学中、幼稚園・補助教諭(正職員、3年)→児童養護施設・保育士(正職員、3年)→ベビーシッター専門会社・ベビーシッター(正職員、3年半)、現在に至る)								
東50	女	37	4人(両親、妹、本人)	普通	大学院博士課程中退	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	ある	職場の同僚組合員	個人加盟ユニオンとのつながり/職場に労働組合を立ち上げ	—	自分は「どんなに大変でも一人の大人として自立して暮らしたい」
			【職歴】			大学院博士課程中退(途中、専門学校講師を経験)→専門学校・講師(アルバイト、7年)+情報通信会社・専門職(契約社員、7年)かけもち→情報通信会社・専門職(契約社員、2年半)、現在に至る								
東51	女	33	5人(両親、姉、妹、本人)	苦しかった	高卒	なし/病気治療中	貧血、自律神経失調症、パニック障害、逆流性食道炎など	単身	緊急一時保護施設	同棲をとがめられてから一切連絡不可	いない	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 健康保険未加入 国民年金加入・免除 生活保護受給中	体調を整えて医療事務などの仕事の再開を希望。
			【職歴】			高校卒業→スーパー・店員(準社員、1年)→病院・医療事務等(正職員、13年)→路上生活(半年、途中で日雇い派遣を経験)→現在、生活保護受給中(10カ月)/病気療養中								
東52	女	45	不明/児童養護施設と里親に育てられた	—	中卒	あり	—	単身	民間賃貸住宅	—	いない	支援団体とのつながり	雇用保険加入 国民健康保険加入・免除 国民年金加入・免除 生活保護受給中	派遣ではなく、保険のあるアルバイトに就けてひとまず安心。
			【職歴】			中学校卒業→気球メーカー・生産(正社員、6カ月)→喫茶店・店員(アルバイト、3カ月)→パン屋やファミレス・店員(アルバイト、1年)→喫茶店・店員(アルバイト、数カ月)→キャバレー・ホステス(アルバイト、5年)→無職・男性と同棲(13年)→電気機器メーカー・生産(登録型派遣、1カ月半)→電気機器メーカー・生産(登録型派遣、4カ月半)→自動車シートメーカー・生産(登録型派遣、半年)→電気機器メーカー・生産(登録型派遣、半年)→ガス機器メーカー・生産(登録型派遣、半年)→電気機器メーカー・生産(登録型派遣、2カ月)→自動車部品メーカー・生産(登録型派遣、1年)→トイレット用品メーカー・生産(登録型派遣、1カ月)→倉庫会社・ピッキング(登録型派遣、2カ月)→エレベーター・基盤メーカー・生産(登録型派遣、1年)→パネ製造会社・生産(登録型派遣、3カ月)→化粧品メーカー・生産(登録型派遣、1週間)→非鉄金属メーカー・生産(登録型派遣、6カ月)→緊急一時保護施設入所+生活保護受給開始(6カ月)→民間賃貸住宅入居+メーカー・生産(アルバイト、1カ月)/生活保護受給中								

注:表中の「-」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
東53	男	21	2人(母親、本人)/母病弱のため児童養護施設で育つ	-	高卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	母親がなくなった。父親が健在かどうかわからない	児童養護施設の職員と元入所者たちとの仲が良い	支援団体とのつながり/趣味仲間とのつながり	社会保険・不明生活保護受給中	新しいウェイターの仕事に期待と不安。
			【職歴】 高校卒業→航空機機内サービス会社・清掃(正社員、1年半)→新聞販売店・配達と勧誘(正社員、6カ月)→新聞販売店・配達と勧誘(正社員、2カ月)→緊急一時保護施設・自立支援センター(4カ月)→冷凍食品会社・運転(アルバイト、5カ月)→路上生活(2カ月)→無料低額宿泊所入所+生活保護受給(受給開始後)雑誌販売・販売(4カ月)→飲食店・ウェイター(アルバイト、2週間)/生活保護受給中											
東54	男	47	4人(両親、姉、本人)	-	専門学校卒	あり	メニエール病	単身	住み込み	家族、親戚縁者と連絡を取る勇気もない	-	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入 年金未加入	以前やっていたアパレル関係の仕事をめざして、就職活動は今も続けている。
			【職歴】 専門学校卒業→録音スタジオ・映写(アルバイト)、引越し運送会社・作業員(日雇い派遣)(あわせて1年)→カバン卸小売会社・販売(正社員、8年)→アパレル(アルバイト)、引越し運送会社など・作業員(日雇い派遣)(あわせて2年)→生活雑貨小売会社・販売(正社員、6年)→居酒屋・店員(正社員、1カ月)→引越し運送会社など・作業員(日雇い派遣、2年)→乳幼児用品小売会社・事務(契約社員、3年半)→引越し運送会社など・作業員(日雇い派遣、1年)→新聞販売店・新聞配達(アルバイト、1年半)→病気のため静養(3カ月)→新聞販売店・新聞配達(アルバイト、半年)→静養(1カ月)→日雇い派遣、路上雑誌販売など(3週間)→緊急一時保護センター(3週間)→自立支援センター(2カ月、途中で登録型派遣で働く)→緊急一時保護センター(2カ月)→自立支援センター(2カ月)→新聞販売店・新聞配達(アルバイト、1年)、現在に至る											
東55	男	27	5人(両親、兄弟2人、本人)/のち両親離婚	-	高卒	求職中	-	単身	ネットカフェや個室ビデオで寝泊まり	2005年から家族と連絡なし	-	-	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金・不明	住宅手当を申請中。普通の生活をしようと思っている。
			【職歴】 高校卒業→酒屋・店員(アルバイト6カ月、高校在学中より継続)→酒屋・店員(アルバイト、4カ月)+居酒屋・店員(アルバイト、4カ月)、かけもち→警備会社・警備(アルバイト、1年半)→警備会社・警備(契約社員、1年5カ月)→無業(6カ月)→レンタルビデオ店・店員(アルバイト、1年)→アルバイトやスロットで生活(約3年)→拘置所(2カ月)→更生保護施設(2カ月、印刷会社でのアルバイトを経験)→スロット生活→派遣村→生活保護受給(4カ月)→ホストクラブ・ホスト(アルバイト、3カ月)→スロット生活(20日)→建設業の飯場・建設土木作業員(日雇い、15日)→スロット生活(2カ月)、現在に至る											
東56	男	38	?人(両親、本人、きょうだいの有無は不明)	裕福ではない	高卒	求職中	よい	単身	緊急一時保護施設	暴力をふるった父/実家のローン返済にサラ金。10年以上連絡せず	ほとんどいない	-	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	製造業従業員・警備員を希望。
			【職歴】 高校卒業→化学製品メーカー・生産(正社員、5年)→無業(6カ月)→警備員・販売員・引越し作業手伝い・倉庫整理など(アルバイト、1年半)→警備会社・警備(正社員、4年)→野宿生活→建設業の飯場・建設土木作業員(日雇い、9年10カ月)→野宿生活(1カ月)→緊急一時保護センター(4日)、現在に至る											
東57	男	27	4人(両親、兄、本人)	-	高卒	求職中	-	単身	ネットカフェと路上での生活	父親は他界。母親と兄との関係が良くない	居候させてもらったりしている	-	雇用保険未加入 健康保険未加入 国民年金・滞納	サービス業と飲食関係の仕事をしたい。
			【職歴】 高校卒業→輸送機械メーカー・生産(正社員、3年1カ月)→失業(1カ月)→自動車メーカー・組立工(契約社員、10カ月)→居酒屋・店員(アルバイト、2カ月)→短期のアルバイトを転々(1年3カ月)→飲食店・店員(正社員、8カ月)→飲食店・店員(日雇い派遣、2週間)→ホストクラブ・ホスト(常用社員、1年10カ月)→日雇い仕事を転々(日雇い派遣、9カ月)→レジャー関連会社・調理(正社員、7カ月)→クラブ・店員(正社員、3カ月)→路上生活(1カ月)、現在に至る/臨時特例つなぎ資金貸付→住宅手当受給予定											
東58	男	38	?人(両親、本人、きょうだいの有無は不明)	ゆとりがあった	高卒	あり	吃音(言語障害の一つ)の障害手帳あり	単身	友人宅居候、路上生活	連絡はある(実家はいま生活保護受給)	居候させてくれる友人がいる	-	-	将来が心配。こういう時代だから期待はしないが、景気がよくなってほしい。
			【職歴】 高校卒業→自衛隊・自衛官(正社員、3カ月)→ホテル・従業員(正社員、3年弱)→ピンクサロン・店員(正社員、数カ月)→短期のアルバイトを転々(2年強)→短期の建設作業員を転々(日雇い、1年弱)→看板持ちなどのアルバイトや引越し手伝いなどの日雇い派遣を転々(半路上生活)(アルバイト・日雇い派遣14年強)、現在に至る											
大01	男	33	4人(両親、弟、本人)	苦しかった	高校1年中退	その他/臨時就労(臨時職員扱い)、求職活動も	-	単身	民間支援団体の借り上げアパート	母親が亡くなり、父親と弟とは十数年間連絡なし	親しい友人はいない	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 健康保険未加入 国民年金加入・滞納	できれば正社員で、長く働きたい。
			【職歴】 高校中退→電池メーカー・生産(アルバイト、2年)→アルバイトを転々(5年)→半導体メーカー・検査(登録型派遣、1年半)→半導体メーカー・生産(登録型派遣、1年)→住宅設備機器メーカー・生産(登録型派遣、8年)→失業手当受給→現在、民間支援団体の借り上げアパート入居中(臨時就労中)											
大02	男	41	5人(両親、兄弟2人、本人)	やや苦しかった	通信制高校2年中退	その他/臨時就労(臨時職員扱い)、求職活動も	高血圧	単身	民間支援団体の借り上げのアパート	両親とは連絡があるが、弟との関係は切れている	いる	支援団体とのつながり	雇用保険加入 国民健康保険加入 年金・不明	やや不安。職業資格を取り、正社員で働きたい。
			【職歴】 中学校卒業→繊維メーカー・生産(パート3カ月、正社員5年)→化学製品メーカー・生産(正社員3年、通信制高校に通りが中退)→土木会社・現業(正社員、4年)→運送会社・運転手(正社員、5年)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、6カ月)→釣り具メーカー・生産(登録型派遣、2年半)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、3年)→ガス器具メーカー・生産(登録型派遣、3カ月)→ゴム製品メーカー・検査(登録型派遣、6カ月)→自動車部品メーカー・検査(登録型派遣、6カ月)→自動車部品メーカー・生産(登録型派遣、1年2カ月)→引越会社・作業員(アルバイト、6カ月)→現在、民間支援団体の借り上げアパート入所中(臨時就労中)											

注:表中の「—」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり	
大03	男	30	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			4人(父親、継母、異母弟、本人)	大変苦しかった	高校1年中退	その他/基金訓練により職業訓練	不眠症	単身	民間支援団体の借上げアパート	音信不通	先輩がいる	支援団体とのつながり	
【職歴】			高校中退→新聞販売店新聞配達(アルバイト1年程度、途中で定時制高校に入学するも退学)→屋台ラーメン店・店員(アルバイト、数カ月)→野宿生活(1カ月)→建築会社・作業員(アルバイト、2年)→建築会社・作業員(アルバイト、3カ月)→裏カジノディーラー(アルバイト、1年半)→出会い系サイト運営会社・事務(アルバイト、2年)→出会い系サイト運営会社・事務(アルバイト、3カ月)→風俗店・店員(アルバイト、1年)→アルバイト式携帯電話販売(副業、1年)、かけもち→出会い系サイト運営会社・事務(アルバイト、1年弱)→日雇い派遣を転々(1年)→DVD制作会社・事務(アルバイト、1年8カ月)→風俗店・店員(正社員、6カ月)→配送助手・倉庫整理等の日雇い派遣を転々(10カ月)→現在、民間支援団体の借上げアパート入居中(入所後、臨時就労を経験→現在、基金訓練受講中)										
大04	男	27	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			3人(祖母、叔父、本人)	よかった	高卒	その他/臨時就労。職業訓練受講待ち	よい	単身	民間支援団体の借上げのアパート	母親と連絡している	会いたい恋人はいる	支援団体とのつながり	
【職歴】			高校卒業→劇場運営管理会社・大道具係(正社員、2年)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、2カ月)→運送会社・運転手(アルバイト、5カ月)→半導体メーカー・オペレーター(登録型派遣、2年)→半導体メーカー・オペレーター(登録型派遣、3年)→ホテル・フロント係(アルバイト、9カ月)→携帯電話修理会社・生産(登録型派遣、7日)→現在、民間支援団体の借上げアパート入居中(現在、臨時就労中→今後、職業訓練受講予定)										
大05	男	26	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			4人(両親、兄、本人)	普通	高卒	求職中	—	単身	アセスメント型の自立支援センター	つながりが無い	友達はあるが、今は連絡をしない	—	
【職歴】			高校卒業→製造業・生産(常用型派遣、3年、派遣先はひとつ)→製造業・ピッキングおよび検査(常用型派遣、5年、この間に派遣先が2→3回替わった)→現在、アセスメント型の自立支援センター入居中(1カ月)→求職中										
大06	男	39	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			6人(両親、姉、弟2人、本人)	悪かった	高校3年中退	求職中	よい 虫歯で通院中	単身	アセスメント型の自立支援センター	両親と離縁兄弟との仲が良くない	いない	—	
【職歴】			高校中退→アルバイト(2年)→製造業の登録型派遣社員を転々(18年)。最長は自動車部品メーカー5年、他は2~3年同じ工場働いたが、この数年は1カ所あたりの勤務期間が短くなっていった→建設会社の飯場・建築土木作業員(日雇い、2カ月半)→野宿生活(3カ月)→無料低額宿泊所(5日間)→現在、アセスメント型の自立支援センター入居中(2週間)→求職中										
大07	男	22	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			2人(母親、本人)	—	高卒	求職中	—	単身	アセスメント型の自立支援センター	開わりがない	友人はいるが、あまり連絡をしない	—	
【職歴】			高校卒業→ファーストフード店・店員(アルバイト、半年)→居酒屋・店員(アルバイト、1年間)→倉庫会社等・運搬(日雇い派遣、数カ月)→事務機器メーカー・生産(登録型派遣、3カ月)→倉庫会社等・運搬(日雇い派遣、数カ月)→路上生活(7カ月)→土木会社・作業員(日雇い、数日)→無料低額宿泊所(5日間)→現在、アセスメント型の自立支援センター入居中(1カ月)→求職中										
大08	男	35	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			3人(母親、弟、本人)/15歳のときに両親が離婚	大変苦しかった	高校2年中退	求職中	軽度の障害がある(詳細不明)	単身	アセスメント型の自立支援センター	親・兄弟に落ち着いてから連絡を取りたい	相談できる友人・知人はいない/必要ないと思っている	—	
【職歴】			高校中退→レジャー関連会社・店員(アルバイト、数カ月)→建設会社・解体(正社員、9年)→建設会社・解体(正社員、2年)→建設会社・とび(正社員、1~2年)→建設会社・解体(正社員、10カ月)→飲食店、建築業等のアルバイトを転々(アルバイト、2~3年)→建設会社・作業員(アルバイト、2年)→清掃会社・清掃(登録型派遣、2カ月)→路上生活(3カ月)→現在、アセスメント型の自立支援センター入居中(1カ月弱)→求職中										
大09	男	39	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			?人(両親、本人、きょうだいの有無については不明)	ゆとりがあった	高卒	求職中	—	単身	アセスメント型の自立支援センター	長年連絡を取っていない	いない	—	
【職歴】			高校卒業→商社・物流(正社員、14年)→物流センター・現場管理者(登録型派遣、1年)→不動産会社・営業(正社員、4年)→ネットカフェ・野宿生活(1カ月)→現在、アセスメント型の自立支援センター入居中/求職中										
大10	男	37	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			3人(母親、姉、本人)父親は行方不明に	苦しかった	高校中退	求職中	よい	単身	アセスメント型の自立支援センター	家族との連絡が取れる/現状は報告していない	いる	—	
【職歴】			高校中退→印刷会社・印刷工(正社員、2年)→印刷会社・印刷工(正社員、1年)→自動車メーカー等製造業の登録型派遣を転々(10年)→建設会社、建設・土木作業員(日雇い、5年)→キャバクラ・店員(アルバイト、1年)→建設会社の飯場、建設・土木作業員(日雇い、4カ月)→飲食店等・店員(アルバイト、数カ月)→ネットカフェ・野宿生活→現在、アセスメント型の自立支援センター入居中(3カ月)→求職中										
大11	男	36	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】
			6人(両親、祖母、妹、本人)	—	専門学校卒業	求職中	椎間板ヘルニア	単身	アセスメント型の自立支援センター	父親死亡。母親は生活保護受給。妹と連絡を取っている	いない 友達に貸したお金が戻らず	—	
【職歴】			専門学校卒業→高齢者介護施設・介護(正職員・3年)+飲食店・店員(アルバイト・3年)→飲食店・調理(正社員・3年)→スーパー・店員(正社員・3年)→障害者介護施設・介護(アルバイトのちに正社員・2年半)→交通事故で3カ月治療→高齢者介護施設・介護(契約社員・3年)→野宿生活(3カ月)→現在、アセスメント型の自立支援センター入居中(1カ月弱)→求職中										

注:表中の「—」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
大12	男	42	8人(両親、きょうだい5人、本人)	普通	高校1年中退	求職中	よい 歯の治療中	単身/離婚 2人の子どもがいる	アセスメント型の自立支援センター	収入が原因で離婚。元妻と娘たちと連絡あり。子どもを支えたい	お金を貸してくれる友人や相談できる友人はいる	—	雇用保険未加入 健康保険・不明 年金・不明	早く仕事に就きたい。慣れている建設業の仕事がいい。
			【職歴】 高校中退→(親の経営する)建設会社・塗装工(家族従業者、数カ月)→建設会社・仮枠工(正社員、8年)→運送会社・配送(正社員、1年未満)→運送会社・配送(正社員、2年)→建設会社・鉄筋工(正社員、3年)→おしほり会社・営業および配送(正社員、1年未満)+パチンコ店・清掃(アルバイト、1年未満)、かけもち→建設業、建設土木作業員(日雇い、12年)→野宿(2週間)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(1カ月半)/求職中											
大13	男	39	3人(両親、本人)/中3のとき両親交通事故で死亡	普通	高卒	求職中	よい 歯の治療中	単身	アセスメント型の自立支援センター	両親が亡くなった	—	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	建設関係はもうやめにして、介護の仕事がしたい。
			【職歴】 高校卒業→建設会社・設計施行管理(正社員、18年)→建設会社・解体工(正社員、3年)→カプセルホテル(1カ月)→野宿生活(1カ月半)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(2カ月)/求職中											
大14	男	28	4人(母親、義父、弟、本人)/15歳、義父との対立から家出。祖母宅へ	—	定時制高校1年中退	求職中	十二指腸潰瘍発症	単身	アセスメント型の自立支援センター	家族と連絡を取っていない。家族にお金を貸したが戻ってこない	友人と自分に優しい年上の知人はいる	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金・不明	不安があるが、明確な目標を持っていない。介護の仕事をしたい。
			【職歴】 高校中退→ファーストフード店・販売(アルバイト、1年半)→パン製造会社・生産(アルバイト1年、正社員3年)→食品製造会社・販売(アルバイト半年、正社員1年半)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、3年)→工場・検査(登録型派遣、9カ月)→無職(2カ月)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(1カ月)/求職中											
大15	男	40	4人(母親、姉2人、本人)/両親離婚	大変苦しかった/生活保護	中卒	求職中	—	単身	アセスメント型の自立支援センター	両親は死亡。姉2人と15年会っていない	いない	—	雇用保険加入 健康保険未加入 年金未加入	やや不安。トラックの運転の仕事に戻りたい。
			【職歴】 中学校卒業→寿司屋・板前見習(正社員、4年)→自衛隊・隊員(正職員、6年)→建設会社・大工見習(アルバイト、3年)→運送会社・運転手(正社員、12年)→路上生活(4カ月)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(1カ月)/求職中											
大16	男	33	3人(母親、姉、本人)/両親離婚	やや苦しかった	高校中退	求職中	よい	単身	アセスメント型の自立支援センター	母親死亡、姉とは連絡なし	いない	—	雇用保険加入(失業手当受給予定) 健康保険未加入 年金未加入	不安がなく、なんとかなると考えている。
			【職歴】 高校中退→ガリンスタンド・店員(アルバイト、2年半)→マージャン店・店員(アルバイト、3年強)→農園・農業補助(家族従業者、9年)→医療器具メーカー・生産(登録型派遣、1年)→野宿(短期間)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(1カ月)/求職中											
大17	男	42	6人(祖父、祖母、叔父、叔母、兄と本人)/両親離婚いづれとも別居。	大変苦しかった	高校2年中退	求職中	—	単身	アセスメント型の自立支援センター	長年実家と連絡をせず。いざとなったら、兄は助けではくれたと思う	いる	—	雇用保険未加入 国民健康保険加入・親 族支払 年金未加入	自分でできる仕事を見つけていきたい。
			【職歴】 高校中退→スーパー・販売(正社員、2年)→レストラン・調理(正社員、2年)→レストラン・調理(正社員、2年)→レストラン・調理(正社員、2年半)→居酒屋・調理(アルバイト、1年)→弁当屋・販売(アルバイト、半年)→食肉メーカー・現業(アルバイト、1年)→トンカツ屋・調理(アルバイト、3カ月)→創作料理店・調理(アルバイト、半年)→無職(2年)→クリーニング店・店員(アルバイト、2年)→ファミレス・調理(アルバイト、1年)→海鮮丼店・店員(アルバイト、2年)+弁当屋・店員(アルバイト、2年)、かけもち→海鮮丼店・店員(アルバイト、4年)+ネットカフェ暮らし→建築会社の飯場・建設土木作業員(日雇い、1年)→野宿(1週間)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中/求職中											
大18	男	35	2人(父親、本人)/両親離婚	やや苦しかった	高卒	求職中	よい	単身	アセスメント型の自立支援センター	父親が亡くなり、母親と年一回連絡している	いない	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	将来に大きな不安を持っている。具体的な展望なし。
			【職歴】 高校卒業→遊園地・運営スタッフ(正社員、3年)→無職(2カ月)→運送会社・ピッキング(登録型派遣、9年)→交通事故の後2カ月無職→運送会社・ピッキングなど(登録型派遣、3年)→無職(1年7カ月、家具などを売って生活)→家を差し押さえられ退去→簡易宿所(数日)→野宿(8日)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中/求職中											
大19	男	40	4人(母親、姉、妹、本人)/両親離婚	普通	定時制高校卒/30歳で専門学校卒業	求職中	よい	単身	アセスメント型の自立支援センター	母親が亡くなった。刑余者なので姉妹と連絡をとらない	いない。借金問題で友達に裏切られた	—	雇用保険未加入 国民健康保険加入・滞 納 国民年金加入・滞納	服役したため、マイナスからの出発なので将来に強い不安。
			【職歴】 定時制高校入学・卒業+金属加工メーカー・生産(正社員4年、卒業と同時に退職)→設計会社・設計(正社員、1年)→製造業町工場・生産(正社員、6年)→化学薬品メーカー・生産(請負会社の正社員、1年半)→専門学校入学・卒業(2年)→産業機器メーカー・生産(登録型派遣、3年半)→釣り具メーカー・生産(登録型派遣、2年)→刑務所(1年半)→更生保護施設(2カ月)→ネットカフェ・路上生活→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(2週間)/求職中											

注:表中の「—」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
大20	男	43	4人(母親、祖父、本人)/両親は離婚	普通	専門学校1年で中退	求職中	よい	単身	アセスメント型の自立支援センター	ここ数年親と連絡を取っていない	相談できる友人・知人はいる	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	自営業をやりたい。職業資格を取りたい。
			【職歴】			専門学校中退→飲食店・ウェイター(アルバイト、2年)+警備会社・警備(アルバイト、2年)かめち→空調設備会社・現業(アルバイトのちに正社員、7年)→映画の自主制作(2年、この間は蓄えと警備員のアルバイトで生活)→自動車メーカー・生産(期間工、2年)→パチプロ生活(3年)→電子部品会社・組立(登録型派遣、3年)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、2年)→無職(1年)→自動車メーカー・生産(登録型派遣、1年半)→無職(8カ月)→土木建築会社の飯場・土木作業員(日雇い、3週間)→ネットカフェ等(数日)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(1カ月)/求職中								
大21	男	41	6人(両親、兄弟3人、本人)	ややゆとりがあった	高卒	求職中	よい	単身	アセスメント型の自立支援センター	姉とは電話するが、ほかの家族とは連絡なし	中学時代の友人は一人がいる	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	できれば派遣ではなく、正社員で働きたい。
			【職歴】			高校卒業→製菓会社(正社員、8年)→鮮魚取扱店(正社員、5年)→実家の農家手伝い(家族従事者、1年)→ビニール製造会社(正社員、5年)→実家の農家手伝い(家族従事者、2年)→自動車部品製造会社・生産(登録型派遣、3カ月)→自動車部品製造会社・生産(登録型派遣、6カ月)→自動車部品製造会社・生産(登録型派遣、3カ月)→自動車部品製造会社・生産(登録型派遣、6カ月)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中/求職中								
大22	男	44	7人(両親、5人兄弟)/高校生のころ両親が離婚	大変苦しかった	高卒	病気治療中/求職を希望	ヘルニア	単身	アセスメント型の自立支援センター	実家と約2年連絡していない	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 国民年金加入・滞納	ヘルニアの回復具合によっては、生活保護。就労意欲はあるが、いまは何も決められない。	
			【職歴】			高校卒業→引越専門会社・引越助手(正社員、1年)→新聞販売店・配達等(正社員、7年)→ドラマ作りサイクル会社・現業(正社員、1年)→パチンコ店・店員(正社員、4年)→新聞販売店・配達等(正社員、4年)→電気機器メーカー等製造業の登録型派遣を転々(4年)→パチンコ店・店員(アルバイト、2年)+新聞販売店・配達(アルバイト、2年)→入院・療養(数カ月)→パチンコ店・店員(アルバイト、5カ月)→新聞販売店・営業等(正社員、2カ月)→路上生活(2カ月)→無料低額宿泊所(1週間)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(2カ月)/病気療養中								
大23	男	44	5人(母親、義理の父、義理の妹と弟、本人)	大変苦しかった	高校1年中退	病気治療中	気胸による後遺症があり、今治療中	単身	アセスメント型の自立支援センター	養父と離れた。母親とは連絡を取っている。	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入 生活保護受給中	健康の問題と年齢の問題で強い不安を持っている。	
			【職歴】			高校中退→造園会社・庭師(正社員、7年)→個人経営の傘部品製造工場・生産(正社員、5年)→建築会社・工事施工(正社員、2年)→国民健康保険料滞納で差し押さえ・サラ金・大病/アパートから夜逃げ→中古パソコン取扱会社・修理販売(アルバイト、5年)→自動車メーカー・組立(登録型派遣、6カ月)→無職(3カ月)→船舶機器メーカー・住宅建材メーカー等製造業の登録型派遣を転々(7年)→建設会社・建設土木作業員(日雇い、6カ月)→無料低額宿泊所(2週間)→現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(4カ月)/病気療養中・生活保護申請中								
大24	男	39	3人(祖父、本人)/母親は再婚し近所に住んでいた	—	高校1年中退	その他/臨時就労(臨時職員扱い)、求職活動も	抑うつ傾向で、幻聴	単身	統合型の自立支援センター	母親と連絡を取っていない	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	前向きである。人材派遣会社を作りたい。	
			【職歴】			高校中退→建築会社・内装見習い(アルバイト、1年)→靴屋・店員(アルバイト、1年7カ月)→運送会社・運転手(1週間)→建築会社・内装手伝い(アルバイト、3年)→建築会社・内装の自営(事業主、9年)→廃業→自己破産→拘留所(3カ月)→入院(1カ月)→生活保護受給(1年)→刑務所(2年)→建築会社・内装手伝い(アルバイト、半年)→その後の仕事不明(2年半)→労役(3カ月)→現在、統合型の自立支援センター入所中(臨時就労中)								
大25	男	20	4人(両親、弟、本人)	やや苦しかった	高卒	あり	よい	単身	統合型の自立支援センター	両親と連絡を取っている	—	雇用保険未加入 健康保険・不明 年金・不明	やや不安がある。	
			【職歴】			高校卒業→製粉会社・生産(正社員、2カ月)→菓子メーカー・生産(アルバイト、10カ月)→電気機器製造会社・検査(登録型派遣、半年)→スーパー・店員(アルバイト、4~5カ月)→現在、自立支援センター入所中(2カ月)→(入所後)臨時就労1カ月を経てゴミ袋製造会社・生産(アルバイト、1カ月弱)								
大26	女	38	2人(父親、本人)/母親は医療ミスで死亡	普通	高卒	求職中	腎臓移植	単身	統合型の自立支援センター	父親と同居	仲のいい友人は多い	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	何とか仕事を見つけて、父親と新しい家で暮らしたい。
			【職歴】			高等専修学校卒業→縫製会社・生産(正社員、4年)→クリーニング会社、作業員(正社員、7年)→腎臓疾患のため退職(その後、人工透析・移植手術を受ける)→生活保護受給(約6年、この間土木会社で週1~2回程度体調の良いときにアルバイト)→生活保護廃止(腎臓移植終了後)→府営住宅強制撤去→現在、自立支援センター入所中(2カ月)/求職中								
大27	男	22	4人(両親、姉、本人)/21歳の時両親離婚	—	高卒	あり	—	単身	統合型の自立支援センター	両親の離婚に伴い同居を拒否される。母親と姉とは連絡あり	友人と連絡していない	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	月に16~17万円稼げればよい。正社員にこだわらない。
			【職歴】			高校卒業→無職(半年)→空調設備会社・現業(アルバイト、1年数カ月)→カラオケ店・店員(アルバイト、3カ月)→家族の「解散」/求職活動(4カ月)→現在、自立支援センター入所中→(入所後)ビニール製造会社・生産(パート)								
大28	男	42	11人(両親、きょうだい8人、本人)	かなり苦しかった	高校1年中退	その他/臨時就労(臨時職員扱い)、求職活動も	—	単身	統合型の自立支援センター	両親がなくなった。ひとつ上の姉と相談できる	—	雇用保険未加入 国民健康保険加入・免除 国民年金加入・免除	経験を生かした仕事を、早く見つけたい。	
			【職歴】			高校中退→食品加工会社・生産(アルバイト、1年)→アルバイトとサーフィンの繰り返し(12年、各種工場を20回近く転職)→土木会社・作業員(正社員、1年)→造園会社・造園師(正社員、2年半)→プラスチック製品製造会社・生産(アルバイト半年、正社員9年)→建設会社の飯場・建設作業員(日雇い、8カ月)→現在、自立支援センター入所中(現在、臨時就労中)								

注:表中の「-」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
大29	男	31	4人(母親、祖母、姉、本人)	苦しかった	高卒	あり	-	単身	統合型の自立支援センター	六年間家族と音信不通	友人はいるが、相談できるほどではない	-	雇用保険未加入 健康保険未加入 国民年金加入・滞納	飲食業が景気後退でもなくならないため、飲食業で経験を積んで生きたい。
			【職歴】			高校卒業→ソース製造会社・生産(正社員、1週間)→自動車部品販売会社・整備(正社員、1年半)→飲食店・店員など(アルバイト、数カ月)→パチンコ店・店員(アルバイト、5年)→自動車部品メーカー・生産(登録型派遣、4年半)→建築会社の飯場・建設作業員(日雇い、約半年)→現在、自立支援センター入所中(1カ月)→(入所後)飲食店・調理(アルバイト、1カ月)								
大30	男	29	5人(両親、姉、兄、本人)	-	高卒	その他/臨時就労(臨時職員扱い)、求職活動も	精神科クリニック通院	単身	統合型の自立支援センター	父親に家から追い出された	本音で語れる友人はいない	-	雇用保険未加入 健康保険・不明 年金・不明	将来に強い不安を感じる。
			【職歴】			高校卒業→アルミサッシ製造会社・生産(正社員、7カ月)→ゲームセンター・警備等のアルバイトを転々(4年)→メッキ会社等での生産職を転々(正社員、2年)→鉄工所・生産(正社員、2年)→メッキ会社・生産(正社員、数カ月)→現在、自立支援センター入所中(入所後7カ月)→(入所後)緊急雇用対策事業にて就労中(1カ月)								
大31	男	42	?人(両親、本人、兄弟の有無は不明)	やや苦しかった	高卒	その他/臨時就労(臨時職員扱い)、求職活動も	うつ病	単身/離婚したばかり	統合型の自立支援センター	母親とは連絡を取っていない。子どものために何かしてあげたい	-	-	雇用保険未加入 健康保険未加入 国民年金加入・滞納	不安がある。年齢で面接すら受けられないことが多い。
			【職歴】			高校卒業→ホテル・調理師見習(正社員、数カ月)→ホテル・調理師(正社員、15年)→給食会社・調理師(正社員、4年)→給食会社・配送(正社員、1年)→食品加工メーカー下請会社・配送(正社員、1年)→現在、自立支援センター入所中(1カ月、現在臨時就労中)								
大32	男	32	2人(母親、本人)/中学3年のとき両親離婚。兄は家を出た。	大変苦しかった	高卒	あり	よい	単身	統合型の自立支援センター	父親は死去。兄は行方不明。母親は寝たきりの病気で週4回会う	恋人がいる	-	雇用保険未加入 国民健康保険加入・滞納 国民年金加入・滞納	不安があるが、恋人の両親に認めてもらえるように頑張りたい。
			【職歴】			高校中退→電気機器メーカー・組立(アルバイト、数カ月)→定時制高校入学・卒業(4年)+解体会社・作業員(アルバイト、4年)→解体会社・作業員(アルバイト1年、在学中より継続)→母親の看病(2~3カ月)→建設会社・作業員(アルバイト、8年)→電気機器メーカー・生産(登録型派遣、2年8カ月)→電気機器メーカー・生産(登録型派遣、3カ月)→無職(3カ月)→現在、自立支援センター入所中(1カ月)→(入所後)中古パソコンリサイクル会社・現業(アルバイト、1カ月)								
大33	男	35	3人(養父母、本人)/実の両親は健在だったが別居。高3の後半6カ月のみ実の両親と暮らす。	普通	高卒	その他/臨時就労(臨時職員扱い)、求職活動も	よい 歯の治療中	単身	統合型の自立支援センター	実の父母はすでに死亡。養父母との関係は不明	-	-	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	強い不安があるが、自分の風俗の店を持ちたい。
			【職歴】			高校卒業→パチンコ店・店員(正社員、2年)→風俗店・店員(正社員、10年)→風俗店・店員(短期で転職を繰り返す)(正社員、2年)→窃盗で捕まる(期間不明)→製造会社や引越会社の登録型派遣を転々(3年)→強盗で捕まる(拘置所に4カ月)→更生保護施設(1週間)→現在、自立支援センター入所中(1カ月、現在臨時就労中)								
大34	男	25	4人(両親、妹、本人)/中卒時両親に勘当	普通	中卒	あり	-	単身	統合型の自立支援センター	家族と離縁した	-	-	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	まっとうな暮らしをしたいので、頑張りたい。
			【職歴】			中学校卒業→無職(4カ月)→運送会社・仕分け(アルバイト1年半、準社員半年)→レストラン・ホール接客(アルバイト、3年)→運送会社を中心に登録型派遣を転々(登録型派遣、4年)→無職(3カ月)→自立支援センター(4カ月)+(入所中)清掃会社・清掃(アルバイト、5カ月)→運送会社・運転助手(アルバイト、5カ月)→無職(2カ月)→現在、自立支援センター入所中(4カ月)→(入所後)清掃会社・清掃(アルバイト、数カ月)								
大35	男	35	3人(両親、本人)	豊かだった/高3の時父の会社の倒産で一転。貧困に	高校3年中退	その他/臨時就労(臨時職員扱い)、求職活動も	-	単身	統合型の自立支援センター	両親と連絡を取っている	相談できる先輩はいる	-	雇用保険未加入 国民健康保険未加入 国民年金加入・滞納	将来の見通しが厳しいと思っている。部屋が借りられる給料があればいい。
			【職歴】			高校中退→レンタルビデオ店・店員(アルバイト2カ月、正社員1年10カ月)→美容室・美容師見習(正社員、5年半)→刑務所(3年)→パチンコ店・店員(正社員、4年)→刑務所(2年弱)→無職(母親の生活保護費で暮らす、半年強)→現在、自立支援センター入所中(1カ月、現在臨時就労中)								
大36	男	31	5人(両親、弟、妹、本人)	苦しかった/父は「浪費癖」	高卒	その他/臨時就労(臨時職員扱い)、求職活動も	よい	単身	統合型の自立支援センター	弟と連絡。実家の状況を聞いている	友人とたまに連絡する	-	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	先行きが見えず、精神的には不安定。手に職を付け、正社員になりたい。
			【職歴】			高校卒業→石膏ボード製造会社・生産(正社員、3年半)→交通事故・リハビリ(3カ月)→無職(3カ月、失業手当受給)→新聞販売会社・新聞配達と集金(正社員、1年半)→無職(3カ月、失業手当受給)→電子機器メーカー・生産(登録型派遣、5年2カ月)→無職(1年2カ月)→3カ所の製造会社・生産(登録型派遣、9カ月)→ネットカフェ(1カ月)→野宿(2週間)→現在、自立支援センター入所中(1カ月弱、臨時就労中)								

注:表中の「—」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
大37	男	44	4人(両親、弟、本人)	苦しかった／父の暴力があった	高卒	求職中	ぎっくり腰の後遺症	単身	統合型の自立支援センター	両親はそれぞれ別の道へ、連絡をせず。息子と時々会う	友人と時々会う	—	雇用保険加入(失業手当受給満了) 健康保険未加入 年金・不明	40歳をこえたため、再就職ができるかどうかを心配。
			【職歴】 高等専修学校卒業→アルミ製品メーカー・生産(正社員、7年)→アルミ製品メーカー・生産(正社員、3年)→無職(失業手当受給)→アルミ製品メーカー・生産(正社員、数カ月)→運転手等のアルバイトを転々(自営業と合わせて9年)→中古車等取扱会社・自営(事業主、アルバイトと合わせて9年)→物流センター・梱包(登録型派遣、2年)→ペーキングメーカー・生産(登録型派遣、2年)→農業機械メーカー・生産(登録型派遣1年、契約社員2年)→車中生活(4カ月、失業手当受給)→現在、自立支援センター入所中(1カ月弱)／現在、臨時就労中											
大38	男	36	7人(両親、姉4人、本人)	普通	中卒	あり	—	単身	統合型の自立支援センター	両親が亡くなり、5年前から姉たちとの連絡を断った	遊び友だちはいる	—	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金・不明	やや不安。もっと稼げるところを探している。
			【職歴】 中学校卒業→建設会社・作業員(正社員、3社、計10年)→飲食店・接客(正社員、3社、計5年)→風俗店・店員(正社員、1年)→建設会社の飯場・建設作業員(日雇い、5年)→野宿生活(1カ月弱)→現在、自立支援センター入所中(入所後)交通広告会社・電車の広告吊り(アルバイト、1カ月)											
大39	女	24	4人(母親、兄2人、本人)/母子世帯	やや苦しかった	高校中退(2校)	あり	—	母子世帯/本人、子ども(2歳)	母子生活支援施設	母親とは良い関係だが、頼られることもある兄弟にも相談できる	相談相手: 中学時の友人、職場の友人、居住者仲間、保育士	職場の仲間とのつながり	雇用保険加入 健康保険未加入(医療扶助) 国民年金(生活保護による法定免除) 生活保護・児童扶養手当・児童手当	生活保護受給を辞めたい。しかし、子どもの病気などで働けないこともあるので、安心のため続けていきたい。
			【職歴】 キャバクラ・ホステス(アルバイト、1年<中学在学時>)→高校入学・中退(1年)→飲食店のアルバイトを転々(数カ月)→定時制高校入学・中退(1年)→電気機器修理会社・修理(登録型派遣、数カ月)→電気機器修理会社・修理(アルバイト、6カ月)→自動車内装整備会社・クリーニング(パート、1年未満)→焼肉店・店員(アルバイト、1年未満)、かけもち→電子機器メーカー・生産(登録型派遣、6カ月)→飲食店・ボーイ(アルバイト、6カ月)→飲食店・バーテンダー(正社員、1年)→結婚・出産・離婚→現在、母子生活支援施設入所中(1年)＋生活保護受給中(1年)→(入所後)パソコン入力、厨房、コールセンター等のアルバイトを転々→プラスチック製造・生産(アルバイト、6カ月)、現在に至る											
大40	女	20	6人(母親、姉兄4人、本人) 15歳時3人(母親と姉、本人)	やや苦しかった	定時制高校中退	あり	—	母子世帯/本人と子ども(2歳)	民間住宅	母親との関係は良好	いる	—	雇用保険未加入 健康保険未加入(医療扶助) 国民年金(生活保護による法定免除) 生活保護・児童扶養手当・児童手当	介護福祉士の資格取得希望。正職員となり、生活保護受給をやめたい。
			【職歴】 高校中退→妊娠・出産→母子生活支援施設入所(2年)＋生活保護受給開始(現在も受給)→(入所後)介護ヘルパー資格取得講習(4カ月)→老人ホーム・ヘルパー(アルバイト、半年)→アール・監視員(アルバイト、1年)→飲食店・店員(アルバイト、10カ月)、民間賃貸住宅転居、現在に至る(引き続き生活保護受給中)											
大41	女	49	2人(両親、本人)	中学生の頃苦しかった／高3のとき父親の会社倒産	高卒＋夜間専門学校中退	求職中	よくない／糖摘手術/子宮筋腫既往歴/軽度のヘルニア	母子世帯/本人と子ども(8歳、6歳)その他、別居している子ども2人(25歳、18歳)	母子生活支援施設	両親は他界、兄弟とは疎遠	いる(悩んだときに友人と食事したりする)	—	雇用保険未加入 健康保険未加入(医療扶助) 国民年金(生活保護による法定免除) 生活保護・児童扶養手当・児童手当	子育てと仕事の両立、生活保護を終わりにしたい。しかし、体に不安あり、精神的に不安定な子ども(父親からのDVが原因)が心配。
			【職歴】 高校卒業→専門学校中退→デザイン事務所・デザイナー(正社員、1年)→スーパーマーケット・会計事務など(アルバイト、4年)→デザイン事務所・デザイナー(正社員、1年半)→電気機器メーカー・図面処理(登録型派遣、4年)→工務店・会計事務など3つのアルバイトの掛け持ち(8年)→テレホンポインター(アルバイト、2年)→母子生活支援施設入所＋生活保護受給開始(3年)、現在に至る→(入所後)ネット通販会社・入力事務(アルバイト、3カ月)→現在求職中											
大42	女	41	5人(両親、兄、弟、本人)	普通	短大卒	その他(病気療養中)	とても悪い／DVの後遺症によるうつ病/障害者手帳あり	母子世帯/本人、子ども3人(16、15、11歳)	民間賃貸住宅	両親は他界 実家の兄とは良好	一時保護所入所者などとのつながり。子どもを通じての地域の人のつながり	—	雇用保険未加入 健康保険未加入(医療扶助) 国民年金(生活保護による法定免除) 生活保護・児童扶養手当・児童手当	いつDV後遺症が再発するか不安。事務職の正社員を希望。元気だった頃の自分に戻りたい。
			【職歴】 短期大学卒業→レジャー産業会社・営業事務(正社員、1年)→母の看病(3年)→鉄鋼会社・経理(正社員、1年)→妊娠・出産・子育て(2年)→訪問販売会社・事務(正社員、半年)→ねずみ講(5年)→事務(正社員、1年)→靴下製造販売会社・営業事務(正社員、1年)→事務(派遣社員、1年半)→DVで緊急一時保護所→母子生活支援施設＋生活保護受給→タール会社・事務(正社員、4カ月)＋生活保護廃止→母子生活支援施設退所→現在、居宅にて生活保護受給中/病気療養中											
大43	女	33	—	普通	短大卒	あり	よい	母子世帯/本人と子ども2人(10、8歳)	持ち家	親とは良好。2世帯住宅の1階・2階にそれぞれが住んでいる	事情をわかってくれる友人・知人のみとのつきあい	—	雇用保険加入 国民健康保険加入 厚生年金加入	子どもたちの教育費が確保できる賃金。
			【職歴】 短期大学卒業→民間医療検査センター・検査技師(正職員、2年)→結婚・出産・育児(3年)→健診センター等・検査技師(登録型派遣、2年)→個人病院・検査技師(正職員、6年目)、現在に至る											

注:表中の「—」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
大44	女	39	4人(両親、弟、本人)	普通	短大卒	あり	よい	母子世帯/本人と子ども(10歳・知的障害児)	公営住宅	よい	相談できる友人・知人はいない。支援学校の保護者同士に強いネットワーク	—	雇用保険未加入 国民健康保険加入・滞納 国民年金加入・免除	子どもが作業所に通うようになれば、正社員になりたい。
			【職歴】			短期大学卒業→飲食店・接客(アルバイト1年、在学中より継続)→布団圧縮袋製造会社・事務(正社員、3年)→飲食店・接客(アルバイト、1年)→自動車メーカー・事務(アルバイト、2年)→親族経営の自動車販売会社・管理職(正社員、1年)→パン製造会社・事務(パートタイマー、5年)、現在に至る								
大45	女	31	4人(両親、妹、本人)	ややゆとりがあった	高校中退	あり	あまりよくない。甲状腺機能の既往歴。	母子世帯/本人と子ども(10歳・広域性発達障害・知的障害)	公営住宅	離婚した父親、母親とも絶縁状態	相談できる友人・知人あり。支援学校の保護者同士に強いネットワーク	—	雇用保険未加入 健康保険未加入(医療扶助あり) 国民年金加入・免除 生活保護・児童扶養手当・児童手当・特別児童扶養手当・障害児手当	介護福祉士の資格取得を希望。
			【職歴】			高校中退→一定時制高校入学・卒業→歯科医院・歯科助手(正職員、数カ月)→歯科医院・歯科助手(パート、1年)+スーパー・店員(アルバイト、1年)、かけもち→妊娠・出産・育児→生活保護受給(現在も受給中)→(受給開始後)バセドウ氏病発症・手術→訪問介護事業所・ヘルパー(登録ヘルパー・5カ月)+訪問介護事業所・ヘルパー(登録ヘルパー・5カ月)、かけもち→訪問介護事業所・ヘルパー(パート、2年)現在に至る								
大46	女	27	3人(両親、本人)	大変ゆとりがあった	高卒	あり	よい	母子世帯/本人、子ども(6歳)	親名義の持ち家	両親との関係は、離婚してから良好。子どものサポートも	—	—	雇用保険未加入 国民健康保険加入 国民年金加入・免除 児童扶養手当・児童手当	ケアマネジャーの資格をとりたい。再婚や出産はもうする気はない。
			【職歴】			高校卒業→喫茶店・接客(アルバイト6カ月、在学中より継続)→絵画販売会社・キャッチセールス(2カ月)→妊娠・出産・育児→緊急一時保護所(2週間)→同施設再入所(3カ月)→現在、母子生活支援施設入所中→(入所後)ホームヘルパー2級取得→デザイナーサービスセンター・ホームヘルパー(パート、4年9カ月)→母子生活支援施設退所→訪問ヘルパー(登録ヘルパー、5カ月)、現在に至る								
大47	男	23	4人(両親と兄、本人)	普通	大学卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	両親には着き3回会いに行く	友人、職場の同僚とも関係はよい	職場の同僚とのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入(親の扶養) 年金・不明	金銭面は苦しいが、「気持ち」は裕福。これからはお笑い芸人としてがんばる。
			【職歴】			大学卒業→芸能事務所・お笑い芸人(高校在学中より活動開始)+レジャー関連会社・添乗および物販(アルバイト、9カ月)、現在に至る								
大48	女	25	5人(両親、姉2人、本人)	不安定だったが苦しいと感じたことはない	専門学校卒	あり	よい	単身	民間賃貸住宅	両親、姉とも良好	友人との関係良好。職場の上司、先輩	職場の同僚とのつながり	雇用保険加入 勤務先健保加入 厚生年金加入	福祉職を続けていきたい。正社員になることと安定した生活を望む。
			【職歴】			専門学校卒業→社会福祉法人・福祉(契約職員、4年7カ月)、現在に至る								
大49	男	26	5人(両親、兄弟2人、本人)	良好	高卒	あり	軽い精神的ストレス/腰痛	単身	民間賃貸住宅	両親との関係は良好	知人・友人多い	支援団体とのつながり	雇用保険加入 勤務先健保加入 厚生年金加入	社会運動活動と今の仕事の両立、および将来設計をどう描くか、不安。
			【職歴】			高校卒業→飲食店・接客やコンビニ・レジ打ちなどのアルバイトを転々(1年)→建設会社・作業員(日雇い、2年)+アルバイト(2年)、かけもち→役所・地域就労支援事業相談員(嘱託職員、4年)→就労支援を行う社会的企業・就労支援指導(正社員、1年半)、現在に至る								
大50	女	30	4人(母、兄、姉、本人)	経済的に不自由はなかった	専門学校卒	あり	体調不良(仕事を大幅に減らす)	配偶者と2人の世帯	民間賃貸住宅	良好/近所に住む母、兄と月一回会う	いる	—	雇用保険加入 勤務先健保加入 厚生年金加入	夫の収入と合わせて250万円程度で子どもをもつことに不安。正社員か派遣を希望。
			【職歴】			専門学校卒業→書店・店員(アルバイト半年、専門学校在学中より継続)→ドラッグストア・店員(アルバイト、1年)→無職(2カ月)→調剤薬局・店員(アルバイト、2年)→学習机販売会社・事務(登録型派遣、3年)→院内薬局・現業(正社員、半年)→調剤薬局・事務(パート、2年)、現在に至る								
大51	男	22	4人(両親、妹、本人)/両親はその後離婚	大変苦しかった	工業高校中退	あり	よい	母親と2人	民間借家(一戸建、母と同居)	良好/母、妹、母の恋人	いる/恋人、地元友人、知人、職場の上司・同僚	職場の同僚とのつながり	雇用保険加入 勤務先健保加入 厚生年金加入	年収150万円程度で将来に不安。介護福祉士の資格取得し、正社員を希望。
			【職歴】			高校中退→スーパー・鮮魚取扱(アルバイトのちにパート、2年)→ホームヘルパー2級取得(2カ月)→求職活動(8カ月)→社会福祉法人・介護(契約職員、3年10カ月)、現在に至る								
大52	女	26	5人(両親、弟、妹、本人)	普通	専門学校卒	あり	糖尿病	単身	民間賃貸住宅	両親とメールで頻繁に連絡している	いる	—	雇用保険加入 勤務先健保加入 厚生年金加入	給料が少なく生活に不安がある。正社員になりたい。
			【職歴】			専門学校卒業→社会福祉法人・福祉(契約職員、3年8カ月)、現在に至る								

注:表中の「-」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいとのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
大53	男	33	3人(両親、本人)	結構ゆとりがあった	大学2年中退	あり	-	単身	社宅	両親との連絡はなし	いる	-	雇用保険加入 勤務先健保加入 厚生年金加入	今の介護職を続けたい。
			【職歴】	大学中退→宅配ピザ店・調理と宅配(アルバイト2年、在学期間を合わせて4年)→自動車部品製造会社・機械操作(登録型派遣、1年)→自動車部品製造会社・機械操作(登録型派遣、1年)→電気機器メーカー・生産(登録型派遣、1年)→物流倉庫会社・運搬(登録型派遣、半年)→自動車部品製造会社・生産(登録型派遣、3年)→オーストラリア語学留学(1年)→物流倉庫会社・運転(登録型派遣、2年)→社会福祉法人(特別養護老人ホーム)・介護職(契約社員、8カ月)、現在に至る										
大54	女	21	3人(父親、兄、本人)	普通	高校2年中退	あり	-	夫、子ども(1歳)と本人	公営住宅	両親・兄との仲はよい	いる	-	雇用保険未加入 配偶者健保被扶養者 厚生年金第3号被保険者	夫が希望退職したので将来に 対し不安、今の平穏な生活を 続けたい。
			【職歴】	高校中退→ファーストフード店・店員(アルバイト2年、高校在学中から継続)→接骨院・受付(アルバイト、1カ月)→妊娠・出産→ファーストフード店・店員(アルバイト、6カ月)、現在に至る										
大55	女	34	3人(両親、本人)	普通	専門学校卒業	あり	-	両親と本人	公営住宅	両親から援助を受けている	友人とのつながりをしっかり持っている	-	-	福祉関係の仕事で、契約社員からいずれば正社員になりたい。
			【職歴】	保育士専門学校卒業→知的障害児施設・福祉(契約職員、5年)→求職活動(8カ月)→特別養護老人ホーム・介護職(アルバイト、5カ月)→介護専門学校(1年、介護福祉士資格取得)→高齢者デイサービスセンター・介護(契約職員、7年)→求職期間(5カ月)→たこ焼き屋・店員(アルバイト、2カ月)、現在に至る										
大56	男	35	4人(両親、弟、本人)	普通	大卒	あり	-	単身	民間賃貸住宅	親との仲は やや良い	いる	-	雇用保険未加入 親の健保の被扶養者 年金未加入	やや不安だが、アルバイトと演劇活動の両方を続けていきたい。
			【職歴】	大学卒業→回転寿司店・店員(アルバイト、1年)→芸人養成学校(1年)+コンビニエンスストア・店員(アルバイト、1年)+家庭教師(アルバイト、1年)かけもち→コンビニエンスストア・店員(アルバイト、6年)+家庭教師(アルバイト、6年)かけもち→家庭教師(登録型派遣、2年)→学習塾・講師(アルバイト、2年)、現在に至る。ただし、芸人養成学校終了後、劇団で俳優活動を継続(10年)。										
大57	女	24	4人(両親、姉、本人)	普通	大卒	あり	-	両親と本人	親所有の持ち家	両親と関係はよい。家にも生活費を入れている	いる	-	雇用保険加入 勤務先健保加入 厚生年金加入	契約社員では不安だ。早く正社員になりたい。
			【職歴】	大学卒業→木材デック製造会社・営業事務(正社員、1年7カ月)→求職活動(4カ月)→社会福祉法人・事務(契約職員、8カ月)、現在に至る										
大58	女	46	5人(両親、弟2人、本人)	やや苦しかった	定時制高校中退	あり	持病の腰痛	母子家庭/本人と子ども(19, 11歳)	民間賃貸住宅	両親は死亡	いる	-	雇用保険未加入 健康保険未加入(医療扶助) 国民年金(法定免除) 生活保護受給中	多額の借金を抱え、かつ、給料が低いため、強い不安がある。
			【職歴】	中学校卒業→電気機器メーカー・生産(正社員2年、定時制高校入学・中退)→喫茶店・店員(アルバイト、数カ月)→魔法瓶メーカー・生産(正社員、2年)→アルバイトを転々(5年)→結婚・出産・育児・離婚(13年)→無職(6年、多重債務を抱える)→現在、乳酸飲料販売会社・販売(個人請負型の自営業、2年)+生活保護受給中(2カ月、多重債務の任意整理実施)										
名01	男	51	4人(母親、弟2人、本人)/母子世帯	大変苦しかった	高卒	求職中/しかし積極的に動けない	よくない/「医療券」により2回通院	単身	路上生活	両親は死亡。2人の弟とも音信不通	炊き出しでできた仲間、そしてNPOの関係者	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 医療保険加入免除(医療扶助) 国民年金加入・滞納(年金受給権はある)	生活保護を勧められるが拒否。派遣の仕事がしたい。
			【職歴】	高校卒業→木材会社・生産(正社員、25年)→電気機器メーカー組立(登録型派遣、1年)→製造業の登録型派遣を転々(5年)→路上生活(2年、途中で倉庫作業員等の短期アルバイトを経験)、現在に至る										
名02	男	46	?人(両親、本人、きょうだいの有無は不明)	普通	高卒	求職中/40歳を超えると派遣の仕事がない	よくない/高血圧	単身	緊急一時宿泊施設	親はなにがどうのさく言う	相談できる友人はいない。相談はNPOの人に	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 健康保険未加入 年金未加入	派遣労働はやりたくないが、正社員の仕事はない。生活保護受給を考えている。
			【職歴】	高校卒業→パン製造会社・生産(正社員、3年)→ミシン製造会社・販売(正社員、10カ月)→無業(3カ月)→食品製造販売会社3社・生産および販売(正社員、計14年)→以降、派遣会社13社で製造業の工場(24工場)を渡り歩く(登録型派遣、計10年)→路上生活(2カ月)→緊急一時保護施設(4カ月)→実家→現在、緊急一時保護施設入所中(2カ月)/求職中										
名03	男	47	4人(両親、妹、本人)	大変ゆとりがあった	高卒	求職中	よい「痛風かもしれない」	単身	民間賃貸住宅	両親は他界。実家にいる妹とは、関係性は良好	昔のバチンコ兄弟分。相談はNPOの人たち	支援団体とのつながり	雇用保険未加入 国民健康保険加入・免除 年金未加入 生活保護受給中	いまの住宅から通える仕事がいい。
			【職歴】	高校卒業→露天商(3年、高校在学中より継続)→造園会社・造園師(正社員、7年)→土木建設業の飯場・建設土木作業員(日雇い、11年)→パチプロ(無職、5年)→倉庫会社、倉庫整理(登録型派遣、3年半)→現在、生活保護受給中/求職中(7カ月)										

注:表中の「-」は、ケースレポートならびにアンケート調査票に記述がなかったことを示す。

No	性別	年齢	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			家族構成	暮らし向き	学歴	仕事有無	健康状態	現在の世帯構成	住居	両親・きょうだいとのつながり	相談できる友人・知人	NPOや組合などとのつながり		社会保障へのアクセス
			【職歴】											
名04	男	36	【過去、とくに15歳頃の状況】			【経歴および現在の状況】							【将来展望】	
			4人(母、弟、祖母、本人)	大変苦しかった	専門学校中退	求職中	よい	単身	更生施設	家族とは疎遠	仕事を世話してくれた友人。同年代の友人に相談する	支援団体とのつながり		雇用保険未加入 健康保険未加入 国民年金加入・免除 生活保護受給中
【職歴】			高校卒業→専門学校中退→電気機器メーカー・生産(期間従業員、半年)→パチンコ店・店員(正社員、4年)→鉄鋼メーカー(構内請負)・間接業務(契約社員、3年弱)→建築業・建設土木作業員(日雇い、1年強)→路上生活(日雇い派遣・日雇い、1年)→土木建築業・作業員(アルバイト、2年)→路上生活(日雇い派遣・日雇い、2年)→自動車部品メーカー・生産(登録型派遣、4カ月)→路上生活(日雇い派遣・日雇い、数カ月)→自立支援センター/倉庫会社・仕分け(アルバイト、半年)→路上生活(雑業、1年)→建築業・建設土木作業員(日雇い、3カ月)→現在、更生施設入所中+生活保護受給中(2カ月)/求職中											

ケースレポート

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：31歳 ■現住所：東京都 ■出身地：新潟県 ■学歴：中学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：警備業、警備関係職、アルバイト ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：無料低額宿泊所（注）
- おおまかな職歴：中学校卒業 焼鳥屋・店員（アルバイト、1年） 鉄工所・生産（正社員、1年） 電気工事店・電気工（正社員、3年） 土木建築会社・作業員（正社員、2年） 警備会社・警備（アルバイト、1年） 更生保護施設 自動車部品メーカー・検査（登録型派遣、3年半） 鋳造会社・生産（登録型派遣、1年半） 短期の登録型派遣を転々（1年） 路上生活（途中で2回の入院を経験） 自立支援センター（2カ月） 無料低額宿泊所（数日） 警備会社・警備（アルバイト、6カ月） 現在、無料低額宿泊所入所/求職中

< 仕事に就くまで >

1978年、新潟県生まれ。

家族は、両親と妹、自分の4人であった。

父親はパチンコ店の店員だった。母親も仕事をしていたが、生活は大変苦しかった。

中学生の頃、学校にはほとんど通わなかった。学校に行くこと自体がいやで、仮病を使って休んでいた。学校には、信頼できる先生や友人はいなかった。

家にお金がなかったので、高校にいけなるとわかっていった。中学校からは就職先の紹介があったが、その時にはその仕事ができそうに思えなかったため、仕事に就かなかった。中学校を卒業してから就職先を探したが、出遅れてしまったために、いい就職先が見つからなかった。卒業から2カ月後の1993年5月、張り紙の求人広告を見て、近所の焼鳥屋でアルバイトとして働き始めた（15歳）。

24歳（2002年）の時に更生保護施設に入所するまでは、両親と実家で同居していた。

< 初職からの経験 >

初めてアルバイトとして仕事に就いた近所の焼鳥屋では、未成年であることから、店の営業時間である夜間には働けなかった。そこで、昼間1日4時間程度、店の掃除や片づけなどの仕事をしたが、あまりお金にならなかったため、1年ぐらいで辞めて、正社員の仕事を探した。

16歳（1994年）になって、鉄工所に正社員として就職した。力仕事であったが、仕事はきつくなかった。しかし、1年後、鉄工所の受注が減り生産量が減少したことから、余剰人員を削減するために新しく雇われた人から順に人員削減が行われ、解雇された。

17歳（1995年）からは、父親の知り合いの家族経営の電気工事店で、正社員として電気工事の仕事をした。工場などの新築や増築の際に、配線や機械設備への電力の引き込み線・配電盤などを設置する工事が主な仕事だった。しかし、3年が経った頃、社長が亡くなり後継者がいなかったため廃業となり、また他の社員も独立してしまったため、ここを退職した。

その後、しばらく親の世話になった後、21歳（1999年）の時には、地元の土木建築会社に正社員として就職した。その会社は、大手建設会社から仕事を請け負っていた。それは、建設現場の足場組みやその解体、そして後の片づけの業務であった。しかし、仕事の繁閑が大きく、1カ月に

1日も仕事がない月が3～4カ月続くこともあった。仕事のない時は、会社に籍をおいたまま、よそで違う仕事を探さないとやっていけない状況が何度もあり、これでは先の見通しが不安なので2年でこの仕事を辞めた。勤めていた当時、仕事がなく稼ぎのない時は親に世話になっていたが、親も「やっと見つかった職を簡単に辞めるわけにはいけない」という思いだったので、「辞めて他で働け」とは言わなかった。

23歳（2001年）になって、地元にある警備会社で警備の仕事（アルバイト）を見つけ、1年働いた。ここも、仕事の繁閑が大きく、収入も安定しなかったため辞めることにした。

なかなか安定した仕事が見つからないことに嫌気がさし、しばらく働かないでいた。それが原因で親とうまくいかなくなり、そうするとますます生活は大変になった。ついに自暴自棄になり、友人に誘われたこともあって、車上荒らしや賈銭泥棒を繰り返すようになってしまった。現行犯で逮捕され、親も家に置いてくれなくなったことから、更生保護施設に入ってしばらく過ごした。「その時以来、悪いことはしていない。それ以来こんなことは一度もやっていないので自分でも立ち直ったと思う」。しかし、逮捕歴ができたことで、地元で仕事を見つけることができなくなった。そのため、「早く家を出たい」、「派遣の仕事ですずっとやっていきたい」、「もう地元には帰りたくない」という思いが強くなり、県外で寮のついた会社の仕事を探すことにした。そして、地元のハローワークに行き、愛知県に本社のある派遣会社の新潟営業所が登録型派遣社員の募集をやっているのを見つけ、これに応募して愛知県の工場の仕事に就くことになった。

当時、24歳（2002年）であった。愛知県では、自動車部品をつくらしている会社で登録型派遣社員として、働くようになった。派遣会社は愛知県の大都市にある会社であった。この派遣会社は「行けば誰でも受け入れてくれる」ところだと聞いた。「一度ダメになっても、また仕事ができる」と思い、安心できた。派遣契約は半年ごとに更新を行い、この派遣会社で3年半働いた（28歳、2006年まで）。

この工場では、トランスミッションなど機械製品の再生品の目視検査の仕事をした。具体的には、一回組み立てられた製品をばらして、もう一度再利用できる良い部品（良品）とそうでない部品（不良品）を、外形の変形具合を目で確認したり寸法検査したりして仕分けする仕事であった。仕事は面白かったが、他の人から見れば、誰にでもできる仕事だと思われるような単純な仕事であった。単

純作業の繰り返しだったため本当に精神的に疲れる仕事であった。

仕事は1日8時間で、残業や夜勤のない職場であった。給料は寮費などを引かれて、手取りで月10万円を少し上回る程度だった。社会保険には、この派遣会社に登録するようになってから入った。この給与では生活には困らなかったが、貯金はできなかった。それは、給与から派遣会社によって引かれる金額がだんだん増えてきて、総支給額の半分以上が派遣会社によって引かれるようになったからであった。辞める直前には手取りの月収は5万円に満たない状況になっていた。この天引きの増加の理由を派遣会社に聞いても、会社側は「みんな同じように引いているんだ」と的を外した回答をするだけで、きちんと理由を説明してくれることはなかった。おまけに、残業や休日出勤もなく、最低レベルの生活だった。また、こうなった時に、寮をそれまでのところから安い寮へと移されることになった。しかし、派遣会社に「移るのはいやだ」と言ったら、「気に食わないのなら辞めてくれていい」と言われ、やむなく移ることにした。

28歳(2006年)の時、この派遣会社を辞めた。辞めるきっかけとなったのは、自動車部品工場の仕事から、時給単価の低い別の派遣先の仕事に変更されたためである。この派遣会社には、工場の仕事がない人のために本社に「待機寮」というのがあって、そこに移された。時給750円ぐらいで1日6,000~7,000円の仕事に派遣先が切り替えられ、手取りが著しく低下した。加えて、会社からも「それがいやだったら辞めていい」と言われたことも要因であった。

自動車部品工場で働く派遣社員には長く仕事をしていた人もいたが、派遣会社からは「新しく入ってきた人を優先したい」と言われた。また、会社は、半年働けば5万円の功労金を出すとも言っていた。それは、「長く働いた人にはただ単に辞めてくれと言うのではなく、長く働いてくれた人には感謝の気持ちを込めてお金を出すので、長い人は辞めてくれ」と言っていた。しかし、自分が辞めた時、功労金は出なかった。それは、半年という契約期間の区切りを少し超えた時に、あまりに手取りの給与が減少したので耐えられず契約途中で辞めることにしたからであった。「半年以上働いているんだから出るんじゃないか」と派遣会社に言ったが、派遣会社は、「半年の契約期間満了の区切りの時にしか出さない」と主張した。結局3年半も働いたのに、功労金は一銭も貰えなかった。

辞めた時に、社会保険に関することをいろいろ教えてもらおうと聞いたが、そういう「お金のことは最初に派遣登録と保険の加入手続きをした新潟営業所に言ってくれ」と言われた。しかし、この営業所は閉鎖していて、結局うやむやにされてしまった。

この派遣の仕事を辞めた後、両親に事情を説明して、いったん新潟県の実家に戻った。しばらく休んだ後、再度、派遣会社に登録し、仕事をするようになった。寮のある工場の仕事を見つけることができず、実家から通えるところにあった新潟県内の鋳物工場に派遣された。この仕事は結構きつい仕事だった。会社は100人以上の規模で、派遣社員は少なかった。生産工程によって仕事量にばらつきがあり、正社員は人員の必要な忙しい工程に移るようにして働いていた。しかし、派遣社員は単純な仕事しかできないので、臨機応変に工場内を異動することはできなかった。派遣先企業からは、仕事がない時は「1週間こなくてもいい」と

と言われる時もあった。また、派遣会社からは、仕事のない人には違う工場を紹介すると言われた。結局ここでは、1年半勤めて、2007年(29歳)に辞めた。

この派遣会社に登録していた時に稼いだお金は、仕事を辞めた後すべて使ってしまった。そのため親に叱られ、2カ月ほどの期間、仕事を真剣に探したが、なかなか安定した正社員の仕事は見つからず、結局また別の派遣会社に登録して仕事をするようになった(2007年8月の盆明けから1年間、29~30歳)。ここから派遣された派遣先会社の仕事には長期の仕事がなく、だいたい2カ月おきで仕事に慣れた頃に違う派遣先会社に変わらなければならなかった。

最初に派遣されたのは、宮城県の携帯電話の部品の組立工場で、すごく細かい部品を顕微鏡を使って扱う仕事をした。忙しい時だけ応援という感じだった。そのほか、自動車部品のバリ取りや寸法計測の仕事、ペットボトルに張られたラベルに傷がないかを検査する仕事などをした。ペットボトルのラベル検査は、24時間フル操業で、全員が派遣社員で、昼夜交替で12時間拘束され、とくに目が疲れる仕事だった。1年の間に全国あちらこちらの6カ所の工場に派遣された。この派遣会社から派遣された仕事はきついものばかりだったが、体力の続く限りやろうと考えていた。しかも、時給は他の派遣会社の仕事に比べて半分程度と安かった。「でも、お金の問題ではない。仕事をやらせてもらっているのだから、できるだけ続けよう」と考えて仕事をした。

しかし、翌2008年の夏(30歳) ちょうどお盆の前であったことから、派遣の仕事がなくなり、仕事が見つからなかった。また、仕事がないということは寝泊まりする寮もないということなので、野宿もした。そこで、多少のお金があったので、仕事を探しに東京に出ることにした。

東京に出てきてからも、路上生活をしながら、仕事を探したが、かえって体調を壊して路上生活から抜けられなくなった。その結果、2008年の8月末と秋に2回入院することになった。病気は、喘息とそれによる強度の発作である。

その後、いったん路上生活に戻ったが2008年11月頃、自力で緊急一時保護施設を訪ね、東京都の自立支援センターに入ることになった。そこでは2カ月滞りしたが、安定的な仕事が見つからずアパートも借りられなかったため、無料低額宿泊所に行くことにした。

2009年1月に、この支援施設の寮長から、就労自立の相談を通じて、体力の問題も考慮してもらい、警備会社のアルバイトの仕事を紹介され、寮付きの警備の仕事をした。この警備の仕事では、6カ月間に6カ所の現場を経験したが、いずれも新潟に比べると条件は悪かった。その時、「東京はこんな仕事しかないのかな」と思った。直近の仕事も単発の仕事が多く、週4~5日の勤務で、日曜日の他に平日でも休みがあった。残業もなかった。給与は安かったもので、それを理由に辞めていく人が多かった。会社にそれを言っても、話を聞いてくれなかった。結局、建築現場の警備の仕事を最後に6月に離職した。

2009年6月15日に東京都区内の区役所に行き、「仕事をする気があるので、民間の施設に入れてほしい」と申し出て、現在の無料低額宿泊所に入所した。

<現在の生活状況>

現在の生活は大変苦しいが、「働かないといけない」と

思っている。借金はない。

これまで、公共の職業紹介を利用してきたが、ハローワークには条件に合う仕事がなく、今は求人情報誌で仕事を探している。また、ジョブカフェにも行ったが、どの仕事も「経験者でないとダメ」という条件の仕事ばかりで、見つからなかった。

今も喘息を患っており、通院をしていて、時々発作もある。住居環境が変わると体が慣れるまでは発作が起こる。

相談できる友人・知人はいない。自分のことは、自分で考えるようにしている。いつもお金のない状態で帰郷していたこともあり、これ以上親の世話になるのも気が引けて、親の援助は受けられない。今は連絡を取っていない。

現在の無料低額宿泊所に来て、2カ月が経つが、仕事が見つからなければ出ていかなければならない。就職の面接に行ってもなかなか決まらないのが不安だと感じている。

結婚については興味がない。1日1日生きていくことで精いっぱいである。

< 今後の望みや不安 >

雇用保険制度、再就職支援、教育訓練制度、住宅支援、生活保障の充実を希望している。

自分の将来について、この先どうなるのかわからないという思いから、「強い不安がある」。またホームレスになるのではないかという不安がある。これまで派遣で仕事をしてきたので、今後も寮に入って、派遣の仕事が続けたい。だから、派遣労働の規制をされたら困ると考えている。政

治や社会への要望はとくにないが、労働組合には仕事のことなどについて相談してみたいと思う。

(注) 無料低額宿泊所

この施設は、社会福祉法第2条第3項において第2種社会福祉事業として規定されたものである。ここでは、「生計困難者のために、無料又は低額な料金で、簡易住宅を貸し付け、又は宿泊所その他の施設を利用させる事業」となっている。

野宿生活者など居住する場所を失い極めて生活に困窮している人たち、あるいはそこに至る直前にいる人々を対象に、彼らが一時的に入所し、社会復帰を目指して集団で生活する宿泊施設である。ここに入所後、それぞれの状況に応じて生活保護を受ける者もあれば、一定の収入を得る仕事を見つけてアパートなどの一般居宅に移る者もいる。入所者にはこの他、病院や介護施設から退所した生活保護受給者などもある。これらのことから、日本においては、居住場所の保障としてきわめて重要な機能をもっている。

しかし、この無料低額宿泊所の事業には、法による施設基準、人員基準そしてケア基準がなく、自治体への届出だけで簡単に参入できるために、宿泊所のもつ質はさまざまである。このことから、近年のマスコミ報道が「生活保護費をピンハネする貧困ビジネス」として取り上げた劣悪な施設が一部に存在すると言われている。

調査番号：東京2

調査日：8月20日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：39歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：佐賀県 ■ 学歴：中学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■ 現職：チラシ宅配業、ポスティング職、登録型派遣
- 直近の収入：勤労収入月4～5万円 / 生活保護受給 ■ 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身
- 住居：無料低額宿泊所
- おおまかな職歴：中学校卒業 職業訓練校（溶接免許取得、半年） 土木建築会社・左官工（アルバイト、1年） 土木建築会社・水道工（アルバイト、1カ月） 土木建築会社・型枠工（アルバイト、3～4カ月） ガス会社・現業（正社員、12年） 土木建築会社・鷹（日雇い、数日） 緊急一時保護施設（半年） 路上生活（3年） 自立支援センター（数カ月） 現在、無料低額宿泊所入所中 / 生活保護受給中（5年）（生活保護受給開始後）清掃会社・清掃（アルバイト、短期間） 清掃会社・清掃（登録型派遣、1年半） ポスティング会社・ポスティング（登録型派遣、2年半） 現在に至る

< 仕事に就くまで >

1970年、佐賀県生まれ。

家族構成は、両親と弟、自分の4人家族であった。

佐賀県に生まれたが、幼少の頃に父親が東京に仕事を見つけたので、一家で上京した。その後、自分と弟が喘息を罹ったので、神奈川県に引っ越しをした。

父親はパン製造会社に勤め、電話で注文を受け、社内の製造現場に生産量を指示する仕事をしてきた。母親は学校給食の仕事をしてきた。中学校2年生の頃、両親がどちら

も肺がんになって相次いで入院し、家庭の暮らし向きは「大変苦しくなった」。父親は、これが原因で46歳、自分が20歳（1990年）の時に亡くなった。当時は、団地住まいだった。

1985年、神奈川県公立中学校を卒業した。中学校では、授業内容は理解していたが、遅刻・欠席が多かった。信頼できる先生や友人はおらず、先生からは「おまえは生意気だ」と叱られたり、同級生とよく喧嘩をしていた。適切な進路指導も行われなかった。

高校受験に失敗しすごく落ち込んだが、「クヨクヨして

はダメだ」と思い、溶接の免許を取りたいと思った。その時、友人から「職業訓練校に行くと、溶接の免許が取れる」という話を聞き、母親に相談して職業訓練校に半年間通わせてもらい、アーク溶接とガス溶接の免許を取得した。しかし、溶接の技術を生かせる仕事は見つからず、訓練校の紹介で左官の仕事に就いた。

< 初職からの経験 >

15歳（1985年）左官のアルバイトの仕事に就き、ブロック積みや煉瓦積みを約1年間したが、アルバイトのままなので辞めた。

16歳から17歳（1986～1987年）にかけて、ハローワークの紹介で水道工事を1カ月行った後、コンクリート工事の仕事を3～4カ月した。型枠にコンクリートを流し込んで駐車場の敷地などをつくっていた。いずれもアルバイトであった。

18歳（1988年）で、ガス会社に正社員として就職し、プロパンガスのボンベの交換作業やボンベへのガスの充填の仕事を12年間続け、30歳（2000年）の時に退職した。

ガス会社を辞めたのは、他の社員ともめ事を起こしたからである。その原因は、もめ事の相手が、仕事の中で「筋道の通らないことをやっていて、それがあまりに目に余ったから」、それを注意したことにあつた。上司に「その人を取るのなら自分は辞める」と言い、結局自分が辞めることになった。ガス会社の給与は月により変動があつたが、平均月24～25万円程度であつた。

20歳（1990年）の時に父親が他界してからは、母親と弟の面倒をみるようになった。なお、その後、弟は独立して福岡県でホテルマンの仕事に就き、結婚してマンションを買って暮らすようになった。ガス会社を辞めた当時、神奈川県で母親と2人住まいであつたが、母親は福岡県に暮らす弟のもとに移り住むことを希望し、ちょうどその準備をしていた。当初は、この団地のアパートを引き払って、自分は1人暮らし用の安い民間アパートを借りる予定であつた。母親も保証人となってくれる予定であつた。しかし、会社を辞めてしまったために収入はなく離職時の貯金は15万円程度しか残っていなかった。そのため、家賃や敷金を払うためのお金がなく、アパートを借りることができなかった。仕方なく路上で暮らすようになった（30歳、2000年）。

路上で暮らしたのは1カ月足らずであつた。その後、東京都内に行けば日雇いの仕事を紹介してくれるという話を路上生活をして別の人から聞いたので、行ってみた。そこでは、日雇いの職の仕事を紹介され、やってみたが高いところに登ってみると足がすくんでしまった。自分が高所恐怖症だとわかって、すぐに自分から辞めさせてほしいと申し出た。その後、都内の緊急一時保護施設に半年間入所していた（31歳、2001年に退所）。

しかし、入所していた半年間の間にうまく仕事を見つることができず、その後路上生活となり、3年ほどはたまに日雇い仕事をしてなんとか切り抜けてきた。

34歳（2004年）になって、自立支援センターに入所したが、間もなくして自立支援センターが取り壊しになったため、無料低額宿泊所に移った。その後、生活保護の受給を開始し、現在まで5年間入所している。

無料低額宿泊所に入所後、まず、清掃請負会社にアルバ

イトのかたちで雇ってもらい学校のプール清掃の仕事に就いた。しかし、不注意で転倒し、ひじを怪我して仕事ができなくなった。

35歳（2005年）からはパチンコ屋の清掃を、1年半ぐらいい行った。しかし、パチンコ屋の清掃の仕事は登録型派遣だったので、正社員で行う方がコストが安いということで、派遣社員は全員解雇された。派遣会社は、次の仕事を見つけてくれると言つたが、結局見つけてくれなかつた。

その後、37歳（2007年）からは、無料低額宿泊所の前寮長に紹介してもらい、登録型派遣として広告のポスティングの仕事をするようになった。これは、現在も継続している。

< 現在の生活状況 >

今のポスティングの仕事は、派遣会社に登録し、そこから広告チラシの配布会社に派遣され、その配布作業をするものである。仕事は、シフト制で、配布会社から広告チラシを1枚5円の単価で買い取り、それを配布している。遠い地区に配布する場合は、朝8時に出発して配布エリア近くの営業所に行き、配布物を受け取り、配布作業をする。帰りは午後7時になることもある。近いところの配布だと11時に出て午後3時くらいに帰って来ることができる。このように、配布する場所はその都度異なる。1日の配布ノルマは400枚（1枚5円）で、1日の収入は2,000円（交通費は別支給）である。最近の勤務日数は20日程度なので、月の収入は平均4万円前後となる。

しかし、以前はもっと仕事があり、月6万円を超える収入があつた。それが、2009年2月から売上げの悪い営業所が統廃合され、仕事先が減つたことにもなって、仕事が急激に減っている。

今の生活は、この稼ぎと生活保護の受給で、なんとかやりくりしている。借金はないが、貯金もない。現在の健康状態は「すこぶるよい」。

母親が福岡の弟の家に移ってから、母親と弟とは連絡を取っている。母親は「元気になっているか？ たまには顔を見せてほしい」と言うが、「先立つものがない」ので、行くことができないでいる。弟は忙しいので、彼には相談はほとんどしない。母親や弟からの経済的援助も受けていない。

現在の仕事関係の友人にはいろいろ相談をする。同じ無料低額宿泊所にいる人とも話をするが、深い話はしない。

現在、結婚はする気はない。結婚するとどうしても相手に自分の価値観を押し付けることになり、それが嫌だと思つている。

< 本人の望みや不安 >

今のこの宿泊所での暮らしや仕事に、不安は抱いていない。

ただし、いい仕事があればよいと思うが、この不景気では難しいとも思っている。最低賃金など労働条件の引き上げ、教育訓練制度の充実を希望している。現在受けている生活保護については、現状のままでよいと考えている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：32歳 ■現住所：東京都 ■出身地：埼玉県 ■学歴：中学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：建設業、建設・土木関係職、雇用形態不明 ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：無料低額宿泊所
- おおまかな職歴：中学校卒業 土木建築会社・左官工見習い（正社員、半年） 短期のアルバイトを転々（2年） 土木建築会社・作業員（正社員、1年半～2年） 土木建築会社・作業員（4～5カ月） 水商売・店員（正社員、9年） 土木や警備の仕事を転々（2年） 社会福祉法人宿泊所（1カ月） 現在、無料低額宿泊所入所中（1週間）/求職中

< 仕事に就くまで >

1977年、埼玉県生まれ。

両親と兄と弟で埼玉県内で暮らしていたが、小学校3年生か4年生のころに親が離婚。10歳ほど年上の兄は別れた父親と一緒に暮らすことになり、自分と弟が母親と新しい父親と一緒に暮らすことになった。

新しい父親は建築関係で働き、最低限の金額を家に入れていたようだが、多くが酒代に消えてしまい、生活はとても苦しかった。母親もスナックなどで働いていたようだ。自宅は一軒屋だった。継父には警察沙汰になるトラブルが頻繁にあり、暴力を振るい家庭は荒れていた。継父に家にいることが知られないよう、電気を付けずろうそくで暮らしたりもした。

中学校時代は半年程度しか通学せず、「悪い仲間」と遊んでいた。結局助けてくれたのは友達で、「親はきれいごとを言うだけ。暴力を振るう継父から逃げるため、学校にかくまってもらったこともあった」。

< 初職からの経験 >

中学卒業時（15歳、1992年）に学校の紹介で都内の左官屋に就職した。正社員で、社会保険も完備されていた。しかし、同僚と一緒に暴走族に参加するようになり、半年後に会社を辞めた。それから2年間くらい定職に就かず、単発のアルバイトをしつたりして過ごした。

親から独立して生活したいと考え、18歳のときに自分で建築関係の仕事を見つけ、定職に就いた。19歳（1996年）のときに1歳年下の女性と「できちゃった結婚」をした。相手は裕福な家庭で、親がマンションも買ってくれた。しかし、2人の生活に対する相手の両親からの干渉を煩わしく感じてきた。「自分がいない昼間に親が来ては、妻に余計なことを吹き込んでいるような気がして」、子供が生まれてしばらくして自分から出て行き離婚した。「今考えると、自分のわがままだったと思う」。同社には1年半から2年ほど勤めたが、会社の経営状態が悪くなり、給料の遅配が起き、未払いのまま退職した。この後基礎工事の仕事にも就いたが、4、5カ月で仕事を辞めた。

20歳（1997年）から、都内で水商売（キャバクラ）の仕事に就き、29歳（2006年）まで続けた。キャバクラは3～4社経験し、それぞれの会社で何店舗か異動した。月給制だったが基本給付きの歩合制で、自分で国民健康保険に加入したが、国民年金には入らなかった。「(国民)年金は破たんするので、保険料をかけるだけ無駄だと思っていた」。

10代のときからそうだが、手取り収入が多い方がいいので、むしろ社会保険がない会社を選んだ。なお、水商売に従事していた期間は、キャバクラ勤務の傍ら個人でスカウトの仕事もして別収入を得ることもあった。

22歳（1999年）ごろには新しい女性と仲良くなり、同棲し始めた。24歳（2001年）のときに子供が生まれた。そのころ、母親は継父の暴力から逃げて一人で暮らしていたが、継父はときどき金をせびりに来ては騒いでいった。あるとき、「強い友達」にも来てもらい、継父を「ボコボコにしてやった」。それまで継父が恐ろしくて逃げ回っていたが、そのとき「乗り越えた気がする」。それから自分と「女」（内縁の妻）子供、自分の母親との4人の暮らしが始まった。だが、母親が、宗教のせいなのか精神的な問題のせいなのか分からなかったが、見えないものが見えるというような、おかしなことを言うようになり、自分はあまり家に寄りつかなくなっていった。すると、「女」は3歳になった子供を連れて出て行ってしまった。2日間ぐらいいは「帰ってきてくれ」と言ったが、「ま、いいか」と思い、それ以上は追いかけていなかった。子供には会いたいと思うけれど、「金はいらぬから、子供には絶対に会わぬ」という条件で別れたので、会うことはできない。6年間の同棲生活が終わり、母親と2人でしばらく暮らしていたが、入院していた弟が退院してきたので、母親を弟に任せて、家を出た。

29歳（2006年）のころ、水商売を辞めた。辞めた理由は「話したくない」。それまで生活していた場所から離れ、人間関係をすべて断ち切り、2年ほど土木や警備などの仕事を転々とした。就職の条件は、経験がなくてもできる仕事であることと、寮やアパートなど住むところが確保できることだけで、求人誌で決めた。ハローワークにも行ったことはあるが、経験がないとできないような仕事ばかりで、結局仕事を得ることはできなかった。そのころは、常に過去の問題から追われているような気がして、稼いだ金をほとんどすべて酒に充てていただけの、なげやりな生活を送っていた。だから、一社に何カ月勤めたのか、給料がいくらだったのかも覚えていない。友達や会社、「街金」などに借金はない。働き始めても、結局は同僚などとトラブルを起こしては退社を繰り返した。

2008年秋以降は仕事を見つけるのが大変になった。「周りの人も何十社面接を受けただけダメだったとか言っていたし、実際宿泊所にも若い人が増えている気がする」。ついに住宅付きの仕事が得られなくなり、頼れる家族や友達もいないので、2009年2月ごろに、東京都特別区の福祉事務所に相談に行った。最初のケースワーカーはまともに取り合ってくれなかったので、「死ぬか、悪いことをするしか

ないのか」と訴えたら、別のケースワーカーが対応してくれ、都内の別の特別区にある社会福祉法人の宿泊所への入所の手配をしてくれた。宿泊所には若い人も多くいて、20歳の元ホストもスーツを着てやってきた。「体の不自由な人とかにベッドを空けてあげよう」と思い、約1カ月で自主退寮した。しかし、出たあとは最悪だった。仕事はないし、頼れる友達はいなかった。知り合いの家に泊まらせてもらったり、街で声をかけた女性の家に転がり込んだりと、だらだらした暮らしを続けた。

<現在の暮らしぶり>

2009年8月、いよいよ住む場所がなくなり、同年2月のときとは別の特別区の福祉事務所に相談した。このときも2人目のケースワーカーが親身になって都内の無料低額宿泊所を手配してくれた。

宿泊所に来て今日で入所8日目になる。就職活動はこれからしたいと思っている。自分の今後について、『『パクられても何でもいい』というなげやりな自分と、『まだ若いからやり直せるかも』と前向きな自分が同居している。まじめに考えたときに不安が襲ってくる』。

親や兄弟、元妻子など親類との関係は一切途絶え、一人で宿泊所で暮らしている。実の父親とは離婚後も母親に内緒で会ったことが何度あったが、自分が20歳のときにガンで亡くなった。弟と母親とは5年前から連絡を取っていない。「母親は死んでいるかもしれない。弟もどこにいるのかわからない。兄も2人目の父（継父）も、生きているのかどうかもわからない。一家バラバラで頼るものが何もない』。

<仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見>

人間関係のトラブルで友達などもすべて失ってしまうと、

頼れるのは福祉しかない。思った以上に行政はやってくれるものだと実感している。要は対応する人次第だと思う。政治については、（選挙で）昔はどこに入れてくれと頼まれたりするぐらいで、何も考えなかった。でも、「追い込まれれば追い込まれるほど、政治の重要さを感じるようになっていく。政権が変わったから、（自分の今の環境も）変わることを期待している」。労働組合という言葉は、自分が働いてきた環境で聞いたことはなく、「給料の未払いがあったら、だれかに相談するより辞めてしまう」という考え方だった。

「役所（行政）は何でも、あれしてはだめ、これしてはだめと決めすぎるのは、人間を奴隷扱いするのと同じだと思う。もちろん人殺しや火付けなど道徳に反することは禁止すべきだけど」。

「家庭環境が厳しくてもまともに暮らしている人はいるし、貧しいのは本人の責任だと思う。しかし、政府には生きていけるだけの最低限を保障してもらいたい。とにかく住宅の確保が一番大事だと実感している」。

<将来の展望>

これまでの自分の職場は胡散臭いところばかりになってしまった。

「最近企業が雇用に関する助成金を得るために、採用したらすぐにいじめて追い出すというような悪質な会社が増えていのではないかと。しかし、早く働きたい」。

「今は人と接しない仕事がいい。でも、機械やコンピューター相手の仕事がしたいと思っても、経験や技能がないから無理。仕事上の作業などはこなせる方だと思っているが、人間関係をうまくやれる自信は全くない。とにかく今は精神的に最悪の状態。人と会うのがただただ、うっとうしい」。

調査番号：東京4

調査日：8月21日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：34歳 ■現住所：神奈川県 ■出身地：北海道 ■学歴：中学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：製造業、生産職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：緊急一時宿泊施設
- おおまかな職歴：中学校卒業 スーパー・店員（アルバイト、4年） 居酒屋・店員（アルバイト2年、正社員3年） 土木建築会社・作業員（日雇い、6年） 実家の資源回収会社・現業（家族従業者、2年） 自動車部品メーカー・生産（登録型派遣、2年） 路上生活（3カ月、途中で日雇い労働を経験） 拘置所（3カ月） 路上生活（2カ月） 現在、緊急一時宿泊施設入所中（2週間弱）/求職中

<仕事に就くまで>

1975年、北海道生まれ。

家族構成は祖母、両親、姉1人の5人暮らしであった。

祖母の代から近所の人々を対象に貸金業を営んでおり、父親もその事業を継いでいた。実家には借主が頻りに出入りしており、一般の家庭とは違う環境で育ったと思っている。親の貸金業は決して順調ではなかった。返済が滞る借

主も多く、「返す」「返さない」で四六時中もめていた。借主には近所の居酒屋・スナックの経営者などが多かった。酒癖の悪かった父親は酔っ払っては借主の店舗に行き、頻りにいざこざを起こした。何度も警察沙汰になったことがあった。

小学生のころには父親の指示で借金取りに行かされたこともしばしばあった。演出という意味合いもあったと思うが、ランドセルを背負って借主の店舗に行き、「お父さん

が『お金を返して』と言っている」などと言われた。一円もお金を返してもらえずに戻ると、「何で取ってこなかった」、「少しでもいいからもらってこい」などとよく怒られた。

中学校のころは結構“やんちゃ”をしていたために親にも迷惑をかけた。

<初職からの経験>

中学校にはろくに行っていなかったの、高校に行く気は一切なかった。中学校を卒業したらすぐ働こうと考えていた。中学生までは小遣いをもらっていなかった（必要なものは現物を買って与えられた）ので、自分で自由になるお金がほしかった。親が小さいころからお金でもめていたので、生活面でも親に頼りたくなかった。

1990年、15歳のころはバブル期で景気もよかったため、中学校卒でも就職口はいくらでもあった。15歳で最初に就いた仕事は実家近くにあるスーパーのアルバイトだった。食品課で鮮魚加工を担当した。入職の経緯は父親の親戚がスーパーの幹部であり、紹介を受けたことによる。職場へは実家から通っていた。この仕事を4年間続けた。次第に仕事を任されるようになり、店長からも信頼されていたと思う。仕事を任されるとうれしく、やりがいを持って働いた。

毎月身の回りの必要なものを買った後に残った金はほとんど親に渡していた。金額はこの当時月5万円程度だったが、後述の居酒屋勤務のころは給料が増えたこともあり、月々10~20万円程度を実家に入れていた。これは親への感謝の気持ちというよりも、いつもお金のことばかり口にして親を見て、不憫に思ったからである。「これで生活の足しにしてくれ」という感じで渡していた。

2年目からは、店長のすすめもあって、正社員登用の試験を受けるようになった。高校卒の場合には最初から正社員として採用されることが多かったが、中学校卒だったこともあり、正社員登用されるためには試験に合格する必要がある。3回ほど正社員登用の試験を受けたが、3回とも不合格となってしまった。その後仕事を続けても正社員になる見込みも立たなかったことから、だんだんとやる気を失い結局辞めてしまった。職場でも信頼されており、鮮魚の扱いに関しては自信があっただけにとっても残念だった。このころから学歴の壁を感じるようになった。

1994年、19歳のころからは実家近くの居酒屋でホール担当や調理助手をはじめた。最初はアルバイトであったが、後に正社員採用された。当該店舗は団体客が主で最大200人ほど収容可能な大型店であった。居酒屋は個人経営ではあったが、市内に複数の店舗を有していた。このころも実家に同居していたが、親のもめごとを見聞きするのが本当にいやで、家にもあまり帰っていなかった。居酒屋の仕事は夜の時間帯が中心なので、あまり家族と顔を合わせずにすむため、むしろ好都合だった。この居酒屋では5年ほど働いた。2年経過するころには、かなり仕事を任されるようになり、正社員として採用された。店長は複数の店舗を掛け持ちだったために、実際の店舗の切り盛りは料理長が行っていた。料理長の補佐として、学生バイトのシフトを組んだり、ホールを任されたりした。店舗の鍵も預かるまでになった。勤務は昼の仕込みからはじまり、営業時間が終わった後も、清掃や翌日の宴会準備などを行ったため、

自宅に帰るのは早朝6時ごろということも多かった。料理長よりもよく働いていたと思う。正社員になった当時の月収は26万円くらいあり、生活はとても安定していた。貯金もあったし、車も保有していた。

1995年、20歳のときに2歳年下の女性と結婚した。しかし妻の浮気が主な原因で22歳のとき離婚してしまった。子供はいなかった。「家族を養おうと一生懸命がんばっているのに、なんで報われないのか」と悲しくなり、離婚を決意した。

居酒屋で働き始めて6年目の1999年（24歳）のときに、居酒屋の経営が傾き、社長が夜逃げをしてしまったために倒産してしまった。給料の不払いなどがあって、同僚とともに裁判を起こした。不払い給料が支給されるまでに3カ月ほどかかった。しかし手にできたのは15万円だった。

入社当時には社会保険完備と聞かされていたが、実際には健康保険証も受け取っていなかった。雇用保険も入っているといわれていたが、いざ倒産したときには、夜逃げ同然だったこともあって、離職票などはもらえず、結局雇用保険にも加入していたのかどうかかわらず、失業手当も受給できなかった。

その後、6年ほどは全国各地をめぐって日雇い生活を送っていた。土木建築関係の仕事（道路の舗装、足場組立、生コン型枠など）が多かった。24歳になるまでずっと地元でいたことから、「ちょっと広い世界を見たい」と思ったことがきっかけで日雇い生活をはじめた。いろいろなところを旅しているような感じがとても楽しかった。日雇い生活でお金がある程度貯まると、自分で次に行きたいところを決めて全国をめぐった（47都道府県のうち45都道府県を回った）。このころはまだ景気が今ほど悪くなかったし、年齢が若かったこともあり仕事はいっぱいあった。行き先だけ決めて現地に入ってから手配師を探せばいくらでも仕事にありつけた。当時の日当は1日1万円が普通だったので、余裕があるとはいえなかったが、それほど生活に困ったこともなかった。

日雇い生活期間中はあまり悪い思い出はない。気のいい人が多かった。大阪府内の労働者が多い街での「路上青空カラオケ」は楽しい思い出のひとつである。公園をぶらぶらしていたら、知らないおばさんに「1曲歌っていきなさい」と声をかけられることもしばしばあった。そんなときは輪に入って一緒に歌った。

この当時は困っていると手助けをしてくれる人も多く、人の温かさを何度も感じた。特に思い出深いのは福岡県での経験である。駅前のまんが喫茶に泊まっていたところ、寝ている間に財布を盗まれたことがあった。店員に「お金を盗まれたので、どうすればよいか」と相談したところ、「今日から1週間仕事をして弁償しろ」といわれ、最初はもうなってしまうのかと不安であったが、実際には呼び込みのプラカード持ちの仕事を紹介され、1週間ほど日雇いで働いた。このときはまんが喫茶利用の借金返済分とは別に1日5,000円を受け取ることもでき、さらには食事までご馳走になった。

日雇い生活時代はドヤ住まいが中心であったが、まんが喫茶、ファミレス、サウナなども利用していた。本当にお金のないときには、路上で寝ることもあった。

いろいろな出会いがあり、当時は仲良くしていた人も多数いたが、仕事柄、その後の消息は不明になっている場合がほとんどである。お世話になった人々を思い出すことも

あるが、連絡を取りたいと思っても実際には不可能である。出会った人々は年配の人が多かった。

6年ほど日雇い生活を送ったが、体力の限界を感じるようになったために実家に戻った。

2005年(30歳)に実家に戻ってから2年ほど家業の手伝いをした。久しぶりに実家に戻ったところ、実家が建て替えられていた。実家が本来ある場所に行くと3階建ての立派な家が建っていた。近くの公衆電話から母親に電話をしたところ、「目の前にあるのが実家だ」といわれて驚いたことを覚えている。日雇い生活をしている間も親とはときどき連絡を取っていたが、新築の話は一切聞かされていなかった。

父親はその当時、貸金業を廃業し、ちり紙交換などの資源回収業をはじめていた。事業は順調だったようで、生活も安定していた。

実家では資源回収を手伝いながら、少し小遣いをもらっていた。平行して就職活動を行ったが地元では仕事はみつからなかった。

2007年(32歳)のころに登録型派遣の仕事を開始した。最初は岐阜県にある自動車部品メーカーに派遣された。この派遣先では解雇される2008年12月まで働いた。派遣先はタイヤ回りの部品を製造していた。同じ部署には正社員20人、派遣社員40人の合計60人ほどが働いていた。派遣社員40人のうち、10人は同じ会社から派遣されていたが、残りの30人は別の会社から派遣されていた。複数の会社から派遣されていたために、同じ仕事でも時給などに差があったようだが、あまり気にしないようにしていた。時給だけを基準にあちこち会社を移るとなると、人間関係を改めて作らなくてはいけなかったり、引越などの負担が大きいことがわかっていたのである。

工場は岐阜県内にあったが、寮は派遣会社所有のもので愛知県内にあった。工場までの送迎は運転手付きのバスなどが用意されていたわけではなかった。自分が運転手の役割をしていた(送迎に特化して仕事をしていただけではなく、送迎とは別に生産の仕事も、他の派遣社員と同じようにこなした)。朝5時に起きて、社有車を取りに寮から会社まで行き、寮に戻って10人ほどの派遣社員を乗せて岐阜の工場まで向かった。片道1時間半の道のりであった。送迎の手当は1日ガソリン代込みで往復1,000円しかもらっておらず、まったく割に合わなかったが、仲間のことを思い最後まで引き受けていた。

派遣を開始した当時の月収は多いときで税込み23万円ほどであった。寮費5万円と給料の前借分や社会保険料などが差し引かれ、手元には10万円ほど残った。失業への不安もあり、可能な限り貯金をした。しかし、リーマンショック以降は仕事が極端に減ったため、自宅待機ということも多く、給料も減ってしまった。一方で、寮費や社会保険料などは天引きされてしまうため、差し引き後の手取り額がほとんどない状態が続いた。食費などをまかなうために貯金もどんどん減ってしまった。

ついには2008年(33歳)12月末に解雇となった。12月25日に解雇を言い渡され、27日には退寮を強制された。

貯金も少なかった(11万円弱)ことから、父親に頼らざるを得ず、仕送りをお願いしようと連絡を取った。しかし、「酔っ払って1,000万円の連帯保証人になったあげく、逃げられてしまい、新たな借金を負ってしまった」といわれ、結局生活資金を工面してもらうことはできなかった。その

際、窮状を訴えているにもかかわらず、「実家がたいへんだから送金しろ」などといわれ、大喧嘩になった。そのため以後は一切連絡していない。姉にもお願いしたが、二人目の子供が生まれること、主人が定職に就いていないことからとても仕送りはできないと断られ、八方塞がりとなってしまった。

12月29日になって派遣村のことをニュースで聞きつけ、「派遣村ならなんとかしてくれるかもしれない」と思い、東京へ向かった。

派遣村に到着したところ、ものすごい数の人でごった返していた。まだそのときは10万円程度お金があったので、「自分よりひどい状態の人に譲ろう」と思い、派遣村を後にした。10万円を少しずつ切り崩して生活をしてきたが、食事代や宿泊費で、あっという間にお金はなくなってしまった。さらに、2009年1月10日ころ、都内の公園で寝ていたら、荷物とお金を盗まれて無一文になってしまった。

2009年(34歳)1月半ばから3月はじめまでは、都内で日雇いの仕事をみつけてしのいだ。しかし徐々に仕事も減り、仕事にありつける頻度が極端に低くなった。

3月に入ると、仕事が一切なくなり、またも無一文になってしまった。そこで、支援をしてもらおうといくつかの役所を回った。緊急一時宿泊施設への入所の申請や生活保護の申請をしたいと申し出たが、「満杯で順番待ち」「1カ月待ち」などといわれて、「ああ、もう駄目だ」と思った。どうしても腹が減ってしかたなく、半ばやけくそになって居酒屋で無銭飲食をしてしまった。そのときは「刑務所に入れば3食食べられるからそのほうが楽なのではないか」とまで思った。

逮捕された後、拘留所に移された。3月はじめに収容されてから、6月末に裁判で執行猶予になるまで3カ月半ほど入っていた。起訴猶予の判決が言い渡された後、拘留所で電車代を渡されて、法務省で今後の生活について相談するよう指示された。法務省まで移動し相談したところ、「本来は収監を終えた人々を収容してくれる施設に入所できるはずなのだが、現在は満員で入ることができない。都内のハローワークに行ってみて自分で仕事を探してほしい」といわれて、電車賃として1,000円を渡された。そこで、都内のハローワークを訪ねたが、ここでも、「自立支援センターやホームレス緊急一時宿泊施設は満員で入れない」といわれた。このときばかりは行政の無力さを強く感じた。

7月からは、しかたなく、都内の公園で路上生活を送っていた。この間もほとんど仕事を見つけることはできなかった。

8月に入ってまもなく手配師らしき人物から、神奈川県内で仕事があるから一緒に行こうと誘われて、やってきた。駅でしばらく待つように指示されて待っていたが、いつまでもその手配師らしき人物は現れることはなかった(東京からここまでの電車賃も手配師が出してくれたので、何らかの被害を受けたわけではなかった)。生活の手段もなく、しかたなしに、駅周辺でしばらく路上生活を送っていた。どうしようもなくなって、役所に行ったところ、路上生活者等の支援団体を紹介してもらった。8月10日に支援団体を訪問し、支援をってもらうこととなった。

< 現在の生活状況 >

現在は生活保護の申請をしながら、支援団体の緊急一時

宿泊施設に滞在させてもらっている。この支援団体には心から感謝している。手配師にはだまされたが、そのおかげで、この支援団体にたどり着くことができたと思っている。ある意味でその手配師は神様である。今までも厳しい状況におかれたことがあったが、そうしたときほどなるべくポジティブに考えるようにしてきた。人生を振り返るとまだ自分は運があるほうだと考えている。路上生活をしているときにも何人か亡くなる現場に立ち会ったことがあるが、自分はこうして生きている。

緊急一時宿泊施設とはいえ、住むところが確保できたことで、やっと就職活動も腰を落ち着けてはじめることができた（面談日当日は、居酒屋の採用面接に行く予定となっていた）。現在は住民票を移す手続きを行っている。一刻も早く就職したい。生活保護は受けるにしても一時的なものにしたいと考えている。ずるずると行政の世話になるつもりはない。

一般的にいえば、同じような年齢の人は多くが結婚し、子供もいる年齢である。自分も生活を立て直して、できればもう一度結婚したいと考えている。そのためにも、まず仕事をみつけないという思いを強く持っている。

< 本人の望みや不安 >

政治に訴えたいことがある。それは、今日この瞬間、生活に困窮し、ホームレス同然の状態におかれている人々を一刻も早く救ってほしいということである。各党のマニフェストを読んでも（面談日当日は衆議院選挙直前）、ホームレス同然の人々を具体的にどのように救うのか明確には書かれていないように思う。普通に生活をしている人々のことも重要なのはわかるが、自分たちのような者への支援も忘れないでほしい。

なにもずっと生活保護を受けさせてほしいとはいわない。働くことができる者はしっかり働くべきだと思うし、自分は就職に向けて今努力をしている。生活に困窮した場合に、再び就職するまでのほんの一時、生活保護などのようにハードルが高いものではなく、比較的容易に受けられる支援制度を早急に整備してほしい。

もしこの先就職がうまくいって生活が安定したら、今度は同じような境遇にいる弱い人をサポートするような場でボランティアをしたいと考えている。できればこの支援団体で活動したい。自分がしてもらった恩返しは、何らかの形で必ずしたい。

調査番号：東京5

調査日：8月21日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：27歳 ■現住所：神奈川県 ■出身地：北海道 ■学歴：大学卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：製造業、生産職、常用型派遣
- 直近の収入：勤労収入なし / 失業手当受給（月10万円）、つなぎとして生活保護を活用
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 釣り具メーカー・生産（常用型派遣、10カ月） 工作機械メーカー・生産（常用型派遣、9カ月） 重工業メーカー・生産（常用型派遣、数カ月 直接雇用嘱託社員、1年） 工作機械メーカー・生産（常用型派遣、1年） 自動車部品メーカー・生産（常用型派遣、1年） 一時的な生活保護受給を経て、現在失業手当受給中 / 求職中

< 仕事に就くまで >

1982年、北海道生まれ。

家族構成は両親および自分の3人家族。

2000年（18歳）、道内にある4年制の職業訓練大学校に入学。大学校は親の勧めがあったために進学を決めた。大学校では機械関係を中心に学んだ。職業訓練大学校であったことから、大学における教職課程のように、プラスアルファの授業を受ければ取れる資格はいくつかあったが、積極的に資格を取得しようとはしなかった（現在保有している資格は普通自動車免許とクレーン運転士の2種類）。

2003年（21歳）4月、4年生になってから就職活動を開始した。当時はいわゆる就職氷河期であり、また北海道という地域的な条件も加わって、就職環境は極めて悪かった。大学校が積極的に就職指導を行うことはなかった。地元北海道の求人が大学校に来るのは4年生の10月以降だと聞き、大学校からの紹介をあきらめ自力での就職を目指した。

同年7月に道内で開催された合同説明会に参加した。製造業派遣を主に行っている派遣会社のブースを訪問したことがきっかけで、合同説明会終了後すぐに同社の入社試験を受け、常用型派遣として採用されることが内定した。「1社内定をもらったのだからもういいや」と思い、それ以後は就職活動を行わなかった。漠然とものづくりの仕事をしたいたとは考えていたが、具体的に何を作りたいという考えは持っていなかった。当該派遣会社は工場への派遣が中心なので、大学校での経験が生かせると思い就職を決めた。就職先を派遣会社にするか普通の会社にするかということは意識したことはなかった。派遣社員だから将来が心配だとは考えたことはなかったし、両親を含めて誰からも派遣はやめたほうがいいというアドバイスを受けなかった。

大学校では生徒のほとんどが男子ということもあって、卒業まで異性の友人はいなかった。

なお、高校でも大学校でも奨学金を受けていた。

< 初職からの経験 >

2004年（22歳）4月から、上記の派遣会社の正社員（常用型派遣）として働き始めた。なお、当該派遣会社は吸収合併や分割によって途中で何度か社名変更を行っている。

同社に常用型派遣社員として採用された人々の学歴はバラバラであった。高校卒以上がほとんどであったが、専門学校卒や大学卒もかなりいた。学歴によって基本給が違うという説明を受けていたが、確かに最初に配属された工場では学歴ごとに時給が異なっていた（執筆者注：雇用形態は常用型派遣であるが、時給制を採用している会社であった様子）。

入社後、最初に配属された工場は東京都市部にある釣り具メーカーであった。マシンダイキャストとってアルミ合金の塊からリールの本体を削り出す作業に就いた。リールの形状によって加工時間に長短があるので一概にはいえないが、多い時で一日に約200個の削り出しを行った。ラインの流れ作業ではなく、いわゆるセルフ方式の作業だったが、作業はオートプログラミングであったため、アルミ塊を機械に設置してスタートボタンを押せば、後は自動で削り出し作業が進むので、誰でもできる作業であった。しかし、できあがった製品を検査するのに簡単な測定器具を使う必要があり、知識・経験を要した。測定具の扱いについては大学時代学んでいたため、その知識を生かすことができた。

工場は昼夜2交替制だったが、同じ派遣会社から派遣された労働者は日勤のみを担当した。朝8時30分に勤務を開始し、引継ぎ時間10分を含めて午後8時40分に終了した。工場は土日とも操業しており、勤務体制は4勤2休だった。同じ部署には約20人の労働者が勤務していた。正社員の仕事はパソコンによるデータ管理とトラブル対応が中心の監督業務のみだった。1人の正社員を除くすべての労働者が派遣社員であった。派遣社員は全員男性で、同じ派遣会社からは10人程度派遣されていた。残り10人は別の会社から派遣されていた。派遣社員の中で作業リーダーを選任して、簡単なトラブルは自分たちで解決するようになっていた。機械が故障するようなトラブルがあった場合にのみ正社員を電話で呼ぶ仕組みであった。労働条件は時給が1,000円で、月収は税込みで25～26万円、手取りで約20万円程度だった。

この会社には約10カ月在籍し、2005年1月に職場を移ることとなった。派遣元からは別の工場に移ってほしいとだけいわれたが、どうやら職場の人たちとうまくコミュニケーションをとることができなかったことに原因があるようだった。職場では積極的に自分からコミュニケーションをとるようなことはしていなかった。

2005年1月から、山梨県にある工作機械（フライス旋盤）を製造する工場に派遣された。検査や工具の扱いなど専門性を有する仕事であった。

会社の寮は工場から30分ほど離れた場所にあったが、送迎バスはなく、自分たちで自家用車などを利用して工場に通った。最初は自家用車を持っていなかったために、同僚の自家用車に同乗させてもらった。その後格安の中古車を購入して自分で運転して通勤するようになった。通勤にかかるガソリン代は支給されていた。労働条件は時給1,200円で、手取りは残業代込みで20万円程度だった。

この工場では9カ月間働き、2005年10月末ごろ派遣先が変わった。やはり、周りの人たちとうまくコミュニケー

ションが取れないことが派遣先が変わった理由であった。

2005年（23歳）11月からは神奈川県にある重工業メーカーに移った。この工場では測定器具を扱う仕事など専門性を有する仕事を行った。時給は1,200円で、手取りは残業代込みで月収22～23万円であった。

2006年（24歳）、配属後数カ月した段階で、重工業メーカーから派遣元会社に要請があり、直接雇用の嘱託社員に雇用身分が切り替わった。詳しい経過は聞いていないが、派遣元会社からの指示に従った。そのため、この段階でいったん派遣元会社を退職する形となった。1年ほど勤務したのち、2007年（25歳）に雇用契約期間満了で重工業メーカーを退職した。

その後、以前勤務していた派遣元会社と再度契約を結び直した。次の派遣先は建設機械メーカーであった。ここでは1年ほど勤務した。時給は1,200円で、手取りは月収18万円程度であった。

2008年（26歳）に神奈川県にある自動車メーカー系列の自動車部品メーカーに移った。自動車のドア周りのパッドやフロント部分などのゴム製品を製造する工場だった。ここでも1年ほど勤務した。仕事は誰でもできる簡単なもので、時給は1,000円だった。労働時間の変動がはげしく、夜勤と日勤では手当の額が違った。そのため、夜勤の多かった月は手取りで25万円ほどあったが、日勤ばかりで残業もなかった月は手取り月収が10万円程度にしかならなかった。

2009年（27歳）2月末に不況を理由に解雇を言い渡された。残っていた有給休暇を消化して、3月中ごろに退職となった（その後、当該派遣元会社は倒産）。解雇された時には特に退職金は支給されなかった（労働契約書で退職金は支給されないと明記されていた）。

5年間の派遣社員の経験を振り返ると、機械いじりやものづくりが好きのために仕事自体は苦にならなかった。派遣先が変更になったのは、多くの場合、人とのかかわりをうまく保つことができなかったためであった。職場では人間関係を作ることはほとんどしなかった。ほかの派遣社員は派遣社員同士で懇親を深めていたようだが、自分はその必要性をあまり感じなかった。今までに人間関係を作ればよかったと後悔したことも特にない。

派遣先の決定にあたって派遣社員のスキルアップは全く考慮されなかった。派遣先は大手メーカーかその系列会社であることから労働条件等は比較的恵まれていたが、次に派遣される職場が必ずしも前の職場よりも高いスキルが要求される仕事ではなかった。時給は仕事の難易度によって変動（測定具を使う仕事が多い場合には1,200円程度、単純作業の場合は1,000円程度）するので、必ずしも派遣先が変わるごとに順次時給が上昇したわけではない（1,000円 1,200円 1,200円 1,200円 1,000円）。また、残業時間の長短によって月収は大きく変わるために安定した生活は送れなかった。寮費はすべて5万円前後であった。

2009年3月半ばに解雇された時には貯金もほとんどなかったために（貯金がない理由は後述のとおり）、生活に困り親元に連絡したが、支援は受けられなかった。そのため、以前友人から「困った時に手助けをしてくれる団体がある」と聞いたのを思い出して、携帯電話のインターネット検索で支援団体を探した。その結果、コミュニティユニオンの存在を知り、電話連絡をした。事情を話したところ、当面の生活を維持するためには、「生活保護の申請をしてはど

うか」とのアドバイスを受け、住まいの近くにある生活困難者を支援する団体を紹介された。

すぐに支援団体とコンタクトが取れ、その当日相談に乗ってもらった。派遣期間を通じて雇用保険に加入していたため、雇用保険の受給権はあったが、失業手当の受給までには日数を要するため、先に生活保護の申請をしようということになった。支援団体の役員に付き添ってもらい、役所に生活保護の申請を行った。また、生活保護の申請と時を同じくして失業手当の受給手続も行った。退職理由は会社都合であったが、失業手当は待機期間や失業の認定日の関係で、受給は生活保護が先になり、4月はじめから生活保護の支給が開始された。その後4月後半になって失業手当の支給が開始された。現在は失業手当の支給開始に伴って生活保護は支給停止となっている。失業手当は9月末まで支給される予定である。

<現在の生活状況>

現在は失業手当を受給しながら求職活動を行っているが、思うように就職先が見つからない。ハローワークに加え、地域若者サポートステーション（厚生労働省による若者の職業的自立を支援する事業）でも求職活動を行っている。

SEなどコンピューター関係の資格を取得するために職業訓練を受けたいと思い、ハローワークで相談したが、窓口の担当者に「職業訓練を受けるなら、一生その仕事を続けるつもりで参加するよう」厳しく求められて躊躇してしまった。

今は失業手当を受給していることから、生活はなんとか維持できているため、少し時間をかけてでも、安定して働ける仕事を見つけない。今までは派遣会社が仕事を用意してくれていたため、仕事をどのように選べば良いかわからないというのが本音である。職種についてはいろいろと考えたが、人とのコミュニケーションが苦手なために、自分に向いているのはやはり製造の仕事であると感じている。

できれば正社員になりたいが、今まで正社員になったことがなく、今の雇用環境を考えると正社員になるのはかなり難しいと考えている。正社員になれば、わずらわしい人間関係が必要になるかもしれないが、そのことを差し引いても今後は正社員になりたいと考えている。

現在、解雇された派遣会社が借り上げていた寮に住んでいる。本来なら退職に伴ってその寮を出なくてはならないはずであったが、支援団体の役員が派遣会社や家主と掛け合ってくれた結果、家賃を自分で払えるなら引き続き居住していてもかまわないということになった。個人名義に変更済みである。

就職のほかにもうひとつ大きな問題を抱えている。それは多重債務の問題である。過去に訪問販売で悪徳業者の勧誘を断れず、一組100万円の羽根蒲団二組と20万円の浄水器を購入してしまった（派遣社員の時には派手な生活は一切送っていなかったが、この借金を抱えてしまったために貯金はほとんどなかった） unnecessaryなものだと思っても、セールスマンに強いいわれで断れなかったためである。たとえば、羽根蒲団の売り込みは夕方時間帯だった。当日は夜勤があったので、遅刻してしまうから早く帰ってほしいとセールスマンにお願いしてもなかなか帰ってもらえず、契

約をすれば帰ってもらえると思い、仕方なく契約をしてしまった。派遣社員であったころはまだ収入や貯金があったので、「契約してもなんとかなるかな」と軽い気持ちで考えてしまった。当時は誰も相談する相手がいなかったため、その後もずるずると購入を続けてしまった。親に相談しようという発想もなかった。

現在の借金額は300万円になる。これとは別に奨学金が150万円ほど残っている。これらの借金については、自己破産も選択肢に入れて現在司法書士と相談しているところである。

支援団体には生活保護の申請から生活の相談まであらゆる面で助けてもらっている。今までは相談相手がいなかったのたいへんありがたく感じている。

<本人の望みや不安>

今後の望みは、安定した生活を送ることである。そのためには、収入が安定している仕事を見つけないと考えている。

もうひとつ、人間関係を作り直したいという望みがある。今連絡を取り合っている唯一の友人は派遣社員時代からの付き合いであるが、お金でつながっているようなところがある。友人も同じような時期に派遣切りにあったので、お互いに生活は苦しいはずだが、メールや電話で連絡を取る時や会うたびに必ず借金を頼まれる。最近はかなり注意しているが、それでも頼まれると断れずに小額を貸してしまうこともある。今後はお金がからまない人付き合いをしたい。理想的には人とのつながりを1回すべてリセットして、もう一度ゼロから人間関係を構築できるようにしたい。

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：36歳 ■現住所：神奈川県 ■出身地：神奈川県 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：製造業、生産職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし/生活保護受給
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校卒業 電気機器メーカー・生産（アルバイト、1年） 電気機器メーカー・生産（契約社員、断続的に5年間） 電話会社・オペレーター（アルバイト、10カ月） 結婚・離婚 自動車部品メーカー・生産（登録型派遣、2カ月） 自動車部品メーカー・検査（登録型派遣、10カ月） ゲーム機器メーカー・生産（登録型派遣、1カ月） 自動車部品メーカー・生産（登録型派遣、4カ月） ガス給湯器メーカー・生産（登録型派遣、1カ半月） 自動車部品メーカー・検査（登録型派遣、4カ月） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、2週間） 緊急一時宿泊施設（2週間） 現在、生活保護受給中（受給開始後2カ月）/求職中

< 仕事に就くまで >

1973年、神奈川県生まれ。

家族構成は両親および自分の3人家族。

普通高校卒業後18歳のとき、1991年にIT系の専門学校に入学。当初はコンピューターテクノロジー科だったが、2年次にインストラクターを養成する学科に変更し、タッチタイピングやワープロ操作などを学んだ。IT系の専門学校を選んだのは、コンピューターの操作などが楽しいと思ったから。在学中にワープロ検定、秘書検定などを受けたが合格せず、資格などは取得していない。

< 初職からの経験 >

初職と最長職

20歳のとき（1993年）に同専門学校を卒業したが、インストラクター関係の仕事は見つからなかった。1年上の先輩たちの多くも、情報処理関係の企業に内定をもらったが自宅待機と言われ、本採用にならなかった。

結局、自宅近くにある大手総合電気機器メーカーの工場ですべてアルバイトとして働くことにした。工場の仕事を選んだ理由は特にはなかったが、「一人で黙々とする仕事が好きなというのがあって、たまたまそがそういう仕事だった」から。仕事には自宅から通い、1日8時間、週5日間働いた。収入は全く覚えていない。ここでのアルバイトは1年続けた。

その後、21歳（1994年）になってからコンピューター製品を製造する電気機器メーカーの工場に契約社員として勤務することにした。これはアルバイト雑誌が何かで見つけた仕事だった。仕事の内容は、クリーンルームで、顕微鏡を見ながらピンセットを使ってコンピューターのフロッピーディスク・ドライブの配線を検査するというもの。細かい仕事だったが、集中してコツコツ仕事をするのが好きなので楽しかった。給料は月給制で、社会保険等を引いた後の手取りで15～16万円ほどであった。職場には女性が多く、人間関係はよかった。

しかし、この仕事は2カ月で辞めてしまった。友人が住んでいるオーストラリアに遊びに行くためであった。この友人は小学校時代からの仲良しで、その後も手紙のやりとりなどをしていた。その家族はオーストラリアに移住し、1年の半分を日本で過ごし、残りの半分をオーストラリア

で過ごすという生活をしてきた。アルバイトなどでお金が貯まったので、友人の所に行くならいまいましかないと思い、2週間滞在した。

帰国後、同じコンピューター製品を製造する電気機器メーカーの工場と同じ検査の仕事をした。この仕事は2年契約で、契約延長はできないが、満期後一定期間（執筆者注：クーリングオフ期間。本人は1年と言っているが、実際は3カ月か）が経てば募集している限り5回までは採用してくれるという制度があった。そこで、契約終了後、他のアルバイトなどをして、一定期間経過後にまた同じ工場に戻るということを繰り返していた。最初は21歳のとき（1994年）4月に契約し、最後の契約が1997年4月から1999年3月までだから、途中別の仕事を挟みながら、のべ5年間この仕事を続けたことになる。したがって、この仕事が最長職である。何度もこの仕事に戻ってきたのは、「居心地がよかった」から。

26歳の（1999年）4月からは、神奈川県にある電話会社でアルバイトとして働き始めた。新聞の広告欄に載っていた仕事を母親が教えてくれて、「端末の操作ありみたいなのが書いてあったので（専門性が生かせると思い）」応募した。仕事の内容は、代理店からの問い合わせに対して、商品（各種割引制度）の内容について説明するオペレーターの仕事や端末の操作であった。また、次第に新人や派遣社員の指導も任されるようになった。収入は手取りで15～16万円。この会社は2000年1月まで勤めていたが、結婚するために退社した。

離婚、親子関係の悪化、住み込み派遣生活へ

結婚の相手はインターネットで知り合った三重県の男性であった。5年間の結婚生活中は専業主婦で、仕事はしていなかった。32歳の（2005年）4月に離婚して実家に戻ったが、それから母親との関係が悪化していった。父親が57～58歳の頃に勤めていた会社の社長との関係が悪かったために退職した。体調が悪かったということもあって仕事をしていなかったが、その頃から母親はうつ病になり、父親に対して暴力をふるうようになった。離婚後に帰宅してからは自分にも嫌がらせで鍵を閉めたり、暴力をふるったりするようになり、自分としても「さすがにバツイチで戻って来たので実家にはいられない」と思い、家を出ることを決意し、寮付きの仕事を探すため派遣会社に登録をした。

最初に、2005年4月から自動車部品工場に派遣されたが、

2カ月あまりで離職。その次は7月から実家近くの別の自動車部品工場に派遣され、翌年の5月まで10カ月間勤務した。仕事の内容は、カムシャフトという自動車部品を手に取り、回転させながら数秒のうちにキズがないかをチェックするというもので、2週間ほどで身につけることができた。目の前に部品がたまっており、検査が済んだものを別の台に乗せていく。作業が遅いと、目の前に部品がたまってしまふので、「ひたすら、やるしかない」状態にあった。3時間の残業を含めて1日11時間働き、休憩時間は、午前10時に10～15分、昼休み1時間、午後は3時に10～15分、残業があるときは5時から10分ほど入るだけであった。部品がどんどん流れてくるが、キズのある部品は1日のうちに多いときでも10個見つかるかどうかという程度であった。「やっぱり（座っていると）寝てしまう」からか、1日じゅう立ったまま作業をするという過酷な業務であった。しかも、1日2交替制で、1週間交替で夜勤もやっていた。さらに、4勤2休か5勤2休で、週末に休みが取れるのは2カ月に1回あるかないかという状態であった。そのため、収入は社会保険料や寮費などを引かれた後の手取り額は20万円ほどであり、これまでで最も高かった。同僚には男性が多かったが、「体調が悪くなって続けられないって辞め」ていった。結局、自分も体調を崩して離職せざるを得なくなった。

33歳の2006年5月に離職し、6月からはゲーム機器会社に派遣された。時給1,000円で、社会保険料や寮費を引かれると手取りで15～16万円程度であった。しかし、「無謀だったというか、やっぱり、交替勤務なんです。日勤夜勤の。ほとんど毎日残業があってさらに休日出勤があって。金曜日の夜勤は土曜日の朝まで仕事なんですけど、土曜日の休日出勤になると日曜日の朝まで出勤で、次に日勤だった場合は月曜日の朝から仕事。結構それが続いたっていうのがあって、ちょっと無理っていう感じで」1カ月で体調を崩してしまい、離職を余儀なくされ、派遣登録も解除してしまった。

派遣切りと住居喪失

しばらく求職活動をしたが見つからなかったため、別の派遣会社に登録し、34歳の2007年12月から自動車部品工場の子会社に勤め始めた。しかし、間もなく減産が始まり、1月には他の部署に移ったが、そこでも減産の影響で仕事がなくなり、2008年3月には派遣契約が切れたため失職してしまった。

35歳になった2008年5月には、同じ派遣会社から給湯器の部品を作る会社に派遣されたが、6月半ばには「減産で辞めてください」と言われて失職した。6月半ばから、自宅近くの自動車部品工場に派遣され、部品の検査の仕事をしたが、やはり減産のために10月半ばに「派遣切り」（派遣契約の中途解除）されてしまった。派遣会社からは「もう紹介する会社はない」と言われていたが、間もなく隣の市にある自動車メーカーの部品工場に派遣された。以前と同様に、部品にキズがないかを検査する仕事。3時間の残業で昼夜2交替制の厳しいものであった。体力的に厳しかったものの休日出勤は断っていたので仕事は続けられたかも知れないが、2週間の試用期間が終わる10月末には、本契約に至らず契約解除された。

これまでは、派遣先企業を辞めたり派遣契約が切れたりしても、すぐに次の仕事を紹介してもらえたが、今回は紹介する会社はないと言われてしまった。この間ずっと派遣会社の寮に住んでいたため、寮を出る必要があった。派遣

会社からは、すぐに出るのは無理だろうから、1カ月間は4万円の家賃を払えば寮に残ってもいいので、その間に独力で仕事を探そうに言われた。

11月末になっても仕事が見つからなかったため、実家に帰って求職活動を続けた。しかし、母親のうつ病が悪化し、更年期障害も加わって、自分に対する暴力や嫌がらせがひどくなってきたため、「精神的にこっちが潰されそう。自分より母親の方が性格って言うか、気が強いというか、怖い人で、最終的に殴られたり、蹴られたりするようになったので、あー、もう家にはいられない」と思い、家を出る決意をした。

携帯サイトで探した生活支援を行っているNPOに相談して、36歳の2009年6月半ばに家を出て隣の市にある緊急一時宿泊施設に入った。あわせて生活保護の受給手続きを行い、生活保護が受理されて7月からアパートでの生活が始まった。

派遣社員時代の生活水準

派遣会社に登録しているときは、契約満了や体調不良などで離職した場合、派遣会社の事務所に行って仕事があるかどうかを聞き、適当な仕事があれば派遣契約をしてもらうという形であった。登録型ではあるが、仕事がなくなってから次の派遣先が見つかるまでの間も、同じ派遣会社の寮に住んでいた。これまでは、派遣契約が切れても希望すればすぐに次の仕事が見つかったため、休職期間中に失業手当を受給したことはなかった。

収入は派遣先によって異なるが、社会保険や寮費などを引かれて、手取額は多いときで20万円、一般的には15～16万円程度であった。生活に困るというほどではないが、貯金は貯まらず、「何だかんだで結構赤字になっちゃう」という状況であった。「何でだろう。格別大きなモノを買ったとかじゃなくて、細かいモノを買ったりとか、遊びに行ったりとか。何だかんだ、お金がなくなってきちゃう。」

時間のあるときは、映画を見たり、音楽を聞いたりしている。そのほかにはアクセサリ作りの趣味があるが、現在は道具を友人に預けているので、作れない状態である。

<現在の求職活動>

派遣切りにあつてからもフリーペーパーで仕事を探し、ハローワークは利用していない。というのは、以前の住居の近くにあるハローワークしか知らず、現在の住居の近くにあるハローワークに行くのには交通費がかかるが、残っていた4～5万円で生活しなければならなかったため、出費を抑えようと思ったからである。

いろいろな仕事を見たが、飲食店のホールの仕事には就きたくないと思っている。かつて飲食店で働いたことはあるが、注文ミスなどで客とトラブルがあったときに緊張してしまい、どうすればいいのかわからなくなったという経験があるため、自分には向いていないと思っているからである。そこで、現在探している仕事は、専門学校で学んだことが生かせるパソコンのインストラクターの仕事、ヘルパーの仕事である。また、「裏方というか、黙々とやれる仕事があればいいな」と思い、清掃の仕事でもいいと考えている。

インストラクターの仕事は、書類を送るものの、書類選考で落ちてしまう。なかには資格を取りながらインストラクターの仕事ができるという求人情報もあるが、経験者が

優遇されるためか、採用には至らない。ヘルパーの仕事は、資格不問の求人があったが、場所が大都市圏の方でここからは遠かったので、通勤は難しく、寮も空いていないとあって、やはり書類だけで不採用となってしまった。

そのほか、動物が好きなのでペット・ショップの仕事ができればと思うが、時給800円と安いのは仕方がないとしても、たばこが吸えない職場なので応募していない。

現在も、生活保護を受けながら仕事を探しているが、やはり生活費に余裕はないので、ハローワークには通わず、フリーペーパーで探している。

< 家族等との人間関係 >

子どもの頃は両親の関係も、両親との関係も悪くなかった。特に、母親とは仲良し親子と言われるほど仲が良かった。父親は断熱材の販売業務の仕事をしており、「両親とも特に大きな喧嘩はなく、普通」の家族だった。「親子3人で一緒に食べに行ったり普通だった」が、「去年暮れに帰ってきてからは、もうひどい。母親の嫌がらせはすごくひどくて、こっちが黙ってるからどんどんエスカレートしちゃって、家のチェーン掛けられたり、もう（家には）いられないなって」思い、「母のことにしては距離を置かないと無理なんで、当分一緒には暮らせない」状態になってしまった。そのほかにも、「自分の部屋荒らされたりとか、鞆の中身出されたりとか、郵便物勝手に見られたりとか、結構ひどかった」。求職期間中に親から経済的に援助してもらうことはなく、むしろ母親は「おまえなんか金に貸さないよと言われてたり、おまえを養いたくないなんて言い出したり」した。母親は、近所の人とはうまくやっているの、一人でも何とかやっていけると思い、あまり心配はしていない。

派遣で働いているときには、仲が良かった人もいたが、つきあいがあるというほどでもなく、職場で世間話をする程度の仲だった。休日に職場の同僚と食事に行ったりすることもなかった。派遣会社の寮では、「10代の若い子が入ってきたこともありましたが、その子とは、ちょこちょこしゃべったりとかしていましたけど、別に深入りの話はし

なかったです。そういう程度の人間関係しかなかった。

現在、メールのやりとりがあるのは高校時代の友人や先輩など数名程度。いずれも（離婚や母親との関係、現在は失業して生活保護を受給しているという）状況を知っている。同級生だった友人とはたまに食事に行くこともある。その友人も会社が倒産し、親戚のおじさんの家に住みながら失業手当で生活し、現在は資格を取るためにパソコン教室に通っている。

役所の生活保護担当については特に困ったことはない。地域担当は、以前本来やってもらえるべき仕事をしっかりやってくれなかったということがあったため頼りにしていないが、最初に相談に乗ってくれた人とは関係もうまくいっており、話せば何とかしてくれると思っている。

< 今後の展望、政府に対する要望等 >

政治に対して期待することは特にはない。政治家が選挙公約を果たしているとは思えない。選挙に行っても無駄だから、友人に依頼されることはあるが、投票に行ったことはない。自動車メーカーで働いている頃（2005～2006年）は景気がいいことが実感できたが、2～3年前からは徐々に減産が始まり、工場で働く派遣社員も減ってしまった。テレビでは景気が回復しつつあるというが、そんなことは全く感じられない。首相やマスコミは「現状見てないからそういうふうに言ってるだけじゃないかなとかって思うんです。全然なんにも変わってない。どこが変わったの?」と思っている。

要望としては、「とにかく景気を回復させて欲しいです。ずっと生活保護を受けたいわけではないので、早く自立して、生活を安定させたいと考えている。本当は、日勤で週5日だけで生活できるような正社員の仕事があれば一番いい。「パートだったら何とかなると思うんですけど、正社員ってというのはなかなかないらしいけれど、景気が良くなれば正社員として仕事をしたいし、ある程度収入が得られるようになったら、いつか生活保護も終わりにしたい」と思っているが、いまは「正社員じゃなくてもいいんですよ。仕事があれば、自分にできるものであれば、仕事したいって感じです」。

調査番号：東京7

調査日：9月15日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：24歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：東京都 ■ 学歴：大学卒業 ■ 就労の有無：就労中
- 現職：新聞販売業、新聞配達、アルバイト ■ 直近の収入：月4万円 ■ 家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■ 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな経歴：大学卒業 神社・団体職員（正職員、3カ月） 事務職（アルバイト、4カ月） 出会い系サイト運営会社・データ入力等（アルバイト、4カ月） ネットカフェ・店員（登録型派遣、8カ月） ネットカフェ・店員（登録型派遣、6カ月）+新聞販売会社・新聞配達（アルバイト、6カ月）かけもち 新聞販売会社・新聞配達（アルバイト、2カ月）現在に至る

< 仕事に就くまで >

1985年、神奈川県生まれ。

父親は特別職の公務員（自衛官）を定年退職した後に民間企業に勤める会社員、母親はパートで働く兼業主婦であった。

趣味は演劇で、中学生時代から高校、大学まで演劇部に所属していた。高校は県立の総合学科に入学した。当時としては珍しい単位制の高校で、いろいろな科目が選択できて、「自分探し」ができる学科だった。その頃、古事記が好きで民俗学を勉強したかったので、東京にある大学の文系学部に入學した。大学には実家から通っていた。

4年生の時には建設会社に就職しようと就職活動をしたが、8月になっても内定がもらえず、学生時代に神主の資格を取っていたので、団体職員（神社の神主）の求人に応募し、採用された。

< 初職からの経験 >

就職後3カ月で離職し、実家に戻る

2007年3月（22歳）に大学を卒業し、4月から北海道にある勤務先（神社）に勤め始めた。勤務先には60歳代の責任者（宮司）と40歳代の副責任者（禰宜：ねぎ）しかおらず、自分は3人目の職員となった。住居は一般のアパートを借りて住んでいた。収入は手取りで18万円であったから、地元の銀行員の初任給よりも少し高い額で、北海道で一人暮らしをするには十分な額だったし、将来的にも十分な額が保障されていた。

仕事の内容は、施設（神社）の清掃や傷んだ箇所修理、団体が依頼を受けた行事（地鎮祭）の実施などであった。力仕事もあったが、それほどつらいものではなかった。しかし、あまり覚悟せずに団体職員となったため、「自分に納得がいかなかった」のに加え、演劇を続けたいという気持ちが強かったため、団体には申し訳ないと思ったが、3カ月後の7月に辞職した。

その後は実家に戻り、2007年8月から11月末までの4カ月間は、知り合いに紹介してもらった書類整理のアルバイトをした。短期のアルバイトにしたのは、12月の公演に出演しようと思っていたからである。

演劇と仕事の両立

出演しているのは小劇場で上演する芝居である。プロの役者になるつもりはなく、劇団に所属しているわけではなかった。小劇場の世界では、出演者の募集情報やオーディションの情報が人づてに流れてきて、公演に参加したければ応募し、合格すれば出演が決まる。出演が決まると1～2カ月ほど稽古をし、本番前には稽古がほぼ毎日になる。公演は週末3日間だけのこともあり、2週間ほど続く時もある。「別に後に残るものではありませんが、むしろそれが面白くて演劇をやっているとさえ言えます。舞台上の役者が観客と同じ空間のなかで演技をする感覚は生でしか味わえないもので、それが好きで芝居をやっています」。いずれにせよ、演劇をやりながら働くには、希望に応じて勤務時間を変更できたり、休んだりできるアルバイトや日雇い派遣しか選べなかった。

一人暮らしの開始

2008年2月（23歳）実家を出て東京都区部で一人暮らしを始めた。家を出たのは両親との不仲が原因だった。団体職員を辞めて実家に戻った際、今後の生活の仕方について両親とかなり言い争いになった。さらに、アルバイトをしながら演劇をするという生活が認められず、親との関係が悪化した。引っ越し費用を貯めてからとは思ったが、親か

ら小言を言われるのが耐えられず、消費者金融で30万円の借金をして引っ越した。

引っ越してからしばらくは、出会い系サイトの「サクラ」の仕事をしてきた。出会い系サイトは、出会いを求めて掲示板やメールでやりとりをするWebサイトであるが、掲示板の書き込みやメールへの返信が少ないと利用者が減ってしまうため、そのための要員がサイト運営会社に雇われている。これがサクラである。男性からのメールに対しては女性が返信するのが建前ではあるが、実際には雇われた男性が返信していることも少なくない。

この仕事はインターネットで見つけたもので、当初はデータ入力作業ということで始めたが、途中から「サクラ」の仕事をするよう求められた。時給が1,000円と比較的高く、24時間運営しているため勤務時間の融通も利き、メールに返信する人が少ない深夜や早朝は時給が1,200円とさらに高くなったため、演劇をやりながら働くには都合が良かった。1カ月の収入は通常でも額面で20万円程度、多い時には27万円にもなり、おかげで引っ越しの際の借金を返すことができた。しかし、女性という設定でメールを返信することが精神的に苦痛になり、6月にはこの仕事を辞めた。

ネットカフェでのアルバイト

2008年6月（23歳）から都内のネットカフェで働き始めた。これはインターネットの求人サイトで見つけた仕事で、求人情報には店舗名が書いてあり、アルバイトなどの直接雇用には思えたが、実際にはネットカフェを運営している派遣会社を通して間接的に雇用された（登録派遣の契約をした）職場の先輩によれば、2年くらい前（2006年）からそのような雇用形態になったという。店にいる正社員は店長ひとりだけで、店長は週に1～2回店に来るだけなので、基本的には派遣社員だけで営業していた。

勤務時間はシフト制が引かれていて、Aシフト（8時から14時まで）、B1シフト（12時から18時半まで）、Bサポート・シフト（13時から18時まで）、B2シフト（18時から23時15分）、Cシフト（22時45分から翌朝8時半）に分かれていた。ビジネス街に立地していたため、客層はほとんど会社員で、混雑する昼間の時間帯だけ2人体制となっていた。このうち、当初はAシフトで勤務した。ただし、2008年9月頃からは、B1シフトの要員が不足したため、AとB1を続けて（8時から18時半まで）勤務するようになった。

時給は800円から始まり、2回の昇給があったため850円まで上昇した。したがって、Aシフトだと日給は当初は額面で4,800円、最終的には5,100円、A、B1連続だと8,400円から8,925円になった。

店員は、昼間が学生中心で、深夜は「フリーター」が多かった。ほとんどが男性で、女性は2～3人だけだった。20歳代から30歳代が中心で、19歳が1人、40歳以上がいたかどうかは分からなかった。店長がいないことが多かったため、店員同士で話すことはよくあった。

仕事の内容は、接客、店内の清掃、飲み物や冷凍食品、菓子類、お手ふき等の補充および発注であった。店内の清掃は、顧客が帰った後の個室の清掃と1日1シフト1カ所を重点的におこなう清掃とがあった。

同年6月から、コンビニ店舗への日雇い派遣にも登録した。できれば、休みが取りやすいように、アルバイト先を分散しようと考えたからだった。しかし、ネットカフェの仕事が忙しくなったため利用しなかった。2009年2月頃か

らは、日雇い派遣の規制が強化されたためか、コンビニ派遣も1カ月単位になり、求人データも届かなくなったので、その後も利用していない。

さらに、2009年2月からは、知人の紹介で新聞配達の仕事も始めた。日曜日と休刊日を除く毎朝2時間、バイクで配達する仕事で、発行部数が少ない新聞だったため、配達範囲が広く配達件数の割に時間がかかる仕事だった。収入は1カ月4万円ほどである（現在も新聞配達を継続）。

2009年6月（24歳）ネットカフェの店長が代わり、それまでのゆるま湯的な運営から厳しく管理する方針を取ようになった。たとえば、個室の清掃では顧客の目の届かないところも清掃するよう求められた。このように、それまでのやり方をいちいちくつがえすような指示が続いたため、店員が次々と辞めていった。こうしたなか、演劇の関係で突然休む必要が出てきた際、以前であれば2週間前でも休みが取れたのに、新しい店長は休みを認めず、休みを取る場合は交代要員を見つけるよう命じられた。また、店長と店員との間で情報交換をするための「業務連絡ノート」で、自分のことを呼び捨てにしながら「掃除をちゃんとやれと言っただろう」といった強い調子で注意された。これは、前のシフトの担当者がやり残した仕事であり、言い掛かりとしか言い様のないものだった。どうやら、自分が店長の出店する時間帯に働いていたため、理由もなく攻撃の対象にされたようだった。このような店長の横暴な態度に耐えられず、7月に辞めることにした。

< 政党・労働組合への加入 >

2008年10月（23歳）ある政党に入党した。きっかけは、ネットカフェのアルバイトで2カ月間休みなしで働かされたことに対して疑問を持ったことだった。インターネットで非正規労働者の労働条件について調べたところ、アルバイトでも有給休暇が付与されることや社会保険に加入できることを知った。さらに調べていくとこの政党が労働問題に取り組んでいるのを知り、事務所を訪ねた。

政党での活動は、街頭でビラを配ったり、青年のミニ集会を企画し、実施したりしている。青年部は20歳代から30歳代が多く、学校の先生、漫画家、役者、普通の会社員、保育士など、いろいろな人が参加していて、楽しく活動に参加している。

2009年2月（23歳）には、その政党の紹介で、アルバイトや派遣でも、1人でも加入できる若者のための労働組合に加入した。団体交渉に同行したり、裁判を傍聴したりといった活動に参加している。

ネットカフェで仕事をしている頃は、同僚に休暇や社会保険、店長の横暴な態度がおかしいことを訴えて組合に勧誘したが、「加入は本当に困ったら考える」と言われてしまった。多くの人は現状がおかしいということを知っているが、今日、明日に解雇されるという状況に直面しない限り、それを変えようという思いには至らないと感じている。

組合は、スタッフが足りず忙しいので仕方ない面はあるが、組合専従職員には、もう少しゆっくり話をする機会を作って欲しいと感じている。

< 現在の生活 >

実家を出てから2年半が経過したが、この間は年末年始

も含めて一度も家に帰らず、両親と連絡を取ってもない。一人暮らしを始めた頃、実家から米が送られてきたことがあるが、そのまま送り返してから連絡が来なくなった。実家は、帰ろうと思えばすぐに帰れるし、通勤しようと思えば可能な場所だが、今のところ何とか生活できているので、戻るつもりはない。

7月にネットカフェを辞めた後は、新聞配達のみ継続している。「嫌なことがあってへこたれているというか、疲れてしまった」ため、10月の芝居が終わるまでは新たな仕事を探さずに、「爪に火を灯すように、節約して生活しようと思っている」。収入は減ったが、あまりお金を使う方ではないので、何とかなると思っている。しかし、1カ月の生活費は、1Kのアパートの家賃が54,000円、食費が1日2食に節約して3万円、携帯電話代が8,000円、国民健康保険料が7,800円、住民税が1カ月5,000～6,000円、組合費が約2,000円、交際費が約2万円で、合計約13万円になる。これに、芝居をする時に買い取るチケット代が4～5万円かかるので、衣服や日用品を節約しても1カ月18万円ほどはかかってしまう。よくよく考えると、あまりのんびりもしてられない。

< 今後の展望 >

将来については、歳を取るにつれてアルバイトでも条件を選ばなくなるし、正規の就職も難しくなっていくので、演劇を続けていくかどうかも含めて、どうすべきか非常に悩んでいる。

学生時代には別の政党の青年部で活動した経験があり、就職する際には議員秘書になることを考えたことがある。その後、その党の政策に反対だったため、この党を脱退した。現在は別の党で活動しており、最近では党の職員になれないかと考えることもある。ただし、そのことを誰かに相談したことはない。

< 政策的な要求 >

現在、派遣法改正により日雇い派遣や製造業派遣の原則禁止など規制強化の方向にむかっているのに対して、規制が強化されると仕事がなくなると言っている人もいるが、そんなことはないと思う。とはいえ、細かい法律の話は難しくよく分からない。いずれにせよ、派遣労働で働いてきた身としては、働き方がどう変わるのが心配である。

問題は派遣法だけでなく、労働法制全体を整備していく必要があると思う。また、法改正もさることながら、労働基準法がきちんと守られるように、労働監督行政を強化して欲しいと思っている。現在は、有給休暇があっても取得できず、残業も当たり前のように行われているが、休暇がきちんと取得でき、残業がなければ、自分のように演劇をやっている人でも正社員として働けるはずである。派遣やアルバイトなど、非正規で働いている人のなかには、正社員になったら拘束時間が増えて好きなことができないとか、過酷な労働に耐えなければならないなどと思っている人もいだろう。そこを変えていくことが重要だと思う。そのためには、政府に要望するというよりは、労働組合が強くなればいけないし、国民一人ひとりの活動が必要だと思う。

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：30歳 ■現住所：千葉県 ■出身地：千葉県 ■学歴：短期大学卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：製造業、事務職、登録型派遣 ■直近の収入：月20～25万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：短期大学卒業 情報処理サービス会社・事務（正社員、8カ月） 水産加工食品メーカー・事務（正社員、5年） IT商社・事務（登録型派遣、3年） 非鉄金属メーカー・事務（登録型派遣、1年半） 現在に至る（登録型派遣の仕事に就くようになってからはスーパーで試飲デモンストレーターのアルバイトをかけもち）

< 仕事に就くまで >

1979年、千葉県生まれ。

短大時代の一番の思い出は、天文同好会での活動だった。同じ系列の4年生大学があったため、男子大学生もいた。山に登って観測し、夜空を見ながら友人たちとおしゃべりをして楽しかった。高校時代は女子校だったので新鮮だった。

< 初職からの経験 >

短大卒業後、1999年4月、20歳のとき、都内にある情報処理サービス会社に正社員で入社した。短大に出ていた求人票を見て応募し、この会社に就職した。50人程度の規模の会社だった。業務内容は庶務で、具体的には代表電話の取り次ぎや文房具などの備品管理、コピーなどを担当していた。週休2日、1日の労働時間が7.5時間で、残業はほとんどなかった。手取り月収は14～15万円くらいだった。千葉の実家から通勤していた。

この会社は8カ月で辞めざるをえなかった。ちょうど景気が悪かった頃で、会社の業績悪化が原因だった。まわりの同僚のなかにも辞めていった人がいた。この会社に労働組合はなかった。業績悪化がなければ、この会社で働き続けたかった。

短大時代、自分よりも少し上の世代の人たちは簡単に就職先が見つかった。その様子を見ていたので自分も民間企業に就職したが、今考えれば、競争率は非常に高かったが、公務員をめざしていた方が正解だった。

情報処理サービス会社退職後は失業給付はもらわず、まだ年齢が若かったので、1カ月の求職活動で次の就職先が見つかった。

2000年をはじめ、21歳のとき、千葉にある水産加工食品会社に正社員として入社した。企業規模は100人程度だった。仕事内容は営業事務で、残業は1カ月20時間程度あったが、それほど多いとは思わなかった。このときの手取り月収は15～16万円程度だった。この時期も千葉の実家から通勤していた。職場の雰囲気は荒っぽいという印象で、とにかく忙しい会社だった。自分は仕事が遅いと自覚しているのだが、職場に慣れるまで時間がかかった。

5年間くらい勤務し、2005年、26歳くらいのとき退職した。理由は、業績の悪化で給料が減らされたうえ、人員削減のために部署ごとなくなったからである。辞めていった上司・同僚もいたし、もちろん残った社員もいた。労働組合はなかったが、交渉の場はあった。仕事が終わった後に社員食堂に集まって話し合いをしていた。業績が悪化しなけ

れば、この会社で働き続けたかった。会社自体はまだ存続していると思う。

辞めてから1カ月くらいは休養した。

中小企業の正社員で不安定な雇用に就くよりも、派遣社員の方が質のいい仕事で大企業に勤められるのではないかと思い、2005年、26歳のときに大手派遣会社に登録した。職務経験があるということで、すぐに派遣先を紹介された。それは都内にある規模400人くらいのIT商社で、これまで勤務した会社よりも規模が大きかった。席がパーティションで仕切られている職場は初めてだった。職種は営業部門をサポートする一般職（営業事務）だった。この職場でパソコンを覚えたが、最初は覚えるのに苦労した。

手取り月収は増えたようにみえたが、交通費が支給されなかったため、実質的には減った。労働時間は1日7.5時間、四半期の業績を締める時期には残業もあった。退社時間が夜10時を回ることが結構多かった。そのときには会社がタクシーチケットをくれた。

何か資格を取っておいた方がよいと思い、IT商社に勤務する間に医療事務の資格を取った。しかし、その資格を取っても実務経験がないと役立つわけではないことがわかり、がっかりした。現在も宝の持ち腐れになっている。

この頃には千葉県内でひとり暮らしを始めていた。もうそろそろ家を出たかったという理由だった。生活費の負担が大変になったが、自由の方を選択した。とはいってもお金は必要なので、派遣の仕事に加えて、スーパーのデモンストレーターのアルバイトを始めた。フリーペーパーの求人誌でこの仕事を見つけた。自分の都合に合わせて仕事を入れられる点がよかった。平日の昼間は派遣の仕事があるので、土日にそのアルバイトを入れた。毎週は入れず、月平均3～4日くらいだった。土日にアルバイトすれば、週明けの月曜日には給料が出た。同じデモンストレーターでも試食のデモンストレーターは準備や後片付けが大変なので、お酒の試飲のデモンストレーターをやっていた。一方でお酒は人それぞれ好みがあるので、販売が難しかった。販売する物にもよるが、これは歳をとってもできる仕事である。今でもときどきこのアルバイトをやっている。

IT商社での登録型派遣は、上限の3年までめいっぱい働いた。正社員になることを希望したが、なれなかった。地域の労働組合にも加入して頑張ったが、無理だった。派遣先企業に雇用申し込みが義務づけられた当初、その会社はかなり多くの派遣社員を正社員にしてしまっただけで、そのため、その会社は正社員化を絞り込むようになった。ここで正社員になれば、かなり今の生活は違っていた。これまでのなかで一番働きやすい会社だった。正社員

になれるくらい頑張っただけよかった。

2008年、29歳のとき、現在も勤務している大手の非鉄金属メーカーに登録型派遣で派遣された。仕事内容は営業事務である。派遣されたばかりの頃、まったく仕事の内容がわからないのに、ペアになった営業社員から面倒な仕事を丸投げされたことがあり、とても困った。それでも最近仕事にも慣れてきた。企業規模でいえば、これまで一番大きい。そのため、隣の部署の社員の顔と名前が一致しない。あいさつをしても返してくれないこともあった。これにはびっくりした。といっても、人間関係がとくに悪いわけではない。できるところまでは自分で頑張るが、いざとなるとベテラン社員が助けてくれる。

1日の労働時間は前の派遣先とあまりかわらないが、給料は下がった。時給自体が以前に比べて、明らかに安くなっている。現在、派遣業界全体で時給がどんどん下がっている。時給1,300円～1,500円くらいが相場で、1,500円あればよい方だと聞いている。

現在の派遣先企業で働き始めて1年6カ月が経った。あとのくらしい契約なのかはよくわからない。今よりも労働条件がよい事務系仕事、雰囲気の良い職場がないか、インターネットなどを眺めることもある。

<現在の生活状況>

ひとり暮らしなので、親は「何かあったら言え」と言ってくれている。給料も減ってしまったので、どうしても生活に困ったときには、親からの経済的援助を受けたこともあった。でも、できるかぎり自分で生活費を賄っている。一度だけ公共料金を払い忘れて、電気を止められたことがあったが、そのときは慌てて支払って元通りになった。

一時期、アルバイトのかけもちも疲れるので、止めていたこともあったが、また始めた。今はだいぶ落ち着いている。

健康上はとくに何も問題なく過ごしている。健康保険も派遣元で加入しており、医者にかかれなかったという経験

もない。

特別に友人が多い方ではないが、相談できる相手はいる。友人とのつきあいは大切だ。ただ、周囲が結婚や子育てで忙しく、少しずつつきあいが減っている。

<本人の不安や要望>

将来には強い不安がある。とくにこの先、正社員になれる見込みがあるかどうか不安である。

派遣会社に対する不満や要望はいろいろある。派遣会社は平気で違反行為をしている。派遣会社の担当者は、登録者に「他社競合だから」といい、派遣先の面接をさせている。しかも自社のなかでも複数の登録者に派遣先の面接をさせ、実質上、自社競合になってしまっている。営業担当者の対応を見ても派遣法自体を理解していない人が多いと思うし、派遣先企業ももっと派遣法を勉強してほしい。

また派遣の年齢差別の実態もある。年齢の条件を出してはいけないはずなのに、実質的にある。25歳、29歳、35歳が節目らしい。その年齢になると、仕事がガクッとなくなる。

自分は派遣先の職場で派遣社員であることで何らかの差別的な扱いを受けたという経験がないので、恵まれている方かもしれないが、結局いざというとき、派遣先で困ったときに、派遣会社は助けてくれない。派遣会社はいつも派遣先のいいなりで、すべてのしわ寄せが派遣社員にふりかかる。自分たちは弱い立場で、言ったら契約を切られるかもしれないから何も言えない。

派遣会社の担当者によって対応もかなり違ってくるという面もある。派遣会社の営業担当者もノルマがきつくて、定着していないようだ。自分の担当者もころころと替わった。担当者がベテランだと話が通じるのだが、若い人だとまったく話が通じないことが多い。

政府、行政への要望としては、求人自体が本当に少ないので、働く場をもっと増やしてほしいし、賃金も引き上げてほしい。

調査番号：東京9

調査日：9月18日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：28歳 ■現住所：東京都 ■出身地：東京都 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：出版業、編集職、ワーカーズコープ組合員 ■直近の収入：勤労収入なし/失業手当受給(月3～5万円)
- 家計における役割：家計補助者 ■家族構成：同居する親2人 ■住居：親の持ち家
- おおまかな職歴：大学卒業 フリーター(アルバイト・日雇い派遣、2年4カ月) 出版業・編集(ワーカーズコープ組合員、1年半) 現在、失業手当受給中(受給開始後3カ月)/求職中

<仕事に就くまで>

1981年、東京都生まれ。

自営業をしている両親のもとから都内の大学に通っていた。専攻は社会学で、メディアやコミュニケーションについて学んだ。勉強以外では、イラクやアフガニスタンの戦争に反対する運動に関わっていた。

2004年(23歳) 大学4年生のとき、出版業界で編集に関わる仕事を希望して一生懸命に就職活動をしたが、学生の就職活動が一番厳しい時期だったこともあり、採用されなかった。その他にも、教育関係の仕事も探したが内定はもらえなかったため、「疲れ果てて就職するのを断念」した。就職先が決まらないまま卒業しなければならなかったため、卒業式の日はずごく落ち込んだ。

< 初職からの経験 >

フリーター生活

2005年3月(24歳)に大学を卒業してからは、主として日雇い派遣で働き始めた。

日雇い派遣は1日単位か1週間単位で勤務先が変わり、イベント設営から建物の解体現場まで、いろいろな仕事を経験した。複数の大手派遣会社に登録し、携帯電話に送られてくる情報を見ながら、その時々で派遣先を決めた。「体が細いので力仕事は無理」だと思い、夜中の土木建築のような仕事は避け、「昼夜逆転の生活はしたくなかった」ので、昼間の仕事を選んだ。その他、本屋や飲食店の店員としてアルバイトで働いた時期や、実家の仕事を手伝った時期もあったが、社会運動に関わっていたので、アルバイトよりも日程の調整がしやすい、日雇い派遣が中心だった。

賃金は日払いで、仕事内容によって差はあったが、日給は7,000円前後であった。お金に困っていたときは賃金の高い仕事を選び、体力的にきついときは賃金が低くても楽な仕事を選んでいったが、平均すると1カ月の収入は10万円程度であった。それでも、実家で両親と暮らし、家賃と食費はかからなかったため、何とか生活できた。その点では、「一般的な一人暮らしの若い人たちの状況とはだいぶ違うので、比較的恵まれた方だ」と思っている。

とはいえ、「フリーター」を積極的に選んだわけではない。同級生にも就職先が決まらず、「フリーター」になった友人が多かった。どこでもいいから無理をして正社員になった友人もいたが、すぐに辞めたり、辞めさせられたりして、結局「フリーター」になっていった。

ワーカーズコープで編集者としての経験を積む

2007年8月(26歳)、ワーカーズコープ(労働者協同組合)という経営形態で出版の実務を請け負う編集プロダクションで働き始めた。もともと出版に関心があり、ブログに文章を書き続けていたこともあり、友人の紹介で面接を受け、常勤組合員となった。

勤務時間は長く、朝10時に出勤し、仕事が終わるのは早くても夜8時で、仕事が多いときにはもっと遅くなることもしばしばだった。出勤日は1カ月22日、土日は休みだったが、休日に仕事が入ることも少なくなかった。給与は1カ月に17~18万円程度だったが、会社の経営が悪化するのにもない徐々に支給が遅れ出し、そのうち、分割払いになり、給与で17~18万円のうち1カ月に支給されたのが6~7万円だったこともあり、「ただ働きに近いような状況に」なっていった。最終的にはすべて支払われたが、会社の赤字額は増えていった。

仕事の内容は、大小さまざまな出版社に企画を売り込んだり、出版社が考えている出版企画の実務を請け負うというものだった。出版の実務とは、著者と連絡を取り、著者から原稿を受け取り、誤字脱字や原稿の内容をチェックすることを中心に、本の制作に関わるほぼすべての仕事が含まれた。

ワーカーズコープだったため、職場の人はみな労働関係法令を理解しており、悪質な民間企業のように人権を無視した働き方はしなかったが、低賃金で長時間労働をしなければ会社の経営を維持できないのが現実であった。本来なら、著者と打ち合わせをしたり、出版社に企画を持ち込んだりといった事務所の外に出る仕事が好きだし、若い

ちにそうした仕事の経験を積むことが編集者としてのスキルアップにつながると思うが、仕事の8割が原稿チェックのようなデスクワークだった。もっとも、企画や打ち合わせと編集実務は一体のもので、どちらか一方だけをするわけにはいかないもので、それは仕方ないことであった。

事務所が狭かったために閉塞感があり、デスクワークが何時間も続くときは、精神的にも肉体的にも疲れる仕事であった。しかし、「フリーター」のままでは経験できなかった仕事であるし、本ができるまでの過程を知ることができ、その仕事を経験できたのは非常に有意義だったと思っている。

出版不況によって出版社からの仕事量や支払額が低下し、経営が悪化したため、2009年1月(27歳 - 本人談)最終的には会社を閉めようということになり、組合員は「解散」することになった。その後は、フリーの編集者になる者、就職活動をする者など、いろいろであった。できればずっと続けていきたかったし、再就職するにしても必要な技術を十分に身につけたかったが、期間が短かったためにそれができなかったことを残念に思っている。

< 労働組合での活動 >

2007年(26歳)「フリーター」生活をしながら、誰でも1人でも加入できる労働組合に加入し、その後はその中心的な存在として、主に組合の存在を対外的にアピールする活動を企画、運営している。組合に加入してから間もなく編集プロダクションに入社したが、組合の活動に参加するのは平日の夜や土日が多かったため、大変だったとはいえ、両立は可能だった。

自分たちの組合活動は、マスメディアなどから従来の正社員中心の組合とは違った新しい運動として描かれることもあるが、既存の組合に対抗しているわけではなく、自分たちが置かれた状況のなかでできることをしているに過ぎない。お互いに学べるところはあるはずだし、共同してできる部分もあると思っている。仮に(正社員中心の組合に属している)年長者が壁を感じるのであれば、これまでの組合運動の歴史を若い人たちに見える形で提示してはどうかと思う。もちろん、若者も学ぼうとする意欲は必要だと思っている。

平和運動をしていたときにも、旗を立てるとか立てないとか、組合運動では拳を上げてシュプレヒコールを叫ぶのが恥ずかしいとか、そういう世代間ギャップみたいなことが話題にはなっていた。しかし、運動に参加している人、参加したい人には、正規・非正規だけでなく、男性・女性・性的マイノリティ、引きこもりの人やメンタルヘルス問題を抱えている人もいるのだから、行動のスタイルにはもっといろいろなものがあるといいと思っている。

< 家族との関係 >

高校、大学時代は親に反抗的だったこともあるが、親との関係が完全に切れるようなことはなく、若い頃によくある反抗期という程度のものであった。「フリーター」時代は「中途半端な状態」だったので、両親との関係がぎくしゃくしたこともあったが、現在は共著で本を出版したということもあり、それなりに認められるようになってきたし、親元に同居させてもらっているため、うまくやっ

と知っている。

< その後の生活と今後の展望 >

実家から通っていたため、月給が少なかったとはいえ多少の貯金ができただけで、会社が「解散」してからしばらくは貯金を取り崩して生活した。この頃は生活困窮者を支援するための社会運動が盛り上がっていた時期で、運動に深くコミットしていたこともあり、就職活動をする余裕はなかった。また、そうした社会運動を内側から表現するような前述の本を作る企画があり、出版を引き受けてくれる会社も見つかったため、組合の仲間と本の編集作業をした。

2009年6月(28歳) 社会運動も一区切りし、共著で出版した本の編集作業も終わった頃で、失業手当を受給し始め、本格的に就職活動を開始した。就活の方法は、ハローワークに通って求人情報を検索したり、インターネットや新聞の求人広告で探すのが中心である。主として編集や出版関係の仕事を探しているが、それ以外の仕事もチェックしている。いくつかの企業に履歴書を送ったが、職歴が短いこと、新卒ではないことがネックになっているようで、採用には至っていない。

10月に失業手当の給付期限が来るが、その後の見通しは立っていない。現在でも、編集プロダクション時代の知り合いでフリーの編集者から紹介され、文章の校正のような日払いのアルバイトをしているが、不規則の仕事であり、生活費を稼ぐまでの収入にはならない。

現在の自分は、年齢的にも職歴的にも中途半端なので、この間の社会運動の経験から身についた独自の視点や関係性を生かして、フリーのライター兼編集者として活動していければと考えている。編集プロダクションで働いた経験から、出版業界の構造的限界を目の当たりにして、正社員として働くには我慢しなければいけないこともたくさん出てくるのが分かった。幸いなことに実家に住んでいるため、当面は「日銭を稼ぐために必死になる」必要がないし、書くことと編集することの両方を経験し、活動のなかでいろいろな人と出会ってきたので、そうした立場を生かして、既存の出版社ではできないような分野の本を、いろいろな人たちと一緒に作って出版していきたいという希望を持っている。

もうひとつは、社会運動をすることで生活できるようになればいいという希望もある。とはいえ、大きな組合の専従になるのかと言えば、「それはどうなんだ」と思っている。専従になると、生活は安定するかも知れないが、自由さとか、普通の人の視点とか、失われるものもあるからだ。自分の立場を考えると、本を作ったり、書いたり、物事を伝えるということをしてほしい、した方がいいと思っている。最近では、NPOや社会的企業が注目されているが、これまでのように営利企業を中心とした社会ではなく、将来的には新しい「食いぐち」を作っていかなければいけないと考えている。そのために何かをしたいという強い思いを持っている。

< 制度的な要望 >

企業中心ではない、新しい生き方ができる社会を展望したときに、具体的な制度要求としては、所得保障と住宅保障をしっかりと欲していると考えている。所得保障について

は、失業手当の延長、受給条件の拡充である。短期間しか働けなかったり、新卒でいきなり解雇されたりするなど、雇用が不安定な人が増えているが、そうした人たちでも最低限の生活ができるようにしてほしい。さらに、生活保護の受給条件が厳しすぎるので、誰でも受けられるようにすべきだと考えている。

住宅保障については、住宅の問題で苦しんでいて、家賃のために働いているような若者が多いので、まずは昔建てた公営住宅などを再利用し、もっと開放して誰もが住めるようにし、さらに住民同士が人間らしいつながりを作れるようにしてほしい。そうした問題意識から、組合では空き家になっていたアパートを借り上げて、住居を失った不安定雇用の人たちに安く貸す取り組みを始めた。大家さんとの人間的なつながりも作りながら、住む者同士、住む側と住まわせる側の垣根を作らずに、支援する側も含めてみんなで運営していきたいと考えている。このような社会的な活動に対して、もっと公的支援があってもいいと思う。住宅問題だけではなく、NPOに対する助成は拡大してほしい。

また、職業訓練については、同じ職業の人たちが集まる場があればいいと思っている。出版業界を例にすれば、事務所に退職した人などが詰めていて、失業した人に技術を教えたり、業界情報を教えたり、一時的に仕事なくなった人に対して仕事を融通してくれたり、人間関係が作れたりする業界の人材交流センターのようなイメージである。以前のワーカーズコープはこれに近い職場だった。現在の日本では、会社という組織を離れると仕事以外のいろいろな関係も切れてしまうので、どのような業界でもそのようなつながりをもてる場を作るべきではないかと考えている。労働組合ならば、労働問題が起きたときだけではなく、労働者同士の日常的なつながりが作れる拠点のようなものを作れるかもしれない。

組合活動の経験からすると、「フリーター」の人たちは、仕事をしていてもコンピューターのスキルや事務的なスキルを身につけるのが難しいので、多くの人がそういう技術・技能をつける場が欲しいと言っている。行政の職業訓練プログラムがあるかも知れないが、制度そのものを知らない人も多いし、アクセスしにくいという心理的な壁がある。ある福祉関係の職業訓練を受講した人から聞いた話では、技術を身につけないと競争に勝てないから一生懸命取り組みとってスパルタ式で指導していたという。そうした競争心をあおって駆り立てるのではなく、自発的に教え合ったり、学び合ったりする場を提供していくことが必要ではないかと思っている。もちろん、自発性に任せる部分ときちんと支援する部分の両方が必要である。

組合活動を通じて、「フリーター」の人たちのなかには意欲のある人が多いと感じるので、このような自発性を尊重した職業訓練ないし教え合いと丁寧なマッチングを根気よく続けていけば、それぞれの能力と意欲を生かせる社会が展望できると思う。

プロフィール

- 性別：女 ■ 年齢：28歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：東京都 ■ 学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■ 現職：医療サービス業、看護職、パート
- 直近の収入：勤労収入約17万円、児童手当1万円、児童育成手当（市独自手当）13,500円、養育費5万円
計24～25万円 ■ 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：子ども1人、同居する親2人
- 住居：親の持ち家
- おおまかな職歴：専門学校卒 公的医療機関・看護師（正職員、4年10カ月） 出産・育児（1年3カ月）
特別養護老人ホーム・看護師（パート、4カ月） 病院・看護師（パート、1年2カ月） 現在に至る

< 仕事に就くまで >

1980年、東京都生まれ。
家族構成は、両親と姉1人の4人暮らしであった。

< 初職から現職までの職歴 >

2002年4月～2007年1月（21～26歳）

21歳（2002年）の4月に看護専門学校を卒業して、東京都区内にある大きな公的医療機関に正職員（看護師）として勤め始め、約5年間働いた。その間は、寮暮らし。通常の勤務時間は8：30～17：15だが、仕事に慣れてからも遅い時は、勤務終了が20：00～21：00くらいになった。1週間の正確な労働時間が分からないくらい、よく働いた。「何かもう、国家公務員なので、（残業を）つけられないんです。残業は、1日に30分くらいしかつけられない。医者が足りない足りない、医者の給料が安いって、よく言いますが、（非常勤の）医者は外勤で働くとお金ももらえる。わたしたち（看護師）のほうはぜんぜんもらってないのに……。わたしたちは、どんなに働いても30万円はいかないですよ」。当時、月給は25～26万円、年収が450万円くらいだったと思う。公務員なので、雇用保険には加入しておらず、退職時失業等給付はなかった。健康保険と年金については、共済組合に加入していた。

当時の仕事は、病棟とオペ室が中心だった。病棟での仕事は3交替制で、薬投与・点滴・痰吸引などの医療処置、排泄・入浴・移動などの介助、病状の経過観察、カルテ整理、地域医療との連携、心のケア、退院後の生活指導など、仕事の範囲はとても幅広かった。オペ室での仕事は2交替制で、手術の補助を行った。「仕事は、（普通の小さな病院と比べて）ぜんぜん違います。仕事は限りないです。自分がここまでって決めないと、いつまでたっても帰れない」。当時、仕事と給料はぜんぜん見合ったものではなかった。それについては、「相当不満でした。みんなも、そう思っていたと思います。厚生労働省の管轄なので、何も言えないというか。組合とかに言えばいいのかもしれないけど。組合には入っていませんでした。お金ももたないの（笑）。看護師は、あまり昇給しない。でも、慣れてしまうと、どうでも良くなって、だんだん何も感じなくなってきた。「諦めみたいになってきて。最後のほうは、何も思わなかった」。役職がついても、仕事が増えるだけなので、「働く環境としては、ぜんぜんだめですね（笑）」。「看護って、どこまでが看護が分からないですよ。オペ室だったら、オペが終われば仕事は終わりですけど、病棟だと仕事

が尽きないんです」。

「妊娠して、結婚して（病院を）辞める予定だったんですけど、結婚するのを辞めて、そのまま退職しました」。そうなった理由は、婚約相手のDVだった。「付き合っている時は、DVとかに自分で気づけなくて……。その暴力が、DV特有の『おまえが悪いから殴るんだよ』というものであったので、すごく自分にも非があるような気がしたんです、その時は。なので、本当にDVそのもののサイクルで、自分が直せば相手が変わるって思い込んでいた。途中で別れようとも思ったんですけど、すごく怖くて別れられなくて」。

「結婚式の1週間くらい前に、もうお腹が大きかったんですけど、ちょっと口論のようになって、お腹のすぐ上の胸を思いきり蹴られて。わたしは、道端にバタンと倒れて。その時によぎったのが、殺されるって。本当に瞬間的に、そう思って。そのまま姉の家に逃げ込み、そこでDVじゃないかと姉に言われた。その時、姉がDV相談施設に電話をしてくれた。その後、実家に戻って、正式に婚約を破棄した。5年間働いた仕事も、有給休暇を取ったまま、2007年1月（26歳）に退職した。

2007年2月～2008年4月（26～27歳）

婚約を破棄するまで、家族には婚約相手のDVについて相談していなかった。お腹が大きくなってから帰ってきたので、親も受け入れづらいようだった。自分でもどうしていいのかが整理がつかず、DVに関する本を読んで、結婚しちゃういけないっていうことを頭で理解して、自分に言い聞かせる形で別れた。「そんな感じだったので、もううつ状態みたいになって……。理解者がいない気がしたんですね。親とかに言っても、分かってくれないし。親も衝撃を受けていたので。唯一相談できたのが、DV相談施設の相談員でした」。

その後、お腹が大きかったけれども、DV相談施設に直接行って、話を聞いてもらった。1週間に1回ほどカウンセリングを受け、ゆっくり問題を整理していった。それから、2007年4月に出産した。

2007年10月ごろ、調停を申し立て、現在はかつての婚約相手から養育費をもらっている。でも、これから何があるか分からないので、あてにしないように心がけている。どうも婚約相手の父親もDVをしていたようで、婚約相手は父親と別れ母子家庭で育った。それを考えると、悲しい気持ちになる。

2008年5～8月（27歳）

子どもが生まれた後、2008年5月から4カ月の間、特別

養護老人ホームでパートとして働いた。勤務日は週4日で、勤務時間は9:00~15:00の5時間(休憩1時間)だった。家からとても近く、通勤は楽だった。給料は、時給2,100円だったが、子どもの病気で休むこともあったので、実際の月給は15万円くらいだったように思う。

仕事内容は、「処置係」で、床ずれを直したり、目薬を差したり、高齢者のケアを主に行っていた。でも、仕事が時間通りに終わらなかったり、申し送りがうまくできなかったりして、15:00に帰れないことが多かった。

「すごく性に合わなくて辞めました。仕事の内容が嫌だったこともあるんですけど、すごいきつい人がいて、入れ替えが激しすぎて、その職場。入って間もないのに、その人が主任になっちゃって。その人の言うことが仕事のことではなくて、人間否定みたいな言葉を言う人だったので。家に帰ってからも、笑ったりできなくて、子どもに対しても笑顔が作れなくなって。自分でも限界だと思って、辞めました。8月31日に辞めて、9月1日から次の仕事に就いたので、失業等給付は受け取っていない。

2008年9月~現在(27~28歳)

現在、東京都市部の病院で、看護師として勤務している。雇用形態は、パートで、週4日勤務(土日休み、その他1日は不定休)勤務時間は8:30~15:00である。残業はほとんどなく、半年間で数える程度。給料は、時給1,800円で、月給は通常17万円くらいになる(少ない時で15万円、残業が多い時で20万円くらい)。雇用保険は加入しているが、勤務先の健康保険や厚生年金には加入しておらず、国民健康保険と国民年金に加入している。

主な仕事内容は、外来(診療の介助・準備など)、人工透析、人工透析患者の手術補助である。職場の内訳は、院長1人(常勤)、医師5人(非常勤)、医療事務5人(常勤4人・パート1人)、看護助手7人(常勤5人・パート2人)、看護師21人(常勤9人・パート12人)、臨床工学技士2人(常勤1人・パート1人)で、合計41人が働いている。同世代は少なく、30~40代が多い。職場の雰囲気は、「なんか独特な気がする」。職場の人間関係も、表向きは仲が良いけど、実際はいろいろある。なかには、いじわるをする人もいるし、院長も看護師の好き嫌いが激しい。

「仕事の内容自体は、わたしにとっては楽です。でも、プロの看護師として、やりがいがあるかと言うとない。それまでは、大きい病院に勤めていたので、最新の医療のなかで働いていた。でも、むかしから、ここのクリニックで働いている人は、10年前の知識で働いているわけじゃないですか。何を優先させて仕事を選ぶかといえば、今は子育てとか、家のことを優先させて、仕事の面は妥協しないと決めている。将来的に、ずっとここにいて、常勤になりたいとは思わない。今の仕事は、「通勤距離」や「勤務時間」など、子育てのことを考えて選んだ。

< 仕事に就いてからの生活 >

現在は、両親と子どもと一緒に、実家で4人暮らしである。子どもは2歳半で、保育園に通っている。家族との関係は悪くないが、できるなら家を出たい。両親と暮らすと、もちろんいいこともあるが、あまり居心地がいいとは言えない。でも、子どもの世話もあって、安定した収入が得られないので、家を出られない。

現在、毎月の収入の内訳は、勤労所得約17万円、児童育成手当13,500円、児童手当1万円、養育費5万円となっている。でも、手当や養育費はないものと思うようにしている。できるだけ、養育費は手をつけずに貯金して、手当は保育料や年金の支払いに充てる。あと、食費・光熱費として、実家には毎月4万円を入れている。親から、お金をもらうことはなく、両親と自分の家計は完全に別々である。

現在の社会保障制度について、いくつか不満がある。第一に、父親と同居していると、同一生計と見なされているため、児童扶養手当がもらえないことは、納得がいかない。「わたしの親の扶養に、わたしの子どもが入っているなら分かるけど、実際は健康保険とかは自分が払っている。もし、もらえていたら、家賃に充てられたかもしれないと思う」。第二に、未婚なので、寡婦控除の対象外になるのも、おかしいと思う。職場でも、いちいち寡婦控除に該当しない理由を説明しないといけない。「一般常識として、お父さん・お母さん・子どもってというのが正しい形っていう思いが、今の世の中にはあると思うんです。そうじゃない家族だっているのに。そうじゃない人も世の中にはたくさんいるから、おかしいことじゃないんだよっていうのを、ちゃんと子どもに教えられて、よかったなと思います」。日本の社会制度は、どうしても伝統的な世帯を中心に作られているように感じる。

自分のこれからの将来を考えると、「最先端の医療(職場)には、いたいと思います。正看護師の上に、ごく専門的な『認定看護師』とか『専門看護師』っていう資格があるんですけど。認定看護師の資格を将来的に取りたいと思っている分野があって、それを取るためには、大きなところで働いていないとだめで。その分野の実務経験が必要で」。その分野は「皮膚・排泄ケア(Wound, Ostomy and Continence Nursing)」というもので、資格を取得するためには、学校に半年通う必要がある。正看護師と認定看護師の仕事内容は、普通の病院だとそんなに変わらないかもしれないが、「皮膚・排泄ケア」を専門に扱う病院だと資格を活かせると思う。

< 社会に対する意見(政治・労働組合・NPO)>

DVに向き合わなくてはならなかった時、自分にとってDV相談施設の存在はとても大きかった。「あれがなかったら、今生きていないかもしれないと、本当に思います。言うことで、自分のなかでもちゃんと(問題が)整理されていくことだと思うので。話をできる人がいたから、前に進めたんじゃないかなと思います。姉もサポートしてくれたけど、相談員の人は、絶対にわたしを否定しない。ここに行けば、心の全部たまったものがきれいになって、家に帰れるっていう感じが本当にして」。そのほかにも、無料である点、家に近すぎると相談していることがばれた時危ないので、家から少し離れている点、土日も開いている点が大きかった。いちばん多い時で、週1回のペースで通った。その後、徐々に回数を減らし、先月で終わりになった。

それに対して、仕事に関するサポートは、あまり役立っていないように感じる。求職方法として、ハローワークに行ったこともあるけど、「ダメでした(笑)。常に求人をしている、あんまり良くない場所しか載っていないような気がして。特養の仕事は、ハローワークで探しましたけど。

求人の方はたくさんありますが、条件を絞るとぜんぜんなくて。システムはいいけど、(ハローワークのなかには)子どもを見てくれる場所もないし」。現在の看護師の仕事は、新聞の求人広告(折り込みチラシ)で見つけた。「(初職の職場にあった)労働組合(執筆注:調査協力者は当時労働組合には未加入)も、何をやっているのか、あんまり内容がよく分からなかったです。お金がどういふうに

使われているのか、とか」。

民主党に政権が交代して、母子家庭にも焦点を当てているので、期待している。でも、「子ども手当については、どうかなと思う。もらえるならもらいますけど(笑)。もうちょっと世帯の収入とかを見て、みんな同じなのはおかしいと思います。子ども手当を作らなくても、他に苦しんでいる人に回せると思います」。

調査番号:東京11

調査日:10月6日

プロフィール

- 性別:男 ■年齢:27歳 ■現住所:神奈川県 ■出身地:神奈川県 ■学歴:高校卒業
- 就労の有無:就労中 ■現職:自動車販売業、営業職、正社員 ■直近の収入:月15~20万円
- 家計における役割:家計維持者 ■家族構成:同居する親1人 ■住居:民間賃貸住宅
- おおまかな職歴:高校卒業 ガソリンスタンド・販売(正社員、5年) デパート・事務(登録型派遣、9カ月) デパート・事務(登録型派遣、3カ月)+ホテル・接客(アルバイト、3カ月) かけもち ホテル・接客(アルバイト、1年3カ月) 不動産会社・営業(正社員、5カ月) 個人加盟型労働組合の協力で未払い賃金を獲得 レストラン・接客(アルバイト、3カ月) 中古車販売会社・営業(正社員7カ月) 現在に至る

<仕事に就くまでの生活(家庭・学校)>

1982年、神奈川県生まれ。

家族との仲は、良くなかった。小学校1年生のときに、両親が離婚した。その後、父親のもとで育ち、父親・姉・祖父母との5人暮らしだった。中学生のとき、父親が家を出をした。詳しい理由は今でも分からない。ただ、父親が家族を捨てたのは事実で、それ以来、父親との関係は悪い。父親は、だらしなく、自分にとって反面教師である。自分が小さいころ、父親は保険会社に勤めていた記憶があるが、その後何をしているかぜんぜん知らない。今でも、父親と姉ともに仲が悪いが、80歳になる祖父母は大事にしている。

高校は、普通の全日制の学校だった。高校時代には、1年生から3年生まで、ファーストフード店でアルバイトをしていた。主に小遣いを稼ぐためだったが、自分で学費を払っていた時期もある。「若いときに、苦勞した」。高校時代は、自動車整備士の資格を取ろうと思っていたが、お金がなくて専門学校に行けなかった。卒業後も、ガソリンスタンドで働きながら、資格を取ろうと思ったが、とても忙しく結果的に自動車整備士の資格を取ることはできなかった。

<初職から現職までの職歴>

2001~2005年(19~23歳)

高校卒業後、学校推薦で、神奈川県内のガソリンスタンドを運営する会社の正社員として働きだした。仕事内容は、給油・洗車・車検、場合によっては整備に近い業務(日常点検)を行った。もともと自動車が好きで、とてもいい職場だった。当時、働いていたガソリンスタンドは、全国でも有名な店舗で、非常にお客が多く、大きな収益を上げていた。店舗の月目標を達成していたため、給料も良かった。20歳のとき、労働時間は毎月250時間、給料は年収400万円くらいだった。今までの職業生活のなかで、このころの給

料がいちばん良かった。

仕事を始めてから、2年経つと後輩ができて、3年経つと現場仕事の指揮を取る「主任」になった。実力も付いたし、いい上司にも恵まれた。ただ、5年目になると、環境が悪くなった。店長と副店長が変わって、両方とも自分と相性が悪かった。当時、折からの原油高騰で売り上げが落ち始め、自分の実力は上がっても、給料は下がった。そうした環境のなか、もう辞めどきかなと感じるようになった。こうして5年間働いたガソリンスタンド経営の会社を、23歳のとき(2005年)に辞めた。

2006年(24歳)

翌年、友人の紹介で、就職活動もかねて登録型派遣社員として働くことになった。仕事内容は、神奈川県大都市の大手デパートでクレジット・カードの入会手続きを行うものだった。労働時間は、9:30~18:30で、時給1,300円だった。

2007年1月~2008年6月(25~26歳)

デパートで派遣社員として働いていた最後の3カ月間には、近くのホテルでアルバイトも兼ねるようになった。フリーペーパーで探した仕事で、デパート勤務が終わった後、19:00~24:00の5時間、ラウンジバーでホールスタッフとして働いた。もちろん、掛け持ちは毎日ではなく、2日に1回の勤務だった。時給は、1,250円で、その他に交通費が1日700円、食事が1日300円支給された。掛け持ちしていたころは、月収は30万円近くになった。でも貯金はできなかった。車が好きで、中古車だが、頻繁に乗り換えたためである。今まで、7台を乗り換えてきた。

その後、デパートの仕事を辞め、ホテルでのアルバイトに移り、結果的に25歳から26歳にかけて合計1年半ほど勤めることになった。職場は、楽しかったし、やりがいも持っていた。ホテルのラウンジバーで働いていると、社長や医者など富裕層と接点を持てて、楽しかった。接客業が

好きで、事務などの仕事は自分には無理だと思う。この時期の労働時間は、1カ月あたり250時間くらいだったと思う。でも、いろいろと生活費が必要で、給料が安く、続けるには難しかった。

2008年7月～2008年11月（26歳）

ホテルの職場の人に隣のビルにある不動産会社の存在を教えられ、ホームページで応募して、2008年7月から不動産会社に勤めることになった。不動産会社を選んだ理由は、父親の影響だ。小さいときにお金で苦労したので、稼ごうと思ったからである。最初の3カ月は試用期間で、その後正社員になった。不動産の売買を仲介する営業職で、電話・来店・メールなどを通じた個人の要望に応じていく仕事だった。だが、休みは月に1回しかなく、とてもきつい仕事だった。当時の1カ月あたりの労働時間は300時間を超え、ほとんど休めなかった。月収は、残業も含めて、基本給が約25万円、歩合給が約5万円、合計30万円だった（ただ、この月収は、働きだして5カ月目のことで、いちばん良かったときである）。だが、「2週間で契約を取れ」という命令がいきなり出され、契約を取れなかったことから、結局むりやり「自主退職」扱いで辞めさせられることになった。

営業の職場（約60人）は、「部」ごとに分かれ、そのなかでさらに「係」ごとに分けられていた。競争が激しく、上司が「俺についてこい」とひっぱっていく感じで、自分も「やるしかない」と働いていた。勤務中は、ほとんど自分の時間がなかった。不動産の営業をするためには、取り扱う家のことをよく知っている必要がある。そのため、休日は、同僚と車で家の状態を見に行くことが多かった。このサービス休日出勤は、他のみんなもやっていた。職場の同僚は、20代が多く、互いに愚痴を言い合うことが多かったが、仲は悪くなかったと思う。

当時の職場で、自分以外にも、2人くらいが圧力をかけられ、会社から切られそうになっていた。ただ、職場の同僚と付き合うことは少なく、何らかの行動を起こすことはできなかった。もちろん、職場には労働組合もなかった。職場を退職させられそうになって、労働基準監督署にも相談に行ったが、何も動いてくれなかった。そのとき、ユニオンを知っている友人が、個人加盟型労働組合を紹介してくれた。ユニオンについては、あまり詳しくは知らなかったが、当時管理職の残業問題（見なし管理職）がマスコミで騒がれていたもので、その存在は知っていた。実際に、相談に行くと、もっときれいな事務所かと思ったが、あまりきれいではなかったので、ギャップに驚いた。その後、団体交渉の申し入れを行って、残業分の未払い賃金の支払い、試用期間中の雇用保険未加入への対応を求め、和解書を交わすにいった。

2008年12月（26歳）

不動産会社を辞めてから、1カ月のあいだは無業だった。求職活動の参考にしようとしてインターネットは見えていたけれども、いつ不動産会社との団体交渉が入るか分からないため、就職活動が十分できない状況だった。そのときの心情は、自分でスケジュール管理できないのが怖いというものだった。ただ、正直なところ、それ以上に会社を首になったことがショックだった。貯金で生活したが、苦しかった。この期間、前職での就業期間が短かったため、失業給付はもらえなかった。このとき、親からのサポートはまったく

なかった。なぜなら、家族との仲が悪かったので、親に頼りたくなかったからである。

2009年1～3月（26歳）

ようやく立ち直って、レストランのホールスタッフとしてアルバイトで働いた。

2009年4月～現在（27歳）

現在、主に国産スポーツカーを取り扱う中古車販売会社で、営業の仕事をしている。2009年4月に入社し、3カ月間の試用期間を経た後、現在は正社員である。現在の勤務時間は10:00～20:00だが、実際の出社時間は最大で9:30～21:00くらい。1カ月あたりの労働時間は約240時間である。現在の月収は、基本給が約20万円、歩合給が約8万円、合計約28万円である。歩合給は、粗利の3%だが、今月から5%にアップする予定だ。

この会社は、全国で15店舗を展開して、社員は営業・事務・総務などを含めて68人いる。現在、売り上げも多く、すごく成長している会社である。今の店舗（神奈川県内）は、8人で回しており、いい人が多く、いい職場だ。もちろん、雇用保険・健康保険などの社会保険も整備されている。「ずっと、働くぞと思っている。この会社は辞められない。つらいこともあるけど、そんなこと言っていられない」という思いが強い。なぜなら、もともと車が好きだし、27歳という年齢のこともあるからだ。就職活動をするにしても、厳しくなっている。応募のときには未経験でもOKと言っていたけど、実際には書類選考で落ちる。スキルがないからかも知れないが、本当の理由は分からない。不動産会社に勤めたときも、就職する前に何十社も応募したが、書類選考で落とされた。ようやく採用されたのに、あんな形が辞めざるをえなくなった。だから、今の会社は続けたい。

< 仕事に就いてからの生活（健康・家族）>

仕事によって、身体の調子が違ってくる。休みのない不動産会社に勤めていたときは、身体の調子が悪く、平均の睡眠時間は4時間くらいで、ずっと睡眠不足だった。胃腸の調子は悪くなるし、肌も荒れていた。でも、当時は、「ずっと、勤め続けるつもりだった。覚悟を決めていた。つらいから辞めるのは、良くないと思うし、もっと稼いでから辞めたかった」。不動産会社で働いている友人がいて、その姿を見てみると、つらさに耐えて、一人前になってから辞めると、いっぱい稼げるようになると思っていた。やっぱり、不動産会社は扱っている金額が違うので、稼げると思う。

今の中古車販売会社は、十分休みが取れる。休みには、いろいろと違うこともできるし、今はよく読書をするようになった。心理学に興味があって、今は専門家の本を読んでいる。「そう考えると、今は、もう昔のような働き方はできないかも……」。忙しいと何にも興味を持てなくなるし、かつての生活には戻れない。そう考えると、不動産会社は、自分にとって年齢的に早すぎたのかもしれないと思う。もちろん、当時の不動産会社で、若くてもたくさん売っている人はいたけれども、今の生活を続けて、1人前になってから、不動産会社に勤めるのなら、いいかもしれないと思う。

ずっと家族との関係が悪かった。

20歳になって、一人暮らしを始めた。そのいちばんの理由は父親と一緒に住みたくないというものだった。父親と一緒に暮らしていたころ、父親は借金取りに追われていた。自分も稼いで生活費を入れていたが、父親はそのお金を自分の生活費に充て、家賃を滞納していた。それで嫌になって、家を出た。父親と一緒に暮らすことは、「自分のプライドが許さない」。

ただ、24歳から、いやいや父親と一緒に民間のアパートに暮らしている。なぜなら、年をとった祖父母の面倒を見るため、近くに住む必要が生じたからである。祖父母のために、父親と暮らすことにした。でも、父親とはコミュニケーションをあまりとっていない。

20～24歳までのあひだは、一人暮らしで自由だった。

現在、まだ結婚はしていない。

休日は、職場（ガソリンスタンドやデパート）の友人や学生時代の友人と遊ぶことが多い。現在は、中古車販売会社のイベントに参加することもある。

自分は何度も転職しているので、転職しようとしている友人の相談に乗ることもある。経理を希望しながら、3年経ってもその仕事に就けない友人もいる。やっぱり、行動しないと何も決まらないと思う。「つらいけど、とにかくやるしかない。やったら必ず喜びが待っていると思う」。

<リーマン・ショック後の変化>

リーマン・ショックが起きたのは、ちょうど不動産会社に勤めていたときだったが、直接大きな影響は受けていない。ただ、結果的に建築業者がたくさん倒産したので、仕事量は減ったように思う。当時は自民党政権のころで、金持ちだけが得をする「住宅ローン減税」が実施された。そのため、お客の問い合わせが増え、結果的に不動産の買い控えが発生して、仕事が減った。

<社会に対する意見(政治・労働組合・NPO)>

今までほとんど失業していた期間はなく、失業給付をも

らったこともない。今まで仕事を探すときに、ハローワークを使ったことはない。自分は、インターネット上の就職情報紹介サイトや企業のホームページを見て、仕事を探すことが多い。ハローワークは、インターネットが使えない人が利用するのではないだろうか。あと偏見かもしれないけれど、ハローワークには良い求人がないような気がする。なぜなら、ホームページなどの広告費をかけない会社が多いように思うからだ。

あとは、以前働いていた派遣会社とのつながりで、派遣会社のキャリア・コンサルタントに相談することが多い。相談は無料で、仕事の紹介、カウンセリング、求職活動のサポートをしてくれる。かつて不動産会社に勤めようと思ったときも、いろいろと相談に乗ってくれた。このキャリア・コンサルタントを個人的に信頼していて、個人の携帯で連絡し合っている。この派遣会社の人材紹介を通じて、20～30件の応募をしたが、書類選考で落とされた。キャリア・コンサルタントがいい人で、いろいろとプッシュしてくれたけれども、結果的に仕事は決まらなかった。なので、自分で探さざるをえなくなった。ただ、パソコンや派遣会社がなければ、仕事を探すのはたいへんだと思う。

今の時代の会社は、やるべき義務を果たしていないように思う。不動産会社での体験のように、退職の強要が自分の身に起こるとは思ってもみなかった。でも、何か行動に移さなくてはという思いから、個人加盟型労働組合に相談した。現在働いている中古車販売会社にも組合はないので、これからも個人加盟型労働組合には加入し続けようと思っている。団体交渉にも、付き合いたいと考えている。ユニオンには、本当にお世話になった。

そのほか、かつての信頼できる職場の上司の存在も大きい。ガソリンスタンドやデパートで働いていたときの上司とは、今でも付き合いがある。

今の政治には、ほとんど興味はない。誰がやっても、同じだと思う。景気のほうが重要だと感じる。ただ、自分でもうにかしなれないといけなとも思うので、2～3年前から選挙には行くようにしている。大人だから、行くべきだと思う。

調査番号：東京12

調査日：10月9日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：28歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：沖縄県 ■ 学歴：大学院博士課程中退
- 就労の有無：就労中
- 現職：教育サービス業、塾講師、アルバイト（非常勤講師）形式上は業務委託を受けた自営業者扱い
- 直近の収入：勤労収入約8万5,000円、両親からの仕送りが約8万円、国民年金による障害基礎年金が約8万円、合計約24万5,000円 ■ 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身 ■ 住居：公営住宅
- おおまかな職歴：大学院修士課程修了（2年） 大学院博士課程進学（1年未満） 病気のため帰郷（後日、大学院博士課程退学） 高校・教員（非常勤職員、2カ月） 大学・研究生（1年） 学習塾・非常勤講師（アルバイト、2年7カ月） 現在に至る

<仕事に就くまでの生活(家庭・学校)>

1980年、沖縄県生まれ。

親と一緒に暮らしたのは12年間だけで、中学校・高校は鹿児島県の私立学校に入り、ずっと寮生活だった。父親は大学教員、母親は専業主婦で、自分は一人っ子である。そ

の後、1999年（18歳）に、東京都内の大学に進み、経済学を学んだ。

2003年（23歳）、大学を卒業後そのまま大学院修士課程、博士課程へと進んだ。高校時代から大学院に進もうと考えており、研究者になるつもりだった。祖父と父親も、大学の研究者だった。したがって、大学4年生のときも、いわゆる就職活動というものはやらなかった。

2005年（25歳）、大学院博士課程1年生のとき、病気（精神疾患）となり、大学を辞めざるをえなくなった。同年に、療養のため沖縄の実家に帰郷した。

2006年3月に、大学院を正式に退学することになった。

< 初職から現職までの職歴 >

2005年12月～2006年1月（25歳）

沖縄に帰って、2005年12月から2006年1月（25歳）まで、通信制高校の非常勤教員として働いた。その高校の校長が母親の友人だったので、働くことになったが、職場の圧力を受け、実質上働いたのは1カ月だけだった。薬を服用しているところを管理職に見とがめられ、何の薬かと問い詰められた結果、高校を辞めざるをえなくなったからである。そのうえ、給料の未払いも生じた。働き始めたときに、ちゃんとした雇用契約を交わしていなかったため、雇用条件があいまいなままだった。知り合いである地元の市議会議員に相談した結果、高校側に念書を提出して、ようやく未払賃金をもらうことができた。

2006年4月～2007年3月（26歳）

その後、2006年4月から2007年3月（26歳）まで、沖縄県の大学の研究生となり、大学院生の論文指導を行ったり、中国圏留学生に日本語を教えたりした。

ただ、沖縄での暮らしは、決していいことだけではなかった。田舎的な部分が残っていて、噂が伝わるのが早かった。沖縄では、小学校の同級生らと会うこともあったが、いろいろな面で耐えきれないところがあった。もちろん、沖縄では、仕事がないことも大きかった。その後、2007年4月（27歳）に東京都に再び戻ることにした。

2007年4月～現在（27歳）

それから現在にいたるまで、大学時代にアルバイトをしていた学習塾に戻り、非常勤講師として働いている。ただ、契約上は、業務委託というかたちになっており、最初に念書を書かされた。主として中学生や高校生を相手に、高校の地理以外の文系科目を何でも教えている。学校のある通常期間だと、週5日の出勤で、月～木曜日は個別指導、金曜日はクラス授業にあたっている。だいたい14：30頃出社して、23：00頃に帰宅する。1日の労働時間は約6.5時間である。給料は時給換算で、個別指導1コマ（70分）につき1,400円である。したがって、平均月収は85,000円くらいである。

学校のない休暇期間（夏休み・冬休み・春休み）になると、労働時間が大幅に増え、土日の休みもなくなる。だいたい毎日10：00～22：00くらいまで教えることになり、途中休憩は10分しかない。昼食も満足に食べることができず、栄養補助食品のような簡単なもので済ますことが多い。すでに大学院を卒業していることが学習塾にばれているので、すきまなく予定を入れられてしまう。ただ、この時期にな

ると、収入は増え、平均月収は16～17万円程度になる。

テストが近づくと、個別指導のあいまいに、勉強ができない生徒に対して補講を行うこともある。正規の指導時間では足りず、かといって学費の関係上授業時間を増やすこともできない場合に、補講を行うことになる。これは、完全にボランティアによる行為（無償）で、非常勤講師で行っているのは自分だけである。

「今の仕事は、一見すると知的労働に見えるかもしれないけれど、肉体をすごく酷使する。あと何年続けられるだろうかと思ってしまう」。最初に学習塾で教え始めてからちょうど10年経つが、生徒の傾向が変わってきて、今までの経験があまり通用しなくなっている。ベースとなる知識が変わってしまい、10年前の常識が通じないと感じる（例えば、世界史の授業で「脚気検査」の話をして、誰も知らない）。学力低下というよりは、社会状況の変化に原因があると思う。今では、従来必要とされた知識が詰め込まれることがなくなったように感じる。また、自分が受験したころと勉強内容も変わってきて、教材研究などに十分な時間が取れないこともある。「新しい仕事をしたい気持ちと、今の仕事を続けたい気持ちは半々」。子供相手に教えるのは好きだし、やり方は自分に任されているので自由だが、30年後という将来のことを考えると、できないように思う。やはり、「体力的に難しい」。

今の職場は、それほど大きなところではない。専任講師が3人、準専任講師が1人、非常勤講師が5人という構成である。専任講師は個別指導のコマ数は少ないが、クラス授業が多く入り、出勤日も週6回になる。確かに、専任講師になると給料は良くなるかもしれないが、あまり仕事に見合ったものではないので、専任講師になる必要はないように思う。今の職場は、社会保険が整備されていない。あるのは「労働者災害補償保険」だけで、雇用保険・厚生年金・健康保険はなく、専任講師も国民年金と国民健康保険に加入している。もちろん、労働組合も存在しない。専任講師の月収は分からないが、準専任講師は日給7,000円である。現在の勤め先に、非常勤講師を専任講師にする金銭的余裕はないと思う。現場の責任者とはよく話す。学習塾の取締役とは会ったことがない。職場に対する要望として、仕事量をもっと給料に反映させてほしい。半年前から授業に関する報告書の提出が義務づけられるようになったが、それにかかる時間分の給料はでない。

< 仕事に就いてからの生活 >

現在の収入状況は、自分の勤労収入が約8万5,000円、両親からの仕送りが約8万円、国民年金による障害基礎年金が約8万円、合計約24万5,000円である。両親からの仕送りは、すべて公団住宅の家賃に充てている。勤労による年収は、100万円くらいである。以前は、もう少し家賃の安いところに住んでいたが、少し広いところに引っ越した。なぜなら、両親が仕事の関係で上京したとき、寝泊まりに利用するためである。

身体を壊さない限り、今の収入で生活はできる。ただ、病気の関係で、いろいろお金がかかることもあるので、不安になる。現在の仕事でも、いろいろとストレスがかかる。子供が言うことを聞かなかったり、高校生がブログに悪口を書いたりすることもある。なかには、アスペルガー症候群の生徒もいるので、うまく対応しなくてはならない。

大学院時代からお金を貯めていたので、結婚式を挙げるぐらいのお金はあるが、異性と知り合う機会がない。普通の人と働いている時間が違っていることが原因だと思う。日々の仕事がつらいので、休日は家で休んでいることが多い。

2008年(28歳)から、新しい仕事を探しているが、なかなか見つからない。求職方法としては、病気があることを言わないで探す方法と、障害者雇用枠のなかで探す方法の2種類がある。今まで、ハローワーク、障害者支援NPO、新聞の求人欄を通じて仕事を探したが、非正規の仕事ばかりで正規雇用が見つからない。NPOに相談しても、不況で自活できる職はないのが現状だ。NPOのスタッフに同行してもらい、ハローワークに行っても結果は同じである。障害者雇用枠を活用しようとしても、身体障害者と知的障害者には比較的仕事はあるようだが、精神障害者に対する仕事はとても少ない。「特例子会社」での就職を考えて、東京都内にある企業を調べてみたが、やはり身体障害者と知的障害者を念頭に置いているようだった。

今は、インターネットで仕事を探せるので、先日専門学校の教員の仕事に応募したが、ネットでの労働条件と実際の労働条件がまったく違っていた。仮に面接までたどり着いても、3分で終わるようなときもある。あとは、メリ

ングリストで回ってきた職員募集に応募しようと思っている。大学院で蓄積した専門知識を活かせるよう、NPOで働きたいとも考えており、就職先としてかなり魅力的だと思う。ともあれ、仕事は、自分のついでで探すしかないと思っている。

< 社会に対する意見(政治・労働組合・NPO)>

大学院の時代から、個人加盟型労働組合の存在は知っていた。学生時代には、直接関係はなかったが、「何かあったときの保険として」、個人加盟型労働組合に現在加入している。ただ、現在の職場である学習塾で、雇用に関するトラブルが実際にあるわけではない。組合に入ってから、メーリングリストを見るようになったが、非正規雇用の現状を見るにつけ、「明日は我が身」と感じてしまう。いざとなったら、組合は助けてくれると思う。勤務時間の関係上、組合の集まりや団交には行っていない。

政治に対しては、あまり期待していない。前よりはましになるかもしれないが、どこまで本気か分からない。日本の場合、かつて大学院生の数を増やしておきながら、政府はその後の責任をまったく取っていない。

調査番号：東京13

調査日：9月22日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：30歳 ■現住所：東京都 ■出身地：新潟県 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：洋服仕立て直し業、専門・技術職、アルバイト ■直近の収入：月15~20万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 回転寿司店・接客(アルバイト、1カ月) アパレル会社・倉庫整理および洋服直し(アルバイト、10カ月) アパレル会社・洋服直し(アルバイト、9カ月)+洋服直し店(個人経営)・洋服直し(アルバイト、9カ月) かけもち アパレル会社・洋服直し(アルバイト、半年)+洋服直し会社(スーパー併設店)(パート、半年) かけもち 洋服直し会社(スーパー併設店)・洋服直し(パート、7カ月) 洋服直し店(個人経営)・洋服直し(アルバイト、4年9カ月) 現在に至る(労働条件改善を求めて個人加入労働組合に加入し、交渉するも改善されず、近々退職予定) 別の洋服直し会社に就職予定

< 仕事に就くまで >

1979年、新潟県生まれ。

家族構成は祖父母、両親、姉1人、弟1人、自分の7人家族であった。父親は中小企業の正社員、母親はパート勤めだった。ごく一般的な家庭であった。

中学生のころは成績優秀で県内の進学校に進んだ。ファッション関係と美術関係に興味があったことから美術大学に進みたいと考えた。

1998年(19歳)4月、東京にある美術大学に入学した。入学と同時に一人暮らしを開始した。育英会と大学の奨学金を受けていた。大学生活を通じて「自分はモノを作るなど、手を動かす作業そのものが好きなんだ」と改めて気づいた。主にファッションデザインを勉強したが、「ファッションデザインを専門にするのは向かないのではないか」と思っていたため、パタンナーになりたいと考えていた。

2001年(22歳)、大学3年生のときに就職活動を開始した。インターンシップにも参加したが、大きな会社は合わないと感じた。不況期で希望する職種(パタンナー)の求人も少なかった。加えて、面接で自分をアピールすることがとても苦手だったため、就職活動はうまくいかなかった。次第に就職活動が嫌になってしまい、途中であきらめてしまった。しばらくは卒業制作に専念して、卒業してから仕事を探そうと考えた。

大学による就職指導はあったもののあまり役に立たなかった。個別面談、個別指導は受けた記憶がない。個別面談などで適性を判断してもらえるような機会があったらよかったと思う。指導教授からも特定の就職先を紹介されたことはなかった。

2002年(23歳)3月、就職先が決まらないまま大学を卒業した。

< 初職からの経験 >

2002年(23歳)4月から1カ月ほど東京都区部にある飲食店(回転寿司店)で接客のアルバイトに従事したが、「接客業は向いてない。洋服関係の仕事がしたい」と強く感じた。そのためアルバイトを辞め洋服関係の仕事を探した。

同年6月、東京都区部にあるブランド品の古着を扱う会社の倉庫でアルバイトを開始した(2年強勤務)。最初に洋服の管理やクリーニングに携わった。しばらくするうちに、上司から「洋服の学校を卒業したのだから、簡単な洋服直し、ボタン付け、生地をつくろったりできるでしょう」といわれ、洋服の直しを始めた。次第に洋服の取扱量が増え、それとともに洋服直しの量も多くなった。そのため、専門の洋服直しのチームができあがり、チームリーダーを任されるようになった。

労働条件は週5日、8時間勤務で、時給は900円からスタートし、退職直前には1,150円になった。月収は交通費込みで額面18~20万円程度だった。同社には評価シートがあり、半期ごとに面談が実施され、評価に基づいた給与が支払われていたので、納得しながら仕事できた。社会保険も完備しており、有休も取れるきちんとした会社だった。

アルバイトを続けながらも、正社員になりたい、洋服を作りたいとも考えたため、並行して就職活動をしたが、結局希望する就職はできなかった。

2003年(24歳)4月、就職活動を通じて知った洋服直しの専門店(東京都区部)でアルバイトを開始(倉庫アルバイトと掛け持ち)した。経営者である女性の店長が1人で切り盛りしていた。店長から「古着の倉庫に通いながら、週1回勉強しに来ないか。給料は出来高制で支払う」といわれ、洋服直しの仕事に興味を持ったことから週1日勤務で仕事を始めるようになった。

洋服直しは洋服に関する知識は必要であるが、特別な資格は不要である。そのため、初心者でもやる気があれば比較的容易に雇ってもらえる状況にある。ただし、技術を習得するのに時間がかかるため、一人前になる前に辞めてしまう人もたくさんいる。ファッション関係の学校で勉強していても、学校で学ぶのは洋服を作ることが中心で、直しを学ぶことはほとんどない。洋服直しは自分のデザインやセンスももちろん必要だが、それよりもむしろお客様がどうしたいかをくみ取らなければならない。また、どちらかという地味な作業が多く、忍耐強さも必要である。洋服直しが好きかどうか仕事が続けられるか否かに大きく影響していると思う。

同店には1年弱勤務した。個人経営のお店であったことから扱う洋服の量が少なく、次第にもっといろいろな仕事ができるお店で働きたいと考えるようになった。短時間で基礎的な技術を身に付けるには、デパートやスーパーに併設された店舗で大量の直しを経験すると良いというアドバイスを受けたため、同年12月に同店を退職し、職場を変わった。

2004年(25歳)1月、東京都区部にある別の洋服直しの専門会社でパートを開始した(1年強勤務)。週3回同店に勤務し、残り3日は倉庫でのアルバイトを続けた。同社は大型スーパーマーケットや百貨店に併設された直しの専門店を都内に10店舗有しており、スーパー等で販売された洋服の丈詰めを大量にこなしていた。短時間での上げを要求されるため、スピードの速いミシンを使いこなす必

要があり、丈詰めの技術を3カ月ほどで習得することができた。

洋服関係の業界では、OJTだけでは十分な技術を身に付けるのは困難なため、自分自身で教室に通ったり、技術を身に付けたベテランの人に教わったりして培った技術を仕事に生かすことが多い。会社によっては先生を呼んで従業員向けの講習を行ったり、社会人向けの専門学校に通わせることもある。

同店は技術をOJT形式で学ぶだけだった。直しのスキルをあげたいと考えていたため、縫製技術を学ぶ教室に自主的に通い始めた。

同年7月、本格的に洋服直しに転向しようとの気持ちが強くなったために、倉庫のアルバイトを辞めて、週5~6日スーパーにある店舗で働くようになった。雇用形態はパートのままであった。

時給は750円でスタートし、結局退職まで時給が上がることはなかった。月収は交通費込みで額面14~15万円程度だった。時給は前職よりも大幅に下がったが、「やりたいことがあるのにもかかわらずあきらめて、何かむずむずしているよりは自分で道を切り開いていこう」と考えた。

このころ、付き合っていたパートナーと一緒に暮らすようになった。時給は低かったが、二人暮らしであったため、家賃もシェアできたので、生活はそれほど苦しくなかった。「好きな仕事が見つかり、その好きな仕事を続けられるのだから、これほどうれしいことはない」と思っていたため、パートでいることに不安や不満はなかった。

同社は、複数の店舗を展開する株式会社であったが、労務管理はいい加減であった。社会保険は倉庫のアルバイトとの掛け持ちを辞めて以降に自分から申し出て加入させてもらった。主婦パートの比率が高く、主婦パートの場合には社会保険に入りにくいという人も多かったため、自分から社会保険に入れてほしいと頼まないと入れてもらえなかった。労働時間については人手が少ないときは週6日働くこともあったし、1日の勤務時間は7時間のときもあれば10時間働くときもあったが、残業代はほとんどつかなかった。

2005年(26歳)2月、スーパーの洋服直しの会社で働き始めて1年が経過し、同社でのスキルアップが頭打ちになってしまったため、その後の進路について悩んでいた。そんなとき、以前働いていた個人経営の洋服直しの専門店から戻ってこないかと誘われた。スピードは身に付いたので、今度は技術を磨きたいと考え、スーパーでのパートを辞めて、個人の洋服直しの専門店に戻った。

雇用形態はアルバイトで、時給850円でスタートした(現在の時給は1,000円)。

仕事を開始してまもなく、いくつかの課題が持ち上がった。

第一は店舗の切り盛りをほとんどすべて任されてしまったことである。経営者である女性店長が結婚し、しばらくして妊娠したことから、接客はもちろん、洋服直しもほとんど1人でこなさざるをえなくなった。以前、週1回で手伝いをしているころの店長は前向きで、「お店をもっと盛り上げ、店舗も増やし、若い人をたくさん雇って技術の高いお直し集団を作りたい」という希望を語っていたが、結婚や出産で仕事よりも家庭に比重を移してしまったようだった。

第二は技術習得が思うように進まなかったことである。

店長が不在がちだったこともあり、技術指導を十分に受けられなかった。そのため、店長に「働きながらどこかで勉強しなさい」といわれ、スーパーに勤務していたころから自主的に通っていた教室に加え、縫製を教えてくれる教室に通うことになった。店長から通うよう指示された教室の費用については、半額が補助された。

第三は社会保険に加入させてもらえなかったことである。店長の妊娠期間、子育て期間を通じて、打ち合わせや相談をするには、店長の自宅まで出向く必要があった。歩いて移動するには距離があったことから、自転車を使って移動したが、結構車の通りの多いところだったため、労災保険や雇用保険に加入させてほしいと強く申し出たところ、加入させてもらえた（社会保険は加入させてもらえなかった）。

第四は長時間労働であったこと、また、残業代が不払いであったことである。労働時間は8時間と決まっていたが、技術的に未熟であることを理由に、閉店後も終電近くまで作業をさせられることがずっと続いた。それにもかかわらず、残業代はまったく出なかった。

2006年（27歳）9月に、抑うつ状態になった。連日のように深夜勤務が続いたこと、店長が不在がちであったため、慣れない接客も1人でこなさなくてはならなかったこと、技術的な相談できなかったこと、休日に教室を2カ所掛け持ちしていたことなどから、精神的に追い詰められてしまった。加えて、2005年4月に、同居していたパートナーが突然の人事異動が原因で強い抑うつ状態になり、休職して自宅療養していたことも心労となった。通院はしながらも、仕事は続けた。店長に事情を話して残業を減らしてもらい、また教室へ通うのを辞め、なるべくゆっくりと休むようにした。

半年ほどすると気持ちも安定するようになった。回復してきた様子を見て、店長から「大丈夫そうだから、また教室で勉強しなさい」といわれ、以前とは別の教室に通い始めた。教室は再開したものの、終電までというような極端な残業は減ったため、精神的にそれほど負担になることはなかった。

2007年（28歳）10月に、同居していたパートナーが自宅で自殺を図って亡くなった。仕事が終わって戻ったところ、部屋の中で亡くなっているパートナーの姿を発見してしまったこともあり、精神のバランスを大きく崩してしまった。葬式が終わってから半月ほど仕事を休み、新潟県の実家に戻り、静養した。この時期が一番つらかった。

同年11月には、仕事には復帰したものの、通い始めたばかりの教室はやめてしまった。

2008年（29歳）2月になって、「このままずっと悲しみに暮れていてもしかたがない」と思い、再度教室に通い始めた。

しかし、同年7月に突然「死にたい」と思うようになった。医師に相談したところ、パートナーが亡くなった悲しみが癒えていないところに、仕事の無理がたたったのではないかといわれた。「入院するか、仕事を休んで実家に帰って静養したらどうか」とアドバイスを受けたため、「仕事を失うのと死ぬのとどっちがいいかといったら仕事を失う方がまだいいな」と思い、休職を店長に申し出た。同年7月後半から8月末まで実家で静養した。

同年9月、「もうそろそろ大丈夫だな」と思い、週4日、1日8.5時間労働で仕事に復帰した。今まで週休2日だった

のが週休3日になったことでいぶん楽だった。その後、勤務日数を増やし、順調に仕事もこなせるようになっていった。

2009年（30歳）5月に、店長に問題が生じた。店長が突然「自分はAD/HD（注意欠陥・多動性障害）で、片付けられない症候群なのだ」といい出した。「子育てがたいへんで家が片付かない。家が片付いていないせいで夫婦仲が悪くなった。夫から仕事を辞めてしまえといわれている。なんとか今までの生活を維持したいので、家事を手伝ってほしい」といわれた。話を聞くと夫のDVもあるようでたいへんそうだった。その時期は仕事が減っていたこともあり、仕事がないときに少し家事を手伝うことにした。

同年6月には、だんだんと家事手伝いの回数も増え、ほぼ毎日のように手伝うようになった。残業代の不払いや保険未加入の件もあったことから、図書館でみかけた行政の労働110番に電話相談した。現状を話したところ、相談員から「それはおかしい。改善すべきだ」とアドバイスを受けた。そこで、メディアでみかけた個人で加盟できるコミュニティユニオンに加入できないか相談した。「もちろん加入してもらっても構わないが、その前に、取りあえず改善してほしい点を紙に書いて店長に相談してみてもどうか」とのアドバイスを受けた。そのため「労働条件改善要求書」というタイトルを付けて「家事手伝いをさせないでほしい。社会保険に加入させてほしい。残業代を支払ってほしい」などと箇条書きにして店長に提出した。店長からは「家事の手伝いは好意でやってくれていると思っていた。嫌々やっているのだったら、もうしなくていい。社会保険については今の経営状況ですべての保険に加入するだけの体力がないから雇用保険のみにしてほしい」との返事があった。さらに「こんなことをいちいち紙に書かなくていいじゃないか。いやらしい」といわれた。

しかし、労働条件改善要求書を提出してから2週間ほどしたとき、店長から電話があり、「部屋が汚くて気が狂いそう。手伝いをしに来てほしい」といわれた。本当にパニックを起こしそうな感じだったので、万が一にも子どもに害があってはいけないと思い、そのときは手伝いに行った。

同年7月に、「こういうことが続くのに耐えるのも嫌だし、お互いにルーズな関係になるのはよくない」と思い、再度、行政の労働相談を受けることにした。すると、「働き方からみて、あなたは正社員と同じぐらい働いている。それにもかかわらず、保険も入れてもらえなければ有休も取れていない。とてもひどい状態だ」といわれた。コミュニティユニオンに出向いて対策を相談した。その結果、ユニオンに加入し、今後は、家事手伝いはさせないこと、残業代を払うこと、社会保険に加入すること、そして、今までの残業代を払うこと、今までの雇用保険未加入分を一時金として払うことを団体交渉で申し入れることになった。団体交渉を行うにあたっては、コミュニティユニオンのメンバーが書類作りから交渉まで全面的に協力してくれた。

同年7月後半に第1回の団体交渉を行った。店長は「有給休暇を取られると売り上げが落ちてしまう。有休を取らせるためには時給を下げなければならない。残業代や雇用保険に関しては個人経営の洋服直しの店舗は普通残業代を支払っていないし、保険も入れていない。それがお直し業界の常識なんだ」と主張した。加えて、「お直し業界の中

では時給は高い方だし、今までに勉強しに行くのにも援助してあげた。にもかかわらず、こういうことをするのはお店をつぶすつもりでやっているとしたか考えられない」ともいった。自分は「家事手伝いをさせないでほしいというのが一番の目的である。それに、私は自分の労働条件を改善してもらい、気持ちよく仕事を続けたいと思っている」と主張した。その日は何の進展もなく、前述の要求項目について店長からの返事を待つことになった。

団体交渉の翌日になって、店長から「こういうことをして本当にうちで長く勤めるつもりなのか。うちは雇用保険や社会保険も現状どおりにしかできない。有休もあげられない。つまり労働条件は一切変わらない。続けるか辞めるかはっきりしてほしい。あなたが辞めるんだったら私一人でお店を続けられないから閉店する。貸し店舗の更新時期が迫っており、余計な更新料を払いたくないので5日後までに返事がほしい」といわれた。ユニオンに相談したところ、ユニオンは団体交渉を無視した不当労働行為であると店長に抗議を行った。

ユニオンによる抗議の後、すぐに店長に呼ばれ、「どうしてずるい手を使うのか。もうあなたとの信頼関係はなくなりました。10月末にお店を閉める」と一方的にいわれた。これからは気持ちよく仕事を続けたいからこそ、団体交渉をしたのに、このように受け取られてしまい、残念な気持ちでいっぱいだった。

同年8月初旬に2回目の団体交渉を行った。前回の交渉では過去の残業代を計算するためにタイムカードを提出するように要求していたが、子育てが忙しいなどの理由で提出してもらえなかった。そのため、覚えている限り過去2年間分さかのぼって概算で計算したところ、35万円近くになった。「この金額を払う意思があるのかないのかを翌週までに聞かせてほしい」と申し出て、団体交渉を終えた。

ところが、翌週になっても何の返事もなかったことから、少額訴訟を起こすことにして簡易裁判所で手続きをした（10月に少額訴訟を控えている）。

それ以降も仕事は続けているが、店長とは仕事上で必要なコミュニケーションはするものの、それ以上のコミュニケーションはしていない。

同年8月中旬より、勤務終了後および休日に転職活動を開始した。洋服の仕立て直しに絞って活動をした。就職活動はハローワークを通じても行ったが、その他に、インターネットで洋服直しを専門にしている会社を検索して、関心のある会社にはたとえ募集を行ってなくても電話をして、「採用してもらえないか。面接だけでも受けさせてほしい」と申し出た。

その結果、自分が一番気になっていた会社から面接をってもらう機会を得た。面接時に、「これまでの経験から）仕事が結構できそうだから、今勤めている会社がお休みの日に、無理のない範囲で少し働いてみないか。その過程でお互いに給料面を含めて調整がつけば就職してほしい」といわれ、その場で内定をもらった。

当該会社は従業員が50人弱おり、洋服直し業界としては大きな会社である。セレクトショップなどから仕事を受注しており、雑誌などにも取り上げられていることから、仕事には事欠かないと聞いている。

昨日、その会社での仕事の初日だったが、楽しく仕事できた。11月からは多分そこで働くことになると思う。

時給は1,000円でスタートし、働きによって上がるとのこ

とである。社会保険にも入れると聞いているし、残業代もしっかり出るそうである。また、将来的には正社員になれる可能性もあるようなので、がんばっていきたい。

<現在の生活状況>

雇用形態はずっとパート・アルバイトであったために、生活はそれほど楽ではなかったが、継続して仕事をしており、生活も地味にしていることから、困窮したという経験はほとんどない（本当に困ったときには両親に仕送りをお願いしたこともあった）。

パートナーが亡くなった際に、内縁の妻と認定されたため、2007年（28歳）10月からは遺族共済年金を月4万円程度受給している。5年間の期限付きだが、生活を支えるのにたいへん役立っている。

失業している期間というのはほとんどなく、失業手当を受給する機会はなかった。また、受給しようとも思わなかった。転職するのは必ず技術を向上させたいという気持ちがあったからであり、休むより働いてどんどんスキルを身に付けたい、吸収していきたくて考えていた。

現在勤めている会社の問題については、労働110番やユニオンに相談したおかげで具体的な解決策を見いだすことができた。お店を辞めることになってしまったが、転職活動の結果、良い職場にもめぐり合えたため、結果的には良かったと考えている。

現在も、ユニオンのメンバーにはたいへん助けてもらっている。すごく頼りになる存在である。

両親とは連絡を取り合っており、相談にも頻繁にのってもらっている。心の支えである。

うつ病は完全に完治はしておらず、現在も薬を飲んでいいる。しかし、現在は仕事には影響がない程度に回復している。

<本人の望みや不安>

今までは雇用保険にあまり関心がなかったが、いざ自分が失業する可能性があると思うと大切な制度であると感じる。自分のように、本来加入要件を満たしていても、経営者の無理解が原因で加入できない人が多数いるはずである。こうした人々を救済する策を検討してほしい。また、受給要件を満たしており、失業手当が受給できるはずなのに、制度の内容を十分理解していないために、利用していない人もいるのではないか。加入者に対しても十分に制度を周知してほしい。

ハローワークで求人を行っている会社でも、社会保険・労働保険に加入していない会社が多い。求人募集にあたってはハローワークでの審査を厳しくしてほしい。ハローワークの紹介で、洋服直しの店舗を都内で複数経営している社長と直接面談をしたことがあったが、「働いている人たちの給料を増やしてあげたいから保険に入れていない」といっていた。また、「そもそも雇用保険は土木関係の危険な仕事に従事する人のためのものだ」と主張をする経営者もいた。

洋服直し業界は、職人の高齢化が進み、若い人をどんどん採りたいと考えている。そのため、経験・技術がなくても、意欲さえあれば採ってくれる。ただし、始めは時給が相当低いので、生活を維持できないという人が多く、その

ことを我慢できるかどうかのポイントである。若くて技術が未熟なため賃金は低い、やる気がある人向けにある程度の生活を送れるようになるまでの間支援を行う制度を作してほしい。例えば育英会のような奨学金でも構わない。最初の1~2年だけ無利子でお金を貸し付けて、何年間で返済すればよいという制度はどうか。行政が企業の優劣を評価したうえで優良企業に入社する場合には奨学金制度を利用できるようにすれば、企業も必要な人材を確保できるのではないか。

専門的な技術は持っていても、インターネットの利用方

法など情報収集力には個人差があるし、アピールが苦手な人もいる。こうした人に丁寧に指導したりアドバイスをしてくれる人材がハローワークに多数配置され、いつでも相談できる体制を望む。

ハローワークに相談に行ったとき、個別相談で経験や性格をみて適職を判断してくれたのはたいへん役に立った。大学生のころの就職活動を振り返ってみるとこうした支援があったらよかったと思う。大学生向けのハローワークのような組織があると役立つのではないか。

調査番号：東京14

調査日：11月22日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：36歳 ■現住所：東京都 ■出身地：愛知県 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：飲食店、飲食店関係職、正社員 ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：路上生活
- おおまかな職歴：大学1年間留年（決まっていた就職が白紙に） 大学卒業 喫茶店・店員（アルバイト3年半、在学中からのアルバイトを継続） スーパー・清掃（アルバイト、2年）+ファーストフード店・店員（アルバイト、2年）かけもち ホテル・事務（正社員、2年7カ月） ホテル・事務（正社員、1年）+居酒屋・店員（アルバイト、1年）かけもち 無職（数ヶ月、失業等給付受給） 飲食チェーン店・店員（正社員、4年） 無職（2カ月） 緊急一時保護センター（1カ月） 自立支援センター（2カ月） 現在、路上生活中/求職中

<仕事に就くまでの生活（家庭・学校）>

1972年12月、愛知県生まれ。東京の大学に進学。

大学4年生（商学部）で就職が決まっていたが、留年したので流れてしまった。

<初職から現職までの職歴>

1997~1998年（25~26歳）

卒業1年半前からアルバイトをしていた喫茶店で卒業後もアルバイトを続けた。新卒で就職が決まっていたのに留年で流れ、やりなおす気力がなくなったから。収入は20~25万円。家賃62,000円のアパートに住んでいた。贅沢をしなければ苦しくはなかった。オーナーは時々顔を出してえらそうなことを言うだけで、みんなとうまくいっていなかった。自分はマネージャーや同僚とは仲がよかった。最初遅番でやっていたが、まじめにやらない子たちとうまが合わなくて、「早番に行けば」といわれたので移った。この喫茶店では、在学中の1年半を含めて合計で3年半働いた。

1999年~2000年（27歳~28歳）

愛知県の実家に帰りフリーター生活を始めた。朝8時から11時から12時までスーパーの清掃、午後から夜12時までファーストフード店で働いた。月収が15万円。実家のため家賃は要らなかった。正社員でやりたいと思っていたが、仕事の探し方やきっかけがわからなかった。普通、大学のときに就職活動をして試験を受けるわけだが、そこからはずれた

のでどうしていいかわからなかった。ハローワークへ行くという考えは浮かばなかった。あそこは失職したり、失業中の人が行くところだというイメージがあった。大学は有名なところだったので、そういうプライドもあった。今は名前が逆に重荷になっている。「ちゃんとした東京の大学に通わせたのに、なにをフラフラしているのか」と、親はすごかった。しかしプレッシャーはあまり感じなかった。遊んでいたわけではないし、自分のことは、自分で稼いだお金でやっていたという自負があったからである。そのことではあまり悩まなかった。「流しちゃうというか、そういう性格だから」。このころギャンブルを覚えて、消費者金融から借金をした。

2001~2004年（29~32歳）

知人の紹介でホテルに正社員として入社した。仕事は事務職で、社会保険も完備していた。勤務時間は9時から6時までで、残業がほとんどなく、手取り16~17万円だった。1年目くらいから「3年我慢してやめよう」と決めていた。企業としての成長が見込めない（このホテルの経営母体は第三セクターで上に行政がついている）ことと給料が安いのが理由だった。どこの職場でもそうかもしれないが、人間関係がグチャグチャだった。支配人と女性社員が男女関係にあることがあからさまだった。

この安い給料では、借金の返済をしていると自分の小遣いがまったくなくなるという状態だったので、やめる1年くらい前から居酒屋でアルバイトを始めた。ホテルはほとんど定時で終わるので、時間が空いているのだったら働けばいいやと思った。アルバイトは、週3~4日、午後7時

か8時から12時か1時まで働いた。10時を過ぎれば単価があがった。そのあたりでは時給のよい店で月収8万円くらいになった。この居酒屋もホテルとほぼ同時にやめた。

2004年7月にやめて、自己都合退職として失業等給付の申請を行った。2カ月後くらいに就職先が決まったので、1回認定され、失業手当を受けたが、就職支度金(執筆注:就職促進手当か)をもらっただけかもしれない。

2005~2008年(33~36歳)

ハローワークで、強気で「いい給料をもらえるところ」と言った。若年層ということで担当者がついた。自分が計画を立てるといふよりは、担当者が「ここはどうですか」とすぐ求人を見つけてくれた。

飲食店を営む会社なのだが、愛知県では有名なところだった。経理を募集しており、自分は商学部出身で簿記はわかるし、ダブルスクールで公認会計士の資格の学校に通っていたこともあった。経理は埋まってしまったのだが、会社のほうが自分に興味を持った。面接で希望の年収を言ったら、「すぐには無理だよ」と言われたので、「自分がんばってそのラインにします」と答えた。特別手当のような調整手当を2~3万円上乘せしてくれた。「現場はやりたくない」と言ったが、「ぜひ来てください」ということになった。

この会社では、4年間勤めた。雇用形態は正社員で、仕事内容は調理および接客だった。辞める前の月収は、額面で30万円くらい、手取りで25~26万円だった。社会保険も完備されていた。最初の9カ月は、実家から通った。その後、三重県で1年、大阪府と宮城県でそれぞれ1年強のあいだ働いた。社員寮に入って寮費が1.5~2万円くらいだった。

三重県と宮城県の職場が最悪だった。三重県の店長は人としてあり得ないと思った。自分が周りにどれだけ嫌われているか気が付いていなかった。鈍いんだと思う。つねに人手不足で、募集をかけて人を雇っても続かなかった。その店長のせいだと思う。店の中がギスギスしていた。仲のいい子が一人いて、その子と「店の雰囲気よくしようよ」とアルバイトの人たちもまとめた。

宮城県の店も最悪だった。休みが取れなかった。売上げが伸びなくて人件費を削らなければならなくなり、割を食うのは残業代がつかない固定費の正社員だった。アルバイトにやってもらうべきところを正社員がやらなければならず、朝の9時から夜中の3時、4時まで働いた。休みの日も店長から電話があり、「あれやってない、これやってない」と言われた。アルバイトはたくさんいるけれど、正社員は店長と副店長の自分しかいなかった。店長の上にエリアマネージャーがいて、その人ともうまくいかず監視されている気分だった。それまでは店長かエリアマネージャーかどちらかとはうまくやれていたし、気の合う同僚もいた。宮城県では味方がいなかった。

半分逃げるように辞めた。すんなり辞めさせてくれなかったし、辞めたところで逃げるのかと言われ、後ろめたい気持ちになった。離職票ももらわず、したがって失業等給付も受給しなかった。東京に来て2カ月経ったあと、実家にもどった。

2009年(36歳)

2009年5月に、所持金を少し持ってふらっと実家を出て、

再び上京した。親からすれば、「いいかげんにしろ、仕事見つけて出て行け」という感じだった。人生に希望も何も持っていなかった。

ハローワークに行く前に、東京都23区内の応急援護相談所に行ってみた。2008年秋、東京にいるとき、誰かに「福祉に相談してみたら」と言われ、行ったことがあったからである。応急援護相談所では、「仕事を探すのなら、非正規労働者就労支援センターに行きなさい」と言われた。非正規労働者就労支援センターでアルバイトが見つかったのだが、同時に緊急一時保護センターにも相談に行った。そして、その緊急一時保護センターで生活することにした。アルバイトのほうは、今考えてみても寝る場所もないのに行けたかどうかわからない。緊急一時保護センターで毎晩高熱を出して、2週間病院に入院した。結果的に退寮扱いとされ、「病気だから追い出すのか」と職員に聞いてみた。入所期間が1カ月と限られているから入院中ももったいない、というわけだった。退院したら再入寮させてくれた。自立支援センターに進んだが、就労して自立するということまで身が入っていなかった。期限一杯の2カ月滞りして、自立支援センターを出てきた(現在、路上生活中)。

< 社会に対する意見 >

緊急一時保護センターは、こころのケアもやろうとしているようだが、自立支援センターでは人間として扱われなかった。ああいう事業は受ける側として肩身が狭い。税金でお世話になっているから、申し訳なく思っているわけで、こちらから「ああしてほしい」などと言えない。行政のほうで意見を汲み上げてほしい。意見を言って出ていくことにならなくても、困ってしまう。

自立支援センターは若年層に即していない。50歳以上のために作った施設だから難しいのではないかと。若年層で意気込んで行った人ほど失敗している。大部屋はしかたないが、門限やルールなどが問題だと思う。「ここは学校か!」と腹が立ったこともあった。門限は6時なのに、「職業相談員にハローワークの報告をしないとイケないのだから4時に帰って来るように」と言われた。要するに仕事が決まっていなくて、やる気がないとみなされた。やる気を失っていた時期は実際あったけれど、1回烙印を押されると居づらくて仕方なかった。

困っていたとき、ある人に助けをもらった。借りたお金を返せることになったとき、返さなくていいから同じ境遇になった人に同じことをしてあげて、と言われた。

普通の社会生活ができるようになったときに、経験をマスコミなどに話してみたい。

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：28歳 ■現住所：東京都 ■出身地：東京都 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：製造業、事務職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし/失業手当受給
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 警備会社・現業（正社員、2年） ホームページ制作会社・事務（アルバイト、1年） 事務請負会社・事務（アルバイト、1年）+お見合い会社・電話受付（アルバイト、1年）かけもち 不動産会社・事務（正社員、1年） 大手企業・事務（登録型派遣、6年） 現在、失業手当受給中/求職中

< 仕事に就くまで >

1981年、東京都生まれ。

家族構成は、両親、姉1人および自分の4人家族。

子供の頃は借家住まいで、家賃が払えるかどうかくらいの綱渡り状態の大変苦しい生活をしてきた。父親の身体があまり強くなく、非正規の職を転々としていたためである。もともと両親は仲が悪かったが、高校生の頃に母親が別居を始め、自分は姉とともに父親と一緒に暮らすようになった。

< 初職からの経験 >

高校卒業後、数年おきに職場を移りながら経験を積む

1999年（18歳）普通高校卒業後、進学したかったが経済的に無理だと思い、就職することにした。就職とはいっても学校からの紹介を受けるような正式なルートによるものではなく、求人誌で探して警備会社に入社した。会社へは実家から通勤した。雇用形態は正社員であったが、ずっと働き続けるつもりはなく、意識としては「若干フリーターの」であった。仕事の内容は、イベント会場で迷子の子供の世話をしたり、道に迷った人の案内をしたりするというものであった。労働条件は1日8時間、週5日勤務で、月収は手取り約16万円だった。仕事ではいろいろな人と接することができ楽しかったが、「この仕事ではこれ以上得るものがない。コンピューターに強くなりたい」と思い退職した。勤務期間は約2年間だった。また、就職して以降は両親にそれぞれ3万円ずつ仕送りを続けた。

2001年（20歳）次に勤めたのはホームページ制作会社であった。これも求人誌で見つけた仕事で、雇用形態はアルバイトで、月収は前職より低く手取り14万円程度であった。当時はコンピューターを使う経験もスキルもなかったが、初心者でも大丈夫だったため採用された。仕事の内容は、ホームページ作りの素材となるような画像データを集めて少し加工し、ホームページを作っている人に渡すというものであった。会社はすごく小さかったためか、業務は統制がとれておらず、行き当たりばったりで言われるままに作業をし、「訳が分からないまま」時間が過ぎていった。とはいえ、コンピューターを使って仕事をしているという実感が楽しかったし、少しずつとはいえスキルが身についているという手応えもあった。しかし、あるとき自分のミスではないのに「そこまで怒らなくてもいいだろう」と言うほど理不尽な怒鳴られ方をしたので、「こんな会社、ダメだ」と思い退職した。勤務年数は1年ほどであった。

2002年（21歳）事務を請け負う会社で、準社員という名のアルバイトとして働いた。求人誌で見つけた仕事で、時

給1,000円、1日8時間、週5日で、1カ月の手取り額は20万円程度だった。業務内容は、新聞社などが実施している懸賞付きクイズの集計のような臨時で発生した事務的な仕事を請け負うというもので、応募はがきの数を数えたり、回答の集計を行ったり、アンケートの自由記述欄をエクセルデータとして入力したりする作業をしていた。パソコンを使った仕事があり、パソコンの使い方を親切に教えてくれる人がいたので、徐々にスキルが身についた。人間関係もよく、働きやすい職場であった。しかし、正社員ではないため安定していないうえ、営業の人が取ってきた事務の仕事をやって納品するという簡単な仕事ばかりだったため、「大体このくらいの仕事がずっと続くのだなというのが見えて、もうそろそろちゃんと就職したいなと思って」退職した。勤務年数は約1年間であった。

また、事務請負会社に勤めていた頃から一人暮らしを始めた。事務請負会社の仕事のほかに、副業としてお見合い会社の電話受付の仕事をしており、それを合わせると月に手取り24万円の収入となったため、生活は比較的ゆとりがあった。

2003年（22歳）次に就いたのは、求人誌で見つけた不動産会社の正社員の仕事（事務職）であった。月給は手取り17万円であった。仕事の内容は、「とりあえずお茶だしをして、その後は『えーと、何をしたらいいんだろうという』感じで、何をしたらよろしいでしょうかと聞くと、『何かあったら指示するから座っていて』と言われるくらいほとんど仕事がなかった」。一方、営業職の男性は忙しく働いていたので、「周りの視線が痛く、居心地が悪かった」。また、週休2日ではなく、日曜日だけが休みの週があったりして、楽な仕事ではなかった。この会社は、「社長がチンピラのように」、顧客からのクレームに対して社長が怒鳴り返すなど、「会社自体が尊敬できなかった」。営業担当者も怒鳴られてばかりで、無駄な残業をさせられたうえに残業代も払われないなど、ひどい扱いを受けていたため社員がどんどん辞めていった。

両親それぞれに3万円ずつ仕送りをしていたため、17万円では生活していけず、副業の時間を増やして補うことにした。事務請負会社のアルバイトをしていた頃、副業は平日の夜6時半から11時、あるいは土日の午前中または1日中しており、「週に1日か2日くらいだったので、気分転換くらいに思っていて、本業がそれほど重くなければやっていけた」。しかし、月収が減った（20万円→17万円）ため、それを補うために副業を週4日するようになり、本業（不動産会社）の負担増と副業の負担増で、体力的にも精神的にも厳しくなった。もともと会社を尊敬できなかったこともあって、1年経たずに退職した。

事務職の派遣労働者として約6年間勤務した後、派遣切り
2003年(22歳) 派遣会社に登録したままだったことを思
い出して紹介を依頼したところ、大手企業の事務部門で派
遣社員として働くことになった。社内の各部署の規模は10
名から70名まで大小さまざまであったが、それぞれの部署
で働いているのはほとんどが正社員で、派遣社員は部署に
よって1~2名いる程度であった。この会社では、2000年
代に一般職が廃止され、明文化されていたわけではないが、
従来一般職の社員がやっていた庶務を派遣社員に置き換える
という方針で作業の仕分けが進められていた。しかし、
実際の分担関係は曖昧なままで、以前一般職だった社員が
一般事務をしていることもあった。

そもそもは、派遣業務のうち「事務用機器操作」という
専門26業務に従事するというでこの企業に派遣された。
自分が派遣の仕事を選んだのは、「当時、派遣社員と言え
ばスキルが必要で、勤めているうちにスキル・アップがで
きるというイメージが氾濫していて、きっとそういうところ
に行けばお茶くみとかじゃなくて、パソコンを使って、
難しい仕事にもチャレンジできると思った」し、派遣会社
からの説明も「結構パソコンを使う仕事だと説明されたの
で、希望通りの仕事だと思った」ためだった。収入は1カ
月手取り22万円程度で、雇用保険にも加入していた。

派遣されてからしばらくは「コピーばかりさせられてい
たけれど、新入りとはそういうものかなと思って」仕事を
続けていた。コピーをしたり、はんこを押したり、電話対
応をしたり、パソコンは使うけれども簡単な文書作成、経
費の処理などの一般事務をしていた。

ところが、派遣されてからしばらく後に、部署内で辞職
した正社員がいたが、正社員の補充がなかったため、その
正社員がしていた業務を最初から最後まで任されるよう
になった。この仕事は、「最初に説明された仕事の内容と一
致していた」。

この仕事をするうちに、扱うデータが膨大になっていっ
たため、表計算ソフト(MS-Excel)で管理していたデー
タベースを、データベースソフト(MS-Access)で管理
する必要が生じた。そこで、「『教科書みたいな本を部の予
算で買ってはダメですか』と言ったところ、『研修に行っ
ていい』と言ってくれて」、泊まりがけの研修に参加して
データベースに関する知識を習得した。この知識を生かし、
自分ひとりでデータベース・システムを構築した。

こうして当該業務を熟知していったため、「直属の上司
とか周りの人はそれを分かってくれて上司は『彼女はこん
なに役に立っているのだから正社員にしてください』という文
書を書いて人事の担当部署に推薦してくれたらいい」。し
かし、ちょうどその頃経営状況が悪いという理由で中途採
用の募集を凍結したため、正社員にはなれず派遣社員と
して仕事を続けた。ただし、「個人的には、中途採用が凍結
されていようが、されていまいが、人件費を下げるために
雇った派遣社員を、ちょっと上司が推薦したからといって、
人事部は正社員にすることはたぶらない」と思っていた。

その後、世界同時不況の煽りで会社の経営が悪化したこ
とを理由に、会社が派遣社員を削減することを決めたため、
2009年(28歳)5月に雇い止めにあつた。

雇い止めにあつて以降、仕事は見つかっておらず、現在
は失業手当を受給している。

< 家族との関係 >

高校生のときに両親が別居し、自分は姉とともに父親と
暮らしていた。父親とは性格が合わないわけではなかった
し、どちらかと言えば仲は良かった。しかし、経済状況が
厳しかったにもかかわらず、父親は子供たちには何も相談
せずに1人で何とかしようとする性格で、自分も姉も3人
で協力すれば何とかなるだろうと思っていたが、子供には
頼れないと思ったのか、子供が成人してからもそうした提
案を受け入れようとはしなかった。

その後、姉が結婚して家を出て行った。自分も働き始め
て自立できるようになり、父親も自分の面倒だけ見れば良
いと思って一人暮らしを始めた。その結果、家族全員がバ
ラバラに暮らすようになった。それ以降、両親に仕送りは
続け、関係が切れることはなく、むしろちょうどいい距離
になったと感じている。

しばらくして父親が他界した。現在、母親は1人で近く
に住んでおり、清掃のアルバイトと自分の仕送り4万円だ
けで暮らしているため、生活は結構厳しいと思う。しかし、
自分の方が仕送りをしているくらいなのに、子離れできて
いないというか、一緒に暮らすと布団の上げ下げもできな
いかに子供扱いされ、いろいろと小言を言われるため、
「同居は無理だ」と考えている。

< 生活状況 >

過去1年間、派遣社員として働いていたときの収支はや
や赤字で、月々の収入では生活をまかなえなかった。母親
に1カ月4万円の仕送りをしているのが赤字の原因である。
生活費は節約しているが、会社の同僚に誘われ食事に行っ
たり、飲みに行ったりする機会が多く、そのための支出も
赤字の原因と考えられる。節約をしたいと思い、友人との
つきあいを控えるよう心がけたが、実際には年末の忘年会
シーズンに時々断る程度であった。

< 求職活動、職業訓練など >

これまでいくつか職場を変わっているが、今回を除いて
仕事を辞めてから次の仕事が見つからずに数カ月間無職が
続いたことはなく、したがって生活に困窮したことはな
かった。登録型派遣を始めるまでは雇用保険に加入してい
たことはあまりなく、仮に受給できたとしても微々たる額
だと思い、雇用保険は当てにせず一生懸命仕事を探してき
た。

今回の失業で初めて失業手当を受給した。もう少しで失
業手当の支給が終わるため、本格的に求職活動をしなけれ
ばと考えている。

これまでの職業経験からコンピューターのスキルを身に
つけて来たため、この経験を生かして就職活動をしていき
たいと考えている。ワードやエクセルが使える人はいても、
アクセスをきちんと扱える人は多くないので、そうしたス
キルを必要としている職場で働けたらと考えている。

これまで求職活動には求人雑誌を利用し、ハローワーク
はほとんど利用してこなかった。したがって、ハローワーク
が役立つかどうかを判断することはできないが、3回ほど
利用した限りでは、使い勝手が悪いと思っている。とい
うのも、専用端末で検索すると労働条件等の情報が一覧表

に示されるだけで、事前に会社の特色や社風などが分からず、面接するまで、あるいは入社するまで会社の様子が分からないということは恐ろしいことだと思っているからである。逆に、求人誌は基本的には耳触りのいい情報が載っていて、これまでの経験からするとこれも信用できないので、今後の求職活動ではハローワークと民間の職業紹介サービスを併用していきたいと思っている。民間のちゃんとした職業紹介会社であれば、会社に関する情報のほか、面接担当者の人柄や面接時の注意点なども教えてくれるので、そうしたサービスを積極的に利用したいと考えている。

<派遣労働という働き方について>

今後は派遣社員として働きたいとは思っていないが、派遣法がきちんと抜け道がないように改正されて欲しいと思っている。中途半端に改正すると企業は必ず抜け道を考えてくるので、それがなくならない限り改正しても意味はないと思う。現行の制度では派遣期間が3年以上になったら正社員化する義務が生じるので、多くの派遣社員は正社員化を期待しているが、現実に正社員になった人はほとんどいないのではないかと。同僚でも派遣で7年、10年と働いている人がいたが、責任ある仕事を任せながら安い給料で使い捨てられていた。製造業で派遣切りに遭った男性たちは声を上げて話題になり、規制を強化することになっているが（執筆者注：労働者派遣法改正のことか）、女性の事務系派遣労働者も相当数働いており、声は小さいが同じように考えている人も多いはずなので、こちらもきちんと規制をして欲しいと思っている。

政治家や一部の経済学者は、「働く時間や日数を選べる柔軟な働き方を求めている人もいるのだから、派遣労働という働き方を規制するのは良くない」と言っているが、「そんなナメたこと言わないでください」と言いたい。現在では結婚するまでの腰掛けとして働いている女性はほとんど

いないし、みんな正社員と同じような仕事をしており、責任を持ってまじめに長時間働いている。ちゃんと実態を見てものを言って欲しい。

かつて、自民党政権時代の首相が言ったように、雇用を流動的にした方が雇いやすくなるという主張があるが、そうした政策が失敗したことが今まに見えているじゃないかと言いたい。派遣労働者を始めとする非正規労働者は、正社員に比べて給料も安いうえ、あまりにも権利がなさ過ぎるし、あまりにひどい状況に置かれている。仮に派遣という働き方を認めるとしても、この権利の差をなくすべきだと思う。解雇された際の生活保障や職業訓練制度の充実はやらないよりはましであるが、国が実施する制度はあくまで最低限のものだから、そこに至る前に希望を持って働ける職場にして欲しいと思っている。

具体的な要望としては、失業してからではなく、働いている間でもステップアップのための研修が安く受けられる制度があるといいと考えている。たとえば、自分はコンピューターのスキルには自信があるので、今度は英会話を勉強したいと思っている。そうした研修を実施している派遣会社もあるが、研修の内容は初歩的なものが多く、かつ外部の研修を利用しているだけで、受講料が高いため参加できない。

派遣で働く女性には謙虚な人が多いから、言われっぱなしになっているのではないと思う。しかし、声を上げる人が少ないからと言って、問題がないわけではない。これまで声を上げなかったのは、派遣労働者は正社員にしたいと求めればかえって雇い止めされてしまう弱い立場であり、正社員のように守ってくれる組合があるわけでもないから、むしろ次の仕事を探した方がいいと考える人の方が多かったからと考えられる。これまでは仕事を探せば次の仕事が見つかったということもあるかもしれない。しかし、現在は次の仕事を探そうと思っても見つからない状況にある。

調査番号：東京16

調査日：10月8日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：33歳 ■現住所：神奈川県 ■出身地：西日本 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：金融・保険業、事務職、登録型派遣 ■直近の収入：月20～25万円
- 家計における役割：家計補助者 ■家族構成：配偶者、子ども2人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校卒業 金融関連会社・事務（正社員、4年） 金融関連会社・事務（正社員、3年）
結婚・出産・育児（2年） 銀行・事務（パート、3年） パソコン周辺機器輸入代行会社・事務（登録型派遣、8カ月） 金融機関・事務（登録型派遣、5カ月） 現在に至る

<初職からの経験>

初職から結婚退社まで
1976年、西日本生まれ。

1996年4月（20歳）専門学校卒業後、西日本の金融関連会社に正社員として就職し、事務職を担当した。4年間勤務の後、退職。

2000年（24歳）に、別の金融関連会社に入社した。入社

後3年経った2003年（27歳）職場で知り合った男性と結婚し、退職した。

夫は大阪に本社があるメーカーの西日本にある営業所に勤務していたが、その後、東京の営業所への転勤に伴い、神奈川県に引っ越した。間もなく子どもが生まれたため就職せず、翌年も出産したため、計2年間は仕事を休んだ。

仕事を再開してからの経験

夫の会社は従来型の年功型賃金体系を維持しているため、年収は250万円（額面）ほどであり、これだけでは家族4人の生活費を賄うことは難しかった。そこで、家計を支えるために自分も働こうと思い、2人目の子どもが8カ月の頃、求職活動を再開した。

2005年（29歳）、ハローワークで探した銀行の窓口業務の職に就いた。1日5時間勤務で、時給は820円であった。長く働きたいと思っていたので正社員を希望していた。この会社にはパート社員から正社員への転換制度があったが、正社員になるためには1カ月に1回、静岡県の本社で研修を受ける必要があった。とはいえ、子どもが小さかったため毎月研修に行くことはできず、正社員への道をあきらめた。また、パート勤務を続けたとしても、同じ店舗に5年以上続けて勤務することができず、勤務地が変わると通勤が不便になるため退職した。

2008年10月（32歳）、コンピューターの周辺機器の輸入代行業務をしている会社に登録型派遣社員として働き始めた。主な業務は、不良品を回収し、アメリカのメーカーに返品するというもの。連絡は英文のメールでやりとりをした。顧客だけでなく、メーカーや商社など、連携する会社がいるいろいろあったので、仕事は煩雑で、作業の量も多かった。

勤め始めて3カ月ほど経ってから、派遣から正社員に転換しないかとの誘いがあった。その際、正社員になっても社会保険に加入しないが、手取額は増えるから本人にとっても好ましいだろうと言われた。しかし、そんなことをしてもすぐに不正だと分かってしまうだろうと思い、会社に不信感を持った。また、もともと業務量の多い会社であったが、退職者が出て欠員を補充しなかったため、仕事はますます忙しくなっていた。にもかかわらず、残業をつけないよう指示された。その後、自分の前任者がやめた理由は、仕事が忙しい上、上司がすべき仕事などもやらされて、身体的にも精神的にも耐えられなくなったことが原因だったということを知った。

こうした状況に対して、同僚の派遣社員は不満を言えずにいた。というのも、この会社の経営者はときどき正社員を高級レストランに連れていってご馳走していたので、正社員はそのことに恩義を感じ、無理な依頼をされても断れなくなっていたからである。他方、派遣会社に改善を求めてもきちんと対応してもらえなかった。そこで、正社員転換の申し出を断り、8カ月後の2009年5月（33歳）に退職した。

退職して間もなく、1年前に登録していた派遣会社から金融機関の本社で欠員が出たという連絡があったので、派遣就業することに決めた。出退勤時刻は8時45分から17時。昼に1時間の休憩時間があり、15時に10分間休憩がある。月収は額面で20～25万円、手取りでは17～23万円程度である。

職場の同僚は、正社員、派遣社員、嘱託社員が各数名ずつである。嘱託社員は、同社を退職したあと再雇用された人たちで、すべて60歳以上で、いずれも管理職にもなったベテラン社員だったので、業務に関しては正社員以上に詳しい。

主な業務は、銀行本社での事務作業である。派遣、嘱託ともに全く同じ仕事をしている。正社員は決裁権限を持っているので、派遣、嘱託が担当している業務のほかに報告書の最終確認および承認をする役目を担っている。

< 派遣会社について >

以前は大手派遣会社を利用していたが、現在は別のあまり大きくない派遣会社と契約をしている。以前の派遣会社は、営業担当が新卒だったらしく、派遣先の社長からも怒鳴られたり、派遣社員に対するフォローができなかったりと「本当に頼りない」人だった。しかし、これは個人の問題ではないかも知れない。途中から担当者が派遣会社の支店長に変わったが、対応に大きな差はなかったからである。大手の派遣会社は派遣社員へのサポートがしっかりしていると聞いていたが、逆に大手は顧客や派遣労働者が急増したため、かえって社員教育が十分できていないのではないかと感じた。

現在の派遣会社の担当者は、月に一度職場に様子を見に来るか、電話で話を聞いてくれるので安心できる。また、新聞の折り込み求人やインターネット情報などで比べると、派遣会社が取る手数料が少ない分、他の派遣会社より時給が100円程度高い。映画のチケットなどが安く購入できるなど、派遣会社独自の福利厚生もある。さらに、バックには大きな組織があるので安心できる。これらの点で、現在の派遣会社に満足している。

派遣という働き方については、正社員ほどは重い責任を負わされないという気軽さがある反面、いつ契約が切れて職を失うかが分からない不安がある。一長一短だが、やはり安心して働ける正社員の方が望ましいと思う。しかし、現在の自分の年齢で、小さな子どももいるとなれば、最初から正社員で働ける会社はないと思うので、まずは派遣やパートなどの非正規で経験を積んでから、正社員になれたらと思っている。

< 今後の展望 >

現在の職場は、自宅からも近く、職場の人間関係も良く、働きやすい。また、育児や介護のため1年間の短時間勤務（通常よりも就業時間が1時間短い）制度があり、実際に制度を利用している社員がいるなど、女性が働きやすい職場である。したがって、夫の転勤がない限り（おそらくそれはないと思うが）、ずっと働き続けたいと思っている。

派遣会社からは、この職場では派遣労働者が正社員へ転換できると聞いている。派遣先の次長からも、順調にいけば3年後には正社員にしてもらえると聞いており、過去にもそうした事例があったとも聞いている。そこで、当面は現在の職場で正社員になれるよう頑張っていきたいと思っている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：42歳 ■現住所：東京都 ■出身地：鹿児島県 ■学歴：高校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：製造業、生産職、登録型派遣
- 直近の収入：勤労収入なし / 生活保護受給（月約13万円） ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 ガラス仲卸問屋・現業（正社員、3年） 建築会社・作業員（正社員、1年）
路上生活（短期間） ハウスクリーニング会社・清掃（アルバイト、1年） 運送会社・運搬（正社員、8年）
建設会社・作業員（1カ月） 運送会社・運搬（正社員、4年） 新聞販売会社・新聞配達（アルバイト、
3年半） 新聞販売会社・新聞配達（登録型派遣、2年弱） 自動車メーカー・検査（登録型派遣、6カ月）
現在、生活保護受給中（受給開始後3カ月） / 求職中

< 仕事に就くまで >

1967年、鹿児島県生まれ。

主たる収入源は父親の漁業で、母親も半農半漁の仕事に従事していた。15歳当時の家庭の暮らし向きは「大変苦しかった」と記憶している。また、当時「信頼できる先生・友人はいなかった」。

兄と弟がいるが、二人はそのまま故郷に残り、自分だけ高校卒業後故郷を後にした。

< 初職からの経験 >

1985年（18歳）、東京での正社員としての就職が決まり、全日制の高校卒業後に上京し、ガラスの仲卸問屋に就職した。3年目の勤務中、ガラスが顔にぶつかり、30針を縫う大けがをした。そのため、仕事が恐くなり退職せざるを得なくなった。その時の大けがで、二度とこの仕事に戻りたいとは思わなくなった。

1988年（21歳）、神奈川にいる親戚の紹介で建築業の正社員の仕事に就いた。しかし、1年ぐらいで社長とそりが合わなくなり退職した。

退職後、東京に戻りしばらくぶらぶら生活していたが、お金がないためホームレス生活をする羽目になった。

翌1989年（22歳）こうした状態から抜け出すのに手助けしてくれたのが宗教団体であった。その宗教団体に入会したことにより、入会した宗教団体が関係するハウスクリーニング会社でアルバイトとして働くことができ、生活を立て直すことができた（宗教団体はハウスクリーニングの仕事辞めると同時に脱会した）。

1990年（23歳）、ハウスクリーニングの仕事辞めた後、知り合いに運送会社を紹介してもらい、正社員として約8年勤務した。就職時の社長（長男）が亡くなり、続いて次の社長となった母親も死亡、そして先代社長の弟が新しい社長となった。しかし、その新社長と肌が合わなかった。家電製品の運送を主な仕事にしていたが、「腰痛で休みたい」と言ったら、「辞めてもいい」と言われた。そのため退職せざるを得なくなった。また、当時、借り上げアパートの家賃を会社との折半で支払っていたが、退職と同時に追い出された。

その後、31歳（1998年）の時に、岩手県内のダム工事で働いていた友人から工事作業員の仕事があることを教わり、そちらで仕事をするように誘われた。友人が新幹線のチ

ケットまで送ってくれたので、早速行くことにした。

しかし、せっかく東京を引き払って行ったダム工事の仕事も1カ月でなくなってしまった。そこで、同じ岩手県内の運送会社に正社員として就職し、4年ぐらいい働いた。正社員という身分だったが、給与の支払いは日給月給制で、取りの給料は少なく、結果、毎月赤字の生活だった。それは仕事があるわけではなかったからで、そして、仕事に対し迅速に対応する必要があるため毎日待機する必要があり、そのため副業をすることもできなかった。結局、宮城県から秋田県に荷物を運ぶ途中、会社に車を戻して退職した。正社員として働いたが、実際は非正社員のような労働条件だったと思う。

退職時には35歳（2002年）になっており、そのまま東京に戻り、仕事の関係で知り合った友人の家に住まわせてもらった。

住居の確保が最優先だったので、就職情報誌をみて、仕事と住居が一緒の仕事は新聞屋だと思い、すぐに新聞屋のアルバイトの求人に応募した（タクシー会社などにも寮はあるが、トラックにずっと乗っていたため、乗用車には乗れなくなってしまっていた）。新聞屋では約3年半の間、配達と集金の仕事に従事した。しかし、最後には、世の中の不景気とともに、勤務していた新聞屋の経営状況も悪くなり、賃金も遅配気味になった。賃金の支払いを求めたが、遅配状況は改善されなかった。

2006年（39歳）約3年半の間勤務した新聞屋を辞めて、新聞配達員紹介専門の派遣会社に登録した。住み込みの配達員を確保できない時に、期間を決めて配達員を派遣する会社であった。この派遣会社が派遣先の販売店に住めるように手配、準備してくれたので、住居の点では困らなかった。また、当時所有していた家財道具等は派遣会社の倉庫にいられたので、その点でも転職はスムーズにいった。

2008年（41歳）、2年近く経ったころから、仕事が無くなってしまった。それは不景気で配達員が仕事を辞めなくなり、派遣会社への仕事の依頼がなくなってしまったためである。

ちょうどその時、仕事でつきあいのあった知り合いが群馬県にいて、「こっちの派遣はいいよ、稼げるよ」と声をかけてくれた。そこで彼に紹介してもらった派遣会社に登録した。しかし、登録した派遣会社では、未経験かつ40歳を超えていることを理由に仕事がこなかった。そこで派遣会社を変えることにし、次に登録した派遣会社では、「年

年齢47歳まで/未経験OK」という条件の自動車メーカーの工場に製造部門の派遣労働者として働くことになった。最初に契約を結んだのは2008年7月で、3カ月契約を結んだ。その後、次の10月更新の際には、通常は3カ月単位の契約だが、10～12月と1～3月の2回分の半年契約を行った。

時給は3カ月ごとにアップするシステムになっており、受けた説明では最初は1,050円、2回目は1,100円、3回目は1,150円、最高1,300円まで上がると聞いていたので、このまま続ければ手取り25万円ぐらいになると思っていた。手取りが一番いい時で20万円になり、平均すると17万円程度だった。日勤と夜勤（日勤：8時半～21時半、夜勤：21時～翌8時半）があったが、夜勤は時給が高かった。1日12時間ぐらい働いた。新聞屋で夜勤くことには慣れてはいるつもりだったが、それでもきつかった。勤務は4勤2休だったが、5勤2休に比べて、収入が少ないので、残業で収入を維持した。

仕事は2トン、4トントラック車搭載のシリンダーヘッド完成品の検査助手業務で、寸法の確認、傷やさびの確認、不良箇所の修正を行った。仕事自体は1～2カ月程度で習熟できる程度の仕事内容であった。シリンダーヘッドには色々な種類があるが、基本は4種類しかなく、ある程度経験すれば慣れる仕事だった。契約更新に伴う時給のアップは、技能の向上よりも勤続月数を考慮したものだったと思う。一緒に仕事をしてきたチームは8人ぐらいで、うち派遣社員が5人占めていた。担当業務については、自動車メーカーの正社員よりも派遣の方が仕事はできたと思う。

2008年10月中旬、突然、解雇通告（12月末までの雇用）を受けた。解雇の対象は派遣社員と期間工を合わせて5,000人ぐらいであった。うち派遣社員が約7割を占めており、自分の派遣会社からの派遣労働者は250人ぐらいであった。

11月に入って正式な解雇通告を受けた。当時働いていた派遣社員と期間工のほとんどが3月まで契約を結んでいたが、解雇通告は「ただ解雇されただけ」という感じのものだった。自動車メーカーの社員と自分が属していた派遣会社の工場常勤社員（正社員）から1人ずつ呼ばれて、「いつ部屋を空けられるか」と聞かれた。派遣会社に「仕事をさがして欲しい」と言ったが、派遣会社の常勤社員（正社員）から「自分もこれで仕事がなくなる」と聞いて、「早く住むところをさがさない」と思った。他の派遣会社から派遣されていた人は年を越しても寮に住むことができたが、自分の派遣会社は契約事項の中に、「契約が切れたら、4日以内に寮を出る」という決まりがあった（その後、自分の派遣会社でも「年明けまで」に条件が変更された）。

12月27日が仕事の最終日だったので、この日まで仕事をした。すでに派遣社員が従事する製造ラインの仕事はなく、清掃の仕事を続けていた。製造ラインの仕事は他の工場から正社員がきて、派遣がやっていた仕事に就いていた。検査助手の仕事自体は面白くなかったが、あれば仕事を続けたいと思っていた。しかし、自動車工場に働いて技能を身につけたいとまでは思っていなかった。

<現在の生活状況>

2008年12月28日に会社の寮を出て、居住地域の雇用促進住宅に申し込みをした。しかし、そこに移るためには6万円の家賃が必要なことがわかった。当時、そのお金がなかったので断念した。そこで家賃5,000円で住むことができ

る県営住宅をさがし、そこに住むことにした。県営住宅には約3カ月滞りしたが、滞在中、仕事はなかった。勤務していた自動車メーカーの勤務期間が約5カ月間だったこともあり、雇用保険の失業給付をもらえなかった。友人に貸していたお金の返済金を生活費に充てて暮らした。

2009年（41歳）6月の終わりになり、いよいよ生活費にも困るようになった。何とかしなければと思っていたところ、顔見知りだった雑誌記者に東京で活動している労働組合を紹介された。そこですぐ連絡したところ、仕事をさがしてもみつからないのであれば、東京に出るようにすすめられた。

2009年7月7日に上京し、紹介された労働組合の事務所へすぐに行った。出発時の手持ち現金は千円ちょっとにすぎず、事務所のある都心に着いた時には450円しか残っていなかった。それでも「これでたばこが買える」と思ったことを覚えている。というのは、お酒も飲むが、たばこは自分にとって精神安定のための必需品だからである。

午後1時に事務所に着いて、聞き取りを受け、すぐ組合に加入した。その後、午後2時半に組合の人と一緒に福祉事務所に生活保護の申請に行った。手持ちのお金はすでに150円程度にまで減っていた。福祉事務所で2,000円の仮払いを受け、紹介されたカプセルホテルに行った。

次の日、福祉事務所で聞き取りを受けた。その際、さらに5,000円の仮払いが支給された。生活保護費が支給される時に、支給した仮払い分が差し引かれるとのことだった。

2週間後、生活保護費が支給された。支給額は約8万円で、仮払い分を差し引くと残金は67,000円程度だった。福祉事務所では、「カプセルホテルの住所を求職活動の住所として登録できるので、3カ月の間に仕事をさがしてほしい」と言われた。

カプセルホテルは3カ月で出なければならぬが、加入した労働組合では、「カプセルホテルにいても仕事はみつからない」ことがわかっていて、カプセルホテルにいたら、仕事の面接にすらたどり着けないのである。実際、カプセルホテルにいる人で、仕事をみつけた人はいなかった。会社には応募者がどのようなところに住んでいるのかわかってしまうからである。こうしたことは組合から教えてもらうまでわからなかった。

だから再就職のためにこそアパートに移らないといけなかった。このことは福祉事務所の人でも知らなかった。労働組合が新たにアパートの部屋をさがしてくれたので、約1カ月でアパートをみつけることができた。福祉事務所からは、部屋をさがす前に仕事をさがすように言われたが、組合の人たちが一緒に事務所に行って交渉してくれたおかげで、部屋を借りることが認められた。

借りたアパートは東京都区部にある。部屋は1ルームで、家賃は52,000円（共益費込みで53,000円）、生活保護費は月13万円程度支給され、家賃を差し引いて手元に残る現金は7～8万円ぐらいである。そこから電気・ガス・水道・携帯代といった費用を支払うと（水道のみ基本料金が免除されている）、実際のところほとんどお金は残らない。そのため食費を切り詰める生活をしており、現在、1日1食である。スーパーでの買い物も特売品しか買わない。なお、酒は飲んでいないが、たばこは自分にとって精神安定の必需品で、これだけはやめるわけにはいかない。また、携帯電話も仕事さがしのツールなので、打ち切ることができない。その意味で、生活保護を受けていても、生活のための

必要経費は結構かかると思った。

仕事さがしでは、カプセルホテル滞在中からハローワークに行ったり、情報誌をみたりしているが、結局現在まで仕事はみつからない。40歳を超えると「ガクッと仕事がなくなる」と思った。また、免許や資格を持っている人にしか仕事は回ってこないとも思った。

労働組合との接触は今回がはじめてだった。組合費は賃金に応じて払うことになっており、最低500円だが最近では払っていない。入会金の5,000円は支払った。生活保護の申請までしか対応してくれない組織もあるようだが、今回お世話になった組合はよく世話をしてくれて感謝している。

最後に実家に帰ったのは、実家の新築の手伝いの時で、岩手県で仕事をしていた時だ。故郷の家族とはすでに5～6年ぐらい音信不通が続いている。こちらから連絡を取ろうと思えば取れるが、家族は自分の連絡先を知らないの、家族からは連絡しようと思ってもできない。兄と弟は両親のそばにいたので安心している。故郷からの上京後、20代前半ぐらいまではお金がなくなると送ってもらっていた。

かつて結婚願望はあったが、そういう機会は今に至るまでなかった。

友人について言うと、失業したり、仕事をさがしているその時々、仕事を紹介してくれたり、情報や住まいを得られる団体を紹介してくれるといった友人、知人があらわれた。これによって人生をここまで来ることができた。このようにこれまでの人生の転機の際に誰かが助けてくれた。みんな仕事で知り合った人ばかりで、故郷の友人は1人もいない。しかし、仕事上で知り合った友人達でも、今でもつきあいのある人は少ない。実際、20年来のつきあいの友人はたった1人である。

現在の数少ない楽しみは深夜アニメをみることである。また、友人との交流も2008年の自動車メーカー勤務の時に知り合った友人と会う程度である。なお、自動車メーカー退職後の県営住宅居住中に図書館に行くようになった。もともと中学生ぐらいから本を読むのが好きだったこともあり、今でも地元の図書館によく行っている。図書館に行くと、朝から夕方までいるようにしており、本を借りることはない。借りてアパートで読み始めると、読み終わるまで寝ないからである。

< 本人の望みや不安 >

今後の見通しは暗く、将来に対し強い不安を持っている。時々、ハローワークに出かけ、運送業やビルの清掃関係の仕事をしさがしている。もう自動車製造などの製造業で働こうとは思わない。運送関係の仕事は大型車やダンプの求人が多いが、自分は中型トラックまでの免許しか持っていない。フォークリフトの免許を取ると、倉庫関係の仕事ができることを知っているが、資格を取るのにお金がかかり、その費用を支払うことができない。資格取得のための支援があると聞いたことがあるが、どこで調べればいいのか自分ではわからない。パソコンもなく、また使えないので、情報を得ることができない。また、仕事を始めると資格を取る時間がなくなると思っている。

現在通っているハローワークは、キャリアアップハローワーク（非正規労働者就労支援センター）である。キャリアアップハローワークの存在を知っている人は少なく、普通のハローワークはすごく混雑しているが、キャリアアッ

プハローワークでは検索してすぐに面接してくれる。提供している情報は一緒である。キャリアアップハローワークの場合、前職が非正規の人が対象になっているのに、前職非正規の人の多くが普通のハローワークに行っているように思う。このように混雑しているハローワークとそうでないハローワークがあるのは、行政の宣伝の問題とともに、行政に調整する意思がないからではないかと思う。

また、キャリアアップハローワークの受付での対応をみると、自分の状況や希望に応じてきめ細かくかつ積極的に対応してくれていないと思う。必要な情報も質問しなければ教えてくれないし、その情報の存在を知らない限りは何も言ってくれない。

生活費という点では、生活保護費の水準を改善してほしいと思う。現在の支給水準（月13万円）は低すぎて、実際の手取り月8万円の保護費では生活できない。家賃や食費（現在、1日1食しか食べられない）など毎日生活するだけで終わってしまい、仕事さがしに振り向ける余裕がない。結果的にこうした生活を続けても社会復帰はできないと思う。

また、生活保護費を受給しながら仕事をさがすのであれば、その活動費を含んだ水準まで引き上げるべきだと思う。例えば、自分は中型トラックまでの免許と経験はあるが、大型トラックやフォークリフトの免許が取れば就職に有利だし、また、長期的な生活設計を立てられると思う。しかし、免許を取りたくても、現在の保護費から費用を捻出する余裕はないし、仮に、現在の状態で就職できても仕事をしながら免許を取るゆとりは持てない。

生活保護費は、生活のための一時的なつなぎの役割だけでなく、長期的視点から見直してほしいと思う。その基準が時代に合っていないのではないかと思う。

また、仕事さがしや将来の生活設計にとって、情報は重要だと思う。次の就職先をいかにみつけるか、住まいをどうするか、所持金が限りなく0円に近い状態になった時、どのようにして切り抜けるか、どこに、誰に、どの団体をお願いすれば現在の状態から脱することができるのか、行政にはどのようにお願いすれば次のステップに進むことができるのか、こうした点についての情報を持っているかどうか大きな違いになると思う。また、生活保護費とも関連するが、パソコンも持たず、新聞も取る余裕のない状態で、どこから就職のための情報を入手できると考えているのだろうか。こうした点について考えてほしいと思う。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：21歳 ■現住所：埼玉県 ■出身地：岩手県 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：運輸業、倉庫関係職、アルバイト
- 直近の収入：勤労収入なし / 生活保護受給中（月11万円） ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 アニメ関係専門学校中退（新聞奨学生退職） ゲーム関係専門学校卒業 フリーペーパー配布会社・運営スタッフ（アルバイト、2カ月） 倉庫会社・仕分け（アルバイト、2カ月） 無職（2カ月） 派遣村相談 現在、生活保護受給中 / 求職中

< 仕事に就くまで >

1988年、岩手県生まれ。

両親、妹との4人家族であった（後述のとおり、両親は後に離婚した）。

祖父がもともと公務員（保健所勤務）だったので、公務員になることを周囲から勧められていた。特に母親は高校を出たらずに就職してほしいと考えていたが、父親は好きなことがあれば、その道に進んだ方がいいのではと考えていた。父親は中小企業の正社員で、母親はパートをしていた。

2006年（18歳）4月、高校卒業後、上京し、アニメ関係の専門学校に入学した。高校に入る前からアニメは好きだったが、高校入学の頃からアニメの仕事を強く希望するようになった。高校時代に東京にあるこのアニメ関係の専門学校の存在を知り、好きなアニメの仕事をしたと強く思った。入学金は祖母の生命保険と祖父の年金から出してもらった。

しかし、入学後1年も立たないうちにこの専門学校に失望し（カリキュラムは2年制コース）、学校を中退することにした。自分のやりたいことはアニメではなく、ゲームだと気がついたからである。この専門学校では、自分の学びたかった物語全般を書く技術が学べなかったからである。

2007年（19歳）4月、ゲーム関係の専門学校の2年制コースに入り直した。この専門学校ではゲームの全般的な企画ができるカリキュラムが用意されていて、自分の学びたいことを思う存分学べた。また、自分は絵が書けないので、制作者として無理に不得意な分野でがんばるよりはという理由もシナリオライターを志望する動機となった。こうしてゲームの仕事は自分がやりたい仕事だとわかったので、そのまま2年間通学して2009年（21歳）3月に卒業した。

自分のやりたいゲーム関係の職種は、いわゆるゲームプランナー（ゲーム企画から最後の製品化までゲーム制作を管理監督する仕事で、いわばプロデューサー的な仕事）、またはシナリオライター（ゲームのシナリオを作る仕事）である。ゲームの中で好きなのは、アクション系の歴史もので、パソコンゲームではなく、P S 2やWiiなどゲーム専用機のゲームが対象である。

就職活動として、日本の代表的なゲーム会社を中心に多数のゲーム会社に履歴書とゲーム企画書を送った。送ったゲーム企画書は専門学校の卒業制作作品である。卒業前の2008年11月より就職活動を開始したが、残念ながら卒業時においても就職先は決まらなかった。

現在、就職活動に使用した卒業制作の企画書をもとに、

新しい企画書を作り直して、卒業後半年経った今でも就職活動を行っている。しかし、面接までたどり着けない企業もあり、将来の採用の見通しは厳しい。

今に至るまでゲーム業界に就職できない理由は自分ではよくわからないが、もともと求人数の少ないことが最大の理由だと思う。特にゲーム企画の仕事で顕著である。だからゲーム企画の仕事希望しても、最初はプログラムのデバッカー（プログラムに存在するバグ（誤りや欠陥）を発見して、それを修正する作業を行う担当者）として、アルバイトなどの身分でゲーム業界に入る人も多い。J A V Aなどのプログラム言語への理解が必要だが、自分もデバッカーとしてとりあえず就職してもよいと考えている。そこから企画業務へと進むことも可能だからである。また、企画のメインライターではなく、外伝ストーリーのためのサブライターとして仕事を始めてもよいと考えている。

しかし、現在のゲーム業界では即戦力が求められており、人を育てる土壤のないのが実態だ。同じ専門学校の卒業生の中には、ゲーム業界以外のアルバイトをしている人もいる。

< 初職からの経験 >

2006年（18歳）4月、上京後、専門学校通学とともに新聞奨学生になった。住み込みの新聞奨学生になることを条件に、食事、住居など新聞配達店から提供してもらうことになっていたからである。

しかし、新聞配達開始後まもなく、新聞販売店の専業正社員から肉体的・精神的虐待やいじめを受けた。体を痛めつけられたり、また、人格を否定される言葉を投げつけられたりした。それは一種のマインドコントロールで、今までになくひどく傷ついた。新聞奨学生の9割は学校を卒業できないと言われているが、結局自分も3カ月で新聞配達店を辞めることになった。このときの体験が精神的障害となって残ってしまい、その後に従事した仕事がすべてうまくいかなくなってしまった。

ゲーム関係の専門学校卒業前後の2009年3～5月の間にアルバイトをした。フリーペーパー配布企業の運営スタッフで、主な仕事はフリーペーパーを配布するアルバイトの管理や、駅などに置いてあるフリーペーパーの入れ替えなどだった。アルバイトをしながら、ゲーム業界を目指したが、アルバイト先で、「おまえには文才はない」などと自分の希望を強く否定され、新聞配達店に続いて再びいじめられることになった。フリーペーパー配布企業の職員の働き方は、いわば体育会系のノリで、仕事の仕方は「不良の

流儀」だった。自分はそうしたノリについて行けなかった。結局、こうした「不良の流儀」を押しつけられて、再び自分の人格を否定されてしまった。その結果、3カ月もしないうちに、また辞めることになった。

2009年5月からは2カ月間、倉庫会社で働くことになった。会社の業務内容はお弁当屋さんの食材を仕分けする仕事だった。1日8時間(休憩1.5時間)で、日給7,000円、20日働いて月14万円の収入だった。自分の主な担当業務は冷凍庫の中で食材の段ボール箱を運ぶ仕事だった。

しかし、まだ仕事に慣れる前から、職場の人に「早くやれ」とか「辞めさせろ」などと言われた。みんな人間とは思えないくらい仕事の作業スピードが早かった。7月に入ると、「おまえがやっているのは仕事にならない」と言われた。

職場で働く人の多くが外国人で、コミュニケーションを取るのも難しかった。さらに親会社のパートと子会社のパートの仲が悪く、風紀が乱れていた。また日給も安く、冷凍庫内での作業のため、寒さで体調が悪くなったりした。

今までの職場と同様に、この職場でも他の人たちから、「指導」という名のもとで人格を否定されることになった。結局、体調不良もあり、退職することにした。

以降、正社員、アルバイトを含め仕事はしていない。

<現在の生活状況>

母親は実父と離婚している。2008年(20歳)5月に母親が上京し、2009年1月には再婚した義父も上京した。そのとき、母親と義父と3人で東京都区内で一緒に暮らし始めた。

しかし、義父からは就職できないことを理由に包丁を向けられた。母親はアルバイトでもすればと、アルバイトをしながらの一人暮らしを勧め許してくれた。両親と暮らしていたときは、自分が遊ぶお金は自分の稼ぎでまかなっていたが、家に生活費を入れる余裕はなかった。

2009年(21歳)5月から、アルバイトをしながら、埼玉県で一人暮らしをはじめた。

しかし、勤め先での人格否定のため仕事を続けることができなくなり、また、新しい仕事を探しても続かないような気がした。そのため2009年9月から生活保護を受ける生活に入った。

きっかけは2009年7月に埼玉県内で行われた地方版派遣村(「なんでも大相談会」)に行ったことである。相談会の開催は、アルバイトに行った際に配布のチラシで知った。相談会では、「精神的に働くのが怖くなった」、「障害の自覚症状があるので病院に行きたい」と伝えた。また、新聞配達店におけるいじめや人格否定についても相談した。相談会の後、集団で生活保護申請に行き、その後、行政から診察命令書が出て病院へ行った。

9月5日にはじめて生活保護費が支給された。

生活保護の認定において、金品・物品の仕送り等の確認が行われた。実父に扶養命令書が送られたが、実父は3月に自己破産していたので、扶養のための生活費を出すことは困難だった。また、義父と母親も同様で、いずれも扶養は困難と行政に伝えた。こうした経緯を辿って、生活保護費の支給が決定した。

生活保護では、税・社会保険が行政負担となっており、実支給額は111,160円である。その中から、家賃として35,000

円を支払っている。

最大の相談者は都内に住む母親で、電話でよく話す。母親は「働ければ何でもいい」、また「安定した仕事をして欲しい」と言っている。また、母親はたまにお金を援助してくれる。実父も、自分が生活保護を受けている間に安定した仕事を探そうにと言っている。故郷にいる実父とも電話ではしばしば話している。

自分が帰郷する際の交通費などは、今までは実父から多少の金銭的支援があった。現在、実父は妹と暮らしているが、自己破産したため、家は差し押さえられた状態となっている。

精神障害の治療のため病院に一度行ったが、診察した診療内科医からも人格を否定される言葉を投げつけられた。今、病院を変えてもらえるように交渉している。

なお、地域の個人加盟労働組合は、新聞奨学生を辞めて、集金のアルバイトをしていたとき、政党機関誌を読んで活動を知った。組合費は、無職の場合月500円である。ただ、自分は未納時期があったので、現在、月2,000円支払っている。現在住んでいる地域にもこのような組合を作りたいと思っているが、どうしたらよいかわからない。

<本人の望みや不安>

これからの生活については、強い不安を感じている。「展望はみえない」という感じだ。しかし、これからも就職先としてゲーム会社を対象に就職活動を続けていきたいと思っている。まだ今まで応募していないゲーム会社に作品を送ったり、ゲーム作家などを対象とした賞に応募したいと思う。自分が高校時代から考えてきたこと、思っていたことを形にしたいと思う。ゲーム業界の採用は、あくまで作品重視だと思う。とにかく作品を出してアピールしていきたいと思う。しかし今の生活保護費の11万円ではゲーム機を買えないのがつらい。

一方、自分が今までに仕事をした職場では、「おまえはどこにも就職できない」などと言われた。自分は周りから「おまえはいるだけで周りに殺意を与える存在」と考えられていたようだ。「自分はどこにも受け入れてもらえないのか」「生まれてこなければ良かった」などとナーバスになっており、自信を失っている。このままでは将来はホームレスか、世捨て人しかないのではないかと悲観している。誰かから必要とされる存在になりたい。使い捨てではなく、心の底から必要とされる存在になりたいと思っている。

仕事につく、仕事をする上で一番困るのは、職場における精神論中心の考え方である。「若いからできる」というのは間違いだと思うし、「体育会系」的働き方は改めるべきだと思う。自分としては、自分と同じような被害にあっていない人や、立場にある人たちとの交流会を開催したいと思っている。

なお、行政への希望として、就職に関するキャリアカウンセリングを市役所や公民館で受けられるようにしてほしい。また、今まで役所などをたらい回しにされた経験があるので、福祉事務所のワンストップサービスが必要だと思っている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：35歳 ■現住所：東京都 ■出身地：宮城県 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：教育サービス業、事務職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし/失業手当受給
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 印刷会社・営業（正社員、3カ月） ファーストフード店・販売（アルバイト、4カ月） パン製造販売会社・生産（正社員、3カ月） 引越会社・建築会社（日雇い派遣、1週間） 古書店・販売（アルバイト3カ月、正社員3カ月） コンビニ・販売（アルバイト、1年）+コンビニ・販売（アルバイト、1年）かけもち DVD販売店・販売（アルバイト、8年） 携帯電話会社・オペレーター（登録型派遣、3カ月） インターネットプロバイダー・オペレーター（登録型派遣、3カ月） 資格取得専門学校・添削指導（登録型派遣、3カ月） 現在、失業手当受給中/求職中

< 仕事に就くまで >

1974年、宮城県生まれ。

父親は地方新聞社勤務で、母親は時々パートで働いていた。幼い頃は父方の祖父母も同居していたが、早くに亡くなった。他には弟がいる。家庭の暮らし向きはゆとりがあったと思う。塾や予備校に通うことを制限されたりはしなかった。家計が苦しかったという訳ではなく、体力作りのために、父親の勧めもあって小学校5年生から予備校生までの9年間新聞配達を続けた。そのため、特に毎月決まったお小遣いのようなものはもらっていなかった。

普通高校を卒業後、1年間地元の予備校に通った。大学は東京の大学に進学。大学在学中は日本育英会の奨学金（1種）を得ていたため、アルバイトはしなかった。大学では文学部で歴史を専攻。大学卒業後は大学院への進学を希望していたが、両親からの金銭的援助が受けられなかった（大学院に進学すること自体は反対されなかった）ために、進学を断念。大学院に進学できなかったことについて、両親に対してわだかまりがある。親しい友人はみんな大学院に進学し、自身だけ進学できなかったため、このことが「その後の人生に結構大きな影響を及ぼしている」と考えている。

< 初職からの経験 >

大学院への進学にこだわりがあったので、初職の業種や働き方は「どうでもいいや」と思っていた。お金を貯めて大学院に進学しようと思っていた。そのために「様々な職を転々とするようになったと思う。」「ここではあまりお金が貯まらない」とか「勉強時間が取れない」と考えて転職しているうちに、職歴が多くなってしまった。大学を卒業した24歳（1998年）から35歳となった現在までに、14社ほどの仕事を体験している。

1998年（24歳）大学卒業後、最初に就いたのは印刷会社の営業職。正社員だった。額面で20万円強程度。住宅手当が5万円ほど出ると聞いていたのに2万円しか出なかったり、車の運転はしなくてよいと聞いていたのに運転が必須だったり、聞いていた条件と違ったため、3カ月で退職。

ファーストフード店でアルバイトを4カ月した後、パンの製造販売を行う会社に正社員として就職。パンを製造する業務に就いたが、朝5時出社、帰りが夜10時頃になるなど、仕事がつくて3カ月で退職した。次の仕事までのつ

なぎとして日雇い派遣会社に登録。「今思えば違法派遣だが、建築現場に派遣された」こともあった。他には引越業務に派遣されたこともある。

日雇い派遣は続けられないと思い、1週間程度で辞めて、古書店でアルバイトを始めた。3カ月経ったところでアルバイトから正社員に昇格。さらに3カ月勤めたが、店主と喧嘩をして辞めてしまった。

その次に勤めたのがコンビニのアルバイト。コンビニ2社を掛け持ちし、1年間働いた。1社では後半、発注業務や商品管理も担当していた。この間、簿記3級から1級までを取得。簿記の資格を取得した理由は、工作上必要だったという訳ではなく、「社会人として簿記の一つも知らないはずだろう」と思ったから。

2000年（26歳）半ばからDVD販売店のアルバイトをした。ここが一番長くて8年間勤めた。アルバイトだったが、勤務歴が長くなったので、途中からはフロアマネージャーとして20人ほどのアルバイトのシフトを組んだり、店の商品管理を行い、ネット通販にも出店していたのでその管理なども行っていた。正社員にならないかという話はあったが、正社員は「名ばかり店長」だったのでなりたくなかった。「正社員はサービス残業だけど、アルバイトなら働いた分の時給はもらえる」ため、アルバイトのままであることを選択。月の労働時間が240時間を超えることもあった。辞めた理由は、雇用保険にだけは入りたいと思っていたのに入れなかったことと、これ以上責任だけが重くなるのは嫌だと思ったから。国民健康保険や国民年金はアルバイト代から自分で支払っていた。

2008年（34歳）後半にDVD販売のアルバイトを辞めた後、派遣会社に登録。携帯電話会社のコールセンターにテレフォンオペレーターとして派遣された。そのコールセンターの業務は当該派遣会社が一括して請け負い、当該派遣会社の正社員が派遣社員に指示を出していた。この派遣会社は「きちんとしていたと思う」。最初は2週間で契約し、もう2週間契約更新を1回した後は1カ月更新だった。契約更新時に研修を受け、その度に細切れに時給が上がっていった。月給は手取り20万円ほど。1カ月更新を1回、2カ月更新を契約したところでその1カ月目で退職。合計3カ月働いた。辞めた理由はコミュニケーションの問題。コールセンターには種々雑多な電話がかかってきたが、いきなり怒鳴られることもあり、精神的な負担を感じていた。電話でのコミュニケーションスキルについて、正社員の人はスキルがあると言ってくれていたが、自分自身では低い

と思う。様々な内容の問い合わせ電話に対応しなければいけないことに負担を感じ、2009年初めに退職した。

退職後、別の派遣会社に登録。再びテレフォンオペレーターとして派遣された。月給手取り20万円ほど。テレフォンオペレーターの仕事を引き受けたのは、コールセンターで受ける電話の内容は定型なので、様々な内容の電話がかかってくることはないという聞いたことと、食べていかなければならなかったから。派遣先はインターネットプロバイダ会社のコールセンター。派遣先には5～10社ほどの派遣会社が派遣社員を派遣していた。その他、派遣先が直接雇ったアルバイトもいて、寄せ集めの職場だった。休み時間に派遣社員同士の雑談で時給の話が出た時、派遣会社によって時給が最大500円あまりも違うことが判明。時給の違いだけではなく、同じ時間数で同じ業務をやっているにも関わらず、社会保険の適用状況も派遣会社によって違った。「僕がもらったのは、中間より気持ち上ぐらいの位置」の時給だった。派遣先の正社員に聞いても、会社としてはどの派遣会社にも同じ費用を支払っているとの説明だった。他にも、職場では頻繁に派遣社員が辞めていく状態にあり、「みんなが『辞めたい』『辞めたい』とばかり言っている職場」で、ネガティブな雰囲気も漂っていた。コールセンターでオペレーターを行っている派遣社員の指導を行うスーパーバイザーも派遣先の社員や派遣元の社員ではなく、長く勤める派遣社員がスーパーバイザーになっていて、一々確認を取らなければならない上、人によって態度が違い、知識のばらつきがある上司だった。こうした職場の雰囲気の悪さや時給の違いの問題、その他、コールセンターにかかってくる電話の内容も実際は定型ではなく、様々な種類の問い合わせがあり、前回と同じくコミュニケーションにおける精神的負担を感じたことから、3カ月契約を1回更新して4カ月目に退職した。

その次に登録したのが資格取得の専門学校が設立した派遣会社。当該派遣会社の親会社である専門学校には簿記の資格を取る時に通っていたが、派遣会社の方から簿記の通信教育の添削指導の仕事があると連絡があった。簿記1級の資格が活かせると思い、引き受けることにした。2009年（35歳）4月に勤務を開始。月給は手取り20万円程度。土日休みで、残業はなかった。前二者の派遣会社と待遇はほとんど変わらなかった。仕事内容は通信教育の簿記2級と3級の添削指導。3カ月の契約で、契約期間満了で退職。

< 初職から現在までの経過

(仕事・家族・友人との関係)>

宮城県に住む両親とは、現在半年に1回連絡を取る程度。こちらから積極的に電話するのではなく、両親の方から電話をかけてくる。実家には6年ほど帰省していない。

このように疎遠な関係になったのは、両親が「昔ながらの、古い考えの持ち主」だから。正社員という働き方しか認めず、現在では全労働者の3分の1が非正規だということをよく理解していない。大学卒業後に正社員として就職したが、その後アルバイトや正社員、派遣社員などを転々としていることで何度か衝突し、疎遠になった。

地元の友人との関係は切れている。地元に戻りたくとも、交通費や交際費がないので帰省せずにいたら、連絡を取り合う友人がいなくなってしまった。職場の知人とも、特に現在まで続いているような関係の人はいない。その職場に

いる時はつきあうが、職場が変わってまでつきあいを続けるような人はいない。

NPOで知り合った人など、連絡を取り合ったり、相談できる友人はいる。

今まで付き合った女性は何人がいた。中には同棲にまで至った女性もいたが、結婚には結びつかなかった。結婚までの「リアルな思考がいかない」。将来の見通しがあれば、「そこまでの思考にいったかもしれない」と思う。

< 現在の暮らしぶり >

現在は失業手当を受給しながら、求職活動を行っている。また、困難を抱える人々の支援を行ういくつかのNPOに顔を出している。NPOに関わるようになったのはここ半年ほど。理由としては、「自分も同じ状況に陥った時、どうすればいいのかを考えたいから」。また、前職を期間満了で退職してから3カ月半の間に、ファイナンシャルプランナーの試験を受け、2科目中1科目は合格した。残り1科目も再度受験し、現在結果待ちの状態である。社会保険関係については「講師ができる」ほど詳しい。現在色々動いている第2のセーフティネットについても、「個人的に追っかけている」。国民健康保険、国民年金については免除申請を出している。窓口が「免除申請を出させないようにしている」ことを改善して欲しい。健康保険料は前年の収入で決まるため、現在仕事がない状態で前年収入を基準にされると「とてもしんどい」。「非正規は前年の収入が当年の収入とつながらない」ためである。

現在の暮らしぶりは大変苦しい。今までの収入は貯金ができるほどではなく、収支トントンであった。公共料金や家賃を大幅に滞納したことはないが、遅れて支払ったことはある。借金などはない。学生時代に借りた日本育英会の奨学金は、返済が難しいので免除申請を出している。

生活が苦しいので、生活必需品の購入を控えたことや、友人とのつきあいを控えたことは大いにある。友人とのつきあいを、金銭面から制限しないといけないことが、気持ちを沈ませる要因になっている。それ以外は、特に健康上の問題だと感じるような点はない。

仕事を探す中で障害だと感じていることは、企業に対しては、ハローワークに提示されている労働条件と実際の労働条件が違うこと。自分自身に対しては、コミュニケーションスキルが一番不足していると感じている。他に、字が汚いこともコンプレックス。「基礎的なところで欠けている部分があるな」と感じる。これらのコンプレックスがあるため、職種を選択する際、例えば対人コミュニケーションが必要な営業職を敬遠するなど、心理的影響がある。

< 仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見 >

貧しいのは「本人の責任でない」と強く思う。法定労働時間月間160時間、最低賃金で働いて、社会保険を自分で支払うと生活保護費を下回る。普通に残業をこなしてフルタイム働いても生活保護費並みである。一般的な暮らしができないというのは、企業、制度のあり方として問題があると考えている。こうした問題は単に政府が解決すれば済む問題ではなく、「社会に参画する全ての人の問題」であり、政府に丸投げすればよいのではなく、「その社会にいる全ての人に責任があり、みんなで変えていく形」で解決すべ

き。企業、個人、政府等それぞれの立場で責任を持って声を上げ、解決しなければならないと思う。政府に対して望むのは、短期的には今ある法律を守らせること。長期的には健康保険の充実や雇用保険の充実である。

社会の問題は「みんなの力で変えられる」と強く思う。なぜなら、中学生時代、ベルリンの壁の崩壊などを目の当たりにし、社会は「みんなの意思で変えられるものなんだ」ということを実感したから。

労働組合については「ちょっと遠い」存在だと感じている。

社会に対しては、生き方、働き方の多様性が認められる社会になって欲しいと考えている。企業オンリーではない、複線的ライフスタイルがあってもよいのではないかな。

<将来の展望>

8年間勤めたDVD販売の仕事を辞めた時に、民間企業に勤めるという働き方と「違う働き方をしたい」と思って仕事を辞めた。例えば、現在ボランティアとして関わっているNPOの職員などとして生計を立てることができればよいと考えている。

将来のことを考えられるようになったのは、アルバイトを辞めて、派遣で働き始めたことがきっかけ。アルバイト時代は生活するのに精一杯で、他のことを考える余裕はなかった。派遣社員になると、アルバイト時代より労働時間は少ないが、時給が上がり、本を買ったり、将来について考える余裕が生まれたのがよかった。その中で、企業に頼らない働き方もあるのではないかと考えるようになった。

調査番号：東京20

調査日：11月7日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：32歳 ■現住所：埼玉県 ■出身地：茨城県 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：人材サービス業、事務職、契約社員 ■直近の収入：月20～25万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 予備校（6カ月） ひきこもり生活（7年、若者就労支援NPOのカウンセリング受講） 専門学校（6カ月） 若者就労支援NPOの就労支援プログラム受講（1年）/仕事体験プログラム（遺跡発掘・清掃）+鉄道会社・事務（登録型派遣、1カ月） 人材サービス会社・事務（アルバイト3年、契約社員1年8カ月） 現在に至る

<仕事に就くまでの生活（家庭・学校）>

1976年、茨城県生まれ。

両親、姉、および自分の4人家族。高校は全日制の普通科に通っていた。遅刻や欠席が多く、真面目に通っていたとは言えないけれども、卒業はちゃんとした。当時は、大学進学希望だったが、志望する大学に入れなかったため、1996年春から予備校に通って浪人生活をするようになった。

「予備校で人間関係にいろいろあって、人間不信に陥ってしまいました。自習室にうるさい人がいたので注意したら、そのグループから悪い目で見られて。そこから、友達にも裏切られたり、いろいろあって、人間不信に本当に陥ってしまって、家から出られなくなってしまった。」

1996年（19歳）秋頃には、予備校にも通わず、家から出られなくなった。その後2年間（1996～1997年）くらい、カウンセリングを受けるため、茨城県にある実家から千葉県まで、親と一緒に3カ月に1回ほどのペースで通うことになった。続けているうちに少し回復してきて、その後の2年間（1998～1999年）は、親に途中の駅まで送迎してもらい、電車を使って1人で通うようになった。その後の3年間（2000～2002年）は、自分で最寄駅からカウンセラーに会いに行っていた。玄関を開けられるようになるまでに2年、1人で電車に乗るようになるまでに2年かかったことになる。当時の生活は、「やばいなど、たまに思うくらいで。あとは、普通に家でネット生活です」。その時は、カウンセラーと強い信頼関係があった。ようやく

人とも会えるようになった。

2003年（25歳）実家にいたらダメになると思い、現在も住んでいる埼玉県に出てきた。ただ、生活費は親に出してもらっていた。

また、同年4月から、専門学校に通い、簿記とパソコンを学び始めた。ただ、簿記は自分に向いておらず、半年ほどで辞めてしまった。簿記の資格は取れなかったが、パソコンの資格は取得できた。

その後、父親から「どうかしないといけない」といわれ、TVで見た東京都の若者就労支援NPOに行くよう勧められた。最初は、母親と一緒にいき、その後は1人で行くようになった。2004年（27歳）から、1年間くらい通ったと思う。当時は、やることもないから行ってみようという思いで、結果的に友達もできて、よかったと思う。ただ、仕事体験プログラムは、つらかった。例えば、遺跡発掘の手伝いは、大学教授に命令されるだけの単なる土掘りで、ホテルや雑居ビルの清掃は本当に汚い場所の掃除をさせられた。「ただ、人の嫌がることをやっていたんで、いまの仕事でも、人が嫌がる仕事を率先してやっています。このNPOは、合っていたんでしょうね。例えば、いま働いているところがダメになっても、やっていける感じはします。」

このNPOに通うようになってから、半年くらい経ったあと、派遣会社に登録して単発の仕事を始めた。仕事内容は、鉄道会社で当時使われ始めたICカード乗車券や新しい自動券売機の案内をするもので、1カ月くらい続けた。

仕事は、「たいへんだったけど、楽しかったです」。給料は、時給1,200~1,300円くらいだったと思う。年末年始のあいだ、ずっと働いていた。

そうしているうちに、NPOのスタッフから「もう、通わなくていいよ」と言われ、NPOを卒業することになった。ただ、このNPOを卒業してからも、当時一緒に通っていたメンバーとは会っている。彼らも、いまは介護ヘルパー、プログラマー、経理などの仕事をしている。

父親は、大手トラック・メーカーの管理職をしていた。「(経営側だったので)うちの親父は、労働組合にはいい思いをしていないと思う」。母親は、専業主婦。親との関係は、反抗期だったせいもあって高校時代は悪かったが、ひきこもってからは良くなった。姉との関係もいい。何かあった時、いまは親も年金生活なので、助けてくれとは言いにくいけど、言えなくはない。

< 初職から現職までの職歴 >

2005年4月(28歳)から、人材紹介・転職支援・就職支援・社員教育を行う人材サービス会社の「キャリアサポート事業部」でアルバイトとして働き始め、3年間勤めた。その後、2008年4月から現在まで、同じ会社で契約社員として働くことになった。雇用契約は、毎年更新している。

ここでの仕事は、行政機関(埼玉県・山梨県)や労働局(東京都・神奈川県・埼玉県・茨城県・栃木県・長野県)から業務委託を受けて、失業者向けの就職支援セミナーをハローワークで実施している。アルバイトを始めた当初の仕事内容は、セミナーの電話受付だけだった。1日50本くらいの電話を受けて、パソコンにデータを入力して、名簿を作成していた。ただ、契約社員である現在では、その他の仕事として、メールによる申し込みへの対応、葉書による申し込みへの対応、セミナーにおける業務の引き継ぎ(作業指示書の送付)、セミナー終了後における労働局への報告作業、その他の雑務(コピーなど)、会議への代理参加などが挙げられる。

また、「契約社員とアルバイトでは、責任の重さが違うので」、はっきり決まっているわけではないけれども、仕事内容に違いが生じる。第一に、契約社員だと、クレームに対応しなくてはいけぬ。例えば、セミナーの受講者リストに名前が入っていないなど、こちらに責任があるクレームだけでなく、「仕事が決まらないのは何故だ」といった、こちらが責任の取りようのないクレームもある。職場に明確なルールがあるわけではないけれども、クレームはアルバイトには対応できないので、こちらにおのずと電話が回ってくる。

第二に、勤務時間が異なる。アルバイトは定時で帰ることができるが、契約社員は仕事が終わるまで働く。「でも、残業代は出ません。(契約社員の場合)雇用契約上、月45時間まで(の残業)は(所定の)賃金に含まれていることになっていたと思います」。いまは、「忙しすぎるくらい、忙しい」ので、月45時間を超えているが、ふだんは月30時間もない。

第三に、「仕事で求められるものも違います。例えば、アルバイトだったら、困っていたり、問題があったりすると、他の人が助けてくれる。契約社員になると、自分で何とかしないとイケない」。

第四に、「会社の他の部署とのつながりが、アルバイト

と契約社員では違ってきます。例えば、教育事業部で行っている勉強会にも、上司が行けと言え、応募しなくてはならないです」。

最後に、「上司の対応が違います、アルバイトの人と契約社員の人とは。極端な話、アルバイトなら、ミスしても、『まあいいよ』という感じですが、契約社員になると、それはいいです」。

手取りの給料は、アルバイトの時、時給900円で、月給が15~16万円くらいだった(ボーナスはなし)。契約社員になってからは、月給24万円で、ボーナスはなしである。社会保険について見てみると、1~2年目の時は、雇用保険には加入していたが、健康保険や厚生年金には入ってなかった。3年目から、健康保険と厚生年金に加入することになった。「3年目から労働時間が延びて、やるが増え、(これらの保険に)入ることになったと思う」。アルバイト時代の勤務時間は、1~2年目の時で9:00~17:00、3年目から9:00~18:00となったが、実際は仕事が終わるまで働いていた(だいたい19:00くらいに帰宅)。

いまの会社の従業員は100人前後である。そのうち、キャリアサポート事業部は8人の職員から成る。正社員2人(管理職・50代・男性が1人、マネージャー・30代・女性が1人)、契約社員2人(自分と40代・女性が1人)、アルバイト4人(40代・女性が1人、30代・女性が2人、40代・男性・かつうつ病で現在復帰中が1人)である。うちの企業の雰囲気は実力主義である。上司との関係は良好だ。「いつも怒られていますけど、ご指導していただいています(笑)」。同僚の契約社員との関係もいい。ただ、その女性とは目標が違って、彼女は正社員になりたいと思っている。

そのほか、正社員と契約社員の間にも、仕事の違いがある。第一に、セミナー講師との契約や謝金交渉など、正社員はいちばん重い責任を担っている。第二に、正社員は、勉強会や業務部会などにも参加しなくてはならない。そのほか、正社員は、給料が高いし、ボーナスも出る。

でも、「特に、正社員になりたいとは思わない。正直に言って、なれるのかな、やっていけるのかなって思ってしまう」。この仕事を続けるかどうかについても、「いま、悩んでいるところなんです」「やりがいについても(悩んでいるし)忙しすぎる(仕事だと思う)ので」。上司に正社員の打診をされても、悩んでしまう。「もう、お金はいいかなって」。現在の生活で、もう満足している。

将来については、何も考えていない。いまの会社がだめになったら、どう生活するのかなってことを考えると、将来については、やや不安になる。でも、「来年、仮に首になっても、『ああっ』というくらいです。自分は、どの職場に行っても、そういうようにしか考えないと思います。NPOに通うくらいなんで、『生きていければいいな』って感じなんです。人に迷惑をかけなければ(それでよいと思います)」。

< 仕事に就いてからの生活 >

働き始めてから、少しずつ貯金をしている。職場で、特にトラブルもない。強いて挙げるとすれば、残業が多いことくらい。

「いまは、恋人はいなくて、サッカーが命です(笑)。サッカーは、かなりのサポーターです。昔は、毎試合、

通っていました。サッカーで野次を飛ばすうちに、「人のこと、批判できるのか」って思うようになって、一人暮らしを始めた。

<リーマン・ショック後の変化>

いまの仕事は、ハローワークでのセミナー担当なので、リーマン・ショックで、逆に忙しくなった。電話を受け付ける量が3倍になった。

<社会に対する意見(政治・労働組合・NPO)>

労働組合については、「あんまり、いい印象はないです。なんか、動員をかけているっぽいじゃないですか。自分から行く人はいいんですけど、動員かけられてまで行きたくない」。労働組合があっても、入らないと思う。

いまの会社にアルバイトとして勤める時、ハローワーク

で新しい仕事を探す約束だった。でも、ハローワークで仕事は見つからなかった。ハローワークは、自分で一生懸命探そうとしないと、見つからないと思う。自分は、あまりちゃんと探さなかった。

いまの会社で、若者向けの就職セミナーを開講していることは、若者は集まりが悪く、中高年の人に比べて切迫感がない。自分が言うのもただけど、甘いと思う。ただ、企業が即戦力を求めるのにもかかわらず、アルバイトだと即戦力の経験がない。「国でもいいので、もっとお金を出して、若い人に社会経験を積ませる場を増やしてほしいと思う。あとは、若い人の意識を変えないと、ちょっと厳しい面もあるんじゃないですかね」。政府に対しては、税金を減らしてほしいと思うが、「やはり、真面目に働きたい人には、働く場を与えてほしいと思う」。最低限の暮らしはできるようにしてほしい。

調査番号：東京21

調査日：10月10日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：36歳 ■現住所：北海道 ■出身地：北海道 ■学歴：専門学校中退
- 就労の有無：就労中 ■現職：官公庁、学校事務・行政事務、臨時職員 ■直近の収入：月10万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：同居する親2人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校中退 役所・事務（臨時職員、1年強） 市立学校・事務+役所・事務（ともに臨時職員、15年）かけもち（1、3学期は市立学校、2学期は役所勤務）現在に至る

<仕事に就くまで>

1973年、北海道生まれ。

子どもの頃は、両親、姉2人のほか、祖父母もいて7人家族であった。父親は公務員、母親はパート勤め。暮らし向きは少し苦しかった。

高校時代は勉強好きであり、友人もいたし人間関係には何も困ったことはなかった。学校の進路指導は頼りにせず、自分なりに目標があり、高校を卒業して、18歳の（1991年）4月に美術系の専門学校に入った。入学してみて自分には馴染めない分野だと思い、進路変更を考えて専門学校の求人確かめた。しかし、まともな就職口は余りなかったので翌1992年に中退した。専門学校がうたい文句とする就職率は各専門分野への就職だけではなく専門分野以外への就職も含んだものであることを知った。専門学校は必ずしも手に職を付けられるわけではなく、就職に有利になるわけではないという現実を知った。

専門学校在学中に、コンビニでアルバイト（数カ月程度）を経験した。

<初職からの経験>

1993年（20歳）専門学校中退後、親族の紹介で北海道内の役所に臨時職員として就職（1年強勤務）。日給月給フルタイム勤務で月13～15万円の収入。1カ月単位で雇用契

約を更新し、そのたびに担当の課が変わった。

1994年（21歳）知人の紹介で市立学校の事務の臨時職員（日給月給制）に採用され勤続15年で今日に至る。2学期は仕事がなく、1、3学期のみ勤務。2学期の期間は役所の臨時職員をしている。

労働条件は月15日勤務、月額約10万円、「加給金」という手当が夏・冬56日分（約20万円）が支給される。これは労働組合の活動の成果であり、労使協議で獲得したものである。

<現在の暮らしぶり>

仕事を始めて以降今日まで、生活に大きな変化はない。

現在の住まいは実家で、両親と同居している。両親の年金と自分の収入で生計を立てている。

家族との関係は良好で、自分の健康状態も良く健康面の不安はない。ただ父親が亡くなれば年金収入がなくなり、今のマンションの家賃が払えなくなるため、不安がある。

何とか親子3人で暮らしている状態であったため、結婚はしていない。

自分の学校時代の同窓生も当初は正規雇用であったがその後転職を繰り返し、派遣など非正規雇用になってしまった人たちを多く見るようになった。

< 仕事・労働組合についての意見 >

仕事自体にはやり甲斐を感じている。現場の子どもたちの助けにもなっていると自負している。

だが、学校現業という仕事が正規から非常勤職員に置き換えられてきており、次は非常勤職員も廃止され外部委託になるのではないかという不安がある。将来もこのまま働き続けられるか、不安である。

自治体の予算が削減される中で不安が現実になるおそれはあるが、学校現場の現業職は子どもたちのためになっている面があり、財政難を理由に安易に学校が持つ機能を削ぐようなことはすべきではないと思う。

また、学校現業職という職種に対する（社会的）評価が低いことは残念である。雇用面でも、自治体が公契約条例を制定するなど、不安定雇用を無くす努力をすべきだと思う。

現在、市の職員組合に加入している。労働組合の存在は自分たちのためにとても役に立っているし、労働組合のお

かげで守られているという実感があり、大切な存在である。民間パートや非常勤の人々も労働組合が積極的に組織化すべきと思うが、依然として労働組合は敷居が高いかも知れない。加入してみないと守られていると実感できないということがある。

同じ組合員同士であっても、自分の職場にいる自分以外の正規職員の労働条件を知らない。正規職員も臨時職員の労働条件は知らないのではないか。組合員同士もっと情報の共有化が必要であると思う。

一般市民から見れば、正規職員も非常勤職員も皆公務員と見られている。臨時職員であっても市民に対する責任は同じだと思うので、それに見合う労働条件を整備してほしい。

< 将来の展望 >

現在の賃金水準のままだと、老いた母親を抱えた生活で将来が不安である。

調査番号：東京22

調査日：10月10日

プロフィール

- 性別：女 ■ 年齢：35歳 ■ 現住所：北海道 ■ 出身地：北海道 ■ 学歴：短期大学卒業
- 就労の有無：就労中 ■ 現職：官公庁、学校事務職、臨時職員 ■ 直近の収入：月10～15万円
- 家計における役割：家計補助者 ■ 家族構成：同居する親1人 ■ 住居：親所有の持ち家
- おおまかな職歴：短期大学卒業 市教育委員会・学校事務（臨時職員、2年） 市教育委員会・学校事務（非常勤職員13年、制度変更のため臨時職員から非常勤職員へ） 現在に至る

< 仕事に就くまで >

1974年、北海道生まれ。

家族構成は、両親、妹1人、弟1人の5人家族。

父親は民間企業の正社員、母親は民間企業の嘱託社員。暮らし向きは苦しかった。

高校、短大時代はふつうに友人がいて、教師との関係も含めて人間関係には特に問題はなかった。

短大は服飾関係を専門とする学校で、卒業年次での進路指導は就職先を紹介する張り紙による情報提供のみで、就職活動は個人でやることになっていた。

学校が紹介する会社の採用には応募せず、母親の紹介で北海道内の教育委員会に、臨時職員として採用された。

当時は就職が決まったら大学に届けて、後輩の進路選択の役に立つようにしておくことになっていた。

< 初職からの経験 >

1994年（20歳）短大卒業後に母親の紹介で臨時職員として北海道内のある市の教育委員会に、臨時職員として就職。学校事務の正規職員の休暇時の代替要員として15校を受け持った。仕事内容は、職員室の留守番、教員用給食の配膳など。臨時職員は日給月給で月収10～15万円の収入。学校なので土日、祝日、夏、冬休み期間は仕事がない。夏、冬休み期間は個人でアルバイト先を探して働いた。

1995年（21歳）に臨時職員制度が廃止になることが判明し、これによる労働条件の引き下げから守ろうと労働組合が結成されたので、加入した。

1996年4月（22歳）から臨時職員制度に代わり、非常勤職員制度となった。改めて新規採用となるため、面接を経て採用された。賃金は月給制になった。

新制度では「P事務」と呼ばれるPTA会費の徴収・管理のアルバイトが廃止され、非常勤の学校事務職員の業務に組み込まれた。加えて給食費の徴収・管理の仕事も追加され、臨時職員当時より仕事量が増えた。

能力開発ではないが、給食費管理ソフトの操作研修制度がある。賃金は勤続年数による差はない。しかし、勤続2年目以降になると、従来は厳冬期に支給されていた「燃料手当」に相当する分を「加給金」として支給する一時金制度がある。そのほか職種による経験加算手当の差があり、専門技能を必要とする「困難職」とそれ以外の「容易職」という区分がある。

土日祝日、および夏、冬休みの間は学校事務の仕事がないので、他でアルバイトをしている。ただし、失業は経験していないので、ハローワークに行ったことはない。

所属している労働組合は、「通年雇用」と「日給月給から月給制への転換」を要求している。

この月給制度は、「時間日給×年間勤務日数÷12」として算出される。1996年からこの制度が導入されているとはいえ、市の全ての職種に適用されておらず、日給月給制が残

存している職種もある。このため、今日も組合は月給制要求を掲げ、1996年の制度改定を全ての職種に適用させようと要求している。

<現在の暮らしぶり>

両親と同居。暮らし向きはやや苦しい。父は定年退職して、現在は民間企業の嘱託社員。母も嘱託社員として勤務。現在でも親子の人間関係は良好。

一度は結婚したが、離婚した。

健康状態に問題はない。

組合員以外の知人や友人の間では、労働組合のことは話題にならない。

学校現場では職員室に居ることもあって生徒たちの相談を受けたりすることもあり、教師だけでは目の届かないと

ころでサポートしたりする役割も担っている。

教育委員会でも教師以外の学校現場の職員の教育的な役割について評価されるようになってきており、仕事のやりがいにつながってきている。学校現場では年々教師の業務負担が大きくなってきており、学校事務職の存在感が増してきていると実感している。

<政治や社会、労組への要望、期待>

働いている市では、夏・冬に加給金を月額に上乘せすることを検討しているが、労働組合の立場としては月給制とセットでないと受け入れられない。

現在の仕事で安定した働き方をしたいので、市には正職員化を期待している。

調査番号：東京23

調査日：10月10日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：37歳 ■現住所：兵庫県 ■出身地：京都府 ■学歴：短期大学卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：官公庁、保育職、臨時職員 ■直近の収入：月10～15万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：短期大学卒業 私立保育所・保育職（正職員、2年） 民間企業・事務職（正社員、1年強）
公立保育所・保育職（アルバイト、3カ月） 私立保育所・保育職（正職員、1年半） 公立保育所・保育職（臨時職員、11年）現在に至る

<初職に就くまで>

1972年、京都府生まれ。

自営業（ニット生地を編む仕事）を営んでいる家庭に育った。景気の波の影響を受けることが多く、以前は大手の繊維メーカーの下請けもしていたが、それらの仕事は中国に移っていった。今は学校向けのセーターやカーディガンを中心に扱っている。

学生時代、勉強は好きではなかった。中学校、高校のときはあまり勉強せず、普通科の高校への進学を勧める親や先生に対して、反発心もあって聞き入れず商業高校に行った。

1990年（18歳）短大（保育科）に進学。2年間は実習が多く、休みのたびに実習があり「華やかな学生生活、というより忙しく勉強させられたが、最低限の出席日数以上は学校に行かなかった」。今思えばちゃんと勉強しておけば良かったと思う。

<初職からの経験>

1992年（20歳）短大の保育科を卒業後、新卒採用で大阪府にある民間の保育所に正職員として就職した。バブル全盛の時期であり、4年制大学では4年生の4～5月に、短期大学でも2年生の6～7月には内定が出ていた時代であった。保育の資格を取得する見込みが立っていたこともあり、普通の企業の就職活動は行わなかった。「待っていたらどんどん保育所の求人が来たので、『この保育所に行

きたい』というのではなく、たまたま受かったところに就職した」。

保育所は寺の経営で、月収は15～16万円、住居手当や一時金（年間約30万円）もあり、「賃金面では断然良かった」。この頃から一人暮らしを始めた。

寺が経営する保育所ということもあって、保育内容には厳格さが要求され、寺の仕事をしようと言われることもあり、朝早くから夜遅くまで仕事が重なった。しかし、残業代はなく、休日出勤しても代休が与えられることはなかった。「若かったこともあり、2日くらい徹夜しても平気だった。同僚とも気心が知れた関係で、一緒に頑張ろうと励まし合うなどしていた」が、徐々に体力が持たなくなり、2年で退職した。

1994年（22歳）次に、ハローワークの紹介で「普通の会社（民間企業）」に事務職として就職した。しかし、バブル経済の崩壊の影響であろうか、会社の経営が傾き、一時金が出なくなり、賃金の遅配も発生したため、1年強で退職した。大阪府での一人暮らしは難しいと感じ、実家に戻った。

1996年（24歳）はじめ、地元京都府にある公立保育所に「アルバイト」として就職。この頃結婚が決まり、学年が変わる同年3月末を機に退職した。

結婚後しばらくは家にいたが、働こうと思い、求人誌やハローワークで職探しを始めた。求人は少なく、他の職種の経験もなかったため時間がかかったが、同年10月に、私立の保育所で正規採用が決まった。ところが、その保育所

が「最悪な場所」だった。園長と主任は親子だったが仲が悪く、さらに保育士と主任が一緒になって新人をいじめるような「陰湿な職場」だった。

1998年（26歳）夫の会社が倒産し、夫の実家のある兵庫県に引っ越すことになり、それを機に退職した。

同年、夫の親に「することもないので仕事を探そうかと思っている」と話すと、「保育士の資格があるのだから、市役所に登録すれば仕事があるよ」と言われ、それがきっかけで、住んでいた市の保育所の臨時職員の職に就いた（これ以降、現在まで勤務）。

再就職後まもなくして、夫と離婚。「仕事があるから離婚してもやっていけるとたかをくくって離婚したが、やっぱり苦しかった」。

<現在の職場について>

保育所の臨時職員の仕事は、配属先が変わりつつ11年経つ。正職員が減り、臨時職員がどんどん増えている。現在は保育士の約3分の1が臨時職員ではないか。その結果、正職員がやっていた仕事も臨時職員が担うようになった。自分も年数を積み、いろんな仕事ができるようになったが、正職員から「あれもやって、これもやって」「アルバイトに全部やってもらったらええやん」と仕事をどんどん振られるようになった。正職員や保護者から、「アルバイトのくせに」と言われることもある。「(自分は)今では平気になった」が、そういう職場では、3月末になると臨時職員が一斉に辞めるといことがしばしばある。

8年前（2001年、29歳）に当該自治体の労働組合に加入した。組合に入ったきっかけは、2番目に配属された保育所で、同僚の雇止め問題が発生し、労働組合の指導を受けながら問題を解決したためである。自分からリーダーシップを発揮するタイプではなく、「他の誰かがやってくれたらええやん」という方だったが、人とのめぐりあわせが良かったこともあり、組合に参加した。現在は臨時職員から構成される組合の委員長をしている。組合に入って、少しずつではあるが賃金が上がるようになった。現在は日給8,800円（実働7.5時間）。何かあったらすぐに意見を言うので職場では煙たがられていると自認しているが、それでも「同じように働いているし、(仕事の)内容も変わらないんだったら、当然言うべきことは言ってもいいと思うし、遠慮なく言っている。その意味で意識は変わった」。その一方で、「『賃金が安いから人間としても低い』という構造がある中では、やはり厳しいですよ。保護者の中にも『先生アルバイトなんやろ?』という人もおり、同じ仕事をしているのにそういう風に言われるのはつらい」。

現在の職場での人間関係は良好。気の合わない人もいるが、大きな保育所なので顔を見ないで済むので、あまり気にならない。

<現在の生活状況、本人の不安>

将来については不安がある。「毎日なんとかやって行けるのはいいが、だからといってこのままの状態でも50歳になったとしたら生活はしんどいと思う。そうかといって転職できるかと言うと、30歳くらいまでしか転職市場がない中で次の仕事はない。民間の保育所はこれまでの経験から行きたくはない。どうしようもない。貯金もないので不安を感じ

ている」。

別の資格を取ろうと思ったこともあるが、お金も時間もお金かかるので、できなかった。教育訓練給付のような雇用促進の制度についても、利用してみようと思ったが、条件が合わず、通うにも交通費がかかるので、あきらめた。「いままで保育でやって来ているので他に行く勇気もないし、いまさらできないのが現実だと思う」。

最近母親が亡くなってからは、実家（京都府）に独りでいる父親のことが心配である。「今なら実家の近くで就職できるかもしれないが、今後40歳を越えて仕事はさらになくなって行くだろうし、今の自分の収入の中で父を養っていけるかという、そんなに期待できない。賃貸で2人で住める部屋を借りるにも、費用を捻出できない。ここ数年は互いに元気であるものの、今後も安心してやっていけるかといえば、すごく不安」である。

母親が病気になったとき、付き添いや見舞いのために仕事を休んでも、年休がないので賃金が減った。そのためにその年は家計が苦しくなった。休めないからやむを得ず仕事に行くものの、(母親のことが)心配で仕方ないというジレンマに陥った。

自分自身、喘息の持病がある。一度通院すると、治療代や薬代で1万円くらいかかってしまう。仕事が忙しくて休めない状況下で、調子が少し悪くても通院を我慢し、市販薬で済ますこともあった。忙しすぎる中で、気がついたら健康への気遣いが欠ける状態になっていた。

<意見・要望>

臨時職員の公務員が抱える問題

今働いている兵庫県のこの市には臨時職員が約700人いる。臨時職員は「雇用中断」という制度の運用によって年休の繰越ができない。組合の交渉で、制度上2年に1度200円昇給するようになったが、臨時職員には1週間の雇用中断があるため、勤続を通算すると実態は3年ごとの昇給になってしまうという問題がある。その一方で、処遇改善には法律の壁がある。

そこで、組合としては、まずは臨時職員を非常勤職員という雇用身分に移していきたいと思っている。今働いている市では、非常勤職員については正規職員との均衡処遇を実現しているからである。しかし、700人を一気に非常勤職員に移行するには財源の問題があり、市議会も協力的ではないことも悩みとなっている。

労働組合に対しての要望

いま、非正規問題がクローズアップされるようになったが、原因がどこにあるはず。何が原因で、誰が困っているのかという細かい現状と、何をどう変えなければいけないのか、組合は的確に言って欲しい。

公務員も、行政改革の中で正規から非正規への置き換えが進み、仕事は増えるが待遇がよくなることはない。それにもかかわらず、公務員叩きが行われ、「臨時・非常勤への退職金・一時金支給はおかしい」という裁判まで起こっている。

パート法を適用するのか、公務員法を変えるのか、地方自治法まで含めて変えるのか、個別の取り組みでは限界があるので、連合などの大規模組織が大きな取り組みをしてほしい。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：45歳 ■現住所：兵庫県 ■出身地：兵庫県 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：官公庁、主に運転関係職、臨時職員 ■直近の収入：月15～20万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：同居する親1人 ■住居：持ち家
- おおまかな職歴：高校卒業 陸上自衛隊・自衛隊員（正職員、4年） 土木建設会社・運転手（日雇い、6年）
タクシー会社・運転手（正社員、4年） タクシー会社・運転手（正社員、2年） 町役場・運転等の現業
（嘱託職員、10年）、現在に至る

< 仕事に就くまで >

1964年、兵庫県生まれ。

学生時代は、勉強ではあまりいい思い出はないけれど、クラブ活動では、陸上、バレーボールに打ち込んだ。練習はきつかったけれど、大会に出たことは、今でもよい思い出になっている。

先生からの進路指導はあまりなかった。記憶に残っていない。

中学校の頃は就職する生徒はほとんどおらず、あとは高校に進学する生徒がほとんどだったから、先生は自分のレベルに合った学校を受験するように指導するくらいだった。しかも、そのような面談は何回もあったわけではなかった。

< 初職からの経験 >

1982年（18歳）高校卒業後、自ら応募して、陸上自衛隊員になった。自衛隊にずっといるつもりはなく、何年か経ったら地元に戻るつもりでいた。最初の勤務地は京都だった。そこで約半年間の教育を受け、その後、北海道へ異動になった。北海道には約3年半いた。陸上自衛隊は2年任期で、合計4年間勤務した。

入隊した当時は、本俸で月収10万円を割っていたが、4年後には12万円になった。本俸以外の手当はほとんどなかった。

寮での生活では、5人から8人くらいのグループで1部屋を使用した。二段ベッドで寝ていたのを覚えている。そのときの同僚とは、今でも年賀状とか何かあったときには、たまに連絡をとることがある。

当時は毎日、午前6時に起床し、午前8時から午後5時まで勤務した。昼には1時間休憩があった。外での訓練が多かったので、寒くて大変だった。しかも、夜には門番のような警備の仕事もあった。体力的にはきつかった。

しかし自衛隊にいる間、車の大型免許を取得できたことはよかった。

2年任期で4年が経ち、1986年（22歳）の春に自衛隊を辞めた。自衛隊でも就職あっせんはあったが、あっせんを受けることなく、まず地元（兵庫）に戻った。1カ月間はゆっくり休んで、つぎの1カ月間で就職活動をした。

1986年頃（22歳頃）地元で先輩が勤務している土木会社に求人募集があり、これに応募して就職した。従業員100名くらいの規模で、地元ではそれなりに大きな会社であった。正社員ではなく、日雇いであった。仕事内容は、道路整備工事で、主にトラックやダンプの運転をしたり、荷物をクレーンで運搬したりする運転関係の職種であった。このと

き、自衛隊時代に取得した資格が役に立った。

賃金は日給月給制で、1日8,000～9,000円、月あたり27万円くらいだった。仕事がなく「休んでくれ」と会社から言われることもなかった。1カ月のうち25日間は働いていた。社会保険にもきちんとしていた。

さらにこの会社に勤務している間に、ブルドーザー、パワーショベルの大型特殊免許を取得した。講習を受けるなど資格取得のための費用は、会社が全額負担してくれた。

当時の職場は楽しかった。先輩とも仲良くさせてもらったし、同僚たちともお酒を飲みに行ったりして、仕事以外でもつきあっていた。

この会社に6年間勤務した後、辞めた。正社員ではないし、日給月給で賃金が決まっていたので、将来的にもよくなる見込みがないと思い、労働条件への不安、不満が募ったからだった。

当時は、両親、祖母との4人暮らしだった。土建会社を辞めてから、4カ月間のブランクがあったが、その間にバス、タクシーに乗れる二種免許を取得した。車関係の仕事に就きたいと思ったからだった。

1993年頃（29歳頃）バスよりもタクシーのほうが早く就職できたので、ハローワーク経由で、地元のタクシー会社に、正社員のタクシー乗務職として就職した。タクシー事業部門のほかにもバス事業部門などもあり、関西や山陰方面に幅広く事業を展開している大手の会社であった。

賃金は固定給プラス歩合給で、平均月収17～18万円だった。少ない月で15万円、多い月で20万円までの幅があった。拘束時間は10時間から10時間半だった。夜勤もあったが、夜中から朝まで働くということにはなかった。夜勤の場合は、昼から深夜12時くらいまで、それ以外は、朝から夕方まで勤務するというシフトだった。タクシー運転手をしていて一番大変だったのは、知らないお客さんと話すことだった。

このタクシー会社には労働組合はあったと思う。しかし、労働組合に興味はなかったし、勧誘もなかったので、加入していなかった。4年間勤めたが、企業組織の再編で営業所がなくなることになったので辞めた。

1997年頃（33歳頃）2社目の地元のタクシー会社に就職した。今度はハローワーク経由の就職ではなかった。労働条件面でいえば、ボーナスは以前のタクシー会社よりも少なくなった。労働組合もなかった。しかし、以前のタクシー会社よりも規模が小さい分、職場には親しみやすい雰囲気があった。

1999年頃（35歳頃）2社目のタクシー会社に勤務しているときに、役所の職員募集を見つけ、勤務地が実家から近いので応募した。それに受かったため、タクシー会社を辞め、転職した。1年契約の嘱託職員として採用され、現在

まで10年間勤務している。

仕事内容は、土木建設、運転、道路維持管理、冬には除雪作業もある。労働条件は、月収20万円程度で、以前に勤めた土建会社のほうが多かった。だいたい週休2日、月平均の勤務日数は22日である。1日の勤務時間は7時間45分、週あたりでは38時間を少し上回るくらいで、残業もほとんどない。

現在の町になる前は、3つの町に分かれていた。2000年頃から政府が推進をはじめた「平成の大合併」で、2005年4月に3つの町が1つになった。もともと3町は労働条件が違ふし、臨時職員がくびになつたりする危険性があるから、合併する前に、労働組合を立ち上げなくてはならないということになった。嘱託職員、非常勤職員、臨時職員などの非正規職員による組織をつくった。

合併前にすでに組合が結成されていた町もあれば、結成されていなかった町もあり、いろいろだった。自分がいた町では、危機意識があつて、合併の前年の途中で組合を立ち上げた。もうひとつの町では、合併して一緒になってからできた新しい組合に入った。また合併の何年も前から結成されていた町もあった。しかし、新しい組合ができたのは、市町村合併がきっかけだった。

組合ができたのをきっかけに、2004年（40歳）くらいから、組合活動にかかわるようになった。現在は執行部に入っている。こういう活動をしていかないと、今何が問題なのか、その内容もわからない。組合のなかの人たちがしっかり活動していかないと、周りもよくなっていかない。現在のところ、当局側から提案されている問題はない。

現在、勤務している役所では、非正規で働く職員が100人から150人くらいおり、そのうち組合で活動している人は40人程度である。正職員は300人くらいで、短時間や土日のみ勤務する職員も含めれば、400人くらいになるのではないかと思う。非正規の職員の割合は約3分の1を超える勢いである。

<現在の生活状況>

現在は母親との2人暮らしである。母親は高齢だが、体は動くので、生活上の支障はない。自分自身もこれまでに大きな病気やけがをしたことはない。

生活は少し苦しい。つきあいなどを控え、交際費を抑えている。

現在もつきあいが続いているのは、高校のときの友人もいれば、土建会社のときの友人もいる。地元で集まり、お酒を飲みに行ったりしている。何かあったら、そういう友人たちに相談できる。

<本人の不安や要望>

現在、独身であるが、今後、収入が増えていく見込みがないので、結婚して子どもを育てるなどの将来設計も立てられない。きびしい。

社会全体に対しては、最低賃金の引き上げ、再就職のための教育訓練、安心できる医療・年金が必要だと思う。最賃を引き上げていかないと、臨時、非常勤などの非正規の賃金は上がっていかない。仕事がない人には訓練・教育をしていかないといけない。新たな職に就くのに必要な資格をえられるように、ある程度勉強しておかないと、就職の幅を狭めることになってしまう。収入が少なくして医療・年金の保険料が払えない人もいる。とくに、今の若い人たちは、「最低でもこれくらいはもらえる」という安定した賃金や給付の保障がなければ、保険料も払わないだろう。

社会の問題は、政府の責任だけで解決するのではなく、個人の努力も必要だ。政府ですべて解決するものではない。賃金の問題をとっても、政府が何かしてくれるのを待っているだけでは、そこから何かよくなるものでもない。例えば勉強するとか、個人でもできる範囲のことをやらなければいけないと思う。

調査番号：東京25

調査日：10月20日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：31歳 ■現住所：東京都 ■出身地：東京都 ■学歴：大学卒業
- 就労の有無：専門学校通学中 ■直前職：情報通信業、技術サポート職、登録型派遣
- 直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計補助者 ■家族構成：同居する親2人
- 住居：親所有の持ち家
- おおまかな職歴：大学卒業 住宅会社・営業（正社員、4カ月） 引きこもり（8カ月） 公務員受験専門学校入学・中退（10カ月） 引きこもり（1年半） 古書店・販売（アルバイト、1年半） 職業訓練校・ITスキル（3カ月） 半導体関連商社・営業（トライアル雇用、3カ月） 書店・販売（正社員、1カ月） 携帯電話会社・営業事務（登録型派遣、6カ月） 情報通信会社・オペレーター（登録型派遣、2カ月） インターネットプロバイダー・技術サポート（登録型派遣、1カ月） 現在、専門学校通学中

<仕事に就くまで>

1977年、東京都生まれ。

正社員の父親と専業主婦の母親と妹1人とともに、東京都内の一戸建て住宅で育った。小学生時代はいじめられる

タイプだったが、不登校の経験はない。高校時代は楽しかったが、大学時代は「あまり楽しくなく、沈んでました。入った天文サークルの中で自分の学部だけ3年生から別のキャンパスになってしまって、サークルにもなかなか行けなくなっちゃって。学部が閉鎖的な雰囲気、外に人間関

係をつくろうと思ったんです。』

中学校卒業のころ（1993年）にバブル経済がはじけて、高校時代になると就職氷河期というニュースを聞いていた。大学に入った1997年（19歳）には都市銀行とか大手証券会社が倒産したり、「なんともやりきれない気持ちが大学時代ずっとありました」。2年先輩が内定取り消しに遭ったりしたのを目の当たりにしたこともあり、「できることならずと学生を続けて就職したくないというか、社会に出たくないという気持ちがありました」。その一方で、就職するなら早いうちがいいという思いもあり、「エイヤーという気持ちで就職先を決めてしまった感じ」だった。

< 初職からの経験 >

2001年（23歳）大学を4年で卒業し、都内の非上場の中堅クラスの住宅会社に就職した。同期入社は40数人いた。学生時代まちづくりに興味がかり、鉄道会社や不動産会社など40社ほど応募したが、就職氷河期で唯一内定をもらったのが同社だった。「唯一の内定だから選択の余地はなかったのですが、これで本当にいいのかずいぶん悩みました。でも、数年で景気が回復するとは思えず、留年したりしたらさらに就職が大変になると思い、なんとか就職しなければと思いました」。入社後は本社で1カ月研修を受けた。「経営状態があまりよくなかったようで、十分な研修を受けられず」、5月の黄金週間から都区内の住宅展示場で勤務するようになった。公休は水曜日で、隔週木曜日が休日。展示場を訪れる客に営業を掛け、商談を進め、契約を取るのが仕事だったが、営業はなかなかうまくいかず、同期入社した他の社員よりも成績が悪かった。同年7月終わりになって高額な商談にこぎ着けたが、上司がその契約の半分ぐらいを取ろうとしたため、ケンカになった。「上司から痛め付けられるようなことも言われました」。所長や支店長を巻き込む話になる中、契約は破談になってしまった。元々会社の将来性にも不安があり、入社後4カ月を過ぎた7月末自分から会社を辞めた。

同僚から電話が来たりもしたが、すべての関わりを拒絶し、家に引きこもった。「もやもやした、割り切れない思いがあり、辞めてよかったのかとか、しばらく悶々として過ごしていました」。大学時代の友人は就職しているし、相談できる相手は身近にいなかった。

大学で地方自治のゼミに入っていて、公務員にも興味があったので、2002年（24歳）4月から資格専門学校で公務員試験対策の1年コースに入学した。同校で仲間もできたが、毎週のように行われる模試の結果が思うように良ならず、体調を崩し、心療内科で診てもらった。「抑うつ傾向だ」と言われたため、数回通院しカウンセリングを受けた。そのうち徐々に学校から足が遠のき、2003年初めには家に引きこもるようになった。学校の友人から電話がきたが、話をする気にならなかった。

親から「何か働いたら」と言われることもあったが、きつくは言われなかった。また、何も言われなくてもプレッシャーを感じていたが、「家族に甘えていた部分もあったと思う」。そのため、何かしなければと考え、「販売は経験がなかったので怖かったけれど、住宅営業のときほどの苦しみはないだろう」と思い、2004年8月（26歳）に古本販売チェーンでアルバイトを始めた。

本屋を選んだのは、「自分はあまり器用じゃないし、生

ものを扱うわけじゃないし、本や音楽は好きだから、本屋がいいかな」と思ったからである。「家から近くないところがいい」と思い自転車で30分ほどの店にした。休憩なしで1日7時間労働、週4日勤務の契約で働き始めた。店では販売と買取の仕事が中心だったが、学生時代に自動車普通免許を取っていたため、「自動車運転できるよね」と言われて出張買取もこなすようになった。そうするうちに、店長から信頼されるようになり、他店への応援スタッフとしてかり出されることもあり、初め850円の時給が20円ずつ上がり900円を越すようになった。しかしアルバイトでも新人が来ないと（上位職に）上がれないし、先輩がいれば上がれない。同僚との関係も良好で働きやすかったので「このまま続けてもいいかな」と思ったけれど、「28歳でバイト生活でいいのか」と考えるようになった。ちょうどそのころ日本の景気が良くなっていった時期でもあり、アルバイト生活から足を洗おうと思い、ハローワークに相談に行った。無料でパソコンの操作術を教えてもらえる職業訓練を受けられる方法があることを知り、入校できることになったため、28歳の2006年4月に退職した。

「インターネットやメールは普通に使っていたけれど、ワードとかエクセルは使ったことがなかったから」、職業訓練校ではパソコンのワード・エクセル等の操作の講習を受けた。3カ月間の講習だったが、必修と選択科目すべてを修得して期間内で修了した。

同年6月末で訓練校は終わり、求職活動を始めた。ハローワーク経由で9月に半導体関連の専門商社の「若年者トライアル雇用」が決まり、10月に入社した。「住宅営業とは違い、決まった顧客先を回る営業ならできると思った」。都内にある社員約70人の会社で、ルートセールスをするという条件だった。給料は手取りで20万円ちょっとで求人票どおりに出たが、業務内容は異なり「営業の仕事に関わらせてもらえず、オフィスでの受発注の仕事しかやらせてもらえなかった」。10月の終わりに、ミーティングで上司から「仕事やっていけるの」と言われ、「やりますよ」と言い合いになったが、そのときはとりあえず続けることになった。イベント会場で行われた見本市にブースを出し、その担当の1人になったが、そのときも周囲では「何でアイツがやってるんだ」などと文句が出た。12月中旬にあらためて呼び出されて退職届を渡され「これに署名して」と言われた。「これって、ありなんですか」などと抗弁したが結局「とにかく書いて」ということで、本採用前に辞めることになった。

「アルバイトでもしようかな」と思っていたところに、2007年6月（29歳）に新聞で書店の正社員募集の求人広告を見つけ、応募した。「本に関する簡単な知識」を問う筆記試験の後面接を受けたところ、内定を受けることができた。しかし、給料が安く、手取りで月15万円ぐらいだった。店長、マネジャーを含む正社員3人は全員女性で、契約社員もほとんどが女性だった。その他に大学生のアルバイト店員がいた。「店長ら正社員がキツイ感じのツツツした人で、仕事をまともに教えてくれずに『やりながら覚えて』というだけだった。怒っているわけではないようなんだけど」。そのため店長や正社員の女性には聞きづらく、唯一男性の契約社員に分からないことを聞いたりしながら仕事を覚えようとした。すると店長からまた「なぜ私に聞かないの」とツツツ言われたりした。ライバル店との競争が厳しく、店内は殺伐としていて、自分と近い年齢の人が多

かったにもかかわらず輪の中にうまくとけ込めなかった。実働8時間のシフト勤務だったがサービス残業もあり、1カ月で辞めた。

2007年8月ごろから再びハローワークに行き職探しを始めた。「自分がこれからどうしていこうか、働いても仕方ない」と就労意欲を失いそうになりながらも「何かやらない」と思い、インターネットでも就職につながるような情報などを探した。親が渡してくれた新聞の記事にあった神奈川県内のジョブカフェに何度か通い、いろいろな話をしたりもした。東京都内のジョブカフェで心理学の手法を使ったグループセッションに入り、そこで知り合った人から困難を抱える人たちの生活支援を行うNPOに誘われ、足を運ぶようになった。

そこで、「社会との関わりは仕事だけじゃなくてもいいのではと思うようになり、正社員へのこだわりが薄れました」。むしろ「正社員だと社会的な活動ができなくなるのでは」と考えるようになり、ハローワークで「派遣なんかどう」と言われ、2007年秋に初めて派遣会社に登録した。「それまで正社員かアルバイトしか知らなくて、派遣という働き方があるというのを初めて知りました」。

同年12月になり、大手携帯電話会社の営業事務の仕事が入り、2008年1月から派遣された。時給1,330円、1日8時間労働、月22日の勤務で、社会保険あり、3カ月契約で勤務した。正社員の責任者は女性だったが、「バブル世代のイケイケのノリの人で、学生アルバイトの人を『あいつはバカだ』とか口が悪くて、職場の雰囲気が悪かった」。自分も悪口を言われるような気がして気分が良くなかった。処理件数が少ないという理由で、2回目の契約更新がならず、2008年6月に離職した。「自分が切られた後、何人も派遣が辞めて大変になったらしい」。

2008年7月(30歳)には、登録してあった別の派遣会社からの話で、大手情報通信会社のインターネットサービスの設定と故障に関するコールセンターで働くことが決まった。時給1,700円、1日8時間労働、月22日の勤務、1カ月契約で勤務した。健康保険には加入していたが、「厚生年金は未加入だったと思う」。1カ月間、インターネットに関する知識を習得することができて、「とても勉強になりました」。だが、研修終了後1カ月間の勤務をもって契約は更新されなかった。

同センターで得た知識がインターネットに関する民間資格の取得に役立つと、派遣社員の同僚から聞き、受験に向け勉強を始めた。

同年11月には同じ派遣会社経由で、大手インターネット接続会社のヘルプデスクの仕事を得た。「応募が殺到していたので、いまにして思えばリーマンショックの影響だったのかもしれない」。時給1,400円、1日8時間労働、月22日の勤務、社会保険あり、1カ月契約の条件で採用され、テクニカルオペレーション(「着台」という)ができるようになってから時給が1,500円となり、手取り月収は19万円ほどになった。「1カ月間の研修が民間資格の勉強内容と重なり、とてもよかった」。なお、これまで3回の登録派遣の仕事では、交通費が一切支払われなかった。

仕事は当初テクニカル系の内容で充実感を得ていたが、2009年3月(31歳)から派遣社員5人で契約関係の研修を受けることになった。しかし、多少理解の遅い受講生の女性に対して「ネチネチ文句を言ったり」するような講師がいる環境で研修は行われた。そのため「精神的にきつくて、

自分に矛先が向くのではとビクビクしながら研修を受けるのが苦しくなってきた」、派遣元にもそのことを告げた。派遣元は派遣先と交渉したようだが、状況は改善しなかった。「仕事自体は楽しく、いまでも続けたいと思うほど」だったが、「同期(2週間ごとに新入派遣社員を対象にした研修が行われるが、その研修のメンバーを同期と認識している)が辞めていくのにも影響を受け」、3月末をもって辞めた。

その後インターネットの技術系サポートの仕事で派遣登録をしているが、3月以降は仕事がない状態が続いている。

<初職から現在までの経過

(仕事・家族・友人との関係)>

大学卒業後の職業生活について、上の世代の人から聞いていた話から判断して、学校から社会に出て、3カ月なり半年なりきちんと新人研修をやってくれるので、入ってしまえばなんとかなるものだと思っていた。でもろくに研修もなしに現場に出されて重い責任を負わされる。器用じゃないから、ついていけない。「それでもなんとかやっていけばやっていけるのかもしれないけれど、どういうわけか仕事が続かない。原因は自分でもよく分からない。振り返ってみると、そういうことが顕著なんです。なんでだろうと思う」。

「そのまま仕事を続けていたら、自分自身結構がんばっちゃうので、ぎりぎりまでがんばっちゃって、体がいうことを利かなくなってしまうのではないかと不安になっては仕事を辞めてしまった。

親との関係については、「同居している以上状況については話したりすることはあるけれど、結構自分で決めました」。同僚は「みんなボロボロ辞めてたりする」ので、職場の悩みなどを話すことができず、ハローワークやジョブカフェの担当者に相談しながら自分で判断してきた。

<現在の暮らしぶり>

両親と一軒家で同居しており、生まれてから現在まで親元を離れたことはない。父親は今年9月に「親せきが相次いで亡くなり、仕事上のトラブルもあって、仕事をリタイヤした」。母親は専業主婦である。妹が1人いて1人暮らしをしているが、ときどき実家に帰ってくる。「妹にとって自分は煙たいというか鬱陶しい存在みたいですが、でもたまに帰ってきますし、普通にしゃべりますけど」。「親には依存しているという後ろめたさは感じています」。だから、いずれ親元から出たいと思っている。「いまの状況をどうにかしなければいけないし、1人で食べていけるようにしなければ出て行けないから。親から『自立しなさい』とか言われたこともありますし、無言の圧力を感じています」。最近祖父母が相次いで亡くなったため、「親がいなくなることを想像します。一層感じます。自分が親の立場だったらと本当に強く思います。このまま家にいたらすごい怖いことになるなと危機感があります。焦りはしないけれど、頭の隅にはありますね」。

結婚については、「年齢もありますし、意識します」。だが、現在交際中の女性との結婚は、「考えていません。相手がどう考えているか分からないです。このまま一緒に

なったらどうなるかな、『いまのままじゃまずいな』って
いうのはあります。』

「インフルエンザとか流行ってきているからさすがにヤ
バいと思って、最近国民健康保険に加入したが、「国民年
金はチョコチョコ払ってるんですが、ジャストタイムでは
払ってなくて。ひと月結構しますし。」

貯蓄を取り崩しながらつましく暮らしているが、「厳し
いので週何日かアルバイト入れようかなと思っています。』
食事は週の半分程度は家の食材で自分で作り、その他は
親がつくったものを食べていて、外食はほとんどできない。

< 仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見 >

大学の就職サポートについて、理系は研究室とかゼミで
就職先が決まることが多い。文系は自由に選べるけれど自
分で内定を取るしかなく、「少し不公平と感じますね。理
系の方も自由応募にすればフェアなのではないか、って気
がします。」

これまでの仕事の経験から、いまの社会は、要領のいい
人だけが残っていて、そうでない人があぶれてしまってい
る気がする。不器用な人だっがんばっていたから経済成
長があったはず。少子化で現役世代が減っていくのに、い
ろんな人が働けるようにしなければもたないはずだと思う。
特に外国人労働者の増加と移民政策が現実味を帯びるこ
とに不安を感じる。

派遣労働のときは、人間関係が比較的良かった。非正規
雇用が拡大している一つの要因は、「正社員だと責任を負
わされるからだと思う。正社員の世界では、評価される側
の間での競争が起きる。精神的にきつい。あいつを出し抜
いてやろうというようなことになる。非正規社員だと、不
安定な立場だけど、それが同じ状況だから連帯感ができや
すいんですかね？ しかし、それが良い方向に向けばいい
んだけど、非正規雇用であるということだけでのつながり
というの、疑問を感じる。自分のことを考えれば、「何
が何でも正社員で働かなければという気持ちは、いまはな
い。正社員で働くことに、厳しさやつらさを見聞きするし、
自分も経験したから、ためらいはあります。」

「製造業派遣を辞めると言われたら死活問題になるとい
う人もいますので、派遣労働の禁止は問題かなと思います。
派遣社員の中には、やる気のある人はいくらでもいるん
ですよ。そういう人をうまく正社員に上げていく仕組みが必
要ではないか。派遣社員の方が正社員より何倍も仕事が速
いというのは、いくらでもあることですしね。正規で働
きたいという人は正規で働けるような仕組みを整えてい
かないと、駄目なのではないかと思う。」

派遣期間が短かったからか、雇入れ前にも派遣労働の
期間にも職場で健康診断を受けたことはなかった。「健康
診断は自分（自費）で受けなければならぬものだと思っ
ていました。非正規雇用で心配なのは健康ですよ。健康
診断もなかなか受けられないので、一律に診断を受けら
れる仕組みがほしい。」

雇用期間が短くて一度も雇用保険の基本手当の給付を受
けたことはないが、職業紹介のサービスは利用してきた。
「会社はハローワークに求人登録をするのにお金がかから
ないんですって。だからいろんな会社が登録しているから、
倒産しそうな会社とか、いまはないような会社とか、怪し
いのが登録しているから注意しないといけないよって、よ

く言われましたね。民間の派遣会社の方が安心という思い
は、ありましたね。」また、公的職業訓練として、公的な
職業訓練校でのパソコン研修を受けたが、就職に結びつ
かなかった。「民間資格を職業訓練のプログラムに使った方
がいいのではないかと思う。」

派遣の仕事についている間は生活支援を行っている前述
のNPOとの関わりは遠のいていたが、最近また頻繁に顔
を出している。若者支援の場づくりに貢献したいと考えて
いる。就職すると、「会社の中のつきあいだけになってし
まい、会社以外のつながりを持ちにくいと思うんです。い
ろんなバックグラウンドの人が気軽に立ち寄れる場は、あ
まりないと思うんです。自分の置かれている状況以外の社
会に思いを巡らしたりできる場所があるのは、自分にと
って支えとなっています。」

自殺件数が多いことは、問題だと思っている。ベーシ
ックインカムが導入されることによって救われる命がある
なら、導入を検討すべきではないか。

労働組合とは、家庭内、職場を通じて接点はなかった。
正社員として勤めている妹の職場にはあるが、自分の在籍
してきた職場にはなかった。「労働組合には団結権が保障
されてますよね。なんでこういう労働環境なのに非正規
労働者は団結して闘わないんだって思います。自分だけ
やっけていもうしょうがないと思うんですけど、なんで声
を大きくしてやらないのか。できない理由が何かあるのか
って不思議に思います。」

< 将来の展望 >

2009年3月末（31歳）で派遣契約が切れた後、もっと高
度な専門的な知識を身につけることが必要と考え、2009年
9月から半年コースで専門学校に通学を始めた。学費は、
半分自分で、半分親に出してもらって、後で返す約束に
なっている。同校を選んだのは、「その専門学校の講師と
かが、仕事の紹介もしてくれるということなので」。現在
は学業に専念しており、卒業後に本格的に就職する予定だ
が、「お金がなくて苦しいので」アルバイトをしようと考
えている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：31歳 ■現住所：東京都 ■出身地：北海道 ■学歴：中学校卒業
- 就労の有無：病気療養中 ■直前職：建設業、建設・土木関係職、登録型派遣（違法派遣）
- 直近の収入：勤労収入なし／生活保護受給 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：中学卒業 中華料理店・店員（正社員、4年） 相撲部屋・調理等（力士見習い、1年）
 整体院・整体師見習い（アルバイト、1年） 暴力団事務所・組員（2年） 露天商（5年） 建設会社・作業員（正社員、数カ月） 建設会社・作業員（登録型派遣＝違法派遣、2年） 路上生活 年越し派遣村 現在、生活保護受給中／糖尿病の治療中

< 仕事に就くまで >

1978年、北海道生まれ。

両親、弟1人、妹1人と自分の5人家族。兄2人は先天性疾患で乳児期に死亡したので、幼くして弟、妹を含む3人兄妹となった。民間賃貸住宅で暮らしていた。

小学校就学中に両親が離婚した。父母ともに子どもの引き取りを拒んだため、子ども3人は祖父母の世話になることになった。以後、祖父母が事実上の親代わりとなった。

中学校を卒業（1993年、15歳）して就職した後は、自分が弟、妹の生活の面倒を見ることになった。

最後の学校時代（中学）は、両親が離婚していたので何も楽しかったことはなかった。強いて言えば不良仲間だけが唯一話せる相手だったこともあり、不良グループが自分の居場所だった。

父親はアルコール依存でいつも家族に当たり散らし、家出して愛人のところに行っていた。また、母親は子どもを嫌い、面倒を見なかったため、自分にとっては祖父母だけが頼りであった。そのため、事実上の両親であった祖父母を父さん、母さんと呼んで暮らした。経済的には主に祖父母の年金などが頼りで生活は楽ではなかった。

< 初職からの経験 >

1993年（15歳）両親が離婚しており、生活が苦しかったため中学卒業後に、中学校による紹介で道内の中華料理店に就職した。常連の出前先に暴力団事務所があり、その組長から執拗に組員への勧誘を受けた。

1997年（19歳）暴力団加入から逃れるため、恵まれた体格を活かして相撲部屋に入門した。部屋では飲食店員の経験を買われて調理を担当した。ところが入門の動機が暴力団から逃れるためであったので、長続きせず1年ほどで辞めてしまった。

1998年（20歳）から1年ほど、友人（暴力団員）の紹介で、整体院でアルバイトとして働いた。住み込みであった相撲部屋を辞めて以来住居がなく、友人のアパートに同居していた。

1999年（21歳）いつまでも友人のところと同居しては迷惑をかけると思い、その友人の紹介で暴力団事務所での住み込みのアルバイト（留守番係）として働き始めた（この時整体院は退職）。それを2年ほど続けた。アルバイトの留守番係でも暴力団の構成員としての活動は拒めず、軽犯罪に関わったり、右翼団体の運動員として働いた。

2001年（23歳）暴力団の活動には良心が痛み馴染むことができなかつたので、転職を希望して組を辞めた。暴力団員を辞めるために小指を切断し、正式な離脱を図った。

同年、暴力団を辞めてから、愛媛県にあった暴力団系列のテキ屋（露天商）の元締めのもとで、露天商に転職した。この当時、「刺青師」の知人にお金を貸したが返済不能となり、借金返済の代わりに自分の体に刺青を入れてもらうことで解決をはかった。

露天商として5年程度働いたが、暴力団員であった友人の自殺を機に暴力団関係との絶縁を決意して露天商を辞め、北海道に帰省した。この時点で手持ち資金は5万円だけで、帰省の費用に充てた。

2006年（28歳）帰省後、北海道のハローワークで、埼玉県にある建設会社を紹介され、正社員として採用された。地元にいる母親を訪ね、上京のための費用を工面してもらった。

ところが、就職した建設会社で「指詰めと刺青」が発覚して居づらくなり、数カ月で自主退職することとなった。

同年（28歳）、派遣会社に派遣社員として登録（28歳）し、建設現場に派遣された。ところが、2008年（30歳）に派遣先の建設現場での違法派遣が発覚して、事件になった。この当時、未払い賃金の支給を求めて派遣会社とトラブルとなった。個人で交渉のうえわずかな賃金を受け取り、会社を辞めた。その後、ホームレスに近い状態にまでなった。

2008年末の「年越し派遣村」に参加した。派遣村で、支援に来ていたある産業別労働組合の執行委員と出会い、NPOの生活困窮者支援グループを紹介され、支援を受けるためその会員になった。

< 現在の状況 >

現在は、NPOの生活困窮者支援グループの支援で生活保護受給の手続きを行い、生活保護を受けながら糖尿病の治療中である。

今後は、福祉関係の事業を起業したいと考えている。貧困者支援活動グループで知り合った友人と起業しようと相談しているところである。

元来、高齢者に好かれる性格もあり、高齢者の世話をし喜んでもらいたいという夢がある。「両親には不要な子どもだ」と邪魔にされてきたことが、人の世話をし喜ばれる仕事をしたいという夢を描ききっかけとなった。その夢を実現したいという気持ちが支えとなり、暴力団の構成員から離脱する決意ができた。ただその後は、生活するた

めに止むを得ず派遣社員となってしまったが、「福祉関係の仕事をしたい」という意欲は衰えていない。

元暴力団員の証が身体に残っているため、差別や偏見に晒され耐えてきた。そのため正社員に応募することを恐れ、避けてきた。最後の就労先として「過去を問われない建設関連」の派遣社員となったのは、他に選択肢がなかったからである。

現在、生活の相談にのってくれる支援グループは自信をなくしかけた自分の話を聞いてくれ、差別なく接してくれるので元気でいられる。この産業別労働組合、および支援グループには心から感謝している。

自分には弟、妹の面倒をみる責任があると考えている。現在でも子どもを嫌った父親は許せないが、自分は良い父親になってみたいと思う。

< 今後の要望など >

政治や労働組合に望むことは、労働者派遣法を廃止して派遣に頼らなくても暮らせる社会にして欲しい。

また、摘発されても会社名を変えて違法派遣を繰り返している悪質な派遣会社は、絶対に潰して欲しい。自分が在籍した派遣会社では、派遣社員を社員寮に入居させ、寮費は天引き、配布されたICカードでシャワー代、洗濯代等を払わないと暮らせない仕組みに追い込み、派遣社員にお金を消費させ、結果的に賃金を目減りさせて身動きを取れなくするという搾取のシステムを完成させていた。寮とは名ばかりで、貸しオフィスに二段ベッドを並べるだけの劣悪な状態が野放しにされている。当局は厳重に取り締まるべきだ。労働組合はこうした悪質な派遣会社を絶対に許さない行動を行うべきだと思うし、期待している。

調査番号：東京27

調査日：10月21日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：29歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：山口県 ■ 学歴：高校卒業
- 就労の有無：病気療養中 ■ 直前職：製造業、生産職、登録型派遣
- 直近の収入：勤労収入なし / 生活保護受給 ■ 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身
- 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 建設会社・溶接工（正社員、約1年） 建設会社・とび（正社員、約2年） 自動車メーカー・運搬（登録型派遣、6年4カ月） 電気機器メーカー・検査（登録型派遣、3カ月） 派遣村
現在、生活保護受給中 / 精神疾患の治療中 今後、職業訓練受講予定

< 仕事に就くまで >

1980年、山口県生まれ。

5人家族（母親・祖父、兄2人、自分）であった。母親は清掃の仕事をしていたが、4年前、2005年に病死した。兄2人はどこに住んでいるか分からない。現在は連絡を取れる親戚家族はいない。

高校は定時制の工業高校の機械科に進学し、バスケット部に所属した。高校では就職時の面接指導、履歴書の書き方指導、職種の向き不向きの指導があった。自分は人に流されやすい性格で、初職（溶接工）も先生が進めてくれたから就いた。特に希望する仕事もなかった。地元を出てからは仲間との交流は全くない。

< 初職からの職歴 >

定時制高校（機械科）を卒業し、19歳（1999年）で地元の山口県で見習い工として就職した。学校への求人により先生の薦めで就いた。仕事の内容は溶接作業で、8～17時、週6日勤務で休みは日曜日のみだった。日曜日出勤も月に2回ほどあったが、その分の休みはもらえなかった。月給は15万円程度であった。10人くらいの職場で、自分以外は経験を積んでいる人が多かった。仕事の内容は先輩から教えてもらった。自分はそうでもなかったが、他の人は結構怒られていたので、厳しい職場と感じていた。しかし、自

分に合わない仕事だったので、1年あまり（20歳、2000年6月頃）で辞めた。

20歳、2000年7月頃、ハローワークからの紹介で、山口県内の建設会社で正社員として採用され、とび職として働いた。8～17時、週6日勤務で休みは日曜日のみ。働く時間は前職と同じくらいであったが、月給は前職よりも3万円位多く、20万円を超える時もあった。とび職は興味のある仕事であった。5人位の会社で、朝は一旦会社に集合し、みんなで作業現場へ向かって仕事をした。作業の現場は住宅もあれば学校など色々あった。親方は大変厳しかった。夏は炎天下のもとで、冬は雪深い時でも仕事をし、作業も大変であった。職場の人とのコミュニケーションはあまり良く取れなかった。2年間、ここで働いた。ある日、雑誌の求人を見ていたら派遣労働（自動車メーカーでの車エンジンの梱包）の広告があり、月給最大30万円以上と書いてあったので、魅力を感じ登録した。

2002年（22歳）夏ごろ、登録型派遣として愛知県にある自動車メーカーの子会社で働くことになった。ここでは、2008年10月（28歳）まで、6年4カ月の間働いた。派遣会社が持っている寮（ワンルーム6.5畳、1人）で生活した。寮は三重県にあり、通勤はワゴン車で1時間位かかった。寮に住む約10人で一緒に乗って工場に向かった。日勤は8～17時（時給1,000円）夜勤は24～8時（時給1,100円）だった。自分は送迎時の車を運転していたので、1日100円の手当がついた。残業は多い時で1日3時間位。週5日勤務で

あったが、土曜日は休みが取れたり取れなかったりであった。契約は半年毎であった。

作業内容は、フォークリフトを運転し、完成した車のエンジンを梱包のために運搬をする仕事だった。派遣会社の社員は、派遣社員が出勤をしているかどうかの確認のために日々見回りにきたが、声をかけることはなかった。仕事にきつさはなかったが、社会保険と雇用保険に入れなかったことは、不安であった。2005年頃に一度派遣会社に参加を確認したところ、「来月には入れる」と言われたので、信じていた。しかし、結果的に加入することはなかった。喘息が持病なので、苦しい時は市販の薬を買って服用していた。健康保険証がなかったため、病院へは行かなかった。また、母親に仕送りをしていたので、仕事を休むことはしなかった。職場では正社員に声をかけられることはなく、他の派遣社員とも話すことはなかった。休憩時間などは皆疲れていることもあり、寝ていた。寮では同僚の派遣社員と話していた。2008年初め頃から、残業など仕事が減ってきたと感じた。

2008年（28歳）10月に、解雇（契約の途中打ち切り）を言い渡された。

別の派遣会社に登録し、10日後に三重県にある電気機器メーカーの工場へ派遣され、検査の仕事についた。テレビパネルの裏に光を当てて損傷がないかを検査する仕事であった。ワンルームでの寮生活で、時給1,000円、日勤・夜勤を隔週で入れ替わる交替勤務であった。社会保険・雇用保険はなかった。契約は3カ月（10～1月）で2009年1月までの予定であったが、仕事がないとの理由で2008年12月20日付けで契約を打ち切られることになった。派遣会社からは2008年12月17日になって、12月20日で契約打ち切りであることを言い渡され、その日より5日後までに寮から出るようにと言われた。

2008年12月22日に寮を出て、愛知県へ向かった。その後、「自殺をしたい」という思いで東京に向かった。ネットカ

フェで派遣村のことを知り、12月31日に派遣村へ向かった。

同年12月31日から翌2009年1月4日まで派遣村で過ごし、その間に受けた生活相談から東京都区内の区役所に生活保護申請をおこない、2週間後に受給が始まった。

現在はNPOの助けもあり、都区内で部屋（7畳、トイレ、バス付、駅から徒歩20分）を借りて住んでいる。

その後、派遣村元村民の支援を行っている産業別組合が実施していた炊き出しに、派遣村で知り合った人から声をかけられて、行ってみた。やはり、一人暮らしでは寂しいという思いがある。

2009年1月頃から精神疾患のため、心療内科に通院中である。通院中も就職活動をしていたが、2009年9月頃からは就職活動はしていない。2009年12月から、職業訓練校に通う予定である。

<現在の不安・心配事について>

不安は、2つある。1つは、自殺願望があることだ。現在は病院に通い、薬を服用していることもあり、その気持ちも和らいでいるが、いつ再発するか心配である。2つ目は、将来のことである。先が見えない。自分に何が向いているのか分からないが、自分で考えて動いてみたいという気持ちはある。職業訓練を終了し、より専門的なことを学ぶため、ワンランク上の職業訓練に行くか、介護に行くかを悩んでいる。12月からの職業訓練ではパソコンを勉強する。今一番集中できることはパソコンで勉強している時と、買ったギターを弾いている時である。

<政治や社会への要望について>

たくさんあるが、その中の一つを取り上げれば、自殺者対策である。自殺者が年間3万人とも言われる。なぜそんなに多いのか。きちんと調べて対策をお願いしたい。

調査番号：東京28

調査日：10月24日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：42歳 ■現住所：東京都 ■出身地：北海道 ■学歴：高校卒業
- 就労の有無：職業訓練受講中 ■直前職：農業、現業職、アルバイト
- 直近の収入：勤労収入なし / 生活保護受給 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 建設会社・防水工（正社員、約1年） ガス配管会社・配管工（正社員、約2年）
検数事務所・現業（アルバイト、約2年） 自動車メーカー・生産（期間従業員、6ヶ月） 造園業・造園師（アルバイト、約2年） 造園業・造園師（アルバイト、約2年） 建設会社・運転（アルバイト、約5年）
牧場・現業（アルバイト、約2年） 短期のアルバイトを転々（約6年） 農業（アルバイト、約1年）
派遣村相談会 現在、生活保護受給中 / 職業訓練受講中

<仕事に就くまで>

1967年、北海道生まれ。

家族構成は両親、双子の妹、自分の5人家族。

高校は地元の私立高校（全日制）を卒業した。学校での

進路指導は進学組クラスと就職組クラスに分かれていた。就職は学校に来た求人による。中学時代は特別な進路指導はなかった。高校卒業までは楽しく過ごした。

< 初職からの職歴 >

1985年、18歳で北海道の全日制高校を卒業し、地元のコーキング（窓隙間への樹脂打ち作業）専門会社に勤務した。親元から通った（1991年に、製造業派遣で神奈川県にある自動車メーカーに勤務するまで親と同居）。卒業式まで就職先は決まっていなかったが、卒業してから先生から連絡（学校求人）があり、正社員として（雇用保険あり、国民健康保険加入）就職した。勤務時間は8～17時で、休日は日曜日と雨（大雨）で仕事ができない時である。残業はほとんどない。職場の雰囲気は普通だった。賃金は手取りで月給15～16万円（額面20万円弱）位であった。1年ほど勤めて辞めた。親方が大変厳しく、嫌になって辞めた。自分も今考えると子どもであったし、仕事に対しても適当だった。他にも仕事はいくらでもあったので、あまり深い理由はなかった。1カ月位遊んで次の仕事に就いた。

1986年（19歳）地元にあるガス配管業へ知り合いの紹介で就職した。勤務時間は8～17時だったが、残業で仕事の終わりが20～21時になることもあった。賃金は月給で20万円位。10人くらいの会社で2年位勤めた。交通事故（ドライブ中に横転、脱臼・骨折）に遭い、1カ月位入院した。その後、仕事に行きづらくなり辞めた。国保に入っていたし、治療費などは親元にいたので特に心配なかった。入院中に職場の人が1回位お見舞いに来てくれたと記憶している。退職後2カ月位は何もしなかった。

1988年（21歳）友人の親が課長をしていた地元にある検査事務所にアルバイトとして就職した。40名位の職場で、ソ連（当時）からの輸入木材の長さや重さを量る仕事をしていた。8～17時勤務、休みは月2回位で、当時の輸入木材増加による影響もあり忙しかった。残業もあり、残業代もきちんと払われていた。2年位勤めた。辞めた理由は、会社が合理化を進めるなか、アルバイトを正社員にするかしないかで労働組合と会社が揉めていた。労働組合は職場に3組合あった。どの組合に入っても良いか迷い、真剣に悩んだ。友人の親から紹介してもらって入社したこともあり、その親が勤める会社側の組合に入った方が良いのか、周りで一緒に働いている人が入っている対立している組合に入った方が良いかで迷った。それがきっかけで「じゃあ辞めようか」と他のアルバイトとも話して辞めた。その後2～3カ月位ぶらぶらと遊んだ。その間、失業手当を受給した。

1991年（24歳）就職情報のチラシを見て、神奈川県の自動車メーカーの工場で6カ月の期間従業員として働いた。これ以降、一人暮らしとなった。寮（工場まで歩いて5分）生活、賃金は月に30万円位、昼夜勤の週替わり交互の勤務だった。契約期間満了に伴い、6カ月後に地元北海道へ戻った。

1991年からの2年間（24～26歳）は道内にある造園業に勤めた。日給9,000円で、仕事は毎日あった。一般家庭の庭づくり全般をしていた。親方を含め2～3人で仕事をした。親方は口が悪くお酒を飲んで仕事をするなど、常識がなかった。仕事もきつかったが、人間関係が嫌で辞めた。

1993年からの2年間（26～28歳）は道内にある別の造園業に勤めた。親方同士（前の造園業）は知り合いだったが、あまり仲は良くなかった。知り合いということが特に仕事のやりにくさになることはなかった。労働条件は前職と同程度だった。

1995年からの5年間（28～33歳位）は道内で、でき上がっ

たコンクリートをフォークリフトで運ぶ仕事について（リフトの免許なし）。8～17時勤務、残業はあっても1時間位、日給で8,000～9,000円位だった。仕事が減ってきた（災害がないと仕事が減り、公共事業も減少）ことと、現場責任者が威張ることが嫌で辞めた。現場責任者の態度について改善してほしいと社長にも言ったが、駄目だった。その社長の息子の紹介で次の仕事（牧場）に勤めた。

2000年からの2年間（33～35歳位）は、道内にある牧場（馬50頭）で、馬の出し入れや掃除の仕事をした。勤務時間は朝5時30分～17時30分で、3～4人で仕事をしていて、きついこともあって、常に人が入れ替わっていた。自分はアパートから通っていたが、他の人は住み込みだった。経営者は「地元でも有名なワル」だった。仕事もきつく、我慢していたが2年位で限界となり辞めた。

2002年からの6年間（35～41歳位）は短期のアルバイト生活を続けた（古紙回収、警備など）。

2008年（41歳）春から11月までは農家でアルバイトをした。農家では大根、カボチャ、白菜などの栽培に携わった。

同年11月に農家を退職後はアルバイトを探したが、見つからず、実家に戻った。地元のハローワークへも通ったが年齢的に見つからなかった。若い人を優先して採用する会社ばかりであった。

2009年（42歳）4月に東京に来れば何らかの仕事はあると思い、4万円を持って東京に来た。サウナで2日ほど過ごし、派遣村の相談会があることを知り、相談会に参加した。その結果、生活保護を受けることになった。暫くは都内の施設で過ごし、同年5月半ばからアパート住まい（ワンルーム6畳、駅から7分）をはじめた。

2009年7月29日から10月30日までの予定で都区内にある職業訓練校に通い、パソコンの勉強中である。受講時間は9時～14時30分である。10月30日からは東京で仕事を探す予定である。

< 家庭の状況 >

両親は健在である。父親は北海道で旅客機の機内食づくりの会社に勤めていた。同社に40歳位まで勤め、その後いくつか職を変えた。現在は年金で暮らしている。母親はパートで看護師の仕事をしている。現在両親とは連絡をとっていない。お金でもあれば会いにいきたいと思っている。双子の妹はそれぞれ結婚し北海道と千葉に住んでいる。妹とは定期的に連絡を取っている。

< 健康状態について >

身体に結石があるという診断を受け、1カ月に1回通院し経過を観察中である。

< 今、困っていること >

10月末以降に不安がある。長く続けられる仕事が見つかるとうれしいと考えている。自分に何が向いているのかわからないが、とにかく長く続けられる仕事に就きたい。

生活必需品で我慢しているものは、洋服、靴、掃除機、電子レンジである。食事は自炊が中心で特に困っていない。

社会に対しては景気を良くして欲しい。「お金ばかり」という考え方が変わる世の中にしてほしいと思っている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：48歳 ■現住所：千葉県 ■出身地：東京都 ■学歴：高校中退
- 就労の有無：病気療養中 ■直前職：運輸業、運転関係職、契約社員
- 直近の収入：勤労収入なし／生活保護受給 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校中退 建築会社・自営（事業主、2年） 自営業廃業 土木会社・作業員（アルバイト、1カ月） 建築会社・作業員（アルバイト、3カ月） 運送会社・運転助手（正社員、2年） 溶接会社・溶接工（正社員、2年） 入院・手術 運送会社・運転手（正社員、5年） 運送会社・運転手（正社員、2年） 測量会社・測量師見習い（正社員、4年） アルバイトを転々（1年） 土木建築会社・作業員（正社員、3年） パチンコ店・店員（アルバイト、6カ月） 新聞販売店・新聞配達（アルバイト、3年） 運送会社・運転手（契約社員、6カ月） 運送会社・運転手（契約社員、6カ月） 運送会社・運転手（契約社員、4カ月） 運送会社・運転手（契約社員、2年）+運転代行会社・運転手（アルバイト、2年）かけもち 運送会社・運転手（契約社員、1年弱） 生活保護申請・却下 運転代行会社・運転手（契約社員、数カ月） 派遣村 現在、生活保護受給中／病気療養中、支援ボランティア団体を立ち上げ活動中

< 仕事に就くまで >

1961年、東京都生まれ。

父親、母親、姉、弟2人の6人家族で、茨城県で育つ。

父親は建築・防水関係の自営業（行政からの仕事が主）を営んでおり、生活は世間から見ると良い方であった。

学校は休まず通学したが成績はあまり良くなかった。信頼できる先生や友人もおり、普通の学校生活を送った。

高校2年（17歳）の時、父親が脳血栓で倒れ、高校を中退し自営業を継いだ。子供の時から父親の仕事を手伝い、仕事の経験は多少あった。

< 初職からの経験 >

1978年、17歳で父親の仕事を継いだ。自営業の事務所は実家とは別のところ（同じ茨城県内）にあり、その事務所に住み込んで仕事をしたため、家族とは別居した。

父親は行政からの仕事を主に請け負っていたが、自分が急に仕事を継いだこともあり、「経験がほとんどない」との噂が流れ信用をなくし、行政からの仕事がなくなったが、民間の仕事で食いつないだ。

仕事はそれなりにあったものの、仕事の売り上げを管理していた母親が自身の借金の返済にその売り上げを充てたために、材料代等の支払いが滞り、自分は700万円強の借金を抱えることとなった。返済に向け仕事を頑張ったが借金の取り立てが連日続き、ノイローゼになってしまった。さらに交通事故を起こし、1カ月半程度の入院を余儀なくされた。結局、2年で自営業を廃業した（19歳）。借金は、母親が自分に相談もなしに勝手に事務所（140坪）と家（40坪）を売却し、返済した。

1980年（19歳）自営業廃業後は友人の紹介でいくつかのアルバイトを転々とした。富山県内のトンネルの止水工事（1カ月）や岩手県・広島県・埼玉県・群馬県での通信会社の排煙工事（3カ月）などを経験し、月収は20万円程度（他に住宅手当あり）であった。

1981年（20歳）友人の紹介で千葉県の運送会社に、正社員の運転助手として就職した（寮付き）。月収は手取り18

万円程度で、2年勤務した後に退職した。1983年（22歳）千葉県内にある重工業メーカーの溶接下請会社に正社員として就職した。2年ほど勤務するが、19歳の時の交通事故が原因で血管が詰まる病気になり、入院し退職した（24歳）。

また、同時期に父親が死去し、葬儀等の雑務に追われ病気を放置した結果、倒れ、手術を受けた。手術費用は130万円程度かかったが、70万円は入院付生命保険等から、残り60万円は月5万円ずつ返済した。

1985年（24歳）病気から回復後、（茨城県内）の食品メーカーの工場内にある運送会社に正社員（運転手）として就職した。勤務時間は忙しい時には朝4時頃から22時頃までで、月収は手取り26万円程度で、5年間勤務したが、上司とのトラブルで退職した。

1990年（29歳）茨城県内の運送会社に正社員として就職した。月収22万円程度であったが腰を痛め、2年で退職した。

1992年（31歳）友人が測量会社を始めるとのことで正社員として就職した。月収は20万円+（福利厚生完備・社員旅行（海外含む）あり）の待遇の良い会社であったが、業務に必要な資格を取れず4年で退職した。

1996年（35歳）から1年程度はアルバイトを転々とした。

1997年（36歳）で、茨城県内の寮付き土木建築会社に就職した。日給12,000円、月収で26万円程度だったが、倒産により3年で退職した。退職後、半年程度はパチンコ店でアルバイトをした。

また、1998年（37歳）から9年間、内縁の妻と同棲。相手は専業主婦の状態にあった。子供は、もうけなかった。

2001年（40歳）求人誌で千葉県の新聞販売店に寮付きでアルバイトとして就職した。月収は20万円程度であったが、歩合制で、休みは月1回、1日300～400軒の配達で体がもたず、3年で退職した。

2004年（43歳）千葉県の運送会社にトラック運転手の契約社員として就職、手取り27万円程度であったが、契約と違う倉庫業に配転となったことから、労基署等に訴え、トラブルとなり6カ月程度で退職した。

同年、千葉県の他の運送会社に契約社員として就職。月収25万円程度であったが、朝の3時頃から夜11時頃までの

勤務で、社会保険料を社員から徴収し国庫に収めていないなどのトラブルがあり、6カ月程度で退職した。その後会社は倒産した。労基署に告発していたため、解雇手当は倒産した会社から仕事を引き継いだ会社から支払われた。

2005年（44歳）千葉県内で、コンビニの配送会社に契約社員として就職した。3カ月は見習社員で、その後、契約社員に昇格し、月収は37万円程度だったが、夕方4時頃から朝の5時頃までの勤務した。見習い期間が終わりしばらくして、酔っ払い運転の車に追突され、首、腰を痛めた。4日以上休むと解雇といわれたが、体が動かず休んだため、何の補償も受けずに解雇となった。会社に置いてあった自分の荷物等は会社によって処分されてしまった。

同年、防水工事業を営む友人の紹介で、材料運びの仕事をはじめた（運送会社の契約社員）。仕事は繁閑の差が激しく、良い時は月20日、悪い時は月3日程度で不安定だった。食いつなぐことができなかつたので合間に運転代行のアルバイトをしたが、その後防水の仕事がなくなり2年で辞めた。同時期に運転代行も辞めた。

2007年（46歳）昔の仲間の紹介で運送会社に契約社員として就職し、月収26万円程度だった。同年12月31日に荷物の下敷きとなりケガをし、何の補償もなく解雇された。

2008年（47歳）に千葉県内の自治体に生活保護を申請するが、却下された。アパートに入居していたが、家賃滞納で強制退去となり、寺に2泊、公民館に3泊、世話になった。友人の紹介で千葉県内の学生用アパートを紹介され、即日入居した。家賃3万円で、管理費等はなかった。千葉県の運転代行会社に就職したが、所長（元ヤクザ）から暴力・リンチを計6回受けたため、逃げ出した。同年11月15日から2009年1月1日まで千葉県のネットカフェを利用した。

2009年1月2日（48歳）派遣村に向かった。生活相談の

結果、生活保護を申請し、受理され、現在は千葉県内に住む。

< 現在の生活状況 >

現在の生活は大変苦しいが、運良く派遣村にたどり着き、生活保護を受けることができるようになり、住居もある。

母親は行方不明であるものの、探す気はなく、兄弟とも連絡する気はない。一人で生きていくことに不安を感じる。

健康状態はあまり良くなく、うつ病もあり医者からはなるべく外に出るように指示されている。そのような状態であり、就労意欲はあるにもかかわらず、求職活動は現在していない。しかし、自分たちと同じ仲間を支援するため、派遣村の元村民とボランティア団体を立ち上げ、全力で活動を続けている。また、これに生きがいや存在感を感じている。

< 本人の望みや不安 >

最低賃金など労働条件の引き上げ、再就職支援の充実、生活保護の充実などを要望する。自分の体験から八ローワークに行っても条件に合う仕事はなかなか見つからないと感じている。

また、生活保護の申請は一人で行っても、まず受理されない。NPOや支援団体同伴であれば受理されることから、これらの支援のありがたさを実感した。

国や行政の責任で更なる実効性のある支援策を望む。

現在、生活保護を受けており、体調の関係から求職活動を行っていないが、このままでよいのか不安は残る。

調査番号：東京30

調査日：10月26日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：36歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：愛知県 ■ 学歴：高校卒業 ■ 就労の有無：求職中
- 直前職：製造業、生産職、日雇い型派遣 ■ 直近の収入：勤労収入なし / 訓練・生活支援給付金受給
- 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身 ■ 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 電気機器メーカー・設計（正社員、5年） 実家の自動車整備会社・自動車整備（家族従業者・4年） 自動車部品メーカーZ社・設計（登録型派遣、数カ月） 自動車メーカーY社・設計（登録型派遣、3カ月） 自動車部品メーカーZ社・設計（登録型派遣、1年） 自動車部品メーカーZ社の100%子会社X社・設計（常用型派遣、2年強） 母親の看病（無職、3年） 日雇い型派遣（1年） 派遣村生活保護受給 現在、訓練・生活支援給付金受給中 + 基金訓練（ビルメン）受講中

< 仕事に就くまで >

1973年、愛知県生まれ。

家族構成は両親、兄1人、妹1人と自分の5人家族。

子どもの頃から睡眠障害を抱えており、日中は常に眠気を感じる状態が続き、週末に十分な休養時間を必要としていた（いまでも症状は継続）。中学時代は、部活動（弓道）に取り組み、当時の友人との付き合いは少数ながらも続いている。高校は部活動（弓道）を通じた推薦で、

工業高校の電子機械科に入学した。勉強については、きちんとすればできた方だが、授業を聞くだけで平均より上のレベルに行けたので、面倒なこともあり勉強しないことが多かった。進学は、大学に合格したものの、父親が進学を望んでいない様子だったので「面倒になった」ため取りやめた。父親は自動車整備工場を経営していたが、年収が100万円台のため、母親は新聞配達と別の仕事を掛け持ちしながら家計を支え、高校まで通わせてくれた。大学進学にあたり奨学金を受給することも検討したが、大学卒業の後は

借金を抱えて就職することになり意味がないと思い、働いた方がいいと考え、就職を選択した。

<初職からの経験>

1992年(19歳) 高校を卒業してすぐ愛知県内の電気機器メーカーに正社員で就職した。一人暮らしを始めた。家電等のプリント基板の配線設計に従事していた。設計の部署には6~7人が働いていた(会社は400名規模)。労働時間は通常朝8時半から17時半だが、定時で上げられることはほとんどなく、残業を含めると19時から21時まで働くことが多かった。ひどい時は4日間連続で徹夜することもあった(上司のミスで、2週間かかる仕事を4日前に渡され「何とかしてくれ」と言われたこともあった)。この職場で5年ほど勤務していたが、1997年頃(24歳) 配線の仕事ばかりで飽きが来たこと、賃金も良くなかったこともあり(基本給約17万5千円、一時金年間2.7カ月前後)、他社に移った方が良いと思い退職した。

その後、「半年くらい充電するつもり」でいたが、実家の自動車整備工場の手伝いなど4年間(24~28歳)していた。その間に自動車整備士3級の資格を取得した。

2001年(28歳)に、派遣会社A社経由で、自動車部品メーカーZ社で設計の仕事をした。実家での手伝いの関係で自動車部品の設計の人手不足の話があったこと、以前の職場でCAD(2D)の経験もあったことから応募した。仕事は合っていたようで、「ああ、これかな。ズバツとはまった」と思った。自分では、アルバイトとして自動車部品メーカーと契約したものと思い込んでいたが、実際には詳しい説明もないまま登録型派遣契約を結ばされていた。職場で3DCADを1週間で覚えると、すぐに正社員がやるような仕事を任せられた。なんとか仕上げたが自信が持てないまま納める状態で、派遣会社A社に「こんな状況では自信を持って仕事ができない。自分は自信を持って線を引きたい」と申し出たが、派遣会社は派遣元の立場ということもあり、「みんな同じような状況で来ている」と、あまり良い回答が得られなかった。そこで派遣先の自動車部品メーカー会社Z社の責任者に直談判したが、改善されなかったことから、結局数ヶ月で辞めることになった。

すると派遣会社A社は、別の派遣会社B社での仕事の話を持ち出した。よくよく話を聞くと、それは、B社経由で、別の派遣会社C社から、大手自動車メーカーの100%子会社を通じて大手自動車メーカー本社への派遣を行うという二重派遣ならぬ四重の違法派遣だった。

そのことに納得がいかず、A社を退職し、良い条件を出してきた派遣会社C社に移り大手自動車メーカー本社Y社の設計部門に派遣されて仕事をするようになった。最初のA社の時給は1,400円だったが、C社に移ってからは時給1,800円、3カ月後には時給2,200円になった。しかし、そこで使われているCADのシステムがこれまでと異なるものだったために対応できず、3カ月後に契約打ち切りになった。

そこで、派遣会社C社からの紹介で再び自動車部品メーカーZ社の別の部署で仕事をするようになった。この職場では、上司が性格面を含めて色々と指導してくれたこともあって、上手くいった。いろんな意味で、「いまの自分があるのは、その人のおかげ」と大変感謝している。

それから1年ほど経った時(2003年頃・30歳頃) 派遣会

社C社から別の会社を「手伝って欲しい」と言われ、自動車部品メーカーZ社の100%出資の子会社X社に行った(X社に移った時に常用型派遣となる)。そこではケーブルやエンジンの設計などに携わった。その職場では2年強働いた。

2005年(32歳)に、その職場に大手自動車メーカー本社を退職した人(61~62歳)が課長としてやってきたが、その課長は、自分から見れば「言動や段取りの仕方などがなっていない、全然ダメな人」だった。それでも、父親と年齢が一緒だったこともあり、睡眠障害を抱えていたがその課長を「助けよう」と思い、時間を割いて色々なことを教えようとした。ところが、1カ月ほど経ったある日、その課長から突然「私に関わらないでください!」と言われ、ショックを受けてしまった。そのことと、「東京で自立してみようと思った」こともあり、退職した。結局このX社には、2年強いたことになる。

その後、仕事を探すために東京に出てきたが、条件に合う住宅物件が見つからず、1カ月程で実家に戻った。この頃、母親が病気(脳内出血)で倒れた。すぐに回復したが、その後3年ほど母親の面倒を見るため実家に留まることになった。この間、妹に離婚問題が生じたことがあったが、妹夫婦の間に入り、「子どものことを考えたら、どんなことがあっても両親は一緒にいるべきだ」などと説得し、離婚を思いとどまらせたこともあった。一旦回復した母親は、3年後に脳内出血が再発し一時半身不随となったが、現在は歩けるまでに回復している。この間、母親の診療などをめぐって父親と対立した。最初に母親が頭痛を訴えた時、自分は「病院に行く必要がある」と言ったが、父親は聞く耳を持たなかったし、あるいは食事制限をめぐる意見の違いなどがあった。結局2008年になって、母親の2度目の病気の後に父親と喧嘩して家を出ることになった。

2008年(35歳) 実家を出て以降は、自分の軽ワゴンの中で寝泊りし、日雇い派遣を繰り返した。その間友達や派遣仲間の部屋で洗濯などをしてきた。やがて日雇い派遣の社会問題化、景気後退などで2008年9月頃から仕事が減ってきた。この間1カ月の食費5千円、ガソリン代5千円で生活していたが、電話代などは借金をしていた(累計の借金は約30万円)。このように、「貧困の状態になってはじめて分かったが、日々食べる以外には考えられなくなっていた。求人相談などの情報も乏しく、ニュースを見るくらいしかなかった」。年末まで愛知県内にいたが、その後東京に出た。そして、正月に派遣村の様子を見て、1月3日に派遣村に向かった。派遣村のことはその前から知っていたが、自分で仕事を辞めたので派遣切りではないため、派遣村では支援を受けられないと思っていた。しかし、派遣村の関係者が「誰でもいい」と言っていたので、「それなら」と思った。派遣村で相談したところ、「生活保護を受けた方がいい」と言われ、「もともと生活保護は受けたくないという考えを持った人間だったが、その時は受けられるなら良いかな」と思い申請することにした。

<現在の状況>

現在、生活保護を受けながら都内のアパートに住んでいる。

生活保護費の中から貯金をし、余裕も出てきたので「生活保護を辞退し、自活したい」と思いケースワーカーに

言ったところ、「そう簡単に止めることはできない」と言われた。自活するためにはまずは仕事を得ようと思い、緊急人材育成支援事業の「訓練・生活支援給付金」の支給を受けつつ、就職に向けて「基金訓練」^(注)を申し込み、現在ビルメンテナンスの仕事の訓練を受講中である。

中学・高校からの友達は、生活保護を受けていることを聞いて「なんでお前が」と驚いていた。振り返ると、困った時に友達に連絡すれば良かったのだろうが、いままで自分で結論を出して行動するタイプだったので、相談はしなかった。

現在両親とは連絡を取っていないが、兄からは時々パソコンの使い方を電話で聞かれることがある。兄からは「何かあったら連絡するように」と言われるが、自分の状況と、兄も子どもを抱えていることから、その気にはならない。

また、「以前は人にはそれぞれ役割があると思っていたが、職場で自分には役割がないということを感じた。いま、自分の役割とは何だろうと考えてしまう」。

<今後の要望など>

今後については、「いまは生活保護から抜け出すことが第一で、そしてビルメンの仕事に就きたい。また、ビルメンの世界は、賃金は低いし、パートを雇って安くあげようとするところもあるらしい。仕事に就いてそれが事実であ

れば仲間のために改善に向けて発言していきたい」。現在受講している基金訓練について不満がある。「ハローワークで見たチラシには、訓練を受けると資格取得ができるかのような記載があったため期待して受講したが、実際には就職し実務経験を経ないと受験資格が得られないということが分かった。はじめからそうであれば、チラシなどで正確に説明すべきだ。講義の内容も、実技科目と言いつつテキストの棒読みしかないことは問題だ。その講座は福祉関係の専門学校が授業の空き時間を利用して開設していることなどもあり、基金訓練を利用して金も受け取るためだけにやっているのではないかとも感じる。当座の生活費のために受講する人もいるかもしれないが、資格を取って頑張りたいという人もいる。ハローワークや労働局は、講座の内容も含めてしっかりと監督すべき」である。

(注) 基金訓練とは、緊急人材育成支援事業による再就職支援の制度であり、「訓練・生活支援給付金」とセットで実施されている。これは、雇用保険を受給できない離職者(受給を修了したものを含む)に対して、専修・各種学校、職業訓練企業、NPO法人、社会福祉法人、事業主などが、中央職業能力開発協会により訓練実施計画の認定を受けて行う無料の職業訓練である。訓練期間は3カ月から1年程度となっている。

調査番号：東京31

調査日：11月11日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：29歳 ■現住所：神奈川県 ■出身地：神奈川県 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：人材サービス業、事務職、アルバイト ■直近の収入：月15~20万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校卒業 放送会社・事務(アルバイト、3カ月) 地方銀行・事務(登録型派遣、1年8カ月) スーパー・店員(アルバイト、3カ月) 無職(5年5カ月) 若者自立塾(1年8カ月) キャリア・コンサルティングNPO・事務(アルバイト、1年8カ月 若者自立塾の在塾期間8カ月を含む) 現在に至る

<仕事に就くまでの生活(家庭・学校)>

1979年、神奈川県生まれ。

中学生のとき身体を壊して、通信制高校に進学した。ただ、毎日高校には通っていた。

高校卒業後、1997年4月(17歳)から、パソコンの情報処理専門学校に進学して、2年間学んだ。専門学校では、「情報処理」「エクセル」「日本語文書処理」などの資格を取得した。情報処理専門学校には、「開発者コース」と「利用者コース」があり、自分は後者のコースを選択した。

卒業の時期が近づき、就職活動を行ったけれども、当時の労働市場では開発者(システム・エンジニア)が強く求められ、希望の仕事が見つからず、「どうすればいいのか、自分でも分からなくなってしまった」。ただ、まだ19歳と若かったので、すぐに答えを出そうという気がせず、とりあえずアルバイトをすることにした。

<初職から現職までの職歴>

1999年4月~1999年7月(19歳)

専門学校を卒業後、1999年4月(19歳)から、デジタル放送のカスタマーセンターでアルバイトを始めた。仕事内容は、顧客情報データのパソコン入力を中心だった。当時は、月曜日~金曜日までの週5日、9:00~17:00の勤務形態だった。時給1,000円だったので、月収17万円くらいだった。アルバイトの場合、社会保険には途中から加入できるというシステムだったと思う。最終的に、雇用保険・健康保険・厚生年金に加入した。職場には、実家から通った。

3カ月ほど経ったあと、仕事を辞めた。データ入力の仕事だけだと思っていたら、実際はクレーム処理の仕事もこなさなくてはならず、かなりストレスを感じるようになった。毎日することが同じで、慣れない作業だったのが負担

だった。職場は、女性のアルバイトがほとんどで、みんな助け合うような雰囲気もなかった。

1999年8月～2001年3月（19～21歳）

すぐ仕事をしなければという気持ちで、求人誌や新聞を見たり、インターネットの求人サイトを覗いたりした。ただ、当時は利用の仕方をよく知らなかったので、ハローワークには行かなかった。求人誌を見て、派遣会社への登録を行い、面接に行った。すぐに電話をもらい、1999年8月（19歳）から、地方銀行において情報システムの管理・運用業務を派遣社員として行うことになった。勤務は、週ごとにシフトが変わる3交替制で、週休2日だった。月収は21万円、雇用保険・健康保険・厚生年金にも入っていたと思う。

この仕事は、2001年3月（21歳）に辞めるまで、1年8カ月続けた。仕事を辞めた理由は、監視業務なのでタイムスケジュールだけがきっちり決まっておらず、逆に「仕事がなさすぎて、（時間を）持て余してしまい、このままだと（自分が）だめになってしまう」と思ったからである。確かに、今から仕事内容を振り返ると、楽な仕事だったかもしれない。ただ、「当時は若かったので、このまま続けることに疑問を感じた」。

また、当時の職場はややこしく、二重派遣だったと思う。派遣会社からある会社に派遣されたが、実際の職場はその派遣先会社からさらに派遣された別の会社だった。

2001年4月～2001年7月（21歳）

1カ月ほど休んで、高校時代のアルバイト先であったスーパーの精肉部で、再びアルバイトをすることにした。週4～5日出勤して、毎日5～6時間くらい働いたと思う。時給が800円だったので、月収10万円弱だった。3カ月くらい経って、辞めた。

2001年8月～2006年12月（21～27歳）

仕事を探そうと思ったが、自分の希望する条件と求人が合わず、なかなか求職活動がうまくいかなかった。当時は、正社員で働こうと考えておらず、アルバイトか派遣社員を望んでいた。「自信がなかったとかではなく、もっといろいろなことがしたかったんだと思う。枠のなかに入らず、もっといろいろしてもいいんじゃないかと思っていた」。

仕事が見つからないので、時間を持て余すようになり、趣味の写真に時間を割くようになった。日々、写真を撮るか、インターネットを見るかの生活になってしまった。生活は親がかりで、この状況が5年半続いた。「時間という概念がすっ飛んでいて……。いつ寝て、起きているのか、自分でも分からず、本当にめちゃくちゃな生活だった。外に出ていたのに、本当の意味でのひきこもりではなかったと思う」。ただ、時間が経つにつれて、仕事を探さなければと徐々に思うようになったが、行動には移せなかった。

2007年1月～現在（27～29歳）

何もしない状況が5年半続いて、親がすごく心配し始めた。自分の知らないところで、親が社会復帰の方法をいろいろ調べ、若者就労支援組織を見つけてきた。そのときは年齢も高くなっていたので、断る理由もないと思った。とりあえず見るだけ見てみようという思いで、2007年2月（27歳）頃、若者就労支援組織へ相談に出かけた。そこで

組織の代表者に会い、支援を受ける決心をした。

その若者就労支援組織は、厚生労働省の委託によって、若年無業者に対する生活訓練と職業体験を行う「若者自立塾」を運営していたので、2007年4月（27歳）から、「若者自立塾」の塾生となり、卒業するまで1年半ほど過ごした。最初の1年間は、寮に寝泊まりしながら、講義の聴講、運動、ボランティア活動、お好み焼屋やカフェでの就労体験を行った。「ここにいるからには、何か変えようと思わないと、何も変わらないまま、時間だけが過ぎてしまうと思っていた。決して無駄な時間ではないし、意味のある時間になったと思う」。

2008年4月（28歳）から、キャリア・コンサルティングを行うNPOでアルバイトを始めることになった。このアルバイトは、若者就労支援組織に紹介してもらい、「若者自立塾」の寮に住みながら職場に通った。なぜなら、若者就労支援組織として、うまく職場に定着できるかしばらく見守る必要があり、そしてまた実家暮らしを始めてしまうと、もとの不安定な生活に戻ってしまうことを危惧したからである。仕事内容は、キャリア・コンサルティングの技能検定を対象にした講習会の運営事務である。告知・会場探し・申し込み受理・事務処理・会場設営など、作業は全般にわたる。勤務時間は、月曜日～金曜日の週5日、9：30～18：00までだが、実際は20：00くらいまで残業することが多い。給料は、時給1,050円で、月収20万円弱である。雇用保険・健康保険・厚生年金にも、すべて加入していた。

その後、2008年11月（29歳）に卒業し、賃貸のワンルーム・マンションで一人暮らしを始めた。現在もNPO法人でのアルバイトを続けている。「生活だけで言えば、そんなに支障はない。ただ、来年、仕事を変えるかもしれない」。現在、大阪府にあるキャリア・カウンセリングの財団法人から、誘われている最中である。

< 仕事に就いてからの生活 >

自分のこれからの将来を考えると、やはり正社員になりたいと思う。「20歳過ぎの頃、いろいろ経験してみたいと考えていた時期とは、時間も年齢もぜんぜん変わってきている。安定したものを望めるようにならなければいけないと思っている」。

< 社会に対する意見(政治・労働組合・NPO)>

労働組合とは、ぜんぜん接触がない。「実際に関わることがないぶん、何をしているのかうまくイメージできない」。

政治については、「仕事がやりたくてもできない人がいるのは、どうかと思う。みんな働けるようになれば、いいことだと思う。あとは、賃金のことだ。低賃金が多すぎると思う」。

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：27歳 ■ 現住所：神奈川県 ■ 出身地：神奈川県 ■ 学歴：大学卒業
- 就労の有無：就労中 ■ 現職：飲食店、飲食店関係職、アルバイト ■ 直近の収入：月15～20万円
- 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身 ■ 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 農業・作業員（アルバイト、3カ月） ペンション・従業員（アルバイト、1カ月） 在宅介護サービス会社・福祉（準社員、1年1カ月） ホームレス支援NPO・食堂店長（アルバイト2カ月、正職員2年3カ月） 引っ越し会社・作業員（日雇い型派遣、2カ月） 運送会社・運搬（登録型派遣、4カ月） 引っ越し会社・作業員（登録型派遣、1カ月） 石鹸製造会社・運搬（登録型派遣、2カ月）
さまざまな日雇い派遣 通関手続き代行会社・事務（登録型派遣、2カ月） 運送会社・運搬（登録型派遣7カ月、アルバイト1カ月） 以降、現在まで3つのアルバイトを掛けもち / ホームレス支援NPO・給仕（アルバイト、3カ月）+ ホテル・受付（アルバイト、3カ月）+ 飲食店・給仕（アルバイト、3カ月）

<仕事に就くまでの生活（家庭・学校）>

1981年、神奈川県生まれ。

4年制大学で機械工学を専攻した。専攻分野とはまったく関係ないが、神奈川県内の労働者が多く住む地区にあるホームレス支援NPOの活動をたまたま知って、すごく興味がわいた。大学3年生（2002年）のときから、このNPOでボランティアを始めた。大学4年生（2003年）のときには就職活動をせず、卒業してからも就職はしなかった。在学中、就職を考えた時期に、自分がやりたいことは、機械ではなく、NPOやNGO活動だった。でも、能力が足りなかったり、ちょうどいい行き先が見つからなかったりして、行き詰ってしまった。そこで、すぐ就職しなくてもいいかと思い直し、関心のある農業を体験することにした。

<初職から現職までの職歴>

2004年4～9月（22～23歳）

卒業したあくる日の2004年4月1日から、フェリーに乗って北海道に行き、3カ月の間、住み込みで農業のアルバイトをした。2004年6月に神奈川県に戻って、1カ月ほどふらふらしたあと、8月から山梨県のペンションで住み込みのアルバイトを始めた。9月から、ニュージーランドのワーキングホリデーに行こうと計画していたが、急な出費のため渡航費を工面できずに行けなかった。

2004年10月～2005年10月（23～24歳）

2004年10月から、在宅介護サービス会社で、準社員として働くことになった。月曜日から金曜日の週5日勤務で、出勤時間は11：00～19：00であった。仕事内容は、障害者や高齢者の訪問入浴サービスで、看護師・ヘルパー・オペレーターが三人一組で行うものであった。自分の担当はオペレーターで、主に車の運転・風呂の搬入・入浴介助をした。1件だいたい移動時間も含めて1時間で行い、1日6～7人を担当した。

給料は、定額の月給制ではなくて、1日に何件担当したかという歩合制だった。月収は21万円くらいだった。ボーナスはあったけれども、雀の涙だった。準社員と正社員の違いは、給与システムにあったように思う。準社員の給料は件数によるけれども、正社員の給料は基本給に基づいて

いた。しかし、仕事内容はほとんど変わらなかった。準社員だったので、雇用保険・健康保険・厚生年金には加入した。

在宅介護サービス会社で働いていたときも、ホームレス支援NPOで週1回の無償ボランティアを続けていた。2005年6月ごろ、このNPOの正職員にならないかと言われ、その誘いを受けることにした。2005年10月に在宅介護サービス会社を辞めた。

2005年11月～2008年3月（24～26歳）

ホームレス支援NPOでは、2005年11～12月までは、アルバイトとして働き、2006年1月から正職員になった。このNPOは、300～400円で定食を出す食堂を運営しているので、その店長を担当した。仕事内容は、朝の仕入れ作業・レジ係・シフト管理・営業活動（ピラまき）などであった。週6日の勤務で、朝5：00か6：00くらいに出勤して、終わるのは19：00か20：00くらい。当時、労働時間は長時間だったし、自治体で発行していた「パン券」（食事用のクーポン券）が利用できる食堂だったので、休日が設けられなかった。月給は17万円で、雇用保険・健康保険・厚生年金は完備していた。当時、このNPOには正職員が5人くらいいたように思う。

ボランティアでよく知っているところだったので、おもしろかったけど、たいへんなところもあった。「いきなり、店長というポジションになったので、24～25歳の若者が、倍以上年齢が違う人の上に立って、指示したり、シフトを組んだりして。経験内容がぜんぜん違う。1日もすごく長いので、初めの半年はすごくたいへんでした。ただ、チームがうまく行っているときは、楽しかった」。正職員とは、責任を持たないといけなかったので、ボランティアと正職員とは働き方がずいぶん違った。当時は、この食堂のなかで、不安定労働者の「トレーニング」（社会復帰のための職業訓練プログラム）も実施していたので、その参加者にも配慮しないとけなかった。

2008年3月に仕事を辞めた。その理由は、「給料が少なかったこと。何回か交渉したんですけど、こういう団体なので、上がらなかった。あと、20代の後半になってきて、迷いというか、このままでいいのだろうか、手に職をつけて人間的にも成長しないとけないと思い始めて」。次の仕事を探すときは、ワーキングホリデーのためにお金を貯

めようと思っていたので、失業等給付を受給することなく、すぐ仕事に就くようにした。

2008年4月～2009年9月（26～28歳）

NPOの仕事辞めたあと、求人誌で見つけた派遣会社A社に登録した。前日に派遣会社に電話をして、予約を取った。最初の2カ月くらいは、引越し作業をした。この期間は、毎日違う場所に行く日雇い派遣だった。給料は、日給1万円だった。次に2008年6～8月まで、運送会社に派遣され、大型ショッピングモールで店内配送の仕事をした。この期間は、週5日、9:00～18:00に出勤して、時給は1,000円だった。

そのあと、別の派遣会社B社に登録して、2008年9月に、再び引越し作業に従事した。

2008年10～11月に、石鹸などコスメティック商品を製造・販売する会社の工場で、商品のピッキング・梱包・発送作業を行った。この期間は、週5日、10:30～19:00に出勤して、時給1,200円だった。ただ、この仕事は場所も遠いし、出勤時間も遅いので、すぐ辞めた。

これ以外にも、二つの派遣会社を通じて、いろいろな仕事をやった。例えば、サッカー試合の会場案内・家の解体作業・グラウンドの芝生植付け・商品のピッキング・イベントの会場設営・デパートの棚設置などで、すべて日雇いの仕事であった。だいたい、時給900～1,000円の仕事だったと思う。

2008年12月に、別の派遣会社C社に登録し、自動車輸出に関する通関手続きの代行会社で、書類の作成補助や税関への書類提出を行った。この期間は、週5日、9:00～18:00の出勤で、月給21万円だった。でも、2009年1月に、会社の経営不振・正社員の復帰・自分の仕事ミスが重なったので、仕事を辞めた。

2009年2～3月初旬まで、最初の派遣会社A社を通じて、また運送会社に派遣され、オフィスや飲食店への配送と集荷作業を行った。この期間は、週5日、9:00～19:00くらいまで勤務して、時給が1,000円だった。

そのあと、2009年3月から、大型のショッピングモール兼オフィスビルでの店内配送・集荷の仕事に変わった。このときは、週5日、8:00～19:00勤務で、時給は同じ1,000円だった。

だが、2009年8月に、運送会社が派遣社員の活用を辞めることになって、派遣社員の仕事を辞めるか、あるいは会社直属のアルバイトに切り替えるかの選択を迫られることになった。結果的に、1カ月だけ会社直属のアルバイトをして、その後2009年9月に辞めてしまった。なぜなら、派遣社員のときは社会保険料が引かれることはなかったが、直属のアルバイトになると、その保険料が引かれるようになってしまう、お金のやりくりが厳しくなったからである。その他の理由として、肉体労働だったのと、気をを使う仕事に疲れてしまったこともある。

派遣会社で働いていた時期の生活は、「けっこうたいへんでした。貯金は、ほとんどなくて。食事を切り詰めたりとかもしました。あと、カードでお金も借りたりとかしました」。また、仕事を探すのも、たいへんだった。「仕事が取れないこともそうだし、自分から電話をするのも、精神的につらいです。春とか時期によっては、仕事がいっぱいあるんですが、シーズンが過ぎるとぜんぜんなくなったり。（仕事がないと）どうしようもないです。だいたいは交通

費とかは出ないことが多いので、自分で払いますし」。派遣される期間も場所もばらばらなので、「結局、1カ月の目途が立たないんです、お金から始まって。ぼくは、幸いに、そういうのが1年半とかだったんですけど。これをずっとやっていくのは、すごくたいへんだなって、そのときに感じて」。このときは、ほとんど保険関係は入ってなかった。年金も払ってないです。病院も行けなくて。病気は、しないようにしました（笑）。病気になった場合には、市販の薬ですね」。

2009年9月～現在（28歳）

現在、3つのアルバイトを掛け持ちしている。一つ目は、以前働いていたホームレス支援NPOである。正職員の仕事を辞めてからもボランティアは続けていたので、2009年9月に新しい仕事を探すときに、改めて雇ってもらうことになった。食堂で調理補助やレジ係の仕事をしている。雇用形態はアルバイト。週3日出勤して、2日は9:00～14:00のシフト、1日は9:00～19:00のシフトで働き、週20時間働いている。時給850円なので、月収は7万円くらいである。労働時間が足りないので、雇用保険・健康保険・厚生年金には加入していない。

この仕事は、「好きですし、楽しいし、やりがいもあります。たいへんさもありませんが。いろいろなお客さんがいるので、対応がときにたいへんだったり」。この職場は、町のなかで雇用を創ることも目的の一つなので、NPOスタッフと一緒に、不安定労働者の方々も、場合によっては生活保護を受けながら働いている。NPOの正職員が2人、アルバイトが約10人という内訳になっている。

二つ目は、神奈川県内の同じ地区にあるホテルで、アルバイトをしている。このホテルは、安価な宿泊施設（ゲストハウス）で、海外の利用客も多い。ここでの仕事内容は、宿泊客の受付・宿泊情報のデータ入力・宿泊部屋の清掃などが中心である。週2日（9時間シフトと8時間シフト）で、週17時間働いている。時給は850円なので、月収は6万円くらい。ここも、勤務時間が短いので、社会保険には入っていない。

この仕事も、「楽しいです（笑）。旅行するのが好きなので、日本人や外国人の方と話すのも好きなので。もともと、ここも週1回でボランティアに来ていたので」。そのついで、アルバイトするようになった。

三つ目は、若者の自立支援を行っている会社が経営している飲食店でアルバイトをしている。仕事は、週3回、すべて18:00～23:00の5時間勤務なので、週15時間働くことになる。現在、研修期間なので時給780円だが、研修期間が終わると850円くらいになると思う。そうすると、月収5万円くらい。ここも、社会保険はない。主な仕事内容は、洗い物と調理補助である。

この仕事も、「忙しく、たいへんだけど、楽しい部分もある」。この仕事に就いたきっかけは、二つ目のアルバイト先であるホテルで、飲食店の責任者の方からたまたま会って、働かないかと誘われたことによる。もともと、この飲食店で週5日働きたかったが、できなかったのが、結果的に三つのアルバイトを掛け持ちすることになった。

現在、週当たりの労働時間は52時間に上り、結果的に休日がない状態が続く。月の合計の収入は約18万円である。「やっぱり休みがないので、たいへんです。あと午前やって、数時間休んで午後というのがあるので、それがたいへ

んです。疲れるけれども、毎日あるので、逆に、疲れがたまらないよう身体には気をつけます。身体が資本なんで。ただ、たいへんさに関しては、半分ぐらい自分が選んできて部分もあるので、自分の責任って思っていますけど。

でも、「自分の好きな場所で働けることは、うれしいことです」。そもそも、大学時代からNPOでボランティアを続けていたので、いまやっている仕事にはずっと関心があった。「すごく居心地がいいのと、答えがないので、興味が尽きない」。

< 仕事に就いてからの生活 >

在宅介護サービス会社で働き、自分で稼げるようになったので、2005年4月(24歳)から、一人暮らしを始めた。そのときは、実家にいるのがいやで、少し親への反発もあった。そのころは、ちょっと両親と自分が理解し合えていない時期だった。現在は、連絡できるようになっている。

現在、社会保険については厳しい状況にある。加入していないので、健康保険も使えない。「不安は、不安ですね。やっぱり、自分の収入を見ても、(保険料を)引かれるのは苦しいというのもあって」。また国民年金も、日々の生活があつて、お金が払えない。現在、免除の申請をしている最中である。結果的に、いままで雇用保険による失業等給付ももらったことはなかった。

自分のこれからの将来を考えると、「派遣社員には、できたら、戻りたくない。(いまの仕事から)変わるのであれば、いまのところは正社員として就職するか、別のところに正社員として入るのが希望です。もう、派遣はいいかなくなって。たぶん、(派遣社員は)気楽なんでしょけれど、そのぶん、体力を使うとか、お金とか、自分の技術を積み重ねられるとか、結婚とか考えたときに、ぜんぜんダメだろうなと思います」。

ただ、普通の会社に勤めるのか、あるいは社会貢献のために働くのかという選択については、まだ迷っている。「1回、ホームレス支援NPOでやっているの、好きなこと

を仕事にすることは、経済的な犠牲ではないですけど、代償を払うことは分かります。また逆に、一般企業で働いても、ある程度やりがいがないと続かない気がします。いま模索中で。いちばんいいのは、仕事を創れて、食べていければいいなと思います。直で働く形ではなくても、なにかしら関わりながら働くとか。自分がちゃんとした関わり方で、どこまでしっかり見えるかということが、いまの課題だと思っんです」。

< 社会に対する意見(政治・労働組合・NPO)>

仕事については、同僚と話しようという心がけている。そのほか、仕事に関する社会サービスについて言うと、ハローワークは利用したことがないが、ヤングジョブスポットには2回ほど行ったことがある。ちょうど仕事に悩んでいたときで、勉強になった。あるときは、福祉系の仕事を紹介してくれたり、別のときは、学校で学んだことを活かして機械のメンテナンスの仕事を教えてくれたりした。それ以上に、自分のやりたいことを整理する手伝いをしてくれて、社会に存在する仕事(マーケティング)を考えるように言われたことが大きかった。いままで仕事を探すときには、つてを使うことが多かった。というのも、自分のやりたい仕事は特殊なので、なかなか普通だと見つけにくいからだ。

労働組合については、自分自身が実際に関わったことはなく、イメージしか持っていない。ただ、運送会社で働いていたとき、1日の労働時間が長くて、残業代もつかない状態を見てきた。そのとき、労働組合があるはずなのに、どうしてこんな状態になっているんだろうと思ったことを覚えている。

政治に対しては、やはり雇用を創ってほしいと思う。あとは、働いていてもワーキングプアの人がいるのであれば、社会保険をつけてくれれば、すごく助かるのと思う。小児科医や保育所など、いまの社会で足りない部分をつくってほしい。

調査番号：東京33

調査日：10月27日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：37歳 ■ 現住所：埼玉県 ■ 出身地：埼玉県 ■ 学歴：高校卒業 ■ 就労の有無：求職中
- 直前職：建設業、建設・土木関係職、アルバイト ■ 直近の収入：勤労収入なし/生活保護受給
- 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身 ■ 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 自動車メーカー・検査(正社員、2年) 運転代行会社・運転手(正社員、5年半) 運輸会社・運転手(業務請負の一人親方、10年) 倉庫会社・倉庫整理(日雇い派遣、半年) 建設会社・運転手(アルバイト、8カ月) 建設業の飯場・建設土木作業員(日雇い、4カ月) 現在、生活保護受給中(6カ月、一時的に契約社員を経験)/求職中

< 仕事に就くまで >

1971年、埼玉県生まれ。
家族構成は、両親、兄2人、弟1人の6人家族。
父親は建具大工で、母親は専業主婦だった。暮らし向き

はそれほど豊かではなかった。

< 初職からの経験 >

1990年(19歳)3月、埼玉県内の定時制の商業高校を卒

業し、4月にバスやトラックを中心に製造する自動車メーカーに正社員として就職した。配属先は神奈川県内にある工場であった。入社と同時に実家を出て社員寮に入った。リコール・クレームのあった車について修理・検査を行う部署で、主に検査業務を担当した。賃金は残業代込みで手取り17~18万円程度であった。入社した年から人事評価が行われ、評価に応じてボーナスが支給された。

入社したころから、バブル崩壊の影響を受けて、自動車業界も業績が激しく落ち込んだ。勤務先の自動車メーカーも大幅な赤字を計上するようになり、1993年には社員の関連会社への転籍出向が増えていった。

1992年(21歳)6月、自分が属していた部署にも数名を転籍出向させるよう指示が出された。上司からは「まだ若く家族もいないので、君に行ってほしい」といわれた。打診された転籍出向先は当該自動車メーカーと重工業メーカーが共同出資して設立した関東圏にある関連会社であった。「できれば今の会社に残りたい」と上司に伝えたところ、上司からは「おれのいうことが聞けないのか」といわれ、転籍出向を半ば強要された。しかし、会社側の一方的な対応に納得がいかず、出向を拒否して自主退職した。退職を決意した理由のひとつには、自動車メーカー在籍中に大型免許を取得していたので、資格を活かして、運転手になってもいいと思ったこともある。退職後は社員寮を出て、実家に戻った。

同年(21歳)7月、自動車メーカーを退職してすぐに、失業手当を受給することもなく再就職した。新聞の折り込み求人を見て応募し、埼玉県内にある会社に正社員の運転手として採用された。同社に5年半ほど在籍した。従業員10~15人ほどの小さな会社で、幼稚園、スイミングスクール、自動車教習所などと契約を結び、先方所有の車を運転する仕事を請け負っていた。運転の仕事であること、実家から通えることからこの会社を選んだ。同社では主にバスの運転を担当した。出勤先は日々変わり、主に幼稚園や教習所に行った。たとえば、幼稚園では、園児の送迎のほかに、送迎のない時間帯には幼稚園の雑用もこなした。送迎という職種の特性上、朝7時ぐらいから仕事をするのもあったが、一方で送迎がない時間帯には休憩を取ることもできた。月収は手取りで23~24万円だった。賃金は、5年半の在籍期間の間、退職まで一切上がらなかった。ボーナスは「寸志」程度(1万円程度)であったため、年収で見ると、自動車メーカーにいたころと変わらなかったが、意に沿わない転籍出向を受け入れるよりもよっぽど良かったと考えている。

1997年(26歳)の夏に会社が不渡りを出し、経営に行き詰まった。入社時は固定の顧客を確保していたこともあり、経営は安定していた。その後、会社は250万円で中古バスを購入し、無認可の違法営業を開始した。違法営業であったため利益も結構出たようである。それに気をよくした社長は2,500万円の新車を購入した。ところが、月80万円の返済負担が重く、次第に返済が滞るようになり最終的には不渡りを出してしまった。不渡りを出す数カ月前から給与の遅配があったので、資金繰りに苦労していることを従業員は知っていた。後に判明したことであるが、社会保険料(従業員負担分も含む)など本来国庫に納めるべき金額も返済にまわされていた。この当時は仕事の幅を広げたいと考え、二種免許を取るべく自費で教習所に通っていた。しかし、給与遅配などにより受講料が支払えなくなり、途中退学せ

ざるを得なくなってしまった。

不渡りを出した後、取引先の都市銀行から役員が送り込まれ、経営再建がはじまった。従業員の給料についても大幅な見直しが行われ、見直し後の月収は残業50時間込みで額面30万円という契約となった。しかも、残業時間が50時間に少しでも満たないだけで、数万円単位で賃金を大幅にカットされた。このことが原因で同年11月に同僚数名とともに退職した。

賃金体系が変更になったことを機に、同僚のひとりが個人加盟できるコミュニティユニオンに相談に行き、職場内で相談した結果、そのコミュニティユニオンに加盟することになった。ユニオン加盟後、1カ月程度で同社を退職してしまっただけで、その後どうなったのかはわからない。

同年12月、前の職場を退職して、すぐ次の仕事に就いた。埼玉県内にある、販売会社向けにバス・トラックなどを輸送する会社と業務請負契約(いわゆる一人親方)を締結し、新車を工場から全国のディーラーなどの顧客に納入する仕事を請け負った。この仕事は、約10年間継続した。完全歩合制で、請負単価は走行距離、納入車の大きさによって異なった。なお、在籍期間を通じて請負単価は一切変わらなかった。工場から納入先までは納入する車を運転し、納車後は会社まで電車で戻ってきた。収入は請負金額から燃料(軽油・ガソリン)代・電車賃・税金などの諸費用を差し引くと1泊2日で1~2万円程度であった。仕事の繁閑の差が激しく、忙しいときは月に1日しか休みがないときもあったが、少ないときは3~4日しか仕事がないこともあった。そのため、収入は最も少ないときで月額5万円程度、最高で50万円程度と変動が激しく、平均すると月額25~27万円程度だった。業務請負をしているときも、二種免許を取得したいと考えていたが、仕事量の見通しがつかなかったため、教習所に通うことはできなかった。

また、厚生年金・健康保険については、入社時に会社から「業務請負なので加入できない」と聞かされていたが、2~3年経過したころに、「社会保険に入れるようになった」といわれ、加入手続きを取った。ところが、実際には本来事業主負担であるべき金額も含め、全額本人負担として徴収されたためにすぐに脱退手続きを取った。

2001年(30歳)には実家を出て一人暮らしをはじめた。それまで実家は借家住まいであったが、持ち家を建てる計画が持ち上がった。その際、家族全員で頭金を出し合い、ローンを組んで家を建てることになった。しかし、当時は収入が安定していなかったことから、負担分を支払うことができなかった。家族から「お金を払っていないのだから、家を出てほしい」といわれ、実家を出ることになった。

2007年(36歳)9月に業務請負の仕事辞めた。2007年に入り、燃料代が大幅に値上がりし、高止まりしたため、仕事を請け負っても採算がまったく取れない状態が続いたことが理由である(この時期に同業者の半数が廃業した)。その後は主にハローワークを活用して求職活動を行ったが、なかなか就職が決まらなかったため、9月以降は主に日雇い派遣で生計を立てるようになった。派遣先は倉庫が多く、仕事は主に洋服の仕分けだった。日給は手取りで5,000~6,000円程度だったため、生活は苦しかった。当時は派遣会社の二重派遣問題が明るみに出た影響もあり、日雇い派遣が少なかった時期である。家賃3万円のワンルームに住んでいたが、家賃も滞納するようになった。

2008年(37歳)3月に、ハローワークから紹介を受けて、

埼玉県内にある建設会社に大型ダンプカーの運転手として採用された。建設現場から残土を運び出して会社所有の残土置き場まで運ぶ仕事だった。社員寮に入っていたが午前5時に起きて部屋に戻るのは午後10時という生活が続いた。日給制で日当13,000円だったため、平均で額面30万円程度の収入があった。社会保険については、ハローワークで紹介を受けたときも、また面接を受けた際も、「社保完備」と聞いていたが、実際には加入させてもらえなかった。

同年11月になって経済不況の影響を受けて、当該会社もダンプカーの保有台数を減らすことになり解雇された。その後1カ月ぐらいいは埼玉県内のターミナル駅周辺のネットカフェ等で寝泊まりしながら、ハローワークに通っていたが、仕事は見つからなかった

同年12月に、ターミナル駅構内でいわゆる手配師に声をかけられた。その時は所持金もほとんどなく、食事もあり食べていない状態だったので、手配師にいわれるがまま、埼玉県内にある「飯場」に連れて行かれた。

「飯場」とは土木・建設事業などで行われている労務管理制度のひとつで、事業主から請け負った飯場頭が集めた作業員を飯場に収容して厳重な監督のもとに仕事をさせ、その賃金の上前をはねるなどの因習を持つ制度である。作業員はプレハブ小屋の中に作られた簡素な相部屋で寝泊まりし、3食食事が提供される(宿泊費・食事代ともに有償)。

飯場では一般的に「30日満期」というルールがあり、実際に働いた日数が30日になった時点で契約満了となり、はじめて日当の清算が行われる。日当は飯場ごとに異なるものの、相場は8,000円程度である。日当から「抜き」といわれる宿泊費・食事代が一日3,000円程度差し引かれる。

飯場は当たりはずれが大きく、悪質な飯場では、労働力確保のために作業員を飯場に縛り付けるための因習が日常的に行われていた。たとえば、仕事はあるにもかかわらず、遊休日(仕事がない日)を不必要に多く設定し、日当よりも「抜き」のほうが多くなるように調整する(仕事がない日には日当は一切支払われず、一方で宿泊費・食事代は差し引かれる) 日当は「30日満期」まで支払われないため、現金の持ち合わせのない作業員(飯場で働く作業員は現金を持っていないことが多い)に対して、酒、たばこなどの嗜好品(酒類、タバコ、ジュース、お菓子など)を定価よりも高い金額(例えば、350mlのビール1本500円)で売りつける、などの方策によって借金を抱えさせて、30日満期に達しても帰らせないようにするのである。

建設現場は飯場と離れていることも多く、建設現場が稼働しているかどうかはわからない状態にあり、飯場頭の言いなりにならざるを得ないため、気がつくとか力月も飯場にいたという人も多い。

また、飯場の作業員は身分証明書が必要ないことから偽名も使え、現住所も不要であったため、酒、ギャンブルなどで借金を抱えた人や、前科がある人など問題を抱えた人が少なからず働いていた。

最初に連れて行かれた飯場には、常時100人ぐらいの作業員がいて、毎日30人以上は仕事がない状態であった。年末年始の休業期間に差し掛かったため、「30日満期」を迎える前であったが、運よく12月末時点で精算が行われた。精算時点で飯場に来てから22日が経過していたが、実際に仕事をしたのは11日だけだった。残り11日は仕事がないことを理由に遊ばされていた。日当は8,000円で11日勤務だったため、支払われる給与は88,000円になったが、ここから宿泊

費・食事代66,000円(3,000円×22日)と税金などが差し引かれるため、手元にはあまり残らなかった。それでもこの飯場はまだまともなほうであった。一旦前述の埼玉県内のターミナル駅に戻り、年末年始をネットカフェなどで過ごした。

2009年(38歳)年始早々、ターミナル駅周辺で再度手配師に声をかけられ、別の飯場に連れて行かれた。その際、手配師が飯場頭から3万円受け取るのを見た。つまり、紹介料として一人3万円支払う契約だったようである。飯場頭からは「年明けの1週間は現場がストップしているため仕事はない」といわれ、実際に仕事はなく、飯場でぶらぶらしていた。成人の日(1月12日)になっても仕事はなく、宿泊費・食事代だけがかさみ、借金はすでに3万円(3,000円×10日)になっていた。「12月中ごろから今日まで一カ月近く仕事をしていない。『抜き』(部屋代・食事代)で借金ばかりが増えていく」という隣室の会話が聞こえた。不安にかられ、仕事を紹介してくれた手配師に電話をしたところ、「ひどい現場にあたってみたいだ。逃げてこい」といわれた。そのため、置き手紙をして逃げ出した。2時間ほど歩いて最寄りの駅に到着した。一銭も持っていなかったことから、駅員に事情を話したうえで、乗車証明を発行してもらいターミナル駅に向かった。手配師と改札で待ち合わせ、運賃を手配師に払ってもらった。手配師からは、「悪かった。次はまともなところを紹介するから」といわれた。

同年1月中旬から埼玉県内の別の飯場に行った。下水道工事など公共事業に関わる仕事をしている飯場だった。公共事業を請け負っていたこともあってか、前述のような問題は一切起こらなかった。30日満期を迎え、2月下旬にターミナル駅に戻った。お金も多少あったため、ネットカフェなどでしばらく寝泊まりした。

同年3月初旬にまた埼玉県内の別の飯場に行った。ここでは到着するやいなや、逃げ出せないようにするため免許証を取り上げられた。運転の仕事を担当したために、運転するときだけ免許証を返却された。不安を感じ1週間ほどで逃げ出した。免許証は前日勤務が終了し再度預ける際に更新前の古いものを渡し、現物を手元に持っていた。逃げ出す前日に3,000円前借しており、ターミナル駅までの運賃をそれでまかなった。10日ほどは路上で生活をした。

3月21日に反貧困の相談会が開催されている相談ブースに立ち寄った。現状を弁護士に相談したところ、生活保護を申請してはどうかとアドバイスを受け、後日申請に随行してもらった約束をした。

また、相談会当日に、当座の生活資金として社会福祉協議会で貸付を受けた。さらに司法書士からは不動産会社を紹介してもらい、賃貸住宅への入居も目処が立った(後日、当該司法書士が保証人となり、賃貸住宅に入居)。数日後、弁護士・司法書士に随行してもらい生活保護の申請をしたところすんなりと受理され、同年4月はじめから生活保護を受けはじめた。

反貧困ネットワーク埼玉の相談会に遭遇できたおかげで今の生活を維持できているのであるから、運がよかったと思っている。

4月以降は連日ハローワークに通い求職活動を行ったが、なかなか就職は決まらなかった。

ハローワークとは別に自分で求人を探して契約社員として数日働いたこともあった。牛乳などの食料品を倉庫間で運送する仕事だった。住まいから勤務先まで電車での移動が必要であったが、交通費が出せなかったため、自転車

で1時間かけて通った。勤務時間は午後2時から午前2時までの11時間勤務でさらに残業が2時間程度あったため、体力的にとてもきつかった。仕事を始めて数日たったとき、疲れのため寝坊をしてしまった。会社から「家が遠すぎる。他のメンバーは10分程度のところに住んでいる者ばかりだ。これから先、今日と同様に遅刻されてしまうと、会社が得意先からの仕事を失うことになりかねない。早いうちに辞めてほしい」といわれて退職した。

その後も、引き続き、求職活動を行い現在にいたる。

<現在の生活状況>

連日ハローワークに通っているが、なかなか仕事が見つからない。

現在の住まいから通えるところで、運転手の仕事をしたいと思っているが、周辺地域には運転手の求人を出している会社が少ない。1人の募集に対して30~40人が応募することもざらである。また、応募から結果が決まるまでの時間が長いことも大きな問題である。履歴書を送っても書類選考で落とされることがほとんどであるが、不採用の連絡すらないことも時々ある。

たまに面接まですすんでも、採用・不採用の連絡が来るのが遅く、時間ばかりが過ぎてしまう。

どうにか仕事を見つけようと考え、ハローワークで、「経験不問」と記載のあった求人へ何度か応募したが、実際には即戦力となる人材を求めている場合が多く、経験がないために就職できなかった。

仕事がなかなか見つからないことから、ケースワーカーから就労支援カウンセラーを紹介された。就労支援カウンセラーは、自分(カウンセラー)が見つげてきた求人に応募するよう勧めるが、希望に合わない求人である場合が多く、閉口することがある。どんな仕事でもいいから早く就職して欲しいという意図が強く感じられ、つらくなる。

家族とは現在疎遠になっている。すぐ近くに住んでいるものの、持ち家の件で家を出て以降ほとんど連絡を取っていない。

現在は、反貧困ネットワーク埼玉の相談会に集まった同じ境遇の仲間たちと、支援団体を立ち上げて月1回交流会を開催するなど励ましあっている。仲間がいることでたいへん助けられている。会を立ち上げるのに尽力してくれた仲間、NPO団体の方々に心から感謝している。

また、反貧困ネットワーク埼玉の相談会の際に知り合った弁護士・司法書士には、たいへんお世話になった。現在も相談にのってもらっており、心の支えである。

<社会保険の加入状況>

市役所で年金保険・健康保険の納付歴を調べてもらったところ、初職の自動車メーカーと次職の自動車運転の時まで(1991年から1998年まで)は厚生年金・政府管掌健康保険に加入していた。1998年に業務請負の自動車輸送を開始したときに国民年金・国民健康保険への切り替えを行い、2002年までは納付していた。2002年以降未納となってしまった。体は強かったため、2002年以降、医者にかかったことはなく、健康保険を必要とすることはなかった。

<本人の望みや不安>

早期に運転の仕事を見つけたい。可能性を広げるために、二種免許を取得したいと考えているが、教習所に通うには35万円程度必要であり、現状では通うことができない。二種免許を取得できるような再就職支援策が受けられれば、たいへんありがたい。

行政に対しては、大企業だけでなく中小企業に対しても支援を行ってほしい。われわれのような人間が働ける職場を少しでも多く確保してほしい。

調査番号：東京34

調査日：10月26日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：32歳 ■現住所：東京都 ■出身地：栃木県 ■学歴：大学卒業
- 就労の有無：今後の人生を模索中 ■直前職：製造業、技術職、正社員
- 直近の収入：勤労収入なし/失業手当受給終了し貯金で生活 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 無職(3カ月) 電気機器メーカー・生産(登録型派遣、9カ月) 電気機器メーカー・生産(登録型派遣、9カ月) 失業手当受給+職業訓練(ITスキル3カ月+実習2カ月、計5カ月) 釣具卸会社・事務および営業(正社員、2年) 健康保険傷病手当金受給(7カ月) 失業手当受給 メッキ会社・生産管理(正社員、1年強) 失業手当受給 現在、NPOのボランティアをしながら、今後の人生について模索中

<仕事に就くまで>

1977年、栃木県生まれ。

両親と2歳年上の兄の4人家族であった。父親は中学卒業後仕事に就き、栃木県内の業務用食品卸会社の営業(正

社員)をしていた。母親は高校卒業後保険の外交員(非正規)をしていたが、病気により仕事を辞めた後、2006年5月に肝臓癌により亡くなった(享年59歳)暮らし向きについては、学校の集金への支払いが時々遅れることがあるなど、「それほど余裕はなかったと思う」が、高校時代はア

アルバイトをすることはなかった。大学進学も親が「行ってくれ」と希望したが、その費用は奨学金で賄って欲しいと言われた。賃貸住宅に暮らしていたが、自分が大学入学後に両親は自宅を購入した。

現在父親は兄と一緒に栃木の自宅に住み、定年退職後も同じ会社で契約社員として働いている。兄は独身で無職である。

1996年（19歳）に、東京の私立大学（文系）に進学し、2回留年したので6年間通った。2002年（25歳）に卒業した。大学時代は新聞奨学生制度を利用し、新聞販売店の借り上げ住宅に6年間住んでいた。進学に際しての両親の援助は、引越の手伝いや、最初の給料が出るまでの少しの間だけであり、後は奨学生としてもらえる生活費で生活した。両親は自宅の購入と、父親の給料がそれほど多くはなかったために、東京での学費と生活費を仕送りするのが難しかったようである。

大学で留年することになったのは、新聞奨学生の仕事が大変であったためである。肉体的にきつく、「授業について行くのが精一杯」であり、就職や自分の将来について考える余力がなかった。

大学時代は割と頻繁に実家と連絡を取り、新聞奨学生の仕事が大変であることや、同僚との人間関係などについて相談したりしていた。

学生時代の大学の友人や奨学生の同僚とは、留年や卒業を契機として会う回数なども減り、今ではその時の友人達と連絡を取ることはない。

< 初職からの経験 >

2002年（25歳）大学を卒業後、栃木県に戻り、すぐには就職しなかった。理由は、大学進学のために始めた新聞奨学生の仕事が「特殊な業界」であり、「気性の荒い人が多かったので、働くということがそういうことだとずっと思っていて、上手く自分で適応ができない」と考え、「一旦生活を立て直そう」と実家に帰ったためである。

実家に帰って3カ月ほどして、貯金がなくなったこともあり、就職しようと考えた。この間に自動車免許を取得した。

同年7月に、派遣会社に登録し、栃木県内の工業団地内にある電気機器メーカーの工場に派遣された。この派遣会社を選んだ理由は、その当時兄がこの会社でスポット型派遣社員として働いており、紹介されたからである。仕事内容はICチップにパターンを打ち込む作業に使われる機械のレンズをはめ込む鏡筒を研磨する作業であった。派遣先工場には1,000人以上の従業員がいたように思う。工場までは実家から自転車で通える距離だったので、自転車で通っていた。仕事は朝の8時から夕方4時45分までの日勤で、土日休みの勤務形態であった。勤め始めてから特に研修はなく、最初は検査の手伝いから始めた。給料は月給制で額面19万円。健康保険は「本来であれば扶養から外れると思うが、なぜか扶養のままいられた」ので、父親の健康保険の被扶養者として自分では保険料を負担していなかった。年金は自分で国民年金保険料を払っていた。雇用保険料は給料から引かれていた。

1年契約で派遣されていたが、2003年（26歳）4月に人数調整ということで契約を中途解約（派遣切り）された。派遣先会社側は中途解約に対して給料の割増しなどをする

こともなく、「そういうもんなんだ」と思い、受け入れた。派遣会社からは、すぐに次の派遣先を紹介された。

次の派遣先は、同じ工業団地の中の別の電気機器メーカーの工場であった。勤務時間はシフト制（12時間勤務）で、2勤2休、昼夜交替（午前10時と午後10時に交替）であった。夜間の時給はきちんと25%の割増しになっていて、昼間は時給1,100円ほどで夜間は1,325円であった。手取りにすると19万円程度で、前の職場と同じだった。健康保険は父親の扶養で、国民年金は自分で加入、雇用保険は会社が加入していた。半導体チップのパターンに金線を貼り付ける機械のメンテナンスをするのが仕事で、仕事を始めた当初は、プラスチックの材料補充やゴミの処理などの補助的な仕事を際限なくやっていた。こうした補助的な仕事が2～3カ月続いた。その後は、エラーが出た際の機械のメンテナンス作業に移行した。同じラインには派遣社員と正社員が半々程度で作業をしていた。

2004年（27歳）1月に体調を崩したことで、失業手当を受給しながら職業訓練が受けられることを知り、「違うところに就職しようかな」と思って自発的に退職した。これまで仕事をする中で、「何やってるんだらう、と思うところはあった」。将来への不安、「ご飯のためだけじゃない仕事、社会と関わる部分で自分がどういうふうに関与できているか分からなかった」。体調不良の内容は、急な動悸や目眩が頻繁に起こるようになったことである。プレスの傍で働いていたため、目眩で足下が覚つかないことがあり、「危ない」と思ったことも辞める原因の一つである。

同年2月にハローワークで失業手当受給の手続きを取った。窓口では自己都合退職であることは伝えしたが、ハローワークの職員から体調不良として病院で診断書を取るようにアドバイスをされ、会社都合としてすぐに受給することができた。職業訓練を受け始めたのが、2004年6月からであった。それまでの3カ月間、仕事は探していたが、休んでいた。6月から受講した職業訓練ではエクセルとワードについて3カ月学び、その後2カ月釣り具卸会社（従業員30人ほど）で実地訓練を行った。失業手当は受給延長手続きを取り、職業訓練期間中も継続して受給した。

同年12月に、訓練実習を受けた釣り具卸会社にそのまま正社員として入社した。最初は事務的補助の仕事であったが、「人がいなくなったりしたこともあって」営業も行うようになった。健康保険（本人名義）・厚生年金に加入した。給料は額面で24万円、手取りで20万円、ボーナスは最初の1年のみ、週休1日（日曜日）の労働条件だった。

営業の仕事に対しては「難しいだろうな」と思ったが、自分が実際何ができるか分からなかったため、「やってみたらいいのかな」と思って引き受けた。だが、実際に始めてみると「案の定しんどかった」。営業内容は大口の顧客と電話を通じて商談し、実際に会うのは月1回程度。顧客の注文に対応できるかどうかが重要であった。最初は注文をこなすことができていたが、次第に商品の未達や伝票との不一致などのミスが積み重なるようになっていった。「きついな」と思いながら営業の仕事を続けていたが、続けられなくて2006年（28歳）12月末に会社を辞めた。辞める前に、会社からは担当を変更する旨の話はあったが、断った。

眠れなくなったり、考えがまとまらないことが以前からあったため、在職中から精神科に通院していたので、2007年（29歳）5月まで健康保険の傷病手当金を受給した。傷病手当金については、辞める際に会社の社会保険労務士か

ら教えてもらった。不眠などの症状は、母親が亡くなった2006年5月頃から出ていた。亡くなったことによるショックとともに、それに付随する様々なことに「忙殺され」て、調子を崩した。それが次第にきつくなってきたのが同年8月頃である。この間、調子は崩れていたが、仕事を休むことはなかった。

以降は失業手当をもらいながら求職活動を行った。次の就職まで時間がかかったが、それは今まで就職を「何回か失敗していると自分では思っている」ため、「どういふところを見つければ、長く勤められるんだろうということが、自分の中でイメージがなかった」からである。そのため、求人票を眺めても、どうしたらいいか分からない状態であった。「自分ができて、手応えのあることが何なのかわからなかった」。

2007年（30歳）11月にメッキ工場に正社員として就職した。就職先は、父親から教えてもらった栃木県内のジョブカフェの就職合同説明会で見つけた。合同説明会には50社ほどの会社が来ていたので、その中から数社に当たりをつけて話を聞いた。工場を選んだのは、以前にも工場勤務の経験があり、「あまり考えないでやれるかな」と思ったからである。

工場では金属からの切り出し、切削もやっていたので、その仕事ならできると考えていたが、別の仕事に配属された。配属されたのは、管理や検査の部門であり、メッキする際の化学物質配合の管理や、環境ISO取得のための文書作成などだった。初めて携わる業務内容であり、「分からないことだらけ」でどうしようかと戸惑った。一方で、他の従業員は、理系出身者や研究で関わっていた人ばかりであり、話の内容が理解できなくて、コミュニケーションを取れる範囲が狭くなっていった。次第に周囲から「おまえには何ができるんだ」と言われるようになり、辛くなって2009年（32歳）1月末に会社を辞めた。会社を辞める手続きは電話や手紙で行った。

辞めた会社の規模は、非正規も含めて100名程度、そのうち正社員は50名ほどであった。給料は基本の額面が25万円であったが、忙しい時期は残業などもあったために手取りで30万円を超えることもあった。徹夜しても仕事が追いつかない時などもあり、今までの仕事の中では一番忙しかったと思う。社会保険に加入しており、ボーナスも半月分が年2回支給されていた。

2009年2月、会社を退職するのと時を同じくして、東京に来た。そこで困難を抱える人々の生活支援を行うNPOを知り、「時間もあつし、貯金もあつたので手伝ってみよう」とボランティアを始めた。自分自身もあまりよい経済状態ではなかったこともあり、人を助ける中で、例えば生活保護の制度を知ることなど自分自身を助けられることもあるのではないかと考え、活動してみようと考えた。NPOについては貧困者支援を行っている活動家が執筆した本で知った。NPOでボランティアを行うためには、まずセミナーを受講する必要があつたが、そのセミナーを受講したのが2009年2月である。

東京に出てきて住居が決まるまでの3カ月間はゲストハウスに居住。4月に東京都区部のアパートに入居してから失業手当の受給手続きを取り、3カ月待機の後には7月から給付を受け始めた。

< 初職から現在までの経過

(仕事・家族・友人との関係)>

派遣社員として働いていた当時、職場の同僚と遊びに行くことはあつたが、契約が終了すると連絡を取り合うことはなくなった。

派遣社員として働いている時、父親はそのことに対して何も言わなかった。「自分の好きな仕事を探しなさい」と言われ、正社員になれというようなプレッシャーを受けることはなかった。母親からも特に何も言われなかった。大学生時代、割と頻りに相談の電話をかけ、その中で「辛い」と言っていたことや、母親自身が病気で働けなかったこともあつて「遠慮したのではないかなと思う」。

実家にいた間は、自発的に給料の中から3万円ほど、多い時で6万円を入れていた。定年退職後に契約社員となつてからの父親の給料は、手取りで20万円台前半から30万円程度である。

実家を出て東京に来た時は、父親に東京に行くということも告げずに出てきた。「向こうも大変で、力になつてもらえないことは分かつていた」ので、相談もしなかった。何も言わずに出てきたのは、父親も家のローンを抱えている状態であり、「頼ることはできない」ためである。黙つて出てきたために、父親が警察に相談したらしく、警察から電話がかかつてきたこともある。現在は携帯電話でやり取りしており、東京に住んでいることは知っている。

前職の会社（メッキ工場）に勤め始めた時、定年まで勤めるつもりであつたが、「何だか上手くいかなくて、その原因が分からない」。周囲とコミュニケーションが取れないと感じていた。

< 現在の暮らしぶり >

栃木の実家を出て現在10カ月ほどになる。その間、実家には1回荷物を取りに行った。

今は失業手当が切れたばかりなので、何らかの手段で収入を得ようと考えている段階である。ボランティア活動を通して人と知り合う中で、仕事を紹介されることもあるので、「ぼちぼちやっていくかな」とは考えている。

実家から仕事に通っている間、どの仕事の時も大体同じくらいの金額を貯金していたので、この間かなり貯金することができた。遊ぶことはあつても、あまり派手にお金を使うことはなかった。この貯金を使って、現在は生活している。まだ余力があるので、「自分が何でそういう仕事ができないのか」ということを突き詰めたいと考えており、仕事を探すことにそれほど焦つてはいない。

国民健康保険に加入し保険料を払っている。国民年金については免除を受けている。

< 仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見 >

自分の進路を、経済的状況に関係なく選べるようにして欲しい。教育・訓練制度の充実については、実際に企業で働く上での実務に役立つスキルのみではなく、幅広いメニューから選べるようになると良い。目標があれば、それに向かつて頑張れる制度、それを支援する制度の周知・拡充を望んでいる。

<将来の展望>

将来に対して、少し不安がある。不安の内容は、自分がやっていることがいつ嫌になるか分からないということ、そして嫌になった時に動けなくなってしまうことが「ずっと不安」だった。今まで辞めた会社も、最初の頃はやりが

いがあり、面白そうだと思っていた。積極的にやろうと思っていたにもかかわらず、やっているうちに自分自身が見えてきてしまい、上手くいかないことがあると踏ん張れない。「自分自身が信頼できないという気持ち」がある。物事を上手くやる自信は「全くと言っていいほどない」。

調査番号：東京35

調査日：11月1日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：29歳 ■現住所：東京都 ■出身地：千葉県 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：コールセンター、オペレーター、パート ■直近の収入：月6～7万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 イベント会社・営業（正社員、1カ月） 医療器具卸会社・事務（正社員、8カ月） 保険会社・貿易事務（常用型派遣、2年） 商船会社・貿易事務（常用型派遣、3カ月） 物流会社・貿易事務（常用型派遣、3カ月） 電子部品専業メーカー・事務（紹介予定派遣3カ月 正社員1年半） 食料品店・配送（アルバイト、半年） コールセンター・オペレーター（パート、数カ月） 現在に至る

<仕事に就くまで>

1980年、千葉県生まれ。

家族構成は、両親、弟1人および自分の4人家族である。

父親は市役所に勤務し、母親は小学校の教師であった。

両親が働いていたため、暮らしはかなり裕福であった。特に母親が学歴を付けさせたいと考えていたことから、大学に進学し、文学部でロシア文学を専攻したが、演劇、バンド、伝統芸能などサークル三昧だった。

就職活動は氷河期といわれる就職難の時期だったこと、自己アピールが苦手だったこともあり、うまくいかなかった。卒業しても就職先がないということはなんとしても避けたいと考え、あまり希望していなかった有限会社に就職することにした。

<初職からの経験>

2002年（22歳）4月、大学卒業後、モーターショーなどのイベントに照明技師や音響技師を派遣する有限会社に正社員として就職した。社員30名弱のできたばかりの小さい会社で都内に本社があった。同社初の大卒採用で、営業広報をする部署に配属された。初任給は手取り14万円程度で、社会保険は未加入だった。千葉県の実家から通勤した。

本社には、経営層数名のほか、照明技師・音響技師（男性のみ）、事務職（女性のみ）など計20名強が在籍していた。照明技師・音響技師は現場に配属され、経営層は営業などで不在となることが多かったため、日中は事務所内で女性の事務職員と一緒に仕事をすることが多かった。事務職の女性社員は専門学校で照明や音響を学んだ人が多く、照明や音響を担当することを希望して入社したものの、照明・音響の仕事はどちらかという男性職場であることから、やむなく事務職を続けている人ばかりだった。入社当初から本社の雰囲気はあまり良くなく、事務職の中には不満があると椅子を蹴飛ばす者もいたほどであった。入社当

初から大卒として期待されていたことから、経営層のみが参加する会議に出席を求められた。ところが、事務職の先輩社員にとって後から入社した後輩が優遇されることが我慢ならなかったようだった。また、自分も世間知らずで先輩とうまくコミュニケーションが取れなかったことから、瞬間にいじめを受けるようになった。

その様子を察した経営層の判断で、入社後20日くらい経過したころに、同社が管理を任されていたイベントホールに配置換えとなった。イベントホールでは、会場の設営やお客さまの出入りの管理などを担当することになった。イベントホールには5名ほどの社員が常駐していたが、その人たちには良くしてもらった。しかし、異動後も本社の事務職とはうまくコミュニケーションが取れなかった。あまりにもイメージしていた会社生活と異なったために、「自分の中ですぐ行き詰まってしまう」、抑うつ状態となってしまった。「このまま会社において（自分自身に）先があるように思えず」、入社1カ月で退職した。

家族は1カ月で退職してしまったためひどく落胆した。父親から「もうこの会社も探ってくれないぞ」、「1カ月で会社辞めたという事実はこれから一生付いて回るぞ」といわれた。そのため、焦って次の就職先を探したが、「1カ月で退職」ということがネックになったのか、どこの会社も採用してくれなかった。就職活動が負担になり、神経症気味になってしまった。

同年12月になって次の就職先が決まった。就職先は千葉県にある医療機器の卸会社で、正社員として入社した。九州に本社がある会社の東京支社で、管理職の所長1名、営業職6名、事務職4名ほどの小さい事業所であった。事務職として採用され、4名の女性事務員とともに、帳簿管理、伝票整理などを行った。賃金は手取りで月額16万円弱だった。実家から通勤した。

ところが、前職同様、あっという間にいじめの対象とされた。「仕事は会社で教えてもらうものではない。自分で覚えて来なさい」、「マニュアルは仕事に見るものではな

い。会社に早く来て、仕事が始まるまでに覚えなさい」などといわれて、緊張のしどおしだった。最初は「仕事をがんばるぞ」と思っていたが、だんだんとやる気もなくなり、「とにかく会社に行こう」とだけ考えるようになってしまった。仕事が全く手につかず、「今振り返ってもびっくりするくらい、文字が思うように書けなくなってしまった」。しだいに、先輩に何かいわれると胸の辺りを押さえる癖がついてしまい、今度はそれを直すように先輩から指摘されるといったことの繰り返しで悪循環であった。

また、家族にはいじめにあってることを告げることもできず、家に帰るのもつらかった。仕事が終わってもすぐに家に帰らず、家の近くのお墓や土手でぼうっとしてから帰宅する日が増えていった。

2003年(23歳)8月に同社を退職した。その前月に、ある出版社から卒論で翻訳したロシア文学を雑誌に掲載したいとの申し出を受けた。「何もできない駄目なOLだ」と落ち込んでいたところに雑誌掲載の話がきたことから、喜んで引き受けた。その時期、職場では仕事の仕方をチェックするために、先輩が自分が作成したノートを確認することになっていた。業務時間中にノートをまとめることは許されなかったため、帰宅後にまとめるしかなかったが、帰宅後は締め切りが近かった原稿の校正作業に時間を割いていたため、ノートの作成がおろそかになってしまった。ノートができあがっていないことを先輩に追及され、その理由が掲載原稿の校正にあることを話したところ、「そんなことは理由にならない。自分だったら死んでもそんな理由で仕事をおろそかにしない」といわれて、関係は決定的に壊れてしまった。他の事務職員はみな高校卒で、一番仕事のできない自分ひとりが大卒給を受け取っていたことも納得できなかったようで、「全員で課長に抗議するから、そのつもりでいるように」などといわれ、本当にいたたまれなくなってしまった。所長に相談したところ、「こういうことで自殺した人を知っているから、君のためにも辞めたほうが良いのではないか」といわれ、退職することにした。

このときは両親も呆れてしまったようで、何もいわなかった。実家が田舎にあることもあって、家族から「頼むから昼間は外を歩かないでくれ。ご近所の噂になるから」といわれ、たいへんつらかった。

失業手当を受給することなど考えもせず、すぐに次の仕事を探し始めた。正社員での就職を希望し、しばらく就職活動を続けたが、かなわなかった。仕方なしに、派遣会社の採用試験を受けた。

同年11月、派遣会社に常用型派遣として採用された。採用されてまもなく、貿易事務に関する2週間程度の研修を受けた。「貿易事務は狭い世界で、資格を取りさえすれば、8~10年同じ仕事を続ける人がざらにいるような仕事」であった。給料は残業がない状態で手取り18万円程度だった。社会保険は完備していた。

同年12月、大手商社の子会社である保険会社の貨物保険を扱う部署に配属となった。「初めてきちんとした会社」で働くこととなり、職場では大事にされて2年間勤めることができた。残業はほとんどなかった。最初は「お行儀が分からない変わり者だった」ので心配されたが、いろいろ教えてもらいながら2年間働いた。この間に、自費で貿易実務検定C級およびB級(C級が入門編で、そのうえに、B級とA級がある)、エクセルの資格(マイクロソフトオ

フィスペシャリスト検定)を取得した。その結果、仕事ぶりを認められ、「正社員にならないか」と声をかけられた。「今振り返るとそのときに正社員になっていればよかった」と思うが、どこか居づらい気持ちを拭い去ることができなかった。というのも、「どうしても職場の人々と打ち解けることができなかった。OL同士の飲み会や旅行に居づらさを感じ、うまく関係が築けていない自分がいた。これは労働条件などの環境が整っているからといってクリアできる問題ではなかった」。正社員登用の話を断り、派遣会社に申し出て、別の会社に移った。

2005年(25歳)11月、保険会社を退職する直前に、実家を出て都内で一人暮らしを始めた。家族との関係を含めて田舎の生活が嫌だったこと、千葉県から通っていると飲み会なども途中で帰らなければならず、そのことが精神的な負担になっていたことなどから、一人暮らしすることを決断した。

同年12月、保険会社を退職してすぐに次の派遣先に移った。派遣された会社は商船会社の子会社であった。貨物の受け渡しや事務処理を担当する部署に配属になった。その職場は次長と課長の管理職だけが正社員で、実務をこなす事務職員は全員が派遣社員だった。当該部署は驚くほど忙しかった。貨物関係の業務が忙しくなる翌年1月には1カ月で100時間の残業をこなした。この時期は毎日終電で帰る日々が続いた。風呂なしの部屋に住んでいたため、銭湯の営業時間に間に合わず、風呂に入れない状態が続いたことを覚えている。100時間の残業をこなしたため10万円程度の残業代を貰った。

この職場での人間関係はうまくいっていた。とても忙しかったことから、派遣社員同士で連帯感があった。もし1人が辞めるとその分の仕事を他のメンバーで負担しなくてはなくなるため、職場の雰囲気盛り上げようという意識が働いていたように思う。しかも管理職(正社員)がパワハラを行う人だったため、チクチクいわれた派遣社員同士で愚痴をいいあえたのも良かったと思っている。

しかし、仕事が非常にきつく、偏頭痛がとまらなくなったため、3カ月で派遣会社に申し出て派遣先を変えてもらった。派遣される際にはそのようなたいへんな会社であるとは聞いておらず、派遣会社に不信感を持つようになった。

2006年(26歳)3月、商船会社を退職してすぐに次の派遣先に移った。派遣された会社は大手物流会社の国際運輸を扱う事業部であった。実際の仕事場はその取引先から間借りした事務所であった。常駐していたのは上司と2人だけであり、今までのように女性社員に気を使う必要がなく、楽しく仕事できた。ずっと続けたかったが、前職のときからの偏頭痛がひどくなり、何度か職場で倒れることもあったため、3カ月で辞めた。上司からは「是非続けてほしい」といわれたが、しばらく休養することにして派遣会社も辞めた。前職(商船会社)のようにひどい職場に平気で人を送り込む会社を信用できなくなっていたこともその派遣会社を辞めた一因である。

すぐに次の仕事を見つけるつもりでいたため、失業手当を受給するという考えはなかった。同年6月から2カ月ほど休養を取ったところ、体調はかなり回復したため、就職活動を始めた。最初はリクルート雑誌などを頼りに就職活動を行っていたが、本当にどこも採ってくれなかった。景気が悪かったことも大きな要因であるが、就職のノウハウ

を知らなかったことも影響していたと思う。一向に就職が決まらなかったことから、ハローワークでキャリアカウンセリングを受け、履歴書の書き方（派遣先を変った理由など自分にとって都合の良いことは書く必要はないなど）を教わり、実践したところ、すぐに就職が決まった。

同年11月、紹介予定派遣で電子部品専門メーカーの東京本社に派遣され、在庫管理、ロジスティクスを担当した。入社3カ月ほどで正社員に転換した。初任給は手取り19万円程度であった。雰囲気もよく、居心地の良い職場であったが、今までのことが頭をよぎり、「いじめられないようにしましょう。早く仕事を覚えて、できる人と思われなければいけない」などと過剰に考えすぎて、なかなか職場になじめなかった。仕事は覚えたつもりでいたが、細かいミスが続き、それが原因で焦ってしまうことを繰り返した。「制服は常に綺麗に洗濯しなさい」といわれ、制服が汚れていないか気になったり、お化粧がうまくできていないのではないかなど考えるうちに、どんどん人目が気になるようになった。そのうち、いくら寝ても眠くて仕方がないという症状が出始め、仕事から帰るとすぐに寝てしまうようになった。そのため、洗濯が十分にできず、シャツの襟が汚れていることがますます気になり始めた。

2007年（27歳）6月から同社を休職した。5月に会社の保健室で相談したところ、毎月訪問してくる精神科の医師に相談するよういわれた。精神科医から、「自律神経失調症だ。しばらく休職したほうがよい」といわれた。最初はなんとか仕事を続けようと思っていたが、どんどんその症状が強くなったために6月からやむなく休職することにした。それまでは体調が悪くなれば、退職するしかないと考えていたために、休職できること自体がたいへんありがたいと感じた。

通院しながら自宅療養をして同年9月に復職したが、うまく適応できなかった。落ち着いて座っていられず、気持ちばかり焦って仕事が手につかない状態だった。しだいに休む日が多くなり、1カ月くらいで限界が来てしまい、精神科医から「もう少し休みなさい」といわれた。

同年10月から再度、休職することとなった。このときは最初の1週間は全く体がいうことをきかなかった。頭は起きているが、金縛りにでもあったかのように指一本動かさなかった。お手洗いにも行けない状態だったため、水分も取らずにずっと寝ていた。1週間ほどで立ち上がることはできるようになったが、とても仕事ができる状態ではなかった。

その後も、休職を続け、自宅療養しながら精神科に通っていたが症状はあまり改善しなかった。「自分はもう一度働くことができるのだろうか。OLとしてやっていけるのだろうか」と真剣に悩んだ。「OLに戻れないとすれば特に専門知識もないから働けない。働けなかったら実家に戻るしかない。でも戻りたくない。そうすると、ホームレスになるしかない」とまで考えた。

通っていた精神科のクリニックに置いてあったある雑誌の記事が目にとまった。そこには、貧困者支援を行う団体の活動家の話が書かれていた。「ナチュラルに物事を考えている人がいるのだ」と知った。

同年12月に、ふと思い立ち、その貧困者支援団体を訪ねてみた。相談に行ったわけではなく、ただ単に見学に行ったつもりだったが、団体のメンバーは忙しく動き回っており、「ちょっとその書類を取って」などといわれ、その

日から手伝いを始めるようになった。

その後、いろいろな団体の集まりに顔を出さようになった。支援団体が行う生活相談に行ったり、居場所を提供するためのカフェに参加したり、ホームレスの人たち向けの夜回りにも行った。「とにかく会社に戻る前に自分で何かを見つけて、戻っても大丈夫だという確信をほしい」と思ったことがその理由である。生活相談やカフェなど様々な人から話を聞き、いろいろな働き方、いろいろな生き方があることを知った。考え方がどんどん変わり始め、貧困者支援団体の活動に夢中になっていった。

2008年（28歳）後半に、電子部品専門メーカーの就業規則に規定される休職期間を満了し、退職することとなった。復職することも一時考えたが、「自分は会社員に向かない。少なくとも今は向かない。何か足りないところがある」と考え、退職した。退職することを決めたのは、支援活動から離れたくなかったことも大きい。支援団体の活動を通じて、初めて自分の居場所を見つけた気がして、たいへん居心地が良かった。「初めて会社のルール、会社の常識に自分を当てはめる」ことから解放されたと感じた。最初に1カ月で会社を辞めたときから、自分の中では、「どうやって一人前の会社員になるか。会社員としてどのように振る舞うか」ということが大きなテーマだったが、ボランティア活動で、非力ではあるけれども多少なりとも世の中の役に立つことができるんだと思えたら、そんなことはどうでもよくなった。

電子部品専門メーカー退職後、少し経ってから、半年ほど食料品店でアルバイトをした。フルタイムで働いていたが、社会保険は未加入であった。食料品の配達中に、労災事故にあったが、会社は「アルバイトの場合には労災は申請しない」といわれ、あまりの対応のひどさに驚き、退職した。

<現在の生活状況>

現在は週3回コールセンターでパート社員として働いている。コールセンターの方針で各種社会保険に加入させずにすむ週20時間未満しか働けないため、労働時間は週20時間未満である。そのため、給料は手取り6~7万円程度にしかない。しかし、それまでの貯金や電子部品専門メーカーの退職金があったため、それほど生活に困窮することもなく、パートのみで生活ができた（もともとつましく暮らしてきた）。しだいに貯蓄も減ってきたことから、これからはもう一つ仕事を掛け持ちしないといけないと感じている。

今は2つの貧困者支援団体にボランティアとして積極的に携わっている。貧困者支援団体に集う人々は「ある基準で人を当てはめようとしない」ので、一緒にいて居心地がたいへん良い。最近は支援団体などが開催する勉強会に参加することで、いろいろな知識を得ることができ、また新しい人とのつながりを持てるのがたいへんうれしい。

現在交際している人はいないが、周りには不安定な働き方をしている人が多く、たとえば、交際相手がいなくても、結婚しようという話にはならないのではないかと。

今は悩み事があったら、自分のことを理解してくれているボランティア仲間に相談できるので、たいへんありがたい。大学や高校の仲間は、就職して仕事を続けているか、結婚して子供を産んでいる人達なので、生活感覚が違い、

相談しづらい。

病気になったことで両親との関係は良くなった。最初の会社でいじめられていたときに、実家で暗い顔をしてぼうつとしていたり、食が全然進まなくても、家族はだれも何もいってくれなかった。そのため、自律神経失調症を発症したこと、休職したことすら家族には隠していた。ところが会社（電子部品専門メーカー）から病気について連絡が入って以来、両親の態度は一変し、自分のことを理解しようと努めてくれるようになった。最近は時々アパートに来てくれるようになった。遊びに来たときや私が実家に帰ったときには小遣いまで渡してくれる。「困ったときには帰ってきなさい」といってくれているので、たいへん心強く思っている。

< 今後の希望 >

大学卒業後すぐに入社した会社や、電子部品専門メーカー退職後に勤務した食料品店でのアルバイト経験を通じて、労災保険にさえ加入させてもらえないような労働者としての権利が守られない実態を目の当たりにしたことで、雇われるという働き方に疑問を持ち、雇用されない働き方をできないか模索している。先日はテープ起こしの仕事に関する講習も受けてきた。今はまだ多少なりとも蓄えがあるので、今のうちにいろいろなことを経験し、自分に合う仕事を見つきたいと考えている。文章を書くことが好きなので、そういった仕事に就ければいいなと漠然と考えている。

これまでは安定した仕事を求めてきたが、安定を得る代

わりに、会社のルールを守ること、会社以外の活動が制限されることなど、制約されることが非常に多いことに気づいた。安定した生活を送りたい気持ちはありながらも、一方で、そこまでして安定を望むのかと考えるようになった。

< 行政への希望 >

労働基準監督署は労働基準法違反に対して罰則を厳しくしてほしい。食料品店でのアルバイト中に労災事故にあったため、労災の申請をしてもらおうとしたところ、アルバイトには申請させないといわれた。その際、労働基準監督署に相談したが、十分に対処してもらえなかった。

職業訓練のメニューの充実について検討してほしい。自分には事務の仕事は不向きだと考えているが、職業訓練のメニューは一般的なパソコンの知識を習得するもの、事務職関係、ものづくり関係に偏っており、自らが進んで希望するようなメニューがない。雇用されない働き方を模索中のため、そのための勉強ができるメニューがほしい。自由裁量で利用できる仕組みができればありがたい。

ハローワークのキャリアカウンセラーの仕組みはたいへん役立った。求職者個々人の長所を引き出すのは就職活動を行ううえで、たいへん重要であると感じた。しかし、一方で、カウンセラーの質にはばらつきがあると感じている。先日受けたキャリアカウンセリングでは、再三、「事務職は向いていないので、事務職以外の仕事を探したい」と申し出たにもかかわらず、今までの経験から事務職を勧められるなど、意思を尊重してくれないカウンセラーもいた。更なるカウンセラーの質の向上に取り組んでほしい。

調査番号：東京36

調査日：11月2日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：48歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：宮城県 ■ 学歴：大学卒業 ■ 就労の有無：就労中
- 現職：官公庁、事務職、非常勤職員 ■ 直近の収入：無回答 ■ 家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身（離婚し別居中の子ども3人） ■ 住居：自動車メーカー社員寮
- おおまかな職歴：大学卒業 学習塾・講師（正社員、4年） 公立小学校・教師（正職員、17年） 自動車メーカー・生産（派遣社員1年、期間従業員1年半） 失業手当受給（3カ月）+ 役所（臨時職員、3カ月） 役所・事務（非常勤職員、7カ月） 現在に至る

< 仕事に就くまで >

1961年、宮城県生まれ。

両親は自営業を営んでおり、暮らし向きは普通であった。高校卒業後、東京にある私立大学に入学し、上京した。

大学卒業後の就職については、地元志向が強かったことから、宮城県内での就職口を探した。

< 初職からの経験 >

1984年（23歳）大学卒業後は地元に戻り小さな学習塾の講師（正社員）となった。給料は手取り15万円程度であった。残業、休日出勤もあったが、残業代が払われることは

なかった。

1988年（28歳）学習塾を自主退職した。安定した職を探したいと考えたこと、子どもとの関わりに興味を持ったことから、通信教育で教職課程を受講し、教員免許を取得した。

1989年（29歳）地元の小学校教師として採用された（以後17年間勤務）。当時は小学校の生徒数が急増した時期にあたり、教師の採用数が相当多かった。

1990年（30歳）に結婚し、その後、三人の子どもをもうけ、持ち家を取得した。

2006年（45歳）9月はじめ、事情があり離婚し、その際に小学校も退職した（退職直前の月給は手取り20万円程度だった）。地元での再就職も検討したが、地方都市であっ

たため賃金水準が低く、子どもの養育費を支払うのに十分な賃金を得ることができないため断念した。

同年1月末、「手取り30万円（可能）寮付き」という派遣社員の求人広告を見て、「この水準であれば、生活費をまかなえる」と考え、登録型派遣での就職を決めた。派遣会社から、東京にある自動車メーカーの組立工場に派遣された。労働条件は時給1,200円で、派遣会社が用意した寮に入った。寮費やもろもろの費用を差し引かれた結果、手取り額は月額10～15万円程度だった。

ところが、働いているうちに自分の置かれている労働環境、労働条件に疑問を持ち始めた。例えば、労災保険は本来派遣会社（派遣元会社）が加入すべきところであるが、実際には自動車メーカー（派遣先会社）が加入していたのである。また、給料から天引きされる諸費用についても不明朗な点があった（例えば、寮の部屋に備え付けられたテレビの備品費として月1,000円を控除されていたが、実際に派遣会社がレンタル業者から借りてくる金額は月500円だった）。派遣会社にそのことを指摘しても、お茶を濁すばかりで明確な回答はなかった。そのため、自分の身を守るためには正しい知識を身につけることが先決だと考え、社会保険労務士の資格を取ろうと勉強を始めた。

同年11月、同じ寮にいた二人と相談し、労働組合を結成することにした。当該自動車メーカーには企業別労働組合があったが、企業別労働組合は正社員の労働条件を交渉することしかできないのではないかと考え、相談には行かなかった。また、当時は個人で加盟できるコミュニティユニオンの存在を知らなかったため、それなら自分たちで組合を作るしかないと考えた。

またその時期、同じ工場で働く別の派遣会社から派遣されている労働者が労働組合を設立したというビラを撒いたため、意を強くし、自分たちも組合結成に向けて動き出した。労働者相互の情報交換・連携強化を目的としたNPO法人に加盟し、組合作りのノウハウを一から教えてもらった。

2007年（46歳）に入り、労働者派遣法が定める「直接雇用の申し込み義務」にもとづき、直接雇用を求めて派遣会社および自動車メーカーに団体交渉を申し入れた。当初は交渉に応じなかったが、マスコミ等でも取り上げられるに至り、派遣会社および自動車メーカーは交渉のテーブルについた。

同年8月、度重なる交渉の結果、当該自動車メーカーの期間従業員（契約期間1年）として直接雇用されることとなった。この際、同社で働く派遣社員のうち勤続1年を超える希望者全員が期間従業員になった。

期間従業員となったことで労働条件は派遣社員のころに比べて向上した。給料は多少残業を行えば手取り25万円程度となった。また、期間従業員になったことに伴って自動車メーカーの社員寮に転居したが、当該社員寮は光熱費を含めて無料であった。社会保険も完備されていた。加えて、社員食堂も派遣社員のころより安く利用できるなど福利厚生面も良くなった。

その後順調に仕事を続け、2008年（47歳）8月には契約期間が満了し、契約を更新した（契約期間1年）。

ところが、2008年秋のリーマンショックの影響を受けて、当該自動車メーカーでも期間従業員は段階的に雇い止めとなることになり、同年12月31日に雇い止めとなった。2007年8月の団体交渉の際には3年間は雇用を保障する旨回答

されていたにもかかわらず、雇い止めとなったことから現在も解雇撤回・従業員の地位確認を求めて提訴している。

また、雇い止めに伴い2日以内に社員寮から出るようにいわれた。会社と交渉をしたところ、会社は1カ月だけ滞在を認めた。しかし、解雇そのものが不当であり、まだ従業員の地位を失っていないと考えているため、同じ労組のメンバーとともに現在も寮にとどまっている。

2009年（48歳）1月、解雇後すぐに失業手当の申請を行い、まもなく支給が開始された（給付期間は半年）。週3日以内の就労であれば失業手当との併給が可能であるため、当面の生活を維持するために週3日の仕事を探し、残りは安定した職を得るための求職活動に充てようと考えた。当時は多くの自治体で緊急雇用対策として臨時職員を雇っていたため、近くの市役所で週3日働きはじめた。一方で、前述の通り、自分の生活費のほかに子どもたちの養育費を支払う必要があり、失業手当と臨時職員の賃金ではその生活を維持できないことから、早期再就職に向けて求職活動を続けた。

< 現在の生活状況 >

2009年4月1日からは役所の非常勤職員として就職し、現在に至る。正規雇用ではないことから一抹の不安もあったが、将来的には田舎（宮城県）に帰りたいという気持ちもあったし、社会保険労務士の勉強で培った知識が生かせる仕事なので就職を決めた。給料は日給月給制で期間従業員のころと遜色がない水準である。契約は半年更新だが少なくとも2年間は保障されている。

社会保険労務士の勉強で培った知識・経験が生かせ、さらに困っている人々を助けることにつながることから、現在はやりがいを持って働いている。しばらくはこの仕事を続けながら、社会保険労務士試験を受験する予定である。

一緒に組合を設立したメンバーとは常に連絡を取り合い、励ましあっている。メンバーの中には現時点でも就職先が決まっていない者もあり、厳しい生活を強いられている。2009年9月には当該自動車メーカーが期間従業員の採用を再開した（雇用期間は3カ月限定で、労働条件も以前と比べ下がっているようである）ことから、就職の決まっていないメンバー数名が応募した。ところが、期間従業員を足掛け15年ほど継続し十分な経験を有する者も含めて、組合員は全員不採用となった。

NPO法人のメンバーとも頻繁に連絡を取り合っており、今でもサポートを受けており、たいへん助けられている。

離婚後は元妻とは一切連絡を取っていないが、子どもたちとは頻繁に連絡をとっている。一番上の娘に自分名義の携帯電話を渡しており、ときどき電話もする。今は別れて暮らしているものの、自分の生活を切り詰めても子どもたちには必要最小限のことはやってあげたいと考えている。そのためにもある程度の給料が確保できる仕事を続けなくてはならない。

< 行政と労働運動への要望 >

派遣切り等で仕事も住居も失ってしまった者が再出発するには、まずは住居が必要である。住居がないと何事もはじめられない。行政には住宅の確保をしっかりと行ってもらいたい。

雇用保険関係、再就職支援はハローワーク、生活保護は役所などと対応する行政機関が分かれており、それぞれの事務所に出向かなくてはいけないことから、求職者の負担が大きい。そのため、行政機関を一元化し、ワンストップで対応できるようにしてほしい。

生活保護についてはもっと柔軟に対応してほしい。求職者は働かないのではなく、働きたくても働けないのである。一日も早く生活を立て直し、働けるようにするには短期間でも生活保護を受けられるような仕組みが必要である。また、生活保護を申請する際に、NPOスタッフや弁護士などの実務家が随行する場合と、そうでない場合とで行政側の対応が異なるのは理不尽であると感じている。

職業訓練の訓練内容については制度の大幅な拡充が必要である。また、職業訓練を受けながら、生活費が支給される制度はもっと拡充されるべきである。

再就職支援にあたっては個々人の事情をもっと勘案してもらいたい。介護職の需要が多いことから、求職者は介護職への転換に向けて職業訓練を受けてはどうかという風潮があるが、求職者個々人の向き不向きの問題もあるし、その人が抱えている様々な条件もある。自分の場合には養育費の支払いもあり、手取り15万円程度の介護職では生活を

維持できない。

若年層の中には将来のことを考えずに短期的には収入の悪くない派遣や期間従業員の仕事を選んでいる人もいる。将来のことも考えて、本人が正しく選択できるように職業教育を施す必要があるのではないかと。

正社員が何らかの課題を抱えた場合に、当該企業に企業内労働組合があっても個人加盟できるユニオンに相談しているということは、企業内労働組合が機能していないことの現れである。今回のような大規模な派遣切りが始まった時に、企業内労働組合が率先して相談に乗れるようになったらたいへん心強い。昨年の派遣切り問題について、派遣切り回避に向けた企業側へのアプローチが不足していたことを反省する企業内労働組合の弁を記載していた記事を見た。多くの企業内労働組合がこうした考え方を共有し、率先して動いてほしい。

主義・主張の違いを超えて、働く者のために、すべての労働組合が結集して運動を展開する必要があるのではないかと。お互いが小競り合いをしていると、企業から足元を見られて、労働組合運動そのものが弱体化してしまうことにつながりかねない。

調査番号：東京37

調査日：10月31日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：30歳 ■現住所：東京都 ■出身地：青森県 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：出版業、編集職、アルバイト ■直近の収入：月5～10万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 国家公務員・現業（正職員、3年2カ月） 出版社・編集（正社員、1年1カ月）
母親の看病（5カ月） 地元新聞社・データ入力（アルバイト、10カ月） 求職活動（6カ月） 単発アルバイト（3カ月） 出版社・校正（アルバイト、1カ月） 現在に至る

< 仕事に就くまで >

1979年、青森県生まれ。

両親との3人家族。両親共に公務員であった。「小さい頃に原因を求めたくない」と思うが、母親が働いていたため、幼少の頃は叔母の家に預けられており、「人の家だから気を遣って過ごしていた」と思う。

小学生の時は、農村地帯の中では比較的生活水準が高く、身なりが周囲の子供と違うことなどから馬鹿にされたり、からかわれたりすることが多かったので、「小学校時代は楽しくなかった」。母親は「堂々としていればいいじゃないの」と言っていたが、周囲から浮くような格好はしかなかった。

高校卒業後は実家を出て、同じ県内の大学に進学した。両親からは仕送りももらっていた。アルバイトは4年生の時に居酒屋でしたのみである。1年生から3年生までは部活（馬術部）で忙しく、アルバイトの時間はなかった。

大学4年生の時の就職活動では、公務員試験、民間企業ともに受けたが、民間企業についてはそれほど「ここに行きたいという強い気持ちはなかった」。結局3月に卒業論

文が通らないということで、1年留年した。もともと就職先が決まっていなかったこともあり、「就職浪人しようかな」と思っていた。翌年、地方公務員（警察官）と国家公務員の試験を受けた。本当は地方公務員（警察官）になりたいと考えていたが、地方公務員（警察官）試験は受からず、第二希望の国家公務員として就職することになった。

今、やり直すことができるなら「大学からやり直したい」と思う。特に行きたかった学部合格せず、他学部で確固とした意思もなく進学したことから、いまだに面接で「なぜこの学部に進学したのか？」と聞かれると、答えられない。通った大学が嫌だったという訳ではないが、「18歳から22歳までの期間をどう過ごすかというのは、決定的」だと考えている。

< 初職からの経験 >

2003年（24歳）4月、大学卒業後、国家公務員として栃木県に赴任した。同期は10人で、職場全体では約120人の職員が働いていたが、そのほとんどが女性であった。配属さ

れたのは夜勤・見回りがある部署である。公務員宿舎に入居したため、家賃は不要であったが、家族向けの大きな物件で、他の職員2人(18歳、24歳)との共同生活だった。

実際に栃木に赴任して「行ってびっくりしたことは沢山あった」。特に驚いたのは職場の立地環境と宿舎である。

職場では、年間20人ほどが辞めていた。主な理由は、結婚退職である。その他の理由として、職場が「すごい田舎」にあり、「買い物するにも原付で20分ほど行かなければならないような場所」であったことも挙げられる。また、職員を全国から募集しているため、「地元出身者がほとんどいない」こと、夜勤があること等が退職理由であった。退職者の勤続年数はバラバラで、3カ月で辞めてしまう人もいれば、3年、10年と勤めた後で辞めてしまう人もいた。

夜勤がある時の勤務は、朝8時30分から翌日の昼11時まで、仮眠を含んで合計27時間勤務した。土日も勤務しなければならなかった。勤務体制はシフトが組まれているので、休みたい場合は自分で代替要員を探さなければならなかった。シフトは前月の最終週に、翌月分が示された。この時期の給料は、夜勤・休日勤務分含めて手取り22万円であった。

入って1年くらい経った時期から、「もうこれは長く続けられないな」と思い、「なるべくお金を貯めて辞めよう」と思った。理由としては、やはり職場が田舎にあること、夜勤があることである。上司に相談したら配置転換を示唆され、半年後に総務に異動になった。そのため、「辞めるタイミングを逃した」。

総務で担当した仕事は、主に物品購入である。総務に異動してから、夜勤や休日勤務、残業がなくなったため、給料は手取り18万円になった。総務で1年半勤めた後、上司から「もっと大変な業務に変える」と言われたため、「これを引き受けたら辞めるタイミングを逃す」と思い、2006年(27歳)6月に一時金をもらって退職した。

公務員を辞める前、栃木にいた時から次の仕事をインターネットの就職サイトなどで探していた。公務員だったので、雇用保険はなく、退職金のみであった。6月に仕事を辞め、すぐに東京に引っ越すと同時に、ハローワークで「もっとやりがいのある仕事」を探した。東京に来たのは、希望する仕事があるだろうと思ったからで、「音楽が大好き」で、ライターとなってお気に入りの音楽雑誌に出ているような記事を書きたいと思っていた。

7月にハローワークで紹介された、フリーペーパー等を作る制作会社に正社員の編集員として就職した。仕事内容は音楽の新譜の紹介記事を書くことで、やりたいと思っていた内容に近い仕事だった。社員は全員正社員で12人。週5日勤務、社会保険完備、給料は手取り18万円であった。そのうち家賃5万円を払っていたので、手元に残るお金はそれほど多くはなかったが、月1~2万円を貯金しようと考えていた。クライアントと会う必要がなく、メールや電話でのやり取りで済み、服飾費などがあまり必要ではなかったため、「あまり待遇が不満だとは感じなかった」。勤務時間は、基本的に朝10時から夕方18時までであったが、実際の終業時刻は22時頃になることが多く、先輩より先に「帰りづらい」と思っていた。残業代は30時間まで給料に含まれていると会社からは説明されていた。「今考えれば、本当にものが分かってなかったと思う」。

仕事の内容はやりたいことに近かったが、職場は人の入

れ替わりが激しく、殺伐としていた。社長がワンマンであったので、それも関係していたと思う。ある社員を見かけないなと思っていたら、社長から「辞めてもらいました」というメールが来て、「えっ」と思った。「そういうやり方なのかな」と。

会社に勤め始めて1年後の2007年(28歳)8月、「会社がそろそろ危ないかなと思っていた」ら、社長からフリーペーパーが廃刊になるから辞めて欲しいと言われ、解雇された。解雇されたことに対して「すごくショックだった」。あからさまな失敗や、落ち度がないのになぜ解雇されなければならないのかと思い、解雇ということに現実感が持てなかった。

仕事がなくなってしまい「どうしようか」と考えたが、同年9月に青森の実家に戻った。実家に戻ったのは、母親がC型肝炎でインターフェロン治療が必要になり、帰ってきて欲しいと言われたためである。失業手当を3カ月間受給することができたが就職は決まらず、12月以降も引き続きハローワークで仕事を探した。

2008年(29歳)2月に新聞の求人欄で見つけたアルバイトの仕事を始めた。仕事は新聞社のポータルサイトのデータ入力であった。青森県内の生活に関する情報を入力していた。契約期間は10カ月、時給1,000円、週5日、9時から5時までの7時間勤務、残業なし、社会保険完備、健康診断もあった。時給1,000円は「青森では高かった」と思う。毎月の手取りは12~13万円ほどで、そのうち2万円を実家に入れており、月1万円ほど手元に残った分を貯金していた。職場はアルバイト2人だけで、誰とも話さず黙々とデータを入力する作業が続いたので、「頭がおかしくなりそう」で「人と喋りたい」と思った。

同年11月末にアルバイトの契約が終了した後、12月から就職活動を始めた。実家のある青森ではなく、ネットで東京の会社を中心に求人情報を探した。地元に残る選択をしなかったのは、母親の病気が治療の結果、治ったことも理由の一つで、もともと、母親には治療が終わったら、東京の会社で就職したいと伝えていた。面接を受けるために、青森から20~30回は夜行バスに乗って東京に来た。貯金で就職活動を続ける生活を半年ほど続けたが、貯金は底をつきつつあった。

「親を心配させたくなかった」ので、就職を決めてから上京しようと考えていたが、2009年(30歳)6月に仕事が決まらないまま東京に出てきた。マンション・マンションに入居し、単発のアルバイトで仕事をした。単発のアルバイトで、毎回違う人と働くのは、「私にはきつい」と感じた。

正社員の仕事を探したが、なかなかなく、10月にインターネットのアルバイト情報誌で見つけた、テレビ番組表校正の会社でアルバイトとして働き始めた。勤務先は媒体を出しているクライアント会社で、同期を含めて20名程度が働いている。試用期間中は時給1,000円と聞いていたが、現在は時給950円だった。25日締めで来月の20日払いなので、今の暮らしは「とてもきつい」。社会保険はなく、雇用保険にも入っていない。そのため、自分で国民年金保険料、国民健康保険料を支払っている。勤務は週4日から5日で、アルバイトを始めたことをきっかけにマンション・マンションから出て、アパートに入居した。アパートを借りる時には、収入証明などは求められなかったので、入居書類に多少収入を水増しして記入して借りることができた。

少ない収入から家賃48,000円を払い、社会保険料を払わなければならないので、生活は「きつい」。雇用保険に入っていないことも心配である。手取りが減っても、会社で社会保険に入っている方が良い。この給料では「暮らせない」ので、別の仕事を探している。今でも音楽雑誌の編集の仕事に憧れはあるが、「雑誌がどんどん廃刊しているし、10年後にこの業界自体どうかな」とか考えてしまう。そのため、料理人など別の職種も考えたりする。「すたれない」「時代によってなくなる」「年齢がいつてもできる」と思うから。ただ、年齢や経験から応募できる仕事がなかなかない。

ハローワークに行っても100人待ちとか、アルバイトにも100人以上が応募しているとか、「前よりも仕事が見つかりにくくなった気がする」。

< 初職から現在までの経過

(仕事・家族・友人との関係)>

父親は今年定年退職の予定である。母親は看護師であったが、15年前に肝炎発覚後、「病気のこともあったと思うが」10年前に退職した。仕事好きの母親であったため、仕事を辞めてから少し鬱っぽくなった。

初職の公務員の仕事に決まった時は、母親に「女の子なのに」と泣かれた。仕事を辞める時も、親に相談したら「辞めるなら早い方がいいわよ」と言われ、特に反対されなかった。

最近、親から「(子どもの頃)アスペルガー症候群じゃないかと思っていた」と言われ、自分でも小学校の頃から人間関係に悩んでいたため、この年齢になってアスペルガー症候群ではないかと疑い、悩んでしまった。

公務員時代は、交替制勤務で集団行動だったので、同僚と遊びに行くこともよくあった。宿舎で同室だった同僚とは、勤務の班が同じではなく、休日も異なっていたので一緒に遊びに行くことはなかったが、今でも連絡を取り合っている。

一度青森に戻った時は、連絡を取り合っていなかった地元の学生時代の友人とも会うようになった。仕事のデータ入力は「頭がおかしくなりそう」と思ったが、それ以外では実家の生活が嫌だと思ったことはなかった。

< 現在の暮らしぶり >

現在はまだアルバイト料が支払われていないため、生活が苦しいと感じている。アルバイトなので社会保険に入っておらず、自分で国民健康保険料や国民年金を納めなければならない。「今月どうしよう」とまでは思わないが、貯蓄を取り崩し、好きな音楽雑誌やCDを買うことも控えている。ただ、「こんなに貧困だと言われている時に、音楽のことばかり言っているのもどうか」と思ったりする。

親の援助は、すごく困ったら「頼れないこともない」。週1回程度、実家から電話がかかってきて、いざとなれば頼れる関係にはある。金銭的援助はしてもらってないが、時々お米を送ってくれたりする。親を安心させられないということに対し、「本当に申し訳ない」と思っている。「結婚して遠くに住んでいるのであれば、心配じゃないのに」と親からは言われる。

現在は仕事以外にNPOの活動に関わっている。NPO

活動で生活保護の申請に同行しているが、「何か踏み外した時に、ホームレスまでいっちゃうことが、当たり前に起きてしまう社会なんだな」と実感した。

< 仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見 >

貧しいのは本人の責任ではないと思うが、それは貧困者支援を行っている活動家の本を読んでそう思ったから。本を読んだのは、派遣村の映像を見たのがきっかけである。「自分が解雇されなかったら、反貧困の活動に興味を持つこともなかった」と思う。それまでは、生活が苦しいのは本人の責任だと考えていた。だが、非正規の働き方は、本人が希望したというより、会社にとってその雇用形態が得だからであって、「不安定な雇用を選んだ本人の責任にだけされることは、おかしいと思う」と、本を読んで思うようになった。まず、違法な働き方の取り締まりを強化するべきではないかと考えている。

組合はあった方がいいと思うが、アクセスを良くした方がいいのではないかと。「仕事が変われば、その組合は終わり」みたいなことではなく、仕事が変わっても繋がりを持てるようにした方がいいと思う。

< 将来の展望 >

将来に対しては強い不安がある。雇用や収入に対する不安もあるが、「どんな風に社会が変わっていくのか」、雑誌という媒体も無くなるのではないかと不安がある。他にも、戦争や環境破壊の不安など。個人の不安だけでなく、「もっと大きい不安もある」。

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：37歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：北海道 ■ 学歴：高等専門学校3年修了退学
- 就労の有無：就労中 ■ 現職：情報処理業 + 飲食店、運搬関係職 + サービス職、登録型派遣 + アルバイト
- 直近の収入：月20万円 ■ 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身 ■ 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高等専門学校3年修了中退 国家公務員・事務（正職員、9年） 建設会社・事務（正社員、9カ月） + ファミリーレストラン・調理（アルバイト、数カ月） かけもち 建設会社・事務（正社員、数カ月）
（建設会社からの出向）旅館・フロント（正社員、数カ月） 新聞販売店・配達と集金（正社員、2年）
コピー機メーカー・保守電話受付（登録型派遣、1年4カ月） 失業手当受給（6カ月） + 職業訓練（ファイナンシャルプランナー） 日雇い派遣（1カ月） コピー機メーカー・オペレーター（登録型派遣、3カ月）
損害保険会社・事務（登録型派遣、3カ月） 電話会社・営業事務（登録型派遣、6カ月） 運輸会社・荷物仕分け（アルバイト、4カ月） 電気機器メーカー・オペレーター（登録型派遣、1カ月） 情報処理会社・運搬（登録型派遣、3年目） + ファミリーレストラン・接客（アルバイト、4カ月） かけもち、現在に至る

< 仕事に就くまで >

1971年、北海道生まれ。

家族構成は両親と6人兄弟の8人家族だった。

小学校まで振り返っても、学校にあまり楽しい思い出はない。

北海道の市立中学校から道立高校を志望したが、受験に失敗。「どちらかと言えば文系の方だった」が、1年後に別の市にある高等専門学校の機械工学科に進学した。受験に失敗した後は、「周りから完全に疎外された」。中学の部活（卓球部）の顧問という形で学校で先輩を指導することもあったが、「完全に友達とは（縁が）切れまして。あんなバカ相手にできない、と。ほとんど差別です」。高専は寮生活で、同年齢の先輩から目を付けられて「半ば恐喝のような、絶対売れないような代物を『買え』と無理難題を言われたり、厳しいいじめを受けた。「今思えば、よく耐えたな、という感じがする」。家庭の経済状況が悪化し、寮の費用が払えなくなり、高専に通い続けることが困難となったため、安定した仕事である国家公務員試験を3年次に受験。合格したため退学することにした。

< 初職からの経験 >

公務員試験に合格し、人事院から3カ所ほど勤務先の選択肢が与えられた。だが、2カ所は遠方であったため、実家のある市内の病院で勤務することに決めた。

1991年（19歳）病院での勤務を開始。同病院での仕事は医療事務で、医薬品や器材の購入、施設の管理などを担当した。職場の特性上、宿直勤務が月に10回ほどあった。本来の宿直は3～4回だが、宿直は上役はやらないので、上役分を若い人間で回すことになっていた。宿直には仮眠時間があるが、急患が入ったりするとそれもとれず、60時間連続勤務ということもあった。大晦日から元日の宿直もあった。公務員の採用抑制で先輩は入ってこない上、精神疾患などで休職している職員が3人ほどいたこともあり、若い職員にしわ寄せがきていた。宿直手当はあったが、時間外手当の記憶はなく、2000年3月（28歳）の退職直前の時点で税込み年収は400万円ほどであった。

退職直前は、コンピューター2000年問題部門のプロジェ

クトリーダーだった。「コンピューターに詳しいわけではなかったが、高専を出ているから機械が分かるということ担当となったのだと思う」。3、4カ月間は家には風呂に入りかたに帰るぐらい」という激務をこなしたが、体調を壊し「辞める直前には血を吐いてました。人には言っていないけど精神安定剤や眠剤（睡眠薬）ももらってました。（自分の勤務している）病院が精神（科）やってなかったからよかったですけど」。

それだけの仕事をしたが、上司からは「ぞんざいな扱いを受け、まっとうに評価されなかった」。自分からすると、「まともに仕事をしていない奴が評価されたりするため、同僚との関係もうまく構築することができず、「自分以外はすべて敵、の状態」だった。他に休職している人がいたこともあり、上司との間で休職という選択肢は得られないまま、学校に行くという名目で、2000年3月末（28歳）をもって9年間勤務した職場を退職した。

職場では後半の何年間かは労働組合に加入した。医師、看護師等全体で220～230人のうち事務職は20人ほどで、組合員の多くが看護職の中で、「事務職は組合に入っていない、という雰囲気だった」。だが、職場でのトラブルに関して組合には相談はしなかった。組合では「事務職の問題は一番後回し」と感じていたからである。

経理や社会保険、医療事務などの仕事に就きたいと、漠然と考え就職活動をした。ハローワークでは、「公務員じゃだめでしょう、とぞんざいにあしらわれました」。全くあてにならないと感じた。

2000年（28歳）6月に、求人誌で見つけた道内の建設会社（非上場、従業員50人超）に事務として採用された。年収は200万円を超える程度だったが、社会保険完備で残業はなく、病院に比べたら仕事はずっと楽だった。給料の低さをカバーするため、入社後しばらくしてファミリーレストランのキッチンで週3日ほどダブルワークを始めた。建設会社を定時で退社後、自宅で仮眠し、19時から6時まで働いた後、自宅で着替えて建設会社に出勤した。「仮眠しようにも、『寝過ぎたらどうしよう』と考えると寝られなくなった」が、どちらの職場でも問題は起こさず、生活を続けた。「若かったからかな」。

だが、建設会社の経営状態が悪化し、同年末ごろには給料を下げる話が聞かれるようになった。「このままでは生

活ができない」と思い、「チャンスがあれば行きたいと思っていた」本州に渡ることを決断。建設会社に勤務しているうちから、東京で開催されるUIターンフェアに日帰り参加し、就職先を探した。3回ほど本州と北海道を行き来し、長野県にある建設会社に2001年4月から入社することが決まり、北海道の建設会社を2001年3月(29歳)に退職した。

2001年(29歳)4月、長野県の建設会社での仕事を開始。住み込みの仕事を選んだが、会社が賃貸物件として所有しているアパートに、「敷金礼金なしで一般向けの家賃と同じぐらいの金額を払って」住んだ。職種は事務で、総務や給与計算などを担当。社会保険完備、残業代込みで税込み月収24万円ほどと、給料は「それなりに出た」。途中でグループ会社の旅館に異動となり、フロントを中心に事務や客室清掃などをした。ボーナスも冬だけ1カ月分だけ出たが、徐々に給料が下がっていった。従業員の8割は地元の人で、「こんな地方でいきなりクビを切られたら大変」だと考え、転職を企図。求人誌で情報を得て、長距離バスで上京しては面接をして帰ることを3回ほど繰り返した。「運送とか新聞で探したけど、見つからなくて。タクシーの運転手も考えたが、東京の地理が分からないので(できない)。やったことないけれど、住むところがないから」と、東京の新聞販売店の専売社員の面接試験を受けた。就職が決まったため、2002年3月に長野を後にした。

同年(30歳)4月から都内特別区にある経済専門紙の専売店で勤務開始。近所の借り上げアパートに住み、朝は2:30起床。朝夕刊の配達のほか、集金と顧客拡張もあり「つらい仕事でした」。それでも「ガス栓が空いていたらピンポン押して。ノルマも他紙とかみたいにはきつくなかったんで、最低ラインはクリアできてました」。担当エリアの集金率がノルマとされており、歩合と連動していた。そのため、「クレジット払いを無理矢理勧めて、『ポイントたまりますから』とか言って。口座振替だと残高が足りなくて引き落とせなかったりするとまた集金に行かなくちゃならないから」。家賃と拡張の歩合も含めて手取り年収は300万円ほどになった。社会保険も入社から2、3カ月たったのちに加入できた。休みは月6日ということにはなっていたが、集金や拡張で2日はつぶれて、実質、月4日の休日であった。

途中で販売店自体が「国替え」になり、勤務地が別の特別区に店ごと移った。2003年(31歳)夏ごろに仕事中にバイクで交通事故を起こし相手にけがを負わせたことがきっかけで、主任との関係が悪くなった。仕事自体に将来性がない気がしていたこともあり、「やっぱり事務しかないかな」と思うようになり、ハローワークや求人誌で仕事を探したが、仕事をしながらではなかなか新たな仕事を見つけることはできず、時間が過ぎていった。「(拡張用の景品である)チケットを自腹で買わなければならないし、いろいろ付き合いとかもあって」消費者金融への借金が140万円にまで膨らんだ。毎月の返済額が4万円ほどになっていた。だが返済は遅らせられなかったのが将来展望が見えないまま、2004年(32歳)3月で販売店を退職した。

派遣会社に登録し事務職を希望した。「医療事務とかならやれると思っていたけれど、そういうジャンルの仕事が入らないし、他の事務だと『経験年数が足りない』と言われる」、なかなか仕事がこなかった。借金は、たまたま見つけた日弁連の相談センターで債務の任意整理をした。過払

い金利分で「40~50万円減り、返済回数が減り、だいぶ気分が楽になった」。派遣会社に登録後半年たった頃、コピー機メーカーの保守の電話受付の仕事が決まった。

2004年(33歳)10月、コピー機メーカーでの登録型派遣の仕事を開始。自分自身も自転車で顧客先を回り、カウンターの確認や軽いメンテナンスの業務もすることはあった。2カ月か3カ月の契約更新で、税込みで24万円/月ほどの給料で、社会保険はついたが、交通費と賞与は出なかった。しかし、週休2日で残業はなく、「仕事は楽だった」。だが、コピー機メーカー自体が業務縮小で人員整理をすることになり、2006年1月をもって派遣契約を切られた。

初めて雇用保険の失業等給付を受けるための手続きを行い、同年2月の終わりごろから給付が始まった。ハローワークで職業訓練を受けられることを知り、「簿記が希望だったんですが」、6月から3カ月間ファイナンシャル・プランナー(FP)の講座を受講。

2006年8月末で失業等給付が終わった後は、派遣会社から紹介され、倉庫の軽作業などの日雇い派遣の仕事で食いつなぎつつ、9月のAFP(アフィリエイテッド・ファイナンシャル・プランナー)試験に合格した。

同年(34歳)10月には別の派遣会社から、コピー機メーカーの苦情処理のコールセンターの短期派遣の仕事が入った。条件は時給1,500円、日勤週4日、月間残業15時間ほど。同業務の派遣は自分ひとりだったが、社員が自分で行うことになり、年末をもって契約解除となった。

2007年(35歳)1月にはさらに別の派遣会社から、損害保険会社の不払い処理に関する事務処理(書類の分類など)の仕事を紹介され、仕事を始めた。条件は3月までの3カ月間、時給1,500円、9:00~18:00、週4日勤務で、10~20時間/月の残業があった。

同年4月からは、1月と同じ派遣会社から電話会社の契約の営業事務の仕事に派遣された。営業社員がとってきた契約書類を運んだり、整理したりする仕事に携わった。条件は時給1,500円、9:00~18:00、週4日勤務で、20時間/月の残業があった。電話会社自体の業務縮小により部署自体がなくなることになり、6月で契約が切れた。

その後は大手運輸会社で荷物の仕分けの単発の深夜アルバイト(日給8,000円)をしたりして食いつなぎながら約4カ月過ごした。

同年9月からは再び派遣の仕事が入り、大手電機メーカーの苦情処理のコールセンターに勤務。1カ月更新、時給1,500円、9:00~18:00、残業なし。処理件数で契約更新の査定が行われたが、クリアできたため「『延長しませんか』と言われたけど、1カ月ごとの細切れじゃ、と思いき、更新せずに辞めた。

同年10月からは、別の派遣会社の仕事で情報システム会社で勤務を開始した(現在も勤務中)。健保組合から請け負ったレセプトの電算処理に関する業務で、健保組合から送られてくる紙のレセプトの詰まった段ボールの運搬や書類の整理などが仕事。条件は7:00~18:00で18:00以降の残業もあり、税込み月収は24万円ほどで、交通費が出る。ボーナスは「去年の年末に1~2万円手当が出たと思う」。社会保険あり。

だが、業務が縮小傾向にあり、残業が減っている。「この仕事も来年(2010年)の3月で切れるらしいですよ。会社はその仕事自体を辞めるとかで、2、3日前に聞いた話なんですけどね」。

減少する収入を補うため、2009年（37歳）6月からはファミリーレストランで週2、3日、23：00～5：00、時給1,250円でホール系の深夜アルバイトをしている。昼間の仕事に差し障りがないように、仕事は金土日に入れるようにしているが、「なんとかやっています。疲れていると昼間に眠気が出ることもありますけど」。

< 初職から現在までの経過

（仕事・家族・友人との関係）>

両親と6人兄弟の8人家族だった。自分は上から3番目であった。自分が中学3年のときに父親がそれまで勤めていた道内の中小企業を辞めた。「辞めた理由は分からない」。それ以来父親は仕事を転々するようになり、それまでの安定した暮らしは苦しくなった。母親も弁当屋でパートをしていた。自宅は持ち家だった。

両親との関係は、高校受験に失敗し進学が遅れたことで親からも厳しい仕打ちを受けて以来、疎遠となっている。病院に就職し、いったんは実家に戻ったが、帰宅時間が不規則なため、途中から自分でアパートを借りて実家を出た。仕事が忙しく実家に帰る時間的余裕もなかったこともあるが、進学問題以来親とそりが合わなくなっていたため、実家に寄りつくことはなくなっていた。病院勤務中「年末年始に親と過ごしたのは1回だけ」だった。

「公務員を辞めるときに『なぜ辞めたんだ』と」言われ、親とはさらに疎遠になったため、道内の建設会社を辞め、北海道を離れる際には知らせなかった。だが、兄弟を通じて連絡先は親に知られていた。

長兄（44歳）は独身で、自分より前に上京して仕事をしていたが、現在は失業中。「同居しなければならぬかな」と考えている。弟は東京で結婚して自分の家族を持っている。主に連絡を取り合っているのはこの2人で、たまに電話をする。他の兄弟もみな親から独立して暮らしている。

両親の現況は詳しく知らないが、「健康なはず。親父はもう無職で年金生活だと思います」。

貧困者支援のNPOに2006年（34歳）12月ごろから出入りするようになり、親しい友人ができた。これまでの職場で知り合った元同僚の中にも友人がいる。

< 現在の暮らしぶり >

住み込みの新聞販売店の仕事を辞めた後に入居したアパートで、現在まで暮らしている。

経済的な問題がとても不安で、（指で輪をつくり）「これがないことが一番ですね」。「病気やケガをしたら収入がなくなってしまうから」。

現在女性とのつきあいは「残念ながらないですね。もしそうだったとしても（出会いがあったとしても）生活に余裕ないから…。自分で躊躇しているところはあるかもしれませんが。職場は年配の人が多し、きっかけもないですし」。ぜいたくをしたいわけではないが「人並みの生活や生き方を望むことさえ許されない状況があっているのだろうか」と思う。

< 仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見 >

「学歴がなく年齢がある程度いってしまうと、たとえ資格をとって一生懸命やっても年齢の壁で仕事の選択さえなかなかできない」。所得の配分にも疑問があり、「公務員の非常勤だって生活保護より低い金額しかもらっていない。（正職員が）ハローワークで後ろの方でふんぞり返っているのを見たりすると、『臨時職員に少しでも回してやれ』って言いたくなります。天下りで高い退職金をもらっているのを聞くと、『おい待てよ』って思います」。

貧困対策に関し多くのNPOが活動しているが、「民間団体に依存するな。国や公がやるべきことじゃないか」と思う。例えば、仕事ができる環境づくりとして住居対策が最優先課題であり、緊急の住宅支援なら廃校の校舎を一時避難所として開放したりすればいいのではないかと。派遣村のような生活や労働面の問題の解決にあたり、弁護士以外の専門職である社会保険労務士やFPなどの活用を図るべきと思う。

< 将来の展望 >

AFPの資格を取得した後、指導した講師と今後の活動について相談する中で、債務整理などの経験を活かし、「社会保障の制度の活用を提案したりとか、貧困層からアプローチしたらどうか」とアドバイスを受けた。「資産運用のアドバイスをするFPはいくらでもいるし、そういうのもいいかなと思い」、自分でインターネットで調べて貧困者支援のNPOを知った。

今後は低所得者を対象としたライフプランニングを仕事にしていきたいと考えている。開業を目指し貯蓄をしたいと考えているが、日々の暮らしでままならない。FPだけで開業するのは難しいので、税理士や社会保険労務士の資格取得にも関心があるが、「学業は集中してやるのがいいけれど、仕事を辞めて勉強だけするのは経済的に厳しい」と思案中である。「他の人が飲まなくていい泥水を飲んでいるから。FPとしての知識や経験はあんまりないけれど、メンタルケアとか役に立つところはあるんじゃないかと。うぬぼれかもしれないですけど」。

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：42歳 ■現住所：東京都 ■出身地：東京都 ■学歴：専門学校中退
- 就労の有無：就労中 ■現職：金融・保険業、事務職、登録型派遣 ■直近の収入：月20～25万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども2人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校中退 レストラン・ウェイトレス（アルバイト、1年） レストラン・ウェイトレス（アルバイト、1年） 不動産会社・事務（正社員、7年） 育児期間（2年、この間に失業手当受給） 生命保険会社・電話オペレーター（登録型派遣、3年） 育児期間（1年） 生命保険会社・電話オペレーター（登録型派遣、1年） 生命保険会社・電話オペレーター（登録型派遣、5年）

< 仕事に就くまで >

1966年、東京都生まれ。

家族構成は、父親、母親、妹。

1985年、18歳のとき、地元の高校卒業後、首都圏にある4年制の公立の看護学校に入学した。同校は当時まだ夜間学校だった。入学を希望した理由としては、母親が看護師であったため、子どもの頃から地元の診療所で母親が働く姿をみていたこともあったが、一番の理由は、「自分は結婚もしたくないし、子どもも産まず、自立して1人で生きていくことになるだろうから、将来的に仕事にあぶれないため」であった。実家を離れ、病院での住み込みを始めた。産婦人科で働きながら勉強し、ときには夜勤もあった。寮費を差し引かれ、1カ月5万円のお小遣い程度の給料があった。公立学校の学費は安かったため、親が支払ってくれた。

その頃、病院のあくの強い人たちと人間関係を築きながら一緒に働き、勉強もしなければならぬという生活環境が自分に合わず、自律神経失調症になってしまった。今ならば、まったく平気なのだが、当時はまだ経験もなく青かった。

1987年（20歳）、3年生になったくらいのときに、看護学校を中退し、実家に戻った。

実家に戻ってからは、カウンセリングを受けるため通院した。地元の友達たちは自分が看護学校に行っている間に引っ越してしまい、退屈だった。

1988年、21歳のとき、「このままではいけない」と思い、通院しながら、近くのファミリーレストランでウェイトレスのアルバイトを始めた。通常、午前10時から午後5時までの昼間の勤務だったが、学生が試験の時期になると、夜勤のできる人が少なくなるため、たまに夜勤もあった。夜勤で入ると、厨房には外国人が働いていたり、客層が昼間とはがらりと変わったりした。いろいろな人たちをみるのがおもしろく、アルバイト仲間人間関係もできていった。学校を中退して落ち込んだ時期もあったが、いろいろな人たちがいることを知って、気持ちが楽になった。当時、親はそこまで求めていなかったが、給料のなかから3万円を食費として実家に入れていた。むしろ親は自分の健康が回復していることに安心していた。

1989年、22歳のとき、つぎにアルバイトをしたレストランはメキシコ料理店だった。そこでも同じウェイトレスとして働いた。大学生たちが就職活動の話をしているのを聞いて、自分もそろそろ「会社に勤めてみたい」「正社員になりたい」と思うようになった。求人情報誌を買って、2社に面接を申し込んだ。

< 初職からの経験 >

1990年、23歳のとき、都内にある貸ビル業の会社に、事務職の正社員として就職した。面接を受けた2社のうち、この会社に受かった。10人に満たないくらいの小規模な会社だった。この会社を希望した理由は、キャリアや経験を求められていなかったから、通勤可能な場所だったから、週休2日だったからである。実家から30～40分で通勤できたが、生まれて初めて通勤ラッシュを経験した。「お父さんたちはすごいなあ」と感じた。午前9時から午後5時までの勤務で、業務内容は一般事務だった。空き部屋が出れば仲介業者に連絡したり、契約書を作成したりする仕事だった。経理の仕事も担当していたが、それまで経験がなかったため、税理士の先生から書類の作成について怒られたこともあった。自分も仕事上でスキルアップをしたいと思っていなかったし、会社にもそれをバックアップするような制度はなかった。たんに働いて給料をもらい、むしろ業務終了後の活動に力を入れていた。手取り月収は20万円程度で、ボーナスもあったため、貯金もできた。このときの貯金のおかげで、仕事がない時期も路頭に迷わずに済んだ。人間関係はよくて、上司もやさしかった。ドラマに登場しそうなのんびりした雰囲気のある会社だった。

会社勤務を始めてからしばらく経って、実家を離れ、一人暮らしを始めた。「自分自身も育っていないので、結婚もしたくないし、子どもも産みたくない」という思いがもともと強かったが、1997年、30歳のとき、その当時付き合っていた男性との間に子どもができたことがわかり入籍した。妊娠7カ月になった頃、7年以上勤めた会社を退職した（退職後は失業手当を受給）。

しかし、夫との暮らしはうまくいかず、妊娠中であったが離婚しようという話になった。

1998年、31歳のときに男の子（第一子・長男）を出産した。産後は実家に戻ったが、母親は体調を崩しているし、自分自身も夫との離婚の話し合いがなかなか進まず、一家は大変な状況にあった。同年、母親が亡くなり、その半年間くらいの記憶はまったくない。母乳育児をしていたのは間違いないのだが、自分がどうやって生まれたばかりの子どもを育てていたのかも記憶がない。

以前の会社の友達とはそれほど親密な付き合いをしていなかったが、会社以外で相談ができる親しい友達がいたことが幸いした。以前に通っていたアロマセラピーの学校の先生に相談したところ、弁護士を紹介するから調停申し立てをしたらどうかと勧められた。母親が亡くなり一人暮らしになった父親のところに行って相談もした。自分の意志

ではなかったが、言われたとおりにやってみることにした。毎回の調停は心身ともにきつかったので、それが終わると、友達とおしゃべりをしてすっきりしていた。「一人で悩むことはないんだ」と安心感を得た。それまでの貯金で子どもと旅行したり、地方にいる友達に会いに行ったりして、開き直って楽しく過ごし、気持ちのバランスを整えてから、調停にのぞんでいた。

1999年、32歳のとき、長男が1歳半になった頃に離婚が成立した。

離婚したら実家に戻ろうとは思っていなかった。一人になった父親と一緒に再び暮らすのは難しいし、父親もそれを望んではいなかった。父親が調停費用を出してくれたが、あとは自立してほしいということであった。生活保護を受けなくて済むようにがんばった。アパート探しも、子どもを連れて不動産屋をまわり、門前払いを食らう場合もあった。たまに理解のある不動産屋に出会うと、「世の中、捨てたもんじゃない」と思った。離婚が成立する前に、都内の別の地域に引っ越した。父親に頼れるときには頼るが、できるところまで自分でやってみようと思った。ある程度、父親との距離があったほうが、よい関係になれてお互いによかった。

離婚成立後の1999年12月に、子どもを公立保育園に入れようと役所窓口に行ったが、すでに混雑状態で入ることができなかった。窓口でも「母子家庭だからといって、今すぐに入ることはいけない」と言われた。それでも、とにかく働かないといけなないと思ひ、2000年1月に無認可の保育園に子どもを預け、求人情報誌から、自転車で通勤できるような近場の就職口を探すことにした。ハローワークで仕事を探すという発想はもともとなかった。かつて貸ビル会社を辞めたとき、雇用保険の失業給付の申請に行ったくらい経験しかない。

仕事を探し始めて2週間が経ち、求人誌で、大手生命保険会社コールセンターのオペレーター募集をみつけた。勤務地が家から近く、ここならば自転車で通勤できると思ひ、2000年、33歳のとき、その募集を出していた派遣会社に登録し、そのコールセンターに派遣された。電話をかける（発信の）部署で、100人くらいの職場だった。電話を受ける（受信の）部署も入れれば、何百人にもなる。その職場にはいろいろな人がいて、ひとり親も多かったし、年齢層も幅広かった。人をみているのがおもしろかった。

午前10時半から午後5時までの勤務で、手取り月収12~13万円だった。労働時間が少ないときは10万円を割りそうなこともあった。生活費には給料に加え、児童扶養手当と元夫からの養育費を充てた。

途中、子どもを公立保育園に入れようと面接を受けに行ったこともあった。問題なく保育料無料で入れたはずだった。午後7時までの延長保育を希望したところ、園長から「午後5時までの勤務時間なら、延長保育でなくてもやっていけるでしょう」とか、「午前10時半からという遅い時間からの仕事ではなくて、もっと子どもとの時間をつくったらどうか」とか言われ、頭にきた。この園長の保育園には絶対に子どもを預けたくないと思ひ、引き続き無認可の保育園に通わせた。

その後、別の地域の都営住宅に引っ越した。家賃は安く助かったが、古い都営住宅だったため、新参者へのいじめがあるようなところだった。この地域でも、長男はずっと無認可保育園に預けていた。そこの保育士たちは非常に

親切で、同じ保育園を利用する母親たちも非常にあたたかく親しくなった。自分が子どもの送り迎えができないときは、代わりにやってくれた。保育園の利用料はかかったが、その母親たちとの親戚のような付き合いが今でも続いている。自分は人間関係に恵まれた。これまでなんでも途中で辞めることが多かったが、子どもが生まれ、初めて責任が出て、そこから人間関係も変わってきたような気がする。

2002年、35歳のとき、その当時付き合っていた男性との間にできた子どもの妊娠がわかった。すごくうれしかった。今度は1人で産もうと思った。妊娠9カ月目にコールセンターのオペレーターの仕事を辞めた。その1カ月後、女の子（第二子・長女）を出産した。その後1年間、無職だったが、都営住宅の家賃が安かったので生活できた。

2003年、36歳のとき、同じ派遣会社に仕事がないかどうか問い合わせたところ、以前に勤めていた生命保険会社のコールセンターで、同じ発信のオペレーターの仕事を募集していたため、すぐに登録型派遣で復帰した。時給1,200円、1日6時間の勤務だった。このとき、都営住宅から同じ地域の民間賃貸アパートへ引っ越した。4歳と1歳の子どもは2人とも公立の保育園に預けた。

ところが、コールセンターで所属していた発信の部署が都内の別地域に移転した。最初は移転先まで通勤していたが、やはり家の近くがよかった。元のコールセンターで受信の部署の募集が出ていたため、派遣会社の面談のたびに希望を出したが、かなわなかった。別の派遣会社で同じ募集をしていたので、2004年、37歳のとき、その派遣会社に移った。就いた仕事はコールセンターのオペレーターでこれまでと同じだが、顧客からのフリーダイヤルの電話を受信する部署であり、発信専門よりも要求されるスキルは高い。最初は時給1,360円だったが、現在は時給1,650円になった。勤務時間も午前9時から午後6時までと、これまでよりも少し長くなった。月1回、土曜日出勤もあり、その振替休日も平日に取れる。契約は半年ごとに更新している。ここでの勤務は現在6年目になる。

< 現在の生活状況 >

この1年くらいの不況の影響は、今のところ自分にはない。ただ業界的には、生命保険の解約が多くなっているという話は聞く。

将来に備えて貯金をしなくてははいけないと思ひ、学資保険にも入った。

都営住宅を探しているが、なかなか当たらない、という状況である。

無認可保育園で知り合った母親たちとは今でも仲良しなので、ずっとこの地域に住みたいと思っている。

今身近なことで困っているのは、学校活動での委員や世話役をやる人手が足りないということである。「母子家庭だから...」と言われたくなくて、自分がその役を引き受けてしまい、がんばりすぎてしまっている面がある。

健康状態については重篤な病気はないが、疲れすぎる場合は無理をせず、有休をとることにしている。

< 本人の不安や要望 >

派遣で働いているため、自分や子どもの体調不良等で休みが続くと、収入が激減してしまい、安定感がない。

働く時間が増えたり、時給が上がったりして、収入が増えたように思えても、すぐに児童扶養手当が減ったり、減免だったものが対象外となってしまうため、働いても豊かになっている実感が持てないし、やる気もわいてこない。

自分の経験からいうと、以前は保育料ゼロ、学童クラブも無料だったが、収入が増えたことによって、費用がかか

るようになってしまった。医療費の自己負担もそうである。

政府に期待したいところはあるが、例えば、子ども手当はどこまで実施されるのか、いつまで続けられるのか、など先がみえない。

また、子どもたちが高校以上になったときに教育の場を与えてあげられるかが不安である。

調査番号：東京40

調査日：11月13日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：25歳 ■現住所：東京都 ■出身地：群馬県 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：レジャー関連産業、ダンスインストラクター、業務請負 ■直近の収入：月8万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 電子部品商社・事務（正社員、1年） マッサージ店・施術（アルバイト・1カ月） マッサージ店・施術+専門学校（4カ月） 専門学校+フィットネスクラブ・ダンスインストラクター（業務請負、9カ月） 現在に至る

< 仕事に就くまで >

1984年、群馬県生まれ。

群馬県で両親と弟、妹の5人家族で暮らした。父親は地方銀行に勤務。11歳の時に両親が離婚。3人の子どもは母親の下で暮らした。母親は東京に本社がある不動産会社の別荘管理部門にパート勤めをして、家計を支えた。経済的には比較的豊かで、週末に別荘にくる指導者のもとで妹とともに5歳からモダンバレエのレッスンを受けてきた。

地元の公立中学に入学すると、中学校1年生でバレエのレッスンを辞めたが、英語への興味が強くなり、海外でのホームステイを経験。成績もだんだん上がって勉強が楽しくなっていた。「あまりに『山』ばかりで、勉強する場所がなくて。このままじゃ終われないな、と思って。それに、女子校に行きたかったので、そうなると私立しかない」と思い、高校は県内中核都市の私立高校の特進クラスに進学。下宿のような食事付きの住まいで一人暮らしをしながら通学した。「学校のレベルが高くて厳しくて大変だったけど、それがすごい刺激になった」。高校でもホームステイを経験するなど充実した高校生活を送った。

高校に加え「駅前留学みたいなのところにも通った」ほど英語が好きで、「英文学とかじゃなくて英語そのものに強い学校がいい」と思い、2003年4月、千葉県の大学に進学。寮生活を始めた。「外国人の先生が多いということで入ったけれど、あまりにレベルが低くて。選択（教科）など取れる単位は全部取ったけど、物足りなかった。あの大学にしたのが失敗でした」。大学ではフラメンコのクラブに入り、プロのフラメンコダンサーの指導を受けレッスンを受けるとともに、ベリーダンスの同好会を立ち上げた。親が「学生は勉強するもの」と言って、アルバイトをさせない考え方だったので、学生時代にはアルバイトの経験はなかった。

< 初職からの経験 >

卒業前の2007年2月に、東京都区内の電子部品商社に正

社員として入社。企業や研究所からの受注を受け、プリント基板のデータを処理して取引業者にプリント基板を作製してもらい、納品する商社のような業務をしていた。「業務内容そのものに興味があったというよりは、貿易の仕事ができるということと、会社のサポートがしっかりしていると思った」のが志望理由。しかし、大卒の新入社員を採用するのは自分が初めてだった。社員5人、パート3人ほどの会社で、十分な研修を受けることもなく、着任した。「研修はあったけど、全部外部に委託で、『知りたいのはもっとコアなところだよ』と思った。分からないのにトラブルの処理も上司が対応してくれるわけでもなくて、4月から一人で全部やらないといけなくて大変でした。社員が少ないからしょうがないところもあるんですけど、もう、出端をくじかれたって感じですね」。

給料は残業代込みで手取り23万円ほどで、ボーナスが年2回出た。具体的な金額については、すぐに使っていたので覚えていない。契約上の労働時間は9時から18時までとされていたが、実際は、退社時刻は22時過ぎが当たり前の状態が続いた。「お客さんからのデータ受付が18時までで、18時に帰れるわけじゃないんです。それから中国や韓国に発注をかけて、チェックしてとかやっていたら（午後）10時や11時になっちゃう」が、残業代は「月5万円以上は出さない」と言われた。「6時までいれば仕事次第で好きなときに帰れる、とか最初は言っていたのに、『社員は仲良くなるよ』とか訳の分からないことを言い出して深夜まで研修をやったり、休日出勤もあって、次第に体調を壊してしまった。「仕事してみて、意味がないなと思っちゃった」のと、母親からの「そんなところなら辞めなさい」との後押しもあり、2008年2月に同社を退職した。その際離職票などは受け取らなかった。ちょうど退職時に足を怪我し、医師に診てもらったら、健康保険証が切れていることに気づいた。母親から退職時の書類を会社から受け取るよう指摘され、「会社に言ったら、後々弁護士みたいな人から送ってきた」。現在は実家の所在地の国民健康保険に加入しており、母親が保険料を払っている。

退職した後、母親から「興味あるんじゃない」と言われ、作業療法士の資格の取得を目指すことにした。「弟が知的障害者で、人の健康に興味があったのと、学校でアロマセラピーの勉強もしていたので、家族にも使えそう」だと思い、決断した。学校見学には親も一緒に行き、2008年4月に都内西部にある夜間の専門学校に入学した。学費は無利子の奨学金を受けている。

インターネット求人サイトで見つけた、都内のエステサロンのマッサージ関係のアルバイトの面接を受け、2008年3月から勤務を始めた。「人の筋肉とか体を触るのが、作業療法士に役立つと思った」のがきっかけだったが、同僚が皆楽しそうで店の雰囲気良かったため、思いの外長く続けることとなった。時給800円に交通費が出て、月収は6万円ほどになった。「給料は少し安いけど、やりがいがあった」と、勤務シフトの自由が利いたためである。2008年秋のリーマンショックによって顧客が減るとともに、利用者の1人当たりの利用時間が減った。「世間が不景気だ不景気だと言い過ぎだ、と皆で話していた」。その後学校への通学の便を考え、千葉県から東京都に引っ越したため、通勤が遠くなり、2009年6月に辞めた。

エステサロンと並行して、2009年2月からは、大手流通業傘下のフィットネスクラブでベリーダンスのインストラクターをしている。「好きなことができるのは学生時代だけだし、チャンスを失ったらできないだろうし、将来的には作業療法士の仕事にも役に立つだろうと考え」、この仕事を始めた。受講者の受講料の4割を受け取る契約で、2店舗合計で月8日指導している。仕事の時間は受け持っている教室の時間だけのため、1日1時間、月8時間である。収入は「ネット上で給料明細が見られるんですけど、一度も見たことない」が、4万円ほどの収入があると思う。1年契約だが、クラブ側からは長くやってもらいたいと言われている。「ベリーダンスの仕事が好きだから辞められない。契約期間もあるし」と、当面は続けるつもりである。

2009年7月には新規のフィットネスクラブの立ち上げに関わり、ヨガのインストラクターを1カ月だけやったこともあった。ヨガのインストラクターになろうとしたが、学校が忙しすぎて辞めてしまった。

< 初職から現在までの経過

(仕事・家族・友人との関係)>

親や友達、これまでの職場の先輩など、相談できる相手は少なくない。離婚した父親とも、「困ったときに、電話で(お金を)『頼む』」程度の関係を保っている。年に1度は必ず帰省し、実家で手伝いをしてお小遣いをもらって帰ってくる。母親は不動産会社のパート勤めから正社員になった後、現在では別荘の管理会社を立ち上げ経営している。2歳下の弟は15歳から県内の障害者施設に入所しており、4歳下の妹は埼玉県の大学に通っている。

ダンサー5人、音楽4人によるグループを主宰している。メンバーは外国人も含まれ、自分同様皆別の仕事を持ちながらも本業に近い形で活動している。イベントでのパフォーマンスの依頼も入ることがあり、フランス大使館で踊ったこともある。音楽も「打ち込み」(音楽キーボードで入力してパソコンで処理)でオリジナル曲を作っている。グループの活動費はメンバーが持ち寄っており、その中から器材の購入や移動費などを捻出している。自分の収入も活

動費に投入しているが、「(グループの)メンバーにダンスを教えていて、(活動費を)結構使っている」。「ダンスを本業にしたいという気持ちはあるけど、今は作業療法士を取れるまでがんばらないといけない」と明確な目標を持っている。

< 現在の暮らしぶり >

奨学金の無利子貸与を受けてはいるが、ダンスのインストラクターの収入では生活はできないため、家賃分約4万円を母親に頼っている。それでも収入が少ないため、母親や、たまには父親に仕送りを求めることもある。収入が少ないため「いろんな人に会いたいけど、会えないのがつらい。お金がないと落ち込みます。友達は正社員でお金あるのに」などと考えてしまう。奨学金、仕送り、賃金を合計した総収入がいくらなのか、あまり気にしたことがないが、「最近、全然お金がなくなってしまって、困っています」。収入を増やすためにマッサージ系の仕事を掛け持ちでやろうと考えており、面接の申し込みをしている。しかし、学校に通うことと、多くの収入を得ることが両立できないのが悩み。「勉強に支障が出ないようにしなければならない。だからといって、コンビニでは働きたくない。意味がないと思うから。生意気な考えだと思うんですけど」。

< 仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見 >

初職を退職した後、次の就職が決まるまでの間にハローワークに一度行ってみた。しかし、参考にならないアドバイスをされたりして役に立たなかったという印象だけが残っている。

学校と仕事を両立させるため、短時間の仕事しかできず、仕事の選択の幅が少なくと同時に、自立して生活するのに十分な収入を得ることも難しい。「働いても働いても、というより、働いていないんですよ。今は、働くチャンスがないんですよ、時間の制約があって」。

行政に対しては、これまでの自分の経験から、就職後の従業員に対する教育を含めた教育訓練の充実に期待している。また、学校教育の費用についても、「奨学金を返済しなければならないのは日本ぐらいじゃないですか」。

今までの職場にはいずれも労働組合はなかったため、縁遠い存在である。「労働組合というのは知っていたけれど、(自分とは)無関係のものと思っていました。労働組合って、何するところですか」。

「貧しいのは本人の責任か、社会の問題か」と聞かれれば、「学校に通いながらベリーダンスのインストラクターを始めたために、1年間の契約期間は辞められず、仕事の選択肢を狭めているわけだし、そもそも最初の仕事(プリント基板の会社)を選んだのも自分ですから」、本人に責任があると思う。

< 将来の展望 >

専門学校は夜間コースのため修了に4年かかる。3年生からは実習が始まり、4年生の間は丸々1年間実地研修を行うことになるため、3年生からどのように収入を確保して生活していくかがとても心配。「国家試験が難しくなっていると聞くと、覚えることが多いし、(学校が)医療系

だから勉強が難しく...。実習が始まったら暮らせるかな。

まずは資格取得が目標で、現時点では結婚など考えも及ばない。

調査番号：東京41

調査日：11月23日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：34歳 ■現住所：東京都 ■出身地：京都府 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：保険業、事務職、登録型派遣 ■直近の収入：月15～20万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども1人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校卒業 パソコンスクール（6カ月） 通信会社・事務（常用型派遣、4年） 結婚・出産・育児（短期のアルバイトを経験） 保険会社・事務（登録型派遣、3年） 電子機器製造会社・事務（登録型派遣、6カ月） 銀行・事務（登録型派遣、8カ月） 銀行・事務（登録型派遣、7カ月） 保険会社・事務（登録型派遣、4カ月） 保険会社・事務（登録型派遣、5カ月） 現在に至る

< 仕事に就くまで >

1975年、京都府生まれ。

中学生の頃から東京に在住。

高校は商業系の科目も学べる普通科に進学し、在学中に簿記検定の資格を取得した。

英語が好きだったので将来は留学したいと考えていたが、留学費用がかかるのでそのことを両親に言わず、進路を決定するぎりぎりの時期に留学したいという希望を両親に伝えた。しかし、当時アメリカでは学校での銃の乱射事件が起きていたことを理由に両親から反対された。それまでは高校卒業後に留学することを考えており、大学受験の準備をしていなかったため、大学進学をあきらめ、英語の専門学校に進学した。専門学校はネイティブスピーカーの教員が多く、説明から授業中まですべてが英語という環境で学んだ。

1995年（19歳）専門学校を卒業した。就職活動を行ったが正社員の仕事が見つからず、卒業して半年間はパソコンスクールに通いながら仕事を探していた。そのパソコンスクールでは「どうせ勉強するなら特殊な技能を身に付けた方がいいかと思って」、画像処理の勉強をした。

< 初職からの経験 >

初めての仕事

1996年（20歳）頃、新聞広告の求人欄で見つけた常用型派遣の募集に応募し、採用された。この派遣会社は大手通信会社の出身者が運営している法人で、採用後は大手通信会社に派遣された。勤務時間は9時から17時で、月給は20万円であった。さらに半年ごとに10万円の賞与が支給され、休暇を取らなかった場合は皆勤手当としてさらに1万円が支給された。仕事内容は窓口で金銭の出し入れ作業をし、出納帳を作成していた。勤務地は都区内で外国人客が多い地域だったため、専門学校で身に付けた英語力を生かすことができた。

結婚退職し、長野へ

1999年（23歳）結婚のためにそれまで勤めていた常用型

派遣社員の仕事を辞め、24歳で出産した。夫は東京で建築家を目指して建築事務所で働いていたが、建築家としての知識も経験もなかったため、3カ月の試用期間中に解雇されてしまった。その後、工務店で営業の仕事をやっていたが、建築家になるという希望を捨てきれず悩んでいたときに、自営で工務店を営んでいる夫の両親から、家に戻って一緒に仕事をしてはどうかと話をもちかけられた。夫も子どもが生まれ、安定した仕事に就きたいと思っていたため、夫の実家がある長野県に引っ越した。

しかし、夫は、いざ働いてみると、田舎なので仕事があつたりなかつたりで、決して安定しているわけではなかった。給与は月給制のような形ではなく、金額が決まっていなかったため、当初約20万円だったのが、経営状況が悪化したため16万円程度まで低下し、最終的には16万円を割ることもあった。

買い物に行くにも車が必要だったためガソリン代がかさんだ。さらに親の家が狭かったので同居はせず近くのアパートに住んでいたため、家賃も家計の負担になった。それゆえ「生活はとても苦しかった」。親の生活も厳しかったため、経済的援助は全くなかった。そのため、子どもが小さかったが、自分も働かなければならなくなり、確定申告の時期（1月から3月末まで）は、税務署でアルバイトをしたこともあった。

この時期に、「ちゃんとした仕事に就くには資格が必要だ」と思って公共職業訓練校に半年間通い、ワードとエクセルの資格（日本語文書能力検定とビジネスコンピューティング検定）を取得した。半年間で教材費として3万円かかった。

2002年（27歳）に夫が他界した。その後の半年は長野に残っていたが、仕事があまりなく、当時のパートの時給は650円であったため、週5日フルタイムで働いても「子どもを育てるのは本当に大変」だった。そこで、「東京に行けば仕事がある」と思い、自分の実家がある東京に戻ることにした。

東京に戻ってからの生活

夫は生命保険に加入しておらず、貯金もあまりなかったため、亡くなった後の生活は苦しかった。家財道具が実家

には狭くて入らなかったため、敷金礼金と最初の1カ月分の家賃は親に借り、実家の近くにアパートを借りて生活することにした。子どものために毎月積み立てていた貯金があったが、これを引っ越し代金に充てたため、所持金はほとんどなくなってしまった。次の仕事を探して給料を貰うまでの間、「所持金は10万円に満たない額でしたが、敷金礼金と1カ月分の家賃を前払いしたほかは、1カ月経たないと電気代、水道料金の請求が来なかったのどうにか食べていけたという感じの」ぎりぎりの「綱渡り」状態で生活していた。

保険会社への派遣

求職するために、まず派遣会社に登録した。登録は、ネットで申し込みをした後に直接派遣会社に行き、面談したうえで完了した。仕事を探し始めた2004年頃(29歳)は求人がたくさんあり、「派遣会社に登録すると、いろいろな企業からその日のうちに電話がかかってくる」状況だった。そこで、自宅から自転車で通える範囲内で、保育園まで子どもを迎えに行けるように、17時で帰れる仕事を探したところ、2004年(29歳) 保険会社への派遣が決まった。登録していたのは、この保険会社の派遣子会社であった。

勤務地は当時住んでいた東京都市部、時給は1,300円、労働時間は9時から17時、勤務日数は週5日であった。配属されたのは保険の新規申し込み登録を担当する部署で、主な業務内容は郵送されてきた新規の申込書を開封し、内容をチェックしながら、必要ならば本人に電話で確認したうえでデータを入力し、申込書をファイリングするという作業であった。1日の平均作業量は30件くらいだった。

1時間につき5分の休憩時間があり、「目が疲れたりしたら、ちょっとした休憩室があったのでそこで休むことが許されて」いた。作業を行うのはほとんどが派遣社員で、作業を教えてくれる(正)社員が1人いた。派遣社員はみな同じ日から勤務し始めたため、最初は全員がわからない状態で、「協力し合ってみなで少しずつやっっていこう」という雰囲気があった。ノルマもなく仕事が「できる人はどンドンやっっていって、わからない人は聞きながらやっていた」が、仕事が遅いことを責められるようなことはなかった。

派遣社員はほとんどが女性で、年代は20歳代後半から30歳代が多かった。歳も近く、子どもがいる人もいたので、誰かの子どもの具合が悪い日は、他の派遣社員と「協力し合い、休みを取りやすい環境だった」。

派遣社員として働いている間は、派遣社員専用の健康保険に加入していたが、派遣先企業を移る際の中断期間は、離職後二カ月までしか加入できず、その後は市役所に行って国民健康保険の手続きを取らなくてはならない。「仕事が替わるたびに健康保険と年金の手続きをしなくてはいけないので大変」である。また、派遣先の有給休暇は、派遣会社が変わると消滅してしまう。

電子部品製造会社への派遣

当時の勤務地は自宅から近かったが、市内の保育園が満員だったため、自宅からやや距離がある別の市の保育園を利用していた。そのため、仕事帰りに保育園に寄ると遅くなってしまふので、保育園の近くの職場に移ろうと仕事を探していたところ、ちょうど保険会社の派遣契約満了の時期に、保育園から近い距離に勤務地がある電子部品製造会

社への派遣を紹介された。そこで、保険会社での契約を更新せず、2007年3月(32歳)から新しい派遣先で働くことにした。

新しい職場の仕事は、設計士が書いたICチップの図面をスキャナーで読み込みパソコンに保存していく作業、図面の管理と出し入れの帳簿を付ける作業、そして社内のホームページの更新作業など、技術的な仕事と庶務的な仕事があった。ここでの作業には、専門学校卒業後に通っていたパソコンスクールの技術が役に立った。ところが、その後、自宅がある市内の保育園に空きが出たので、そちらに移るため、電子部品製造会社への派遣の仕事は6カ月で辞めることにした。

2007年9月(32歳)からは銀行の資金部に派遣された。東京に引っ越してきたときに5~6社の派遣会社に登録しており、そこに仕事を探していると電話を入れたら連絡が来た。この頃はまだ「いろいろな会社で頻繁に募集があった」。職場は自宅から10分もかからない場所にあり、保育園も自転車で行ける範囲にあった。

配属部署は外国為替の資金部で、業務内容は外国の銀行からファックスやメールで送られてくる注文書を当日のレートで換算し、電文を作って銀行に返信する作業、ブローカーから送られてくるファックスをチェックしてフロントに転送する作業などであった。書類はすべて英語だったので、専門学校で学んだことを「思い出しながら」仕事をしていた。時給は1,600円で、勤務時間は9時から17時であった。この時は月27万円になることもあり、「すごく貯金もできた」。しかし、就業していた部署が遠くへ移転したため自宅から通えなくなり、退職した。ここに勤めたのは、8カ月である。

2008年3月、両親が住んでいたアパートの近くに引っ越した。自分の仕事が大変で、残業で遅くなったり、急に子どもの体調が悪くなったりしたときのために、親の近所に引っ越すことにした。しかし、両親の夫婦仲が良くないので「子どもの教育に良くない」と懸念して、両親とは同居していない。それでも、子どものことを考えると、両親の近くに住んでいると安心できる。

2008年5月(33歳)からは、別の銀行で派遣社員として勤め始めた。時給は1,550円で交通費は支給されなかった。勤務時間は8時45分から17時45分だった。勤務先の最寄り駅までは、自宅最寄り駅から急行に乗り、途中で各駅の電車に乗り換え、駅に着いてからも10分ほど歩く場所だったので、通勤時間が1時間半以上かかった。さらに終わる時間が遅かったため、帰宅するのが19時から20時になってしまった。その頃は「子どもが小さかったので、1人で待たせているのが怖かった」ため、08年11月末、3カ月契約の2回目の更新時に、契約を更新せずに辞めることにした。

2008年12月(33歳)から、登録していた別の派遣会社から連絡があり、保険会社で働くことになった。労働条件は、時給が1,500円、勤務時間は9時から17時、勤務日数は週5日であった。勤務地はそれまでよりは自宅に近い駅で、交通費の支給はなかった。業務内容は、送られてきた生命保険の新規の申込書の記名ミスがないかをチェックする作業であった。記名ミスがあった場合は不備とし、その不備の訂正を入力していく作業、本人に確認が必要な場合には電話をして確認・訂正をする作業だった。ノルマはなく、「体調が悪いときや仕事量が多く大変なときは他の派遣会社の社員でも手伝ってくれた」。「みんなで協力してやろう」と

という雰囲気があったため、入力件数が1日80~90件と仕事量は多かったが、なんとかやっていけた。その保険会社へは、繁忙期だけ短期で人を補充するために派遣されたので、2009年3月(33歳)に期間満了となり、仕事を失った。

求職活動

この頃になると、以前と異なり、仕事を探しても条件の合う仕事が見つからなくなっていた。そこで、次の仕事が見つかるまでは、それまで少しずつ貯めてきた貯金を切り崩して生活した。支出面では、特に食費を切り詰めた。「子どもの分はなるべく減らさずに、自分は食べたいと思ったものでも我慢して最低限度の食事」で済ませるようにした。銀歯が取れてしまったときは、すぐに歯医者に行き詰めてもらった方が良かったが、「今月はもう無理だから歯医者に行けないな」と思って3カ月ほど放置したこともある。仕事をしているときは月に1回は友人と会って食事をしてしたが、「友人と会うとお金がかかるので、話したいことがあってもメールや電話で済ませた」。

その頃父親が階段から落ちて怪我をしたり、母親が腰を悪くしたりと、両親ともに体調がよくなかったため、「心配を掛けたくないの、貯金でなんとかやっているから大丈夫だよ」と言っていた。そのため両親からの金銭的援助はなく、「お金をどこから借りようか」と考えたほどであった。

以前、ハローワークを利用したことがあるが、正社員の仕事であっても聞いたことのない、「大丈夫かな」という会社であったし、勤務地が都心の仕事ならあっても、郊外の自宅から通える仕事はあまり見つからなかった。また、パートの求人は時給が安いものばかりだった。そういうなかで少しでも条件の合う仕事を探そうとすると、派遣会社を通じて探すことになってしまった。

現在の仕事について

2009年6月(34歳)以前働いていた保険会社の派遣子会社からメールで求人案内が届き、「同じようなチェック作業ということだったので」、その仕事を受けることにした(勤務開始は7月から)。勤務先の部署は以前とは異なり、今回は自動車関連の損害保険の担当部署であった。時給は1,450円で、交通費は支給されない。勤務時間は1日7時間、週5日である。契約期間は3カ月で、これをくり返し更新する。ただし、3年を超えて更新されることはない。

業務内容は新規加入申込書の登録で、名前や車種といった定型データを端末で入力する作業である。同じ課の従業員は20人で、うち10人が正社員、2人が派遣社員、残り8人がパート社員(職場では定時社員と呼ばれている)である。もう一人の派遣社員は別の派遣会社から派遣されて来ている。

勤務時間の管理は、自分で入社時刻、退社時刻をタイムシートに記録し、毎日課長に持っていくという形で行われている。働き始めた頃は業務量が多いときに残業することもあったが、残業時間は5分単位で計算されることになっていた。しかし、最近は正社員も含めてなるべく残業をしないようにするという方針となり、残業を付けづらい雰囲気ができてしまった。「本当は定時を30分も過ぎているのに、正社員は残業をタイムシートに記録しないので、派遣社員も残業時間を付けたタイムシートを出しづらくなっている」。

残業をしないという方針になったとはいえ、仕事量が減っているわけではない。そこで、作業密度を高めるために、ひとりずつノルマが課されるようになった。自分より3カ月前に勤務し始めた派遣社員は、「ノルマが課されるようになってから精神的に追い詰められて、すぐに辞めてしまった。定時社員(パート社員)のなかにも、精神的にきつくて体調を崩して辞めた人がいる。人が辞めても新しく人を採用しないので、その分仕事が増えていく。正社員もピリピリしていて、作業を間違えたりすると時間がかかってしまうので、ちょっとでもミスがあると見世物のようにフロア全体に「さんはこんなミスをしました」といってミスを公開される。そのため「みんなミスをしないようにピクピクしながら仕事をしており、精神的に追い詰められていく」ような環境になった。ノルマを達成できないと係長から呼び出され、一対一で指導される。正社員やベテランの定時社員がこなす仕事量は1日約40件である。派遣社員のノルマは30件から始まり、徐々に増えていく。自分も来月(勤務開始から半年)には40件と言われている。ノルマが増えても時給は変わらない。

今の職場は、社員同士のコミュニケーションがほとんどない。「上司との間では、いろいろ指示を出されるので会話がありますが、正社員や定時社員、派遣社員との間の横の交流が全くなくて、誰がどういう条件で雇われているか、どこの会社から派遣されているのかも全くわかりません。昼食もみな1人ずつ別々に食べています」。それゆえ、朝、上司から振り分けられた仕事を1人で黙々とこなして、少しわからないことがあっても相談することすらできない雰囲気がある。「予定があって早く帰らなければいけない人がいるときは、本当は手伝ってあげたいという気持ちがあるのですが、手伝ってはいけない雰囲気があるので、そうすることができません」。以前の職場のように、体調が悪い人や早く帰らなくてはならない人がいるときは手伝ってあげるなど、もっと協力的にした方がいいのではないかと考えているが、それを相談するような集まりもない。

派遣会社の社員は、初めて派遣先に行ったときに一度だけ来て面接を行っただけで、後は何もしていない。そのため、派遣会社に仕事の話について相談できる機会は全くない。派遣会社の担当者はあまり経験がないらしく、今の職場に派遣社員が少ないということもあって、現場の状況を把握していないようだ。

職場での派遣社員の立場

現在の職場では、正社員と同じ仕事を派遣社員が手伝っているのではなく、単調な作業、クレームが多く対応が面倒な顧客への電話対応、苦情処理など、正社員がやりたくない仕事を派遣社員にやらせていると感じる。「嫌な仕事を派遣に任せて辞めたとしても、今は不景気だから募集すればいくらでも代わりがくるから、また別の派遣を雇えばいいとでも思っているのではないか」と感じている。しかも、顧客からの苦情処理で何か問題があったときには、以前なら正社員が責任を持って対応していたが、最近は「自分で解決しろ」と言って派遣社員に責任を負わせ、正社員が責任を取らない傾向がある。

他方、派遣社員の側は、厳しいノルマを課せられて精神的にきつくて、辞めたら次に仕事が見つからないので、働き方を改善してほしいという要望ができない。以前は、派遣会社の担当者に相談すれば対応してくれたが、現在は

相談しても「不景気で次の仕事が紹介できないし、会社としても辞められたら困るから、どうにか上手くやってくれ」と言われるだけで、特に対応をしてくれない。

今の派遣先企業に対しては、直属の上司と話したり、相談したりする機会を何カ月かに一度は作ってほしいと考えている。上司のなかには、定時社員や派遣社員と全く関わろうとしない人もいるが、上司と話す機会が増えれば、仕事がやりやすくなると思う。以前の派遣先の銀行では、派遣社員が聞いてもわからないような内容の会議でも、派遣社員もパート社員も参加するよう指示されていた。話を聞いているうちに、会社全体の仕事の流れが理解できるようになり、他部署の社員の顔や仕事の内容がわかってきて、仕事の能率も上がっていった。また、派遣社員やパート社員からも働きやすくなるための提案を聞いてくれて、雇用形態の差を超えて交流があった。しかし、派遣先の職場を移るたびに、こうした交流がなくなって来ているように感じている。

< 派遣会社に対する要望 >

最近では、独立系の派遣会社と契約をせず、派遣子会社から人材を確保する企業が増えていると聞く。以前、独立系の派遣会社にいたときは、不満や要望を聞いてくれたし、派遣先にも伝えてくれていた。しかし、子会社からの派遣だと、「上の方でつながっている」ので、相談しても「わかりました、伝えておきます」とはいうものの、ちゃんと伝わっているようには思えない。確かに、派遣子会社からの派遣には、良い面もある。派遣会社の社員が派遣先の仕事内容や人間関係までよく知っているの、派遣先のことについて詳しく教えてくれることがあるからだ。しかし、

派遣会社の社員にとって、派遣先企業の管理職は元をたどれば上司にあたるわけで、意見を言えないという悪い面もある。子会社からの派遣が増えているので、何を言っても伝わらない状況が広がっているのではないかと。

派遣会社によって、「派遣契約が切れたらハイさようならって感じで終わってしまうところもあれば、契約終了1カ月くらい前から他の仕事を探してくれていて、『こういう仕事ありますけど次どうですか?』とってくれるところもある」。できれば面倒見の良い派遣会社を利用したいが、派遣会社の善し悪しは利用してみないとわからない。それゆえ、「とにかくたくさん派遣登録をして、すぐ紹介してくれる仕事に飛びつく」のが実態である。したがって、「派遣会社の情報が比べられるようなサイトがあると良い」と考えている。

< 今後の働き方について >

子どもがいると残業ができないから、残業のない仕事を選んでいるが、今の仕事は残業しないようにしていても仕事量が多いから精神的に辛い。休みも取りづらい環境なので、精神的に余裕がない。リフレッシュする時間もないから子どもに悪影響を及ぼすのではないかと心配している。もう少しゆとりのある仕事に就くことができれば、自分もリラックスできるし、ゆとりをもって子育てもできると思う。

将来的には、安定しているし、ボーナスもあるから、正社員として働きたいと思っている。ただし、いきなり正社員は難しいと思うので、最初は試用期間で良いから、一定期間働いた後は、派遣とかパートとかを分けて、短期契約の繰り返しというような働き方ではなく、安定した雇用を保障して欲しいと思う。

調査番号：東京42

調査日：11月11日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：34歳 ■ 現住所：神奈川県 ■ 出身地：埼玉県 ■ 学歴：専門学校中退
- 就労の有無：求職中 ■ 直前職：製造業、生産職、契約社員
- 直近の収入：勤労収入なし / 就職安定資金融資 ■ 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身
- 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校中退 情報処理代行会社・現業（アルバイト3年、専門学校在学中より継続） パチンコ店・店員（正社員、6カ月） 警備会社・警備（アルバイト、4年） 新聞販売会社・新聞配達（アルバイト、半年） 警備会社・警備（アルバイト、短期間） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、7～8カ月） 日雇い派遣（6カ月） 建設業・建設土木作業員（日雇い、1カ月） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、2カ月） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、1年半） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、2カ月） 自動車部品メーカー・検査（登録型派遣のちに準社員、計4年） 失業給付受給（6カ月） 現在、労働金庫就職安定資金融資 / 求職中

< 仕事に就くまで >

1975年、埼玉県生まれ。

家族は両親と兄2人、妹1人の6人家族。28歳まで生まれた家で家族と同居していた。父親は自営業で、母親は

パートに出ていた。

高校は県立高校の情報処理科に進学し、主に商業関係の情報処理技術及び言語（コボルなど）を学んだ。

1993年（18歳）高校卒業後、情報処理の専門学校（2年コース）に進学した。専門学校のコースは、プログラミン

グを中心とした情報処理技術を学ぶコースで、特に高校で学んだプログラム言語のコボルを学習する内容だった。

家の経済的事情のため、親から学費の援助はなく、授業料を自分で働いて支払わなければならなかった。そのため、卒業高校の友人から紹介してもらったアルバイトを始めた。従業員100人のうち約6割がアルバイトという会社で、ゲーム及び業務用パソコンソフトをフロッピーディスク（5インチ、3.5インチ）にコピー製造（親のディスクを読み取って、フロッピーディスクにコピー）する仕事を請け負っている会社だった。こうした作業は、当時すべて手作業の時代だった。朝6時から夜10時までという就業時間の範囲内で（交替制）自分は学校終了後の夕方6時から夜10時までの勤務に就いた。学校は都心にあったが、アルバイト先は遠く、授業の後、アルバイト先に着くのは6時ギリギリだった。それでも月10万円ぐらいの収入になった。

1994年（19歳）1年経ったころから学校とアルバイトの二重生活を続けるのがきつくなってきた。そのため、不登校になってしまい、結果として1年半で退学せざるをえなくなった。

退学後も同じアルバイトを続けた。勤務時間を「18：00～22：00」から昼間（9：00～18：00）に変更してもらった。勤務を昼間にかえてもらったおかげで、18万円ぐらいの収入になった。勤務時間変更後、約3年働き、専門学校時代と合わせて計4年勤めた。その会社を退職した時には、すでに22歳（1997年）になっていた。アルバイト代は主に遊ぶために使ってしまう、家に生活費を入れなかったにもかかわらず、貯金できなかった。

< 初職からの経験 >

1997年、22歳の時パチンコ屋の求人広告を見つけ、正社員として就職した。正社員の職に就いたのは、収入を増やしたかったからで、税込み月24万円の給与だった。雇用形態は正社員だったが、雇用保険、健康保険に入っていなかったため、手取りで約22万円になった。結局、この仕事は、上司とけんかして約6カ月で辞めてしまった。退職時には、次の仕事のあてはなく、また、「やってみよう」「やってみよう」と思う仕事もなかった。

同年、パチンコ屋を辞めた後、ハローワークや求人広告で仕事を探した。アルバイトだったが警備員の仕事を求人広告で見つけた。路上の交通整理がメインの会社で、日給は9,000円ぐらいだった。週6日間フルに働いて税込み月額20万円程度になった。ここから所得税がひかれたが、社会保険には未加入で保険料を払うことはなかった。

2001年（26歳）約4年勤務した後に退職した。交通関係の警備の仕事は雨が降ると収入が減ってしまうからで、それは給与が月給制ではなく日給制だったためである。そのため、希望していた日数を働くことができず、親元から通勤していたものの、期待した収入を安定的に確保することができなかった。

同年、住み込みで新聞配達を始めたが、半年後、また元の警備員の仕事に戻った。復職したのは、「手取り早く仕事をして収入を上げたかった」からである。なお、警備の仕事は資格はいらないが、入職後、30時間の研修を受ける必要があった。半年休んで復帰した際にも、同じ研修を受けることになった。

復職したものの、結局、警備の仕事で退職することにし

た。やはり警備の仕事は天候で仕事の有無が決まり、それに従って収入額が左右されるからである。収入額すら予想できない不安定な仕事よりも、安定した収入を得られる仕事があったからである。親からも「雨が降ると仕事がないのか」などと言われたこともあった。

同年、26歳のころから派遣の仕事に入った。製造業派遣・請負会社に登録し、埼玉県にある自動車メーカーの工場に派遣された。当初、日本最大手の自動車メーカーの工場の求人が出ており、そこで働きたいと思ったが、派遣会社の人から工場の仕事が未経験という理由で埼玉県の工場で働くことを勧められた。

工場ではトラックの後輪の車軸にスプリングをつける作業に従事した。肉体的にそれなりに疲れる仕事だった。

工場には実家から通った。寮に入ることもできたが、入らなかった。派遣会社の人からサジェスチョンで、家と工場が近いため、寮に入って払う寮費よりも定期代のほうが安かったからである。しかしこの仕事も職場の上司と対立してしまい、約7～8カ月働いた後に退職することになった。

上司との対立は、自分の勘違いかもしれない、上司との気持ちの行き違いだったかもしれない。働いていたある時、ラインのスピードが速くなった。そのため作業内容そのものは変わらなかったが、それまで1人でやっていた作業を2人でやるようになった。その時一緒に作業していた相手が楽をしているように感じてしまい、その人を試そうとしてしまった。それを彼はいじめられていると思って、結局、彼は仕事を辞めてしまった。そのため上司からは、「彼が辞めたのはおまえのせいだ」と言われるようになってしまった。結局、職場にいづらくなり、派遣会社の担当者からもう少し続けるように引き止められたが、結局退職することにした。

2002年（27歳）自動車メーカーの仕事を辞めると同時に、登録していた派遣会社の登録も辞めて、別の日雇い派遣会社に登録した。日雇いのため仕事内容は多種多様で、簡単な仕分け作業からコピー機の入替えまで色々な仕事があった。また、毎日作業内容が変わるため、給与は仕事内容や作業場所によって変動し、高い時は1日7,000円程度だった。しかし、この派遣会社では1週間に3～4日しか仕事はなかった。「もうこれ以上仕事はないのか」と派遣会社の人に聞いたが、仕事はまわってこなかった。そのため日雇い派遣の仕事を半年ぐらい続けたものの、辞めることになった。

また、日雇い派遣の途中で実家を離れ、夜はネットカフェで生活するようになっていた。こうした実家にいつでも帰れるネットカフェ生活を、自分では「ネオ・ホームレス生活」と考えていた。

収入の不安定な日雇い派遣を辞めた後、1カ月間、建設現場で建設・土木作業の仕事をした。「次の仕事が見つかるまで」と思っていたので短期で切り上げた。

2003年、28歳頃になった時、製造業派遣・請負会社に改めて派遣登録した。派遣された工場は、自動車メーカーの神奈川県にある工場、部品の梱包作業を2カ月おこなった。その後、同じ自動車メーカーの栃木県にある工場に異動した。仕事内容は機械で削られたギアを仕上げる仕事だった。この工場では約1年半働いた。その後、再び、最初の工場に戻り、生産の仕事を2カ月した。

2005年、30歳になった時、今度は神奈川県にある自動車部品メーカーに派遣され、車のシートの検品や細かい部品

の検査の仕事に従事した。この仕事を約3年続けた。

2008年(33歳)9月末に派遣先企業の準社員になるか、他の現場にうつるか、選択をしなければならなくなった。そこで10月から派遣先企業の準社員になることにした。

時給単価は少しだけ上がったが、月給制ではないため、仕事のなかった月は収入が落ちる点ではこれまでと変わらなかった。残業などがあり多い時で税込み月26万円程度、少ない時は13万円程度まで下がる時があった。給料は働いた分だけ支払われる給与制度だったので、年末などの大型連休があると、そのまま収入が減ってしまった。

2009年(34歳)1月、準社員になって4カ月目、契約期間があと2カ月残っていたが、会社の業績が悪くなり、部品メーカーの人から、「ワークシェアリングしても今働いている人たを雇用することはできない」と言われた。そしてそのまま同月に解雇された。退職する最後の1年は、中国で機械溶接した部品をチェックして再溶接する仕事に従事していた。

<現在の生活状況>

部品メーカーに勤務していた時は、会社の借り上げアパートに住んでいたが、解雇されたため、ハローワークの紹介で、勤務先があった地域の公営住宅に緊急入居した。2月から約半年間入居した。家賃は数千円程度だったので、雇用保険の失業給付で生活できた。その間、失業給付をもらいながら求職活動をしたが、仕事はみつからなかった。

派遣会社で登録派遣に従事していた時、雇用保険に入っていたので、雇用保険の失業給付は公営住宅入居中に月14万円ぐらい支給された(失業給付の給付期限は10月までであった)。公営住宅の入居期限は6月だったが、探しても仕事を見つけれなかったため、公営住宅の団地自治会の人たちの支援を受けて、居住期間を延ばしてもらうように県と交渉をした。同じ公営住宅に居住する人のなかで、労働組合の関係者を知っている人がいた。彼も派遣先企業を解雇されていた。その人の提案で労働組合とコンタクトをとった。このため6月からの居住期間延長について、労働組合が県と交渉をして、8月まで居住することが可能となった。

現在、その労働組合の組合員になっているが、入会金は支払ったものの、その後組合費を払っていない。なお、公営住宅の問題で県との交渉のついでに、労働組合のデモに参加したことがある。2009年10月末の都内での集会にも参加した。

9月の初旬、緊急雇用対策として、担保なしで労働金庫(労金)からお金を借りることができる制度を利用してアパートを借りた。労金から借りた額はアパートを借りる初期費用の15万円程度であった。家賃は37,000円(6畳一間+キッチン)で、来年の3月から労金への返済を開始しなければならない。9月末からすでに利息のみの返済がはじまっている。

テレビ、洗濯機、掃除機などの家電製品を今のアパートに住む際に購入した。日常生活では、お金はかかるが外食することが多い。1日2食にしているが、食費が一番の負担である。ふだんはテレビでニュースを見たり、インターネットをしている。

現在、両親との関係はたまに電話をする程度である。今のアパートを借りる際、保証人になってもらうために実家

の両親を訪ねた。実家に戻って一緒に暮らすことは考えていない。それは親も十分な収入があるわけではないからである。このまま無職で帰るのはムシが良すぎると思う。また親に迷惑をかけてしまう。アパートの保証人になってもらった際、「家賃が払えなかったら戻って来い」と言われたが、そうするわけにもいかないと思っている。自分の心配はしなくていいから、両親には自分たちのことを考えてほしいと思う。また、兄妹との付き合いはなくなっており、4年ぐらい連絡をとっていない。

今まで結婚しようと思ったことはない。今もそういう気分にはならない。それは「安定した収入のない」のが最大の理由だ。

ふだん相談できる人は、加入している労働組合に関係する人たちだ。ネットで知り合った友人など遊び仲間になる人はいるが、金銭的などところまで相談することはない。また、高校時代や専門学校のころの友人とはもう連絡はとっていない。

<本人の望みや不安>

今後の希望としては、パソコン関係の販売の仕事をやってみたいと思っている。しかし、色々探してもそういう求人を見つけることはできない。ネットの就職情報もたまにみるが、求人誌と比べ仕事の実態を脚色して宣伝しているイメージがあり、実際にはアクセスしてみたことはない。

今は将来をイメージする段階ではなく、目の前のことでいっぱいである。働くことができれば、正社員でも非正社員でもどちらでもいいと思っている。経験のある警備の仕事の面接を一度受けたが、何故か不採用になってしまった。

生活できる収入を確保したいと思う。現在、収入はないが、生活保護も受けていない。居住延長を相談した労働組合だけでなく、他の組合にもコンタクトをとって、今後のことについて相談を始めた。その組合は、訪問したハローワークでチラシを配っていて知り合った。今は主に生活費について相談している。その組合からは、自分のケースに合わせて、後日アドバイスすると言われたが、今の生活費は先月末に支給された最後の失業給付でまかなっている。預貯金はなく、来月からの見通しはまったくない。今後、生活保護を受ける可能性があると思っている。

自分の経験から、派遣や準社員で就労して解雇された場合、住み込みでいた寮やアパートを出なければならなくなる。次の住居を探し出すことは、失業状態であることを考えると、アパート居住の初期一時金の負担だけでなく、きわめて困難になる。こうしたことは派遣会社の責任で最低限、住むところを確保してほしい。派遣切りに注目が集まって行政が動いたおかげで、公営住宅に住むことができたが、ずっとこうして解決できるとは思わない。また、日払いの仕事の場合、ある程度、生活できる賃金を保障してほしい。

自分のことを考えると世の中の雇用状況が改善したというイメージはない。公営住宅と一緒に住んだ仲間のなかで、自分で仕事を探して就職した人もいるが、生活保護をもらって公営住宅を出た人もいた。

行政は介護・福祉分野で仕事を探すことを勧めるが、実際には、雇用する側は有資格者を希望している。生活費を稼ぐ仕事をしながらヘルパー資格がとれる施策、または、

生活を保障しながら職業訓練が受けられる施策がないと実際はムリだ。また、介護職についてはその待遇改善をしないと誰もやらないと思う。

派遣法の改正については、製造業派遣を認めても良いと

思うが、解雇する場合は、派遣元企業、派遣先企業の双方とも、解雇後、労働者が自立できるように責任を持つべきだと思う。

調査番号：東京43

調査日：11月13日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：29歳 ■ 現住所：神奈川県 ■ 出身地：東京都 ■ 学歴：高校卒業
- 就労の有無：求職中 ■ 直前職：製造業、生産職、登録型派遣
- 直近の収入：勤労収入なし / 生活保護受給（月127,000円） ■ 家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■ 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 ファミレス、コンビニ、ビデオ店などをかけもち（アルバイト、計8年） 自動車メーカー・検査（登録型派遣、2年） 自動車メーカー・運搬（登録型派遣、半年） 警備会社・警備（アルバイト、数日） 電機部品メーカー・検査（登録型派遣、2カ月） 現在、生活保護受給中 / 求職中

< 仕事に就くまで >

1980年、東京都生まれ。

1998年（18歳）、埼玉県美術系の私立高校を卒業した。美術系高校を選択したのは、子どものころから絵が好きだったため、「絵を書く仕事をしたい」と思ったからである。

卒業時に父親は中小民間企業で働いていたが、自分とは18歳離れた（腹違いの）弟がいて、家計状況は厳しかった。そのため美術系の専門学校への進学を断念した。また、断念したもうひとつの理由は、父親が再婚した義母と仲が悪く、高校卒業までけんかを繰り返し、もうこれ以上、同居したくないと思ったからである。さらに、高校卒業時に父親から「家を出てほしい」と言われてしまった。そのため進学、就職の目的もなく一人暮らしを始めることとなった。

アルバイトは高校生時代からファミリーレストランでしていた。アパートを借りるのに必要なお金は、その時の貯金を充てた。しかし、敷金などに貯金を使い果たしてしまったため、引っ越し時に父親から約10万円を賤別としてもらった。

アパートは、実家から歩いて20分ぐらいのところ借りた。実家の近くにに住むことにしたのは、知らない町に住む必要性がなかったことと、友人もアルバイト先も今までで生活していた実家の近くにあったからである。いずれにしろ不本意な形で一人暮らしを始めることになった。

< 初職からの経験 >

18歳（1998年）高校卒業後、それまで働いていたファミリーレストランに加え、コンビニのアルバイトをかけもちで始めた。収入は、手取りで合わせて月13～14万円ぐらいだった。アパートは6畳一間にバス、キッチンが付いた部屋で、1カ月の部屋代は43,000円だった。アパート代はすべて自分のアルバイト代でまかなった。アルバイトの月収は多くても手取りで14～15万円ぐらいだった。

こうした生活を続けながら、絵を描きたいという漠然と

した思いは残っていた。

22歳（2002年）の時、出身高校の美術の先生の紹介で、絵を描く仕事をもらった。広告用ティッシュペーパーのチラシや社内報の挿絵を描く仕事で、1件当たり5,000～10,000円の単価だった。好きな絵を描くという仕事だったが、集中してやらないとできない仕事だったので、アルバイトを休まざるを得なかった。また、仕事をもらった会社から、他の会社の挿絵の仕事を禁じられたため、挿絵の仕事では収入の増加にはつながらず、結局、休んだアルバイトの分、収入が減ることになってしまった。さらに、挿絵の仕事を通じて、自分が書きたい絵は仕事で描く絵と違うようになっていた。このため挿絵の仕事をだんだん断るようになり、その結果、仕事の依頼も来なくなった。

その後も、ファミリーレストラン、コンビニ、ビデオ店など、一度に2つ以上のアルバイトをかけもちする生活を続けた。

このようなアルバイト生活を高校卒業後約8年間続けたが、必要な生活費をまかなうことができなくなり、生活が一段と厳しくなってしまった。風邪をひいても病院に行くお金がなかったり、家賃も滞納するようになった。

そこで、26歳（2006年）の時、生活をやり直そうと思い実家に戻った。父親が再就職して収入が安定したことも、理由のひとつだった。

実家に戻った後、すぐに派遣会社に登録した。仕事も待つことはなく紹介された。就職の決まった派遣先は、都内の自動車メーカーの工場だった。

派遣先の職場には実家から通うつもりだったし、勤め始めた当初はそのようにしていた。しかし、実家は父親と義母、そして弟の3人の生活が長く続いていたため、自分が家にいた時と比べ雰囲気はすっかり変わっていた。このため、だんだん精神的に参ってくるようになった。そこで派遣会社に派遣先企業の寮に入れるように頼んで手続きをしてもらって移り住んだ。結局、実家にいたのは1カ月にもならなかった。

派遣先の職場で自分が担当した仕事は、車体とタイヤを接続するデフという部品を研磨して、その品質を検査する

仕事だった。作業は単純で1カ月ぐらいで覚えることができた。作業は基本的に機械が行うため、操作のコツさえ覚えれば自分でもできる仕事だった。

職場では正社員も一緒に自分と同じ作業をしていた。上司は同い年の正社員だった。上司が同い年だったこともあり、やりにくいと感じることがあった。

この職場には約2年いた。残業はほぼ毎日2～3時間あり、収入は手取りで月21～22万円ぐらいになった。派遣会社の広告には「手取り収入月30万円」と書かれていたが、寮費や社会保険などを大きく差し引かれた。この時は、雇用保険に入っていた。

自分の所属した職場では、約10社の派遣会社から社員が派遣されていた。そのため、同じ仕事に従事していても、派遣された派遣会社によって契約の時給が大きく異なっていた。手取りで月30万円ぐらいもらっていた人もいた。傾向としては、小さい派遣会社ほど時給は高かった。自動車メーカーからは派遣会社には同じ単価で契約して払われているはずなのに、実際の時給は派遣会社により大きく異なっていることが不満だった。このことを知って仕事のやる気がなくなってしまった。自分が契約した派遣会社は、面接に行くだけで2,000円くれるという好条件だったが、時給自体は他の派遣会社より低く、条件は悪かった。時給の話を他の派遣社員とすることは派遣会社から禁じられていたが、職場では時給の話をよくした。

28歳(2008年)になって、もうちょっと稼ぎたいと思うようになった。そのため、派遣契約の更新時に仕事を変えることにして、それまで働いていた自動車メーカーの仕事を辞めた。

はじめは賃金の高い期間工の仕事を探したが、その時、期間工は募集していなかった。約1カ月間探した後、登録する派遣会社を変えることにした。新しい派遣会社に登録すると、すぐに神奈川県内の自動車メーカーの工場を紹介された。面接後、すぐに仕事が決まったので、寮に入ることができ、実家に戻る必要がなくなり助かった。

担当した業務は、エンジンの組立ラインへの部品供給の仕事だった。以前の自動車メーカーの派遣労働とは異なり、20キロの部品を運ばなければならない肉体労働だった。その割に時給は安く、昼勤のみで夜勤手当がなかったこともあり、収入は手取りで月18万円にとどまった。きつい肉体労働が響いて、働き始めてから半年経ったころに腰を痛めた。このためこの自動車メーカーの仕事を辞めることにした。

退職時に腰痛の労災申請をしたかったが、工場と派遣会社が自分のケースを労災にならないように処理したため、結局、労災申請はできなかった。このことに嫌気がさし、登録していた派遣会社との派遣登録を打ち切った。

退職後、つなぎの生活資金を確保するため、退職した派遣先企業の寮にいたことができる間に、警備員の仕事に就いた。同時に、給与が高いと言われている派遣会社に登録した。実際、提示された時給は他の派遣会社よりも100～200円高かった。仕事は10月からだったので、前の派遣先企業の寮の滞在期限との関係で、どうしても3日間だけ家がない状態になった。実家に戻りたくなかったので、持っていたお金で、なるべく安いマンガ喫茶に泊まった。自分にとっては実家に戻る方がハードルは高かった。

2008年10月(28歳)から電機部品メーカーの仕事に派遣社員として就いた。仕事内容は電機部品の検査だった。時

給は最初の派遣先の自動車メーカーと同じだったが、座ってできる仕事だったので、自動車メーカーの仕事よりも疲れなかった。また、職場の従業員の8～9割が派遣社員で占められており、今までになく居心地のいい職場だった。収入は手取りで月20万円前後になった。

しかしその時期、リーマン・ショック後の急激な景気の落ち込みのため、会社の受注量は急速に減少していた。勤め始めて1カ月も経たない時だったが、会社の説明では、2007年の同時期の仕事量の15%しか確保できないとのことだった。その結果、1カ月後に派遣契約を終了することを通告された。

また、その時の景気状況では、大手派遣会社でも紹介する仕事がないと聞いて、職場の派遣社員はみんなパニック状態になった。自分の登録している派遣会社は別の仕事を探すと約束してくれたが、結局実現しなかった。雇用契約が切れたのが12月19日だったが、幸いなことに年明けまで電機部品メーカーの寮に滞在できた。

<現在の生活状況>

2009年早々、住居の問題が緊急の課題となった。その時、行政より緊急雇用対策として用意された公営団地に入居することができた。

入居中に次の仕事を探したが、3カ月の退去期限内にどうしても仕事を見つけることができなかった。そこで自分と同様に仕事が決まっていない他の居住者と一緒に、団地の居住期限を延長してもらうよう交渉することにした。団地の自治会にも行政への陳情に協力してもらったが、交渉を進めるためには専門知識と経験のある人が必要ということになった。その時、自分と同じ境遇の居住者の中に、派遣労働者が加盟する労働組合とコンタクトを取ったことのある人がいた。そこでその労働組合に相談してみようと思ひんで決め、すぐに連絡を取った。連絡を取って組合に加入し、500円の組合費を支払った。組合はすぐ住居や生活保護などの今後の生活設計と対策を立ててくれた。

加入した組合の指導を受けて、すぐ行政に生活保護を申請した。申請の受理後、支給された生活保護費は月127,000円だった。生活保護費の受給後、生活保護を受けていながらも入居できるアパートを自分自身で探した。アパートは町の不動産屋で見つけた。入居できたのは単身者用アパートに空きがあったからである。贅沢かもしれないが、新築で安いところを希望していたので、今のアパートは気に入っている。しかし、食費を抑えた生活をしている。これからは家財道具を揃えないといけない。冬を間近に控え、布団や冬服も揃えなければならない。預貯金はないので、どのようにしたらいいのか困っている。

現在、両親は健在である。父親は59歳で、4～5年前に職業生活を一度引退したが、最近再び働き始めた。父親と義母(現在49歳)との間に小学生の弟がおり、また、家のローンも残っていることから、自分が働いて実家にお金を入れて欲しいと言われている。しかし、今の境遇を考えるととてもできることではないと思う。

<本人の望みや不安>

将来の仕事は、調理業務や工場労働など、自分が経験した仕事なら何でもいいと思う。また、派遣に限らず、期間

工でも構わない。

正社員と比べ、派遣社員は給与水準や労働条件が違う。特に有給休暇がないことが問題である。風邪をひいた時、派遣先企業の社員から「お前らは休むな」と言われたことがあった。これを一例に派遣社員に対する正社員の扱いはとにかくひどかった。

「仕事があるのなら何でもすべきだ」と言われるが、介護の仕事をやりたいとは思わない。失業後、介護施設に見学に行く機会があったが、これまで工場ですべての仕事をしていた人においそれとできる仕事ではないと思った。また、給与も13万円弱程度で、これでは生活保護の支給水準と変わらない。

人からよく「29歳なら何とかなる」と言われるが、自分の体験から考えると、そう簡単な話ではないと思う。失業後、2009年に入ってから1年近く就職活動をしてきたが、希望する就職先は見つからなかった。正直言って心が折れてしまった。就職のため職業訓練を受けたいと思っているが、ケースワーカーの人に申し出たところ、「29歳なら職業訓練を受けなくても就職できるだろう」と言われてしまった。このため職業訓練の受講申請をためらっている。こう

したことがあったため、就職相談員に相談することがストレスに感じるようになってしまった。お世話になっている組合のスタッフは、就職相談員を変えてもらうのは簡単だと言っていたが、ハローワークに申請しても担当者を変えてくれなかった。

美術関係の仕事を諦めた訳ではないが、アルバイト程度の仕事をしてみて、その大変さがよくわかった。今では趣味の範囲でやるのが自分にとって一番良いと思っている。こうしたことを相談できる人は親以外にいないのが現実だ。

政治に対しては、実際の就職まで行き着くような仕組みを考えてほしいと思う。そのためには生活保護費を引き上げる必要があると思う。現在の支給水準では毎日の生活に追われて、就職活動や、就職のための職業訓練を受ける余裕がまったくないからである。職業訓練の必要な人が受講できない仕組みになっていると感じる。

派遣法を改正して欲しい。雇用身分が派遣社員ではなく期間工だったら、少しであっても退職金は出たと思う。退職金があれば、今のようにホームレスの人も増えなかったのではないかと。雇用、居住、時給などの最低保障水準を決めて、実現して欲しいと思っている。

調査番号：東京44

調査日：11月13日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：35歳 ■現住所：神奈川県 ■出身地：青森県 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：製造業、生産職、登録型派遣
- 直近の収入：勤労収入なし / 失業等給付受給（月15万円） ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：子ども1人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校卒業 配電盤製造会社・組立（正社員、1年） 電気工事会社・電気工（正社員、2年） パチンコ屋・店員（正社員、2年半） 警備会社・警備員（正社員、2年半） 飲食店・店員（アルバイト、1年） 自動車部品メーカー・検査（登録型派遣社員、5年） 自動車メーカー・生産（登録型派遣社員、3カ月） 現在、失業給付受給中 / 求職中

< 仕事に就くまで >

1974年、青森県生まれ。両親と兄弟3人の5人家族。

1992年（18歳）に地元の農業高校を卒業後、青森県内の電気関係の技術専門学校（1年制）に進学した。実家は農家ではなかったが、農業高校に進学したのは親戚に農家の人がおり、その手伝いができればいいと思ったからである。しかし、高校卒業後に専門学校に行ったのは、将来を考えるとそれではいけない、何らかの技術を身につけた方がいいと思うようになったからである。

< 初職からの経験 >

1993年（19歳）専門学校卒業後、地元で有名な配電盤製造会社（従業員数300人規模）に就職した。父親がかつて勤めていた会社で、そのコネで就職できた。本社は青森県内にあったが、入社後すぐに埼玉工場（30人程度）に配属された。担当した仕事は配電盤の組立だった。

専門学校では電気関係の専門コースに入っていたが、学

校で学んだ内容はほとんど役に立たなかった。また、仕事もそれほど面白いものではなかった。月給は手取り13万円で、これにわずかなボーナスが支給される程度だった。

配属された埼玉工場では寮生活だったが、辞める直前まで故郷から離れた地での一人暮らしに慣れることはなかった。友達もできず、次第に地元で仕事がしたいと思うようになった。結局、この会社を1年で退職した。

20歳（1994年）になっており、そのまま故郷の青森県に戻った。帰郷後すぐに職業安定所の紹介で青森県内の電気工事会社に正社員として就職した。就職した会社は大手情報通信会社の下請け業務を請け負っており、情報通信会社の電信柱を道路に立ててケーブルを張るのが主な業務だった。自分の担当した仕事も、道路に電信柱を立てケーブルを張る屋外作業員の仕事だった。以前いた会社と比べ会社の規模はかなり小さく、従業員数は正社員で5～6人程度だった。また、年配の人が多かった。

毎月の月給は手取りで10万円ぐらいだった。実家から通っていたから、何とか生活できた。就職して2年経った頃、作業場までの車での移動中に、自分の不注意で交通事故を

起こしてしまった。そのため会社に居づらくなり退職することにした。

退職した時は22歳（1996年）だった。すぐに職業安定所の紹介を受けて、パチンコ屋にフロア従業員として就職した。正社員としての採用だった。会社は従業員20人ぐらいの規模の会社だった。

パチンコ屋を選んだ理由は、「これまでやったことのない仕事をやってみたい」と思ったからである。また、体を動かすのは嫌いではなかったし、てっとり早く就職できる場所を探したということもある。専門学校で学んだ経験を生かせる仕事ではなかったが、電気関係の仕事にこだわりはなかった。

勤務は交替制で、早番は8：00～16：00、遅番は15：00～23：00のシフト勤務だった。残業はなく、月収は手取りで17万円ぐらいになった。また、職場までは前職の電気工事会社同様に、実家から通った。2年半程度勤務した頃から遅刻が多くなった。そのため上司から、「あと何回か、遅刻したらクビだ」と宣告された。仕事も嫌になっていた頃だったので、そのまま辞めることにした。

1999年（25歳）パチンコ屋の仕事を辞めた後、職安や求人誌などで就職活動をしたが、なかなか次の仕事が決まらなかった。半年経ってから、新聞の求人でも道路警備の仕事を見つけ、同年、警備会社に正社員として就職した。この時も実家から会社に通った。

就職した警備会社の管轄区域だった青森県は、夜間の警備のほとんどない区域で、勤務時間は基本的に日中だけだった。仕事は簡単で、仕事を始める際に3日間講習を受けてできる程度の仕事だった。しかし、正社員採用だったものの、給料は日給月給制で、警備について日だけしか給料の支給対象にはならなかった。そのため給料は多くても手取りで月15万円ぐらいにとどまり、それも勤務日数により月ごとに変動があった。

2002年（28歳）就職後約2年半が経った頃から仕事が目に見えて減ってきた。仕事が減っているのに、何故か会社は人を増やした。理由はわからなかった。そして、仕事を新しく入った従業員ばかりに割り当てられた。そのため以前からいる従業員には仕事が回ってこなくなった。日給月給制だったので、現場に出ないと収入にならず、最終的には手取りで月10万円を切るようになった。自分は実家から通勤していたが、暮らせる給料ではなくなってしまった。そのため見切りをつけて退職することにした。

退職後（2002年、28歳）すぐに地元の飲み屋でアルバイトを始めた。友達から紹介された仕事だった。勤務時間は20：00から6：00までで、日給6,000円で月平均24～25日働いた。仕事自体は次の仕事までのつなぎと考えていたので約1年で辞めた。

2003年（29歳）飲み屋のアルバイトを辞めた後、すぐに仕事に就くつもりだったが、半年経っても仕事はみつからなかった。そこで青森県を出るつもりで、派遣会社に登録した。派遣会社から長野県の仕事を紹介された。ところが現地に行ったところ、就労予定の派遣先企業から、今、仕事はないので少し待機してくれと言われた。ちょうど中東の湾岸戦争が始まっていて、派遣先予定の企業でも仕事の見通しが立たなくなっていたためだった。そのまま長野県で10日ぐらい待機したが、結局、仕事をする見通しは立たなかった。そこで登録している派遣会社に別の仕事を探してもらったところ、今度は静岡県に行くように指示された。

同年、静岡県で派遣の仕事を開始した。派遣された会社は自動車部品メーカーであった。担当した主な仕事は、700度の温度で溶かしたアルミをプレスして作ったギアの検査業務であった。プレスによってギアに穴が開くが、その穴の出来具合を検査する作業だった。最初は慣れない仕事へのとまどいもあったが、気持ちを切り替えてできる限り早く覚えるように努めた。また、扱う機械や設備が大きいことにもとまどった。さらに、職場内は耐えられないぐらいに熱かった。最初は慣れない職場環境に適應するのに苦労した。

勤務は4日働いて2日休みという2交替の交替勤務で、1日11時間働いた。収入は手取りで月20万円以上になった。

経験を積むとともに仕事はより熟練の必要となる作業へ変わっていった。しかし、仕事内容自体は大きく言えばギアの検査業務だということと、職場の異動がなかった点では大きな変化はなかった。

一人前の仕事ができるまでに1年半ぐらいかかった。2年目ぐらいからは同じ部署の仕事は一通りできるようになっていた。仕事は2人一組の作業とひとりでやる作業とがあったが、3年目を降はひとりでやる仕事が多くなった。ひとりでやる仕事は2人一組の仕事よりも難しく、より精度が求められた。最後に自分が担当した検査業務は、特に経験と技術を求められる仕事だった。生産減少に伴い派遣契約が打ち切れ、自分たち派遣社員が抜けた後、正社員が同じ仕事をこなすのは難しかったのではないかと思う。なお、仕事に関連する資格を取得する機会が用意されていたが、残念ながら自分は資格を取得しなかった。

職場では派遣社員だけでなく、正社員も多く配置されていた。派遣社員は定期的に部署が変わることが多かったが、自分は同じ部署で働くことが多かった。たぶん熟練の度合いに関係していたのだと思う。また、自分は他の派遣社員に仕事を教えることも多かった。私生活の面では、派遣の仕事は初めてまもなく、女性と付き合うようになった。そのため派遣先企業の寮を出て、アパートで女性と1年ぐらい同棲した。

2004年（30歳）に、その女性と結婚し、2007年（33歳）には子供を授かった。

ところが、2008年10月半ば（34歳）自動車部品メーカーで働き始めて5年が経った時、突然、派遣契約の打ち切りを通告された。契約は半年単位の更新だったが、更新して約1カ月経った時の打ち切り通告だった。リーマンショックに伴う自動車の世界的売れ行き不振の影響だった。打ち切り通告に対し登録している派遣会社に強く抗議したが、受け付けてくれなかった。また、打ち切りに伴う金銭的補償は何もなかった。

そこで派遣でも何でもいから次の仕事を探してほしいと派遣会社に言ったところ、別の派遣会社から神奈川県にある自動車メーカーの工場を紹介された。

また、仕事が変わるため静岡県を離れ神奈川県に移った時に離婚した。離婚の最大の原因は仕事なくなったことである。離婚した時、自分の家に預貯金がどの程度あったかよくわからない。自分は家財道具のみもらって神奈川県に移動することにした。子供は妻が育てることになった。

同年11月より、自動車メーカーでの仕事を開始した。仕事内容は組立のピッキング（運転席やコックピットを組み立てるための部品を集めて、組立の作業現場まで運び届ける）の仕事だった。この作業は初めてだったので最初はと

まどった。勤務は2交替の7時間勤務だった(6:00 - 15:00、16:00 - 23:00)。収入は手取りで月15万円ぐらいにとどまり、静岡県で働いていた頃と比べると大幅に減少した。

自動車関係の不況が続いていたので、自分が登録した派遣会社に派遣切りの有無について確認したが、「大丈夫」という返事が返ってきた。しかし、3カ月契約を結んで作業を始めてすぐ、派遣会社から契約は2009年1月末で打ち切ると通告されてしまった。まったく想定していなかったことなので、どうしていいのかわからず途方に暮れてしまった。

<現在の生活状況>

神奈川県自動車メーカーを契約打ち切りで退職した2009年2月に、会社の寮を出て行政が斡旋した県の公営住宅に入居した。そこには9月まで居住することができた。

公営住宅に在る間に仕事をみつけて定住する民間アパートを決める必要があったが、最後まで仕事をみつけることができなかった。公営住宅の自治会の人に協力してもらって、もっと長く住めるように行政側と交渉したが、次の人が決まっていると言われ、結局9月に退去することになった。

9月から今の民間賃貸アパートに住んでいる。アパート探しで訪れた不動産屋が失業給付受給中でも入居可能という大家をみつけてくれたからである。駅から近く、8畳一間でキッチン、バス、トイレがついた部屋で、家賃は月58,000円である。

6月から失業給付を受給している。静岡県で働いていた時の給料が良かったので、失業給付は1日5,000円、月15万円ぐらいになる。その中からアパート代を支払っている。しかし、預貯金はまったくなく、失業給付も11月分までである。

仕事を探してもみつからず、また、失業給付の期限も間近に迫っており、この先どのようにしたらよいか見通し

がまったく立たない状態である。

離婚した妻との間に2歳の子どもが1人いるが、現在の失業状態では養育費も出せない。

両親は健在で青森に住んでいる。父親はすでに定年を迎えており、年金で暮らしている。兄弟姉妹は自分を含め3人いるが、両親とは離れて暮らしている。

両親は青森県に帰って仕事を探せばいいと言っている。帰郷すれば家賃はかからないものの、青森県には仕事がない。また、一度帰ったら、もう二度と東京には出てこれないと思う。

友達は青森県にもいるが、派遣契約打ち切り後に同じ公営住宅に住んだ仲間や、神奈川の自動車メーカーの工場に就労していた時の職場の仲間とのつながりは今でも持っている。

<本人の望みや不安>

とにかく1日も早く仕事をみつきたい。家賃に少しプラスぐらいの収入であればいい。今は経験したことがある電気工事関係の仕事や運送の仕事を探している。これからはできれば正社員として働きたいと思う。正社員が無理である場合であってもちゃんと社会保険に入るところで仕事がしたい。

業種については、飲食業や介護の仕事はやりたくない。妹が介護福祉士の仕事をしているが、生半可な気持ちではできないと言われた。自分としてはモノを作る仕事がしたいと思っている。

派遣でやったことのある仕事ならば、今でもできるという自信はある。まったく知らない仕事よりは、今までやったことのある仕事に近い仕事がしたいと思っている。

政権交代しても、その結果は自分たちの生活に反映されていないと思う。特に雇用を増やすと言っているのに、職業安定所に行っても求人は逆に減っている。

調査番号：東京45

調査日：11月13日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：35歳 ■現住所：東京都 ■出身地：東京都 ■学歴：中学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：建設業、建設・土木関係職、アルバイト ■直近の収入：月15～20万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：同居する親、同居する兄弟 ■住居：公営住宅
- おおまかな職歴：中学校卒業 牧場にて競馬騎手のトレーニング(4年) 建築資材運搬会社・事務5年、のちに運搬11年(アルバイト、16年) 現在に至る

<仕事に就くまで>

1974年、東京都生まれ。

中学卒業後、高校に進学せず、神奈川の牧場で騎手のための勉強とトレーニングを始めた。

しかし、1993年(19歳) トレーニングで馬に乗っている時、ゲートに足をはさんで骨折してしまった。入院して治療したものの、馬に乗れる状態には戻らず、このため騎手への道を断念した。

<初職からの経験>

1993年(19歳) 騎手のトレーニングによるケガが治った後、東京の実家に戻った。そして10月、求人雑誌で現在勤務している建築資材運搬会社を見つけて応募し入社した。アルバイトという雇用形態である。実際の仕事の仕方は、仕事が出た時に働いて、その分のお金だけをもらうというシステムである。実際、どのような雇用形態なのか当時はわからなかったが、いずれにしろ正社員採用ではなかった。

当時正社員として働いている人は社長以下の幹部社員など、数えるほどしかいなかった。この会社に応募した理由は、働いたその日にお金がもらえるからである。また、仕事が終わればその日はおしまいというやり方だったので、労働時間は他の仕事よりも短いことも魅力だった。

会社の主な業務は、ビルなどの建築に必要な内装材（キッチン、フローリング、床材、アルミサッシなど）をその工場の作業現場まで届ける（搬入する）仕事である。

具体的な作業内容は、建築の工事現場を担当する大手ゼネコン、建築業者、備品メーカーなどからの作業依頼を受けて、運送業者などの車で各種建築資材、備品が工事現場に届くと、その資材、備品を実際に工事する職人や作業者のいるフロアの作業場まで運び届ける仕事である。

この仕事は現在、景気が悪くなったため、作業者の現場まで資材等を運ぶだけでなく、資材を覆う梱包をはずしたり、または清掃したりと、これまで自分たちが行わなかった作業が求められるようになった。いわば仕事の範囲が広がったといえ、作業量は増えることになった。

こうした仕事をする人は主に20代の若い人が多い。それは体力や筋力が最低条件として必要だからだ。しかし、慣れや経験もいる仕事である。

就職した当初は、いつまで続けるか考えていなかった。就職して10日ほど経ったころ、資材運搬の本来業務の仕事から内勤の仕事に配属された。内勤は、外部からの仕事の依頼の電話に対し、アルバイトの人たちにその仕事を配分する仕事だった。当時このような業務を行う正社員はいなかった。また、現場で搬入の仕事をしている人も50人程度しかいなかった。その後、内勤を行う社員も増えてきて、自分も現場に出てほしいと言われ、再び現場に戻った。内勤の仕事をしたのは約5年である。現在会社には、現場に出て搬入の仕事をするアルバイトが200～250人、内勤の正社員が10人くらいいる。

給与は基本的に日払い制で、これは自分が勤め始めた時から変わらない。週払い、月払いの人もいるが少数である。事務所にお金をもらいに行く以外は現場との間は直行直帰である。現場の場所等の連絡は電話で行っている。現場へは電車で行く。本社が都心にあるので、交通費は本社から現場までのみ支給される。

搬入の仕事は大抵の場合、朝8時から始め午後2～3時頃には終了してしまう。また、お客さんからの注文に応じて指定した時間までに仕事を終えることもある。昼食抜きで仕事時間が14時を超えると、時間外手当が1時間あたり1,250円つく。こうした残業はしばしばあるが、年齢、経験年数、作業時間数に関係なく、時間外手当は一律1,250円と決まっている。ただ、ハードな搬入の仕事ではない軽作業の場合は、勤務時間は8時から17時までで、17時以降に時間外手当が1時間1,250円つくことになっている。

<現在の生活状況>

今まで一度も転職を考えたことはない。あっという間に時間が経ったという感じがする。仕事は稼げる時は稼げる仕事だった。手取りで月60万円ぐらい収入のあった時もあった。朝・昼・晩と1日に3カ所の現場をまわるというサイクルを2週間続けたこともあった。しかし、その後胆石になって仕事を休んでしまった。

今は手取りで月20万円弱まで下がってしまって、金銭的

な余裕はなくなってしまった。年収ベースでも200万円に届くかどうかだ。また、自分で小遣いとして使えるのは月2～3万円程度で、残金は同居している母親に渡している。家族は自分を含め4人家族で、母親のほか収入のない兄弟がいる。母親はすでにパートを辞めており、自分の収入が我が家の収入のすべてだ。そのため現在の収入では家計は「大変苦しい」。昨年も貯金どころか「大幅な赤字」家計だった。食事を我慢したり、遊ぶお金を減らしたりした。また、貯金を引き出してやりくりした。自分自身の健康状態も胆石を患ったこともあり、よい状態ではない。だから自分の将来に対し「強い不安」を感じている。

もともと中学卒業の時から我が家の暮らしは「大変苦しかった」。すでに父親は他界しており、母親がパートで家計を支えていたからだ。

現在、家族と住んでいる住居は公営住宅だが、家賃は月4万円程度である。しかし、収入が増えると引越さなければならぬのが心配だ。

最近ハローワークで調べて確認したところ、1993年から現在の会社で働いているのに、自分が社会保険に加入したのは今年（2009年）からということがわかった。16年も働いていながら、会社は何もしてくれなかったことになる。

2009年（35歳）7月に、会社の仲間と一緒に労働組合を結成した。現在、組合員は非正社員の6人だけである。労働組合を結成するに当たって、Webサイトなどを検索して、色々な労働組合を調べた。その中から多くの労働組合とコンタクトをとった。しかし、いずれも相談や手続きなどに時間がかかりそうだった。

その時、あるインターネットのサイトから現在自分たちの組合が加盟している労働組合の存在を知った。他の組合と比べ、この労働組合は電話ですぐ話を聞いてくれた。現在、自分たちが結成した組合の書記次長を務めている。

今の会社及び仕事には改善すべき項目がいっぱいあると思っている。

組合では現在、有給休暇や休業補償などについて会社と交渉している。交渉の結果、有給休暇は組合員のみ取得できる制度となっている（2年間で最大40日）。しかし、2009年7月から仕事が減って有休を使わざるを得ない状況にある。有給休暇制度を組合未加入者にまで対象を拡大するとともに、今後どのようにすべきか、会社と交渉したいと思っている。

また、組合結成後、会社は組合員と組合員未加入者とと一緒に仕事しないように仕事の手配をするようになった。いわば仕事の配分における隔離手配という実態となっており、会社にはこうした状況の改善を求めている。

さらに、組合員には会社からの雇用契約書の明示はないが、組合未加入者には明示するようになった。

また、雇用契約期間が6カ月から3カ月に短縮されてしまった。今後、雇用契約書の明示とともに改善を求めているかと思っている。

現在、会社から月給制への変更という逆提案を受けており、組合で検討しているところだ。会社は有給休暇の保証、休業補償の確保、社会保険の加入促進を認めると、今の日給制ではやっていけないと言っている。会社の言うことを認めると、収入の減少につながることになり、慎重に対応する必要があると思っている。

社会保険への加入は正社員のみ認められ、雇用保険は希望者のみの加入である。いずれも法律違反の状態といえる。

このように組合の取り組み課題は多いが、会社の姿勢に対し組合の要求を通していくのは大変だ。しかし、今後も引き続き加盟している上部組合の指導の下に頑張っていきたいと思っている。

また、上部団体の労働組合から、自分たちの働き方が日雇い派遣に近いものであることを指摘された。最低賃金の引き上げや派遣労働の改善、そして雇用保険への加入促進など取り組むべき課題は多い。今のような働き方のメリットとデメリットを見極めて、組合員だけでなく、会社で働いている人全体の労働条件の向上に努めていきたいと考えている。

< 本人の望みや不安 >

今まで仕事を辞めようとは思ったことはないし、また、収入が下がった今でも辞めようとは思っていない。景気の良い時や色々なメリットもあって今の会社に勤め続けたが、自分の将来に対し「強い不安」を感じている。稼ぎ手は自分だけという暮らしは厳しく、時には「気分が沈んだり、ゆううつな気持ちになったり」することがある。また、「適当な相手にめぐり合わない」こともあり、まだ結婚していない。

調査番号：東京46

調査日：11月11日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：44歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：福井県 ■ 学歴：専門学校中退
- 就労の有無：就労中 ■ 現職：建設業、建設・土木関係職、アルバイト ■ 直近の収入：月15～16万円
- 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：配偶者、子ども ■ 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校中退 建築会社・内装工（アルバイト、1年） 建築会社・クリーニング（アルバイト、2年） ビル解体工事会社・工事管理（正社員、4年） ビル解体工事会社・工事管理（正社員、2年）
ビル解体工事会社・自営（事業主、約1年半） 廃業・短期のアルバイトを転々（2年） 建築資材運搬会社・運搬（アルバイト、4年） チラシ宅配会社・ポスティング手配（アルバイトのちに正社員、1年半）
建築資材運搬会社・運搬（アルバイト、7年） 現在に至る

< 仕事に就くまで >

1965年、福井県生まれ。

1983年（18歳）福井県の県立高校（普通科）を卒業後、東京の大学を受験するつもりだったが、英語が苦手だったため断念した。その代わり東京の観光専門学校に進学した。旅が好きだったことと、旅関係の仕事がしたかったためである。

専門学校は2年制だったが、1年経った後で、このまま卒業しても旅関係の会社への就職は難しいことに気がついた。そこで旅行に行くのなら、自分でお金を貯めて行った方がいいと思うようになり、そのまま専門学校を退学した。

< 初職からの経験 >

1984年（19歳）学校を辞めた後、旅行に行くお金を貯めるため、内装業のアルバイトに就いた。事務所や個人の家屋のカーペットやビニールを張る仕事で、1日約1万円のアルバイト料だった。

このアルバイトを約半年間続けた頃、別の内装業者から、マンションの居住者が入れ替わる際に部屋をきれいにするクリーニングの仕事を紹介された。紹介された建築クリーニング業はお金を稼ぐには手取り早く、2～3年働いた後に独立しようと思うようになった。

1985年（20歳）将来の独立のため建築クリーニングの仕事を一通り経験してみようと思い、会社を移った。ビルメンテナンスやじゅうたんクリーニングなど色々な仕事を引き受けた。収入は月平均で約17～18万円になった。この建

築クリーニング業には約2年間従事した。

1987年の22歳の時はちょうどバブル経済期だった。その時、親戚の人から「ビルの解体がお金になる」と言われ、ビル解体の会社に正社員として就職することにした。その会社では、主に事務と解体現場の監督業務を担当した。実際の解体作業は下請会社や外注会社が行っていたが、入社後しばらくの間、解体の監督業務を学ぶため実際のビル解体作業に従事した。結局、この会社で4年間働いた。

4年間も続いたのは、給料がよかったこともある。初任給は20歳そこそこでありながら手取りで月26～27万円にもなった。また、ボーナスも最大で基本給4.5カ月プラス120万円もらったことがあった。退職時の月給の手取りは30万円近くに達していた。

しかし、ビル解体会社には同世代の人がいなかったため、話をする人がなく、相談相手もいなかった。

そこで、1991年、26歳の時、解体の下請業務を行っていた職人が勤めている工事会社に転職した。解体現場の作業責任者としての正社員採用だった。給料の支払いは日給月給制で、ボーナスや手当はなかったが、景気が良かったこともあり税込みで月60万円ぐらいもらえた。しかし、自分より若い従業員に飲み食いさせるためにかなり金がかかった。

2年後の1993年、28歳になった時、一緒に仕事をしてきた仲間から「会社に雇われないで一緒に事業をやろう」と提案された。そこで独立しようと思い、共同で解体工事会社を設立した。しかし運が悪いことに、会社の設立時はバブル経済が終わる時だった。

最初、若い従業員を6人ぐらい雇って事業を始めたが、

次第に仕事が減っていった。バブル経済崩壊後の不景気のためである。その後、仕事を終えても、売上金を支払ってもらえない状況が続いた。この不払いが経営を圧迫することになり、結局、1994年、設立から1年半ほどで会社をたたむことになった。会社で働いていた若い従業員は他の工事会社に移れるように手配した。

廃業後しばらくぶらぶらしていたが、1994年の29歳の時、貯めたお金もなくなってしまった。そのため、再びアルバイトを始めることにした。建築業はもういやだったので、パブやクラブのボーイ、不動産業の手伝い、英会話教室の人集めなど様々な仕事をした。

1996年、31歳の時、求人雑誌で、現在働いている会社の広告を見つけ、その会社でアルバイトとして働くことにした。

会社の主な業務は、ビルなどの建築に必要な内装材（キッチン、フローリング、床材、アルミサッシなど）をその工事の作業現場まで届ける（搬入する）仕事である。

具体的な作業内容は、建築の工事現場を担当する大手ゼネコン、建築業者、備品メーカーなどからの作業依頼を受けて、建築現場に向き、運送業者などから届いた各種建築資材、備品を実際に工事する職人や作業者のいるフロアの作業場まで運び届ける仕事である。

最初は次の仕事を見つけるためのつなぎの仕事と考えていたが、労働時間が短いこともあり、ずっとアルバイトとして働き続けることとなった。従業員のうち、アルバイトは200～250人で、正社員は10人くらいである。正社員のほとんどは会社の役員である。

大抵の場合、朝8時から仕事を始め午後2～3時には搬入作業は終了する。お客さんの注文に応じて、さらに早く仕事を終えることもある。食事抜きで午後2時を超えて作業をすると時間外手当として1,250円支給される。残業はしばしばあるが、経験年数、時間数に関係なく一律1時間1,250円と決まっている。なお、搬入以外の軽作業の場合は8時から17時の勤務で、17時以降に残業があると、時間外手当が1時間1,250円出ることになっている。

給与は1日あたり、7,500～12,000円ぐらいで、10,000円を超えることはほとんどない。給与の額は仕事の経験と社長の恣意的判断で決まってしまう。また、昇給もない。

かつて景気が良い時は1日に現場を2カ所まわり、2倍の日給を稼ぐことができた。いわば1日で2日分の仕事をしていた。しかし、景気の低迷により、仕事が少なくなってしまった。特に2008年の夏は極端に仕事がなかった。2008年2～3月ごろから仕事が減り始め、就労日が週2～3日という時もあった。会社には休業補償規定がないため、仕事のない日はそのまま無収入となってしまうのである。また、翌日の仕事が決まるのが前日の午後5～7時の間なので、先に他の仕事を決めて仕事を掛け持ちしたりすることができない。結局、2008年の月収は2007年と比べて平均で月10万円ぐらい減ってしまった。

現在も仕事は少なく、月収は手取りで15～16万円まで減少してしまい、生活できないほど低くなっている。

自分はまだ月15～17日間勤務しているので良いが、月に5日しか働けない人もいる。そのため貯金を取り崩して生活を維持している人や、それでも生活ができなくなって仕事を辞めた人がいる。

これからも働き続けることはできるが、将来に不安を感じる。

実は将来のことを考えて一度、現在の会社を辞めたこと

がある。2000年、35歳の時に1年半ほど、広告会社のアルバイトをしていた。ピンクチラシを作って、公衆電話などに貼る仕事（ポスティング）を業務とする会社だった。自分に割り当てられた仕事は他のアルバイトにポスティングの依頼をすることだった。

給料は良く、最初は税込みで月40万円ぐらいになり、1年半後に辞めた時には50万円ぐらいになっていた。最初はアルバイトだったが、その後、正社員になり、社会保険にも加入できた。しかし、給料の良かったこの会社は様々な税金を納めていなかった。そのため、会長以下、会社の幹部が捕まってしまう、結局、会社は倒産してしまった。退職金として100万円支給され、失業後、失業給付が月28万円出たので、半年間働かなかった。

失業後、次の仕事を見つけることができなかったので、2002年、37歳の時に、広告会社に転職する前に働いていた現在の会社に戻り、そのまま働き続けている。

< 労働組合の結成と組合活動 >

2009年（44歳）に入り、労働条件を改善するために、有給休暇の付与や、仕事のない時の休業補償を会社に求めたところ、会社からパワーハラスメントを受けた。「50万円払うから会社を辞めてくれ」と言われたり、また、入社以降、仲の良かった社長に「君は変わった。会社のガンだ」、「俺のことが信用できないのか」などと言われた。

こうした会社とのやりとりがあった後、会社は一方的に従業員の雇用契約を変更してしまった。それまでアルバイトは期間の定めのない雇用だったが、「これからは有期雇用に変更する」と宣告された（雇用契約期間が6カ月になった）。

有期雇用ということは、契約期間終了後に契約を解除すること、すなわち解雇することが可能になるため、どうしてもゆるせなかった。そのため、従業員の中で自分だけが契約書にサインしなかった。

会社に10年ぐらいいる仲間に声をかけて、会社と労働条件について色々話を機会を設けた。こうした機会を通じて、今の会社のやり方を変えないと、自分たちの生活が守れないと思うようになった。

この時期、会社から解雇通告されそうになったが、そのまま納得しないで辞めるのはいやだったので、労働組合を結成することにした。

相談に乗ってもらった労働組合の支援を受けて、自分に対する解雇通告の拒否と、会社と各種労働条件改善の交渉をするため、2009年7月に組合を結成した。社長は拒否反応を示して、それからは口をきいてもらえなくなった。

現在、組合員は非正社員の6人で、自分が当該労働組合の委員長を務めている。

今の会社及び仕事には改善すべき点が数多くある。仕事が少なくなったことにより、こうした会社と職場の問題点が明らかになったと思っている。

結成した労働組合では、現在、有給休暇や休業補償などについて交渉している。有給休暇は組合員のみ取得できる（2年間で最大40日）ようになったが、7月から仕事が減って、有休を使わざるを得ない状況に追い込まれている。

現在、会社から給与について月給制への変更の提案を受けており、組合で検討しているところだ。会社は有給休暇の取得促進、休業補償の確保、社会保険の加入促進を認め

ると今日給制ではやっていけないと主張しているが、月給制を認めると収入の減少につながる恐れがあり、組合としては慎重に対応するつもりだ。

その他の課題としては、雇用契約期間が6カ月から3カ月にさらに短縮されてしまったことがあげられる。このため雇用契約切れという事態に直面することになり、組合として解決策を模索しているところだ。

また、社会保険の対象が正社員のみという状態にある。雇用保険は希望者だけが加入できるが、明らかに法律違反である。

なお、組合に対する不当労働行為として、会社は組合員にだけ雇用契約書を明示していない。この点の見直しも行ってほしいと考えている。

組合結成において支援してもらった上部団体の労働組合には心より感謝している。彼らの支援なしには組合をここまでつくり上げることはできなかった。

そのため、他の労働組合のメンバーが困っていたら、率先して助けてあげたいと考えている。

<現在の生活状況、本人の望みや不安>

結婚しており、子どもが3人いる。結婚後、現在の賃貸マンションに移って暮らしている。妻もパートとして働いている。子どもがある程度成長しているのので、妻はパートといってもフルタイムに近い労働時間で働いており、税込みで月20万円ぐらい稼いでいる。預貯金は妻が管理しており、お小遣いは足りなくなったらその都度1万円ぐらいもらっている。これから教育費がかかるが、子どもには好き

なことをやらせたいと思っている。

今の生活の状況はとても厳しい。仕事が少なくなり、以前のように生活できる収入を得ることができなくなった。

今の仕事は不安定なので、妻をはじめ、親兄弟、親戚が反対している。「体をこわしたら困る。安定した収入のある他の仕事を探した方がいい」と言われている。一方で、弟はプログラマーをしているが、その仕事ぶりをみていると、40歳過ぎてから仕事でパソコンを使うのは難しいと思う。この年齢になると、仕事を変えることは本当に困難だ。

将来を考慮して現在の会社に勤務中、何度も転職を考えた。実際に、一度、転職したことさえあるが、結局、なかなか希望通りにはいかなかった。また、転職するにしても、年齢条件が合わなくなっており難しくなっている。

できる仕事があれば進んでやるべきだと思うが、「農業をやれ」「介護をやれ」と言われても自分にはできないと思う。

<社会に対する意見>

現行の派遣法を見直し、派遣という働き方はなくした方がいいと思う。40歳を超えた人にとって、派遣による仕事を続けるのは大変だからである。民主党に対しては雇用施策が不満だ。公共工事で働いて生活している人がいるのに、公共事業を途中で辞めてしまうのはおかしいと思う。これでは、公共事業が業務の多くを占める会社はつぶれてしまうからだ。また、沖縄の基地もそこで働いている人が失業してしまうことを考慮すると、再考の余地があるのではないかと思う。

調査番号：東京47

調査日：11月16日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：40歳 ■現住所：東京都 ■出身地：北海道 ■学歴：大学中退 ■就労の有無：就労中
- 現職：運輸業、運搬関係職、日雇い型派遣 ■直近の収入：月12～15万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学中退（新聞奨学生を経験） アポイントセールス会社・営業（アルバイト、3カ月）ファーストフード店・弁当売りなどの短期のアルバイトを転々（3～4年） 飲食店・ウェイター（正社員、1年） 飲食店・ウェイター（正社員、2年） レストランバー・バーテンダー（正社員、3年） ラウンジバー・バーテンダー（正社員、5年） 失業給付受給 バー・バーテンダー（正社員、1カ半月） コンビニ・店員（アルバイト、2年）+日雇い派遣（2年） かけもち 日雇い派遣（4年） 引越し会社・現業（アルバイト、数カ月）+建築会社・大工見習い（アルバイト、数カ月）+日雇い派遣（数カ月）のかけもち、現在に至る

<仕事に就くまで>

1969年、北海道生まれ。

中学時代は、生活が「大変苦しかった」ことを記憶している。母親は公務員だったが、父親はケガで一時的入院しており、当時、無職だったからである。

両親は自分が高校を卒業するころに離婚した。

高校卒業の18歳まで北海道にいた。

1987年（18歳）大学（経済学部）進学で上京した。新聞奨学生として大学に通ったが、時間をほとんど拘束された状態で辛かった。新聞奨学生のとき自分が使えるお金は月7～8万円程度だった。

同年、大学を1年で中退した。東京に出ることが上京の第一の目的だったので、大学を辞めるときは特に悩まなかった。「何をしよう」という目的もなかった。また、卒業資格にもあまり関心はなかった。ちょうどバブル経済の

ときで景気もよく、このままフリーターでもいいかとも思った。フリーターとして色々な仕事を経験して、目的を探そうと思った。そして、多少の貯金はあったので、新聞配達店を出てアパート（家賃7万円ぐらい）を借りた。

< 初職からの経験 >

1987年（18歳）大学を辞めた後、最初はいわゆるアポイントセールス（営業）の仕事に就いた。電話でアポイントをとって会社に来てもらい、様々な商品の営業販売を行う仕事だった。勤務時間は9～17時で、手取りで月28万円ぐらいになった。しかし、完全歩合給制で、営業成績が上がらなければ給与は1円も出ない制度だった。営業成績の評価は週単位で、週末が近づくと成績をあげるため忙しくなった。結局、精神的に参ってしまい、約3カ月で辞めた。

この後、ファーストフード店でのアルバイトなど色々な仕事を短期間でつないだ。そのうち一番長かった仕事为新幹線のプラットホームでの弁当売りの仕事だった。弁当売りは正社員採用の話もあったが、正社員にはならなかった。このときは労働時間は長かったが、月に手取りで25万円以上の収入があった。弁当売りをしながら英会話学校にも通ったが、「英語がしゃべれたらいいかなあ」という程度の動機で通い始めたものだった。

結局、大学中退後のアルバイト生活はトータル3～4年に及んだ。

こうしたアルバイト経験の後、パーテンドーを目指すようになった。弁当屋で仕事をしているとき、お酒を飲む機会が多く、自分はお酒が好きなのでパーテンドーという仕事があると思ったからである。

1991年（22歳）銀座のチェーン店でウェイターの仕事を正社員として始めた。

翌年（1992年）23歳のとき新宿の店に移った（正社員）。その店では、1年目に無遅刻無欠席だとパーテンドースクールに通わせてくれるという条件だったので、無遅刻無欠勤で1年勤めた後、昼間にパーテンドースクールに通った。パーテンドースクールに通いながら1年間勤め、新宿の店では計2年間働いた。銀座、新宿の店の手取りは月20万円ぐらいだった。

1994年（25歳）青山の店に移った。このレストランバーで約3年仕事をした（正社員）。パーテンドースクールの先生の紹介だったが、その店は肌に合っていた。それまでの店でも、カクテルを作らせてくれたが、まるでカクテル製造機のような仕事だった。青山の店はマスターとママと自分の3人のみの店で、お酒に関する仕事はすべて自分にまかされていたので、やりがいがあった。青山の店は手取り25万円ぐらいになった。また、はじめて社会保険への加入の希望について聞かれたが、手取りの多いほうがよかったので加入を断った。

1997年（28歳）大分県にある温泉地へ住居を変えた。当時付き合っていた女性が大分県出身で、彼女が実家のビジネスホテルを継がなければならないことになり、自分も近くで働こうと思ったからである。パーテンドーとしての夜の仕事を探していたところ、近郊の温泉地での仕事が見つかった。彼女は市内に住んでいたため、生活は別々だった。

仕事は旅館の中にあるラウンジバーで、正社員としてパーテンドーをやった。やりがいのある仕事だった。旅館自体が有名だったこともあり、客層は都内の店とは違って

いた。山の中にある旅館だったが、パーテンドースクールの先生から「パーテンドーに関わるすべての仕事をしなさい」と言われていたので、自主的に旅館の外回り（庭の手入れなど）の仕事も手伝った。旅館には5年ぐらい勤めた。雇用保険等の社会保険はすべて加入した。また、賄いの食事がついていた。収入は税込み30万円ぐらいだったが、寮費や社会保険料を差し引くと手取りで20万円程度が残った。

月20万円の収入のほとんどは、パーテンドーの勉強のため、お酒の研究費として使った。ヴィンテージのお酒は高く、そのため貯金をほとんど残すことはできなかった。旅館に勤めているとき、旅館の人やほかの旅館のパーテンドー仲間とのつながりで、趣味で山登りを始めた。旅館の中には信頼できる友人もあり、相談もできた。

2002年（33歳）このような生活が5年経ったとき、それまで付き合っていた彼女と別れることになった。彼女との別れはとても辛い経験で、仕事までできなくなってしまった。

ラウンジバーには、自分ともう一人の責任者がいた。彼は地元出身の人で、旅館で働いている期間も自分より長かった。その彼との間で仕事のことで意見の食い違いが生じるようになった。彼女のこと、仕事のことなど様々な問題が起こってきたため、ついにうつ病になってしまい、通院するようになった。病院に通院を始めると同時に、旅館に退職を申し出た。

とにかく彼女との別れがとても大きかった。仕事のトラブルも彼女がいたら乗り越えられたかもしれないと思う。

結局、同年（33歳）10月に東京に戻り仕事を探そうとした。北海道の実家に戻るとそのまま引きこもってしまうのではないかと思ったからである。また、ゆくゆくは自分の店を持てればいいと思っていた。うつがひどいときには母親に電話で連絡をしていた。このようにして大分から東京へ戻り、現在の住所に引っ越した。将来の見通しはなかったが、雇用保険の失業給付をもらいながらゆっくり仕事を探した。かつて通学したパーテンドースクールの先生のところにも行き、仕事についてお願いした。その先生の紹介で、同年11月末、上京後1カ月で下北沢の店で働くことができるようになった（正社員）。

しかし、翌年（2003年、34歳）1月に、通勤時にバイクで事故を起こし、1週間仕事を休まなければならなくなった。入ったばかりで申し訳ないと思い辞めることにした。事故を起こした数日後が給料日だったが、1カ月半働いたにもかかわらず3万円しかもらえなかった。このことで夜の仕事に対し不信感を抱くようになった。これでは自分で店を持つしかないとも思ったが、うつ病の経験から夜の仕事に戻るとまた病気になってしまうのではないかという恐怖感を抑えきれなかった。このためどうしても再びパーテンドーの仕事に戻ることができなくなった。

その後、仕事を探そうと大手の派遣会社に登録した。コンビニのバイトをしながら日雇い派遣の仕事をするという生活を2003年（34歳）から約2年続けた。コンビニは約2年勤めたが、2005年（36歳）からは日雇い派遣を中心とした生活となった。仕事内容は肉体系がメインで、引越しの仕事が多かったが、ときどきパソコン入力などの仕事もあった。経験した仕事の種類は何十種類にもなったと思う。

こうした派遣の生活は、2003年から登録していた派遣会社なくなる今年まで6年近く続けた。休みはほとんどなかったが、平均して月20～30万円近くは稼ぐことができたと思う。働きたい日に仕事がなければ、その日が休みにな

るという生活だった。1日6,000円前後の収入だった。昼の仕事と夜の仕事をダブル、トリプルにすれば1日に1万円から1万5千円稼ぐことができた。旅館の仕事などの経験から長時間労働や肉体労働には慣れてきた。

2009年(40歳)に入り、登録していた派遣会社がなくなったので、別の派遣会社に登録した。また、その他小さな派遣会社数社と掛け持ち登録をした。現在も同じ派遣会社に登録しているが、引越しの仕事は前に登録していた派遣会社で仕事をした引越し屋さんから直接に声をかけてもらい、今は毎週末引越し屋の仕事をアルバイトとして手伝っている。週末の仕事だけで週3~5万円もらえるので、派遣の仕事は平日にしている。しかし、現在の派遣会社からの仕事も週末が多く、日が合わなくて平日に仕事ができないことが多い。

ただ2009年8~10月は、以前登録していた派遣会社で仕事をしていた時代から付き合いのある大工さんの手伝いをした。これもアルバイトである。仕事は平日のため、収入は月25万円ぐらいの安定した収入になった。その前は週末が派遣と重なる引越し屋の仕事しかなく、月に12~15万円程度の収入だったことを考えると、大幅な収入増となった。11月は20万円ぐらい稼げると思うが、12月はまだわからない。

<現在の生活状況>

以前登録していた大手派遣会社がなくなってからは、仕事が減り、生活は厳しくなった。月に12~13万円程度しか稼げなくなり、よくても14~15万円程度にしかならない。生活は「なんとか」できるという程度で、食事を切り詰めた生活をしている。連続して通わなければいけない仕事の場合は、アパートとの往復の交通費がもったいないし、また、マンガ喫茶に行ってもお金がかかるので、山手線に乗って寝ていたりする。また、24時間営業のファーストフード店を利用することもある。

仕事のない日はたいてい家にいる。お金を使わないため、ただ寝ているだけである。テレビはもう4年ぐらいアパートにはない。新聞もとっていない。情報は携帯電話のニュースから得ている。仕事の情報を得るのも携帯経由で、1カ月の携帯代は1万5千円から2万円ぐらいかかる。しかし、急な仕事のやりとりには携帯が必要なので、打ち切ることはできない。

今は安い家賃のところに引越したいと思っている。引越しにお金がかかってしまうので、行政の支援があるといいと思う。日雇いの仕事をしていた友人が生活保護を申請したが、住んでいる家の家賃が高いことを理由に断られた。雇用保険に加入していても、基準となる賃金が安いと雇用保険の失業給付の額は低くなる。今の最低支給額(基本手当日額最低額)は1日2,000円に満たない金額だ。月6万円では家賃にしかならない。額が何を基準で決めているのか、よくわからない。求職活動をするにもお金がかかるので、この額では生活保護を申請するしかないと思わざるを得ない。選択の幅がとても小さいと思う。

現在、登録している派遣会社の派遣労働者で組織した組合の委員長をやっている。以前登録していた派遣会社のときも組合に2年半加入していた。上部団体である組合の街宣活動などに参加しているが、自分たちの実質的な組合活動は上部団体の事務局に頼っている。自分は現場の情報を集めて、事務局に相談して、団体交渉の席に臨んでいる。

家族との関係については、母親とは今でも連絡をとっている。母親に経済的援助ができればと思うが、今は難しい。

<本人の望みや不安>

バーテンダーは20代からの希望の職種で、やりがいもあったし、お金を使って勉強も続けた。多くの値段の高いお酒の味も知っている。しかし、これだけ経験を積んでいながら、再びバーテンダーに戻るのには難しいと思うようになっている。今からバーテンダーに戻るには、精神的なりハビリが必要だからだ。自宅でもバーテンダーの練習はしていないし、毎日お酒を飲むこともない。

今、週末に仕事を手伝っている大工さんから「大工見習いを始めないか」と言われている。今も少し仕事を教えてもらっているので、これからは大工の勉強をやってみようと思っている。将来、本業としてできればいいと思っている。

派遣法改正に関して、派遣社員が直接雇用になっても問題は無いし、派遣という働き方がなくなればいいと思う。

日雇い派遣がなくなると、ダブルワーク(普通の仕事+派遣)の人が困るという意見を聞いたが、自分たち派遣で働いている人たちが時給の安い仕事に就かないようにしても、ダブルワークの人たちが安い仕事をとってしまい、結局、時給が下がってしまう。派遣だけで生活している人たちのことを考えてほしい。今の派遣はダブルワークの人たちのための派遣になっているように思う。ダブルワークの人たちも1つの仕事で生活できるようにすればいいのではないか。

今は派遣をなくした後のフォローの議論がなされていないように感じる。大手派遣会社がなくなったとき、行政は何もなかった。また同じことが起こる可能性がある。日雇い派遣がなくなっても、日雇い派遣で働いている人たちが請負に移行するだけである。

ハローワークも日雇いや短期の仕事も斡旋すればよい。データベースを作り、今の派遣会社の機能をハローワークで行えばいい。何かあったとき、今は派遣会社に文句を言ってもみ消されてしまうが、ハローワークが対応するようになれば、きちんと行政に文句を言えるようになる。派遣先企業の労働条件の悪いことがわかれば、評判が悪くなり、人が集まらなくなるだろう。

ハローワークや求人情報誌でも、時給や労働条件などが実際と違うことがある。また、都内のハローワークではいつ行ってもいつも同じ情報だ。受付で相談してもこれでは意味がない。

自分は派遣の仕事のつながりで引越しや大工の仕事をしているが、何のつながりもない人もいる。行政はそうした人たちに手厚いサポートをするべきだと思う。互いに助け合う場所、正しい情報を共有できる場所が必要だと思う。現状でも多くの人がハローワークの端末で検索している。こうした実態も含めて、ハローワークサービスの拡大などもう一步踏み込んだ施策が必要だと思う。

職業訓練校に行きたくても、応募者が多く、すごい倍率になっている。厳しい雇用情勢を前に、手に職をつけたくてもつけられない現実がある。訓練校を増やすなど見直しをしてほしい。自治体は生活保護を支給するだけでなく、就労できる施策を実行してほしい。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：39歳 ■現住所：東京都 ■出身地：東京都 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：求職中
- 直前職：情報通信業、営業職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし／生活保護受給
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校中退 家業手伝い（6カ月） コンビニ・店長（準社員、数カ月） 家電量販店・販売等（アルバイトのちに正社員、4年） 電気工事業・自営（事業主、5年半）一時期運転手のアルバイトとかけもち タクシー会社・運転手（正社員、6年） 治療のため無職／生活保護受給 家電量販店・販売（登録型派遣、数カ月） ケーブルテレビ会社・営業（登録型派遣、数カ月） 現在、生活保護受給中／求職中＋個人加盟ユニオン加入

< 仕事に就くまで >

1970年、東京都生まれ。

家族構成は両親と3人兄弟の5人家族で、自分は次男。

母親は長男が生まれた後、内縁関係にあった男性の元へ家出。自分は内縁関係にあった男性の子として生まれた。その後母親は内縁関係が破綻して夫（義理の父親）の元に戻り、自分もその家族として養育された。

小学校2年生の時、両親が離婚。母親に引き取られた。母子家庭で生活保護に頼る生活であった。母親がアルコール依存のため生活が逼迫、子どもの養育も放棄して学校給食費も支払い不可能であったため満足に食事を得られなかった。そのため自分の食費を稼ぐために新聞配達のアパートを始めた。自分の出自が原因で父方（義理の父親）の親類に嫌われていたため、生活が苦しくても父方からの援助は得られなかった。

中学校2年生の時、父方の祖母を頼るも養育意志が乏しく高校進学も反対された。当時は勉強が好きでどうしても進学したかったので家出して児童養護施設行きを望んだら義父が引き取りに来てくれた。義父は家庭裁判所の指示で18歳までの養育を約束してくれた。ただし、それ以後は進学のコスト負担も含め自活するよう求められた。義父との関係は悪くはなかったが親密ではなかった。中学校時代は不良グループの仲間にはいたが補導されるようなことはなかった。彼らは相談相手であった。

理工系の大学に行きたかったため進学校への進学を義父に頼んだが断られ、昼間定時制高校に進学した。

高校の入学金は義父が負担してくれたが授業料はアルバイトで稼いだ。

高校3年生で中退し、就職した。中退の理由は「何でもこなせる専門家」になりいずれは個人で起業するのが夢であったから。高校時代は友人が多く、現在でも15人くらいの仲間との付き合いは続いている。

< 初職からの経験 >

1988年（18歳）定時制高校中退後、義父の仕事の手伝いで韓国（ソウル）で半年間働いた。帰国後、コンビニの店長（準社員）として勤務した。

同年、コンビニ退職後、家電量販店でアルバイトとして働いた。

1989年（19歳）接客対応と売り上げ実績が認められ、正社員採用となった。その後、店頭販売員を経て返品管理倉

庫に出向した。

1993年（23歳）8月、返品管理倉庫に出向後間もなく会社は倒産し、解雇された。倒産前に労組結成計画が会社に発覚、関係した社員は不当労働行為に負けて退職。結局、組合は結成されなかった。当時は正社員が販売のプロとして接客の技を競い顧客とも良い関係を作りながら売り上げを伸ばす時代で働き甲斐があった。当時の得意客とは今でも付き合いがある。現在、販売員は派遣社員に置き換わり接客スキルが評価されず使い捨ての時代になった。商品知識が乏しい派遣の販売員は賃金も低くモチベーションも上がらないため本当は顧客のためにもなっていないと思う。

家電量販店解雇後は、電気工事士の資格を生かし電気工事業として独立（自営）した。

同年から95年（25歳）3月までは家電量販店のエアコン設置工事を請け負った。運転手（アルバイト）とかけもちであった。運転手の仕事は、運送会社、物流センター、スーパーなどに勤務し、荷物の運送などを受け持った。

1995年（25歳）4月からは、建設会社から通信ケーブル敷設工事を請け負った。形態は請負であったが、実際には指揮命令を受けて仕事をしていたため、いわゆる「偽装請負」の状態にあった。

また、建設会社からの事前の情報では「寮完備」となっていたが、その実態は寮などと呼べるようなものではなく、会社のオフィス内の会議室に二段ベッドがぎっしりと並べてあるだけの「宿泊コーナー」に過ぎず、プライバシーなどなかった。さらに、「シャワー完備」とはいうものの、シャワーは建設会社から専用のプリペイドカードを購入しないと利用できない仕組みであった。シャワーの課金は短時間の設定となっており頻りにカードポイント購入を強いられるものとなっていた。結果的には建設会社が儲かるように仕組みされていた。そのため、他に頼れない人々を食い物にする巧妙な貧困ビジネスだと思った。

1999年（29歳）3月、建設会社からの請負工事を辞め、電気工事業を廃業した。

同月、タクシー会社に運転手（正社員）として就職し、6年勤めたが、交通事故（業務上災害）精神疾患（不眠、抑うつ）が原因で退職（2005年3月）した。

交通事故は業務上の事故であったにもかかわらず加害者が同じ会社に属するタクシー運転手であったため、示談を強要された。会社は見舞金での解決を迫り、任意保険からの支払いもされず、労災保険適用も実施されなかった。そのため、会社に異議を申し入れたが、聞き入れられなかった。

その会社では、社員同士の事故の場合、任意保険の保険

金は営業所でプールして事故が発生した時に内々での解決のためのパーター取引費用にあてるといった裏ルールが存在した。

理不尽に思い社内の労働組合に訴えたが、労使間で労災隠しを行う慣行が継承されており、組合役員からは「業界内慣行」を説得されるだけで問題解決には応じてもらえなかった。労働組合は組合員の味方だと思っていたが、その期待を裏切られて大きなショックを受けた。

この事故をきっかけに、この業界にはまた別の裏ルールがあることを知った。業界には地方出身者が多いが、二種免許取得のために斡旋業者の仲介でタクシー会社系列の教習所で免許を取得するケースが多く、その費用も高額であった（地方にはこのような教習所はほとんどない）。高額（法外）な教習料はそれぞれの会社でドライバーになってから借金返済する仕組みとなっているため、結果的に就職した会社に縛られてしまい、不満も言い難い環境で働くことを強いられた。

事故後2年間は治療のため無職。この時期、生活保護を受給しつつ、求職活動を行ったが、アルバイトが発覚して保護が打ち切られた。

2007年（37歳）には家電量販店で登録型派遣の販売員として働いた。

2008年（38歳）にはケーブルテレビ会社で登録型派遣の営業社員として働いた。しかし、ケーブルテレビ会社に就労していた時にパワハラを受け精神疾患を再発したため、退職した。

同年、生活保護の受給を開始した（現在も受給中）。

2009年（39歳）、個人で加入できる労働組合に加入し、ケーブルテレビ会社とパワハラの補償を求めて団体交渉を行っている。

現在は病気が回復したため、個人タクシーの資格取得のための受験準備中である。

<現在の状況>

音楽ライブの音響アレンジを趣味としており、プロのコンサートの手伝いをすることもある。技術料を稼ぐことも可能だが生活保護を受給しているのでボランティアとして引き受けている。

趣味の関係で交友関係も広く結婚するための相手探しは心配していない。職が定まったら相手を見つけて将来結婚するつもりでいる。

現在兄は音信不通、弟とは良好な関係が続いている。弟は腎臓障害を抱え大手派遣会社に障害者枠で雇用されている。

<今後の要望など>

生活保護の認定基準があいまいなのが問題だ。携帯電話を贅沢品として指摘されるなど社会の実態を反映していない面がある。働く意欲がある人の認定が厳しい一方で不正受給者をきちんと取り締まらないなど公正さに欠けている。自立意欲のある人を本当に助ける制度へと改めるべきだ。

政治への期待はセーフティネットの拡充と貧困ビジネスの規制である。特に横行している貧困ビジネスへの行政の介入が必要である。タクシー業界では特定企業グループ向けの教習所以外には営業用の二種免許取得の教習所が少なく、地方出身のタクシー運転手希望者が特定の斡旋業者を通じて合宿形式の教習所に送り込まれて法外な費用を請求されるケースがある。免許取得後、何とか就職しても分割で教習費用を払わされる仕組みだ。

今まで働いた中で出会ったり加入した労働組合の多くは会社の利益ばかり擁護しており、ほとんど組合員を守ろうとしないところが多くあった。組合員を守れない労働組合は必要ないと思う。現在所属している労働組合は労働組合の役割を果たしている。

調査番号：東京49

調査日：11月13日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：26歳 ■現住所：東京都 ■出身地：神奈川県 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：福祉サービス業、保育職、正職員（雇用形態をめぐって会社と団体交渉中）
- 直近の収入：約20万円 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校卒業（在学中、幼稚園・補助教諭（正職員、3年） 児童養護施設・保育士（正職員、3年） ベビーシッター専門会社・ベビーシッター（正職員・3年半） 現在に至る

<仕事に就くまで>

1983年、神奈川県生まれ。

両親、兄、弟、祖父母の7人家族であった。

高校1年生の時、両親が別居。母親は弟と実家で暮らし、他の5人は父親と暮らした。

高校卒業後、専門学校入学にあわせ、学校近辺に母親と弟の3人で暮らし始めた。

2000年（18歳）4月、専門学校入学。学校は夜学で保育士や幼稚園教諭資格を取得するコースに在籍した。昼間は

学校の紹介で幼稚園の補助教諭として卒業までの3年間働いた（卒業後にそのまま就職も可能な制度であった）。月給は10万円程度、賞与も4.5カ月と正職員扱いで条件は良く、この収入からある程度の生活費は賄えたが、不足分は両親から援助を受けていた。

2003年（21歳）3月に、保育士および幼稚園教諭の資格を取得し卒業。昼は仕事、夜は授業とハードであったが希望もあり充実していた。

また、高校・専門学校時代は、両親が別居したが、学校生活・友人関係・精神面・経済面ともに、特段問題はなく、

普通の生活を送っていた。

< 初職からの経験 >

2003年（21歳）4月から、専門学校で指導で神奈川県内にある児童養護施設に住み込みの正職員として就職した（寮費1万円）。子どもの生活にあわせるため勤務時間はルーズであった。休みは4週5休と祝祭日であった。月給は20万円程度。賞与はあった。ハードな業務であったことと他の仕事への興味もあり、3年で辞めた。

2006年（24歳）4月、ハローワークの紹介で、ベビーシッター・ハウスキーピング専門の請負会社に無期雇用で就職。ベビーシッターとして働き始めた。保育士、幼稚園教諭の資格があったのですぐ就職できた。3カ月の試用期間を経て正社員に登用された。

しかし、労働条件等は、求人条件と異なっていた。

また、雇用形態は、雇用契約上、無期雇用であったため正社員と考えていたが、会社は契約社員と主張し、理解が異なっていた。

さらに給与制度については、雇用契約では月給制とされていたが実際には時給制であった。会社の主張によれば、月給制より時給制の方が条件が良いとして時給制を採用したとのことであった。しかし、求人条件では月収20~25万円となっていたが、実際の月収は多くても20万円程度にしかならなかった（仕事はユーザのニーズ次第で変動するが、時給制のため、仕事のない月には月収が数万円の時もあった）。

また、「賞与あり」とされていたが実際には賞与はなかった。加えて、人事評価の基準が不明瞭で公正でなかった。

こうした状況をなんとしても改善したいと考え、2007年に合同労働組合の支部を職場の仲間4人で結成した。現在の組合員数は10人である。

同社の社員は、個人契約（請負社員）等を含めると300人程度である。土・日・祝日は休みとなっているが、収入が少ないので働きたいと言えば土・日・祝日も勤務することができる。

団体交渉の結果、月給制に移行し、月収税込み20万円程度を確保した。また、交通費は実費払いとするなど、賃金と勤務時間等の改善を成し遂げることができた。しかし、現在でも退職金・賞与はない。また、契約社員が正社員かの課題は交渉中である。

< 現在の生活状況、本人の望みや不安 >

現在は東京の民間アパートに1人住まい。家族とは普通に連絡を取り合うが、援助は受けず自立している。年収は240万円程度のため、生活は楽ではない。

自立して働く意志は固いが、結婚のための安定した収入もなく将来に不安がある。

友人は多く、職場の組合員の他、高校時代から音楽活動を通じて知り合った仲間がいる。

日本におけるベビーシッターの仕事は、特殊でマイナーな仕事である。現状では自由な雇用形態に位置付けられ、ルールや制度が曖昧であるため、きちっとした制度を確立したい。

また、父子・母子家庭、共働き家庭、待機児童問題等の解消に向けて、頑張りたい。

調査番号：東京50

調査日：11月16日

プロフィール

- 性別：女 ■ 年齢：37歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：京都府 ■ 学歴：大学院博士課程中退
- 就労の有無：就労中 ■ 現職：情報通信業、専門職、契約社員 ■ 直近の収入：月15~20万円
- 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身 ■ 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学院博士課程中退（途中、専門学校講師を経験） 専門学校・講師（アルバイト、7年）+ 情報通信会社・専門職（契約社員、7年）かけもち 情報通信会社・専門職（契約社員、2年半）現在に至る

< 仕事に就くまで >

1972年、京都府生まれ。

両親と妹を含め4人家族。

家族関係は幼少期よりずっと良好。父親はメーカーのエンジニア、母親は事務職で共働き。実家の生活水準はごく普通で姉妹ともに大学に進学した。両親とも組合員であったので労働組合の必要性や役割については若い頃から聞かされてきた。

小、中学校とも成績は上位でいつも学級委員をつとめ、友人も多く交友関係は良好であった。高校は地元の有名進学校に進んだ。両親と同じような平穏な家庭をつくろうと思っていた普通の女の子だった。

1991年（19歳）、地方の大学に進学、海洋生物学を専攻。

大学の海洋調査実習では女子であるという理由で調査船の航海には参加できずフィールドワークを積むことができなかった。

1995年（23歳）、東京の大学の大学院に入学。博士課程に進み、研究者を目指すも専門分野の就職の機会に恵まれず、2000年（28歳）で博士課程を中退した。

< 初職からの経験 >

1999年（27歳）9月、大学院在学中に専門学校の講師のアルバイトを開始した。

2000年（28歳）3月、専門学校は春、夏、冬季の3期の休校期間があり、収入不足を補うため、情報通信会社に契約社員として就職した。

2006年（34歳）に入り、情報通信会社の都合で担当業務が数年後に廃止されることが決まったことがきっかけで、個人加盟できる労働組合に相談した。

同年、仲間とともに自分たちで労働組合を結成し、業務の廃止撤回を求めて団体交渉を開始した（現在も団体交渉を継続中）。

2007年（35歳）3月、専門学校のアルバイトを退職。情報通信会社の契約社員専業となり現在に至る。

<現在の状況>

大学院進学のため、上京以降、東京でひとり暮らしをしているが、防犯上の心配があるため防犯設備が整った現在の住居を変えられない。住居費負担が重く現在の暮らしはやや苦しい。職場の同僚には低賃金ゆえ親と同居している人も多いが、自分は「どんなに大変でも一人の大人として自立して暮らしたい」と考えている。

現在の職場での勤続期間が長いので、相談相手は職場の同僚。ただ両親も重要な相談相手となっている。

<今後の要望など>

現在は契約社員の仲間たちと結成した組合で活動しているが、仲間の中には親会社の正社員だったにもかかわらず企業別労働組合が十分に機能せず、不本意なまま、現在の子会社に出向させられた人々がいる。企業別労働組合は頼りにならないと思い、やむを得ず自ら仲間とともに組合を

結成した。

既存の組合が非正規労働者の組織化に目を向けてくれるのは有り難いが、正社員組合員の雇用を守るために努力することもできない労働組合は非正規労働者の組織化などできないと思う。企業は利益優先のみの価値観に偏り、企業別労働組合は組合員の雇用を全力で守ろうとしなくなったのではないかと。どんな労働組合であっても組合員を守るという役割、使命は果たしてほしいと思う。

自分は団塊の世代の子どもで、いわゆる「就職氷河期」世代だ。かつての同級生は非正規労働者が多く自分も含め不安定雇用、低賃金で将来の生活設計ができない。大学卒業後は普通に結婚し家庭を持ちたいと、ごく普通の人生を想定したが、現在の雇用や社会保障の状況では結婚したくてもできない。国の政策に望むことがあるとすれば、若者が安心して結婚できるような制度を整備してほしいということである。

若者が将来設計できないこの国は、「普通の人々の善意で何とか保たれている」状態だということをお願いしたい。

また、「職場の中でも労働条件が変更される前から人は、職場の変化にさらされ困難を共有してきたから組合をつくることができたという面もある。最近職場に入った人は現状になかなか疑問を持たない。また、隣にいる人がなぜ自分と違うのか、その背景に疑問や関心を持たない。とても想像力が劣化してきていると思う。最近、非正規で働いている人の多くは他人には無関心で、現状に疑問を持たないし、自分のことしか考えない。個人個人がバラバラにされている」と感じる。

調査番号：東京51

調査日：11月17日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：33歳 ■現住所：神奈川県 ■出身地：東京都 ■学歴：高校卒業
- 就労の有無：病気療養中 ■直前職：卸売業・小売業、倉庫関係職、日雇い型派遣
- 直近の収入：勤労収入なし / 生活保護受給 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：緊急一時保護施設
- おおまかな職歴：高校卒業 スーパー・店員（準社員、1年） 病院・医療事務等（正職員、13年） 路上生活（半年、途中で日雇い派遣を経験） 現在、生活保護受給中（10カ月） / 病気療養中

<仕事に就くまで>

1976年、東京都生まれ。

家族構成は、両親、姉、妹、自分の5人家族。父親は警察官で、母親は専業主婦（小学生の頃までは看護師をしていた）。

幼少期より父親による家庭内暴力があった。日常的に暴言を吐かれ、時には殴られたこともあった。暴力は母親、姉、自分に向けられた（妹は10歳離れており、父親はかわいくて仕方がない様子だった）。また、父親は一時期、浮気相手のところに入り浸っており、父親の浮気が原因で母親が自殺未遂を犯しそうになったこともあった。母親に「お母さんがもし自殺をするんなら、わたしも一緒に死ぬ」といったところ、思いとどまってくれた。

また、子どものころから体はあまり強くなかった。小学生のころには盲腸炎で入院したり、喘息の発作で長期に入院したこともあった（ほかにアトピー性皮膚炎）。入退院を繰り返しているうちに、同級生とも意思の疎通ができなくなってしまった。友人は高校生になるまでずっといなかった。精神的にも不安定な状態がずっと続いた（病院にはかかっていなかった）。

高校生に入ってはじめて友人ができた。3年間ずっと仲良くしており、楽しい3年間を過ごすことができた。

<初職からの経験>

1994年（18歳）高校卒業後、東京都区内にあるスーパーで働きはじめた。当該スーパーはチェーン店ではない個人

経営の店舗で、正社員・準社員あわせて5名程度で、アルバイトを含めても30名ほどの規模であった。実家から通える距離にあり、社員募集のチラシを見て自分で応募し、採用された。雇用形態は準社員であったが、将来的には正社員への登用があると聞いていた。賃金は手取りで15~16万円だった。準社員だったこともあり、レジ打ちから品出しまで広範囲の業務を担当した。社会保険は未加入だった。そのため、父親の共済に加入していた。

1995年(19歳) 病院の事務職(正職員)に転職した(以降32歳まで13年間勤めた)。働いていたスーパーの顧客であった病院の看護師から、「受付の女性が辞めるので、是非うちの病院で働かないか」と声をかけられたことがきっかけである。親に相談したところ、「病院へ行きなさい」とすすめられたため決断した。スーパーの上司に退職したい旨を相談したところ、快く受け入れてくれた。ただし、病院に勤めはじめてしばらくの間は、病院の勤務が終わってからスーパーの手伝いを無償で行っていた。スーパーでは16時と20時にレジ閉めがあったが、レジ閉めができるのは正社員と準社員だけであったことから、自分の退職後はレジ閉めができる人が少なくなってしまうためである。勝手をいって1年で辞めさせてもらったことから当然だと考えていた。

病院は実家の近くにある個人経営の小さなところだった。スタッフは院長のほか、理学療法士2名、看護師2名、事務職3名(本人を含めて)だった。内科、外科、整形外科、胃腸科、皮膚科などの看板を掲げていた。

最初は受付、窓口を担当していたが、徐々に業務の範囲を拡大した。(院長の指導のもとでの)簡単な処置(いわゆる看護助手)、薬の処方のほか、医療事務(点数計算)の手伝いも行うようになった。医療に関することは一切経験がなかったため、毎日、必死にメモを取りながら、仕事を覚えた。しかし、病院からは准看護師などの資格を取るようすすめられることはなかった。自分でも特にその必要性は感じなかったことから、資格試験を受けようと考えたこともなかった。

初年度の賃金は手取り14万円だったが、毎年7,000~8,000円ほどあがった。辞める直前には23万円だった。

勤務時間は月曜日から金曜日の8時から18時までだった。途中で1時間ほど休憩があるはずだったが、実際には昼食を食べ終わるとすぐに仕事をしていし、勤務時間外にも毎日残業を1時間程度していた。また、保険の点数計算を一人で担当していたことから、毎月その時期になると休日に出勤して丸一日かけてこなしていた。残業代は一切出していなかった。

社会保険は、東京都医師国民健康保険組合(医師国保)と厚生年金に加入しており、雇用保険にも加入していた。

職場の人間関係には最初から問題があった。入ってから3年間ほど同じ事務職の男性職員からずっといじめを受けていた。最初はすぐつらく、何度も辞めようと思ったが、いじめられて辞めるのは納得がいけないと考え、「やるだけやろう。頑張ろう」と我慢して仕事を続けた。いじめは仕事を一切教えてもらえなかったり、言葉の暴力によるもので手を出されたことはなかった。院長を含め、職場の人たちはいじめのことは気づいていたが、見て見ぬふりをしていた。そのため、病院内の誰かに相談することもできず、一人で抱えこむしかなかった。

また、高校時代から仲良くしていた友人とも疎遠になってしまった。友人は自分に彼氏ができると決まってその彼氏にちょっかいを出し、2度も彼氏と浮気をしたことから自分のほうから友人との縁を切った。

1998年(22歳) 病院での勤務を開始して3年が経過したところ、男性職員が結婚すると、それまでがうそのように突然いじめは止んだ。

ところがそのころから今度はストーカー被害にあうようになった。病院に来院していた独身の患者に仕事帰りにあとをつけられ、自宅までこられるようになってしまった。父親が警察官だったために、父親に相談したが、あまり真剣に聞いてもらえなかった。自分自身で警察に相談することはなかった。

ストーカーは一人ではなく、複数の男性から断続的に5年ほど被害を受け続けた。

さらに、父親からの家庭内暴力も激しさを増し、うつ状態になってしまった。仕事には毎日出かけていたものの、それ以外はずっと部屋にこもるようになった。

その後、ストレスが原因で酒を飲むようになったが、酒の量は増える一方だった。仕事が終わると毎晩、朝まで酒を飲み歩き、毎朝1時間程度の仮眠をとって病院に向かうようになった。この時期には何度かリストカットをしたこともあった。しかし、この間、勤務先の院長にはこうした症状を隠し続けた。また、精神科などの病院にも一切かからなかった。

2005年(29歳) 飲み屋で知り合った同じ年の男性と親しくなり、同棲するようになった。これを機に実家から独立した。住まいは東京都区内にあったが、彼が仕事(新聞配達)でトラブルを起こすたびに引越し、計3回転居した。彼は気性が激しく、プツツと切れると何をするかかわらないところがあった。途中でわかったことであるが、彼は元やくざで、3回の逮捕歴があった。

その男性とは32歳までの3年間同棲していたが、彼は次第に働かなくなってしまい、自分の給料だけで生活するようになった。

それに加えて、彼が動物虐待を行うようになった。ある時彼は犬を買ってきた。最初こそ面倒をみていたが、まもなくして面倒も自分に押し付けるようになった。自分は犬が好きだったことから大切に育てていた。ところが、突然、彼は自分の前でその犬を殺してしまったのである。その後すぐに別の犬を買ってきたが、しばらくして気に入らないことがあるとまた犬を殺した。このようなことが4回繰り返された。

「パチンコをやりたい。お金を持ってこなかったら、また(犬を)殺すぞ」などと脅されるようになり、頻繁に暴言も吐かれるようになった。さらに機嫌の悪い時には暴力も受けた。食事中にいきなり箸で刺されたり、どんぶりを投げつけられたり、木刀で殴られたこともあった。

本当は誰かに相談したかったが、彼との同棲がバテて以来、親とは疎遠になっていたし、相談できる友人もいなかったことから、一人でじっと耐えていた。

彼からは「金が足りない。もっと持ってこい」と催促され、あちこちの消費者金融から借金して渡していたが、そのうち、ブラックリストに載ってしまったのだろうか、借金もできなくなってしまった。

彼は出会った時から糖尿病を患っていたが、この時期には糖尿病が悪化し、満足に自分でトイレにも行けないほど

で、排泄の介助まで自分が行っていた。

2008年（32歳）5月ごろには借金は総額500万円ほどに膨らんでいた。そこで、「もうどうにもならないから、今後のことを専門家に相談しよう」と彼に持ちかけたところ、急に家から出してもらえなくなり、仕事にも行かせてもらえなくなった（監禁された）。病院には自分（彼女）の携帯電話のメールを使って「しばらく休みます」と彼が連絡した。その後、「具合が悪いから辞める。退職金を振り込んでくれ」と勝手に連絡されてしまった。退職金として25万円ほど振り込まれたが、そのお金もすべて彼に使われてしまった。

同年6月には「新しい女ができた。おまえはもういらない」といわれ、部屋を追い出された。着の身着のままで家を出たことから、路上生活を送らざるを得なくなった。神奈川県内のターミナル駅近辺で過ごした。

日銭を稼がなくてははいけなかったことから、日雇い派遣で主にアパレル関係の倉庫整理の仕事をした。携帯電話を持っていなかったため、派遣登録は町で配られている情報誌をみて、公衆電話から行った。食事をほとんど取っていなかったため、職場で倒れることもたびたびあった。

同年6月から夏場までは仕事も比較的得られたが、秋以降は仕事を得られないことが多くなった。日給をもらうたびに、「今日はこのお金をどう使おうか。今日は食べることに使おう。今日は洗濯に使おう。今日は寝ることに使おう」などと考えて使わざるを得ず、「本当にその日一日を暮らすのが精いっぱいだった」。元来アトピー性皮膚炎を患っていたが、薬が買えずに、かゆみで肌をかきむしってしまったため、特に夏場は皮膚が紫に腫れ上がっていた。

最初はネットカフェを利用していたが、ネットカフェも安心できる場所ではなかった。寝ている間に荷物を盗まれたり、のぞきにあったりもした。また、シャワーを浴びているとドアノブをガチャガチャされることがあり、怖い思いを何度もした。

次第に、24時間営業のファースト・フード店で、コーヒー1杯で朝まで過ごすことが多くなった。ところが、ファースト・フード店も安全ではなかった。夜に一人でいると、見ず知らずの男性から「これからホテルへ行こう」「ちょっと食事をご馳走するからデートしよう」などと声をかけられることが頻繁にあった。声をかけてくる男性は比較的身なりのしっかりした人が多かった。年齢は様々で、ごく普通のサラリーマンもいれば、未成年や70歳を過ぎているように見える老人もいた。

男性から声をかけられるのが嫌で、次第に一晚中歩き回って時間を過ごすようになった。雨の日だけはコインランドリーで夜が明けるのを待った。

年末に近づくにしたがって、仕事は一層減ってしまった。寝ていない、食べていない状態になり、ついには働くこともできなくなってしまった。精神的にも相当追い詰められていたと思う。

何日も仕事が見つからない時には「もう頭が真っ白になって、もうどうでもいい状態になってしまって、本当は嫌だけれども、男の人について（連れ込みホテルに）行ってしまったこともあった。そうすれば、ご飯を食べられるし、寝ることもできると思って。もう本当に我慢、我慢しなくて...」

この間も家族と連絡を取ることはなかった。「女友達と暮らす」といって実家を出たが、彼との同棲がバレてしまい、父親から「おまえはうそつきだ。顔も見たくない。家にも来るな」といわれて以降、一切連絡できなくなってしまった。

2008年12月30日、近くのハローワークで派遣切りされた人たちを対象とした相談会が開かれていたので、参加した。「ハローワークでは何もできない。路上生活者の支援を行っているNPO団体を訪ねてはどうか」といわれ、支援団体の地図（神奈川県内）を渡された。ハローワークから支援団体までは電車での移動が必要な距離だったが、お金がなかったことから、徒歩で支援団体まで向かった。

同日、支援団体にたどり着いた。年末でどこの自立支援センターもいっぱいだったことから、数日間、夜間は支援団体が入る建物にある学童保育のスペースで過ごし、昼間は支援団体の事務所で過ごした。

2009年の年明けに、支援団体が運営する女性専用の緊急一時保護施設（シェルター）に空きができたことから、その緊急一時保護施設に移った。

緊急一時保護施設に入居後は緊張の糸が切れたかのように体調を崩してしまった。医師の診察を受けたところ、極度の貧血、自律神経失調症、パニック障害との診断が下された。

同年1月には、支援団体同伴で生活保護の申請をしたところ、すぐに保護がおりた。

<現在の生活状況>

現在も引き続きNPO団体の緊急一時保護施設に入居している。

生活保護を受けながら、病院通いを続けている。貧血がひどく、また、自律神経失調症の症状もあまりよくない（執筆者注：当日も話している途中で涙が溢れ出す、体が震えるなどの身体症状が表れていた）。その日その日で涙が激しく、一日のうちでも気分のアップダウンが大きく、「いきなり駄目になったり、いきなり（手首を）切りたくなったりする」。気分が落ち込んだ時は誰とも話したくなく、部屋にこもってしまうことが多い。精神科の医師からも、「ちょっとでも危ないなって思ったら、部屋から出ないほうがいい」といわれている状態である。

食事はあまり取れていない。食事をしては吐き、吐いては食事をする繰り返しである。逆流性食道炎の薬ももらっているが、薬が強いようで、薬を飲むと今度は下痢をしまう。ひどい時には一日中トイレにこもっていることもある。

緊急一時保護施設では数人の友人ができた。気分がいい時に友人と話ができるのがうれしい（緊急一時保護施設の入っている建物の1階には「相談室」があり、昼間の時間帯には生活相談ができるようになっており、また、入居者同士が談話できるようにもなっている）。ただ、気分がよくても長時間話をしていると知らず知らずのうちに疲れ、部屋に戻るとぐったりしてしまう。

支援団体にたどり着くことができたのは本当に運がよかった。その後も物心両面で支えてもらい、いくら感謝しても足りないくらいである。

< 本人の望みや不安 >

支援団体からの支援、生活保護など、今してもらっていることで十分すぎるほどである。これ以上の望みはない。

早く体調を整えて、仕事を再開できるようにしたい。今までの経験を生かして、医療事務の資格を取ることを検討したい。

調査番号：東京52

調査日：11月17日

プロフィール

- 性別：女 ■ 年齢：45歳 ■ 現住所：神奈川県 ■ 出身地：埼玉県 ■ 学歴：中学卒業
- 就労の有無：就労中 ■ 現職：製造業、生産職、アルバイト
- 直近の収入：最初の給料日到来せず / 生活保護受給 ■ 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身
- 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：中学校卒業 気球メーカー・生産（正社員、6カ月） 喫茶店・店員（アルバイト、3カ月）
パン屋やファミレス・店員（アルバイト、1年） 喫茶店・店員（アルバイト、数カ月） キャバレー・ホステス（アルバイト、5年） 無職・男性と同棲（13年） 電気機器メーカー・生産（登録型派遣、1カ月半）
電気機器メーカー・生産（登録型派遣、4カ月半） 自動車シートメーカー・生産（登録型派遣、半年）
電気機器メーカー・生産（登録型派遣、半年） ガス機器メーカー・生産（登録型派遣、半年） 電気機器メーカー・生産（登録型派遣、2カ月） 自動車部品メーカー・生産（登録型派遣、1年） トイレタリー用品メーカー・生産（登録型派遣、1カ月） 倉庫会社・ピッキング（登録型派遣、2カ月） エレベーター基盤メーカー・生産（登録型派遣、1年） パネ製造会社・生産（登録型派遣、3カ月） 化粧品メーカー・生産（登録型派遣、1週間） 非鉄金属メーカー・生産（登録型派遣、6カ月） 緊急一時保護施設入所 + 生活保護受給開始（6カ月） 民間賃貸住宅入居 + メーカー・生産（アルバイト、1カ月） / 生活保護受給中

< 仕事に就くまで >

1964年、埼玉県生まれ。

幼稚園の時に幼稚園を経営している家庭に里子に出され、一旦小学校3年生で児童養護施設に戻った。また少し経って「今度はこの家に行く」と言って、里子に出された。

学歴は中卒。高校は、「行く気もしないし、受かる気もなかった」ので、受験しなかった。中学校卒業まで、里親のもとで育てられたが、養父母は「他人なので」高校進学を考えられるような家庭環境ではなかった。就職する際に、里親には全く相談はしなかった。相談ができるような「そういう家ではなかった」。

< 初職からの経験 >

1979年（15歳）3月に中学卒業後、翌1980年（16歳）1月に埼玉県の工場に正社員として就職。「義務教育が終わったら、施設にいられないから、児童相談所の人を探してきてくれた」。女子寮に入った。工場では気球を生産しており、そのライン作業を担当した。工場の規模は30人以上50人未満程度だったと思う。

給料を幾らもらっていたかは「全く覚えていない」。寮費が給料から引かれていたかどうかについても、「全く記憶にない」。勤務時間は日中の時間帯の通常勤務で、土日は休みだった。

1980年7月に同工場を辞めた。突然辞めたので、会社から「年金手帳を取りに来てください」と言われたが、それが大事なものだとは思わなかったので取りに行かなかった。

仕事を辞めた理由は、「自由になりたかったから」。仕事は嫌ではなかったが、「遊びたい」という気持ちの方が強かった。児童相談所には、就職中も、退職する時も全く相談しなかった。「とにかく自由になりたい」という気持ちだった。

同月、仕事を辞めると同時に寮を出て、工場で知り合った男性に部屋を借りてもらい、そこで1人暮らしを始めた（男性とは同棲をしていたわけではなく、名義を借りただけ）。「1人だから、何をどうしていいかわからなくて、どうやって生きて行けばいいかもわからなくて」男性に部屋を借りもらった。

1人暮らしを始めると同時に、喫茶店でアルバイトを始めた。アルバイトを始めた当初は、毎日出勤しており、「最初は真面目にやっていた」。給料は「時給制だったと思うが、あまり覚えていない」。借りた部屋の家賃は、光熱費も含めて一切払わなかった。「何をどうすればいいかわからなかったから」。部屋は、その後引っ越す際に又貸ししてしまった。

同年10月頃までアルバイトを続けたが、栃木県から家出てきた同い年の男性数人と知り合い、彼らの家に「転がり込んだ」。彼らが栃木県に「帰る」と言うので、一緒について行った。

栃木県には17歳（1981年）の時の約1年間いた。当時グループの1人と付き合っており、彼の実家に最初は「やむなく」住んでいたが、のちに、彼の姉の家（栃木県内）に移った。

栃木での仕事は、男性の実家に住んでいた時は、総合スーパーのパン屋でパンを作ったり、袋詰めをするアルバ

イトをしていた。姉の家に移った後は、スーパーの中にあるファミリーレストランでウエイトレスの仕事をしていた。どちらの仕事も、給料が幾らだったかは全く覚えていないが、「10万円はっていないんじゃないかな」。

付き合っていた同い年の男性は、高校に行かず、特に働いていないようだった。次第に働かない男性に嫌気が差し、関係を「切りたい」と思って埼玉県に戻ってきた。

18歳（1982年）の時に、埼玉県に戻ってきてからは、最初は24時間営業の喫茶店に勤めた。その頃、栃木県に行く前に喫茶店のアルバイトで知り合った女性と偶然再会し、「お金（給料）いいよ」と言われたので、ホステスがどんな仕事かは分からなかったが、「お金がいいなら」と思って、キャバレーでホステスの仕事を始めた。

ホステスの仕事は「嫌で嫌でさぼっていた」ため、毎日では行かなかった。お金がなくなったら仕事に行く感じで、給料は日払いでもらっていた。日当は約8,000円。週2～3回お店に出て、あとは部屋で好きなだけ寝たり、1人で食事に行ったり、テレビを見たり「とにかく自由だった」ので満足していた。ホステスの仕事をしていた時は、キャバレーの寮に入っていた。社会保険には入っていなかった。

20歳（1984年）前後に「結石」ができて1カ月入院。退院後、医療保険に入っていなかったため、キャバレーの「お姉さん」に保険に入ることを勧められ、国民健康保険に入った。入院時の治療費は会社が立て替えてくれたと思う。

21歳（1985年）頃、埼玉県のキャバレーから東京都のキャバレーに移った。ここでも寮に入った。仕事内容は相変わらず嫌だったが、「真面目には行っていた」。週5日ぐらいは通っていたと思う。日給は8,000円から9,000円ぐらいだった。

23歳（1987年）の時に、東京のキャバレーで知り合った男性と一緒に暮らし始め、キャバレーの仕事は辞めた。男性は長距離トラックの運転手だったので、最初は一緒に車で生活していた。男性は過去にいろいろあったことから男性名義では部屋を借りることができなかった。埼玉時代のキャバレーの知り合いに相談すると、最初に1人暮らしを始めた時に住んでいた埼玉の部屋をそのまま借りることができた。

その男性とはそのまま36歳（2000年）まで一緒に暮らしたが、結婚はしなかった。この間、男性からは「働け」と言われていたが、「嫌だったから」働かなかった。20代後半から、仕事をしていないことに対して「このままじゃ、やばい」と思っていたが、「自分に甘い」のでずるずる36歳まで来てしまった。36歳の頃には男性との関係も上手く行っておらず、「ちゃんとしなきゃ」と思って別れた。

36歳（2000年）男性と別れた後、消費者金融で借りたお金を持って神奈川県のマンスリーアパートに入居し、寮付きの仕事を探し始めた。求人誌を買って仕事を探していた際に、目に留まったのが「派遣」の仕事であった。ホステスの仕事はお金になることは分かっていたが、仕事内容が嫌だったので、この時は「考えなかった」。派遣の求人広告に書かれていた「入社祝い金に目が釘付けになって」、その派遣会社に登録し、愛知県で働くことになった。

同年、神奈川県から愛知県に引っ越し、派遣会社の寮に入った。派遣先は電気機器メーカーのテレビを生産する工場だった。仕事内容は、テレビ製造のライン作業であった。派遣会社との契約は半年だったが、電気機器メーカーでの

派遣期間は1カ月半だった。給料は時給制で、時給1,000円。寮費を引かれていたので、手取りは10万円前後だった。土日は休みで、稼ぎたかったから「残業を希望していた」が、1カ月半の契約期間だったので、残業はそれほどなかった。

残りの契約期間（4カ月半）は、別の電気機器メーカーに派遣された。電気機器メーカーは愛知県内の別の市にあったので、寮も変わった。仕事内容は組立の製造ライン作業。派遣会社との時給等の契約内容は変わらなかった。

そこで残りの契約期間働いた後、それぞれ別の派遣会社と半年間の派遣契約を結び、自動車シート縫製工場、電気機器メーカー、ガス機器メーカー等に派遣されて働くことを、40歳（2004年）になる手前まで繰り返した。ガス機器メーカーは時給850円であったが、それ以外の派遣先では時給1,000円で、寮費を引かれて10万円前後が手取りでもらえた。残業があって稼げる月は15万円ほどになることもあった。

男性と別れて1人で暮らして働き始めてからは、「自立して自分で生きて行こう」と思って、「少ない給料から節約して貯めて」いたので、多少の貯金があった。半年の派遣契約が切れるたび、愛知県内のマンスリーアパートに部屋を1カ月借り、お金がなくなると「切羽詰まって、派遣会社に電話して、寮付きのところを探す」ことの繰り返しだった。

40歳（2004年）になる手前で、今後のことを「どうしよう」と考えた。派遣という働き方自体が嫌で、別の仕事に就きたいと考えた。

同年、愛知県から神奈川県に転居した。神奈川県に引っ越したのは、「この場所に憧れがあったから」。愛知県で働いていた時に貯めたお金で、1カ月マンスリーアパートを借りて就職活動をした。

しかし、仕事が見つからず、再度、派遣会社に登録して電気機器メーカーに派遣された。時給は1,000円だった。

マンスリーアパートから派遣会社の寮に移り、半年契約で働き始めたが、2カ月で「ラインがなくなる」ということで派遣切りにあった。派遣会社からは、別の派遣先を紹介してもらったが、気に入ったところがなく、「辞めます」と言って辞めてしまった。

辞めた後は退寮し、最初に借りていたマンスリーアパートに再入居した。それから2カ月、求人誌で次の仕事を探した。ハローワークには「行こうとも思わなかった」。切羽詰まらないと動かない」タイプなので、手元にあるお金が残り少なくなると求人誌を見て電話をし、「とにかく部屋付きの寮のあるところで、すぐにも仕事ができるところ」を探した。だから、「余計仕事は長続きしない」のだと思う。

2カ月後の2004年4月、求人誌で派遣の仕事を見つけ、仕事を始めた。今度の仕事は自動車のライトを製造する工場のライン作業で、昼夜交替の仕事だった。夜間の勤務は時給1,100円、残業することもあったので、寮費を差し引いても手取りで15～16万円はもらっていた。「お金を稼がなきゃ」と思っていたので、翌2005年（41歳）4月までの1年間工場働いた。契約更新は、何も言わなければ更新でき、「後で書類書いて」と持ってくるような形で何度も更新した。

1年間で辞めてしまったのは、「仕事の内容が嫌だったから」。「お金にはなるので、『ずっと我慢、我慢』で続けてきた」のが限界にきた。作業自体が自分に向いていない

と思った。

同月、仕事を辞めて派遣先の寮も退寮しなければならず、以前利用していたマンスリーアパートに移った。ライトを製造する工場で1年働いて100万円貯めたので、お金はあった。本来は仕事を探さなければならなかったが、「今まで我慢、我慢の生活だった」ので、「無駄遣いをしてしまった」。そのため、アパートを半年契約で借りていたが、その期間内に仕事を見つけることができず、契約の延長もできなくなり、神奈川県内のネットカフェに移った。その後、ビジネスホテルで寝泊まりもしたが、「だんだんきつくなってきて」仕事を探さなければいけない状態になった。

2005年(41歳)11月、切羽詰まって求人誌を見て電話し、派遣会社の寮に入って仕事を始めた。最初はトイレタリー用品を作る会社で、時給は850円だった。時給が安かったので「辞めます」と言って、約1カ月で辞めた。次に倉庫のピッキング作業に派遣され、約2カ月働いた。時給は同じく850円だった。その後、エレベーターの基盤を作る工場に派遣され、1年働いた。時給は900円だった。この仕事は好きだったが、派遣先会社と派遣元会社の契約がなくなってしまったため、パネを作る工場に派遣され、3カ月働いた。ここの時給は1,000円だった。「単純作業が嫌だった」ので、辞めた。次の仕事は、化粧品会社に派遣され、時給1,000円で夜働いていたが、試用期間中に会社から「辞めて欲しい」と言われ、1週間ほどで辞めてしまった。「えっ、そうなんだ」と思ったが、派遣会社からは「もう紹介するところないよ」と言われ、出て行かざるを得なくなった。

派遣会社の寮を出たため、神奈川県内のネットカフェに寝泊まりするようになった。2008年8月に別の派遣会社に登録し、仕事を始めるまで、ネットカフェでの生活が続いた。

2008年(44歳)8月に派遣会社に登録し、派遣されたのが非鉄金属メーカー。ファイバーを作る仕事で、時給は1,000円だった。この頃派遣会社において、法令遵守のことが問題になったのか、派遣会社から年金と健康保険に入るように言われ、「初めて年金手帳を手にして、保険証をもらった」。以前、別の派遣会社で電気機器メーカーに派遣されていた時、社会保険は希望すれば入れると言われたが、「お金が一杯引かれちゃう」と思って保険に入らなかった。ずっと無保険、無年金だった。

2009年に入り、派遣切りがちょうど問題になっている頃、派遣先では「順繰りにあなたは何日まで」と言われて派遣切りが行われていた。周りが派遣切りされている状況でもあり、仕事内容も嫌だったので自分から「辞めます」と言って、2009年2月に辞めてしまった。雇用保険が受給できることは知らなかったため、雇用保険を申請することはなかった。

2009年2月に派遣先を辞めた後、今までどおり求人誌では仕事を見つけられないと思って、初めてハローワークに行った。「年齢も年齢だし、条件はどんどん悪くなっているし、去年からのこの状況」だから。ネットカフェに泊まりながら、仕事を探した。最初に行ったハローワークでは「冷たくあしらわれた」ので、「二度と行かない」と思い、別のハローワークに通った。

4月後半から、ハローワークで教えてもらってNPOが運営する緊急一時保護施設(シェルター)に入った。

貯金が30万円ほどあったので、「底をつく前に手を打たなきゃ」と思い、生活保護の申請を検討したが、「貯金があったら駄目ですよ」と言われ、この時は断念した。貯金で

シェルターの利用料金を支払ったら、貯金が生活保護受給基準ほどに少なくなったので、NPO職員のサポートを受けて再度生活保護の申請を行った。

5月から生活保護を受給してアパートに入居した。その後も引き続き、ハローワークで仕事を探した。

10月に製造業の仕事が見つかり、働き始めた。現在試用期間中なので、雇用形態はアルバイトである。試用期間が終わると「年齢的なものもあるので」パートになれるとのことである。今回の派遣切りのことで、派遣しか仕事が無かったら別だが「派遣の仕事はもういい」と思った。時給は830円だが、社会保険は完備されているので、「安定だな」と思う。工場までの交通費も会社が全額支給してくれている。

<初職から現在までの経験

(仕事・家族・友人との関係)>

中学時代の友人は特にいない。「浅く1人、2人知っていたくらい」で、工場に就職してからも、連絡を取ったり、一緒に遊びに行ったりすることはなかった。最初に就職した気球製造会社の寮は同室者がいたが、プライベートで遊ぶことはなかった。

23歳の時にキャバレーの仕事で知り合った男性と同棲を始め、36歳まで一緒に暮らしたが、結婚はしていない。36歳の時に関係が上手く行かなくなり別れた。

派遣会社に登録して愛知で働き始めてからは、派遣会社の寮を半年ごとに転々とする生活だった。同じ派遣先会社で働いている派遣社員は20代の若い人が多く、「30代は全然おばさん」で友人ができるようなことはなかった。

<現在の暮らしぶり>

10月にはハローワークで仕事を見つけ、アルバイトとして働き始めたばかりである。試用期間が終われば、パートになる予定である。

社会保険の仕組みを今までよく知らずにきたが、今は会社が社会保険に入ってくれているので安心している。生活保護が支給停止になるほどの給料ではないが、当面は自分の稼ぎと生活保護を合わせて生活していき、なるべく早く自分の稼ぎで暮らせるようになりたいと考えている。

支援をしてくれているNPOのメンバーにはたいへん感謝しており、今後は自分ができることはお手伝いしたいと考えている。NPOが主催する夜回りが定期的に行われているが自分も、メンバーとしてホームレスの支援を行っている。

<仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見>

最初生活保護の申請をした時は、貯金があったので受け付けてもらえなかった。しかし、給料をもらえるまでに貯金が底をついてしまったら、どのように生活すればいいのか。「仕事にありつきました。でもお金はない」では、不安。余力のあるうちに、次のステップに移れるような政策が必要ではないか。

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：21歳 ■ 現住所：東京都 ■ 出身地：東京都 ■ 学歴：高校卒業 ■ 就労の有無：就労中
- 現職：飲食店、飲食店関係職、アルバイト ■ 直近の収入：最初の給料日到来せず / 生活保護受給
- 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身 ■ 住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 航空機機内サービス会社・清掃（正社員、1年半） 新聞販売店・配達と勧誘（正社員、6カ月） 新聞販売店・配達と勧誘（正社員、2カ月） 緊急一時保護施設・自立支援センター（4カ月） 冷凍食品会社・運転（アルバイト、5カ月） 路上生活（2カ月） 無料低額宿泊所入所 + 生活保護受給（受給開始後）雑誌販売・販売（4カ月） 飲食店・ウェイタ（アルバイト、2週間） / 生活保護受給中

< 仕事に就くまで >

1988年、東京都生まれ。

物心ついたころより父親はおらず、母親との二人暮らしだった。離婚か死別かは知らない。

小学校5年生の4月または5月に、母親が職場（デパート）で倒れて入院したのを機に、都内の児童養護施設に預けられた。母親は糖尿病と診断され、「ドクターストップがかかって仕事ができなくなった」ため、生活保護を受ける一方、自分は高校卒業までの8年間同じ施設で生活することになった。母親は、自分が高校2年生のころ（2005年）から入退院を繰り返し、2006年5月に他界した。

施設での生活は、「大家族みたいなもの。一度もケンカしなかった。先生たちとはケンカしても、子ども同士では一切なかった」。母親と暮らせなかったことに関しては、母親と暮らしていた当ても「一人でいることが多かった」ので、「寂しいとは感じなかった」。ホームでは乳児から高校3年生まで常時90名ほどで集団生活をした。卒園する直前に増築され2人部屋になったが、それまでは、多いときで男女別に15人で1部屋に寝ていた。

同施設から都立の工業高校に進学。「工業総合学校という学校で1、2年は機械も電子もやって、3年から機械に進んだ」後、2006年3月に3年間で卒業した。

< 初職からの経験 >

2006年（18歳）4月、航空機の機内清掃と機内貨物を取り扱う会社に就職。「そのころはなんにも考えていなかったんで、学校の先生から『お前、これがいいんじゃないか』と言われて、『空港の仕事か。じゃあ、ちょっとやってみよう』って感じで、学校に来ていた求人の中から同社に就職を決めた。同期入社は約50人。勤務地は成田空港で、会社の寮に住むことになり、入社後機内清掃の担当に決まった。

「空港の仕事ということで、びっくりするくらい勤務時間が長かったです。仕事は飛行機の到着遅れなどに左右されて、残業が日常的に発生していた。建前では4勤2休のシフト勤務だったが、機材が遅く到着し翌朝まで勤務することや、休日出勤が入ることもあり、「労働時間が長すぎる。おかしいなと同僚と話していたら、研修で『労働時間は長いけど、毎月罰金払っているから問題にしないで』と言われた」。しかし、長時間労働で会社を辞めようとは一切考えたことはなく、「一生骨を埋めることになるんだ

ろうな」と漠然と考えていた。

同年10月に国内航空会社の系列会社となり、社名が変更されると同時に、ほとんど残業はなくなった。当時、労働組合についての関心はなかったし、周りで労働組合の活動などが行われていたという認識もなかった。

月給は、基本給12万円、残業代も含めると多いときで手取り18万円程度。2006年10月以降は残業代が減ったため手取り12～14万円程度に減少。毎月、社会保険料と寮費で5～6万円引かれていた。

2007年10月（19歳）航空機の清掃中に掃除機を倒し、航空機のドアの一部（脱出シュートの付け根）にぶつけてドアを「1mm程度」破損させてしまった。「何かあったら大変だと思い、その場で航空会社の整備士に見てもらったら、どんだんいろんな人が集まってきて、結局その飛行機は飛べないことになってしまった」。その後も「上の方」で航空会社と話していることを耳にしたが、同僚も「そんなにおおごとしなくてもいいのに」と言っていたが、ドアに掃除機をぶつけた例が今までなかったらしく、先輩従業員にもどういう処分が下るか分からなかった。ドア一式を交換することが決まったとのことで、2週間後、上司に呼ばれ「上の方でもかばいきれない金額だということになってしまった。罰金は会社が払うから、（懲戒にせず）自主退社にするから辞めてくれないか」と退職を促された。2007年10月に退職し、寮も退去した。

行き場がないので、卒園した養護施設に向かった。施設からは卒園する際「相談があったらいつでも電話をかけなさい」と言われていた。同施設に泊めてもらいながら、仕事を探した。ハローワークやフリーペーパーで探したところに電話しても、「もう募集していない」と断られた。施設に世話になってから2カ月ぐらいいして、「新聞販売店専門の紹介所みたいのが東京都区内にあって」、そこで紹介された千葉県の新聞販売店に就職が決まった。施設はその間、何の文句を言うこともなく生活をさせてくれた。「毎日就職活動をしていたから認めてくれたのかも知れない」。

同年12月、住み込みの新聞販売店に就職。最初の1週間はチラシの折り込みをして、「年内に免許を取ろうとがんばって」1週間後に原付バイクの免許を取り、12月中旬より配達を始めた。起床は1時。1時半には折り込みを始めて、2時には配達に出た。「順路帳みたいのがあって、最初はそれを見ながら配達しました」。販売拡張は大変で「『ギフト』（拡材）がいい他社に取られちゃう。継続ぐらいいしかできなかった」が、拡張、集金とも毎月グラフで表

される成績は平均くらいであった。同店での人間関係は良好。しかし「ギフト」(洗剤)代は半分自腹。集金できなかった滞納分も自腹で、「4カ月滞納していた人の集金ができなくて。引越し先の販売店に確認してもらったけど、『払えない』と言われ、自腹を切られた経験が1回あります」。

給料は基本給15万円、営業成績で3~4万円、集金分で3万円(その月に完納すると5万円)。税引き後で「良いときで25万円、悪いときで21万円ぐらい」。そこから、自分でバイクの保険と、国民健康保険の保険料を支払った。国民年金は「保険料の請求書(納付書)がどさっと届いたときに払ったことがある」。同販売店では10区域しかないのに自分を含め12人の「正社員」の担当者がいたため、社長から「知り合いの販売店で人を探している。君はできる方だから、行って見ないか」と話があった。人間関係が悪かったわけではないが、「環境をかえてみたかった。毎日同じ景色を見ているのもいやになるんで、誘いにのった」。

2008年6月(21歳)東京都の新聞販売店(住み込み)に就職。経験者ということで翌月から販売拡張に入った。同新聞系列では「ギフト」費用を全額販売店側が負担することになっていた上、顧客にギフトカタログを示し、顧客が自分でその中から選ぶ仕組みであった。「ギフト」のグレードが高い上、自分で仕入れの必要もなくなり、拡張は「楽だったし、おもしろいほど(成績を示す)グラフが上がっていった」。しかし同年8月、ある顧客に対し「何の悪気もなく」以前から引き継いでいた禁句を言ってしまった。その顧客が「ブチ切れてしまい、『即止め』(即日契約解除)を食らってしまった」ため、即日解雇された。就職時に「即止めはクビと言われていた。順路帳にも書いてあったのに。前(千葉県)の販売店でも言われていた」ので、解雇に関しての反発はなく、「あーあ、やっちゃった、という感じ」だった。住み込み先も1週間後には出てくれと言われた。

「もうハローワークに行く気はなかったので、フリーペーパーで」仕事を探したが見つからず、1週間後に寮を退去。出身の養護施設には「これ以上迷惑かけられない」と頼らなかった。2008年8月下旬に都内の緊急一時保護センターに入所。同年10月中旬に都内の自立支援センターに移動。入所後すぐに求職活動を開始。フリーペーパーで見つけた仕事を、区の担当のケースワーカーに相談して、同センターの電話で会社に面接を申し込んだ。最長で4カ月しかいられないので、「早く30万円貯めて、アパートを借りようと思った」。フリーペーパーで見つけた求人に「意外に早く、入所して1週間目に、一発ヒットで」アルバイト採用が決まった。

2008年10月末、冷凍食品会社に就職。本社は自立支援センターのある区にあり、勤務地は千葉県。毎朝本社前に集合し、車で勤務地へ向かった。作業内容はフォークリフトを使った荷揚げ。電動フォークリフトの運転は初めてだったので、「ブレーキがなくておっかなかった。止まらない、止まらない。扱いは苦労しましたね」。勤務は8時から17時で残業はほとんどなし。日給8,000円で「正社員も同じ日給だった」。社会保険は適用されていなかった。人間関係は「全然問題なかった」。アパートを借りるための30万円はたまらず、2009年1月、会社の寮に入居。「センターに住んでいることは会社に言ってあったので、最初から寮を空けておいてくれたみたいですよ」。

2009年3月下旬(21歳)いつものように本社前に集合したところ、自分だけ班長に呼ばれ「今日からこなくていい。次長に会いに行ってくれ」と言われた。次長からは「部屋は今日中に出て行ってほしい」とだけ言われた。千葉県の作業所に向かうことなく、部屋の荷物を片付けてまた次長のところに行ったら、給料を渡され「じゃ」と言われ、解雇理由を聞くこともできなかった。「ものすごいあっさりしているな。何がなんだったんだろうと、しばらく不思議に思っていた」。

所持金が尽きた2009年4月後半から2カ月間路上生活を体験。

同年6月より都内にある自立支援事業を行うNPO法人の無料低額宿泊所に入所。同年7月からは別のNPO法人が運営する施設を紹介され、入所。生活保護を受けつつ都内の駅頭で雑誌販売の仕事をした。

2009年11月上旬、「ホームレス・ワールドカップ」でミラノに同行したフォト・ジャーナリストから国際交流のNGO関係者を紹介された。同NGO関係者の知り合いが経営するパレスチナ料理店に行くと、同料理店店長から都内のクラブを紹介され、翌週よりウェイターとして勤務することが決まった。そのため、雑誌の販売は辞めた。勤務日は木金土、勤務時間は20時より翌10時まで。給料は時給と歩合(ドリンクのオーダー)とは聞いているが、額については聞いていない。「詳しい給料明細を給料袋に入れるから。あんうるさい場所で聞いてもしょうがないよ」と言われている。店に入って2週間の感想は「初めての職種でもあり、続くかどうかは、「うーん!」というところですね。客の7割が外国人なんで、まず英語を覚えなければならぬいんですよ」。

<初職から現在までの経過

(仕事・家族・友人との関係)>

高校2年生のときに母親が亡くなり、親戚も知らないため、頼れる親族は全くいない。児童養護施設の職員や一緒に暮らした元入所者とは、今でも良好な関係が続いており、半年に一度は会って、一緒に飲むなどの交流が続いている。

2008年8月(21歳)東京都の新聞販売店を即日解雇され、寮を出た後、「ふらふら歩いていたら」いつの間にか育った街にいた。しかし、出身の養護施設には「これ以上迷惑かけられない」と頼らなかった。1週間ネットカフェにいたが仕事は見つからなかった。「自分の歳だと生活保護は無理だと思ったが、何か施設でも紹介してくれないかと思い」、金がなくなる前に区役所に行った。区役所の福祉課では、最初は話を聞いてくれたが、結局は「うちでできることはない」と言われた。一度相談を受けても、数十分後には再度相談カードを書いた。3回目位から門前払いされたが、相談カードを出し続けたら、「最終的には紙がもったいない」と、7回目の相談の際に、別の区の緊急一時保護センターを紹介された。

2008年8月下旬に同センターに入所。センター全体で60名ほど入所していた。一番下の21歳の者が自分ともう1人いて、上は60歳代で、30~40歳代が最も多かった。12人部屋に住むことになったが、「部屋だけでなくセンター全体で何日か後にはほとんどの人としゃべれるようになりました。フレンドリーな感じで、もうパッチリです。こっちは

ら話しかけられなくても向こうからどんどん話しかけてくれたり」と、すぐに施設にとけ込んだ。同施設は仕事を探す場ではなく、自立する意欲があると判断されたら自立支援センターに移るということになっており、同施設では通院し悪かった肝臓を治すよう指導された。また、自立支援センターに行くことを決めた入所者は緊急一時保護センターに入所している間に資格の取得ができるため、同センターにいる間にフォークリフト、玉かけ、床上操作式クレーン、小型移動式クレーンの資格を取得。「普通免許を持っていなかったの、普通免許なしでとれる資格はすべて取ろうと思った」。

2008年10月中旬、別の区の自立支援センターに入所。1部屋8～12人、全体で60名程度の入所者がいたが、ほとんどが同じ緊急一時保護センターから移動してきた者で「ほぼ顔見知りしかいない」ため、すぐにとけ込んだ。

2009年3月下旬より、冷凍食品会社のアルバイト契約が解除され、社員寮を退去した後、「どうすることもなかったの」その日は同区のネットカフェまで歩いて行き、そこを拠点に生活を始めた。手持ちのお金は12万円程度あったが、4月後半には所持金が尽きてしまい路上生活を始めた。緊急一時保護センターを出てから3カ月以内は、再度センターに入れられないと言われていた。お金がなくなってから一応区役所に行ってみたが、7～8人待ちと言われたので、「待ってもしゃあない。自分で何とかするしかない。路上に出ても何か策はある」と思った。フリーペーパーで探した求職先に面接に行き、交通費と面接費をもらったり、捨ててある本やCDを古本屋に持って行き換金した。食事は、「深夜12時回ったところに弁当屋や総菜屋を回って、賞味期限切れ2、3時間後なら大丈夫だろう」と思い、廃棄物を拾って食べた。電車は中学から無賃乗車だった。同区内の公園で寝泊まりし、雨の日は24時間営業のファストフード店で過ごした。

2009年5月ごろ、卒園した児童養護施設を「一度訪ねてしまった」そこで副園長から「路上脱出ガイド」をもらった。同ガイドに掲載されていた、路上生活者支援のために雑誌販売を行っている会社に電話し販売を希望したところ、「若いから、まだ抜け出せる」と諭され、貧困者の支援を行っているNPOに行くことを勧められた。NPOで入手した生活保護の申請用紙に記入して、以前に保護を受けた区役所にあらためて申請した。「NPO職員に『同行しますか』と言われたが、『1人でいきます』と言いました。『NPOから申請書を提出されたら断れない』と聞いていたので、知っている職員ばかりの区に提出すれば話が早いと思った」から。実際提出したらその場で、保護が決定。「明日から入れるから」と、隣の区にある自立支援事業を行うNPO法人の無料低額宿泊所に入れることになった。

2009年6月より同施設に入所。2LDKの4人部屋に、すでに入所者がいる中に入ることになったが、「普通のアパートみたいところで、緊急一時保護センターみたいにめっちゃめっちゃ人が多いところよりは、入りやすかったですね。和気あいあいという感じ」区役所より「6月30日までに仕事を見つけてください。そうでないと保護を打ち切る」といった趣旨の指示書を渡されていたが、それまでに仕事が見つからなかった。そのため、末日に区役所に保護の延長を求めに行ったが、「すでに切ったよ」と言われたように受け取り、6月末で生活保護が切られると思い、急いで

同施設を退去した。

7月初めに、再び雑誌販売の仕事をお願いに、路上生活者支援のために雑誌販売を行っている会社を訪ねたところ、職員から「保護を切られた理由を聞きに行きましょう」と言われ、同行してもらったところ「指示書の期限を延ばした」という意味だと言われ、「俺が勘違いしていたことが分かった」。それで「もう一度お願いします」といって、別のNPO法人が運営する施設を紹介され、入所。

その後、「ホームレス・ワールドカップ」を通じて知り合った新聞記者から、NPOについてさまざまな情報を聞いたことをきっかけに、10月中旬には施設を離れ、アパートに住むことにした。アパートは家賃月38,000円で、同記者の知り合いの区議会議員に探してもらった。

<現在の暮らしぶり>

2009年5月より、路上生活者支援のために雑誌販売を行っている会社を中心となり組織されている、ホームレス・サッカーチーム「野武士Japan」に所属。同年9月にイタリア・ミラノで開催された「ホームレス・ワールドカップ」に選手として出場。「初めての外国だった上、試合も楽しかったし、テント村での他の国の人たちと交流しているんな情報交換ができて、すごくおもしろかった」。小学校から高校までサッカーをやっていたが、「ずっと身体を動かしていなかったの、動かすのもいいかなと思った。やっていたら、いつの間にかイタリアに行っちゃって」と、現在はサッカーに夢中。帰国後も「野武士Japan」の活動に積極的に関わっている。「ヨーロッパでは国や有名サッカーチームが関わって選手を選抜しているし、テレビでも中継するほど有名なのに、日本政府は多分知らないんじゃないか」。企業を訪問しスポンサーの継続や新規スポンサーの開拓に取り組んでいる。なお、「ホームレス・ワールドカップ」への参加費用は協賛企業からの寄付で賄われた。

生活費や「好きなプロサッカーチームの試合があれば、見に行くためにお金を借りていた」ため、現在借金が「サラ金3社に100(万円)前後ある」。返済ができず簡易裁判所から出頭を求められたこともあるが、行かなかった。法テラス(日本司法支援センター)に相談し、取り立てはストップしている。自己破産の手続きを取る予定だが、手続きに20万円程度必要であり、まずはその費用を貯めてから申請と言われており、まだ手続きはとれていない。

<仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見>

行政が一番お願いしたいことは、「役所の住所を貸してくれないか、ということ。ただそれだけ」。「若者のホームレスが増えていきますけど、住所がなければハローワークでも門前払いになってしまう。自分もホームレスのときにハローワークで『出て行ってください』と言われた。仕事を探す上では、住所があることが一番大事。住所さえ貸してくれば、若い人は住み込みの仕事を見つけられて自立できるんです」。

<将来の展望>

2週間前に始めたクラブの仕事が続くかどうかは分からないが、「路上に戻らない」ことをとりあえずの目標とし

ている。「販売者のときは、できるだけ早くこの状況を脱しなければと思っていたし、販売者に戻ったらまた元に戻ってしまう。せっかくアパートを借りた意味もなくなってしまった」と考えている。

初出場した2009年の「ホームレス・ワールドカップ」は不戦勝の2勝のみで48カ国中46位という結果に終わった。

2010年10月にブラジル・リオデジャネイロで開催される次期ワールドカップには、一度出場した者は再度出場できないので、ボランティアとして行きたいと考えている。「いつかは日本でホームレス・ワールドカップを開きたいなど皆で話しているんです。でも、キャンプ村の確保や、亡命があるから難しいかな」。

調査番号：東京54

調査日：11月24日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：47歳 ■現住所：東京都 ■出身地：大阪府 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：新聞販売店、新聞配達員、アルバイト ■直近の収入：月10～15万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：新聞販売店住み込み
- おおまかな職歴：専門学校卒業 録音スタジオ・映写（アルバイト）、引っ越し運送会社・作業員（日雇い派遣）（あわせて1年） カバン卸小売会社・販売（正社員、8年） アパレル（アルバイト）、引っ越し運送会社など・作業員（日雇い派遣）（あわせて2年） 生活雑貨小売会社・販売（正社員、6年） 居酒屋・店員（正社員、1カ月） 引っ越し運送会社など・作業員（日雇い派遣、2年） 乳幼児用品小売会社・事務（契約社員、3年半） 引っ越し運送会社など・作業員（日雇い派遣、1年） 新聞販売店・新聞配達（アルバイト、1年半） 病気のため静養（3カ月） 新聞販売店・新聞配達（アルバイト、半年） 静養（1カ月） 日雇い派遣、路上雑誌販売など（3週間） 緊急一時保護センター（3週間） 自立支援センター（2カ月、途中で登録型派遣で働く） 緊急一時保護センター（2カ月） 自立支援センター（2カ月） 新聞販売店・新聞配達（アルバイト、1年） 現在に至る

< 仕事に就くまで >

1962年、大阪府生まれ。

家族構成は、両親、姉との4人。

1983年、21歳のとき、東京都内にある放送関係の専門学校を卒業した。専門学校時代の思い出で楽しかったのは、グループでの卒業制作である。当時はマスコミブーム、広告ブームの頃で、憧れからテレビ関係の仕事に就きたかった。学校の紹介、あっせんもあったので面接も受けたが、受からなかった。

卒業と同時に就職できず、その後1年間、就職活動を続けながらアルバイトでつないだ。家からの仕送りはなかったが、食料は送ってくれた。その頃はまだ切羽詰まっていなかった。一番長かったアルバイトは録音スタジオの映写係の仕事で、時給800円台で1日4～5時間働いた。その他にも、日雇い派遣で引っ越し業者でも働いた。すべて合わせて月収は10万円くらいだった。言い訳になるが、結果的にアルバイトの方に力を入れてしまったので、希望どおりの就職ができなかったのかもしれない。

< 初職からの経験 >

1984年2月、22歳のとき、マスコミの仕事とは関係ないが、求人情報誌で見つけた都内のカバン販売店に正社員として就職が決まった。直営店が3店舗あり、卸売もしている会社だった。勤務した店舗は、正社員5～6名、パート15名くらいの規模だった。中高生を対象としたカジュアルなバッグの店頭での接客を担当し、手取り月収13～14万円

だった。開店時間は午前10時から午後9時までで、9時間拘束、8時間実働で早番遅番のシフトがあった。仕事上でつらかったこと、大変だったことはとくになかった。人間関係で困ったこともなかった。マスコミへの就職に挫折したこともあって、漫然と仕事をしていた。

1992年、30歳までの8年間、カバン販売店に勤務した。大阪の実家の都合で、カバン販売店を辞めて実家へ戻ることとなった。

実家の問題はすぐに解決したので、大阪で就職先を探すことにした。2年間弱、就職活動をしながらアルバイトをした。実家から通っていたので、金銭的に生活に困るということではなかった。アルバイトは、カジュアルウェアを扱うアパレル会社、単発の日雇い派遣などだった。このときは、まだそれほど日雇い派遣が問題になっていない時期だったせいか、100円天引きされていることに何の疑問も持たなかったし、肉体労働自体には「しんどい」という不満はあったが、まだ若かったので「こんなもんか」程度に思っていた。アパレル会社のアルバイトよりも、ガテン系の日雇い派遣の方が給料はよかったが、仕事があつたりなかったりで、明日の保証はなかった。派遣会社を複数登録して、仕事がある方に行っていた。

求人情報誌で就職先を探して、2～3社に応募した結果、1994年、32歳のとき、大阪にあるビルにテナントとして入っていた生活雑貨販売店に正社員として就職した。ここは鉄道会社がオーナーのフランチャイズ店で、正社員4名、契約社員6名、アルバイト20名くらいの規模だった。ここでは店頭接客を担当した。開店時間は午前10時から午後9時までで、実働時間は8時間だった。このときの手取り月収

は14~15万円だった。もともとこの店の生活雑貨が好きだったので、働きがいがあったし、楽しかった。ただ問題だったのは、このときの店長が、オーナーである鉄道会社からの出向者で、販売している製品に対する感性が欠けており、加えて従業員を大切にできなかったことである。この店舗には6年間勤務した。

グループ企業のサービス部門が経営している居酒屋が同じビルにテナントとして入っており、2000年、38歳のとき、そこへ異動になった。しかし、体育会系の職場の雰囲気はどうしてもなじめず、1、2カ月で退職した。

その後2年間、就職活動をしながらアルバイトを始めた。このときは長期間のアルバイトではなく、日雇い派遣の仕事に専念した。「ピンハネされているな」とはわかっていたが、声を大にして言うことはなく「こんなもんかな」と思っていた。まだ実家で暮らしていたし、貯金も取り崩していたので、生活自体に困ったということはなかった。次の就職先を決めずに仕事を辞めてしまう傾向があると自覚している。雇用保険には加入していたが、待機期間のうちにすぐに次の就職先が見つかるだろうと思って、雇用保険の失業給付も申請しなかった。

正社員の仕事を探したが、なかなか見つからず、2002年、40歳のとき、大阪の乳幼児用品を扱う会社に、半年契約の契約社員として就職した。この会社は、日雇い派遣をしていたときにお中元などの商品包装の仕事で行ったことがあった。会社の方から声がかかり、それが就職のきっかけとなった。担当した業務は、一般商品のギフトカタログに申し込んだ顧客への電話対応や配送手配だった。実家から通勤し、午前9時から午後5時までの勤務時間で、残業はほとんどなかった。手取り月収は14~15万円だった。このときに仕事上でパソコンを教えてもらった。この会社に3年半勤務したが、2005年、43歳のとき、会社の営業成績の落ち込みにより契約打ち切りとなった。半ばリストラのよな感じだった。

その頃には、すでに大阪府内でひとり暮らしを始めていた。実家にいられる年齢でもなくなってきたし、通勤時間も軽減しようと思い、その会社を辞める前の時期に、職場に近い場所に引っ越していた。家賃は4万円くらいだった。

乳幼児用品を扱う会社を退職後1年間くらい求人情報誌を頼りに就職活動をしていたが、貯金が底をつき始めたため、日雇い派遣の仕事がメインの生活になった。日当7,000円前後で、多いときで1カ月のうち半分が日雇い派遣の仕事で埋まった。仕事がない時期は、まったくなかった。

ひとり暮らしを始めた頃から、実家とは疎遠になっている。とくに理由はなく、自分が家族との壁をつくっているのかもしれない。

2006年、44歳のとき、求人誌で見つけた大阪での住み込みの新聞配達のアパートに就いた。貯金をするため、映画を観るといった趣味の時間が欲しかったため、比較的昼間の時間が自由になる住み込みのこの仕事を選んだ。とくに書面での契約もなく、求人誌に書いてあった労働条件を口頭で説明された。こちらから辞めると申し出なければ、ずっと勤められた。その新聞店が民間アパートと契約していたので、その4畳半の1部屋に住んだ。集金や勧誘などの新聞配達以外の仕事はしなかった。朝3時過ぎから6時半まで、午後2時過ぎから4時半までが新聞配達の実働時間だった。光熱費が引かれ、手取り月収は13万5,000円程

度だった。

「東京に戻りたい」、「アパレル関連の会社に行きたい」という気持ちがもともと強く、そのために貯金もした。ところが、メニエール病を発症し、めまいで朝の新聞配達ができなくなってしまった。1年半ほど働いたが、新聞配達店を辞めた。

辞めて3カ月ほど経ち、症状が少し治まって安定したと思いき、2007年夏、45歳のときに再び東京に戻った。携帯の求人サイトで見つけた都内の新聞配達の仕事にまた就いた。新聞販売店の2階に住み込んだ。仕事は新聞配達のみをし、それ以外の時間は就職活動に使った。アパレル関連の店に行き、その求人が出ていないかを探したりしていた。新聞店の手取り月収は14万円だった。この職場で抑圧を受けたり、仕事に不満があったりということにはなかったが、人間関係があまりよくなかった。同僚とそりが合わなかった。

2008年2月、46歳のとき、メニエール病が再発し、大阪時代よりも症状は重くなっていた。医者は「睡眠不足とストレスが原因ではないか」と言っていた。新聞配達はいレギュラーな時間帯に仕事をするし、その合わない人と一緒に仕事をしなければいけないとか、希望どおりの就職ができないなどのストレスがあったのだと思う。医者から、手術するか、あるいは仕事を辞めて静養するかの選択を言い渡され、手術代は支払えないので仕事を辞めて静養することにした。新聞販売店を辞めざるをえなかったため、住まいもマンスリーマンションに移した。2週間静養し、残り2週間で次の就職先を見つけようと思っていたが、見つからなかった。通院はしなければならぬので通院代がかさんでいった。

1カ月後、貯金がとうとう尽きてきた。役所で緊急一時保護センターに入所できないかと相談に行ったが、1カ月待ちの状態と言われ、あきらめて実家に頼るつもりで大阪に戻った。大阪に帰るだけのお金はなんとかあった。しかし実家に連絡する勇気がなかった。結局、大阪の緊急一時保護センターの入所申請はしたが、ここでも3週間待ちだった。わずかな残金、日雇い派遣で生活をつなぎ、ドヤ街に何度か泊まることで2週間はどうかしのげた。残り1週間がにっちもさっちもいなくなり、シェルターに泊まり、そこで路上生活者が雑誌を販売する会社のことを思い出した。携帯電話はなんとか使用できたので、場所を調べてアポなしでここを頼って行き、5日間だけ路上で雑誌を販売した。

その後、すぐに大阪の緊急一時保護センターに入所することができた。就労と就職活動はいっさいできず、1週間のたばこ代くらいのお金が支給された。何にもできないので、1日中寝ている人がほとんどだった。精神上あまりよくなかったため、自分は散歩に出かけたりしていた。3週間後、持病があることをアピールしたが、就労には問題ないと判断され、自立支援センターに入所することになった。ここの入所期間は3カ月がリミットで、6カ月までは延長が可能だった。その間にアパートを借りる資金を貯めて退所するというようになっていた。自立支援センターではハローワークと提携し、就職先をあっせんしていた。ハローワークの職員が求人案件を持ってきたり、相談にのってくれたりした。しかし自分はハローワークの求人には興味なかった。携帯の求人サイトで見つけた派遣会社に登録し、登録型派遣で1カ月間、百貨店のバックヤードでの品出し、

在庫取りなどあらゆる雑用の仕事をした。このときの手取り月収は16万円だった。

もともと東京志向が強かったこと、センター施設では同部屋に10人程度が住んでいたが、その人たちとうまくいかず不満が募ったということもあって、2008年7月、給料をもらったその日に東京に戻った。翌日、役所に行き、センターへの入所を申請した。東京の緊急一時保護センターでは入所するのに6日間待たされた。ここの入所期間は最大2カ月がリミットだった。通常、自立支援センターに空きが出ないとそちらに移れないので、待機期間にストレスがたまる。自分は69日間待たされたが、大阪時代にお世話になった雑誌販売の会社が東京にもあり、そこにボランティアで行っていたので、リフレッシュでき、まったくストレスがたまらなかった。

2008年10月に自立支援センターに移り、就職活動を始めた。ここで入所は2カ月がリミットで、最大4カ月まで延長できた。入所して2週間で仕事を見つけられなかった人は住み込みの仕事をお勧められ、2週間前後で仕事が決まった人は、最大4カ月かけてアパートの資金を貯めなさいと言われる。自分は2週間で仕事を見つけることができなかったので、携帯の求人サイトで住み込みの仕事を探した。リミットぎりぎりだった。もし入所期間のリミットを過ぎたら、基本的に放り出され、路上に戻ると聞いている。

2008年12月からは、都内の新聞販売店に住み込みで、新聞配達のアルバイトの仕事をしている。この業界は長くなってきたので慣れた。面接のさいに、店長には自分の境遇をすべて話した。それを理解したうえでお世話になり、よくしてもらっている。現在の手取り月収は13万円以前よりも少なくなったが、あまり使うところがないので、貯金できている。アパレル関係の仕事をめざして、就職活動は今も続けている。

<現在の生活状況>

新聞配達の仕事なので、深夜2時に起床し、夜7時には就寝している。100円均一の店で食材を購入し、自炊する生活である。

現在、雇用保険には加入していない。会社勤めのときには加入していたが、失業したときに給付の申請に行ったことがまったくない。

医療保険については国民健康保険に加入しており、保険料もしっかり納めているが、昨年の収入がゼロなのでかなり安い。メニエール病を発症したときは、生活に困っていませんでしたので自費で通院できた。生活に困窮していたときに受診できなくて困ったのは、歯痛と風邪である。

国民年金は、ひとり暮らしを始め、大阪での契約社員の仕事を辞めてからのここ4年くらい未納である。

これまで勤めた会社には労働組合がなかったため、労働組合との接触はまったくなかった。

家族、親戚縁者と連絡を取る勇気もない。

本当に困ったときに頼りになるのは、かつて自分が生活に困っているときに助けてくれた雑誌販売の会社である。本当に感謝している。今でもボランティアに行くことができ、不本意な生活のなかで、ここは唯一リフレッシュできる空間である。自分にとっての大切なつながりである。

<本人の不安や要望>

今自分がこのような状態になっているのは自業自得だ。基本的には自己責任だと思う。もちろん、社会のしくみがおかしいのはわかっているが、病気になったのも、ホームレスになったのも、自分のせいだと思っている。

今一番の不安は、持病のこと、就職のことである。今はマイナスの状態なので、自立してまずゼロの状態に戻さないと、次のビジョンも描けない。だからまずは就職したい。

将来に対する漠然とした不安もある。すべて自分の病気と関係しているのだと思う。例えば、世間一般の生活に戻れるかどうか心配である。

政府への要望としては、医療費の自己負担をもっと軽減してほしい。自分の場合、薬代が高くなってしまい、3割負担が非常にきつい。

また、かつて緊急一時保護センターから自立支援センターに移るとき、自分の病気が難病にも指定されているのに、なぜ就労可能と判断されたのか、その基準がよくわからない。雑誌販売の会社のスタッフも、自分のようなケースは生活保護の対象になると言っていた。知識さえあれば、堂々と申請できると思う。かつて自分もまったく知識がなかった。生活困窮者、路上生活者は、そういった制度に関する知識に乏しいことが多い。そういう知識は必要である。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：27歳 ■現住所：東京都 ■出身地：東京都 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：建設業、建設・土木関係職、日雇い ■直近の収入：スロットで稼ぐ(月5~10万円未満)
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：ネットカフェと個室ビデオ
- おおまかな職歴：高校卒業 酒屋・店員(アルバイト6カ月、高校在学中より継続) 酒屋・店員(アルバイト、4カ月)+居酒屋・店員(アルバイト、4カ月)、かけもち 警備会社・警備(アルバイト、1年半) 警備会社・警備(契約社員、1年5カ月) 無業(6カ月) レンタルビデオ店・店員(アルバイト、1年) アルバイトやスロットで生活(約3年) 拘置所(2カ月) 更生保護施設(2カ月、印刷会社でのアルバイトを経験) スロット生活 派遣村 生活保護受給(4カ月) ホストクラブ・ホスト(アルバイト、3カ月) スロット生活(20日) 建設業の飯場・建設土木作業員(日雇い、15日) スロット生活(2カ月) 現在に至る

< 仕事に就くまでの生活(家庭・学校)>

1982年、東京都生まれ。

父親・母親・3人兄弟の5人家族である。

2000年3月(18歳)に、普通高校を卒業した。正社員として働こうとは思わなかった。「あまり、会社とかに縛られるのが、好きじゃないから。基本、周りのみんなは大学や専門学校に行くことが多かった。大学はお金がないので……(自分は行けなかった)、それだったら、働いたほうがいいかと思って。学校の進路相談では、あまりうるさく言われなかった」。

< 初職から現職までの職歴 >

2000年4月~2001年1月(18~19歳)

高校1年生(1998年、16歳)から、酒屋で週4日、17:00~21:00までのアルバイトをしていたので、高校を卒業した2000年4月(18歳)からも、その仕事を続けることにした。月曜日~金曜日は17:00~21:00まで働き、日曜日だけ8:00~21:00くらいまで一日中働いた。当時の時給が750円だったので、月収10万円弱くらいだった。

2000年10月(19歳)から、居酒屋でのアルバイトを掛け持ちすることにした。週4日、22:00~5:00のあいだ働き、時給1,100円くらいだったので、月収12万円くらいだった。両方を合わせて、月収20万円ちょっとだったと思う。ただ、長時間働いているわりには稼げなかったので、2001年1月頃に両方とも辞めた。

2001年2月~2002年7月(19~20歳)

2001年2月(19歳)から、求人誌を通じて警備員のアルバイトを始め、交通誘導などの仕事に就いた。自分が警備会社に電話して、仕事をもらうスタイルだったが、最低でも週6日は働いていた。基本は9:00~17:00くらいだったが、実際の勤務時間は現場によってばらばらだった。給料は、日給制で8,500円、平均月収は24~25万円くらいだったと思う。ただ、本当に忙しい月は34~35万円くらい稼いでいた。社会保険の話は一切なく、何も加入していなかったと思う。この仕事は、1年半ほど続けた。2002年夏のアルバイト中、別の警備会社からスカウトされたので、その会社に移ることにした。

2002年8月~2003年12月(20~21歳)

今度は、別の警備会社で契約社員として働き、施設に常駐して、受付や案内の仕事に従事した。勤務時間は現場によって異なったが、前の職場よりも若干延びたと思う。支払い、日給制から時給制に変わったが、平均月収は24~25万円くらいで、前の職場と大きく変わらなかった。ただ、雇用保険・健康保険・厚生年金には加入することができた。

前の職場と比較すると、その良し悪しは、「結局、会社に入ってくる仕事の量によると思う」。1年半くらい経ったあと、月の稼ぎが一気に悪くなって、仕事を辞めざるをえなくなった。いちばん稼いでいた時期で月収30万円くらいだったが、この時期は20万円に満たない額にまで落ち込んだ。なぜなら、現場の条件が悪く、長時間拘束されている割に労働時間が短くなってしまったからだ。「自分で言うのもなんだけど、いい働きはしていた。当時、業界で初めて駅での警備に参入できたので、警備会社もいい人材を投入した。それなのに、稼げない。ほとんどの人間は愚痴を言っていた」。他の現場に回してほしいと言っても、その警備会社ではまだ新入りだったので、ちゃんと要望が聞いてもらえなかった。当時、趣味のスキューバ・ダイビングのために約30万円のローン(借金)を抱えていたので、給料が減ると返済に困るようになってきた。家族と一緒に住んでいたアパートの家賃も半分払っていたので、給料の減額は厳しかった。そこで、仕事を辞めることにした。仕事を辞めてから、「やる気がなくなって……。それまで、働きすぎたということもあるんですけど。ずっと毎日仕事をしていたので、一気に糸が切れた」。

2004年1月~2005年6月(21~22歳)

しばらくは無業だった。「そのときは、働く気力がなかった。たぶん、うつかなんかじゃないかな。やる気がなくなった」。このとき、前の職場で雇用保険に入っていたので、1度だけハローワークに行った。でも、「書類を出したり、給付が始まるのがずっと先だったりして、すごく面倒くさい感じがかった。当時は本当にやる気がなかったの、結局何ももらわなかった」。ほとんど家にいて、何もしない状態が半年くらい続いた。家族と一緒に暮らしていたので、生活は大丈夫だった。

その後、2004年7月(21歳)から、家の近くのレンタルビデオ・チェーン店でアルバイトを始めた。週5~6日出勤して、17:00~2:00まで働いた。通常時間だと時給950

円、深夜時間だと時給1,100円で、月収20万円弱だったと思う。1年くらい経ったあと、仕事を辞めた。

2005年7月～2008年12月（22～26歳）

この頃、家にいるのが嫌になって、家を出た。「もともと兄弟、特に兄と、そりが合わなかった。兄はけっこう自分にはきつく当たる。自分は、あまり関わらないようにふるまっていた。言っていることが、あまりにも理不尽だという感じがした」。そのとき、3歳上の兄は、正社員として働いていた。

それから、「家なし」の不安定生活が始まった。友だちの家に泊まりつつ、友だちと同じアルバイトを2カ月ほどした。それ以外のときは、スロットで生活費を稼ぎ、ネットカフェや個室ビデオで寝泊まりした。

この時期、いろいろなところへ歩いて旅に出た。特に目的もなく、静岡県や福島県に出かけ、寝泊まりも外だった。「ある程度のところまで行くと、おれは何をしているんだろう」と思って、帰ってくる感じだった。

福島県に行ったとき、日常生活で使う折り畳みナイフを持っていたら、「銃刀法違反」で警察に捕まってしまった。住む家もなく、身元引受人（家族）との連絡もつかなかったため、裁判となり、有罪になって罰金刑が言い渡された。ただ、2カ月ほど未決拘留だったので、その日数分を金額換算して実際の罰金は帳消しになった。おそらく、住所があるか、身元引受人がいれば、裁判にならなかったと思う。裁判が終わったあと、福島県の更生保護施設に行き、仕事や家を探すことになった。そして、大きな印刷工場で印刷工のアルバイトを始めることになった。ただ、2カ月ほど働いたあと仕事を辞め、更生保護施設も出るようになった。東京に戻り、またスロット生活を始めた。

2009年1月～2009年5月（26歳）

スロット生活をしていても、お金の困るようになったので、知り合いと一緒に「派遣村」に行くことにした。テントで寝泊まりして、炊き出しを食べた。「派遣村」の相談員に紹介されて、生活保護の申請をすることになった。申請が通ったので、2009年2月（26歳）から、東京都内でアパートを借り、仕事を探し始めた。でも、なかなか自分の希望する条件に合う仕事が見つからなかった。特に、労働時間の短い仕事しかなく、自分のほしい給料に見合う求人がなかった。このときも、アルバイトを探した。正社員の経験がないので、「正社員の仕事となると、よく分からない。何も言えなくなってしまう」。さらに「生活保護のお金をもらいに行くのも、やはり苦痛だった。この若さでということが……。まわりの人間は歳を取っている。変なプライドと言えば、プライドかもしれない」。朝から生活保護をもらうために並ぶことが、何よりもいちばんつらかった。

4カ月ほど経ったあと、アパートも出て、生活保護ももらわないようになった。少し早まったかなと思うこともあった。ただ、「どっちにしる、（現状のままでは）だめだったと思う。自分で動いてやったわけではない。ほとんど、派遣村の流れでやってもらったのだから」。

2009年6月～現在（26～27歳）

このあと、ホストクラブでホストのアルバイトを始めた。週5～6日出て、16:00～2:00くらいまで働いた。最低

限の日給が8,000円だったが、毎日2,000円の前借りをしていった。お酒を飲んだり、お客を見つけたり、仕事はたいへんだった。そのときは、家がないことが職場にばれないよう働いていたので、気を使った。自分には、合わない仕事だった。結局、3カ月で辞めることになった。

2009年9月（27歳）から、再びスロット生活に戻った。9月下旬から、建設業の飯場に行って15日間の日雇い契約で土工（建設・土木作業員）の仕事をした。今も住まいがないので、アパートを探している。現在、新たに「住宅手当」制度^{（注1）}ができたので、申請しようと考えている。

< 仕事に就いてからの生活 >

2002年8月（20歳）頃、父親と母親が別居して、兄弟全員が母親と一緒に東京都で暮らすことになった。母親はパートで働いていたが、家賃は兄と自分が半分ずつ払うことになった。その後、2005年7月（22歳）頃、家を出た。現在、家族とは音信不通になっている。勤当ではないけれども、自分も戻るつもりはない。「家族じゃない。もう、感覚が同居人になっている」。もともと父親と母親の仲が悪く、小さいときから一人ですることが当たり前だった。

自分のこれからの将来を考えると、「住宅手当の申請（の結果）によって違ってくるけれども、普通の生活をしようと思っている。今回は、自分の力で全部やるので」。住宅手当のほかに、社会福祉協議会の「臨時特例つなぎ資金貸付」^{（注2）}があるらしいが、これには申請しないでおこうと思っている。「家さえ手に入れば、仕事はどうにかなると思う」。家が決まらなると、探す仕事限定されてしまう。

ある時期から働かなくなった背景には、「人生におけるあきらめ」があると思う。「けっこう、普通の人を経験しない体験を多くしている。嫌な面を見てきている。生きる気力がないわけではないが、そこまで生に執着があるわけでもない。死ぬなら死んだで、まあいいか（という感じを持っている）。2003年12月（21歳）に警備員を辞めたときが、「自分の人生のターニングポイント」だと思う。仕事以外のことで、その時期は重要だった。

< 社会に対する意見（政治・労働組合・NPO） >

仕事に関する社会サービスについて言うと、ハローワークを使ったことはあるけれども、「意外と使い勝手が悪い。自分の条件を当てはめて仕事を探すと、求人が少ない」。

労働組合については、接点がない。漠然としていて、イメージがぜんぜんわからない。

将来については、「不安しかない。普通に正社員として会社に入ったとしても、手に職でもない限り、給料が良くならない。高卒や大卒で会社に入っても、初任給が15万円くらいという話を聞くと、正社員として働くのが嫌になってしまう。自分の知り合いでも、実家で暮らしているから問題ないけど、一人暮らしだと生活もできない」。自分がアルバイトや契約社員で30万円稼いでいた時期に、この話を聞いたので、正社員の仕事を探そうと思えない。

政治の未来については、「もう無理でしょう（笑）。この生活に入ってから、テレビも見ない。政治の話聞いても、（生活水準が）下がっているということしか分からない」。

(注1)「住宅手当」(住宅手当緊急特別措置事業)は、2009年10月にはじまった離職者支援のための緊急措置の一環である。制度の趣旨は、離職者であって労働能力及び労働意欲のある者のうち、住宅を喪失している者あるいは喪失する恐れのある者を対象として、住宅の確保(住宅喪失の予防)及び就労機会の確保を支援することを目的とする。地方自治体とハローワークによる就職支援を受けながら、地方自治体から賃貸住宅の家賃のための手当の支給を最長6カ月間受けることができる。

(注2)「臨時特例つなぎ資金貸付制度」も住宅手当と同様に、2009年10月にはじまった離職者支援のための

緊急措置の一環である。制度の趣旨は、次のようになっている。離職などに伴って住居を喪失し、その後の生活維持が困難である離職者に対して、その状況に応じて公的給付制度(失業等給付、住宅手当、生活保護など)または公的貸付制度(就職安定資金融資、総合生活資金貸付)による支援を行う。「臨時特例つなぎ資金貸付」は、こうした公的な給付・貸付制度等の申請が受理されており、かつ当該給付等の開始までの生活に困窮している住居のない者が、社会福祉協議会から、その間の当座の生活費の貸付を受けることができる制度である。1カ月の限度額は、10万円となっている。

調査番号：東京56

調査日：11月22日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：38歳 ■現住所：東京都 ■出身地：北海道 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：建設業、建設・土木関係職、日雇い
- 直近の収入：勤労収入なし(2カ月前までの建設・日雇いで月3～5万円未満)
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：緊急一時保護施設
- おおまかな職歴：高校卒業 化学製品メーカー・生産(正社員、5年) 無業(6カ月) 警備員・販売員・引越し作業手伝い・倉庫整理など(アルバイト、1年半) 警備会社・警備(正社員、4年) 野宿生活 建設業の飯場・建設土木作業員(日雇い、9年10カ月) 野宿生活(1カ月) 緊急一時保護センター(4日) 現在に至る

<仕事に就くまでの生活(家庭・学校)>

1971年、北海道生まれ。

工業高校の工業化学科を卒業。家があまり裕福ではなく、大学には行きづらかったので、就職しやすいよう工業高校を選んだ。当時は、化学が土木建築を考えていた。高校時代は、「可もなく不可もなく、普通に過ごしました」。高校卒業後、学校推薦で就職することになった。当時は景気も良かったので、仕事は選べるくらいあった。今では考えられない。

<初職から現職までの職歴>

1990年4月～1994年(18歳～23歳)

1990年4月、化学製品メーカーのゴム・プラスチック製品工場(埼玉県)で正社員として働き始めた。この工場での作業内容は、ガムテープやビニールテープの製造である。機械にフィルムを流して、さらに糊を流し、それを乾燥させる。そのあと、再びフィルムを巻き取って断裁し、テープができあがる。当時の勤務は、1日8時間で、3交替制だった。残業として、デスクワークや品質管理活動(QC:Quality Control)などがあつた。ただ新米だったので、残業も簡単な作業が多く、週に2～3時間程度だった。当時の月給は20万円ちょっとで、冬のボーナスが50万円くらいだった。1年目の年収が300万円くらい、2年目の年収が350万円くらいだったと思う。社員寮暮らしなので、ご飯は食べられるし、売店で生活必需品もツケで買った。

もちろん、雇用保険・健康保険・厚生年金もしっかりしていた。「お金のやり取りをしなくても暮らせた。(当時の生活は、)僕が勤めたなかでいちばんいいですよ」。

ただ、5年間勤めて、仕事を辞めた。当時、「けっこう人間関係が。分かりやすく言うと、嫌な人間が何人かいて。我慢していたんですけど、結局、嫌になって辞めてしまったんです。今にして思えば、もったいないことしたなって思います」。いやがらせも受けた。上司に相談することもなく、「当時は、辞めたい一心で辞めました」。手続きが面倒だったので、失業等給付をもらうこともなかった。

1995～1996年(24～25歳)

仕事を辞めてから、北海道の実家に帰った。6カ月くらいは何もせず遊んでいた。その後、ばつが悪くなって、アルバイトを始めた。警備員・中古ショップの販売員・引越し作業の手伝い・倉庫整理などのアルバイトを、1年半くらい続けた。アルバイトは、仕事によって日払い(5,000円くらい)もあれば、月払いもあった。

それから、実家の家計が厳しくなってきたので、家のローンなどを立て替えているうちに、サラ金に30万円ほど借金をすることになった。ただ、借金を返すにも、北海道は賃金が安いので、関東に行ったほうが早く稼げると思い、上京することにした。

1997～2000年(26～29歳)

東京都の警備会社に正社員として勤め始め、昼勤だと8:00～17:00、夜勤だと20:00～5:00だった。当時は、

地下鉄の建設作業が多くて、とても仕事が忙しく、かなり残業代がついた。給料は、昼勤で日給9,000円、夜勤で日給10,000円、それに70～80時間分の残業手当と皆勤手当がついて、月収30万円強だったと思う。この会社は、厚生年金はなかったが、雇用保険と健康保険は完備していたと思う。

給料がよかったので、最初は借金を順調に返済していた。だが、ギャンブルにはまってしまい、結果的に借金が膨らんでしまった。「それで、だんだん嫌になってきたという感じです。そのままずっと真面目に（借金を）返しければ、問題はなかったと思います」。勤め始めた頃は、会社が社員寮を持っていたが、業績悪化に伴って寮を維持できなくなった。そのため、会社から、社員寮を出て自分でアパートを借りよう言われた。当時は、仕事も減ってきた時期だったので、何もかも嫌になって辞めてしまった。ギャンブルもうまくいってなくて、イライラしていたことも重なっていたと思う。

2001～2009年8月（30～38歳）

警備会社を辞めて、「当時、ギャンブル癖が悪かったので、上野とかカプセルホテルに泊まって、パチンコを打っていました」。パチンコ生活は1カ月ぐらいいしか続かなかった。「お金もすべて使っちゃって、住むところもないし、ふらふらと何日かアオカン（野宿）をしながら…。当時、ふらつき歩いていて、スポーツ新聞を拾ったんですけれども、その仕事欄に飯場があって…。そのときは、ぼくは『土方（ママ）』って何か、よく知らなかったんです。日当いくらで、宿付き、三食付き、日払いみたいな感じで、出張のかたちで募集が出ていました」。結局、その仕事に応募して、大阪に行くことになった。このとき飯場を選んだ理由は、寮付きと日払いが自分の生活にとって最低条件だったからである。「例えば、ちょっと身元も不確かだとか、連絡先がないとか、そういう条件も加味すると、飯場は行きやすい。身分証はあるかとか、言われないし」。警備員の場合は、研修を受けないといけないので、飯場よりも身元のことは厳しい。

大阪に行って、建設会社の飯場で土工（建設・土木作業員）の仕事を始めた。「当時、仕事の内容から、道具から、まったく分からなくて、『仕事分からない』と言うと、仕事がもらえないんですよ」。この建設会社では、自分からできることを申し出る積極的な人材が好まれて、新人には厳しく、結果的にぜんぜん仕事にありつかなかった。ただ部屋代と食事代は毎日引かれるので、赤字だけが増えていった。それで、近くの大きな寄せ場で仕事を募集していると聞いたので、その飯場から「トンコした（途中で逃げ出した）。赤字も払えきれなくて、仕事もつかないし。そこから、土木作業員の生活が始まったんです」。

このとき以降、8年間ずっと、主に飯場を行ったり来たりする生活を続けてきた。大阪では、ほとんど「ドヤ」（簡易宿泊所）で暮らしていた。寄せ場で見つかる仕事は、10日間、15日間、20日間など決まった期間に飯場に寝泊まりしながらする仕事（「契約」と呼ばれた日雇い仕事）か、あるいは日払い仕事（「現金」と呼ばれた文字通りの日雇い仕事）がほとんどだったが、仕事はたくさんあった。春は仕事が少なく、夏になると仕事が増えた。でも、暑さに弱く、身体がもたないのので、秋と冬にいちばん働いた。お金が貯まると町に戻って、ギャンブルをした。お金がないときは、炊き出しに行ったり、古雑誌を集めて古本屋に

売ったりして、食いつないだ。

2009年9月～現在（38歳）

「でも、今年に入って、去年もそんなに忙しくはなかったですけど、だんだんと本当に仕事がなくなってきたんです。それでいろいろ考えて、再び最初の建設会社に行った」。この建設会社は全国に営業所があるので、「関東に行かないか」と誘われ、2009年9月から埼玉県のある寮に入った。関東は、11,000円と日当が高いのも魅力だった。ただ、関東に来て、仕事なくて休む日が多く、また赤字になってきた。そして、10月中頃に再びトンコした。

関東だと、どこで仕事の募集をしているのか、なかなか分からなかった。ようやく駅の手配師の紹介で仕事に行くと、いつも個室ではなく「タコ部屋」だった。「関西に比べて、こっちは圧倒的に待遇が悪くて」。個室もないし、仕事は日当も安く、「貸金」（日当の前借り）もできない。最後にいた寮は埼玉県にあって、すごく嫌なところだった。どうしても嫌なので、お金もないまま東京まで歩いて帰ってきた。

住むところもないまま都内を転々としたあと、2009年11月に、区役所に相談することにした。何度か相談を重ねるうちに、東京都内の路上生活者緊急一時保護センターに入ることになった。この緊急一時保護センターには、1～2カ月滞在できて、悩みごとや職業資格の相談も受けられるようだ。

< 仕事に就いてからの生活 >

家族とは、東京に来た1997年（26歳）以降、十何年のあいだ連絡を取っていない。もともと父親が嫌いだった。酒癖が悪くて、面白くないことがあると、家族に暴力をふるっていた。何もしていないのに殴られて、納得がいかなかった。そうしたこともあって、高校を卒業して、すぐ家を出た。母親は嫌いではないが、連絡はしていない。「実家のローンのことでサラ金からお金を借りて、自分が背負うことになったので、あまり近寄りたくない。そのまま、大阪に行く前から払っていないので。その時点で、すべてを捨てて、何もかも忘れて、土方（ママ）人生に行ったという感じなので。連絡を取りづらいついとか、取りたくないという状況なんです」。

関西から東京に来ると、本当にきつい。飯場としては、関西がいちばん良かった。「お金がない状況なら、関西は非常に過ごしやすい地域ですね。お金がなければ、東京はきつい。不思議なもので、関西で路頭に迷っても、あまり悲観的な感じにならないんです。こっちに来ると、もうシャレにならない感じになる。困っている状況でも、（関西は）笑いになる（笑）」。

自分のこれからの将来を考えると、「緊急一時保護センターを経て、自立支援センターに行って、仕事を探して、自立したいと思っています。ただ、その後、どうなるかは分かりません」。このあと、就きたいと思っている仕事は、「時代的には厳しいかもしれませんが、製造業の工場や、警備のうちとくに施設警備です」。「今、土方（ママ）するつもりはもうないです。（この建設・土木作業員の仕事には）安定がないですから。もう体力的にも厳しい。だから、自立という観点から、土木作業員は除いています」。

<社会に対する意見(政治・労働組合・NPO)>

仕事に関する社会サービスについて言うと、この前ハローワークに1度行ってきた。「たいてい実家にいたとき以外は、その時点で切羽詰まっていた。もう、宿なし、金なしみたいな状況なので。だから、普通のところ(ハローワーク)に行っても、もうそういう状況じゃないんです。だから、(ハローワークには)行ってない。どこかに住

んでいて、部屋もあって、ある程度の蓄えもあれば、そういう選択肢もあるけど。今日(面接を)受けに行って、即決まって、もうじゃあ行こうかぐらいじゃないと生きていけない状況なのです」。

労働組合については、化学製品メーカーで働いていたときに入っていたかもしれない。ただ、労働組合活動をしたことはない。

調査番号：東京57

調査日：11月22日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：27歳 ■現住所：東京都 ■出身地：静岡県 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：飲食店、飲食店関係職、正社員 ■直近の収入：月15~20万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：ネットカフェと路上
- おおまかな職歴：高校卒業 輸送機械メーカー・生産(正社員、3年1カ月) 失業(1カ月) 自動車メーカー・組立工(契約社員、10カ月) 居酒屋・店員(アルバイト、2カ月) 短期のアルバイトを転々(1年3カ月) 飲食店・店員(正社員、8カ月) 飲食店・店員(日雇い派遣、2週間) ホストクラブ・ホスト(常用社員、1年10カ月) 日雇い仕事を転々(日雇い派遣、9カ月) レジャー関連会社・調理(正社員、7カ月) クラブ・店員(正社員、3カ月) 路上生活(1カ月)、現在に至る/臨時特例つなぎ資金貸付住宅手当受給予定

<仕事に就くまでの生活(家庭・学校)>

1982年、静岡県生まれ。

父・母・兄の4人暮らし。

2000年(18歳)に工業高校を卒業後、学校求人を通じて就職した。

<初職から現職までの職歴>

2000年4月~2003年5月(18~21歳)

2000年4月(18歳)から、正社員として、静岡県の輸送機械メーカーで船舶エンジンの製造に従事した。仕事内容は、ホーニング(シリンダーを研磨する)だった。当時は、通常8時間労働で、3交替制(6:15~15:00、15:00~23:45、21:30~6:15)だった。1週間ごとにシフトが変わり、土日が休みになった。給料は、残業代や休日出勤を含めて、手取り20万円、ボーナス30~40万円くらいだったと思う。残業がいちばん多いときだと、手取り23万円くらいになった。雇用保険・健康保険・厚生年金にも加入していた。

作業は「そんなに、たいへんではない。でも機械を扱う知識がないと、なかなかうまくできない」。仕事内容は高校で勉強したことが直結していたわけではなく、入社してから習得した。自分が働いていたとき、「それなりに景気は良かった。受注はあったと思う。そのときは派遣切りなんて話はまったくないし、普通に稼働させていた。それでも、最後の3年目のときは、少し数が減ってきたという話があった」。

3年1カ月のあいだ勤めて、2003年5月(21歳)に辞めた。「もともと、工場が嫌だった。工業系にも行きたくな

かった。石の上にも3年と言われていたので、そのあいだだけ我慢していた。ただ、自分はそのなりに真面目ではなかった。仕事にも遅刻が多く、迷惑をかけていた。ちゃんぼらんにやっていて、申し訳ないという気持ちがあった。『迷惑をかけているのだったら、いないほうがいいのか』って思うようになった。ただ、仕事にさえ来ればいちばんできるのに、という評価はもらっていた」。小型エンジン・中型エンジン・大型エンジンと仕事も覚えて、職長からは「期待している」と言われたこともあった。高校時代はそれほど遊んでいなかったが、会社寮で一人暮らしになり、羽目を外してしまった。プライベートがいいかげんになってしまった。一度遅刻すると、「翌日は遅刻しないように」というプレッシャーが強くなって、かえって眠れなくなり、遅刻してしまう悪循環にはまってしまった。「これは、病気だな」って自分でも思った。「自分をコントロールできないのはダメだな」という思いはつねにあった。「申し訳ないという気持ち以外にも、(仕事に)向いてないのかなと思った」。退職時に、退職金をいくらもらったが、失業等給付を受給することはなかった。あまり仕組みが分かかっていなかったので、申請しなかった。

2003年6月~2004年4月(21~22歳)

退職後、静岡県の実家に戻った。1カ月くらい考えたあと、求人誌を通じて、2003年7月(21歳)から、自動車エンジンの組立工場で契約社員として働き始めた。このときの勤務形態も3交替制で、土日休みだった。給料は、手取り20万円弱、ボーナスなしだったと思う。自分は器用ではなかった。「仕事はとてもやりづらかった。日々、焦っていた」。いつも、ミスをしてはいけないというプレッシャーにさいなまれていた。

仕事は1年経たないうちに、辞めてしまった。仕事のプレッシャーが原因で、「途中から、仕事に行かなくなって、ずっと寮にいるようになってしまった」。当時(2004年3月)、父親が他界したことも関係していた。その後、また実家に戻った。

2004年5月～2005年9月(22～23歳)

2004年5月(22歳)から、居酒屋でアルバイトを始めた。2カ月くらい働いたあと、2004年7月から、ヒッチハイクを1年間ちょっと続けた。沖縄を除いて、日本全国を端から端まで巡った。「自分を見つめ直そうと思った。でも、あまり役に立ってないですけど(笑)」

全国各地で、季節ごとにある住み込みアルバイト(北海道のシャケ加工のアルバイト、長野県のリゾート施設のアルバイト、民宿の住み込みのアルバイトなど)をしながら、生計を立てていた。

2005年10月～2006年5月(23～24歳)

ヒッチハイクの途中で、移動式のテント型ラーメン店をしている人に出会い、仕事に誘われた。その申し出を受けることにして、2005年10月(23歳)から、このラーメン店で正社員として働くことになった。給料は手取り14万円くらいで、雇用保険・健康保険・厚生年金はなかったと思う。このラーメン店は、空地にテントを張って運営するもので、1～3カ月に1回のペースで移動した。仕事は愛知県内が多かった。最初は見習いから始め、調理を担当した。料理は好きだったので、仕事は楽しかった。でも、「副店長とずっとそりが合わなかった」ので、やりづらいこともあった。結局、2006年5月くらいに、イベントを手伝う仕事に誘われたので、辞めてしまった。イベントの仕事が山梨県だったので、そのまま近くの東京都暮らしことにした。

東京都の知り合いの家に居候をさせてもらいながら、仕事を探すことにした。2週間くらい飲食店への日雇い派遣の仕事をして、お金を作った。だが、深夜の仕事だったので、居候させてくれていた人の生活サイクルとずれてしまい、家を出ていかざるをえなくなった。

2006年6月～2008年3月(24～26歳)

途方に暮れたまま街を歩いているとき、ホストのスカウトにあった。「ホストなんて向いていないと思ったけど、とりあえずお金が入るし、寮もあるからという思いで」、2006年6月(24歳)から、ホストクラブで働くことにした。ホストの仕事は、「良かった時期もあったけれど、だいたい儲からなかった」。当時は、日払い(前借り)でもらえる3,000円でほとんど生活していた。売り上げが少なく、遅刻による罰金も多かったため、月末の給料がもらえないこともあった。月給の最高額は30万円くらい。もし罰金があれば、最低15～20万円くらいはもらえたと思う。給料は、人によって本当にばらばらだった。「華やかな部分は上だけだった。下は、本当に地道にやっていかないとだめだった」。仕事は、「かつかつ」だった。そのあと、「もう26歳で、いい歳だなと思い始めた。そろそろ芽が出ないのだったら、もっとまじな仕事をしようかなと思った」ので、ホストを辞めた。

2008年4月～2008年12月(26歳)

「もう普通に正社員のところで働かないといけな」と

思ったけど、蓄えもなかったんで、ホスト時代のお客の家に居候させてもらうことになった。でも、1カ月後には家を追い出され、ネットカフェに寝泊まりするようになった。そのあいだ、派遣会社に登録して、物品配送・パン製造などの日雇い派遣の仕事をした。パン製造の仕事を通じてある女性と知り合い、その父親が所有する部屋に無料で住まわせてもらえることになった。この頃、週1回くらいしか日雇いの仕事が回ってこなくなり、3つの派遣会社に掛け持ちで登録することになったが、それでも仕事が見つからず、お金も尽きてしまった。そして、また住んでいる部屋を追い出され、再びネットカフェ生活に戻った。

2009年1月～2009年10月(27歳)

とうとう生活が立ちいかなくなって、実家に頭を下げに行き、「仕事を本気で探させてくれ、住所がないとだめだから」とお願いした。実家に戻ってから、ハローワークに行き、仕事を探した。2009年1月(27歳)から、ダイビング宿泊施設で住み込みの正社員として調理の仕事することになった。給料は、手取り12万円くらいで少なかったが、社会保険は完備していた。でも、職場の料理長と合わず、辛抱して働いていたが、「メンタルが弱いんで、そこを諦めて、飛び出してしまった」。2009年7月に辞めて、東京に行った。

2009年8月から、友達の紹介で、クラブのボーイの仕事始めた。正社員として働き、手取りは毎月21～22万円くらいだった。社員寮はなかったんで、店長の知り合いの家に居候させてもらっていた。でも2009年10月頃、仕事でお客を怒らせてしまい、職場にも行きづらくなって、辞めてしまった。この職場ではがんばろうと思っていたのだが、恐くてどうしても足が向かなかった。

2009年11月～現在(27歳)

仕事を探そうにも、蓄えが5万円くらいしかなかったんで、お金のあるときはネットカフェに泊まり、お金のないときは路上やファースト・フード店で夜を明かす生活に陥った。

2009年11月(27歳)に、地方自治体の窓口で「住宅手当」の申請を行い、それが支給されるまでのあいだ「臨時特例つなぎ資金貸付」として社会福祉協議会から10万円を借りた。だが、路上で寝ている最中に、そのお金を盗まれてしまった。そのため、「住宅手当」が支給される予定の12月中旬まで、無一文状態のまま生活しなくてはならない。それまでに入居希望住宅を探さなくてはならないが、いまは探していない。いろいろと考えてはいるが、まだ不動産屋には行ってない。

< 仕事に就いてからの生活 >

輸送機械メーカーに勤めていたとき(2000年4月～2003年5月、18～21歳) 事故を起こして、親に借金をした。そのとき以来、兄との関係が悪く、「借金をしているのに、へらへらと働かないでいるうちは、家に帰ってこなくていい」と言われてしまった。兄は、自分とは一緒に住めないと言っていたので、自分が出ていくしかないと思った。2009年1月にした親との約束(正社員の仕事に就く)も結果的に破ってしまい、もう親を頼ることはできないと思っている。そうした経緯があるので、親や兄弟との関係は円満で

はない。

自分のこれからの将来を考えると、「将来というか、いまの現状しか考えられない。ゆくゆくは、普通にあたりまえの生活ができればいい。こういう生活を繰り返している自分と決別したいと思う。でも、メンタルが弱いので、すぐにそうになってしまうのではないかという不安のほうが大きい。」「人の言葉が気になったり、些細なことでも、嫌われているのかなと思ってしまったりする。人間不信だったり.....。裏切られた経験があると、根本的には人を信じていたいけど、結局人を信じられない。(中略)だから、こっちが裏切っても、なんとも思わないだろうと感じてしまう。つながりなんて、些細なものだろうと思ってしまう。現状だと、自分の本音は言わないという感じだ。」

将来の仕事として、自分では飲食店やサービス業が向いていると思う。

<社会に対する意見(政治・労働組合・NPO)>

輸送機械メーカーの正社員をしていたときは、労働組合

に加入していたし、職長も労働組合の執行部に入っていた。ただ、「(労働組合は)いろいろな発表をするけれども、自分たちに近いという感じはしなかった。(発表を聞いても)そうなんだと思うだけで、実態がつかめなかった。そうやっても、あんまり変わらないんだろうなという感覚でとらえていた。他人が良くしてくれているもので、自分で自分のことを考えているという感覚はなかった。職場にも、あまり浸透していなかったと思う。

泊るところがないときに社会サービスを知ったきっかけは、ネットカフェに置いてあった「TOKYOチャレンジネット」のパンフレットだった。お金がなかったのも、そこに電話したが、自己都合退職だったのでサービスを受けることができなかった。そのとき、区役所を紹介され、そこでホームレス支援施設の存在を知った。

最近の5年間くらいは、国民年金も滞納している。

これからは、もっと経済を良くしてほしいと思う。経済対策について、あまり見えてこない。もっと働ける場所が増えればいいと感じる。

調査番号：東京58

調査日：11月22日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：38歳 ■現住所：東京都 ■出身地：鹿児島県 ■学歴：高校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：運輸業、運搬関係職、日雇い型派遣 ■直近の収入：月7～8万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：友人宅居候と路上
- おおまかな職歴：高校卒業 自衛隊・自衛官(正隊員、3カ月) ホテル・従業員(正社員、3年弱) ピンクサロン・店員(正社員、数カ月) 短期のアルバイトを転々(2年強) 短期の建設作業員を転々(日雇い、1年弱) 看板持ちなどのアルバイトや引っ越し手伝いなどの日雇い派遣を転々(半路上生活)(アルバイト・日雇い派遣14年強) 現在に至る

<仕事に就くまでの生活(家庭・学校)>

1971年、鹿児島県生まれ。

父親はトラック運送会社を経営。母親はその会社を手伝っていた。暮らしにはゆとりがあった。

全日制の高校を卒業して自衛隊に入った。教育期間ということで宮城県で訓練を受けた。前期・後期3カ月ずつあったが、「体に合わなくて」前期だけで「逃げ出したみたいないな感じで」自衛隊を辞め、郷里に帰った。

<初職から現職までの職歴>

1989～1992年(18～21歳)

郷里の鹿児島県のホテルで正社員として働いた。小さいホテルで従業員も少なく、客室や露天風呂の掃除、荷物持ち、一人何役もやった。3交替制という話だったが、8時間で交替になることは少なく14～15時間続けて勤務した。鹿児島は観光地なので、客は多かった。住んでいたのは、従業員全員が入るアパートみたいところ。ホテルの敷地の中にあった。バス・トイレ付の8畳で台所はなかった。給料は雇用保険・厚生年金・健康保険の保険料をひかれて

手取りが16万8千円。食事は3食ともコックが従業員用に作ったものをホテルの奥で食べた。

鹿児島に帰ってきたとき、3歳年上の女性と知り合って子どもができたので、この8畳の部屋にいっしょに住んでいた。3カ月くらいしかいっしょに住まなかった。

このホテルは、社長がガソリンスタンドなどの経営に手を広げすぎて倒産した。

家庭的で働きやすい職場だった。上役に怒鳴られるときもあったが、それは仕事だから仕方がなかった。待遇もよかったし、「つぶれなければよかったなあ」と思う。すぐに次の仕事が見つかったので失業等給付を受けることはなかった。

1992年(21歳)

勤めていたホテルが倒産したとき、3～4日お世話になった先輩が働いていたピンクサロンに入社した。正社員で、給料は13万2千円だった。社会保険はなかった。社会保険は、勤め始めて3年以上の幹部だけが入っていたようだ。出入りが激しいから。先輩が保証人になってくれて家賃3万8千円のアパートに住んだ。制服を着てフロアで働いた。実際の仕事は女の子たちの使い走り。華やかなイ

メージがあったけど、実際に入ってみてがっかりした。女の子40人に男は4人。女の子はお客さんにあたれないから、自分たち男の従業員をこきつかっていた。女の子とは話なんかしなかった。ただ、「たばこ買ってこい」とか「肩をもめ」とか言うだけ。午後3時に入って午前1時過ぎに閉店、それからホールを掃除して2時か3時に帰る生活だった。

半年経ったある日、職場に行ったら、社員は誰もおらず警官が一人いて「ここじゃもう働けないぞ」と言われた。女の子が「本番やってるよ」と垂れ込んだようだった。店長に借金を申し込んだが断られたので頭にきたらしい。チェーン店で他にも3～4店舗あったから、今後まだ働けるのかなと思って電話を入れたが、「会社が雇ったんじゃない店長が雇ったんだから」と言われた。しかし、どっちにしろ、いずれ、いきおいで辞めたような気がする。女の子はきつかったけれど、チップがもらえて、チップのほうで給料よりよかった。当時、百何十万円の貯金があった。

1992～1994年（21～23歳）

一旗あげようと思って福岡に行った。歩いていたら「働かないか」と声をかけられた。呼び込みの仕事とか皿洗いとかいろいろやった。最高で3カ月くらい、3日で変わったこともあった。おもに飲食店で働いた。1,000円くらいの民宿みたいなところがたくさんあり、そういうところに泊まった。20歳過ぎているから警察にも声をかけられなかった。2年と少し、続いた。このときまで金には不自由しなかった。生活は苦しくなかった。パチンコに行く余裕もあった。しかし、「同級生にも、『一旗あげようと思って来たんだったら、福岡でがんばれ』と言われたけど」、そううまくいかなかった。

1995年（24歳）

福岡県から大阪府、愛知県へと移動した。建設作業員などをやった。電信柱に張り紙がしてあったから「これから働きたいです」と連絡を入れた。大阪府では寄せ場のある街とかで働いた。お金がないときは大きな城公園のテント村で、1～2日泊めてもらった。愛知県には最初のホテルのときの友だちがいた。大阪府では行きずりの人とけんかをした。大阪弁がけんかをふっかけてくるようなしゃべり方だったから。

1995年～現在（24歳～39歳）

1995年に、東京に来た。市場調査、看板持ち、着ぐるみのアルバイトなどをやった。町を歩いていたら、「割のいいアルバイトがあるけど」と声をかけられた。当時は、家賃5万8千円のアパートを借りていた。保証人不要。月収は、よかったときで18万円、平均12～13万円くらいだった。このような生活が、2005年（35歳）になるまで10年くらい続いた。

2006年（35歳）に、「アパートを出て行ってくれ」と言われた。区画整理をするから取り壊すとのことだったが、今は更地にされ駐車場になっている。

現在、友だちのところに居候しているが、外で寝ることも多い。月に7～8万円の収入。3つの派遣会社に登録し、日雇い派遣で引っ越しの手伝い、建設現場の掃除などをしている。いつも自分から派遣会社に電話を入れる。毎日働く人が変わるので、労働組合はないと思う。

<リーマン・ショック後の変化>

最近の仕事がなくなってきた。仕事を探す人は増えている。（引っ越し手伝いの仕事なので）自動車免許を持っている人は有利だ。自分などはますますはじかれる感じ。ほかに知人のついで、工事現場の手伝いをしている。週に3日、友だちのところに泊まる。友だちは結婚していて、自分のことで奥さんと喧嘩をしたりするようだ。気を遣わなくてもよかったという点だけでも、自分のアパートがあったときのほうがよかった。ひもじい思いとかは、したことがない。

<社会に対する意見（政治・労働組合・NPO）>

将来が心配だ。こういう時代だからあまり期待はしない。景気がよくなれば自分たちの仕事も増えるんじゃないか。仕事が多くなれば、日払いでも暮らしはよくなるだろう。

住宅手当は最初にまとまったお金が必要だから、申請していない。

実家の会社がつぶれたので、実家の両親が生活保護を受けている。

自分は吃音（きつおん、言語障害の一つ）の障害手帳を持っており、福祉事務所に生活保護の相談をしている。窓口の相談係に、「今忙しいから、年が明けるまで待ってくれ」と言われている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：33歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退
- 就労の有無：臨時就労中 ■現職：臨時就労（就労機会提供事業）^注、清掃関係職、就労体験（臨時職員扱い）
- 直近の収入：月78,000円 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：民間支援団体の借り上げアパート
- おおまかな職歴：高校中退 電池メーカー・生産（アルバイト、2年） アルバイトを転々（5年） 半導体メーカー・検査（登録型派遣、1年半） 半導体メーカー・生産（登録型派遣、1年） 住宅設備機器メーカー・生産（登録型派遣、8年） 失業手当受給 現在、民間支援団体の借り上げアパート入居中（臨時就労中）

<仕事に就くまで>

1975年、大阪府生まれ。すぐに京都府内に転居し、そこで育った。

家族構成は、両親と弟1人の4人。父親は新聞の勧誘の仕事をしていて、自分が同居していた最後の時期（21歳）は仕事をしていなかった。自分が家を出る1年前、20歳ぐらいの時には生活保護を受けていた。小中学校時代、家の暮らしは苦しく、余裕はなかった。

母親から期待されたということはない。勉強するように言われたこともなかった。

中学時代、親身になってくれた先生はいなかった。学校、勉強は嫌いで、クラブ活動だけをするために学校へ行っていた。

自分の成績で「入れるところ」ということで入学した農業高校を1年で中退。特に辞めた理由はなかった。勉強が嫌いだったからである。

<初職からの経験>

高校を1年で辞めて、16歳（1992年）から、家の近くの携帯電話の電池を作っている会社でアルバイトを始めた。求人チラシを見て応募した。その仕事は2年続けたが、仕事が減ってきたので18歳（1994年）の時に辞めた。

それから5年ほどいろいろなアルバイトをした。

23歳（1999年）のころ、登録していた派遣会社を通して、長野県にあるICチップを作る工場で働き始めた。クリーンルームの仕事で、チップを機械にセットしたら機械が一個ずつ検査するので、それをずっと見ているという仕事だった。求人雑誌を買って見つけた。当時、部屋を借りていたが、部屋を出ないといけない事情があって、部屋がついている仕事を探していたことから、そこに決めた。

手取りが月額17～18万円ぐらいだった。4勤2休で、一回が12時間勤務だった。工場では200人ぐらい働いていて、半分ぐらいが派遣社員だった。自分たちは「派遣社員」と呼ばれていた。自分自身はアルバイトみたいな感覚でいた。派遣社員ということあまり意識しなかった。

雇用保険には入っていたが、国民健康保険は払ってなかった。無保険状態だったが、「病気になったことはなかったです。その時は不安はまったくなかったです。ちょっと風邪をひいたことはありましたけど、病院に行かないといけないというほどのことはなかったです」。この間に、派遣労働者ということ嫌な思いをした経験はなかった。

25歳（2001年）のころ、1年半で辞めたが、「この仕事を

辞めた理由は特になかったんです。半年ごとの契約で1年半になるので、他のところに移ろうかと思った。」

同年、大阪に本社がある派遣会社の京都府内の事務所で面接を受けて、滋賀県の半導体工場で働き始めた。クリーンルームの仕事で、体力的にはきつくなかった。時給は1,000円。週5日勤務で夜勤もあった。手取りで月額12～13万円。工場の規模は200～300人くらいであった。派遣社員がどれくらいいるのかはわからなかった。指揮するのは派遣先の社員だった。この仕事では、雇用保険には入っていたが社会保険はまったくなかった。

26歳（2002年）のころ、1年間で辞めた。ここを辞めたのも「特に理由はなかったんです。半年ごとに契約を更新していくというところだったんですが、1年経ったんで、別のところを探そうかと。そのころは、けっこう仕事はすぐに決まったから。」

同年、前職となる仕事に就いた。名古屋に本社がある派遣会社を通して、サッシなどを作っている会社の京都府内の工場で働いた（2009年2月まで8年間勤務）。コンビニで買った求人雑誌に載っていたのを見つけて電話した。当時は京都府内に派遣会社の事務所があって、そこで面接を受けた。その工場は窓枠やドアを作っていた。勤務時間は午前9時から午後5時だったが、終わるのはほぼ6時くらいだった。残業や休日出勤はバラバラだった。時給は1,100円。20万円ぐらいの収入があり、寮費等を引かれて手取りが12～13万円。社会保険にはすべて入っていた。健康保険証もあり、健康診断も受けていた。

工場で働く労働者の半分ぐらいが派遣社員だった。ブラジル人を専門に派遣する会社も入ったことがあったが、すぐ撤退した。派遣社員は、合わせたら150人くらいおり、会社数は4社くらいだった。派遣社員で働いている人はそれぞれ派遣会社独自の服があった。残りの社員は同じ服を着ていたが、その中でもアルバイトとかパートもいた。

違う派遣会社から来ている者同士で労働条件を聞き合うこともあったが、「たとえば、自分のところが安くて向こうが高くて、どうしようもないので。それでもめるということはなかったです。労働条件について他の派遣会社から来ている労働者と話してはいけないというルールがあるのはあるんですけど、注意されるとか、そういうことはなかったです。それだけたくさんの方が働いているので。管理会社（派遣会社）の社員がいくら言っても意味がないのかな、というのがありました。（別の派遣会社の社員との）働いている距離も近いので。」

派遣先（住宅設備機器メーカー）の正社員の人がどれくらい給料をもらっているかは知らなかった。「正社員の人

とはあまり話をしなかったですから。正社員の人には聞きにくい。正社員とは一般的な会話をするぐらいでした。人によってもまた違うんです。中には仲良くなって遊びに行くという人もいてるんですけど。何か壁があるということではなかったです。」

寮は1DKのマンションで、快適だった。家賃は56,000円。ピンハネされるといった不満、生活の不便や不合理さを感じることは特になかった。「(派遣会社がすべて手配してくれて)自分では何もしなくていいので、それを考えたら楽でした。」

土日休みが基本で、休日は好きなパチンコに一人で通っていた。土日に限らず平日も行っていて、負ける方が多かった。「(遊興費より)生活費の方が後に回るため、生活費でいうたら、ギリギリ。勝っても負けても行くんで。」

将来のことは、「何も考えてなかったです。給料とか、まったく上がったりしなかったんですけど。ずっとそういう生活をしてたので、別に気にもならなかったです。」

住宅設備機器メーカーでの仕事がいずれは終わりをむかえ、どこか別の仕事先にかわらないといけないという考えはなかった。「うちの派遣会社が撤退するという話が出た時に初めて気付いたくらいです。その後の人生がどうなるんだろうとか、どうしていききたいなという考えは漠然とはありました。ただ、まだまだ大丈夫だろうというのではありません。そこの仕事が自分に合っていたと思います。あそこの工場の居心地が良かったというのではありません。仕事の内容も、環境も。」

正社員は給料が上がって行くのに対して、派遣社員は上がらないことに不満は「感じなかったですね。派遣会社で派遣されなかったら、一生そこには行ってないので。それは、気にならなかった。自分の給料が上がらないとかは。」

2009年(33歳)2月、工場から派遣会社が撤退することに伴って退職した。契約期間内に切られた、いわゆる「派遣切り」とかというややこしい。「うちの派遣会社っていうのは、3カ月ごとに契約していくんです。僕らも解雇になったんですけど、初めにその話が出たのはけっこう前なんです。去年(2008年)の7月か8月ぐらいに、『来年(2009年)2月いっぱい撤退するから』という話が出たので。」その後3カ月ごとに契約して2月をむかえることになった。

退職してもしばらくは「いてもいい」ということで寮に残り、2月25日、最後の給料4万円が振り込まれた後に寮を出た。その時点での所持金は3万円だった。

住んでいた街にあるハローワークで失業手当受給の手続きをして、雇用促進住宅への入居を決めた。派遣会社から「(転職先や住む場所などについて)こういう手がある」という話はなかった。自分の方から「離職票をちゃんと出してくださいね」という話はした。

大阪府内の雇用促進住宅に移ってから、「失業手当をもらいながら、仕事を探すはずだったんですけど。その時もあんまり深くは考えてなくて。すぐ見つかるという考えがあったんです。ギリギリまで真剣に探すことをしなくて。ハローワークとか行って仕事の検索とかするんですけど、失業手当をもらうのに必要なのをそれをしていただけなんです。」

ハローワークに行ったのは、最後の派遣会社を解雇になってからが初めてだった。「それまでは一回も行ったこ

とがなかったです。」それまで、派遣の仕事はけっこうあって、ハローワークに行かなくても仕事は見つかった。

正社員になろうと「強く思ったことはなかった。派遣会社は、決まるのが早かった。『いつから働いてください』とか、けっこうその場で決まる。正社員だったら、面接を受けてそれから『何日か後に』となってしまうというイメージをなんとなく持っていた。(そういうケースを)実際に見聞きしたわけではないが。周りにはハローワークを利用して正社員になった友人はいなかった。」

2009年6月に最後の失業手当をもらったが、仕事もなく、最終的にはお金がまったくなくなってしまい、雇用促進住宅の家賃が払えなくなったため、貧困者や野宿者の支援を行っているNPOに相談した。「仕事がなくて困った時に」という感じのことを調べていて、このNPOのことが出てきたので相談した。その時には交通費もなかったので、このNPOの人に自分のところまで来てもらった。

「当時、これからどうなるのか、どうするつもりかは、何も考えなかったです。パチンコは、ギリギリまでやっていました。」

<現在の生活状況>

現在は、先のNPOなどが設立した、住居をなくした者に支援付き宿泊施設を提供する民間支援団体が借り上げたアパートに暮らしている。週3日、8時半から5時の間公園で清掃の仕事をして、1日に6,000円になる。これは、2カ月間と期限が決まっている就労体験で、このNPOから紹介されたものである。

その就労体験の仕事をしなが、仕事を探している。他の仕事をした経験がほとんどないので、製造業の仕事を探しているけれど、うまくいかない。求職はハローワークで探すのが基本で、週3回くらい行っている。駅に置いているフリーペーパーも見ている。「面接までは行けるんですけど、応募する人が多いので、なかなか決まらない。競争率が高いというか」。自分には「資格とか経験がまったくないので、資格とか経験を問われないところを探しています。そうした求人は、応募する人が増えてくるんです。」

家族との関係は、幼少期より自分と父親の仲が悪く、間に母親が入って何とかやっていた状態だった。それが、母親が亡くなり、父親との関係がどんどん悪くなって、最終的に「出て行け」となったのが21歳の時だった。実家を出てから、10数年間まったく連絡を取ってない。仕送りをしたり、してもらおうということもなかった。父親と弟が今どうしているかもまったくわからない。「(連絡を取る必要が)一回だけ、やらなあかかなんかということがあったんですけど、取らなくて。不安やさびしいという思いはまったくくないです。自分にとっての父親というのはまったくそんな関係じゃない。」

現在、親しい友人はいない。京都にいた当時はいたけれど、「派遣会社で働いて、いろんなところを転々とするうちに会わなくなって」。小中学校の友人も、もともとそんなにいなかった。

派遣で働いている時には、「そこでは仲良くなるんですよ。派遣で働いている間とか、けっこう仲良くなったりするんです。ただ、どっちかが辞めて、そこを離れると、それ以降は連絡取ったりはしないです。」

今の相談相手は民間支援団体の人である。

現在の生活に余裕はない。「たいへん苦しいです。今月の収入は78,000円です」。

派遣会社の仕事を転々としていたので、いつ「辞めてください」と言われるかもわからないから、できるだけモノを買わなかった。

結婚したいという気持ちはあるけれど、それほど強くは思わない。派遣会社に勤めている時期、25歳か26歳くらいの時に、同じ派遣で働いている人とそんな気持ちになったことはあったが、「結婚、ってなると、向こうはどうかかわりませんが、こっちは意識することなくて」。先がどうなるかわからないし、いつかは地元に戻りたいという気持ちがあったので、そのままになった。

<本人の望みや不安>

この3カ月で言うと、少し前に、気分が沈んだり憂鬱な気持ちになることがあった。「貧しいのは自分の責任だと思う。原因は何も考えないで働いてきたから。それがよくなかったのかなと思う」。

働いている時には資格を取るという考えはなかった。

将来への不安感は、失業手当をもらうことを決めた時ぐらいからあった。派遣で働いている時には、不安感はなかった。

今、派遣の働き方をなくした方がいいのではないかという議論もあるけれど、「もうちょっとゆるくした方がいいと思うんです。厳しく取り締まるというよりもむしろ。正

確には覚えてないんですけど、製造業では（派遣可能期間は）2年か何かに決まっていたと思うんです。それをもっと延ばしたらどうかと思います。会社が派遣を雇うのには理由があるし、派遣会社で働く人もそれをわかって働いている。派遣をやめて社員を雇いなさいとなった時に、会社は人を雇わなくなるのではないかと」。

これからの仕事については正社員を希望しているが、そこだけにこだわってはいない。できるだけ長く働ける仕事に就きたい。

10代の後半には、人生についての夢や理想像はなかった。何も考えていなかった。

（注）「臨時就労」は、正確には「就労機会提供事業」によって提供されている仕事を意味する。この事業は、大阪の当該自治体が、野宿を余儀なくされている者および野宿に至るおそれのある者等を対象に、NPOに委託して実施している事業であり、一部の事業は民間団体からも提供されている。その目的は、居住スペースを提供したうえで、就労に対する賃金の支払いによって困窮生活を緩和し、今後の生活費と就職活動費を捻出する支援であるとともに、就労リズムと就労意欲を継続するための「就労体験（あるいは『就労訓練』とも呼ばれる）」を目的としている。これによって、生活支援と就職支援の中間に位置づけられ、最低生活保障の段階から就労による自立へ向けて、当事者がスムーズに進んでいけるように工夫されたものである。

調査番号：大阪2

調査日：8月22日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：41歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：京都府 ■学歴：高校中退
- 就労の有無：臨時就労中 ■現職：臨時就労（就労機会提供事業）、清掃関係職、就労体験（臨時職員扱い）
- 直近の収入：月10万円 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：民間支援団体の借り上げアパート
- おおまかな職歴：中学校卒業 繊維メーカー・生産（パート3カ月、正社員5年） 化学製品メーカー・生産（正社員3年、通信制高校に通うが中退） 土木会社・現業（正社員、4年） 運送会社・運転手（正社員、5年） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、6カ月） 釣り具メーカー・生産（登録型派遣、2年半） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、3年） ガス器具メーカー・生産（登録型派遣、3カ月） ゴム製品メーカー・検査（登録型派遣、6カ月） 自動車部品メーカー・検査（登録型派遣、6カ月） 自動車部品メーカー・生産（登録型派遣、1年2カ月） 引越会社・作業員（アルバイト、6カ月） 現在、民間支援団体の借り上げアパート入所中（臨時就労中）

<仕事に就くまで>

1968年、京都府生まれ。

家族構成は、両親と兄弟2人、そして自分の5人暮らしであった。3人兄弟の長男で、下に妹と弟がいる。

父親は自営業であったが、それが行き詰まってから京都府にある玩具メーカーの小さな下請工場に働いていた。母親も工場に働いていた。

生活は、やや苦しかった。

中学校時代はおとなしく、まじめに学校へ通った。高校進学への希望も強くなかったため、中学校を出て就職することにした。

最初の仕事は、学校の紹介ではなく、職業安定所の紹介であった。親から、職業安定所に行ったら仕事を紹介してくれると聞いたので行った。

<初職からの経験>

1983年（15歳）中学を卒業してすぐに地元のネクタイ生地を織る工場にパート労働者として就職した。試用期間としてパートで3カ月働いた後に、正社員となった。この工場には20歳（1988年）まで5年間勤めた。しかし、繊維業界の先行きがおもしろくなく、会社の経営が悪化し賃金の遅配などが始まったので、倒産の前によりよい仕事を職業安定所で探し、見つかったので退社した。会社はその後すぐに倒産した。

1988年（20歳）職業安定所からは2つの会社を紹介されどちらも合格したが、自宅を離れて独立したいと思い、会社に寮のある方を選んだ。それは、兵庫県にある化学製品メーカーであり、正社員として就職することができた。工場では、成型加工によってアイスクリーム・カップやプラスチック製弁当箱をつくるためのプラスチック素材のビニールシートの製造を行っており、これを製造するための原料や薬品・顔料の配合と合機機械への投入などの仕事をしていた。給料は、総支給額で30万円程、寮費や昼食代などを引かれて手取りは20万円ほどだった。

この頃に、決心をして通信制高校に通うようになり、2年半ほど勉強したが、なかなかその後が続かず中退してしまった。

会社の寮に住んでいる労働者の半分は、ボリビアやブラジルなどからやってきた日系人であった。ここでの生活は安定していたし、日系人の人たちとは最初は仲が良かった。しかし、休日になると彼らは外で騒ぐことが多く、自分が持っていた乗用車で買い物や遊びなどあちこち連れて行ってくれとの要求が多くなった。それらのエスカレートする要求に耐えられなくなって、しまいには折り合いが悪くなった。こうして、寮に住む日系人とトラブルになり、寮に居づらくなってこの会社を辞めた。ここでは3年間、23歳頃（1991年）まで勤めた。

その後、再び京都府の地元に戻り、1991年（23歳）からは土木会社に正社員として4年勤めた。しかし、給与が安かったし、やはり地元を離れたかったので、ここを辞め大阪に出ることにした。

1995年（27歳）頃、運送会社に中距離トラックの運転手（正社員）として就職し、大阪府内にある営業所に勤務した。そこでは、おもにカップ麺などを愛知県内の物流センターまで運ぶ仕事などをした。ここでは、32歳（2000年）まで5年間働いた。

しかし、30歳を過ぎても給料はほとんど上がることはなく、このままでは将来の展望が開けないと思い、この仕事を辞めて、もっと稼げる仕事を探そうと思った。

2000年（32歳）求人誌をみて、愛知県の派遣会社に登録し、愛知県にある自動車組立工場で派遣労働者として働き始めた。ここでは6カ月ほど働いたが、2001年に入ると経済不況で会社の売り上げが落ちたために生産は正社員のみで行うこととなり、派遣社員が一斉に解雇されることになった。

このため、派遣会社を変え、岡山県にある大手釣り具メーカーの下請工場で釣り具（リール）製造の仕事を2年半続け、35歳頃（2003年）まで派遣労働者として働いた。

次に、2003年（35歳）からは、別の派遣会社を通じて、神奈川内の自動車工場に派遣労働者として働く機会を見つけた。ここでは最初に能力試験があり、訓練を受け、組立

の半自動溶接とボルト締めの仕事をした。残業は2時間ほどあったが、給料は総支給額で24～25万円であった。この自動車工場では3年程勤めた。

また、この自動車工場で働き始めた頃（35歳）もともと高血圧であったが、大動脈が破裂しかけ、1カ月入院した。その理由は食事が不規則であったからである。

2006年（38歳）からは、別の派遣会社からの派遣で、ガス器具製造会社のプレス加工工場に3カ月間、次にゴム製品製造会社で自動車車体に使われるゴム部品の検査の仕事を6カ月間勤めた。ゴム製品検査の仕事は、すべて夜勤で働いた。いずれも、登録派遣会社との契約期間満了にともなう、派遣先の会社を変わっていった。

2007年（38歳）9月末、やはり関東よりは、少しでも地元に近いところで仕事がしたいと思い、愛知県の派遣会社に派遣登録したところ、大手自動車メーカーの下請けでエンジン部品を製造している工場に派遣された。愛知県にある工場では、車のエンジン部品コンロッド（連接棒）をロボット機器の操作をして研磨加工する仕事であった。事業所全体の規模はかなり大きく、隣の工場にエンジン部品を鋳造し、それを自分が働いていた工場に持ってきて、機械加工や研磨をする会社であった。自分が働いていた第1工場だけで日系ブラジル人約20人を含めて男女50人以上が働いていた。複数の派遣会社から多くの派遣社員が働きに来ていたが、制服は正社員と同じものであったために、見た目の区別はつかなかった。このため、正社員と派遣社員の区別はわからなかった。1週間交代で日勤と夜勤が交互にあり1日8時間、日勤のときで4時間、夜勤のときで2時間の残業があった。この賃金は時給1,250円、残業のときは1,350円であった。総支給額は月で30万円ほどになった。しかし、寮費で月4万5千円、光熱費などで月1万円ほどが差し引かれて、手元に残るのは24万円程度であった。寮と工場までの通勤は派遣会社の車で送迎してくれたが、送迎代はかからなかった。しかし、この仕事は、オイルを多く使い、肌が荒れたのであまり好きではなかった。当時収入はそれなりにあったが、単身の気楽さもあってお金をほとんど遊びに使ってしまい貯金はほとんどしなかった。

この工場には1年2カ月、2008年（40歳）11月末まで勤めたが、会社の業績が急に悪化したとのことで、契約期間の途中で解雇されてしまった。ただし、寮には12月末まで滞在することができた。

2009年（41歳）1月初頭、ひとまずカプセルホテルに泊まって新聞広告などで就職先を探した。

1月末、新聞求人広告で大阪府の大手運送会社の子会社で引越しの仕事を見つけた。アルバイト契約で、給料は時給1,000円で日払い制だった。

仕事が少ないときは月10万円にも満たなかった。ここでは6カ月半ほど働いたが、寮に入っていたため寮費が一日2,700円（月に換算して81,000円）もかかり、仕事の機会が少なくなってからは、収支がマイナスになってしまったのでこの仕事を辞めた。

2009年7月29日に引越会社を辞め、寮を出たときには3,000円しか所持金がなかった。親に連絡し、助けを求めたが、「もういい歳なんだから自分で何とかしろ」と、支援を拒否された。

すぐに野宿生活になり2日後、大阪府内の職業安定所で求職相談と生活相談をすると「区役所の福祉課に行ってくれ」と言われ、区役所ではジョブカフェを紹介された。

ところが、ジョブカフェでは、年齢が高いということで受け付けてもらえず、別の職業安定所を紹介された。その職業安定所では、チャレンジネットを紹介してくれ、その結果、住居を失った者に支援付き宿泊施設を提供する民間支援団体にたどり着いた。

<現在の生活状況と将来への望み>

現在、この支援団体の設立組織のひとつであるNPOが実施している職場体験講習（就労体験のプログラムのひとつ）として、淀川河川敷の草刈りの仕事を仲間の労働者と一緒に行っている。1カ月のプログラムで、始めて1週間である。仕事は、1日9:30-15:30の5時間（休憩1時間除く）で、週3日の仕事である。

現在はこの支援団体の借り上げアパートに暮らしている

が、ここでの生活には満足している。住民票もここに持ってきて、安定した生活に向けて再出発を期している。しかし、6年前にも入院したが、依然として血圧が高く、いまは通院中で体調は悪い。

現在弟と妹との関係は切れており、連絡は取っていない。両親は、ともに健在だが経済的な援助はしてもらえない。しかし、連絡は取っている。親からは、弟も派遣の仕事をしており、しかも来年結婚するつもりらしいが、このままでは仕事が安定せず結婚できないと焦っているという話を聞いている。

相談相手としては、最初に就いた仕事のときからの友人が地元にいる。

これからのことには、やや不安を抱いている。再就職に向けて、フォークリフトなどの資格を取得し、正社員として長く働ける職に就きたいと願っている。

調査番号：大阪3

調査日：8月22日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：30歳 ■ 現住所：大阪府 ■ 出身地：埼玉県 ■ 学歴：高校中退
- 就労の有無：職業訓練（基金訓練）受講中
- 直前職：臨時就労（就労機会提供事業）、清掃関係職、就労体験（臨時職員扱い）
- 直近の収入：勤労収入なし ■ 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身
- 住居：民間支援団体の借り上げアパート
- おおまかな職歴：高校中退 新聞販売店新聞配達（アルバイト1年程度、途中で定時制高校に入学するも退学）
屋台ラーメン店・店員（アルバイト、数カ月） 野宿生活（1カ月） 建築会社・作業員（アルバイト、2年） 建築会社・作業員（アルバイト、3カ月） 裏カジノ・ディーラー（アルバイト、1年半） 出会い系サイト運営会社・事務（アルバイト、2年） 出会い系サイト運営会社・事務（アルバイト、3カ月） 風俗店・店員（アルバイト、1年）+プリペイド式携帯電話転売（副業、1年）、かけもち 出会い系サイト運営会社・事務（アルバイト、1年弱） 日雇い派遣を転々（1年） DVD制作会社・事務（アルバイト、1年8カ月） 風俗店・店員（正社員、6カ月） 配送助手・倉庫整理等の日雇い派遣を転々（10カ月） 現在、民間支援団体の借り上げアパート入居中（入所後、臨時就労を経験 現在、基金訓練受講中）

<仕事に就くまで>

1978年、埼玉県生まれ。

幼い頃から父母とは暮らしておらず、父方の祖母と2人で暮らしていた。

小学校3年生（1987年）の頃、祖母が亡くなった。その時、両親が離婚することになり、「どっちについていくか」と聞かれ、父親についていくことにした。それからしばらくは父親との2人暮らしが続いたが、1年後に父親は再婚し、家に継母が住むようになった。その継母と（自分が）合わなかった。

兄弟は異母兄弟が1人、異父兄弟が2人いる。

実家は経済的にゆとりがなく、大変苦しかった。父親はスナックを経営していて、継母もその店を手伝っていた。「パブルがはじける前くらいに、ちょうどカラオケの機械だの何だの入れたり、家の改装もやって借金したんです。パブルはじける前だったんで余裕があったんです。でも、パブルがはじけてもう借金だけが残っちゃって」。それ

が中学の時に、高校進学タイミングとも重なっていた。

中学時代は学校にもしっかり通っていて、授業の内容にもついていけていた。友人もあり、教師との仲もよく、「先生とメシ食いに行っていた」こともあった。

中学卒業後、普通科の高校に入学した。しかし父親からは「全日制に行くなら、入学金は払ってやるけど月々の学費は自分で出せ」と言われた。学費を払うために入学後アルバイトをしていたが、しばらくしてそのアルバイトを辞めた。次のアルバイトに就くまで時間が空いていた時に、それを見た父親から「やる気がないなら（高校を）辞めちまえ」と言われた。「ついでに家も出る」とも言われ、1994年（16歳）、高校も辞め家を出ることにした。「（父親が）『出て行け』といったのには継母の意志もあったと思う。高校を辞めたことは「今考えてみれば、すごい後悔しているんですけど、その時は高校出なくてもどうにかなるだろうと、楽観的なところがありました」。

それ以来、22歳（2000年）頃に用事があって実家に立ち寄った以外は、音信不通で、「父親の行方も知りません」。

<初職からの経験>

1994年（16歳）家を出た後、父親の友人がやっている新聞屋に住み込みで入った。その際、店主から「高校は行っておけ」と言われ、翌年（1995年、17歳）県立の定時制の商業高校に入学した。朝夕の配達で月12万円の収入になった。実家に仕送りをすることはなかった。店主に言われ、原付免許もとった。しかし、免許を取ってしばらくして1学期が終わった夏に新聞屋の仕事を辞めた。理由は「なんだったかな。思い出せないんですけど、あんまり理由ではなかったのは確かです。多分イヤになったんやと思います」。学費も店主が出してくれていたの、その際に高校も一緒に辞めた。

夏以降はしばらく仕事をせず、友人の家を転々としていたが、一時期、屋台のラーメン屋の手伝いをするこもあった。「冗談みたいな話なんですけど、パチンコしてたら隣のおっさんに声かけられたんですよ。（仕事は）何やってんだ』って。『いや、別に何もしてない』って言うのと、『うちで働かか』って言われて、スカウトみたいな人たちで。その人は地元のヤクザのナンバー2みたいな人だったんです。その人がやってる仕事が屋台のラーメン屋で、（自分がやったのは）ラーメンを作る人の助手みたいな仕事でした。（車の運転席の）隣に座って一緒に回ってました。日当は2,000円と小遣い程度だった。「今思えばひどかったですね。仕込みがあるんで昼1時から入って、夕方5時頃から市街地、住宅地を回って、8時には駅前まで営業して、深夜1時に終わって帰るみたいな生活でした」。

同年（17歳）冬、実家の近所の公園で1カ月野宿を経験した。「めっちゃ寒かった。今考えても『ようできたなあ』って思います」。友人を頼ろうにも、その頃はみんな自分の実家で暮らしているので頼るわけにはいかなかった。友人には、野宿しているということを言わなかった。知られたくもなかった。実家には頼れないと思っていた。

高校中退の件も含めて中学時代の先生に相談することもできたが、そうはしなかった。「当時は人に頼ったりすることがイヤだったんです」。

野宿から脱出できたのは、中学時代の友人との会話がきっかけだった。友人は草サッカーチームをやっており、そこにいた建築関係の仕事をしている先輩を紹介してくれた。その人の紹介で地元の建築会社に勤めることができ、会社の部屋を月3万円で借りることができた。平屋建ての古いタイプのアパートだった。仕事はボードの施工で、日給月給制だった。1日1万円、土日が休みで月23~24万円の収入（家賃込）だった。2年間勤めたが、この頃には多少の貯金もでき、東京に行って生活したかったので、「（会社と）合意の上で辞めました」。

1998年（20歳）鞆に荷物を詰め込んで上京したが、住むところがなかった。路地を歩いていると、電信柱に貼ってある建築会社の求人広告が目に入り電話した。その日のうちに中華料理屋で面接を受け、「明日から入って」と言われ、都内の寮に住み込んだ。しかし、そこは3カ月で辞めることになった。「相部屋の人がちょっとめんどくさい人だったんです。結局女の人のことが原因でもめて。僕は直接関係なかったんですけど、女のことで言った言わないの話になって。ある日帰ってきたらその人と知らない人が部屋にいて、いきなり布団をかぶせられてポッコポッコにやられて。『明日、詫び、入れに來い』ということになった

んです。これはやばいなと思って、その日の晩に相手が寝たのをみはからって抜け出したんです」。自分の部屋が入口に近かったことが幸いし、荷物は何とか持ち出せた。「ほんまに殺されるかと思いました」。

その後、しばらく仕事をせず当時できたばかりのネットカフェに寝泊まりするようになった。「ナイトパックはその頃もうあったと思う。5~6時間で1,800円だったんじゃないかな」。そこで、インターネットでのチャットにはまってしまった。「ほんとにえらいはまりようでした。7時間ぶっ続けでデートチャットしたりとか」。そこから次第に「ネット上でのつながり」ができていった。そのうちの1人の男性と実際に会うことになり、「ウチに泊まれば？」と1週間お世話になるということもあった。「そのうち、その男性のつながりで女の子とチャットして、実際に会って、その時は1回遊んで、次に他の友人も呼んで鍋でもしようかということになって。その日のうちにその娘のところに転がり込んで一緒に住むようになったんです」。彼女は学生で親から仕送りを貰っていた。家賃も親が払っていたので、自分に請求されることはなかった。

彼女と同棲しだした頃から仕事を探していた。

同年（20歳）勤めだしたのが「裏カジノ」だった。「その仕事は見つけたというより、チャットで知り合った人がディーラーで、一緒にメシ食うことになった時に、仕事のことを聞いて、今自分が仕事をしてないことを言ったら、『じゃあうち来る？ 一回面接しようか』という話になったんです。僕も興味を持ったんで（始めることにした）」。その店はまだオープンしておらず、研修を受けることになった。「求人誌にも出ていて、そこではビリヤード場店員募集で、それに応募してきた人をディーラーにするんです。いわゆる『釣り』ってやつです。僕はそのルートではなかったんですけど」。1カ月の研修期間があり、その間は時給1,000円だった。その後時給は1,200円になり、次の店に移る頃には1,300円になっていた。その後、「裏カジノ」を都内で4店舗ほど転々とした。一番いい時で時給は1,800円だった。

主にバカラのディーラーをしていたが、ディーラーの仕事にはプレッシャーもあった。一勝負に動く金も巨額で、店の赤字となる場合もあり、マイナスが続くと場に出させてもらえないこともあった。ディーラーの仕事にも熟練が必要であり、勝負をある程度左右することができる人もいた。しかし、自分にはそこまでの技術はなかった。これらの店舗の中には警察の手入れを受けたところもあったが、自分は捕まることはなかった。裏カジノにはトータルで1年半程度勤めた。「ラーメン屋をやってた時に、そういう方々（裏の世界）で働いていた人）が食べに来ていたんですよ。『上の人のため』とか言って。だからあんまり抵抗感もなかったし、あと僕、兄弟にもヤクザやってるのがあるんです。なのでヤクザとかそういうのにもあんまり抵抗はなかったです」。その後、店の客足が芳しくなくなったため、2000年（22歳）頃に「リストラされました」。その直後に彼女とも別れ、彼女の部屋を出て行くことになった。

2000年（22歳）ディーラー退職後、またネットカフェに行くようになり、チャットで知り合った人に出会い系サイトの運営会社を紹介してもらい入社した。仕事はまず夜勤の「サクラ」をやり、その後アルバイトを管理する側にまわり日勤になった。オフィスの奥にソファがあったので、

会社を辞めるまでそこで寝起きするか、ネットカフェで寝泊まりするという毎日を送っていた。給料は「ぼちぼちよかった」。時給1,000円からはじまり、最後は1,200円になり、月収にして20万円程度だった。定まった住所のない生活を送っていたが、「その頃は若かったですから、体はしんどくはなかったです」。生活については、「お金は貯めもしたけど、使いもしましたね。酒呑んだり、あと風俗、パカラ、パチスロとか」。その会社に2年程度勤めたが、上司とケンカしたため辞めた。「僕も結果を出そうとしてがんばってたんですけど、上の人間がやらせようとしていることとの食い違いがありました。結果が出なかったんです」。

ちなみに、出会い系サイトは9割3～4分がサクラである。有料サイトでもホンモノの女の子を見つけるのは相当難しい。その会社は、「もう、ぼろもうけでした」。

2002年（24歳）出会い系サイト運営会社を退職後、出会い系サイトのオフ会に参加したのをきっかけに、そこで意気投合した2歳下の男性の家に転がり込んだ。

同年、求人誌で見つけた別の出会い系サイト運営会社に勤めたが、給料が安く、勤務も厳しかったため3カ月で辞めた。

同年、ファッションヘルスの「名義貸し店長」をすることになり、店で寝泊まりしていた。名義貸し店長という立場の人は、「あんまりいいんじゃないですかね。僕は、店舗の登録とかビルの名義とかの名義を貸してるだけで、もう一人店員がいるんですけど、ほんまはその人の方がえらくて。2人ではいる時はこっちが敬語で喋るんですけど、女の子たちの前では僕が偉そうにしていなくちゃいけないみたいでした」。

同時期に、副業として「プリケー（プリペイド式携帯電話）の契約の仕事」をしていた。ネットで知り合った人が親方で、「ちょっと裏っぽい仕事なんです。その頃まだ規制がゆるかったんで、リュックに白ロム（データが入っていない携帯電話）を詰め込んで、中部地方にある携帯の会社に持って行って、すべて自分名義のプリケーにして。身分証なしで1台500円で売ってました」。1回で5万円になり、月に1～2回それをやっていた。

そのプリケーを使って犯罪が行われていたようだった。その頃住民票を友人宅においていたため、プリケーの名義を辿って友人の家に警察のガサ入れがあった。これには自分も「やばい」と思ったが、警察が自分に接触することはなかった。

2003年（25歳）になって、ファッションヘルスの名義貸し店長を辞めたが、その後、その店は違法営業をしていたとして摘発を受けた（同時期にプリケーの副業も辞めた）。

同年、また別の友人の家に居候しつつ、出会い系のサクラをやった。時給も900円と安く、「出会い系も落ち目になってきた時期だった」。

しばらくして、居候しているのが大家にばれてしまい出るようになった。その後またネットカフェで寝泊まりしていた。

2004年（26歳）大阪の人とチャットしていた際に「来いや」と言われた。特にあてもなかったし、行ってみたい気持ちもあったので、当初は2～3日で帰るつもりで大阪に行った。その後大阪にいる別の風俗嬢のネット友人が、「自分は市内の実家に住んでいるため、近くにある寮を使ってほしい」と言ってくれたので、そこにしばらく住むことに

なった。

しかし、この頃には金が尽きそうになったので、「その日に貰える仕事を求人誌で探し」、日雇い派遣で働くようになった。派遣会社までは歩いて面接に行った。ここから1年近く日雇い派遣の仕事に就いていた。その間、居候していた寮を2カ月で出ることになり、日雇い労働者が集まる街のネットカフェで寝泊まりするようになった。ドヤについてはネットで大阪にこういう街があるということは知っていたが、実際には利用しなかった。「歩いていると、18時からサービスタイムで『一泊1,000円で泊まれる』と書いてあって、そこにしばらく泊まった」。その派遣会社からの仕事では和歌山や鳥取に泊まり込みで出張することもあった。主に重機を使った施工や重機の組立を行っていた。この頃は月に20日ほど仕事に就くことができ、時給は1,000円程度だった。月に17～18万円の収入になった。

2005年（27歳）3月末から4月上旬にかけて仕事が無くなり、その時期にスポーツ新聞で見た裏DVDの会社に応募し入社した。デュプリケーター（データをDVD等に書き込む機械）でDVDを焼く仕事や発送作業から始め、パソコン操作ができたのでその後はホームページの更新、ジャケットの番号づけ等を担当するようになった。住まいは会社が持っていたアパートに住み込んだ。日当1万円、月30万円からスタートしたその仕事は、2カ月目で40万円になり、売り上げによって月収が変動するシステムで、最も多い時で月80万円にもなった。

その仕事を2007年（29歳）12月まで続けた。辞めた理由は会社が警察に「摘発」されたためである。

しばらくは、会社のアパートに住むことができたが、2008年1月の「えべっさん」の頃（関西に比較的多くある『えびす神社』の祭り、毎年1月10日前後に行われる）に出ることになり、あるソーシャルコミュニティ・ネットワーク（人と人とのつながりを促進・サポートする、コミュニティ型のWebサイト）で知り合った大阪在住の友人の好意で彼が借りている市内のアパートに住むことができた。友人はその頃実家に住んでおり、家賃は取られなかった。

2008年1月頃から半年程度は風俗店に勤め、受付、ウェブページの更新、女の子のパネルの加工作業を行っていた。「女の子の写真を加工して、かわいく見せるんです。目をクワッと大きくしたり、肌を白くしたり、顔を削ったり。ある程度は見栄えを良くすることができるんです」。雇用の待遇は「一応社員扱いだったと思う。雇用保険などの社会保険は全くなかったです」。給料は最初の月が20万円、2カ月目には22万円となった。しかし部署を移動することになり、別の業務に携わるようになった際、そこでの上司との人間関係が悪くなり、辞めた。

2008年8月から再び派遣会社に登録し、日雇い派遣を始めた（これが直前職）。これまで登録した派遣会社は比較的小規模の会社だった。正式な身分証明書がないことがその理由である。2003～2004年頃に一時期千葉に滞在していたことがあり、この頃に健康保険証を作ったのだが、それから保険料を払ったことがなく、所持している身分証明書は期限切れの保険証だけしかなかった。「大手だったら無理かもしれないけれど、小さなところならいけるんちゃうかと思って、『引っ越ししてきたばかりでまだ届いてない』とか軽くウソついて」。複数の会社に登録することはなかった。「どこも変わらないんじゃないかと思って。登録する

には写真作って説明会にもその都度いかなきゃいけない(ので、面倒だった)。これまでの日雇い派遣では他の派遣会社の人と一緒に働くこともあったが、そこであまりいい話を聞かなかったことも理由の一つであった。

日雇い派遣では、配送助手、イベント設営・撤去、倉庫内作業、引っ越しの手伝いなどに従事してきた。派遣登録の際には派遣会社のロゴが入ったTシャツを1,000円で買わされた。「イベント設営の時とかに着るんです。スタッフなのがわかりやすいのと、会社の意向でそれが観客とかに会社のアピールになるとかで。自費でTシャツを買わされたため、『えっ?』とは思いましたけどね」。日給は3時間勤務で3,000円。8時間勤務(9時間拘束)で7,000円程度だった。月収にして12~13万円程度。「住んでたアパートはタダで貸してもらえたので、これでも何とか生活できた」。2008年12月までは同じ現場で働くことが多く、港の冷凍倉庫で仕分け・シール貼り作業をしていた。仕事に必要な防寒着は貸与されなかった。「倉庫が2つあって、1つはそれ程寒くなくて長袖を着ていけばOKなんですけど、もう1つは激寒で。自分で着込んで行かないと無理でしたな」。しかし、2009年1月以降には派遣先の契約解除などが重なり仕事は減っていった。「年末まではぼちぼち就けてたんです。そう言うても月に15~16回程度なんですけど。1月に入ってから仕事が激減しだして、4月になったらもう週1回あるかないかってくらいでした」。

そして「悪いタイミングが重なって」、4月の終わり頃に又借りしていた部屋の友人が、部屋の契約を切ることになり、部屋を出て行くことになった。その時10万円程度の貯金があった。以後ネットカフェで寝泊まりし、数少ない日雇い派遣の仕事に従事しながら2カ月程度食いつないでいた。

初めは「何とかなるんじゃないか」と思っていたのだが、5月頃を最後に日雇い派遣の仕事が途絶え、その頃から「やばい」と思うようになった。

そして6月に入って金が尽き、ネットカフェにも泊まれなくなり、「もうどうにもならん」と思い、大阪府内のチャレンジネットに連絡した。チャレンジネットについてはこういう時の相談先について調べている時に見かけて、携帯のブックマークに入れていた。そして、NPOなどが運営する貧困者支援の民間支援団体を紹介され、現在に至る。

<現在の生活状況>

2009年6月半ばにこの民間支援団体が借り上げているアパートに移ってからは、1カ月間、就労体験ということで清掃作業に週2~3日従事していた。日当4,500円であった。1日1,500円ずつ貰い、生活費に充ててきた(残りの3,000円は団体で預かってくれていた)。

現在(8月下旬)は国の「緊急人材育成・就職支援基金」を利用して、基金訓練でパソコンの技術を学んでいる最中である。いくつかある提携校から、通いやすく、またファッション系とWebデザインに興味があるため、服飾関係の専門学校を選び、7月末から通い始め、10月下旬まで通う予定である。「場所も近くだし、ちょうど良かった」。

現在講座受講開始から1カ月弱が過ぎようとしている。講座の内容には職場見学が含まれており、楽しみにしている。

「緊急人材育成・就職支援基金」の生活資金10万円の支

給は、これからの手続きが終わり次第の支給で、実際の支給はまだ先になる。現在は、民間支援団体から1日1,500円の生活費の貸し付けを受けている。

現在の暮らし向きは普通である。ハローワークにも寄ることがあるが、ものすごく混んでいて、パソコンを使うにも列を成している状況である。今は専門学校通いに専念している。

ハローワークに行ったのは、この民間支援団体に来たらが初めてだった。「イメージ的に固すぎる感じがして」ずっと敬遠してきた。

求人が掲載されているフリーペーパーを見たりするけど、「最近めっちゃ薄くなっている。求人も、飲食とか運送とかは多いんですけど、僕、見ての通り、歯はボロボロだし。(自分の容姿について)とても客の前に出られるとは思えない」ので、そういう仕事には就けないと思っている。歯は大阪に来てから特に悪くなった。

健康診断は、社会人になってから東京で暮らしていた頃に1回だけ受けたことがある。「以前は保険証がない生活でも、何とかかなと思えたんで、乗り切ったんでしょね。不安もあったのかもしれないけど」。現在は、歯医者と心療内科に通っている。最近不眠症がキツイ。眠りが浅く寝付きが悪い。

借金はあるが、「返してない」。

民間支援団体のスタッフにはとても感謝している。

<本人の希望や不安>

将来は、Webデザインの仕事に就きたい。大阪で知り合った先輩が事務所を構えていて、専門学校の授業が終わった後、見学に行っている。そこで勤められるわけではないが、どういう仕事をしているのかを知るために通わせてもらっている。

風俗関係の仕事には就こうと思えば就けるのだが、「もういいんじゃないかと思う。長く続けられる仕事じゃないです。辞める人多いんですよ。半年とか経てば辞めていくし、1日で辞める人もざらにいる。才能があれば上に行けるんだろうけど、もうやりたいとは思わない」。

結婚については、「できないと思う。(理由は)なんとなく」。

労働組合については、「『賃金上げろ』とかストライキやってるくらいしかイメージがない。それに関して何か言えと言われても(答えようがない)」。

最近政治関係のニュースをよく観る。「観ちゃうんですよね。歳くってから」。

年越し派遣村については、「マスコミが騒ぎすぎ。あれで得した人もいるけれど、(その後の追跡調査で)現状が把握できている人が13%とか言ってたでしょ。もらい得やないですか。あの時正直僕も東京に行こうかと思ったくらいですよ。大阪にある日雇い労働者の街見たら、もっとひどいぞって(言いたい)。だからマスコミもあまり信用してないです」。

登録型派遣をしていた労働者が労働組合を作り闘っていることは「知ってます。でも『やって結果が出るの?』って感じが強いですね。これって弱者の考えなのかも知れないけど、そういう考え方になっちゃう。相手は強いんだから仕方ないって。自分が行ってた派遣会社だって、聞いたらすごいピンハネしているのは知ってるんですよ。3時間

拘束で3,000円貰ってても、現場の人が『うちは9,000円出してんねんぞ』って。2 / 3 ぼってるわけでしょ。そんなことをお客さん（派遣先）から聞いたりして、ムカッとしますよ。でも（派遣会社に）言うたところで、はぐらかさ

れるだけだし。もっと頭のいい人ならやれるかもしれないけど、僕にそんな頭はないし。』

これからの社会については、「仕事があればいいんですけど...」。

調査番号：大阪4

調査日：8月22日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：27歳 ■ 現住所：大阪府 ■ 出身地：福岡県 ■ 学歴：高校卒業
- 就労の有無：臨時就労 ■ 現職：臨時就労（就労機会提供事業） 現業職、就労体験（臨時職員扱い）
- 直近の収入：月5～10万円 ■ 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身
- 住居：民間支援団体の借り上げアパート
- おおまかな職歴：高校卒業 劇場運営管理会社・大道具係（正社員、2年） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、2カ月） 運送会社・運転手（アルバイト、5カ月） 半導体メーカー・オペレーター（登録型派遣、2年） 半導体メーカー・オペレーター（登録型派遣、3年） ホテル・フロント係（アルバイト、9カ月） 携帯電話修理会社・生産（登録型派遣、7日） 現在、民間支援団体の借り上げアパート入所中（現在、臨時就労中 今後、職業訓練受講予定）

<仕事に就くまで>

1982年、福岡県生まれ。

生まれた時にはすでに母親は父親と離婚していた。母親はスナック経営で夜の仕事であったために、生まれた時からずっと母方の祖母と叔父（母親の弟）との3人暮らしであった。「小さい頃は、ほんと、ばあちゃんがお母さん代わり」だった。

祖母と同居していた中学校3年生当時の暮らし向きは大変よかった。

高校入学とともに、テニス部に入ったが1年で辞め、バンド活動（担当はベースギター）で福岡や広島など各地のライブハウスをまわった。高校2年生の時祖母が亡くなったあとは、叔父と2人暮らしになった。

<初職からの経験>

高校での進路指導はなく、卒業後（2000年、18歳）は母親の知り合いのついでで地元の劇場の舞台設営や進行を委託されている民間会社に正社員として就職した（大道具係）。

稼いだ給料は母親が管理し、叔父（独身）をとおして生活費を渡してもらうことになっていたが、叔父が途中で生活費・小遣いを渡してくれなくなったため、生活に困り、サラ金で借金をせざるを得なくなった。母親に事情を説明したが、母親は叔父を信用していて、取り合ってくれなかった。その後、支払い滞納でサラ金から勤務先会社まで督促の電話がかかるようになり、会社に居づらくなって入社から2年後に退職した（2002年、20歳）。こうして、母親との関係も悪くなり、地元にも居づらくなったので、地元を離れることにした。

2002年（20歳）求人情報誌をみて愛知県にある自動車会社の下請会社で登録型派遣社員として働くことにした。しかし、この時は友達に恋しくなり、2カ月ですぐに退社して故郷に帰った。ここでの1カ月目の給料は18万円であった。

地元へ帰り、母親に連絡をした。当時母親は分譲マンションを持っており、母親は「『ちゃんと働くならおいてやろう』というような感じだった。おかしな話なんですけど、親なのに『おいてやろう』というも」。こうして、はじめて母親と一緒に暮らし始めた。

同年、運送会社での運転のアルバイトの仕事を見つけた。朝8時から夜8時まで4トントラックに乗って荷物を近距離輸送する仕事であった（普通運転免許はその後失効した）。給料は税引き後で月24万円だった。しかし、5カ月で契約満了となった。

次の仕事を探していた時に、母親から、「男友達と一緒に住みたいから、あんた出て行ってくれ」と言われた。「そんなのろくでもないですよ、ほんとに」。母親は、「僕の職歴を知っているんで、『ボンボン、ボンボンと仕事を辞めて』とその男友達に言っていたんですよ」。そして、その母親の男友達からも、同じようなことを何度も言われるようになった。それに対して、自分は「それは、関係ねえだろうって」言い返して喧嘩になった。「結局それ以上母親と住むことは、その男と一緒におらなあかんことになるから、それはそれでいやなんで」、母親のマンションを出ることにした。ひとまず「住むところも働くところもまだ安定していた派遣会社に、入社したんです」。

なお、以前にサラ金から借りた借金は、「運送会社で働いている時に返せなくなって、放置状態」となった。サラ金の契約した時の住所であった叔父の家はその当時もうなくなっており、駐車場になってしまっていた。住民票をそのまま動かしていなかったため督促状は来なかった。

こうして、2003年（21歳）長崎県にある半導体工場内のクリーンルームで登録型派遣の機械オペレーターとして働き始めた。派遣会社の寮で寝起きし、1年契約で2年間勤務した。この時にOJTでパソコンを習得した。寮費や税を引いて、月収は23～24万円であり、仕事には満足していた。派遣会社が「誠意がある受け答えをしてくれてたから、不明なことはなかった。裏でごまかしとか、そういうのも

全然なかった。また、この工場で勤務している時期には、正社員と一緒にバンドを組み、社内や地域のイベントに出るために一緒に演奏することもあった。「話があれば、正社員も派遣も関係なくて、休みの時は『一緒にパチンコ行こうや』とかいう時も、全然普通にあった。」

その後、2005年（23歳）やっぱり音楽活動を本格的にやりたいと思い、愛知にいた時に知り合った友達と一緒にバンドを組むことにした。そこで、岐阜県の半導体工場に登録型派遣のオペレーターとして働きだした。この時、3年間同じ工場で働き続けたが派遣会社は3回変わった（最初は半年、2回目半年、3回目は2年）。この時の手取りの給与は寮・税引きで21～22万円だった。しかし、音楽活動は交通費や練習スタジオの予約などでお金がかかるし、仕事が1日11時間労働であったことから、あまり練習時間がとれなかった。この頃まではプロのミュージシャンになりたいと思っていたが、3つ目の派遣会社に移った24歳頃から、次第に「心が折れた」。他方で、次第に、「正社員になりたい」と思うようになった。「周りの人には、『（正社員になんか）なりたくないよ』、こんなことを言いながらも、（内心は）そう思っていた。」派遣先の労働者の中には、「趣味も共有できる人もいたし、なれるものなら正社員になって、一緒に仲良く、長い付き合いでやっていけたらいいなって」思ったことがあった。

岐阜県で3年働いていた頃には、同じ地元出身の彼女ができた。しかし、彼女が地元に戻り、また派遣先会社の上司との関係も悪くなったため、契約満了に合わせて再び地元に戻ることにした（2008年、26歳）。当時、貯金はあったが、「帰ってはみたものの、『ああ、そういえば部屋を借りなきゃあかん』、なんて具合で。もう、ほんと計画性がなくて…」と思案しながら、結局は、一時的に佐賀県の親戚宅に身を寄せることにした。そこから母親に電話をすると、男友達と別れて1人で暮らしていることがわかったので、再び福岡県で母親のアパートで一緒に住み、就職活動を始めた。

2008年9月、福岡県内のホテルのフロント係のアルバイトを見つけ、働き始めた。収入は税込みで25万円くらいであった。

当時、母親はスナック経営を辞めて食堂で働いていたが、足が悪くなったため生活保護を受けたいと言い出し、生活相談に乗ってくれるというNPOに相談に行っていた。弁護士を紹介してくれるということだったが、話を聞いてみるとどうも相談料金を巻き上げられそうな怪しいNPOだったので、「辞めておいたほうがいい」と、母親に言っていた。そんな矢先、「相談に行ってくる」と言ってお出かけた母親が家に帰ってこなくなり、母親からの連絡もなくなった。その後、毎日、母親に対して借金の取り立てが来るようになった。最初は対応していたが、そのうち借金取りが来ても、じっと居留守を使って逃れるようになった。しかし、今度は自分の職場まで毎日連絡が来るようになった。結局「そのままだったら会社に迷惑がかかることになるから、退社することにした。」2009年5月末にホテルを退職。母親のアパートにも帰れなくなったため、佐賀県の親戚に相談に行き、身を寄せることにした。

親戚宅に1カ月ほどいたあとに、これではいけないと思い経済的に自立するために、2009年7月1日から長期契約の登録派遣として、岐阜県の携帯電話修理工場働くことにした。最初の2週間は日給6,800円、その後は8,800円で、

1カ月20日勤務の契約だった。しかし、実際に現場に行ってみると、1日働いたらいきなり3日連続休み、次に1日働いたら5日連続休みなどと、「めちゃくちゃなことを言われ」た。仕事のあった3日目になると、今度は派遣先会社の現場リーダーから「（今いる）人はいらんけん、新人とか飛ばしてほしいんやけど」と、わざとらしく言われるようになった。この派遣会社では、「長期契約でありながら、『こいついらんわ!』みたいな感じで言われて、精神的に圧力かけられて」しまった。同時期に一緒に登録型派遣になった人たちも結局「こんなめちゃくちゃなところでは働けないので、一緒に出よう」ということになり、「事前に退社することも言わず、そのまま出て行ったんです。」結局、この会社では7日間しか働けなかった。

仕事を辞めたが行くあてもなかった。佐賀県の親戚から住所を聞いていた大阪府にいるはずの叔父を頼って大阪府まで行って見たが、すでに転居してしまっていて転居先も不明であった。こうして、行き場を失った。この時手元にあったのは5,000円のみであったが、ネットカフェに2日間宿泊した。ネットカフェも「もう明日になったら出ていかなきゃあかん。」「いろんなとこに最後まですがってすがってダメだったら、もう死ぬしかないなって思ってたんですよ。」そういう思いで、必死になってネットカフェのインターネットで相談に乗ってくれるところを探した。

その結果、大阪府下の行政のホームページからチャレンジネットの存在を知ることになった。そこには、『相談してもらえれば最低限動いてくれますよ』っていうようなことが書いてあった。そこに行ってもどうにもならなかったら、もうほんと死ぬしかないなっていう気持ち」だった。

連絡してみると親切に相談に乗ってくれ、現在いるNPO等が設立し貧困者支援を行っている民間支援団体の借上げアパートに入所することができた。

現在、この民間支援団体の紹介で、建築事務所で住宅アンケート調査の臨時調査員として働いている。アンケートの回収・入力作業が主な業務である。週休2日、1日8時間労働である。今の仕事は期間限定の仕事で8月1日から始め、9月18日で終了する。しかし、翌19日から大阪府の雇用促進制度を利用して、職業訓練を受講する予定である。1カ月の間に普通自動車免許を取得し、さらに希望が通ればMOS（マイクロソフト・スペシャリスト）検定を受けることができるので、それを受ける予定でいる。

< 現在の生活状況 >

現在求職活動は行っていない。ひとまず、雇用促進制度を利用して職業訓練を受けたい。その目標を達成できた時点で次を考えるつもりである。

健康状態はよい。

今相談できる相手はこの民間支援団体だけである。佐賀県の親戚には、佐賀県を「出る時に、『立ち上がる（自立する）まで帰ってこんけん』と言って出てきた手前、今の現状は言いづらいですよ。」友達はいるが、みんなバラバラになっていて、今は連絡をとっていない。それに、今の自分の状況を「やっぱり知られたくないです。」

地元に住む彼女とはやり取りはしていないが、先日手紙を書いた。その内容は、「今は会えない。理由は言えないが信じてほしい」というものである。理由を「話したら迷惑かけることになっちゃうんで。結局は。」「ちゃんと手紙

は送ってるんで、理解してると思うんですけど。」

<仕事・生活・政治・社会・労働組合についての意見>

自分の借金については、現在はその先の段取りがついているので、「ほんとに安心です」。「この民間支援団体がなかったら、死ぬしかない、とほんとに思ったんで」。「死のうか、って今までは思ったこともなかったけど、今回はほんとにそう思った。そこまで追い込まれてたんで、支援付き宿泊施設にはすごい感謝してます」。

消息不明となった母親は、「結局だまされて」いて、友達のところに行ったことがわかった。警察に電話したものの何もしてくれず、法務局から弁護士を紹介してもらい、警察に働きかけてもらい、やっと解決に向かった。その後、母親は役所に行って生活保護の申請を行い、1カ月後には生活保護を受給できるようになった。警察や役所の対応は悪かったと思う。

<将来の展望>

気持ちの上で一番しんどくなったのは、大阪府に来て「叔父さんが頼りにできないとわかった瞬間」だった。

今は支援を受けている身だが、充実している。未来が多少見えてきた。この先どうしようかということや生活のことも考えるようになった。「将来をこういうふうにして、普通の人並みにちゃんと生きて行こうとまで考えられるようになった」。

将来にはやや不安を感じている。「将来は、前やっていたホテル業に戻って、人並みの、人と同じ生活がしたい。それを目標に今頑張っています」。接客業はホテルが初めてだったのだが、その職場には「自分のことを本気で教えてくれる人」がいた。上司も「会社に戻って来いよって言ってくれる人なんで、その人の下で働きたいって、今でも思っている」。

調査番号：大阪5

調査日：8月31日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：26歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：徳島県 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：製造業、生産職、常用型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター（注）
- おおまかな職歴：高校卒業 製造業・生産（常用型派遣、3年、派遣先はひとつ） 製造業・ピッキングおよび検査（常用型派遣、5年、この間に派遣先が2～3回替わった） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（1カ月）/求職中

<仕事に就くまで>

1983年、徳島県生まれ。

両親と兄弟のいる家族で、父親は中小企業の正社員、母親はパートをしており、経済的な生活状況は普通だった。中学校には休まず行っていたが、授業内容はよくわからなかった。

高校を卒業して、就職してからは実家を出たが、それからは、お金を仕送りすることも受け取ることもなく、やってきた。

<初職からの経験>

2001年（18歳）に普通科の高校を卒業した。これといった思い出も持っていない。学校から同じ県内の4件の就職先を紹介されたが、自分に合わないと感じ、自分で就職先を探した。

同年、県外の派遣会社に正社員として就職し、常用型派遣として製造業の工場で3年間勤務した。派遣先会社では、フォークリフトの資格を取得する機会を用意してくれたので、自分でそれを受けることにして資格を取得した。

実家を出て、関東や関西で3年間働いた後、2004年（21歳）に退職した。理由は、契約期間が終わったこともあるが、自分でも先が不安だったし、あまり仕事がなかったこ

ともある。

退職後の仕事探しでは、最初はハローワークも利用したが、就職先があっても資格や経験が必要とされるものばかりであった。たまたま資格や経験が不要なものを紹介されたが、自分の適性には合わないもので、紹介された就職先に行こうと思わなかった。

ハローワークでは自分の希望する仕事は見つからなかったが、迷っている暇もなかった。そのため、とりあえず、すぐにまた、別の派遣会社に常用型派遣社員として就職した。2004年（21歳）から2009年（26歳）7月はじめまで、この会社を通して、製造業の工場で働いた。

これまでやってきたのは製鉄、自動車などの製造業の仕事ばかりで、派遣先会社は2～3回替わった。工場では、主にピッキングや検査業務を担当した。これらは、訓練とか高い技能を要する仕事ではなかった。派遣会社から派遣されていた最後の工場の仕事は、週40時間くらいであったが、休日出勤もあった。収入は月22～23万円だった。

雇用保険はずっと加入していなかった。雇用保険は希望する人のみ加入する形だった。年金も払っていない。健康保険は、きょうだいの健康保険の扶養家族のかたちにしてもらって、加入していた。

社会保険がない仕事をしていたが、「まったく不安はなかったです。保険とかかけないで、できるだけ貯蓄というか、所得を多くするようにしていました。それから考えよ

うかなと思って。低収入で保険料もとられたら生活が苦しいんで。一生懸命貯金して、一時期は150万円くらい蓄えがあった。

仕事を辞める直近の職場は、製鉄工場の仕事であったが、2009年（26歳）6月以降、経済不況の影響がここにも押し寄せて仕事が激減し、7月に入ってすぐ自分から退職した。「週の労働時間が短くなってきて、もうこれはあかんと思って」。

2008年10月のリーマンショックの時には、その影響を「まったく感じなかったです。今年の6月になってからいきなり悪くなって。6月からというのはちょっと想像していませんでした。僕の仕事には関係ないと思っていたんです」。

7月初めに仕事を辞めて以降、数週間は蓄えて3畳一間のアパートを借りて暮らしてきたが、生活が維持できなくなり、それを引き払った。そして数日の野宿のあと、7月31日にアセスメント型の自立支援センターに入所することになった。

<現在の生活状況>

家族とのつながりは、今はない。それでも問題はない。相談相手になる友人はいたが、今は連絡を断っている。

24歳（2004年）以降の時期に、2年ほど同棲した時期もあるが結婚までには至らなかった。ずっと独身である。

今、困っているのは蓄えがないこと。それなりに蓄えがないと厳しい。

自立支援センターに来るまでに野宿の経験はほとんどないが、そういう人と自分は立場的にはあまり変わらないと思う。

<本人の望みや不安>

自分の将来については、少し不安を抱いている。

政府や行政に対し、教育訓練制度の充実、健康保険・公

的な年金制度の充実を望んでいる。長期間安定した収入が得られるよう、雇用制度をきちんとしてもらいたい。

今後どんな職に就きたいという希望はないが、とにかくいい職に就くために、失効してしまった普通運転免許をもう一度取るなど、資格取得を目指したいと思っている。フォークリフトの資格を生かした仕事ができればよい。

今のアセスメント型の自立支援センターに入ってから求職活動は、ハローワークに行くのと、フリーペーパーの求人誌を見ている程度である。ハローワークの求人を見ると、いいところは競争が激しいようだ。それに、求人を出しているそれ以外の会社では、人の出入りが激しいところであるように思う。

次の就労支援のための自立支援センターに移ったら、職業訓練を受け、資格を取りたいと考えている。

（注）自立支援センターは、一般にホームレス支援のための施設として、主要都市で2004年頃から設置されてきた。また、ホームレス自立支援策の具体化にともなって、自立支援センターも一般に2つに区分されるようになってきた。

一つはアセスメント型の自立支援センターと呼ぶべきもので、路上で暮らしているホームレスの発見と相談に応じる「巡回相談員」（自治体によって呼び方は異なる）によって支援が必要とされたホームレスの人たちの多くが、ひとまず入所するところである。ここには約1カ月滞在し、カウンセリングとアセスメントが実施される。ひとまず心と身体を休め、軽易な作業や、医療の必要な人は治療を行う。

その後、アセスメント型自立支援センターの入所者の多くは、もう一つの自立支援センターである就労支援型の自立支援センターへ移り、本格的な就職に向けての支援を受けることになる。なお、高齢であったり、就労が困難な病気や障害がある場合には、生活保護などの支援に移る場合もある。

調査番号：大阪6

調査日：8月31日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：39歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：鹿児島県 ■学歴：高校中退
- 就労の有無：求職中 ■直前職：建設業、建設・土木関係職、日雇い ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 アルバイト（2年） 製造業の登録型派遣社員を転々（18年。最長は自動車部品メーカー5年、他は2～3年同じ工場で働いたが、ここ数年は1カ所あたりの勤続期間が短くなっていた） 建設会社の飯場・建築土木作業員（日雇い、2カ月半） 野宿生活（3カ月） 無料低額宿泊所（5日間） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（2週間）/求職中

<仕事に就くまで>

1970年、鹿児島県生まれ。

家族構成は、両親と姉1人弟2人の6人家族。

高校時代、父親は普通の会社員。中小企業で営業の仕事をしていた。母親はパートでレジの仕事をしていた。

購入した家のローンがあり、家庭の経済状況は悪かった。勉強は好きな方ではなく、成績は普通より下の方だった。

アルバイトをしながら、夜間の定時制の高校に通ったが、高校3年生で中退した。「仕事しながら夜勉強してたんですけど、家の方がたいへんだったんで。仕事して、働いたお金は家の方に渡してたんですけど、家庭の事情で辞めな

きやいけなくなりました。」

高校生の頃から放送局や畳屋などでアルバイトをしていた。「夕方から学校行きますので、アルバイト扱いになっちゃうんですよ。正社員というのは、(仕事)がなかなかなかった」。中学校の先生は仕事を探してくれず、自分で探した。

<初職からの経験>

18歳(1988年) 高校を辞めた後も引き続き、地元でアルバイトを続けた。

20歳くらい(1990年頃)に、事情があって父親とケンカをした。父母の仲が良くなかったこともあり、家出して東京に出た。

上京した時の所持金は13万円くらいだった。東京に知り合いがいたわけではなく、放送局でアルバイトをしている時に芸能人をたまに見かけて、東京に行ったら芸能人に会えるかなと思ったのが理由であった。ハローワークには何度か行ったが、そこで紹介された仕事は「ちょっと給料面が安いというか…。それから、(鹿児島県内での正社員の仕事も)一応考えて、職安で探したんですけど、なくて。それもあって東京の方に行ってみようと思いました」。

鹿児島を出る時に父親に相談したところ、「やっぱり九州の方で仕事を探さない」というアドバイスがあったが、自分はどうしても東京に行きたかった。

上京し、仕事が見つかるまでの2~3日はホテルに泊まっていた。求人雑誌を買い、それで仕事を見つけた。

「派遣会社の仕事でした。仕事が決まって会社の寮に入りました。その後、あちこち違う工場とか行って仕事をしてたんです」。登録型派遣労働者として、東京、埼玉、群馬、静岡など関東にある工場で、化粧品のスプレーの製造やパソコンの検査、自動車部品の加工などの仕事を、愛知県に移る2006年までの約16年間してきた。

仕事をしている時には、自分達のことを「派遣」と呼んでいた。ユニホームは派遣会社の名前が入っているものを着ていた。他社からの派遣労働者も同じ作業服(縫い込みである派遣会社の名前は違っている)を着ていた。派遣先会社の正社員は別の服を着ていた。現場での指揮命令は、「正社員が教えてくれる場合もあったし、派遣で長く働いてる隣の先輩から教えていただくこともありました。工場によって教えていただける方が違いました」。仕事をしている時には、「請負」という言葉は聞いたことがあったが、当時問題になった「偽装請負」についてはあまり認識がなかった。

派遣で働いてきたが、いじめや差別、理不尽な経験は特になかった。けっこう仲良くやっていた。

契約期間は、普通は3カ月から6カ月だった。

一つの工場では平均して2~3年働いた。一番長く働いたのは、自動車部品製造の仕事で、5年くらいだった。場所は東京だった。そこは正社員が親切に教えてくれた。いい人ばかりで人間関係がよく、働きやすかった。工場全体では1,000人くらい働いていて、そのうち派遣で働いているのは100人くらいだった。違う派遣会社の派遣社員も働いていた。

契約期間中に「もういいよ」と言われたことが関東で働いていた時に一回あった。

派遣で働いている間は会社の寮に入って、住み込みで働

いた。

派遣先ごとに時給は異なったが、同じ派遣先で働いている間に時給が上がることはなかった。「給料(時給)が、たとえば800円とします。するとずっと800円です。それとは別に残業したら残業代がもらえる。昇給というのはありません。強いて言えば、群馬の電気機器メーカーの工場で働いていた時に、1年間働いたら12月に臨時ボーナスを10万円くらい(もらいました)。そこだけあったんです。そこも3年くらい働いてました」。

手取り収入は最高のところで寮費、光熱費を引かれて26万円くらいだった。埼玉で、自動車のワイパーを作る工場で働いていた時のことである。残業を毎日3時間ずつ行い、朝8時から夜8時まで働いた。休日出勤は月に1~2日あり、残業だけで月60時間あった。その時は雇用保険だけしか入っておらず、「社会保険は、自分で入りたい方は入れるという感じでした」。

派遣期間を通じて収入は、平均すると20万円くらいだったと思う。

20歳くらいから4年間ほどの間、実家に仕送りを月3万円くらいしていた。仕送りをしなくなった理由は、「まあ、4年くらいやって、もうそろそろいいかなって思って」。また、その頃は月2万円くらい貯金していた。

健康保険は、「家の方で(国民健康保険に)最初は入ってたんですけど、高校の時は…。高校を出て被扶養者からはずれた。それ以降ずっと保険証がない状態だった。健康保険に入っていないことで不安はあったが、「自分は健康だったので。年に1~2回風邪を引く程度で、そんなに重い病気はしませんでした」。

仕事を変わった理由は、「収入面もありますけど、今度は違う仕事をしたいなと思いました」。仕事を変わる際には、その仕事を辞める前に次の仕事を土曜日とか日曜日に探した。求職の手段は、求人情報、主に新聞の広告だった。コンビニに置いてある求人誌も見たりした。仕事を選ぶ際には、「場所より仕事内容で決めてました。自分に向いてるか、合ってるかと」。

休日の生活は、主にはゲームセンターに行ったり、余裕がある時はパチンコ屋でちょっと時間をつぶしたりしたが、そんなにはお金を使わなかった。TVゲーム機を持っていた時があり、家で野球や将棋、マージャンのゲームをやっていた。パソコン関係は、あんまりよくわからない。

食事は自炊をする時もあったし、コンビニに行って弁当を買ったりもしていた。

30代前半までは正社員になろうと考えたことはあまりなかった。「(30代後半になった頃から)だんだんねえ、景気が悪くなってきてから、やっぱり正社員で働いた方がいいのかなってというのは考えたりしてました」。派遣で働いていたことに不安はなかった。一方で、同じ仕事をしていても正社員の方が労働条件が良いことに対しては悔しい思いがあった。そのため、正社員に移りたいと考えたこともあったが、何か行動に移したということもなかった。資格を取得することも考えてなかったし、30代、40代になつたらどうなるだろうかなどと考えることもなかった。

結婚したいという気持ちは20代の頃はあったが、まだ自由な時間が欲しいという思いもあった。一時期、職場恋愛で交際していた彼女がいた。しかし、「まあ、別に何もなかったんですけど。結婚は考えてなかったですね」。

その後、2006年(36歳)頃に、関東から愛知県に移って

来て、同じように登録型派遣の仕事を探した。「もう関東近辺はちょっと仕事が減ってきて、『愛知方面に行けば仕事があるかなあ』と思って愛知に来たんですけど。仕事を探してもなかなか見つからなかった。よく探せばあったのかもしれないんですけどもね。」

愛知に移って約2年間は、いろいろな登録型派遣の仕事をしたが、愛知で最後に見つけた仕事は派遣会社から紹介された解体の仕事だった。そこもスポーツ新聞で見つけた住み込みの仕事だった。

その仕事を半年続けた後、2009年(38歳)はじめ、正月明けくらいの時期に、大阪に移った。「大阪を選んだ理由というのは、派遣会社の面接場所が大阪だったんです。それで面接を受けたら、大阪の方で勤務地(仕事)があるってことで(移りました)」。それを見つけたのもスポーツ新聞だった。仕事は、倉庫内での食品の箱詰めの仕事だった。そこは1カ月単位の契約で、2カ月くらいしか仕事なかった。

仕事が見つからなくなってからの時期も、ハローワークには行かなかった。

その後、3月25日くらいに大阪府内にある建設会社で住み込みで働くことになった。

面接を受けたのは大阪府内だった。その仕事もスポーツ新聞で見つけた。その時点で所持金は10円。「210円持ってたんですけど、その時いたところからその駅まで行くのに200円かかったので、10円しか残っていなかった。」

住まいは建設会社近くの寮にまず最初入ったが、会社の都合でそこが閉鎖になったので、府内の別の寮に5月に移った。土木作業、解体作業をする会社だった。最初は「仕事がない」と聞いていたので、生活が心配だったが、「仕事の有無にかかわらず食事はできる。働いたら、そこから食費を引く」と言われた。行くところがなかったので、「よろしくお願いします」と言って、行くことにした。「理由はまあ、会社の寮に入れて、すぐ働けるっていう理由で入ったんです。他には、当分の間だけちょっと働いて、お金を貯めてからまた違うところで仕事を探そうかなと思ってたんです。アルバイトって言ったらいいかもしいかな(注)。正社員じゃなかったの。」

「仕事がなく、食事をしていただけだったので、肩身が狭かった。5月は(仕事をした日)が3日くらいあったんです。6月も3~4日くらいでした。6月中旬くらいに、会社の社長さんから、『話があるんで来てください。』と呼ばれた。『仕事が減ったために、人数カットをすることになったので、申し訳ないけど辞めていただけないですか』ということになって。会社の都合で辞めました。働いたのは、2カ月半のうちで6日か7日ですね。『ご飯代はけっこうですから。会社の都合ですから』と言われました。(収支を考えると)会社が損をしてますね。その時、20人から30人くらい首を切った。寮にいた半分くらいの人です。」

『1週間以内に出てくれ』ということで、その1週間は部屋にいて、求職活動をしていた。でも結局仕事は見つからなくて、土曜日に出て行くことになった。6月20日前後だったと思います。」

辞めた会社の労働条件は、「社会保険はなく、日給は8,000円です。一日働いたらジュース代ということで1,000円いただけました。給料日には(それまでの食費を引かれるので)完全にマイナス状態でした。給料はなく、明細書しかいただけなかったです。もう、マイナス6万円とかそういう感

じでしたから」。寮を出る時には、その1,000円ずつもっていたなかからちょっとずつ貯金しておいたお金4,500円しか持っていなかった。

建設会社の寮を退寮後は、ホームレス状態だった。「7月いっぱいまでは就職活動とかしてたんですけど、お金がなくなってきまして、8月1日くらいからは就職活動もほとんどできなくなってしまいました。ゲームセンターとかパチンコ屋さんで時間つぶしていました。見に行く程度で(実際にやることはなかった)。あと散歩したり。可能な範囲で面接、就職活動をやりながらですけど。7月いっぱいはいはそうやっていたんです」。職を探すのはスポーツ新聞で、ハローワークには行かなかった。

食事は所持金4,500円でお菓子類を買い、最初はしのいでいた。お金がなくなった後は水だけで生活していた。最終的に所持金は5円くらいしかなかった。

寝るのは公園のベンチが主だった。段ボールさえもない状態だった。雨の日はファーストフード店で過ごしたり、朝方までずっと起きたりしていた。

8月12日頃、自転車で通りかかった警察官に事情を説明したところ、「区役所に行けば福祉みたいなのがあるので、そちらの方に行ったらどうか」と言われ、区役所に行った。

区役所に行ったのは2回である。一日目は話し合いだけで終わって、「明日、巡回相談員さんが来る」と言われたため、翌日もう1回区役所を訪ねた。二日目、相談員に相談することができた。全然食事をしていないことを伝えたところ、「非常食みたいな、ご飯をいただいたんです。また、電話代として、相談員さんから『電話してください』ってことで20円いただきました。」

<現在の生活状況>

区役所での相談のあと、大阪の日雇い労働者の多い街にある社会福祉法人が運営する無料低額宿泊所で5日間宿泊した。「食事は無料でいただくという形でした。ほんと、助かりました。」

続いて、現在入所中のアセスメント型の自立支援センターに移ることになった。入所したのは8月18日だった。今日で2週間くらいたつ。「現在のセンターの入居期間は通常1カ月くらい。早い人は2週間くらいで違う寮(就労支援に向けた自立支援センター)に移って、そこで就職活動ができるという話を聞きました。ここでは、身体に悪いところがあったら医者に行って診てもらおうとか。今、歯医者さんに、虫歯で、週に3日か4日かかっています。歯医者に診てもらうのは、高校生の時以来なんです。ここは、共同生活で、一部屋6人か7人くらいいてるんですけど、寝てる時、他の人が大きな声出したり、歯ざしりとかあって、ちょっと睡眠不足です。眠れないことが何日ありました。」

現在の生活は、「朝起きて、8時から掃除を30分くらいします。掃除が終わったら、午前中は部屋でゆっくりしたり。お昼ご飯食べてから、夕方くらいまで散歩して。夕食いただいた後は、また部屋でゆっくりして。」

家族との関係については、「(この聞き取りの)一週間か10日くらい前に実家に連絡したんです。お父さんから『勘当する』と言われました。まあ、別に面倒みてもらってるわけじゃないんで、自分の力で何とかしますという感じです。20歳くらいで家を出て、19年たつが、初めの頃は年に

一回くらい電話していました。20代の頃、3回くらい帰ったことがあります。ただ、26か27歳の時からずっと家に帰らなくなってしまい、その後はほとんど連絡をしていませんでした。ホームレスの状態になっても、自分で家出して出て行ったんで、親には迷惑はかけられない、自分でなんとかしないとダメだと思って（連絡はしませんでした）、姉と弟がいるが、関係は同じくよくない。

これまで相談相手になっていたのは、福岡にいるおじさんである。年にだいたい1回くらい連絡していた。ホームレス状態になった時に、相談しようかと思ったが、やはり、自分で何とかしようかと考え、結局連絡はしなかった。

一緒に遊んだり連絡しあう友人は、今のところいない。

派遣社員で同じ寮に住んでいた人たちは、自分より早く辞めていく人が多かった。なかには、親しくなった人も何人かおり、働いていた当時はご飯を食べに行ったりもしたが、今は連絡を取ることはほとんどない。

過去3カ月間に、気分が沈んだり憂鬱な気分になったり、物事に興味がわかなかったり心から楽しめない時があった。

結婚はしていない。その理由はいい相手にめぐり合わない、安定した収入がないからである。

<本人の望みや不安>

自分の将来については、やや不安がある。

次の自立支援センターに移ってから、就職活動を始めるつもりである。将来のことは不安ではあるが、現在は先のことを考える余裕はない。

「次のセンターに移ってから、免許が取得できると聞いてますので、フォークリフトと原付免許を取って、フォークリフトに関わる仕事をしたいと思ってるんです。倉庫関係の仕事を希望してます」。

貧しいのは自分の責任だと思う。こういう形になる前に、正社員になっておけば良かったと思っている。

(注)建設現場に併設されている「現場飯場」と別に、ひとまず人夫を囲い込んでおくための飯場として町なりに「人夫出し飯場」がある。本人は「会社の寮に入ってそこからアルバイトに行く」と言っているが、正確には「人夫出し飯場に入ってそこから日雇い労働に行く」ことになる。

調査番号：大阪7

調査日：8月31日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：22歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：建設業、建設・土木関係職、日雇い ■直近の収入：月数万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 ファーストフード店・店員（アルバイト、半年） 居酒屋・店員（アルバイト、1年間） 倉庫会社等・運搬（日雇い派遣、数カ月） 事務機器メーカー・生産（登録型派遣、3カ月） 倉庫会社等・運搬（日雇い派遣、数カ月） 路上生活（7カ月） 土木会社・作業員（日雇い、数日） 無料低額宿泊所（5日間） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（1カ月）/求職中

<仕事に就くまで>

1987年、大阪府生まれ。

父親が他界し、水商売をしていた母親に育てられた。母親は非常に厳しかった。

自分は身体が小さく、おとなしめだった。「おカンにしばき上げられるのが怖いんで、おとなしくしていた」。

小学校はやんちゃな子が多く、いじめを受けていた。そのため、里親のような形で地方の家庭で1年間育てられたが、「結局はそっちでもボツになったんで（実家に）帰って来たんです。それでもどうしようもないんで児童センターに2週間おったんですが、また実家に帰って来たんです」。

中学校に上がる時、いじめを避けるため別の区の学校に移ったが、そこは成績の高い地域で、今度は成績の低さでいじめられた。

高校は難易度の低い私立学校に入学した。そこでもいじめは続いたが、最終的に身に付けたのは、「とりあえず、強いやつの下にもぐりこんどけば生きながらえることができる」ということである。それが今も残っていて、「若い

子がほとんどおらんとオッサンばかりがおるような職場しか行ったことがないんで、逆にそれがいいように働いてくれる」。

高校卒業間近になると、進学組と就職組に分かれたが、「俺1人だけがど真ん中にポツンと立っただけ。就職するにしても頭が足りないんで。計算が追いつかないんで就職試験に落ちたんです。進学するにしても進学する大学がないんで進学もダメでした。結局フリーターでいくしかなかったんです。結局は就職も進学もできずそのまんまですね。あれよあれよという間に何も決めることができず時間が過ぎちゃったという感じです」。

今でも勉強ができないことへの劣等感は大きい。「一切学校で勉強しなかったんです。この前、小学校2年生のドリルがクリアできたことなんです。勉強は嫌いでしたね。学校は行きました。家の中においたらおカンにしばき上げられるから。だから、学校は行って、授業中は寝て、飯だけ食って、体育だけ出て、帰って来るという感じでした。帰ってきても家の中におってテレビ観てたら、電気代云々の話になってくるんで、またしばき上げられるから、1人で公園で遊ぶしかなかった。暗くなるまで遊んでから家に

帰って来て、晩飯食って、風呂入って寝て終わり。それが小学校1年生から6年生までずっと続いたんで、結局勉強なんか一切しなかったですね。」

<初職からの経験>

2005年(18歳) 高校卒業後も高校3年生から始めていたファーストフード店でのアルバイトを半年間続けた。

2006年(19歳) 大阪の繁華街にある娯楽施設の中の居酒屋で1年間アルバイトとして働いた。自転車で通えるところだったというのがそこを選んだ理由であった。

夕方5時から朝5時までが営業時間で、最初は接客だったが、後半は人が足りない厨房にまわった。年齢が一番若く、フルタイムで働いた。社会保険の関係で就労時間に制限があったため、別の会社で残りの時間働いたことにしていた。1日13時間の労働で収入はそれなりにあったが、稼いだお金は、「宵越しのお金は持たないタイプ」だったのですぐになくなった。この時期、自動車免許を取得しようとしたが、仕事が忙しく、昼間は寝ているだけだったので、断念した。

2007年(20歳) 居酒屋を退職した。雇用保険に加入していたが、当時は雇用保険の知識もなかったため失業手当は受け取らなかった。「雇用保険のしおりはもらったんですけど、何の手帳が一切わからなかった。今やったらわかってますけど。当時は何のこともわかってへんで、そこらへんでほこりかぶってました。」

居酒屋を辞めることになった理由は、身体がきつかったこともあるが、連れ(友人)が東京の大学に行くことになり、「大阪から一歩も出たことがない人間やから、行きたいなあみたいな感じになって」、東京行きを決めたためである。

同年、東京行きのための資金を貯める目的で、大阪府内の派遣会社で、日雇い派遣として働き始めた。

その会社自体が派遣事業を始めたばかりのところ、朝その会社を集まって、社長もいっしょにみんなで仕事に行き、全員で帰って来て金を渡すという感じだった。倉庫での荷物の積み下ろしが主だった。週4日か5日働き、日給は一日平均8,000円だった。その中から食費と交通費をすべてまかなっていた。遠方の仕事では、帰って来る交通費がなくなることもあり、十数キロを歩いて帰ったこともあった。社会保険の類はまったくなかった。

しばらく日雇い派遣で働いたが、ヘビースモーカーで酒もほどほど飲むため、お金はあまり貯まらなかった。

同年、3~4万円ほど持って東京に行った。

1カ月ほど仕事を探したが、東京では仕事を見つけることができなかった。「コンビニのバイトで声をかけても、大阪の住所を書いた履歴書を出した瞬間に相手が渋り、話は聞いてくれてもバツェンが返ってきたんです。」

東京に行くまでは実家で生活していたが、東京へ出て以降は一人暮らしを始めた。

同年、大分県内にある大手事務機器メーカーの工場に登録型派遣社員として働き始めた。「3カ月程度でした。ほんまの(日雇い型ではなく登録型)派遣。その会社の場合は、工場から車で1時間離れたところに寮があったんです。家賃、水道光熱費と税金引かれて手元に残るのが、定時で切り上げた(残業がない)として5~6万円程度のもんちゃいましたかね。けっこう家賃が高かったんで。『何カ

月かがんばったら“がんばったで賞”みたいなのをあげますよ』というのがあったけど、その賞をもらってすぐに辞めたら全部返さないといけなかったんです。また、仕事を半年以上続けないと、それまでにかかった制服代などの経費を全部支払わないといけなかったんで、結局は派遣会社が儲かるような仕組みになってました。」

その工場には、「ラインが4本あって、他は別の派遣会社3社が入ってました。他のラインはきれいに(予定どおりの)生産台数は出していたので手当もちゃんとついてたけど、うちの会社だけ成績が悪かった。クレームがきて、会社がヒューヒュー言いだすから最終的にはこっちに火の粉がかかってきたんです」。その結果、午前8時から午後5時までの勤務を3時で終わるように変えられて、あとの2時間をサービス残業にさせられてしまった。

2008年(21歳) 大分にはもうすこしいたかったが、派遣会社がサービス残業を行う状況だったため、辞めて大阪に戻った。

大阪に戻ってからも実家には戻ることなくワンルームマンションで一人暮らしを続けた。

大阪に戻ったあと、以前に働いた派遣会社でしばらく働いた。

2009年(22歳)に入り、仕事がなくなったため、退職した。家賃も払えず、ワンルームマンションを出た。

住むところがなく、路上生活を始めた。「ハローワークは今年に入ってからずっとお世話になってました」。仕事を探す際に苦労したのは住所がないことと電話がないことだった。携帯電話は止められていたので、「先方に電話かける時は公衆電話でかけて、『どこにかけなおしましょうか』って言われたら困ってしまっただ。」

ハローワークの相談窓口で2時間ぐらい時間を取ってもらって、やっと土木の仕事が見つかって行った。しかし、土木の仕事でも一定期間飯場に入って行う日雇い労働はなくなっていたので、とりあえず当面の間は日払いの日雇いで出すからっていうことになった。とはいえ、次の日になると、親方から「三日間だけ日払い(の日雇い労働)を出すから」と言われた。一日8,000円で2万4千円。そのお金があるうちに寮付きの仕事を探そうとして見つけた建設業の職場では、安全靴をかうお金がないことが理由で就職できなかった。今、安全靴は自分でかうというところが多い。

結局、行くところがなかった。「若干残っていたお金で、ハローワークへ行くかネットカフェに入って仕事をとりあえず探した。携帯電話も止まっていたのでノートに番号を書いて、その番号をハローワークに持って行って、窓口でいつも相談してもらってる人に電話かけてもらったんです。それでも結局バツェンが返って来るんで、仕方なしに公園のホームレスになるしかなかったんです。」

ハローワークで日雇い労働者の多い街の寄せ場の仕事も調べてもらったが、「今は仕事がなく顔見知りしか雇わないから新しく来てもしんどい、止めた方がいい」と相談員から言われた。だから、この寄せ場での「アンコ(日雇い労働)には一切手は出さなかった。」

「ホームレスやってる時に思ったのは、住所がない、それが一番困った。救護施設で住民票でも取れるなら別だが、自立支援センターのような施設に入らないと取れないということは、入るまでの間身が持たない。それまでの段階で住民票を取れるようなところがあればいいと

思った。

最近派遣の仕事も、求人誌にあまり出なくなった。出ても、大分県とかではなく近畿圏くらい。最近になって出ていたのが白浜のリゾートホテルの仕事だった。あの手の仕事は携帯電話がないと無理である。身体一つで採ってくれるところはまずない。

野宿していた時の生活は、昼間公園で寝て、夜動くというパターンだった。チャリンコに乗って、繁華街をまわって読み捨てられたコミックを回収して、古本屋に売りに行った。1冊10円、30冊で300円になった。「その100円で履歴書を買って、ハローワークへ行って土木でもなんでもいいから仕事ないかって相談しました。『ありましたよ』って言われても面接先は離れた場所の場合もある。そうなるのと、とりあえず行くしかなくてチャリンコで行くんですけど、面接受けても、結局は『安全靴がないからダメです』と言われて帰って来ることの繰り返しやった。かなり体力的にはきついものがありました。でも、そないでもせんと、もし仕事があったっていうのがあとから見つかってもあとの祭りなので、とりあえず行けるうちは行こうということで、毎日行って、結局仕事にありつけないことの繰り返しでした。食うもんがないんで、仕方がないんで、(公園などに生えている)アロエを食ったり、地面に生えてる食べられる草を食べたり、水もお寺の水を飲んでました。最終それでも仕方がないって時は、山桜を切って樹液を枝につけて食べたりもしました」。少量の空き缶や段ボールを「おっちゃん、いらへんか」と買ってもらったりもしていた。

2009年7月末、自立支援センターに入所した。きっかけは、「公園で寝ている時にあるNPOの兄ちゃんに声をかけてもらった」ことである。「何してんの」って聞かれて、「ホームレスやってます」と応えた。「無料低額宿泊所とかあるので、とりあえず区役所へ行こう」と言われた。区役所では、「入所できる施設があり、期間はかかるけれど最終的には仕事を探せる状態になるから」と説明を受け、日雇い労働者の多い街にある社会福祉法人が運営する無料低額宿泊所に5日間滞在したあと、アセスメント型の自立支援センターに入所した。現在は1カ月が経過したところである。

<現在の生活状況>

大分県に行ったあたりから、親とはまったく連絡を取っていない。実家に携帯電話から電話したら着信拒否になっていた。公衆電話からならつながるだろうが、連絡はしない。親とは「一切関わりがなくなってる」。仕事を探す時も実家の住所は書けない。母親の扶養家族にまだ入っているので、定額給付金もそちらに入っているはず。向こうで使われているかもしれない、あてにならない。

現在の友人関係は、中学時代の連れが3人くらい残っている。でも、みんな結婚していて、たいへんそうだから、自分からはあまり関わらないようにしている。

<本人の望みや不安>

仕事の内容についての希望は一切ない。「とりあえず、若干のお金と飯と寝るところとお風呂とだけあれば、あとはもう何でもしますという感じですよ」。

「今度自衛隊を受けることになっている。とりあえず受けに行ってみるけど、そこを落ちたら笑い者になりますけど」。自衛隊を受けて落ちたら怖い。それが最終ラインになっているから。もうあとがないので、どうしようかと思っている。

自分の学力が不足していることが大きな問題である。卒業した高校もレベルが低いところで、「(頭が)いまだについていけないんですよね。だから結局は身体を動かす仕事しかないんですけど、土木の仕事がない。建設業もマンションが減ってるからない。ということはシーリングも内装屋もない。現在ある仕事はビルメンテナンスとかになりますが、こっちは免許がいるんです。結局はにっちもさっちもいかないんです。自衛隊に是が非でも受かるか、次の施設へ行って車の免許でも取って、運転手でもやらないと飯にありつけないんです」。

自立支援センターでの仕事探しは、日雇い労働者の多い街にある就労支援の自立支援センターに入ったことのある人によると、その住所を書くだけでマイナスに響くので厳しいとのことである。

居酒屋など接客の仕事につくのは、若い人と接するのが苦痛になってきているので避けたいと思っている。

経済不況の影響だと思うが、「周りでも派遣やってた子とかおったんですが、この1年ほどの間に、あっちも辞めたこっちも辞めたと聞きました。不況の影響で全体的に下に下がっていると感じました。ただ、テレビとかで、派遣村の様子なんかを見てると、むかつきましたね。政府のやり方にむかつくんじゃなくて。(入村者は)そこで寝てる前に仕事探しに行けというのが正直な感想です」。

「もう20歳も過ぎて、あと3年もしたら25も目の前に見えてくるし、25まで行ったら30までは5年しかないんですよ。もう、どっかで(生活を)固めるんなら今の段階から固めておかないと、あとがしんどいと思うんです。だからとりあえず、自衛隊なんかでも、一番かたいとこ、行けるもんなら行きたいです」。

職業訓練を受けるとしたら、「普通免許か、玉掛けか、大型特殊か。あとでまた使えるようなものもいいです。ヘルパーとか、そっち関係は性に合わないの。あとあと絶対にいるであろうと思われるものだけをとりあえず(受けたいです)」。

これまでいろいろと経験をしてきたが、「まだ救いなのは、警察のお世話にだけはならないようにしてたということです。そこだけはまだ救いです」。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：35歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：東京都 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：求職中
- 直前職：清掃業、清掃関係職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 レジャー関連会社・店員（アルバイト、数カ月） 建設会社・解体（正社員、9年） 建設会社・解体（正社員、2年） 建設会社・とび（正社員、1～2年） 建設会社・解体（正社員、10カ月） 飲食店、建築業等のアルバイトを転々（アルバイト、2～3年） 建設会社・作業員（アルバイト、2年） 清掃会社・清掃（登録型派遣、2カ月） 路上生活（3カ月） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（1カ月弱）/求職中

<仕事に就くまで>

1973年、東京都生まれ。

両親と兄、弟がいる家族で、父親は自営でカメラマンの仕事、母親は中小企業の正社員で写植の仕事をしていた（現在はパート社員）。暮らし向きは余裕がある生活だった。

しかし、中学校3年生の時に両親が離婚し、母と自分と弟の生活になった。その時から生活が大変苦しくなった。両親が離婚したということが同級生たちにばれて、いじめにあった。頼れると思っていた学年主任の先生は「自分さえよければいい」という考えで、相談してもアドバイスのなことは言ってくれなかった。これはダメだという感じではがっかりした。

通っていたのは私立高校で、普通科、工業科、商業科などいろいろあり、自分が通っていたのは環境科で専門的な技術も身につけようと考えていた。しかし、両親の離婚後、経済的に厳しくなった。

17歳（1990年）、高校2年生の秋に中退した。「授業料は僕の方で半分出さなきゃいけないし、生活費もやっぱり、おふくろの給料だけじゃあ食べていけないってということで、手助けってことで僕もアルバイトをやったんですよ。それで、学費の方がきつくなって。生活もきつくなっちゃうから」というのが中退した理由だった。その時母親からは、「学校辞めたいんなら辞めてもいいし、続けたいんだったら続けてもいい。自分個人の人生だから自分で決めなさい」と言われた。高校の先生からは、「何で辞めるんだ」と言われたが、「事情が事情だから、それじゃあ、しょうがないな」という対応だった。

<初職からの経験>

アルバイトをしたのは、16歳（1989年）、高校1年生の時に、中学時代の先輩が働いていたレストランが最初だった。その後、娯楽施設の売り子のアルバイトをした。売り子の仕事は面白かった。

17歳（1990年秋）で高校を中退した後も売り子のアルバイトを続けたが、翌年（1991年）1月にそのアルバイトを辞め、大阪に行くことにした。

同月、母親に何も言わずに大阪に行った。何も言わずに出て行った理由は、当時母親とけんかしていたためである。「東京で仕事を探したらいい」と母親からは勧められていたが、自分のことは自分でやらないとダメだ、何とかしな

いとイケないという考えがあった。悪い仲間ができて周りにいろいろ迷惑をかけていたので、悪い仲間と離れたいたいという思いもあった。行き先が大阪だったのは、幼馴染の女の子が関西に住んでいたのと、父方の兄弟が大阪に住んでいたからである。家出した後、大阪で見つけた最初の仕事の社長の奥さんが、自分が大阪にいることを母親に連絡してくれた。

大阪に着いた後、歴史が好きだったことから大阪府南部にある天皇陵の古墳に行こうと思っていたところ、ある駅の近くにハローワークがあったので、ハローワークに立ち寄り、その場で仕事を見つけた。家出同然で大阪に出てきて、帰ろうにも帰れない、こっちで仕事をやるうという考えがあったからすぐに仕事を決めた。

「学歴が高校中退ってことになるので、建築の仕事で、もういいやっていう感じで」、大阪府内にある建築会社に入ることになった。その前2～3日はホテルではなく喫茶店で時間をつぶして野宿に近い生活をしていたため風呂にも入っていなかった。

就職した建設会社は高速道路の橋げたをつくる会社で、自分は解体の仕事を中心にすることになった。正社員で、寮に住み込んだ。給料は最初は見習いだったため1日8,000円の日給月給制で、そこから部屋代や食費、光熱費で月2万円を引かれた。

その建設会社で9年働いた。解体の仕事に関しては教える側の立場になった。辞める時点の給料は1日15,000円で、月に手取りで30万円以上もらっていた。「雇用保険は、入ってなかったような、入ってたような。ちょっと忘れてしまったんですけども」。年金はかけていなかった。健康保険は、国民健康保険に加入していた。「会社側が保険代の一部だけくれて、あとは自分で支払いなさいっていう形」で、「たとえば、1万円のうち5,000円だけは会社側から支給された。

この会社で働いていた時は、多い時で1月あたり母親に10万円、父親に5万円程仕送りしていた。父は上の兄と同居していたので「送らなくていい」と言われていたけれど、自分の気持ちということで送っていた。母親には、弟が高校に行く資金も必要だったこともあり、金額を多く送っていた。弟が仕事を始めて以降は、「生活はきつけれど弟と生活しているから（仕送りはもういい）」と母親から言われたが、仕送りは続けた。お金の余裕がない時は1万円の時もあったり、何かを買ってそれを送ったりしていた月もあった。

休みの日にはパチンコやギャンブルをしたり、当時付き

合っていた女性と遊びに行ったりしていた。結婚は考えていなかった。周りの結婚している人の話を聞いて、自分の自由な時間がほしかったからである。付き合っていた女性は結婚してもいい相手だとは思っていたが、両親が離婚したことが頭に浮かんでしまい、自分と同じような境遇にあわせたくないという思いがあったので、結婚に踏み切れなかった。彼女は自分と結婚したいと思っていたし、彼女の親にも気に入ってもらっていた。自分の母親にも孫の顔が早く見たいと言われたこともあったが、結局けんか別れしてしまった。

27歳（2000年夏）の時に、社長が夜逃げし、会社が倒産したため、仕事を辞めることになった。多い時に、社長と奥さんを除いて8人程いた社員は、最後には4人になっていた。当時の貯金は15万円程度。社長が夜逃げする前の月に、得意先の会社とトラブルがあり、「給料が遅れる」と言われていたが、最後の2カ月分の給料は結局もらえないままだった。

最初の仕事先の社長が夜逃げしたことで、金銭的な面だけでなく「社長に騙された」「裏切られた」という思いが心の中に刻まれてしまい、一つのところで長く働くことができなくなってしまった。

28歳（2001年）東京に戻って新聞の求人広告で見つけた解体の仕事に正社員で入り、住み込みで2年ほど働いた。

30歳（2003年）の時からは兄が親方としてやっている建築会社にとびの仕事で正社員として働いた。「とりあえず仕事がちゃんと安定できるまでは、自分のところでやれ（生活しろ）」と兄が言ってくれた。しかし、とびの仕事も1～2年で辞めた。

母親のところに帰らずに住み込みの仕事に就いたのは、子どもが20歳越えたら一緒に住みたくないという考え方の親だったからである。自分も同じような考えだった。当時母親は一軒家（持ち家）に住み、自分で写植の仕事をしてローンを払っていた。

31～32歳（2004～2005年）の頃、とびの仕事を辞めた。辞めた理由は次の仕事を関西で見つけたからだ。大阪府内で、知り合いが解体の仕事を始めることになり、声がかかって行くことにした。正社員としての仕事だったが、自分の考えと会社の考え方が合わなくて10カ月くらいで辞めることになった。その時は社会保険は何もなかった。健康保険は親の被扶養者に入っていた。

その後は、求人広告で仕事を探し、飲食店や建築関係、清掃の仕事などをアルバイトでやったが、長くて1年ぐらいいだった。この時期何度かハローワークに行ったが、条件が合わなかった。「いろいろと、何て言えばいいんですか、ややこしいなっていう感じで。それに、良い条件の仕事も見つからなかったもんで」。

その後、北海道で牧場の仕事をしたが、寒さに耐えられず辞めた。次に知り合いを頼りに鹿児島で仕事を探し、飲食店で働いた。さらにその後、知り合いの紹介で沖縄の飲食店でアルバイトをしつつ、住むところを探したが、いいところが見つからなかったため、再び東京に戻った。

34歳（2007年）東京に戻って、建築のアルバイトをした。最初はハローワークで仕事を探したが、見つからなかったため、「スポーツ新聞で探した方がいいや」と思って、手っ取り早く寮付きの建築の仕事を見つけた。向こうからは正社員としてやってみないかという誘いもあったが、以前に社長から裏切られた経験があったので、正社員には

ならなかった。「そういうふうな二の舞にはなりたくないっていう考えをどうしても強く感じちゃったもんで」。

その後はスポーツ新聞で見つけた住み込みの建築業を転々とした。ハローワークでは仕事が見つからなかった。

2009年4月に、たまたま東京都区内のある地域をぶらぶらしている時に派遣会社を見つけて登録した。そこで紹介してもらったのが国の機関の建物の掃除の仕事であった。その仕事を選んだ理由は、安定した仕事、やりたい仕事、縛られない仕事だったからである。週6日、1日7時間が8時間働き、残業はなかった。面白い仕事で、自分も真面目に仕事をして上司からも認められていたが、同じ派遣会社から派遣されていた社員が正社員との間にトラブルを起こしたことが原因で2カ月ほどで辞めることになった。「こっちにまで迷惑をかけられちゃった」。その時期に泊まっていたのは友人の家だった。

6月初めに沖縄へ行った。農家の仕事をやらせてもらおうと思っていたが、仕事を見つめることができなかった。

7月初めに飛行機で東京に戻り、そのまま電車で北海道へ行き牧場の仕事を探したが見つからず、再び東京に戻った。東京で仕事を探したが見つからなかったため、次に九州で仕事を探したが、ここでも見つからなかった。

職探しは各地でハローワークに行ったり、雑誌やスポーツ新聞の求人欄を見たりして探した。

仕事がなかなか見つからず、「イライラ、イライラ、ずーっとしっばなしだった。どうしようか、どうしようかっていう感じで、職安に行っても毎回断られて。つい職安の人につかかってたんですよ。八つ当たりしたり。失礼なことばかりやらかしたもんです」。

寝るのは野宿が多かったが、公園の他、ネットカフェやファーストフード店、ドヤ（簡易宿所）にも泊まったことがある。

7月26日、福岡で仕事がないということは中国地方や四国地方でも仕事がないだろうと思い、高速バスで大阪府の中心地域に行くことにした。ここに来たところで所持金が3,000円になってしまい、公園で1晩明かした。

次の日になって、「タコ部屋」に関係していそうな人（手配師）に「仕事やんないか」って声をかけられて仕事があるという兵庫県のある街まで一緒に行ったが、自分に軽度の障害があることを知られると、断られてしまい大阪府の方に戻って来た。戻って来た時、所持金は1,000円になってしまっており、そこで大阪の区役所に行くことにした。

7月の終わりに、「一か八かかっていう感じで、近くの区役所に行って生活保護について話したら、巡回相談員が来てくれて、自立支援センターに入れるみたいなのを言ってくれた」。自立支援センターのような施設があることは、前から知っていた。「東京で僕の知っている人がやっぱりこういった施設に入っていたんです。その人に偶然に会って、こういった施設があるよっていうことはアドバイスしてもらったんです。それで、頭の隅の方に入れてたんですよ。野宿生活みたいなのをやりだしたからといって悪いことをする訳にもいかないっていう頭があったんです。やっぱり仕事をやりたいなっていうのもあって」。

8月3日にアセスメント型の自立支援センターに入所することになった。

今までの仕事の中でつらい経験は、自分が生意気だったということもあるけれども、障害があることを理由に暴力を受けたり、危ない仕事をさせられたりしたことである。

<現在の生活状況>

親のアドバイスにきちんと耳を傾けなかったことに後悔している。9年続けた後の仕事場でも長く続けていればよかったと思う。現在の生活は大変苦しい。次の施設に移ったら、住民票を大阪に移し、仕事を探そうと思っている。できれば建築の職か、飲食関係や介護の仕事をやろうと思っている。求職活動については、障害があることと学歴の低さが問題となっている。

胃が弱く、ストレスがたまると胃が痛くなることがあるが、必要に応じて医者にかかることはできてきた。沈んだ気分になる、物事に興味がわかないことがあるというのは、過去3カ月の間にしばしばあった。

趣味は音楽で、お金があった時はCDを買ったりしていた。

困ったことや悩みごとを相談できる人はいない。必要はないと思っている。

<本人の望みや不安>

今、将来に強い不安を感じている。
身体障害者への就職支援を政府に望んでいる。

結婚に関してはできればしたいし、子どももほしい。「子どもを泣かせるようなことだけはしたくないっていうのもあるので。そういうプライドだけはあるもんで。」

実家との関係は、親も歳をとっているし、迷惑をかけたくないと思っている。自分で何とかしないといけないと思っている。自分にプライドもあるので、いまは親に連絡を取るつもりはない。落ち着いてから連絡しようと思っている。兄弟にも、自分自身が落ち着くまでは連絡を取る気はない。「親は、本当の親だから心配するのはわかるんですけど、自分で自分の首を絞めたようなものだから、自分自身が悪いんだから、いちいち親に頼るっていうのも嫌なので。」とくに、親に反抗的だったことが悪かったと思う。「親が『こうした方がいいんじゃないか』『それじゃ駄目だから』って言っても、自分は『親の時代とは違うんだ』っていう考えになっちゃって。最終的にはあとで後悔しちゃって。結局は親に迷惑かけるような感じになっちゃうんです。自分では甘く考えすぎていて、自分の首を絞めちゃったというふうに感じています。」

「夢がでかすぎるんじゃないか」って、自分でも思っているんですが、将来は、貧しい国に行って、自分が今まで経験してきた建築の技術とかを教えたい。「子ども達、障害者に対しても教えてあげたいという気持ちがありますね。」

調査番号：大阪9

調査日：9月1日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：39歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：不動産業、営業職、正社員 ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 商社・物流（正社員、14年） 物流センター・現場管理者（登録型派遣、1年）
不動産会社・営業（正社員、4年） ネットカフェ・野宿生活（1カ月） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中 / 求職中

<仕事に就くまで>

1970年、大阪府生まれ。

父親は小さな会社を経営していたが、自分が中学校を卒業する頃、別の会社に移り、その待遇がよかったために生活にゆとりができた。母親はパートで働いていた。

中学時代、学校の勉強はよく分かり、友人関係は良かった。進路指導が適切に行われていたとは思わない。先生がこの学校に何人という枠を決めていて、その通りにならないと先生の評価が上がらないため、絶対に受かる高校しか先生は受験させなかった。自分は全日制の高校に進学した。

高校からアルバイトをしていて、とにかくお金を稼ぎたかったので大学進学は考えていなかった。高校生の時一番したかったことは1人暮らしと車を買うことであった。専門学校にも行きたかったが、資料を取り寄せたら凄く高かった。先生に何をしたいかちゃんと考えろと言われ、働いたら車を買えるなと思い、就職することにした。実際に高校を卒業してすぐに車を買った。「みんなが親の名義で

買ってもらった車に乗ってるのに、僕は自分名義の車をちゃんと持っていましたね。」

就職は一部上場の商社への入社を決めた。高校に募集が来ていた会社だった。当時（1988年）バブル全盛期で高校3年生の1月に就職希望者は学年で4人しかいなかったのに対して、求人が200社あったため、選びたい放題だった。自分はどこでもよかったが、先生から商社に行ってくれと言われた。自分の後に同じ学校から10年間連続で卒業生が入っているようである。そういうコネを作りたかったんじゃないかと思う。頭がきれる子は成績がよくても大学進学せずに高卒で働いた。自分の学校では1番頭いい子と2番目は大企業への枠があったので、毎年2人は絶対いいところに行けるというのがあった。今とは全然景気が違った。製薬会社からは全部といってよいほど求人が来ていたし、大手銀行も来ていたし、私鉄も全部来ていた。何で商社にしたのかとよく聞かれたが、先生が選んだからとしか言えなかった。

<初職からの経験>

18歳（1988年）高校卒業後、最初に就いた仕事は、商社の物流部門の仕事であった。正社員で、社会保険はすべて加入していた。

資格を取る場合は会社がいくらか負担してくれて、資格を取るの本人希望だった。一部上場企業はそういうのはしっかりしていた。フォークリフトなどの免許を取らせてもらった。資格は、普通免許とフォークリフト、自動倉庫、スタッカークレーンという資格を持っている。

給料はよく生活には全然困らなかつた。ピークは29歳から30歳の時に年収600万円を超えていた。「高卒で30手前で600万円なんてなかなかありえないので良かったですね。18歳の時に基本給が12万円位だった。それだけ（増えたのは）頑張ったから。退職時（32歳、2002年）には基本給が28万円くらいだったので、ボーナスだけでも大分変わるじゃないですか。同じ歳でも基本給に差がつくってというのは当たり前にあった。」

住まいは、通常の民間賃貸マンションだった。会社の命令で転勤すれば、住宅費は半分保証されたため、かなり助かった。

大阪で3年間（18～20歳、1988～1990年）働いて、その後新しい倉庫ができるのに伴って三重県に移りそこで4年（21～24歳、1991～1994年）その後、三重県内の別の街で7年ほど（25歳～32歳、1995～2002年）働いた。「倉庫って現場の方が多いいので、昔からいる方が幅をきかせて、仕事の能力を別にして古い方が偉そうにしている。だから望んで転勤していった方です。」

商社で、14年ちょっと働き、仕事を辞めたのは2002年7月末（32歳）だった。会社は自己都合で辞めた。理由の一つは長時間労働であった。土日祝日はちゃんと休みの会社だったが、最後の1年の労働日数が340日くらいあった。休みが1年で3週間しかなかった。そのままでは死ぬなと思った。「過労死する方はよく1年で3,000時間とか言うが、そんなもんじゃない。朝8時から夜8時まで1年通すわけだから。それでも残業手当は毎月15時間しかつかなかつた。今はどこもタイムカードがない。出勤と退勤時間を書くだけ。それすらもなかつたですけど、物流部門は。」

理由の二つ目は、所属していた部門の別会社化とそれに伴う転籍に納得がいかなかったことである。物流部門が赤字だったため別会社化することになって、一旦商社を退職して新しい子会社に再雇用されるという形になった。それは給料が安くなることを意味した。そのため、本社の人事部にかけあって、自分は「子会社で就職した記憶もないし、するつもりもない」と言っただけ、話は通らなかった。そのまま会社にいる必要ないと思って退職した。会社との交渉の際に、他の社員は様子見で、会社と交渉をしていたのは自分1人だった。しかし、他の社員は言いたいことを自分に伝えてきた。

家族は自分が会社を辞めることに大賛成だった。「僕がげっそりやせていったので」。1年はゆっくりすると身内に言い、最初は納得してくれたが、2～3カ月経ったら小言を言われるようになった。1年休むと宣言したのできっちり休んだ。それでもお金には余裕があった。

退職を機に大阪に戻って来た。

ハローワークで手続きを行い、失業手当を受給した。職探しの名目でハローワークにも通ったが、それは失業手当

を受け取るための建前だけだった。

2003年（33歳）夏、派遣会社に登録して、再就職した。仕事は求人雑誌で探した。「フォークリフトの免許を持っていたので。同じ働くのであれば高額の収入を狙っていました。（派遣会社の）面接の時に時給800円とか話を聞いて、『帰ります』と言ったら、『ちょっと待ってください』ということになった。僕の職務経歴書を見て、『こんな仕事やってたんやったら初めから安い給料ではなくて、1,200円スタートです』みたいなことを言われたので、それやったら『1カ月我慢します』っていうことで僕は入りました。」

1年間、派遣会社を通して大手スーパーマーケットの物流センターで働いた。社会保険は正社員と同様にすべて加入していた。労働時間は本人次第だった。残業したいと言えば優先的に仕事をまわしてもらえた。自分は通常の派遣会社のスタッフという立場ではなくて、社員とスタッフの間に入る管理者という現場管理者の仕事だったので、スタッフの人員配置やシフトを作ったり、スタッフが足りない時にヘルプで入ったりなど、早い時間から遅い時間まで働いていた。月の労働時間は250時間くらいだった。時給契約だったので働いた分増えた。ちゃんとした派遣会社だったので、8時間超えたら2割5分増しで、深夜は5割増しになった。正社員であった頃は残業手当が全額つかなかつたので、手取りはその1年が1番多かつた。

1年後に自分で賃上げの交渉をしたけれど10円しか上がらなかつた。仕事を評価してではなくて、一律アップだった。それが理由で辞めた。

物流センターを辞めた後は、失業手当を受給した。自己都合の場合だと90日経たないともらえないが、いかに失業保険を早くもらえるかっていうのを考えて、労働時間を提示するために半年間のタイムカードをコピーして、これ位勤務があつて賃上げ交渉したのに認められなかつたから仕方なく辞めましたということと、病院に行って身体がこれだけ傷んでるっていう診断書ももらってハローワークに提出したところ、会社都合と認定されて失業手当はすぐにももらえた。

求職期間中、求人は、「いっぱいあつた。話はちょっとずれるが、今日もここに来るまでにハローワークに行ったが、いっぱいある。みんながなぜ働かないかって言ったら月収30万円と土日休みとか、そんなん言ってるからない。贅言言わんかったらいっぱいある。ただ、正社員でって言ったら少ないと思います。派遣とか期間限定とかの方が多い。」

2005年（35歳）夏、次に不動産の仕事に就いた。これも求人雑誌で見つけたもので、前回と同様に、この時も仕事を辞めてから1年ほどあいていた。

不動産業を選んだのは、給料が良かったからである。「頑張れば20歳でも50万円もらえる。悪く言えば50歳でも手取りが10万円のこともあるというのもあり、給料が良いというイメージで選んだ。あと、技能や能力が身につくから。何かをしようと思った時に不動産は知識として知らないよりは有利かなと思った。昔から興味があり、やりたい仕事だったという理由もある。」

勤務形態は、月に28日勤務で、定時は朝9時から夜7時までだった。水曜日は休みだったが、ローテーションで出たり休んだり。出勤報告なしで休日出勤していた。客が来て契約が決まったら歩合になり、決まらなかつたらタダ働きであった。決まらない限り値打ちはゼロだが出勤しなけ

れば決まる要素もゼロなので、チャンスを作るために出勤していた。実際の勤務時間は朝9時から夜8時位までだった。勤め始めて最初の3年は朝9時から夜10時くらいまで働いていた。それが普通だと思っていた。労働時間は微妙だった。接客以外は電話やマンションを見に行ったりという感じだった。接客は仕事のうち2割くらいしかなかった。週6日勤務の1日12時間なので、72時間勤務ということになる。残業代の支払いはなかった。就業規則には休憩2時間と書いているが当然休めなかった。実質は10分か15分だけしか取れなかった。時給に換算したら300円もなかったのではないか。

営業会社だったので、基本的に1カ月に1回全体会議があった。営業成績のいい者から立って報告して行って、成績の悪い者はつるし上げられた。「人間扱いじゃない。それが当たり前だった。それをいじめとか差別とかか当たり前というか、それだけのこと。どこの会社もそう。数字がすべてですから。終日サボっていても仕事さえ取れば優秀な営業マンになるわけですから。要領がいい人は」

雇用契約は読んで捺印したが、自分で管理する分の資料はなかった。「会社側が絶対に見せないんです。そこに4年いた中で給与体系が4回変わった。会社の都合がいいようになってるんです。契約で安い基本給で歩合は別会社からもらうようになるんですよ。会社としたら雇用保険も厚生年金も払う額が少なくすむわけですよ。会社の経費を下げるためにそういう契約になってたんです」

賃金は歩合制で、売上げの数字が一定ラインを超えたらそこから始めて歩合が発生し、それに満たなければペナルティで給料をマイナスされた。入社時には歩合制であることはしっかり説明された。「お金が一番重要なので、悪いことも全部教えてくれた会社だったので入ったけれど、給与体系がそこから4回変わっているから」

営業成績には働いているエリアの問題もあった。人気の場所は客が多いが、自分が担当したのは大阪府でも外れだったので特にしんどかった。

月の収入は不安定だった。「今月30万円でも来月は分からない。平均でいうと普通にあるかもしれないが、20万円くらいはあった。月末締め10日払いで、1月からお客さんが多くなるので、2～4月はお給料がちゃんとあっても、5月は分からないという感じだった。5月は引越し以外でみんなお金を使うので、月に10人くらいしか来なかった。ノルマが達成できない。不確定要素の方が大きすぎた。お客さんによっても決まる金額が違うので、運の要素がかなりあった。だから水商売と言われてますね、不動産は。水曜日が定休日、契約が水に流れないように」

貯金はできなかった。「元からなかったですけどね。貯めようとしなかった。もらった時はもらったなりの、使っていない時はないなりの生活をしてた」

途中で転職も考えたが、「働くエリアが変わると、ど素人と一緒。道を一から覚えなさいといけないのでリスクが大きい。会社の中で1回職場が変わっているが、最初は断っていた。押し切られて仕方なく行きましたけど」

2009年6月(39歳)にこの会社を退職した。退職金はなかった。「退職金が出るのは勤続5年以上から。僕は4年だったので。5年経って辞めた人に聞くと給料1カ月分。僕が5年たって辞めても14万円かと。基本給減っているの。私腹を肥やす会社だったので。だからどこの賃貸会社

もチャラチャラした若い人が多かった」

この会社を辞めた理由は長時間労働と仕事のきつさもあがるが、低収入もあるし解雇の要素も含まれている。「身体壊して連絡もできない状況で、お金がなくて携帯止まっていたんで。全く身体が動かない状態で無断欠勤をしたんです。身体が動くようになってきた頃に解雇通知が来た。(休み始めて)1週間くらい経っていました」

借りていた部屋は、会社の寮ではなく、働いていた不動産会社が管理していたマンションに個人で借りて入っていたけれど、クビになっていづらくなったために、退去した。もしそれが社員寮だったら、「お金借りられたんですけど。派遣切りになった人は無担保で労働金庫(ろうきん)からお金借りられる制度がある。それには当てはまらなかった」

不動産会社を辞めてすぐはネットカフェに滞在した。気がついて焦った時にはお金がないという状態になっていた。1カ月くらいフラフラしていた。

8月になり、「やっぱり不動産屋やってたんで、最後の手段は生活保護って刷り込まれているので役所に相談に行ったら、僕の年齢だと生活保護はおりないと言われて、そこで(巡回)相談員さんに会うセッティングをもらって、相談した翌々日にここ(自立支援センター)に来ました」

お金が底をつきネットカフェに行くことができなくなってから役所に相談に行くまでは、公園でも寝泊まりした。「ここ(自立支援センター)に入るまでの状況はみんな変わらないと思う。年配の人は割り切っているんで、ネットカフェを利用せずにここに来ている人が多い。みんなここ(自立支援センター)にいる人は同じ経験しているけれど、夜に動く。汚れてきたら人目につくのが嫌なので、夜移動して昼間は図書館でおとなしく眠る。みんなが殆どそうしている。公園でなぜ夜動くかということ、水浴びができるから。自覚症状で自分が臭いと思い始めたら、図書館にも行きづらくなる。そしたら、金を使わず、なおかつ僕がよく行っていたのは、7月とか、一番暑い時、涼しいところを考えると、土日やったら場外馬券売り場とか。タバコを買いお金もないし、そういう繰り返してしょうね。いろんな人と話をしたら同じ時期に同じ場所をうろついていた人が結構いた。最近公園のベンチには手すりがあって寝れないようにしてるんです。だから、ないところをちゃんと探すんです。そういうところにはホームレスがたくさんいますね。図書館はいい。クーラー効いてて新聞読んで水飲んで。図書館に行ったら明らかにこの人はっていう人いますしね。(一箇所はずっといるのではなく)僕は結構いろんなところに行ってた。一箇所にいることはプライド、人目が気になる。あそこ行ったらいつもあの人がいるなって思われるのが嫌で結構変えていました」

ホームレス状態になって以降、ハローワークには1回だけ行った。以前住んでいたエリアで区役所に相談に行った時、「お金借りられるんじゃない?」って担当者に言われたためである。結局ハローワークではお金を借りられなかったけれど、役所の担当者と話をしたのをきっかけに現在のアセスメント型の自立支援センターにたどり着くことができた。自分がうろついていたエリアはホームレス支援のNPOの方が夜回りをしていなかった。「大阪で言えば南の方はしている。ヤクザもだけれど」

就労支援のサービス、窓口の利用経験については、八

ローワークは近くなかった。自分がいたところから近く
のハローワークまで自転車で1時間くらいかかった。ジョ
ブカフェは若年層が対象で自分は年齢制限を超えているの
で、利用しなかった。自治体による職業相談・紹介も利用
しなかった。これは制度やサービスを知らなかった。自治
体はそういうことをしないとと思っていた。行政が運営して
いる職業紹介も知らなかった。

<現在の生活状況>

現在は何も悩みはない。

最初の仕事をして20代後半に結婚し、その後、離婚
して今は独身である(子どもはいない)。

現在、別れた妻を含めて家族とは連絡を一切取ってい
ない。父親が病気になった5年前に連絡を取ったきりである。
「さすがにもうあきらめてるんじゃないですか。僕も世話
になろうと思ってないから(電話も)かけない。親の世話
になるならここ(自立支援センター)に来ないです。(何
かあった場合に連絡は)来ないかもしれない。もう割り
切っている」。

困った時に相談できる友人はいない。大阪を離れていた
期間が10年以上あるので、連絡も取れない状態である。助
けてくれる人はいた方がいいが、相談はしてもしなくても
いい。結論を出すのは自分だから。今回の件は自分の身か
ら出たさびと割り切っている。

今まで勤めた会社に組合はなかった。労働組合が身近な
存在だとは思わない。労働組合のある会社で働いたことが
ないことが理由である。労働組合のある会社っていうのは
大企業なおかつ製造業だと思う。働いていた商社には社員
会というゆるいのがあった。もし組合を作ろうとしても、
作った瞬間にクビだったと思う。「社外で組合を作るよう
な無駄な時間は...よう作らない」。

<本人の望みや不安>

将来に対しての不安は全くない。自分は絶対何とかでき
ると思っている。そう思わないとやっていけないというの
も当然ある。

貧しいのは本人の責任だと思う。

社会の問題は政府の責任で解決すべきだとは思わない。

「議員を選ぶのは僕らですもんね」。

社会の問題は自分たちの力で変えられると思う。「変わ
りましたから、実際。民主党に変わってますからね」。

今困っているのはお金がないことである。今日から就職
活動をしていいと言われても、まず履歴書を買うお金も
ない。ちなみに、現在は毎朝全員で15分程度の清掃を行っ
ている。作業賃として300円もらえる。1週間で毎週月曜日
に2,100円支給されている。

次に困るのは住所設定の問題である。住所設定できな
いと求職活動もままならない。現在いるアセスメント型の自
立支援センターでは住所設定ができない。次の就労支援に
向けた自立支援センターに移ったら住民登録できるようにな
る。

今後の求職活動に不安はない。仕事はあると思っている。

「(派遣の仕事でも)行きます。派遣でも2年以上働いた
ら直接雇用にしないといけないという法律がありますよね。
仕事選ばずに派遣していたら、ある程度の歳までは仕事で

きると思う。50歳手前までは、『どういう資格を取って』っ
て考えていれば、何とかかなるかなと思っている。ここの施
設は40代、50代が多い。僕はかなり若い方なので心配して
ない。アルバイトでもフォークリフトの免許を持ったら
時給1,000円以上とかあったりする。不動産屋で苦しかった
ことを考えれば、給料上がるってまだ考えている。選ばな
ければという条件はあるが、めばしい仕事は何件もある。
フォークリフトを使った仕事も考えている。物流関係が1
つと不動産の知識もあるからそっちの方も。不動産の場合
は会社選びを間違わなければ(大丈夫である)。給料がいい
ところを受けても、昔は面接もしてもらえなかった。未
経験だったので。今は経験者になったので、それもありか
なと思う。介護関係の免許も考えている。介護ヘルパーを
考えている。漠然とですけどね。興味があるのはいっぱい
あるが、僕をこの自立支援センターに入れるために声かけ
てくれた人の仕事、こういうのも面白いなあっていうのは
ある。おそらく、こういう仕事で経験者はいないだろうか
ら、一番気持ちが分かるのはここにいる人間になっていう
のはあります。NPO関係にも興味はある」。

社会保険については自分の給料の中から何をいくら払っ
ているかまでは分からなくても、給与明細には控除額は出
ているので、どの保険に入っているかは誰でも分かるはず
である。名前も聞いたことがないという人は働く資格がな
いと思う。しかし、各種保険についての詳しい内容を知っ
ているかと言われたら微妙である。雇用保険は利用する立
場になったことで詳しくなった。健康保険は使ってないか
らあまり分からない。「辞めた時に、健康保険は退職後1
年間は働いていたところの保険を適用できるんですよ。
ただ支払額が倍になるのはびっくりしました。サラリー
マンでこういうことかと思感した」。年金は去年、年金特
別便が来た時に詳しく見た。労災は、商社の物流にいた時
は、フォークリフトを扱っていたので怪我などがあつたた
め少しは知っている。会社は労災があつても、労災保険を
使わずうまくやっていた。

現在の社会保険の適用状況については、健康保険は未加
入で、生活保護扱い(医療扶助)になっている。「ここ(自
立支援センター)にいる人は全員そうじゃないですか」。
年金は、「未加入という強制で国民年金に切り替わって
ますよね。そこで停止のあれは出してないんで、僕は。強
制の未加入になっている状態でしょうね。足りないんです。
あと7年はいるんですよ。年金が支給されるまで。ただ、
民主党に変わったんで分からないです。最低保障年金とか
で何もしなくても14万円出すって言いましたから。だから
真面目に厚生年金かけてらっしゃる方はどうしようって
思ってるんじゃないですか。特に僕ぐらいの年齢が。多分
ですけど、(最低保障年金ができる)働かない人が増え
ると思う。もっと出てくるのかなと。誰でもそう思ってい
るのではないかと。国民年金を真面目に掛けてた方が、40年
かけても8万円ないわけですよ。現在は。おかしなって
なるじゃないですか。不動産屋さんにお客さんで来る生活
保護の人の方が、汗水流して働いている自分達より手取り
が多いんですよ。『ええっ?』って思っていました」。

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：37歳 ■ 現住所：大阪府 ■ 出身地：鹿児島県 ■ 学歴：高校中退
- 就労の有無：求職中 ■ 直前職：飲食店、飲食店関係職、アルバイト ■ 直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身 ■ 住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 印刷会社・印刷工（正社員、2年） 印刷会社・印刷工（正社員、1年） 自動車メーカー等製造業の登録型派遣を転々（10年） 建設会社、建設・土木作業員（日雇い、5年） キャバクラ・店員（アルバイト、1年） 建設会社の飯場、建設・土木作業員（日雇い、4カ月） 飲食店等・店員（アルバイト、数カ月） ネットカフェ・野宿生活 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（3カ月）/求職中

<実家での暮らし～初職に就くまで>

1972年、鹿児島県生まれ。

家族は、母親と姉が2人いる。実家は鹿児島県でスポーツ店を営んでいたが、小学生のころ父親が借金を作っていた。その後は、母親のパート収入や自分のアルバイト代で生活していた。

<初職からの経験>

高校は、地元の商業科に通っていたが「早く仕事がしたい」と思い、17歳（1989年）で高校を中退した。

17歳（1989年）で高校中退後は、大阪に出て、正社員として印刷関係の仕事に就いた。仕事内容は印刷作業やその周辺作業であったが、2年間働いてその会社を辞めた。

19歳（1991年）その次も印刷関係の仕事に正社員として就き、1年ほど働いた。辞めた理由はいろいろな仕事を経験したいと思ったためである。大阪で仕事していた間は会社の寮に入っていた。

20歳（1992年）印刷関係の仕事辞めた後は東京に上京した。3つの派遣会社に登録し、30歳（2002年）まで派遣社員として働いた。関東を中心に4～5カ所派遣先を移動した。仕事は大手住宅メーカーの工場での溶接作業や自動車関連メーカーの流れ作業などを経験した。収入が最も多かったのは、大手住宅メーカーへの派遣の時で、月30～35万円の収入があった。派遣社員の間は派遣会社の寮で生活した。

30歳（2002年）で派遣社員を辞めた後は、家庭の事情により大阪に戻り、大阪に出て来ていた姉の家に泊まりながらの生活を送った。そこには一時期母親も同居していたが、祖母の世話をするために鹿児島に戻った。大阪にいた間は建設業で日雇いとして働いた。

35歳（2007年）姉が結婚するからということで姉の家を出て、それからは、友人の家に泊まりながら接客業（キャバクラ）で1年間働いた。その後、その友人に彼女ができ一緒に暮らすことになったので、友人の家を出た。

2008年（36歳）11月から2月までは大阪府内の建設・土木関係の飯場で仕事をした。この飯場は手配師に声をかけられ紹介された。飯場にいる労働者は多い時に30～40人だった。

11月にはとびの仕事をしたが、ずっと仕事があるわけではなく仕事のない日もあった。12月から2009年2月まで、大阪府内の鉄道の改札拡張工事の雑役などの仕事をした。

1日7時間で12,000円、この間1日3,000円の寮で生活を送った。

社会保険は派遣社員を辞めて以降支払っていない。

<自立支援センターに入所するまで>

2009年（37歳）2月に拡張工事が終わり、飯場を出た後は、ネットカフェのパソコンや雑誌・新聞を通して仕事探しを行ったが、身分証がないためになかなか仕事に就けなかった。夜の仕事（接客・飲食業）などをいくつか経験したが、続くような仕事がなかった。

大阪府内の繁華街のネットカフェ、日雇い労働者の街にあるドヤ（簡易宿泊所）やその地域の支援施設に泊まったり、時には大阪府内の公園で野宿した。「ネットカフェは安いところで14時間で1,000円ちょっと。寝にくい上に人気のあるところは列ができる。当時の食事はコンビニのおにぎりやカップ麺だった。」

そんななか、所持金すべてが入っていた財布を落としてしまった。そこで、大阪府内の区役所前で見つけたチラシを見て電話すると、別の区役所で相談できると言われた。その区役所に相談に行くと、相談員に大阪府内のチャレンジネット（住居喪失不安定就労者支援センター）を紹介された。

チャレンジネットに行き、「公園で寝泊まりしている」と言ったところ、また別の大阪府内の区役所に行くように言われた。その区役所で巡回相談員と面接をしたのち、6月からアセスメント型の自立支援センターを紹介され、入所することとなった。

<家族や友人について>

現在、実家のスポーツ店は、父親の借金を母親の弟（叔父）に肩代わりしてもらい、経営を母の弟に任せている。家族とは連絡は取れるが、迷惑はかけられないので、困っていてもあまり相談はできない。

相談できる人は友人や自立支援センターに入所している同じ境遇の人である。

<現在の生活状況など>

現在の自立支援センターの暮らしは、12人用の部屋で6人程度が入居し共同生活をしている。

自立支援センターにいる間は、本格的な仕事ができない

のでしていない。収入はほとんどなく、自立支援センター内のそうじを行い、1週間に2,100円程度もらっている。

たばこは若いころ吸ってみたが、自分に合わなかったので21歳で辞めた。今は吸っていない。

<本人の望みや不安>

自分の将来については、「ここをゼロと思って、あとは

上がっていくしかない」と前向きに考えるが、やっぱり不安な部分もある。これまでを振り返ると、「人とのつながりは大切。仕事などの情報を教えてもらったから」。

また、「派遣などの仕事をするよりも安定した仕事に就いていればよかった。貧しいのは自分の責任だと思う。自分がしっかりしていればこういう場所にも来ていない」。

これからは、「料理を作るのが好きなので調理師免許を目指したい」。

調査番号：大阪11

調査日：9月1日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：36歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：福祉サービス業、介護職、契約社員 ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：専門学校卒業 高齢者介護施設・介護（正職員・3年）+ 飲食店・店員（アルバイト・3年）
飲食店・調理（正社員・3年） スーパー・店員（正社員・3年） 障害者介護施設・介護（アルバイトのちに正社員・2年半） 交通事故で3カ月治療 高齢者介護施設・介護（契約社員・3年） 野宿生活（3カ月） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（1カ月弱）/ 求職中

<仕事に就くまで>

1972年、大阪府生まれ。

両親、祖母と妹2人との6人家族。父親は正社員で働き、母親は専業主婦だった。

高校生の時、大学に行くつもりでいたが、卒業当時、就職難の時代で、手に職をつけた方が有利だろうと考え、また新聞やラジオで高齢化社会について聞いたこともあって、福祉の職に就くことを考えた。親のアドバイスが大きかった。

福祉の専門学校の介護福祉学科に進んだ（介護福祉士の資格を取得）。卒業後の進路について在学中は鍼灸の専門学校への進学を希望していたが、親から「手に職を持っているんなら仕事に行くのがいいんじゃないか」と就職を勧められた。

<初職からの経験>

福祉の専門学校を出る時、当初は進学を希望していたこともあり、かなり遅い時期に就職活動を始めた。専門学校の校長先生から「ここは、まだ募集している」と直接紹介され、介護老人ホームに正職員として就職することになった。

1992年、20歳の時、介護老人ホームに就職。職員数が300～400人と規模の大きな社会福祉法人で多くの施設があった。週40時間、1日8時間勤務で、それに加えて早出の際に2時間が付き、夜勤も月3～4回あった。月給は手取りで148,000円と他の老人ホームなどと比べ2万円ほど低かった。職員の多くが、給料や出される食事について不満を持っていた。年2回のボーナス（20万円/1回）と厚生年金・各種保険はあったが、昇給はわずかしかなかった。低賃金であったので飲食のアルバイトで週3回、2～3時間

働き、月3～4万円ほど稼いでいた。

長く続く人でも2年という職場だった。自分は3年勤めた。

1995年、23歳の時、給与が低いことから将来に不安を覚え、施設側に昇給を求めた。「(辞めた理由は)給与面が不満だったから。ここにおっても良くならんやろうと思った。(仕事を始めてから給料が)5,000円は上がったけど。1人ならそうでもないが、家族をもったら15万円では厳しい」。施設側からは「もうちょっと待ってほしい」と言われたが、「給料が安くて割に合わない仕事させられてんねんから、割に合う給料を出してくれ。2万円くらいプラスしてほしい。それができないなら辞める」と改善を求めた。結局、2万円は出せないということでその1カ月後に辞めた。他の職員も不満を抱いていたが、いっしょに不満を言う勇気を持っている人はいなかった。

退職直後、趣味である武道の活動中に右腕を骨折し、全治3カ月となった。次の仕事も介護職に就きたかったが、腕に以前の筋力が戻るまでの間は難しいと考え、同年、飲食店に正社員として就職した。情報誌で、「正社員募集」と書いているのを見て応募した。主に調理の仕事を担当することになり、3つの店舗でアルバイトが足りないところをカバーして働いた。勤務時間は基本的に午前9時から午後5時の週40時間、月の収入は178,000円、ボーナスも年に2回、30万円ほど支給され、厚生年金・社会保険もあった。前の仕事もこの仕事も実家から通い、家に月3万円入れていた。

3年間ほどこの飲食店で働いたが、在庫の管理や納品の処理でうまくいかないことからのストレスで普段からお酒を飲みすぎていたために肝臓を悪くした。

1998年、26歳の時、自宅で飲酒中に倒れて緊急入院した。1週間ほど昏睡状態が続いた。退院後、病気を理由に会社から解雇された。退職金が10万円出て、1カ月自宅で療養

した。

27歳前後に、父親が正社員で勤めていたスーパーに紹介されて正社員で入社した。この際、他の仕事も探したが、飲食業の仕事に就いたら飲酒を繰り返してしまうことを危惧して希望しなかった。スーパーの仕事はずっと夜勤で、勤務時間が午後8時から午前8時までで実働11時間の週66時間。給与は日給制で1日1万円、月の手取りが24万円でボーナスはなかった。社会保険や厚生年金、雇用保険、退職金などは一切なかった。健康保険は自分で国民健康保険に切り替えた。夜勤であったため、仕事帰りにお酒を飲まずに帰宅し寝るという習慣がつけられ、自分としては良かった。当時は、このスーパーが次々と店舗を増やし、開店ラッシュをしていて、スターティングスタッフとして各店舗に派遣されレジ打ちや品出しなどの作業を行った。スーパーには3年間勤めたが、その間の昇給は一切なかった。スーパーに勤めている間は昼夜逆転の生活を送っていたため、家族と生活時間が合わなかった。社員同士で遊びに行くことはあった。「朝ごはん食べて帰ろうか」みたいなことも多かった。

入社して3年目(30歳)に、「(社会)保険なくてどうしよう。このままでいいのかな」と将来に不安を感じ、仕事を続けながら次の仕事を探した。待遇と給与面、勤務時間を条件にして探していた。それまでは高齢者の介護だけで身体障害者の介護の仕事をしたことがなかったが、せっかく介護福祉士の資格を持っているのだからと身体障害者介護の仕事を申し込んだ。

2002年、30歳の時に、最初はアルバイトとして採用され、1カ月間スーパーと兼業したが、介護の仕事で正社員として本採用になると同時にスーパーを退職した。

仕事は身体障害者の訪問介護と、グループホームの仕事を併せて担当した。内容としてはお風呂やトイレの介助、利用者の食事の用意などであった。また、ホームでの泊まりという宿直のような仕事もあり、その時は夜勤であった。収入は手取りで月17万円となり前職と比べて月収は下がったものの、年2回のボーナス20万円もあり厚生年金と各種保険も完備されていたこともあって、大きな不満はなかった。この仕事は、身体障害者を相手にするので、介護福祉士や介護ヘルパーの資格がないと雇ってもらえなかった。スーパーを辞めた30歳から32歳までの2年半勤めた。

2004年、32歳の時、自転車を運転中に居眠り運転のトラックに追突され両足首を強く捻挫、全治3カ月の怪我を負った。治療費は相手が全て負担したものの、入院中は車椅子の生活を送ることになった。怪我をしていた3カ月間の給与分は示談金としてもらった。3カ月かかると職場に連絡したところ、「ほな、辞めてもらうしか仕方ない」と返答された。「(介護を必要とする)その人のところへ行けなかったらその人が介護を受けられない状態になってしまう。他に資格を持っていて経験のある人を追加した方が穴を埋められるという事情だったので仕方ないと思った。退職金は出なかった。会社が自分を必要としてくれているなら、この仕事を続けたいという気持ちはあったけれど」。

次の仕事も介護の仕事がしたいと考え、33歳の時に高齢者介護をやっている株式会社に入った。そこは「アルバイトみたいな感じやけど常勤。契約社員みたいな感じです」。週5日、1日8時間で、同じ仕事をしていても正社員は20万円、自分は時給制で16万円だった。1年ごとに再契約していく形だった。社会保険は全部あった。

この仕事を始めて3カ月後、父親が亡くなり家売りに出した。妹2人はすでに嫁いでおり、母親もいったん妹夫婦に引き取られたため、1人暮らしを始めることになった。最初は43,000円のマンションにいたが、途中で20,000円のアパートに移った。住居を変えた理由は、高校からの友人に貸した金が返ってこなかったため。入院費が足りないというので50万円を貸したのだが、その後友人に連絡が取れなくなってしまった。

今年(2009年)3月まで高齢者介護の仕事を3年ほど続けたが、給料は変わらなかった。そこを辞めたのは、精神的に続けられなくなったから。自分が自分でない、自分を見失うような感覚になった。介護の相手は認知症の人ばかりだった。まわりの同僚は、機械的にやっているだけだったが、介護とは、もっと人間と人間が触れ合うものだと思っていた。「これが介護なんか?」みたいな違和感、ギャップを強く感じた。ここにはレクリエーションの時間もなかったため、自分が積極的にレクリエーションの時間を設けるなど努力をしたが、周囲の協力を得ることができなかった。何を話しても聞いてもらえなかった。

退職する前に次の仕事を探す余裕はなかった。次の仕事を探すより前に自分が先につぶれてしまうと思ったので。

<現在の生活状況>

3月に仕事を辞めた際、手元に20万円ほどしかなかった。このお金を次の求職資金とするため1カ月ほどでアパートを引き払い、その日のうちに大阪府内の公園でテント暮らしを始めた。

家賃を払おうと思えば払えたけれども、「仕事探すまでにお金が尽きる感じがした。お風呂に行くだけで1カ月1万円飛んだ。1回410円かかるから」。仕事探すのにもお風呂は行ってないといけないうし、洗濯にコインランドリー代もかかる。携帯電話がないと仕事を探せない。食事は3日に1食で仕事を探したが見つからなかった。空き缶の回収などをしたことはなく、ずっと無収入だった。

4月末から3カ月間テント生活を続け、7月末に区役所に相談に行った。「相談に行った時はほとんど衰弱状態です。お金も尽きてきたし、いよいよやばいかなっていう時に妹から連絡があって、こういう施設があるからと教えてもらって区役所に行きました。妹はテントに住んでるのは知ってたんですけど、お金はまだあると言ってたので。でも、(妹は)『3カ月も経ったらお金ないんと違うか』と本能的に気付いたんだと思います」。その時、母親は1人暮らしをしていたが、生活保護を受給して生活しており、稼働能力のある自分が同居すれば保護が打ち切られてしまうため一緒に住めなかった。2人の妹夫婦の家庭も生活が厳しく、頼ることはできなかった。

最初、日雇い労働者などが多くいる地域の区役所に行ったら、「自分が住んでいたところの区役所に行ってくれ」と言われ、そこに行ったら「ホームレスでも実際に暮らしているところの区役所に行ってくれ」と言われた。3番目の区役所で相談したところ、巡回相談員と連絡を取ってもらい、「今日2時に来るから」ということで面談させてもらった。現在の生活、食事のこと、今後の生活のメドなどを聞かれ、「自立支援施設に入れるか話してみる。1週間くらい時間がかかる」ということだったが、翌日、「無料低額宿泊所に空きがある。心配なのでそこに入りませんか」

と連絡があった。この無料低額宿泊所に7月末に入り、アセスメント型の自立支援センターに移ったのが8月7日だった。

趣味は武道で、30歳までは道場に通っていた。

キャッシングのローンで総額100万円のお金を返せていない。次の施設で借金の処理も相談に乗ってもらえると聞いている。現在、健康保険には入っていない。

<本人の望みや不安>

この施設では求職活動ができないため、求人広告を見ている程度。次の施設へ移って本格的に求職活動をするまでしっかり身体を休めたいと思っている。

希望としては次の仕事も介護職と考えているが、椎間板ヘルニアを発症しているため難しい。ヘルニアについては、介護の仕事と無関係ではないと思うが、労災の適用はなかった。

飲食業が現実的だと思うが、年齢の問題があって難しい。

次の施設では、そこから仕事に通うことが可能だが、門限があるため深夜の仕事はできない。

「1カ月以内に探して仕事をしたいと思っています。アルバイトでもいい。後々は正社員になれるような仕事を探していく方法を考えてます。要するに、結局貧しかったら働くか盗人するしか方法がないわけじゃないですか、極端に言えば。まっとうな人間だったら働きますよね。」

調査番号：大阪12

調査日：9月1日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：42歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：宮崎県 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：求職中
- 直前職：建設業、建設・土木関係職、日雇い ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども2人（離婚後別居中）
- 住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退（親の経営する）建設会社・塗装工（家族従業者、数カ月） 建設会社・仮枠工（正社員、8年） 運送会社・配送（正社員、1年未満） 運送会社・配送（正社員、2年） 建設会社・鉄筋工（正社員、3年） おしぼり会社・営業および配送（正社員、1年未満）+パチンコ店・清掃（アルバイト、1年未満） かけもち 建設業、建設土木作業員（日雇い、12年） 野宿（2週間） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（1カ月半）/求職中

<仕事に就くまで>

1966年、宮崎県生まれ。6人兄弟の次男。

父親は塗装業を自営しており、母親は内職をしていた。生活で苦労した記憶はない。暮らし向きは普通だった。

中学時代には、信頼できる友人はいた。

高校に進学したが、無免許でのバイク運転など「悪さみたいなの、ヤンチャしてたから」、半年ほどで中退した。

その後しばらくは、父親が自営していた塗装業を時々手伝っていた。ペンキ塗りの仕事は服や髪が汚れるので、若かった自分にはイヤな仕事だった。

<初職からの経験>

17歳（1984年）の時、「大阪で仕事してみひんか」という先輩からの紹介があり、友人と二人で大阪に来て、建設業の仮枠工事の会社に正社員として雇われた。父親は塗装業を手伝って欲しかったようだが、その時は特に何も言わなかった。「家でブラブラしてるよりは」と思ったのではないか。

仮枠工事の仕事は建物や地下鉄工事で支柱を作る作業で、収入は手取りで月12万円、厚生年金は入るか入らないかは自己申告みたいな形だった。各種保険も多分あった。ボーナスは、会社の景気のいい時には多少出ていた。

寮に10人ほどが暮らし、通いの人も合わせて24~25人の

会社だった。自分は寮で生活していたが、数年後に妹が大阪に来て住むことになった時には、会社がアパートを借りてくれた。しかし、年頃の妹と一緒に暮らすことはできないと考え、自分は基本的に会社の寮で生活していた。

宮崎から一緒に来た友人は、3~4年して故郷に帰ってしまったが、自分は先輩にかわいがられていたこともあって、倒産するまで8年間勤めた。働いていたのは40代、50代の人で、自分だけが若かった。当時は自動車を持っていた。

25歳（1992年）の時、仮枠会社の社長が亡くなり、その1カ月後に会社がボヤにあったこともあって会社がつぶれてしまった。倒産する直前には、給料は1日15,000円だったため、月収34~35万円だった。人に指示を出すようになれば日に2万円くらいは貰えたが、責任を負うのが嫌でやらなかった。その会社が残っていれば、自分もそこでずっと働いていたかもしれない。

この後、職を転々とするようになった。

同年、求人情報誌で運送業の仕事を見つけ正社員として入社したが、人間関係がうまくいかず1年足らずで辞めた（この時点では運転免許を持っていたが、今は失効している）。ここでの給料は手取りで月14万円ほどしかなかった。ボーナスは20万円ちょっと。厚生年金や健康保険、雇用保険はあった。

この仕事をしていて26歳頃、交際していた女性と結婚した。「できちゃった結婚ですけどね」。子どももできて、そ

の給料ではきつくなったことも、仕事を辞めた理由の一つであった。「厚生年金があるのは構わないけど、その給料では生活苦しいな」と感じていた。

26歳（1993年）頃、次も運送業の仕事に就いた。大阪府内の会社に正社員として入社した。基本給は25万円だったが中距離を走れば手当がついて月30万円ほどになった。この仕事はきつかった。東京や広島まで行くこともあり、朝3時に出て夜7時に帰るような仕事だった。子どもの顔もあまり見られなかった。家に寄ってもちょっといるだけでパッと出かけるということもあった。運転中何度も居眠りをしそうになり、これでは体がもたないと思って、退職した。

27歳（1993年）頃、今度は建設業の鉄筋屋の会社に正社員として入った。鉄筋屋は仮枠の仕事と関係があるので、知り合いになっていた鉄筋屋の会社の社長さんに電話してみたところ、「来たらいいよ」と返事を貰った。しかし、仕事をマスターするには苦労した。「最初は手が痛かった」。その鉄筋屋は10人いるかいなかの小規模な事務所だったが、日給16,000円で月40万円ほど貰っていた。給料自体はよかったが、社会保険は全部自分持ちだった。健康保険から国民健康保険に切り替えた。夏は忙しかったが春には例年暇になった。ここでは3年ほど働いた。

30歳（1996年）頃、バブル経済が破たんし、建設業全体の仕事が減ってきた影響で、社長が「会社をたたむ」と言い廃業することになり、失業した。

前の運送会社で働いていた頃は1DKに住んでいたが、鉄筋屋の頃に2人目の子どもが生まれ、家賃108,000円の2LDKに引越していた。鉄筋屋の仕事を辞めてから、「そこに住むのがしんどくなりました。家賃が高くて給料のうち何ぼも残らなかった。子どもがまだ小さかったらいいけど、どんどん成長するでしょ、小学校、中学校いうて。」

同年、次はおしぼりをリースする会社に正社員として入社した。そこでの仕事は飲食店とおしぼりの契約を結んでもらう営業とおしぼりの回収というものだった。「お客さんを取れば取るほどいい。初任給は22~23万円。それが（営業成績によって）30万円、40万円となっていくらしい。その魅力に（ひかれて就職しました）。おしぼりを返してもらえばいいんだなって簡単なつもりで行ったんやけど、実際は難しかったんです。」リースで100本持って行っても100本返ってこない。お客さんが捨てたりするから70から80本しか返ってこない。回収できなかった分は給料から差し引かれた。給料も歩合制で、基本給の23~24万円に契約が取れた分の手当がついたが、辞めた時点で30万円もいかなかった。多い時で25万円くらいだった。その会社には社会保険があった。

給与が低かったので、生活を維持するために閉店後のパチンコ店で2~3時間パチンコ台を拭く清掃のアルバイトをやっていたが、しんどいだけ、眠いだけで大した足しにもならなかった（月2~3万円）ため、おしぼりの会社と一緒に1年未満で辞めた。

31歳（1997年）頃、おしぼりの会社を辞めてから、大阪府内の日雇い労働者の街で建設作業の「現金仕事」の日雇い（一日単位で雇用契約し日払いの日雇い労働）に就いた。「とにかく仕事を維持しないと。家賃があるし。それから家族とごちゃごちゃになった。（妻と）ぎくしゃくするわね。」その頃、妻は赤ん坊がいたので働いていなかった。

当時、仕事はいろいろあった。「（技術が）あればもちろ

んいんやけど、日雇いの仕事の場合は、腕があるうがなかるうが、初対面さんは取りたがらない。」

だいたい、朝4時頃に起きて、この街にある「寄せ場」に出向いて、仕事を探した。当時、求人自体は減って来ているみたいだったが、そんなに悪いとは思わなかった。仕事はけっこう継続してあり、月に20日以上はあった。現金仕事ばかりをしていた。もちろん「契約仕事」の日雇い（短期間の雇用契約にもとづき飯場に入っていく日雇い労働）もあったが、「飯場に入ったら二重に家賃を払うことになりますからね。」日当が12,000~13,000円だったため、月の収入が30万円前後だった。

当初は白手帳（建設日雇い労働者が雇用保険の給付を受けるための手帳）を作っていたが、「そこまでしなくても、仕事あるからいいかって思ってやめました。手帳に全部（印紙を）貼ったんでは意味ないですからね。」

35歳（2001年）頃から妻との関係がさらに悪化し、マンションを引き払い別居を始めた（離婚届を出したのは2008年）。別居するまでは、現金仕事をしてマンションに帰るという生活をしてきたが、「家賃が払えなくなって、（それが原因で）離婚がどうのこうのってなって、引き払ったんです。」収入が少ないと、「どうしてもケンカになりますからね。」マンションを出てからは自分はドヤに入り、現金仕事を続けていた。

2006年（40歳）頃からどんどん現金仕事がなくなって、建設業の人夫出し会社の寮（これも飯場の一種）に入った。それまではしっかりと養育費を払っていた（養育費支払いのため自分の貯金はほとんどなかった）が、「それからはちょっと家族の方にも振り込みができなくなった。」寮に入っている間、「今日は（仕事に）出られても、明日は出られん。また次の日も出られんとなって。」働ける日も月に20日いけばいい方で、よくあって21日か22日で、それ以上はなかった。日当も11,000円に下がっていた。「その時には、やっぱり手帳があった方がいいなって思いました。そこから、どんどん悪化して行きましたね。」

会社の寮は、寮費が1日3,200円かかり、月に10万円ほど引かれていたので手元には12~13万円しか残らなかった。そのため、5~6万円しか家族に渡せなかった。

寮には20代の若い人もいたが、若い人に仕事は回るとは限らなかった。「会社は人間を派遣するところだから、向こうの会社が『気に入った人（常連）を連れて来てくれ。新しい人がいても『この人はいらぬ』となる。相手先の会社も知っているし、仕事の内容も分かっている人がいい。初めての人は最初から仕事を教えないといけぬ。それでどうしてもばらつきができる。今日は鉄筋の仕事、明日は土木作業の仕事はあるが、型枠大工の仕事はないという業種のばらつきもあった。『僕もそんなん言うてられんから、『どこでもかまいません』って言いながら仕事してました。そうじゃないと仕事がまわってこない。」

2008年（42歳）からほとんど仕事はなくなった。「会社があんまり『仕事を休ました上に寮費だけがかかる。赤字や、赤字や』と言うから寮を出た。こら大変やって。（寮費を払わないといけなかったので）『もうほとんどタダ働きやな』って感じがしたので辞めた。でも、出たのがまた間違いやった。出ても、現金仕事はさらになかった。」

「週に1日、2日くらいは（仕事）があるんですけどね。それでもドヤに住んだとしても何日かしかもたへんから。しまいには今年（2009年）になって3月か4月になったら

ほとんど仕事がなくなって、『寮もいっぱい』って言われて。そういう状態でしたね。(寮には)みなさんもう赤字覚悟じゃなしに、もう寝泊まりするところがないから入りはったと思うんです。私もそういう気持ちでしたから。とにかく飯も食われない寝るところもない。これは大変だと思ってよ。

2009年7月に入ると、路上生活を送るようになった。「ホームレスしてた時期はほんの2週間くらいしかなかったよ。」「仕事がない、寮も入るところがないいうたら、外で寝ないといけない。でも、食べないといけないから、寮にいる友人にお金を借りたりしてやっと思った」。その友人にも仕事はなかったが、寮では1日2日でも仕事をしていたら、その分前借ができた。1週間まるまる仕事がないとしても、最低タバコ代くらい、1,000円、2,000円でも週2回くらいは貸してもらえた。「まあ、友人もつらかったでしょうね。だから『お金貸して』って言ったら、やっぱり嫌がってましたね。返す当てがなかったら、友人も嫌気がさすですよ」。

寝るのはテントなしで公園で寝ていた。シェルターのような施設にはプライドが許さなかったの、泊まったことがない。この時、アルミ缶の回収・販売の仕事をした。「1回で200円~300円になりパン代にはなりました。でも、プライドがあったのでイヤだった。ほとんど友人を頼ってましたね。俺はそこまで落ちてないという気持ちがあった。誰でも抵抗があると思いませんか」。

公園で寝ていた時、「こういう(生活困窮者のための相談施設)のがありますよ」と巡回相談員が回って来たことがあるが、自分はその場では避けた。

友人から「相談所に行った方がいいよ」と言われ、借金を作るばかりではいけないと思い、生活困窮者のための行政の相談施設に行ってみる気になった。そこでアセスメント型の自立支援センターの話聞き、入所することになった。

7月中旬、この自立支援センターに入った。

<現在の生活状況>

今いる施設は身体を治すところで、ここにいる1カ月の間は仕事をしたり探したりしてはいけないと言われている。「私も悩んだんですけどね。自立するんやったら仕事せなあかんと。ちょっとでも家族にお金持って行ってあげたいのに、何が1カ月や。そんなんどうでもいいって思ってるんですけどよ」。

現在は、自立支援センターから病院に通い、歯の治療を受けている。

健康保険については、離婚してからは国民健康保険の保険料を払っておらず、切られていると思う。

相談できる相手は、元妻と、人夫出し会社で知り合った友人である。

別れた家族は元妻と中学校、高校に通う2人の娘。現在も連絡を取り合っており、施設にいることも伝えた。「別れても、子どものことは心配。助けたいと思ってますからよ」。

実家との関係は、母親が4~5年前に亡くなり、父親が再婚してからは連絡を取っていない。実家には20数年帰ったことがなく、父親ともずっと会っていない。今どこにいるのかも知らない。

ホームレスや仕事のない人に対する民間の支援団体については、「自分自身がかんこなのか、プライドが高いので、ああいうのはイヤだと、自分はガマンしておこうというのがあった。こんなオッサンだけど、まだ若いという気持ちがある。今ではどうでもいいけど」。今はこのセンターの運営をしている団体には、『お世話になります』という気持ちですよ。

日雇いの仕事が本当に少なくなって以降、友人との付き合いを減らしたことは、「多少はあるかもしれんね。同じ職場にいた人も、仕事なくなって、名古屋や東京に飛んで行ったりとかしましたしよ」。

<本人の望みや不安>

近々、就労自立を目的とした施設に移ることになっていて、そこで仕事探しを始める予定である。仕事が見つければ施設を出て居宅でという話もあるが、自分には寮のようなどころの方がいいかもわからない。仕事になじめなくても、寮にいればイヤでもその仕事をするようになるからである。自分を殺さないことには、あれイヤこれイヤと言ってたら、昔みたいに転々としてしまいそうである。一方では自分の時間がほしいから、寮ではなくてアパートがいいかな、という思いはある。

だいぶ前にハローワークに行き仕事を探したことはあるが、自分に合う仕事なかった。

次の仕事としてというのが見つかるかは分からない。施設の職員からは、ホームヘルパーはどうかと言われてるが、「やり慣れない仕事はどうか」と思っている。しかし、仕事の条件については、「そんなにこだわっていません。『嫁さんとまだいっしょに家族を維持している』っていうのがあれば別だけど。1人なら国民年金払っていけばすむことだから。給料は20万円くらいあれば十分。上を望んだらきりがない」。できれば建設関係の仕事が「慣れているからいいですよ。いきなり作業着からスーツで営業はちょっと(難しいです)。契約取ってこいと言われてもどないもならない。建設業やってるから言葉づかいも荒いし、自分としては営業向きではないと思う。堅苦しくてしんどくなると思いますよ」。

<経済、社会、そして政治について>

経済が厳しくなって、賃金の切り下げを経験した。「どこの会社でもあることですけどね。やむを得んことやと思います。今は仕事の取り合いじゃないですか。マンションを建てても人が入らんから借金になる。公共事業で道路を作ってくれたらいいけど、税金が減ってるから、これも難しいよ」。

職場では、いじめを受けたことがあるけど、「『この人はこういう人なんだ』と自分の中で処理しないとやっていけない。そんなことを言ったら仕事にはなりません」。

自分は今厳しい状況に置かれているが、その責任を「人に擦り付けるのはイヤや。誰の責任か言われても、自分の責任にするしかないと思いますけどね。いろんな社会の問題も政府の責任で解決すべきだとは思いません。自分で解決すべきだと思うよ」。

政府に対しては、「家族おるから、家族のことを考えたら、世帯への支援ですね。それに教育支援。親としては、

要望したいのはほとんど家族のこと。自分のことはいいです。子どもには、大学まで行って欲しいという気持ちはあります。娘としては、『やっぱり親に負担がかかるから高卒で(いい)』という気持ちちゃうかなと思ってます。親

に負担かけたくないなっていうのはあるでしょう、やっぱり。今、商業高校に通っているけど、本当は友人と一緒に私立高校に行きたかったんやと思ってるんですけどね。』

調査番号：大阪13

調査日：9月1日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：39歳 ■ 現住所：大阪府 ■ 出身地：茨城県 ■ 学歴：高校卒業 ■ 就労の有無：求職中
- 直前職：建設業、建設・土木関係職、正社員 ■ 直近の収入：勤労収入なし ■ 家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■ 住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 建設会社・設計施行管理（正社員、18年） 建設会社・解体工（正社員、3年）
カプセルホテル（1カ月） 野宿生活（1カ月半） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（2
カ月）/ 求職中

<初職に就くまで>

1970年、茨城県生まれ。

中学校3年生までごく普通な家庭で育った。一人っ子で、両親と3人家族だった。

しかし、中学校卒業直前に両親が交通事故に遭い、亡くなった。

幸い、信頼できる先生がいて、その先生の進学指導によって学生寮のある愛知県内の高校に進学することができた。

高校3年生になって、学校の進路指導を受け、ある建設会社に正社員として就職することになった。

<初職からの経験>

18歳（1988年）建設会社に正社員として入社。この建設会社には18年間勤めた（36歳、2006年まで）愛知県にあったこの会社は、給料がよく、技能が身につけられたので、長くいることができた。会社の業務内容は、主に、プラント工場での機械設置の設計と設置工事（コンクリートによる設置場所の基礎工事と機械の設営）、工場に設置されたこれら機械のメンテナンス、そして建物や機械の解体などで、設計の仕事と現場作業の監督の仕事をしていた。また、特殊機械（ガスタービンなど）の設計やマンションの設計も行なった。

この会社に勤めている間に、1級建築士、1級土木施工管理資格、設計士1級、1級溶接技能士を含む68種類の資格を取った。初代の社長が、「これからは資格の時代だから年間5種類の資格を取ればボーナスを20万円増やす」と言ったからである。資格を取るための講座の受講費用も会社が負担してくれた。実際の仕事では、取引先の工場の機械の調子がおかしくなると、休日でもよく呼び出されたため、休日は月に2日ほどしかなく忙しかった。しかし、月給は120万円くらい稼げるようなときもあった。保険・年金については、どうなっていたのかよくわからなかった。

23歳（1995年）のときに交際する女性が出て、その恋人と結婚しようとしたが、自分に両親がいないことを理由

に、相手の親は結婚を承諾しなかった。

この頃の趣味は三重県にあるサーキット場で車のレースに出場することだった。2輪車からはじめて、車のF4のレースにも出た。レーシングカーを買うのに6,000万円もかかった。

しかし、26歳（1998年）のときに相当のスピード違反をしてしまい免許を取り消され、レースもできなくなった。しかし、レーシングカー購入費の借金があり、その後も返済しつづけた。

会社に勤めて18年目、36歳（2006年）のとき、初代の社長が工事現場で倒れ、脳卒中のために突然亡くなった。この後を継いだ二代目の社長は、就任して半年後に多額の借金のために夜逃げしていなくなってしまい、会社は倒産した。ある朝、いつものように出勤すると、会社が閉鎖され、暴力団関係者が会社の機械などを持ち帰っているのを見た。会社の書類や資料も全部持ち去ってなくなったため、年金や雇用保険の手続きがなにもできないままとなってしまった。

あまりに突然のことで、また、雇用保険のことなどは全くわからなかったので、失業手当を受給することなど見当もつかず、そのままの状態での次の仕事を探した。

最初は資格を活かそうと前の会社と同じような建設会社を探したが、この時期は中途採用がほとんどなかった。また取得していた建設関係の各種資格を生かそうと思っても、資格証書や資格証番号の一部が、会社の書類と一緒に持ち去られてわからず、就職活動に十分生かすことができなかった。

同年、同じ愛知県内にある解体会社に正社員として就職した。住まいはこの会社の寮に住んだ。以前に暮らしていたアパートは18年間勤めた会社の社長が保証人になってくれていたが、その社長が夜逃げし、しかもその後殺されてしまったので、保証人がいなくなり、住めなくなっていた。

新しい会社は、日給月給制で最初の2年半は月に約30万円を稼ぐことができたが、2008年10月からは仕事が急激に減り、1カ月で4万円にしかならなかった。しかも、その状態が半年間続き、この給料では55,000円の家賃も払えな

くなったため、退職した（2009年3月末）。

2009年（39歳）4月、大阪府に行って職を探そうと思った。大阪府を選んだのは、以前の仕事の関係で、3年ほど頻繁に大阪府に出張したことがあり、おおよその地理を知っていたからである。大阪府の日雇い労働者の街に着いて、仕事を探すため駅前の電話ボックスで電話をしているときに、床に置いていたカバンを盗まれた。このカバンには、各種の資格証明書や身分証明書、電池の切れた携帯電話、作業衣・道具一式が入っていた。しかし、幸い、財布は自分のポケットにあって、盗まれずにすんだ。このときは、所持金が15万円ほどあったし、すぐ仕事が見つかると思い、特に焦りはなかった。

カバンを盗まれた駅周辺は危ないと思い、この地域を敬遠して少し離れた地域に行き、2週間ほどカプセルホテルに泊まりながら、就職活動をした。しかし、応募の電話をかけたら、「作業衣がないとアカン」とか、「安全帯がないとアカン」とか、「来月に来てくれ」とか言われて、面接にいたらなかった。ハローワークにも行ったが、身分を証明できるものが盗まれてないこと、連絡を取るための携帯電話も盗まれていたため、うまくいかなかった。「連絡がとれないと仕事が紹介できない」と言われた。その当時、寝るところと稼ぐところを探さないといけないと焦っていたが、そのうちそれらは見つかるだろうとの思いから、窃盗にあって証明書などを失ってしまったことをハローワークの職員に言わなかった。

5月の連休明けには、お金が減りつつあったのでカプセルホテルでの宿泊はやめにし、この先何とかなるだろうと思い、公園での野宿生活を始めた。最初は銭湯に行っていたが、お金がなくなり、公園の水道水で体を拭くことにした。食事は100円のカップラーメンでしのいだ。

結局、5月上旬からはじまった野宿生活は1カ月半続けることになった。最初は根気よく就職活動を続けていたが、だんだんあきらめの気持ちが強くなり、就職する気力をなくしていった。就職のことよりは、食事をどうして確保しようかとばかり考えるようになり、焦りを感じる毎日となった。応募の電話をかけるためにお金を使うより、食事の方に使わざるを得ない状態になってしまったのである。そのときの気持ちは、「大ショックで何もかもがおしまいだ」というような大変な状況だった。

野宿をしているとき、ある野宿者から「受け入れ施設がある」と聞いたことがあったが、それが本当にあるのかどうかわからなかった。当時は、「まともなきれいな格好をしていたら別ですけど、真っ黒に汚れた服を着ていて人に声をかけづらかった」。

6月末、公園事務室のスタッフに声をかけられた。スタッフの人はおにぎりを買ってくれて、巡回相談員に電話をかけてくれた。そして、スタッフは「区役所に行って相談してください」と勧めてくれた。こうして、区役所で巡回相談員の面接を受けて、2日後にアセスメント型の自立支援センターに入ることができた。なお、面接のときに、自立支援センター（二人で1部屋）に入所できるまでの2日間は社会福祉法人が運営する無料低額宿泊所の大部屋の短期宿泊施設への入所を勧められたが、自立支援センター入所までの2日間は、自分の意思により公園で野宿をした。

<現在の生活>

今はとにかく屋根のあるところで寝ることができるようになって、安心している。ここでは、ずっと痛んだままで放置してきた歯を治療するために、定期的に歯医者に通うことになっている。また、この自立支援センター管理の福祉法人の紹介による草刈り作業で得た収入を、施設管理者に管理してもらっている。これらは毎月少しずつ貯金するようにしている。

<本人の望みや不安>

現在は体力と気力、そして健康の回復に時間を費やしているが、約2カ月後、別の自立支援センターに移り、就職支援のサポートを受けることになっている。そこでは、まず就職活動をして仕事を見つけ、アパートが借りられる程度の資金と1カ月の生活費を貯めようと考えている。そして、そのセンターの職員に保証人になってもらい、自分でアパートを借り、自立していきたいと考えている。「ごく普通の生活をしてみたい。寝るところがあって、三食が食べて、月に2～3万円の貯金ができるような生活に持っていきたい」。これが、今望んでいる生活である。

しかし、今一番の悩みは、これからの具体的な就職のプランが立てられないことである。これからは、建設関係の仕事はもう辞めにして、介護ヘルパーの資格を取りたいと思っている。資格取得のための無料の受講制度があるが、応募者が多く、受講できるかどうかは抽選で決まることになっている。

また、失った車の免許も再度取りたいと考えているが、応募する人がさらに多い。「プランを立てると言われたけど、抽選があるので、それが決まるまではこっちもプランが立てられない。応募者がみんな受講できるようにしてほしい」。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：28歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：千葉県 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：求職中
- 直前職：製造業、生産職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 ファーストフード店・販売（アルバイト、1年半） パン製造会社・生産（アルバイト1年、正社員3年） 食品製造会社・販売（アルバイト半年、正社員1年半） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、3年） 工場・検査（登録型派遣、9カ月） 無職（2カ月） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（1カ月）/求職中

<仕事に就くまで、初職からの経験>

1981年、千葉県生まれ。

15歳（1996年）、中学校を卒業後、定時制の高校に進んだ。昼間は、中学校時代の校長の紹介により工場アルバイトを始めた。仕事内容は針などの検品作業であった。

ところが高校入学後すぐに義理の父親との仲が悪くなり、4カ月で高校を中退してアルバイトも辞めた。

同年、家出をして栃木県にある祖母の家に行った。祖母の家には、自分以外にも同じような境遇の親戚が集まっていた。祖母の家にはファーストフード店のアルバイトを1年半ほど行った。

<初職からの経験>

17歳（1998年）からは栃木県内の民間賃貸住宅で一人暮らしを始め、大手パンメーカーの下請会社に勤め始めた。最初はアルバイトだったが、1年働いたのち、18歳（1999年）から正社員となり、会社の寮で生活するようになった。寮費は月15,000～20,000円で、給料は固定給で月収15万円だった。

21歳（2002年）の時、給料が安い（固定給15万円のままで）と思うようになり、仕事を辞めた。

同年、千葉県に移り、民間賃貸住宅を借りて一人暮らしを開始した。大手百貨店内の店舗で総菜を販売するアルバイトを始めたが、6～7カ月働いた後、正社員となった。

しかし、23歳（2004年）の時、身内のトラブルや新しい店長との関係が悪くなったことなどが重なり、退職した。

同年、派遣会社に登録し、派遣社員として働き始めた。大手自動車メーカーとその下請会社の仕事を行ったり来たりした。勤務は、1日12時間で、4勤2休のサイクルだった。さらに工場のメンテナンスで月2回の休みがあったため、1カ月のうち仕事があるのは15日前後だった。この間は会社の寮で生活をし、約3年勤め、期間満了で辞めた。

その後、しばらく無職であった（2006年～2008年9月）。雇用保険に加入していたため、本来であれば、失業手当をもらえるはずであったが、申請するのを忘れたため、受給することができなかった。

2008年（27歳）9月から、他の派遣の仕事を開始した。仕事内容は、アパレルとペットフードの工場での検品で、1日8時間勤務で、給料は月に16～17万円だった。栃木県や千葉県での仕事が多く、ネットカフェやレストラン、時には仕事場近くの友人の家に泊まっていた。

2009年（28歳）6月になると、工場検品の仕事なくな

り、仕事を辞めた。この仕事を最後に、現在まで仕事をしていない。

<自立支援センター入所>

2009年6月から2カ月ほど、大阪府下の知人の家で過ごした。この知人とはネットで知り合った。知人は50歳代の人で、仕事がなく疲れていた自分に対して「息子のように思って優しく接してくれた」。知人の家では、家の手伝いなどをしてお金をもらったりしていた。知人の家庭は裕福なわけではなく、親の面倒もみていたため2カ月ほどで出ることになったが、それまでの間も自分のことを思って、いろんな福祉サービスについて探してくれた。知人の家を出る時には10万円ほど生活費を支援してもらった。また、現在も携帯電話代を支払ってもらっている。この知人とは連絡をとることはできるが迷惑はかけたくないと思い、現在は連絡をとらないようにしている。この先安定した生活ができるようになった時に「お金を返し、携帯電話も返し、お礼をきちりしたい」と考えている。

2009年8月にその知人の家を出てからは、知人に紹介された大阪府内の住居喪失不安定就労者支援センター（チャレンジネット）を訪ねた。そこで、ひとまず大阪府内の日雇い労働者の多い街にあるドヤ（簡易宿所）を紹介された。その後、再び同センターからホームレス支援団体を紹介され、現在のアセスメント型の自立支援センターにたどり着いた。

<現在の生活状況>

現在は自立支援センターでゆったりと過ごしている。「センター内の友人と将棋をする」ことや、散歩や絵画が趣味である。「ここのセンターの人はほとんどが年上だけれど、みんなとはよく話す」。新聞・テレビはあまりみない。

今は、「借金のことなど、複雑な部分を自分の中で整理してから再出発したい」と考えている。

体調に関しては、15歳と19歳の時に十二指腸潰瘍を発症しており、最近も時々調子が悪くなる時があり通院している。治療費は医療扶助で賄われており、「自立支援センターからもらう用紙があれば診察してくれる」。

<家族との関係>

家族は、母親と義理の父親、兄弟もいたが、「複雑でめんどくさい」（執筆者注：詳しくは語りたがらなかった）。

これまで身内に何度かお金を貸すことがあったが、お金は返ってきておらず、「身内にお金を貸したのは間違い」と後悔している。「自分はバカだから（頼まれると）断れないんですね。」

現在、家族とは連絡が取れずどこにいるかもわからない。

<本人の望みや不安>

「たいいていのことはうまくやる自信はある。実際貧しいのは自己責任である」との考えを持っている。

将来に対して不安はあるものの、「資格をとって介護の仕事がしたい」と明確な目標を持っている。「友達に介護の仕事をしている人がいて、興味があった。汚い部分もあると聞くけど、長期的に働くことを考えたら介護の仕事がいい。自分にも合っている」と思う。

今まで同棲の経験はあるが結婚はしたことがなく、一人のほうが気楽と思っている。

政府に求めることは、住宅支援・再就職支援・子育て世帯への支援の充実である。子育て支援については、「甥っ子や姪っ子がいて、その家計は厳しそうだったから。」

調査番号：大阪15

調査日：9月2日

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：40歳 ■ 現住所：大阪府 ■ 出身地：北海道 ■ 学歴：中学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■ 直前職：運輸業、運転関係職、正社員 ■ 直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■ 家族構成：単身 ■ 住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：中学校卒業 寿司屋・板前見習（正社員、4年） 自衛隊・隊員（正職員、6年） 建設会社・大工見習（アルバイト、3年） 運送会社・運転手（正社員、12年） 路上生活（4カ月） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（1カ月）/求職中

<初職からの経験>

地元北海道の中学校を卒業して15歳（1984年）で、大阪にある寿司屋に板前見習いとして就職した。寿司屋は、中学校の先生の知り合いからの紹介だった。北海道では仕事先が見つからなかったために、やむを得ず大阪で就職した。北海道のような遠いところから「大阪に来たくて来たわけじゃない。働けるなら北海道におりたかった。」

母親に見送られて北海道の空港から1人で飛行機に乗り、大阪の空港に降り立ち、紹介先の寿司屋の主人が迎えに来てくれた時の光景を、今もよく覚えている。

寿司屋は、個人経営のお店であった。住み込みの見習い（正社員）として働き、出前などを担当した。寿司は、「基本からやっていくから8～10年しないと」一人前に握れるようにならない。事情により寿司を握れる段階に達する前に辞めざるを得なくなったが、「ここでの修業はいい勉強になった。」

大阪に来ている間に、父親が死亡した。また、1人の姉は地元を離れ、もう1人の姉も青森に転居したため、母親は1人地元に残されていた。

その上、大阪に出てきて4年目、19歳（1988年）の時に、母親はもはや自分で食事や身の回りのことができなくなり、老人ホームに入るようになった。このため家の処分などの手続きがあり、北海道に帰ることにした。寿司職人への道をあきらめることに迷いはあったが、「（北海道には）小さい頃の思い出もあるし、母や家の関係で」戻ることを決断した。

同年、稼ぎを得るために、陸上自衛隊に入隊し、北海道にある駐屯地で勤務するようになった。陸上自衛隊は2年任期で、合計6年間勤務した。

入隊した当時は、月収10万円を割っていたが、4年後に

は12万円になった。これでも、以前の寿司屋に比べれば、収入は多かったため少し貯金もできた。8人部屋での寮生活であったが、同僚とはそれほど深い付き合いはしなかった。毎朝6時に起きて、午前8時から午後5時まで訓練などがあり、結構きつかった。多くの同僚が大型自動車免許などを取っていたが、自分は訓練だけで実際に免許を取ることはできなかった。

自衛隊では、2年ごとに昇級試験があり合格できなければ昇級できないだけでなく、除隊しなければならなかった。自分は試験に合格できず、昇級できなかったため、入隊後6年目に除隊した。

25歳（1994年）除隊後、地元で、自分にできる仕事をしようと考え大工見習いの職を見つけ、3年間働いた。この間に、自衛隊員の時に蓄えた貯金を使って、大型自動車免許・大型特殊自動車免許を取得した。

28歳（1997年）になって大工を辞めて、運転免許を生かした仕事に就こうと考え、運送会社に正社員として就職した。

最初の3年間（31歳、2000年まで）は北海道でトラック輸送をしていたがあまり荷物が多くなかったこと、老人ホームに入所していた母親が亡くなり、自由に住むところを選べるようになったこともあって、石川県にある営業所の配属に代わり、引き続き同じ会社で正社員としてトラック輸送の仕事をした。

石川県では9年間（40歳、2009年4月まで）働き続け、会社の寮に住んだ。1カ月平均して22日の勤務であったが、トラック運転の仕事時間は不規則であり、8時間程で終わる時もあれば長ければ5日間もかかる仕事もあった。全体的に長距離の運転が多かった。「昔は疲れるまで走っては休んだが、今は（運転管理が）厳しい」。運転して6時間ごとに休まなければならず、「うるさくなった」。1カ月の

平均勤務日数は22日だが、給料は走行距離に応じた点数制によって決まるので、給与額は時期によって差が出るし、労働時間も特定できない。

2008年頃からは、仕事の量が減り、「行きの仕事があっても帰りの荷がないっていう状態」が続き、その上「燃料代が上がっていたから、いくら走っても実際の手取りが上がらない」状況になっていた。それだけでなく、時給の切り下げも経験した。

また、石川県に配転された時から9年間ずっと、ある上司から、なにかにつけて学歴差別を受けた。「学歴の関係で、なかなか理解できないやつ」と扱われ、「ちょっと失敗したら、中卒であることを繰り返してしつこく言われた」。「学歴のことは採用されてから何年か経ったら普通忘れるのに...」、「他の人は忘れてるのに」と歯がゆい思いを何度もした。

しかし、こうした思いが積もりに積もって、ついに上司と口論となり、これが原因でこの運送会社を退社した(40歳、2009年4月)。それに伴い寮を出なければならなくなった。

運送会社退職後、石川県内を中心に求職活動をしたが、この時期、運送会社での運転手の採用はほとんどなかった。トラック運転手の仕事を求めて5月初めに大阪にやってきた。

大阪では、最初はカプセルホテルに泊まっていたが、す

ぐに野宿生活をはじめた。大阪に親戚や知り合いもいないため、これはやむを得なかった。

4カ月間はそれまでの貯金を取り崩して生活をする一方、ハローワーク、求人雑誌、新聞広告などを見て仕事を探し、10社ほど面接も受けたが、寮付きの運転手の仕事は見つからなかった。

8月、展望を失ってしまったことから、ある区役所に相談に行った。巡回相談員を紹介され、その相談員が現在のアセスメント型の自立支援センターに入所するよう世話をしてくれた。

<現在の生活状況、望みや不安>

この自立支援センターでの暮らしは、やや苦しいと感じている。

相談できる人は必要だと感じているが、両親はもはや他界したし、姉2人とはこの15年間会っていない。連絡しあったり、相談のできる友人はいない。

もっぱらトラックの運転のみが楽しみで生きてきた。

結婚もこれまで考えたことはない。

将来についてはやや不安を感じている。

これからの仕事についてはできればトラックの運転の仕事に戻りたいと考えている。

調査番号：大阪16

調査日：9月2日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：33歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：青森県 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：求職中
- 直前職：製造業、生産職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 ガソリンスタンド・店員(アルバイト、2年半) マージャン店・店員(アルバイト、3年強) 農園・農業補助(家族従業者、9年) 医療器具メーカー・生産(登録型派遣、1年) 野宿(短期間) 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中(1カ月) / 求職中

<仕事に就くまで>

1976年、青森県生まれ。

保育園の頃に父母が離婚。その後、母親と姉とともに小学校3年生から千葉へ引越した。

中学校3年生の時の生活は、やや苦しかった。母親は小料理屋を経営。姉はホステスとして働き、その収入で家計を支えていた。

学校の授業はあまりよくわからなかった。

地元の千葉ではなく、滋賀県の定時制高校に進学した。「定時制なので推薦で行けた。手先が器用だったら誰でも行けるんですよ、その学校は。そういうところだったんですよ」(執筆者注：会社に併設された私立高校だと思われる)。

高校時代は、高校の目の前が琵琶湖だったので、毎日釣りに行っていた。

高校は、「8：2ぐらいの割合で会社の業務が優先され

た」。「高校に通っていたわけじゃないんですよ。一つの会社に通っていたんです」。一つの建物の中に、学校、工場、食堂、寮が全部入っていて、勤務は9：00～14：00と15：00～22：00の2つの時間帯のいずれかであり、学校はその前か後に3時間授業があった。時間帯は1週間交替だった。

しだいに会社を休みがちになり、辞めることになったが、そうすると、高校も中退することになる仕組みだった。「周りで働いている従業員はみんな15、16、17歳。そういう会社だった」。

高校中退後、母親の住む千葉に戻った。

<初職からの経験>

17歳(1993年)頃、千葉の実家へ戻った後、求人情報誌を見て、ガソリンスタンドのアルバイトを始めた。収入は13～14万円だった。家庭状況がやや苦しく、自分も働いて、

家庭にお金を入れたいと思い、職を探した。その仕事は2年半続けたが、ガソリンスタンドが倒産したために、失業した。

20歳（1996年）頃、お金がなく、時間ももったいなかった。次の職をすぐに探した。求人情報誌を見て、東京のマージャン屋で、住み込みのアルバイトとして3年ちょっとの間働いた。その時期、家族とは音信不通だった。しかし、「さすがに12時間は働き過ぎだったので辞めました。過酷でしたよ」。

23歳（1999年）マージャン屋の仕事をやってた時に、母親が亡くなった。

その後、故郷の青森に帰った。親戚が経営しているリンゴ農園（祖父母の所有）を手伝うことになった。農園で働いたのは9年くらいの間であった。

月に9万円もらっていたが、給料としてではなかった。「帳簿の管理は親戚がやっていたので、自分は（帳簿の）ふたを開けてないので、詳しいことはわからないが」。

その農園を経営していた親戚が土地を売ると言い出し、働くところがなくなった。「もう一回東京帰ったら」と親戚に言われ、東京に戻るようになった。

2008年7月（32歳）派遣会社に登録し、東京で面接を受け、静岡にある医療器具メーカーで働くことになった。勤めたのはちょうど1年。

全寮制の職場で、体温計や血圧計、注射器などの医療器具を製造していた。1日7.5時間労働で、残業も2～3時間程度あった。完全週休2日で、時給も1,400円と高額だったために、当初は働きやすい環境だと感じていた。「簡単に言うと、仕事と寮があって、時給が高かった。スタートが1,400円だったんです」。年収は150万円ちょっとになった。「結局、時給しかなかった。ボーナスはないですから」。収支はやや赤字だった。前借制度があって、1年の間に3回くらい利用したことがあった。

契約期間は、実際には無制限だった。何か言われたい限り、黙っていればずっと、1カ月ごとに更新されていった。工場は大きく、請負会社もたくさん入っていた。

辞める直前は生産量が減ってきていた。「生産がなくても仕事はあるっていう感じだったので、とりあえず出ればお金になったんですけど」。

2009年7月24日に、「辞めたいので辞めます」と自分から退職した。「派遣だったので、それでけっこう、意見の食い違いがあって、やり方が違って、わがままっちゃあわがまま」。

退職後、大阪へ来た。大阪に来ることになった理由は、「一回大阪に旅行に来て、おもしろいところだなと思ったので来たんです。大阪って、いろんな意味でおもしろいじゃないですか。人の雰囲気も他と違う。基本的にじっとしてられないとか、そういうところがあるじゃないですか。どうせだったらおもしろいところに行った方がいいじゃないですか。人生サイコロですよ」。

アセスメント型の自立支援センターに来ることになったのは、区役所の紹介。「今まで寮があったところに来て、いきなり住むところがなくなったわけじゃないですか。その頃、派遣切りされた人たちが名古屋駅の前とかにうじゃうじゃいたでしょ。そういう野宿状態になって困ったので、警察に行ったら、警察に来られても困るからってことで『区役所に行ってみたら』と紹介されたんです。『大阪府民でもないのに大丈夫ですか』と聞くと警

察が『大丈夫だよ。とりあえず行ってみなさい。何とかやるよ』ということだったので、区役所に行ったところ、紹介してもらった」。

< 現在の生活状況 >

以前医療器具メーカーに勤めていた頃の給料（2009年7月分）がまだ支給されておらず、困っている。「めんどくさいですよ、うちの派遣会社。普通に働いてたらちゃんと25日にもらえるのですが、急に辞めたら給料がピタッと止まるんです。お金が欲しいけど入ってないんです」。

現在は、自立支援センターにある求人情報で、どのような仕事があるのかを見ている程度で、まだ行動には移していない。健康状態は良好で、求職活動においても特に問題はないと感じている。

気分が沈んだり、ゆううつな気持ちになったことは、「センターに入所している全員が経験あると思います。俺が働いているまわりなんかは確実にあります」。

東京で働いていた時期、恋人がいたが、青森に帰ったために連絡が途絶えた。

現在、相談できる人はいないが、そういう相手が必要だと思う。

< 本人の望みや不安 >

この先何とかなるとポジティブに考えている。雇用保険の失業給付の申請待ちで、失業給付を受給後はそれを使って生活していく予定だ。

自分の将来について、まったく不安を感じておらず、今後もどうにかなるだろうと考えている。

ネガティブに考えてしまうと、落ち込んでしまうので、極力ポジティブに考えるように努めている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：42歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：求職中
- 直前職：建設業、建設・土木関係職、日雇い ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 スーパー・販売（正社員、2年） レストラン・調理（正社員、2年） レストラン・調理（正社員、2年） レストラン・調理（正社員、2年半） 居酒屋・調理（アルバイト、1年） 弁当屋・販売（アルバイト、半年） 食肉メーカー・現業（アルバイト、1年） トンカツ屋・調理（アルバイト、3カ月） 創作料理店・調理（アルバイト、半年） 無職（2年） クリーニング店・店員（アルバイト、2年） ファミレス・調理（アルバイト、1年） 海鮮丼店・店員（アルバイト、2年）+弁当屋・店員（アルバイト、2年）、かけもち 海鮮丼店・店員（アルバイト、4年）+ネットカフェ暮らし 建築会社の飯場・建設土木作業員（日雇い、1年） 野宿（1週間） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中 / 求職中

<仕事に就くまで>

1967年、大阪府生まれ。

1歳か2歳（1968～1969年）の頃には両親が離婚していて、母方の祖父母、おじ、おばに育てられた。父親はどこに行ったかわからない。母親とも離れて暮らし、自分が小さい頃は1年に1回程度会っていた。自分が7歳か8歳の頃に、母親は再婚し、子ども（娘）もいた。15歳（1982年）の時、母親はパートで働いていたようだが、21歳（1988年）の時を最後に会っていない。自分のきょうだいは兄と姉で、ともに高校卒である。

勉強はあまり好きではなかったが、中学校の先生は生徒を進学させようとするばかりで、「こんなもあるぞ」とか、就職などの別の選択肢は示さなかった。

「中学校3年生時点での暮らし向きはたいへん苦しかったです。修学旅行の積立金などはほとんど払えなかったです。出費するようなこと、あまりできなかったのですね。修学旅行は、最終的には、いろいろ支援してもらったりして、おじさんおばさんの協力を得て、行けました。」

高校は全日制に自分で学費を払って行った。「公立なんで、学費も高くないんで（アルバイトをして払った）」。

高校1年生を終えた後（1983年）中退した。「出席日数は足りていたんですが、興味があったこととかありまして、学校休みがちになって（そのまま辞めました）。お金がないと遊びにしても何か買うにしても、何にもできないって思ったんで、働こうと思いました。」

<初職からの経験>

16歳（1983年）高校を辞めて仕事を探した。就職情報誌を見て、仕事はすぐに見つかった。実家から近いところにあるスーパーで正社員として働き始めた。仕事内容は、パック詰めを並べたり調理したりという鶏肉の加工・販売だった。基本給は月76,000円でボーナスもあった（執筆者注：ちなみに1983年頃の高卒初任給は13万円程度）。

19歳（1986年）の頃まで、2年間、この仕事を続けたが、調理師になりたくて新たな職を見つけてスーパーを辞めた。「辞める数カ月前に（仕事は）見つけていました。すぐ行ける状態にして、辞めました。」

チェーン展開しているイタリアンレストランの大阪府内の店舗で調理師の正社員として働き始めた。その会社は、母体がしっかりしていて、社会保険などしっかりしていた。何料理を学びたいということはなかったが、洋食の方に進みたかった。月給は12万円ちょっとだった。仕事は結構楽しかったし、割と満足していた。「入ってくるものが多いから。お金とかじゃなくて、吸収して身につくものがたくさんあった」。調理師免許については、役に立たないと聞いていたし、2年たったら受験できるからいつでもいいと考えていたので、取らなかった。

ここで2年働いていたが、いつもお世話になっていた人が退職して他の店でいいポジションに就き、「一緒に来ないか」と誘われたため、退職した。

21歳（1988年）の頃から、大阪府内の肉料理専門のレストランで正社員として働き始めた。月給は22～23万円で「結構な額」だった。実家から通っていた。そこで約2年働いたが、「肉料理専門（ステーキや焼き肉など単調な感じ）でちょっと飽きたというか、ちょっと違う料理もしたいな」と考えるようになり、料理の幅を広げたいという思いから辞めた。円満退社という形にもらった。

23歳（1990年）肉料理専門店を辞めてから2カ月ほど遊んだ。失業手当をもらおうと思っていた頃に、「一緒に来ないか」と前職に誘ってくれた人が新しい仕事を紹介してくれて、大阪府内で昔から比較的裕福な人が多く住む界隈にあるフランス料理店で正社員として働き始めた。月給は21万円。新しい調理の仕事覚えなかったため、給料が減ったことは気にしなかった。25歳か26歳（1992年か、1993年）までの約2年半ほど働いた。

「だいたい2年周期ぐらいで辞めていく感じでした。辞めるのは勝手に自分で決めていたんですけど。まだまだ覚えることはあったんですけど。ある程度流れとか（一通りの仕事を覚えると）。なんかそれで満足してしまって。飽きっぽいところがありまして。辞める理由は（次に移る）ステップというのが半分、飽きたからというのが半分というところですよ。」

「（ステップアップを考えていたのは）25、26歳ぐらいまでです。そこから先は、ほとんど準社員というか、アルバイトみたいなもんですね。そういうのを転々としていました。半年とか何カ月かで、いろんなところを移動しまし

たよ。

次の仕事は、フランス料理店を辞めてから探そうと思っていて、退職した後でハローワークや雑誌などで探した。正社員にこだわらず、アルバイトでも良いと思っていた。「自分に合うところがあれば正社員になろうかな、という甘い考えでいましたよ。

まず、26歳（1993年）頃から居酒屋でアルバイトとして働き始めた。調理の仕事で、約1年続けた。27歳（1994年）になって、居酒屋を辞めた後、しばらく無職だった。次は、弁当屋で半年間アルバイトとして働いた。28歳（1995年）の頃には、食肉工場でアルバイトとして働いた。ここでは調理前の肉を箱詰めしていた。29歳（1996年）の時に食肉工場を1年ほどで辞めた後、トンカツ屋で調理の仕事を始め、アルバイトとして3カ月勤めた。その後、創作料理店でアルバイトとして半年間働き、30歳（1997年）の時に辞めた。アルバイト生活を始めてからは仕事を辞めては1～2カ月ブラブラしていた。だいたい1カ月、2カ月経つと、次の仕事を探して見つけた。

「（創作料理の店を）辞めたきっかけは、別に、どうってことなかったんです。人間関係も問題なかったです。（他にも転職を繰り返してきたが）ほとんど何の問題もなかったです。何か、将来性が見えないというか。歳ばかりいってしまって、『普通』がイヤだったと思うんです。何か、刺激が欲しいというか。いろんなものを見たいというのもありました。調理関係の仕事がしたいんですけど、調理関係の店で『これだ』っていう店をいろいろ探してはいたんですが、なかなか見つからなくて。アルバイト生活の後半くらいからは、そんなに意欲的ではなくなったというのもありますよ。

給料面は「重要じゃなかったです。普通にというか、貧乏ながら生活できれば何の問題もなかったんです。（お金は）なければいけないでやってた時代というか。小さい時なんかそういう感じだったんで。お金がないから苦しいというか、そういうのは全然なかったですね。」

アルバイトを辞めるまでは、朝、仕事に行くとそこから拘束時間が長かったため、夜遅く寝るためだけに家に帰っていた。

そして30歳（1997年）の時に祖父が亡くなった。その頃は、おじ、兄、祖母の4人暮らしで、祖母、おじ、兄、自分は母屋に住み、同じ敷地内にある離れに住んでいたおば夫婦が面倒を見てくれていた。少々の額を祖父母に渡して、住まわせてもらっていた。

創作料理の店の仕事を辞めてから、「30歳から、2年間は遊びました。その時は、そんなたいそうに将来のこととか考えなかった。仕事は、飲食しかやってなかったんで、その関係の仕事に就こうとは思ってました。普通に『平凡になるのかな』というふうに（考えていました）」。

遊んでた時期には、友達のところに行ったり、ぶらぶらしたり。多少ギャンブル（パチンコ）もしていた。「最終電車までには家に帰ってました。お金は、少しですけど蓄えがあり、なくなったら働けばいいか」という感覚でいた。

その後、遊び飽きたというか、毎日ダラダラした生活だったので、仕事を始めた。

32歳（1999年）からは実家から近かった絨毯・カーペットを主に扱う業者のクリーニング店でアルバイトをした。職場の人間関係は良かった。月給17～18万円。2年ほどで

この仕事を辞めた。

34歳（2001年）の時にはファミレスで調理のアルバイトを始めた。月給17～18万円で、24時間営業のうち、朝から22時くらいまでのシフトがメインだった。ここは1年ほど勤め、35歳（2002年）の時に辞めた。

この仕事を辞めた後（35歳）事情があって実家を出た。その理由は、まず世話をしてくれていたおばとは別のおばが離婚して子ども連れて実家に帰ってきたこと。その頃自分は実家の1階と2階に部屋を持っていたが、そのために自分の居場所が狭くなりそうだったため。

もう一つは借金の問題。まだファミレスで働いていた頃、近所に住む、一つ年上で小学校から長いことつきあってきた男友達から90万円の借金を頼まれた。車の事故とか修理のお金だったようだが、細かいことは聞かなかった。「無茶苦茶でかい額でもないし、ちゃんと払ってくれば問題ない」と思っていた。5社から20万円ずつ借りて、10万円は自分の手元に置いた。闇金、マチ金ではない、普通に宣伝している消費者金融であった。利息制限のない時代で、23%の利息だった。男友達からは最初の3～4カ月は普通に返済してもらっていたが、ある時急にいなくなってしまった。しばらくして帰って来て、名古屋の方で仕事していたと言っていた。しかし、また何カ月か払ってもらっていた後で、その男友達が交通事故で亡くなってしまった。「その友達の親に言うわけにもいかない。実際には僕自身が借りてるわけだからよ。

その借金は、合わせて1年近くは返していた。ところが、いろいろ督促状が来て、電話とかかかかってきてしまい、「これは何だ」とおじ、おばから責められ、家を飛び出した（その後は借金の返済は行っていない）。

その後、家を出る少し前に知り合った女性の家に転がり込み、いっしょに住むことになった。その女性に借金のことは言わなかったが、女性から「仕事はしなさい」と言われ、アルバイトを見つけた。

35歳後半（2002年）から昼間は海鮮丼店、夜は弁当屋（共に大阪府内）でアルバイトのかけもちを始めた。海鮮丼店では時給850円で週5日働き、弁当屋では時給820円で週5日働いた。合わせて月15万円の収入があったが、自分の小遣いを残してほとんどその女性に渡していた。その女性も働いていて、女性の収入の方が高かった。

実家を出てからこれまでの間、帰ることはなく、連絡を取ることもなかった。

37歳の時（2004年）に同棲していた女性の母親の具合が悪くなり、彼女が実家に帰ることになった。その女性は自分の住むところの心配をしてくれたが、住んでいた場所の家賃が高かったし、自分から「住むところは何とかなる。そのうち見つけて住むから大丈夫」と話した。

この頃、弁当屋を辞め、海鮮丼店で働く時間を増やした（41歳、2008年まで勤務）。

「僕はそこから、住むところがなくなりました。借りるお金もなかったし、借りたところで、借金問題もありましたから。そのため、インターネットカフェや個室ビデオ店とかで寝泊まりしましたよ。

この37歳（2004年）の時から海鮮丼店を辞める41歳（2008年）までの3年と少しの間、ネットカフェ、ビデオ試写室生活を送った。「まっ何とかなるやろ」と感じはしました。「こういうところって、お金さえ払えば朝までいられるわけじゃないですか。しっかりした店やったら、個室も

あればテレビもついてるし」。騒がしくないビデオ試写室をメインに利用した。12時間で2,000円、月6万円かかった。当時の収入は月12~13万円で、半分は宿泊代、あとは食費と遊ぶお金で生活できていた。「3年もおると、その店長の人と仲良くなりました。他にも仲のいい人はいました。名前とか、そんな話はしないでですけど、いつもいる人はいました」。

そういう生活が3年続いたが、2008年5月に海鮮丼店（フランチャイズ店）のオーナーが本部と仕入れ価格などについてもめて、店を閉めることになり、自分も失業した。

「次行くところ、いうたって。僕、何の保証も、住んでる家もないし、就職先なかったんですよ。アルバイトでさえも」。

大阪府内の繁華街を歩いていたら建設会社の人に声をかけられて、飯場での生活が始まった。「家賃とか、食事とか引かれて、月だいたい7万円、多い時は10万円ぐらいは手元に残るみたいな感じで言われました。食べるものは食べさせてくれるし、住めるところはあるじゃないですか。風呂も入れる。それやったら行きますと言うて。月7万円ぐらいで1年ぐらいおったら、悪くても40~50万円とか、まとまったお金貯められるなと思ってました。行ったら、結果的には、1カ月の間に仕事があるのは7日とか、週に1日2日の仕事やったんです。それでも、飛び出すわけにはいけへんし。今出たところで、お金持ってないから、明日どうしようか、食べるものも食べられないんで。いろいろ考えて、1年間、そういうのが続きました」。

「住んでて、食費や寮費を全部合わせて1日3,000円かかるんです。すると、月に9万円かかるんです。それプラス、1週間に1回、1,000円か2,000円貸してくれる。合わせて93,000円から98,000円ぐらいの経費。で、1週間に2回働くと、1日7,500円なんで15,000円なんですよ。これに4かけて、月に6万円。マイナスの3万円数千円になるんですよ。赤字が毎月つくんですよ。1年いきましたから、最後にもらった明細書見ると、マイナス37万円とか、そんなだったんですよ。こういうお金って、働いても働いても返せないんですよ。毎月20日以上働くなると、ほとんどなかったんですよ」。

この飯場に暮らしながら別のところに働きに行くことはルール上でできなかった。「そこに住んでたんが30人ぐらいだったんです。だいたい3人（1部屋）とか。1人部屋もあったんですけど。古い人に聞くと、『20万円借金があれば、ここ辞めて他に行った方がいい』って言われました」。古い人には仕事をまわして、その人たちは22日とか23日とか仕事があった。30人のうちの半数はそういう人だった。「今日は何人くらい欲しい」「明日は何人欲しい」とかいう電話がかかって来て、それを振り分けていた。「求人的人数が多かったらまわってくるんですけど、少なかったら古い人が優先的に働いて、入って間もない人間は仕事がない。そういう人はどんどん辞めていった。仕事がないから」。

「1年いて、これは無理だと思って辞めました。もともとこういう仕事には就いたことがなかったんで。たまに行った仕事でもわけがわからないんですよ」。

そこを出たのが2009年7月22日。マイナス37万円だった。「向こうも、請求も何もできないと思うので、勝手に出てきたんです。たいがいこういうところの辞め方って、そんな感じらしいです。『辞めます』言うて辞める人間なんて

いない。古い人くらいのもんですよ。たいがい、給料もらったら、次の日いてないとか」。

今までで一番きつかった時期は、「やっぱり去年ですね。建設の仕事に行ってた時。たまにある仕事は慣れない仕事で、肉体的なきつさもありました。なにしろ精神的にきつかったです。そういう生活していると、生きてる実感がないというか。死んでみたいで。死んだような生活というか。生きがいなかったです。実際自分の感覚的にはそんな感じですよ。仕事のない日はもうほとんど、寝てるのが多かったです。うろろろとかはしてましたけど、それくらいで。お金がないんで、何もやることもなかった」。

飯場を出た後、手元には2,000円しか残っていなかった。2日間はこれで食べられたが、お金がなくなった後は大阪府内の公園で寝ていた。昼間は繁華街などで時間を潰し、あまり早い時間から公園で寝るのは怖かったので、夜はコンビニやビデオショップで時間を潰し、老人がゲートボールをしに来るぐらいの時間、明け方4時~5時ぐらいに公園に来て3時間ほどベンチで寝ていた。「僕ちょっと怖がりなんです。いろんな、あれ（ホームレス襲撃）あるじゃないですか」。その間食事は取らず、「水ばかりでしたね」。野宿は1週間続いた。

その間にハローワークに行ってみた。どんな仕事があるかと検索はしたが、ハローワークの職員に相談はしなかった。「実際に行ってみたら、求人は全部、定住のところがないと無理な仕事ばかりなんで」。

「その時、はりつめてたというか、緊張感があって、たぶんお腹減ったというのも、あまりなかったと思うんですよ。不安とか、いろんなもんがあって。精神的に追い込まれるというか。そういう時やったので」。

「その時耳にしたのが、炊き出しです。行ったこと、実際はないんですけど、どこでやっているかを聞こうと思って、区役所に尋ねに行ったんですよ。何も食べられなかったんで。その時に、区役所の人、『こういうところ（自立支援センター）がありますよ』というので、巡回相談員の人に電話してもらったんです。区役所には金曜日に行ったので、土日はやってないということで、「月曜日にまた来てください」ということになった。

8月1日から社会福祉法人が運営する無料低額宿泊所に2日泊まった後、8月3日にアセスメント型の自立支援センターにやって来た。

「仕事はやろうと思ってました。ただ今住所がないので、どうにもできないので」。

<現在の生活状況>

現在の生活はやや苦しい。ここ1年間の収入は50万円未満。ここ1年間で、お金がなくて食事を我慢したり、友達との付き合いを控えたり、気分が沈んだり、物事に興味がわかない時があった。心身に不自由はない。これまで結婚をしたことはなく、必要性を感じていない。現在、困ったことがあれば、友達やカウンセラーなどの専門相談員に相談する。

今も実家とは連絡を取っておらず、昔の借金がどうなったのかもわからない。きょうだいとは、仲は良くなかった。いざとなったら、兄は助けてはくれたとは思いますが、迷惑をかけたくなかった。

<本人の望みや不安>

将来についてはやや不安がある。

「自分は生まれた時から貧しかったんです。貧しいのは誰の責任かというのは難しい問題だと思います。貧しい人がおらんと、裕福な人が出てこないわけでしょ。裕福があって貧しいがあるから、裕福な人が貧しい人を働かす。企業ですね。みんなが裕福だったら、誰も働かなくてもいいわけじゃないですか。本人の責任だとは思いますが、その一方で、誰かが貧しい人間を作ってるとも思うんですよ。」

社会の問題は、「政府だけじゃ、解決できない」と思う。

政府や行政には、「健康保険・公的な年金制度の充実」と「住宅支援の充実」を望む。「ほんと言ったら、最低賃金などの労働条件の引き上げとか雇用保険制度の充実とか、いろいろ言いたいんですけど。今、自分が一番下のランク、普通の人とは違った生活してるわけやから。そんなん、今まで自分がやってきたことの罰っていうか、そうなんで。なんて言うんですかね、自分のエゴみたいな感じになってしまうんです。普通に言うと、生活保障みたいな。ほんと

に困ってる人って、たくさんいてると思うんですよ。生活保護、受けたいんやけど、受けさしてもらわれない人とか。ここを充実してあげたらなって思います。」

今までを振り返って、「まずかったな」と思うのは、「転々と職を変えたこと。飽きたからというて、簡単に(仕事を)変えたこと」。後々のこと考えずに辞めたり。反省する部分はたくさんあります。職を変えること自体は、それはそれでたぶんいいと思うんですけど、もうちょっと考えて、変えるべきだった。『何とかなるわ』みたいな感覚でずっといましたんで。」

とくに、「最初から2番目の、イタリアンレストランにもうちょっと長くおれば、ちょっと何か、変わったかなって思います。」

「今まで何年間かは、ほとんど“野外生活”を送ってきて、全然、安定した暮らしっていうの、してないので、ある程度の安定した暮らしがしたいというのがあります。パートなり、1人で住居を構えて。仕事面は、こういう歳になりましたんで、あれやこれや、自分ができるような仕事で、見つけていきたいと思っている。」

調査番号：大阪18

調査日：9月2日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：35歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：宮崎県 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：運輸業、倉庫関係職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 遊園地・運営スタッフ（正社員、3年） 無職（2カ月） 運送会社・ピッキング（登録型派遣、9年） 交通事故の後2カ月無職 運送会社・ピッキングなど（登録型派遣、3年） 無職（1年7カ月、家具などを売って生活） 家を差し押さえられ退去 簡易宿所（数日） 野宿（8日） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中 / 求職中

<仕事に就くまで>

1974年、宮崎県生まれ。

家族は、両親との3人であった。父親は宮崎県出身、母親は福岡県出身であったが、結婚し自分が生まれてすぐに大阪府にきた。宮崎県と福岡県には親戚がいるが連絡は取ったことはなかった。また、近くに親戚はいなかった。

小学校5～6年生の頃に両親は離婚した。

両親の離婚後は、父親と借家で暮らし、生活はやや苦しかった。父親は、地元の建設会社で日雇い労働者として働いていた（自分が26歳の時、父親は56歳で死亡した）。

母親は、離婚後、別の男性と再婚した。

中学校時代は、授業内容はあまり分からず、遅刻や欠席も比較的多かった。しかしなんと公立高校に入学できた。高校ではあまり楽しい思い出はなかったが、進路指導は適切に行われたと考えている。

<初職からの経験>

高校卒業後、18歳（1992年）の時、高校の紹介で奈良県にある遊園地に正社員として就職し、3年間働いた。この

頃は景気もまだよく、賃金は安定していた。切符切りや掃除、場内案内などの単調な仕事ばかりであった。これに加えて平日は来場者がほんのわずかで仕事が少なく、退屈であった。結局、仕事にやりがいを感じる事ができず、退社した（21歳、1995年）。その後2～3カ月は、遊園地勤務で稼いだ貯金で暮らした。

しかし、いつまでもブラブラと無職でいるわけにはいかないと思い、正社員の仕事求めて求職活動をしたが、うまくいかなかった。

21歳（1995年）の時、ひとまず派遣会社に登録し、運送会社の配送事業所で登録型派遣社員として働くようになった。登録型派遣を選んだのは、「時間に縛られない仕事を探そうとしていた」からであり、「よい仕事が見つかった」と考えた。給料は日給制であった。当時は、「派遣は良いイメージがあった。お気楽モードだったと思うし、できるだけ遊びたいと思って派遣を選んだ」。仕事で得たお金は遊びに使い、また派遣で稼げばよいという感覚であった。

仕事の内容は、工業製品やギフト商品など様々な荷物の仕分け作業であった。最初は時給800円で、1週間おきに昼夜交替で、一日5時間ずつ週6日働き月12万円ほど稼いだ。給料の昇給がないだけでなく備品代などが天引きされ

ていた。そのため、同じ仕事場で働いていた別の派遣会社の労働者に「引っ張られ」て、そちらの派遣会社に登録を1度変えた。これによって、勤務先は同じ事業所だったが時給が900円に上がった。その後、この配送事業所で9年間（30歳、2004年まで）仕事を続けた。

ここに勤めて5年目の26歳（2000年）の時に、父親が56歳で亡くなった。原因は、脳出血が肝臓肥大のいずれかであったが、詳しいことは覚えていない。建設業の日雇い仕事で、鳶職の資格などを持っていなかったのもっぱら土工をしており、体に負担のかかる厳しい仕事だったことが関係したかもしれない。父親が死亡した際、生命保険金が入り、その保険金で地元で2DKの平屋を購入し、以後その家で一人暮らしをした。当時はまだ「建設不況などで景気は決してよくなかったが、父親の遺産が入ったりしたため、（不景気の）実感がなかったと思う」。

30歳（2004年）この登録型派遣の仕事をして9年目、交通事故に遭い、腰と足首を痛めた。後遺症はなかったが、これが原因でこれまで続けてきた運送会社の派遣の仕事辞めることになった。

2カ月ほど仕事をせずにはいた後、同年、別の運送会社で登録型派遣として働いた。前の運送会社の仕事はきつかったが、今度は「もしかしたら楽になるかな」と思い、再び運送会社の荷物の仕分け作業の仕事に就いた。実際、次の会社では給料は同じであったが、仕事は少し楽だった。

30歳（2004年）から33歳（2007年）までの3年間に派遣会社を3回変えた。仕事は同じ運送会社の仕分け仕事であったが、派遣会社を変えるたびに事業所も変わった。また、働かないでいた時期があったりと、「細切れで」派遣労働を続けた。時給は900円で月10万円ぐらいの収入だった。会社を変えた理由は、少し休みたいと思って自分から願い出での退社もあったし、派遣会社の都合による退社もあった。最後に働いた派遣会社では契約期間中の中途解約「派遣切り」により4カ月で辞めさせられた。また、この職場内では、正社員から「とにかく仕事を全部押しつけられました」。加えて、正社員から派遣社員へのいじめがあった。

この3年間には、運送会社だけではなく、製造業で夜勤の仕事も経験した。段ボールのラベル印刷や組立製造、パッケージ作りなどの製袋業の仕事で、時給1,200円に深夜手当が付いたので月20万円程稼げたが、「残業がめっちゃありました。で、手が壊れました」。こうして、筋肉疲労で手が動かなくなったため、3カ月で辞め、また運送会社での仕分け作業に就いた。

ずっと派遣労働を続けることになったのは、この働き方の「便利さに慣れてしまった」からである。また、運送会社での仕分け作業を続けたのは、他の職業もしてみたかったが、「この仕事しかできなかった」、「自信がなかった」、「不景気でしたので慣れてない仕事をするよりは、前もやっていた同じ業種をやる方が即戦力になれる」という理由からであった。元をたどれば、21歳当時の求職活動で正社員に採用されなかったことが登録型派遣労働をはじめのきっかけであったし、交通事故で腰を痛めたことが（比較的軽微な）運送会社での仕分け仕事を続ける理由になっていた。

32歳（2006年）の頃に、今度は自分が加害者となる交通事故を起こしてしまった。一度は物損処理扱いで示談になったが、相手から裁判に持ち込まれ、結局相手に有利な判決が出て、30万円の修理代を払わなければならなくなった。しかし、その支払い代金が「ちょっと足りなくなって」

10万円をサラ金業者から借りた。気軽に借金できることが分かって借入額の枠を50万円に増やし、「ちょっと遊んでしまっただけ」それをカバーしようと家を担保に枠を広げ、あとになにか資格を身に付けようと専門学校に行きたかったというのもあって」さらに借入額の枠を広げていった。しかし、結局はこれらのお金は、パソコンの購入費とその他遊興費に使ってしまい、専門学校には行かなかった。そして、合計300万円の借金が残った。

33歳（2007年）で「派遣切り」にあって以降も正社員を含めて求職活動はしたが、うまくいかなかった。「そのうち生活費もなくなって、ガス、電気も止められ、電話もできなくなって結局八方ふさがりで」、求職活動どころではなくなった。

運送会社での派遣労働を辞めさせられてから1年7カ月（2009年6月まで）は仕事がなく、ずっと失業状態であった。そこで、家財道具や電化製品などを売ってお金にして生活していた。

しかも、こんな生活状態であったので、借金の返済は全く進まず利息も積み重なって、35歳（2009年6月初旬）の時には借金は400万円になっていた。それでも一向に返済ができなかったために、借金の担保であった家が差し押さえられ、競売にかけられることになった。家は築40～50年で立地も悪かったため競売にかけられた時点では150万円の値しか付かなかったが、それでも売れなかった。たぶん「もっと安い値で買い叩かれたらどう」。また、この差し押さえに際して、電話だけはなんとか確保しようと市役所に相談に行ったが、「仕事がないから支援できない」と断られ、生活保護も「若いからまだ働ける」と窓口で拒否された。「役所の常套文句でしょうね」。

定額給付金12,000円は家を差し押さえられる直前に、ぎりぎりでもらえた。

2009年6月初旬に家を差し押さえられてからは、ドヤ（簡易宿所）を求めて日雇い労働者が多く集まる街に来た。しかし、そのお金もドヤ代に消えてなくなり、その後、自立支援センター入所までの8日間、野宿生活を送っていた。自宅を強制退去となる前から、野宿生活者のための緊急宿泊施設やシェルターについては、ハローワークに行き調べていた。

野宿生活を始めてから労働相談を行う施設に行き、そこで「偶然に見つけた」ジョブカフェに行った。ジョブカフェでは、交通事故の軽度の後遺症があることから障害者の雇用促進を目的とした事業協同組合を紹介され、さらに事業協同組合では区役所に相談することを提案され、区役所で現在のアセスメント型の自立支援センターを紹介してもらい、入所することになった。8日間の野宿生活のうち、前半4日間は食事なしで過ごし、健康状態は非常に悪かった。

しかし、事業協同組合での相談から施設入所までの4日間は自立支援センターから緊急食糧をもらえ、「なんとかそれで生きられた」。

社会保険に関しては雇用保険や健康保険などは初職の遊園地勤務の時しか入っていなかった。

< 現在の生活状況 >

現在は、アセスメント型の自立支援センターに入所中である。野宿生活に比べれば、自立支援センターでは食事があり、健康状態はとてつよい。

母親とは年1回くらい連絡を取っているだけである。しかも、母親は交通事故に遭って頭を負傷し、障害が残っているし、生活は苦しいと思う。宮崎県や福岡県に在るであろう親戚とは、まったく交流がない。

困った時に相談できる人は必要だと考えているが、連絡しあう友人はいない。

<本人の望みや不安>

将来に対しては大きな不安を持っている。ハローワーク

や生活保護・住宅支援の行政の相談窓口は「役に立たなかった」。職業訓練については利用したかったが、雇用保険に未加入であったことから、「利用したくてもできなかった」。

望むことは、派遣労働の労働条件の引き上げや教育訓練校制度、生活保護の充実である。また、登録型派遣については、「ニーズがあると思うし、禁止にすることはない」と思う。しかし、要望として「ピンハネ率を規制する」とことは必要と考えている。

調査番号：大阪19

調査日：9月2日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：40歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：製造業、生産職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：定時制高校入学・卒業+金属加工メーカー・生産（正社員4年、卒業と同時に退職） 設計会社・設計（正社員、1年） 製造業の町工場・生産（正社員、6年） 化学薬品メーカー・生産（請負会社の正社員、1年半） 専門学校入学・卒業（2年） 産業機器メーカー・生産（登録型派遣、3年半） 釣り具メーカー・生産（登録型派遣、2年） 刑務所（1年半） 更生保護施設（2カ月） ネットカフェ・路上生活 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（2週間）/求職中

<仕事に就くまで>

1969年、大阪府生まれ。

6歳の時に両親が離婚し、母親はスナックを経営して自分と姉、妹の3人の子どもを育ててくれた。中学校3年生当時の暮らし向きは普通だったと思う。中学に信頼できる先生と友人がいた。中学の授業内容はあまりよくわからなかったが、病気以外は遅刻や欠席をせず通っていた。

高校受験では、普通科（全日制）に合格することができず、「私立の滑り止めも受けてなかった。どこも行かんわけにもいかんし、浪人するのもいややし。それで、定時制に行っただけです」。仕事の後に学校へ行くのが大変と感じながらも、「まわりの高校生と違って、働いてたんで、けっこう何でも買えとった」という楽しみもあった。

<初職からの経験>

工業科の定時制高校に入学して、16歳（1985年）で金属板やロッカーを作るメーカーに正社員として就職した。収入は手取りで15～16万円。社会保険は入っていた。そこで4年間働いた。実家から仕事と学校に通い、恋人、友人、仕事仲間との付き合いもある生活だった。

20歳（1989年）、定時制高校を4年で卒業した同じ時期に、最初の仕事を辞めた。「別に、そんな不満はなかったんですけど、別のところに行きたいなと思って」。

失業手当を受給し、次の仕事を、新聞の求人広告あるいは求人雑誌のいずれかを見て探した。仕事は「すぐに見つかりました。（仕事を辞めてから次の仕事が見つかるまでの）間は2～3カ月くらいやったと思うんです」。

同年、次の会社に就職。その会社は設計会社であった。正社員で、給料が19～20万円。設計図を書いていた。ここは1年くらい働いた。「辞めたのは、どう言うんでしょう、帰りが遅かったんですよ、設計だから。ヘタしたら（帰宅するのが）次の日とか。それが何日も何日も続いたんです。自分の身体も続かなくなってきて辞めました」。

21歳（1990年）次の仕事に就いた。「これもすぐやったな。（前職を辞めてから）1～2カ月かかるか、かからないくらい。CDラックなんかを製造しているところでした。正社員は正社員なんですけど、町工場なんです。知り合いの親がやってる。だから、雇用保険とか、そんななかったんです。給料は20万円くらい。ここは6年で辞めた。「（理由は）やっぱ、何もついてないのが不安だったんですよ。雇用保険とか、保険関係がついてないのが先々不安だったので。国民年金はかけてなかったですね。国民健康保険だったと思います。雇用保険はかけてなかったです」。

27歳（1996年）次は化学薬品を作る会社で働いた。薬品と薬品を調合する仕事だった。ここはハローワークの求人票で見つけた。知識はまったくなかったが、「何カ月かで、だいたいできるようになりました。そしたら、何かの薬品を調合できる認定証みたいなのを取ったんです。化学薬品メーカーの正社員ではなかったです。別の会社の正社員で、そこから働いていた化学薬品製造会社に行っただけです。つまり、請負社員ということだったと思います」。給料は30万円くらい。かなり危険な仕事で、宇宙服みたいなのを着てました。

この仕事は1年半続けた。辞めた理由は、「この時に母が亡くなりまして。なんて言うんでしょう、何もやる気がなくなって、何もしなかったですね。仕事に不満はぜんぜん

んなかったです。」

この後、半年以上遊んだ後、「ずっとこのままでいるわけにはいかない」と思い、30歳（1999年）から（動物美容に関する）トリミングの専門学校に2年通った。「30くらいやったんで、何か自分に技術的なものが欲しくて、それで行ったんです。もともとトリミングに興味があったこともあります」。学費は貯金でまかかった。

32歳（2001年）専門学校卒業後、トリミング関係の仕事を「探したんですけど、ぜんぜんなくて。これやったらやっていけへんわと思って。何より仕事探さなあかんなと思ったんです」。

そこで派遣会社に求人誌を見て登録した。その派遣会社から、高速道路の防音壁を作る会社に派遣され、働いた。ここで3年半働いたが、派遣先の会社が倒産してしまった。

「別のところを紹介するのに時間がかかると言われたんですね。それやったら自分で探すわと」。35歳（2004年）求人誌で派遣会社を探し、登録した。「僕、定時制高校（の生徒）やった16から働いてるんですけど、ずーっとやってきたのが製造業ばかりなんです。客商売、水商売ができないので、工場作業がしなかった。派遣の求人でしたけど、製造業というのを書いてたんで登録した」。

釣り用品などを製造する企業の工場に派遣された。契約期間の定めはなく、2年間働いた。土曜日・日曜日・祝日に出勤することもあり、1カ月の平均勤務日数は24～25日で、だいたい2～3時間残業があったので、1日の労働時間は10時間だった。

37歳（2006年）釣り具メーカーで2年ほど働いた時期に、罪を犯してしまい38歳（2007年）の時に刑務所に行くことになった。

2009年（40歳）4月に、1年半服役した後、刑務所を出て、最初に大阪府内にある更生保護施設に入った。「そこで2カ月か3カ月くらいあって、出たのが（2009年）6月ちょっとくらいかな。6月過ぎくらいに出たんですけど、行くあてなかったんです」。刑務所時代には、月に1,500円か2,000円くらいもらっていて、そのお金と更生保護施設でもらったお金とで14～15万円くらいあった。所持金が「それくらいあって、最初、ネットカフェとか、ああいうところで寝泊まりしとったんです」。

「更生施設は80人くらい人がいたんですけど、そこに仕事をまわしてくれる会社は何社かありまして。電話がかかってくるんですよ。1日行って8,000円くらいくれるんです。（入所していた時期は）仕事がありませんから電話がかかってこないことが多かったんです。居住費は何もいらなかったです。（入所者のうち）ほとんどの人は働いてなかったですよ。仕事を見つけていける人というのは、あんまりいてないですね。仮釈放で出ますよね。だいたい仮釈の期間くらい居てられるんです。満期で出てる人とかでも、行けるところがないとか、それであったら、ちょっとくらい居てるけども。自立支援施設と違って、けっこう冷たかったです。金が一銭もない人でも平気で出されました。その前に公園があるんですけど、金なしで出た人、みんなそこに流れましたから」。

その施設を出た後、「ネットカフェとか24時間やってるビデオシアターみたいところで、お金があるうちは泊まっていた。14～15万円しかないから、すぐなくなるんですよ。無茶な使い方せんでも。一日泊まるのに2,000円いるから。それを何日か続けてるうちに自分もお金なくなりま

したからね。6月の終わりごろか7月のあたま、それくらいに、だんだんお金がなくなってきて、ちょっと僕も野宿しました。公園で」。

現在入所中のアセスメント型の自立支援センターに来るきっかけは、警察に捕まる前に作っていた借金問題でかかっていた弁護士に、行くところもないと話したところ、「こういうところがあるよ」と教えてもらったので、すぐに電話した。自立支援センターに来たのが8月17日だった。

借金を作った経緯は、友人にだまされたこと。「（額は）400万円。金よりも、だまされたということがきついですね。金なんかどうでもええけど。人間を信じられへんようになりますね。4歳くらいから付き合ってた奴やから。ショックでしたな」。

<現在の生活状況>

お金がなくても食事はきちんとしていた。

医者にはかかっていない。自分では現在の健康状態をとってもよいと認識しているが、気分が沈んだり、ゆううつな気持ちになったり、物事に興味がわかなくなったり、心から楽しめない時もある。

逮捕されるまでは姉や妹とも仲がよく、友人もいたが、「今、きょうだいとは連絡を取ってないです。パクられて刑務所行くようになって、犯罪者と付き合わすわけにはいかないので」。

現在困ったことや悩みごとを相談できる人はいないが、必要だと考えている。

今まで結婚したことはない。過去には恋人がいた時もあり結婚の話も出たが、自分自身、住宅の目途が立たないことと自由や気楽さを失いたくないと思い乗り気でなかった。今は恋人もいない。

<本人の望みや不安>

「『生活保護、受けたらどうや』と弁護士に言われたんですけども。なんて言うんでしょうね、こんなところなんですけど、生活保護受けるのはイヤなんです。ちょっと、カッコつけやないんですけど、それは許されへんなと」。

「将来については強い不安がありますね。こんなところに居るとするのが一番不安です。ここから出て行ったとして、自分に自信があるんですけども、全部できるわけじゃないから。先のことを考えたら、やっぱ、すごい不安です。ちゃんと、普通のひとと、生活できるか。それと、なんて言うんでしょ、言うたら、僕にはマイナスですからね。「刑務所行ってる」というだけで、マイナスから始まるから、それも強い不安の一つですね」。

政府や行政に対しては、最低賃金など労働条件の引き上げ、再就職支援の充実を望んでいる。

「ここを出てからというのは、何よりも最初に仕事を見つけないと生活できないと思ってるんで。ハローワークが一番手っ取り早く仕事を見つけれれると思うんですけど。ぜいたく言わんかったら見つかると思うんです」。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：43歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大分県 ■学歴：専門学校中退
- 就労の有無：求職中 ■直前職：製造業、生産職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入ほとんどなし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：専門学校中退 飲食店・ウェ이터（アルバイト、2年）+警備会社・警備（アルバイト、2年）かけもち 空調設備会社・現業（アルバイトのちに正社員、7年） 映画の自主制作（2年、この間は蓄えと警備員のアルバイトで生活） 自動車メーカー・生産（期間工、2年） パチプロ生活（3年） 電子部品会社・組立（登録型派遣、3年） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、2年） 無職（1年） 自動車メーカー・生産（登録型派遣、1年半） 無職（8カ月） 土木建築会社の飯場・土木作業員（日雇い、3週間） ネットカフェ等（数日） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（1カ月）/求職中

<仕事に就くまで>

1966年、大分県生まれ。

両親は離婚しており、自分が生まれたときには既に父親はいなかった。母方の祖父母と母親の4人暮らしで、兄弟はいなかった。母親は中小企業の正社員として働いていた。

中学校の頃は、授業内容はよくわかっており、病気以外では欠席・遅刻をしなかった。信頼できる先生や友人もあり、進路指導はある程度適切に行われていた。当時の世帯の収入は平均よりは低かった。

1984年（18歳）大分県の高校を卒業後、写真や映画が好きだったので、プロのカメラマンに関係する仕事に就きたいと考え、東京にある専門学校の写真科（2年制）に入学した。学費は親が出してくれ、専門学校に通いながらウェ이터のアルバイトをしていた。しかし、授業が自分の役に立たないように感じ、また、授業料も高額で2年次の学費を払う気にはなれず、1年で専門学校を辞めた。

<初職からの経験>

1985年（19歳）専門学校中退後、専門学校の頃から続いていたウェ이터のアルバイトと警備員のアルバイトを掛け持ちした。両方合わせて月15～30万円の収入だった。ウェ이터と警備員はその後2年ほどして20歳か21歳（1986年か1987年）の頃に辞めた。その後千葉県に引っ越し、空調設備を取り扱う会社でアルバイトとして働き始め、しばらくして正社員になった。仕事内容は、都内の学校などでクーラーなどのダクトの取り付けをしていた。月給は20万円ちょっとだった。仕事は面白く居心地が良かったが、26、27歳（1992、1993年）頃に辞めた。

専門学校の中退後も、映画や写真の撮影などを少し行ったりしていた。空調設備会社の仕事を辞めるきっかけとなったのは、友人の映画制作を手伝っていて、そちらに時間とエネルギーを割きたいと感じるようになったからで、しばらく映画製作に費やすことになった。その活動では、友人が自主制作した映画をフィルムフェスティバルに出品したこともあった。映画に関係することは好きだった。当時の生活費はそれまでの蓄えと、たまにやっていた警備員のアルバイトで何とかだった。映画制作をしばらくしていたが、自分たちだけでは高額な制作費をかけられず、そのうち生活費も尽きたことから「なんとなく、なし崩し的にやらなくなった」。約2年の映画制作は終わった。

その後、29歳（1995年）のとき、情報誌で仕事を探し、東京都にある自動車メーカーの工場で期間工として寮に住み込みで働くことになった。収入は寮費が引かれる前で月収28～29万円だった。半年ごとに契約を延長していたが、2年経ちお金がある程度貯まり、仕事に「飽きて疲れた」ため辞めた。

その後、31歳（1997年）の頃、知り合いがいたというわけでもなく、パチンコ屋が多いからという理由で、「なんとなく」愛知県に行った。安いホテルかサウナに宿泊し、それまでの蓄えとパチンコでかなり儲けていたことから、遊んで生活ができた。そうした生活は34歳（2000年）の前まで続けた。

飲酒はあまりしなかった。本やCDにお金を費やしていた。高校の頃から文学が好きで、主に評論から読み始め、そこに出てくる文学の本を読んでいた。バッグに入れて持ち歩き、本が増えると売るか捨てるかしていた。高い本も捨てたりした。パチンコに行くよりそういった文学の勉強をした方がいいとも思っていたが、文学に関係した仕事に就こうとは思っていなかった。

実家には20代で祖母が亡くなったときに1回帰っただけだった。「出世してからじゃないと帰れないかな」と考えていた。親とは仲が悪いわけではなかったが、ほとんど連絡を取らなかった。「不安はありますよ。お金が尽きてきたらどうしようって思う」。

生活費が尽きかけたので、34歳（2000年）の初め頃、愛知県で情報誌を見て静岡県の電子部品工場に登録型派遣社員として働くようになった。ここも寮付きだった。月給は25～30万円だったが、夜勤が多かった。ここで3年間働いたが、わりと居心地がよかったし、女性社員も多く、従業員同士男女問わず仲が良かった。

37歳（2003年）の頃、その工場の仕事がなくなり、会社から派遣社員は全員解雇を言い渡された。仲の良かった派遣社員も全国にバラバラになった。しばらくは連絡を取り合っていたが、1カ月後に会ってそれきりとなってしまった。半年間ほど静岡県西部で「ぶらぶら」した。決まった住まいはなかったので、ホテルやサウナを転々とする生活だった。蓄えがまだあったので積極的ではないが、仕事は探していた。

その後、静岡県西部の自動車メーカーの自動車工場に登録型派遣社員として働き始めた。ここも寮付きで、月給25～30万円くらいだった。車体課で体力的に過酷で、仕事をはじめて10キログラム痩せた。

その仕事をして2年経ち、39歳になった頃(2005年) 交替勤務で生活が不規則となり、体調が悪くなって、仕事のきつさが耐えられなくなり辞めた。

それから、同市でアパートを借りて仕事を探した。アパートを借りる際には、親にはたまに電話していたので、親に保証人になってもらった。そのときの親との話では、親は家庭と定職がある生活を望んでいた。「(正社員に) なんでなんのか」とも言われた。自分は、そのような願望はなかった。なんとなく負い目があるため、その後はあまり親に連絡しなくなった。「親に悪いな」という気持ちもある。

仕事探しについては、住むところがないと仕事探しにくいと考えてアパートを借りたが、アルバイトの求人ばかりで見つからなかった。それから1年間仕事が見つからず、40歳の時(2007年3月) アパートを引き払って再び愛知県へ向かった。

愛知県では、1カ月ほど安いホテルやサウナに泊まり「ぶらぶら」していた。愛知県はゆったりして居心地が良かった。

愛知県に滞在中、求人誌で仕事を探していると、滋賀県内の自動車メーカーの工場の登録型派遣の仕事を見つけ、そこで働き始めた。寮は滋賀県内の別の市の借り上げアパートで、実際に働く工場までは送迎があった。収入は寮費をひかれる前で月給25万円だった。労働時間は1日11時間、週4日勤務だった。1年半ここで働いたが、2008年10月(42歳) に不景気のニュースを見て、派遣切りはまだだったが自分から辞めた。辞めた理由は「お金が貯まったんで、ちょっとぶらぶらしようかな」という気持ちもあった。

2008年10月、仕事を辞めたので同時に寮を出なくてはならなくなったため、大阪に出てきた。大阪でアパートを借りて生活費を稼ぐために働こうとも考えたが、保証人などの問題もあるのでホテルなどの楽な方に流れてしまい、アパートは借りなかった。この当時は親に保証人を頼むことが難しかった。働いていたときはあまりお金を使わなかったため、当時約100万円程度の蓄えがあったため、大阪府内でぶらぶらしていた。先のことが考えられなかった。寮を追い出されてもきつくなかったが、蓄えがなくなるとしんどく感じるようになった。大阪府内の繁華街で、ビジネスホテルからカプセルホテル、ネットカフェへと寝場所は移っていった。仕事を探すものの、工場関係の仕事はなく、住み込みの仕事もなかった。

2009年6月頃から手持ちのお金がなくなり、1週間程度野宿とネットカフェの生活を繰り返した。お金が減っていく一方で精神的にもしんどくなっていった。

スポーツ新聞で、大阪府内の日雇い労働者の多い街の近くにある飯場に入るとの土木仕事の求人を見つけた。スポーツ新聞には、「仕事は週3日、日当8,000円」と書いてあったが、実際に行ってみると、仕事がある日は3,000円の前渡し金があるだけだった。その仕事は、3週間で7日が8日働いて、2万円ほどにしかならなかった。仕事中に脱水症状で倒れてしまったこともあって、職場に居づらくなった。20代の頃の空調ダクト取り付けの仕事も現場仕事で、その頃は体力的に自信があったが、40代になり体力は落ちていることを実感した。

7月半ばに飯場を何も言わずに出た。そのときは1万円ほどの所持金しか持っていなかった。サウナとネットカフェに数泊して、テレビで自立支援センターのニュースを

見て、インターネットで自立支援センターについて検索し、大阪府内の就労支援をやっている自立支援センターを見つけて電話した。ニュースを見る前は「どうにもならないな」と思っていた。その後、この自立支援センターの紹介で、このアセスメント型の自立支援センターに入所することになった。

<現在の生活状況>

現在の暮らし向きはやや苦しい。現在は、自立支援センターで清掃の仕事をしている。ここ1年間の収入は50万円未満だったが、借金はなかったので収支トントンだった。この1年間に食事や趣味の出費を減らし、預貯金を切り崩し、友人との付き合いを控え、気分が沈んだり、物事に興味がわかないといった経験をした。

健康状態は運動不足を感じているが、問題はなく、心身の障害もない。

これまで結婚したことはなかった。結婚をしない理由は、結婚の必要性を感じない、安定した収入がない、住宅の目途が立たないからである。

現在、困ったことを相談できる人はいないが、必要だと感じている。親とは連絡を取っていない。「心配をかけたくない」、「地元に戻った方がいいんだろうけど、世間的に」と思っている。

これまで、労働組合に加入したことはなく、社会保険や年金の仕組みはあまりよく知らないし、加入もしていない。

<本人の望みや不安>

将来にはやや不安がある。

行政に対しては、再就職支援、教育訓練制度、住宅支援をもっと充実させてほしいと思う。将来は会社に勤めるよりも自営業をやりたい。また、自動車免許やパソコンの中級・上級試験も受けたいと考えている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：41歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：愛媛県 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：製造業、生産職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 製菓会社（正社員、8年） 鮮魚取扱店（正社員、5年） 実家の農家手伝い（家族従事者、1年） ビニール製造会社（正社員、5年） 実家の農家手伝い（家族従事者、2年） 自動車部品製造会社・生産（登録型派遣、3カ月） 自動車部品製造会社・生産（登録型派遣、6カ月） 自動車部品製造会社・生産（登録型派遣、3カ月） 自動車部品製造会社・生産（登録型派遣、6カ月） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中 / 求職中

<仕事に就くまで>

1967年、愛媛県生まれ。4人兄弟の末っ子。

中学校、高校と学校にはまじめに通っていた。高校まではバスで1時間半ほどかかったため、すぐに帰宅し、部活動もしていなかった。高校の時はあまり友達がおらず、中学時代の友達との付き合いがあった。実家はみかん農家であり、生活は「ややゆとりがあった」。高校は機械科だったので、ガス溶接とアーク溶接の修了証を持っている。

<初職からの経験>

18歳（1995年）高校卒業後、労働組合長をしていた親戚（いとこ）のツテを頼り、大阪府内にある製菓会社に正社員として就職した。仕事は「忙しかった」ため、毎日2時間ほど残業していた。入社後半年間は会社の寮に住み、その後退寮し、「文化住宅」で一人暮らしを始めた（結婚まで継続）。

同年、交通事故で重傷を負い入院した（そのときの後遺症で現在も肩に違和感が残っている。後遺症としてはごく軽度で労働に支障はない）。また、当時は愛媛から大阪に出てきた中学時代の地元の友達4～5人と付き合いがあり、彼女もいた。

21歳（1988年）のとき、同じ会社の女性と結婚した。妻は結婚後、同じ製菓会社で仕事を続けたが、約1年後に転職し、建設会社の事務の仕事に就いた。

25歳（1992年）のとき、和歌山県に分譲マンションを購入（ローン）した。パブル崩壊後で値段が下がり（4,000万円 2,000万円）、購入のチャンスだった。しかし、製菓会社までの通勤が遠くなり（1時間半～2時間かかる）、給料に見合わないと思い、26歳（1993年）のときに退職した。

製菓会社退職後、ハローワークに行き、次の仕事をすぐに見つけた。複数のスーパーに店を出していた魚屋で、正社員としての雇用だった。家から1分ぐらいで行けるところに勤めていた店が入っているスーパーがあった。

28歳（1995年）の頃、自分が子どもをつくることができない病気（無精子症）であることが判明した。31歳（1998年）のとき、妻が長女であったため、妻の両親に子どもができないと困ると言われ、離婚した。

同年、離婚して一人では家のローンを払うことが困難になり、魚屋を辞めて愛媛県の実家に帰った。愛媛県で仕事を探してもハローワークに行ったがすぐには見つからず、半年ほど実家の手伝いをしていた。愛媛県に帰ってからもし

しの間、家のローンは払っていたが、やがて払えなくなり、32歳（1999年）で自己破産した。

32歳（1999年）のとき、愛媛県のビニール製造会社に正社員（給与15万6,000円）として就職した。給料を貯めて車を買ったが、携帯電話代金は滞納することがあった。ビニール製造会社に勤務している間には、付き合っている女性もいた。

37歳（2004年）のとき、不況による事業縮小で、会社から「辞めてほしい」と言われ、辞めたくなかったが退職した。長く勤めている人が多い会社だったので、勤務期間の短い自分に声がかかったとのことであった。辞めてから実家を手伝いながらハローワークに通ったが、仕事は見つからなかった。

39歳（2006年）頃、両親に、実家の農家を継いではどうかと言われたが、製造関係の仕事をしたかったので気が進まず、けんか別れになり、手伝いを辞め、実家を出て、大阪府に行った。大阪まで乗ってきた車を売り、そのお金でカプセルホテルなどに泊まっていた。

同年、大阪府のハローワークで正社員の仕事を探したが仕事はなく、雑誌で探した派遣会社に、登録型雇用の派遣社員として採用された。その派遣会社を通じて、滋賀県内2カ所（3カ月＋6カ月）、静岡県内1カ所（3カ月）で合計約1年、車の部品を製造する仕事をしていた。静岡にいたときには短期間だが付き合った彼女がいた。派遣社員としての給与は月13万4,000円で、6畳ワンルームの寮費が月4万5,000円だった。生活は赤字にはならなかったが、貯金はできなかった。半月ほど仕事がないときもあり、会社の人に「仕事ないですか」と聞いても「もう少し待って」と言われるだけで何もなく、徐々に仕事が減ってきた。このままでは寮費だけがたまっていきそうだと思ったので、その派遣会社を辞めた。

40歳（2008年）別の派遣会社で登録型雇用の派遣社員として働いた。そこでは、半年間、群馬県の工場で車の部品製造をした。ここでも仕事なくなり、派遣会社を辞めて、また大阪府に戻ってきた。

41歳（2009年）大阪府ではハローワークで仕事を探したが、そのときは携帯電話や住所がなくて連絡がつかないと難しいと言われた（大阪府に出てきたときプリペイド式の携帯電話は持っていたが、その携帯電話が壊れてしまっただけで携帯電話を持っていない）。その後仕事がない状態が続いた。

区役所に相談に行くと、ちょうど巡回相談員が区役所に来るからということで、巡回相談員に会い、アセスメント型の自立支援センターに入所した。

<現在の生活状況>

健康状態には特に問題がない。借金もない。

中学時代の友達の一人名は、今でも1カ月に1回くらいは電話をしている。愛媛県の両親や兄弟とは連絡を取っておらず、話ができない状態である。

大阪府に住んでいる姉とは電話をするが、援助はない。姉には自立支援センターに入所したことも連絡している。きちんと働けるようになれば遊びに来てもいいと言われてる。

<本人の望みや希望>

労働条件の引き上げ、再就職支援、住宅支援の充実を要望。

「とりえず働きたい。働かないと不安だ」。今の自立支援センターでは仕事を探せないの、早く退所し「仕事を探したい」と思っている。できれば派遣ではなく正社員がいい。仕事を見つけて自分で自分のことをできるようにしてから「親に謝りに行きたい」と考えている。

調査番号：大阪22

調査日：9月3日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：44歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業
- 就労の有無：病気療養中 ■直前職：小売業、営業職、正社員 ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 引越専門会社・引越助手（正社員、1年） 新聞販売店・配達等（正社員、7年）
ドラム缶リサイクル会社・現業（正社員、1年） パチンコ店・店員（正社員、4年） 新聞販売店・配達等（正社員、4年） 電気機器メーカー等製造業の登録型派遣を転々（4年） パチンコ店・店員（アルバイト、2年）+新聞販売店・配達（アルバイト、2年） 入院・療養（数カ月） パチンコ店・店員（アルバイト、5カ月） 新聞販売店・営業等（正社員、2カ月） 路上生活（2カ月） 無料低額宿泊所（1週間）
現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（2カ月）/病気療養中

<仕事に就くまで>

1965年、大阪府生まれ。5人兄弟の長男。

父親は新聞販売店に正社員として勤務し、母親は同じ販売店でパートタイマーをしていた。父親はギャンブル好きで数々の借金をし、生活は大変苦しく電気やガスを止められたこともあった。高校の頃に両親は離婚した。

小学校、中学校は、地元の学校に通った。高校に進学するつもりはなかったが、母親から高校くらいは出ておくようにと言われ、高校卒業後はすぐ働くつもりだったので、普通科よりも就職に有利と考え地元の公立高校の商業科に進学した。在学中に簿記一級を取得した。簿記の担当の先生が面白く、授業がどんどん面白くなり簿記の勉強に「のめり込んだ」。3年生の選択科目でも、もっと勉強したくて工業簿記を履修した（しかし現在は、書店などで簿記の参考書のみでもわからなくなっている）。

<初職から現代までの流れ>

高校卒業後（1984年、19歳）大手引越専門会社へ就職した。本当は簿記の資格を生かす仕事がしたいと、事務系の仕事を何社も受けたが、ことごとく落とされ、その引越会社しか受からなかった。同社は現在では名前が知れ渡っているが当時はまだ小さな会社だった。正社員で社会保険もあった。主な仕事内容は引越の助手で、力仕事だった。しかし、正社員とはいえ、日給月給で、暇になると出てこなくてもいいと言われて、出勤日数が少なければ給料も少なく忙しい時は残業も異常なくらいあった。仕事の多い時期

（引越シーズン）と少ない時期によって給料に大きな差があって収入が安定しなかった。そのため1年で辞めた。

20歳（1985年）、引越会社を辞めて1カ月ぐらいたってから、新聞販売店で勤め始めた。新聞配達は子どもの頃からアルバイトをしていた経験や、両親が同じ仕事をしていたため身近な仕事だった。仕事は個人店舗だったため社会保険はなく、国民健康保険、国民年金に自分で加入した。従業員は固定の少人数のメンバーだった。仕事内容は新聞の折り込みチラシを入れたり、新聞配達、集金などであった。この仕事をしている間は、自宅から仕事に通っていたが、母親とはもともと折り合いが悪く、顔を合わすと必ず喧嘩してしまうような仲だった。そのため実家を出て、どこか住込みの仕事をしよと思ひ、26歳（1991年）の時、7年間勤めた新聞販売店を辞めた。

27歳（1992年）の時、大阪府下のドラム缶のリサイクル工場に正社員として就職した。社会保険もあった。仕事は商品の入荷とそのあとの出荷を担当した。その会社に就職したきっかけは寮があるということだったが、就職後しばらくは実家から通い、いずれ寮に入るつもりで様子を見ていた。しかし、そのうちに業務縮小で2つあった工場の一つが閉鎖となり、寮もなくなってしまったため、1年ほど働いて辞めた。

28歳（1993年）の時、パチンコチェーン店に正社員として就職した。住込みで、社会保険もあった。母親は、「おまえは無口なためサービス業や接客は向いていない」と反対していた。はじめの3年は兵庫県内の店舗、その後転勤で1年は大阪府下の店舗で働いた。仕事は、パチンコ玉の入った重い箱を運ぶことばかりで相当の重労働が続いた。

引越センターに勤めていた頃からの長年の負担もあり、腰を痛めたため、仕事ができなくなり、4年ほどで辞めた。

32歳（1997年）仕事を辞めた後、行き先がなかったので一時的に実家へ戻り、また別の新聞販売店で働き始めた。働き始めてある程度お金が貯まると、実家を出て、同じ市内に部屋を借りて一人暮らしを始めた。

36歳（2001年）の時、その新聞販売店を任されていた人が辞めることになり、次に来る親方があまりよくないという噂を耳にしたので、これを機に辞めることにした。

同年、新聞販売店を辞めた後、派遣会社に登録した。社会保険は派遣会社の社会保険に加入した。派遣会社に登録してからは、製造業派遣を繰り返し、4年ほど全国を転々とした。住まいはずっと派遣会社の寮だった。

最初に派遣されたのは静岡県のアコンのコンプレッサーを製造している工場、同年7月までの契約で働いた。

その仕事が終わって紹介されたのは山梨県での半導体検査の仕事で、半年ほど働いた。

次は長野県の太陽電池のモジュール工場で約半年働いた。

その次は滋賀県の大手電子機器メーカーの工場で働いた。プリンターのカートリッジを製造している工場だった。この頃は、派遣会社でも必ず仕事にありつけた。そのほか、自動車、食品関係の工場でも働いた。

仕事はきつかったが収入が一番良かったのは、自動車の製造で、その次に家電関係、その次に食品関係であった。

40歳（2005年）の頃、地元の人からの紹介で知り合った大阪在住の8歳下の女性と交際していたが、その女性と結婚の話まで進んだ。当時は滋賀県にいたが、遠いので地元に戻ろうと思い派遣会社を辞め、一旦、実家へ戻った。その時は、昼間はパチンコ屋で働き、朝は新聞配達のアルバイトをした。

41歳（2006年）の時、交際女性と結婚し、新居を構え共働きで生活をした。しかし相手の女性が仕事先の男性と浮気をしたため、翌年に離婚した（42歳、2007年）。

離婚後の2007年10月（42歳）、バイクで転倒事故を起こし、地元の病院に1カ月間入院した。けがをきっかけに仕事を辞めた。鎖骨・肩甲骨・肋骨を骨折し、肺挫傷まで起こす重症だった。症状が落ち着いても身体が動かず何もできなかった。その当時、三重県に交際相手（友人から紹介してもらった）があり、「自分の近くにきたら面倒見ることができる」と言われ、三重県に行くことを勧められた。その女性を頼り三重県内の病院へ転院し、その病院で手術し治療を行った。

退院後はしばらく療養し、2008年7月（43歳）に、三重県内のパチンコ屋に住込みで働き始めた。パチンコ屋を選んだのは経験のある仕事ですぐ働けると思ったからである。月収は19万円ほどで、住込みで食事つき、光熱費込みだったので、ある程度貯金することができた。社会保険はついていなかった。パチンコ店に来る客は「漁師町のせい」か、気性が激しくて乱暴な客が多く、パチンコで負けた腹いせに、パチンコの箱や物を投げられたり暴れられたりすることも多々あった。「これは、ちょっと怪我とかがしたらやばいな」と思い、5カ月ほど勤めたのち辞めた。

2008年12月（43歳）仕事を辞めたと同時にパチンコ屋の寮を出て、その後3カ月は無職のまま過ごした。前の仕事（パチンコ屋）の貯えがあったので、三重県内の別の地域で部屋を借りて生活することができた。

交際していた女性には、離婚歴があり大きな子どもがいたので、結婚話には至らずに退職後しばらくしてから別れ

た。三重県にいる理由もなくなり大阪府に戻った。

2009年4月（44歳）に新聞販売店に正社員として就職した。社会保険もあった。就職と同時に大阪府内にあるワンルームマンションの寮に住んだ。この仕事を選んだのは、過去に新聞販売職の経験があったからだ。仕事の内容は営業で、具体的には各家庭を訪問して新聞購読を勧誘することだった（そのほかに、新聞の配達準備も担当した）。早朝2時から5時まで、昼12時から夜8時まで働いた。基本給は10数万円で、あとは営業成績に応じて上乘せされた。残業は多かったが残業手当はなかった。ただでさえ安い給料から寮費が月5万円ほど引かれ、社会保険も引かれたため、手元にはほとんど残らない状態だった。給料も安く営業の仕事は自分には向いていないと思い、2カ月間働いて辞めた。

2009年6月、仕事を辞めてからは、新聞店舗で働いた最後の1カ月分の給料（5月分）があったので、しばらくは、「ビデオ試写室」などで寝泊まりしながら、仕事を探す状態が続いた。ビデオ試写室はビデオ鑑賞できる個室を提供しているところである。主に大阪府内の繁華街の店を使っていた。料金は夜に入店し翌朝までいて、約3千円だった。

その後は、手持ち金もなくなり日雇い労働者が多い街での路上生活が始まった。日雇いでもいいのでなにか仕事を探そうと思い、この街にある日雇い労働者のための労働相談のセンターに行った。しかし今まで土木建築関係の仕事経験がなく、求人ほとんどが土木建築の労働市場であったため、「仕事を得ることは難しい。他の仕事を得たいなら自立支援センターへ行くか、生活保護を受けるなら福祉事務所へ行くか、あとはこのまま路上生活をしながら炊き出しなど利用して生活するしかない」と言われた。

2009年7月初め頃に、やはり仕事がしたいと思い、直接区役所に行き、自立支援センターへの入所の希望を伝えた。区役所では、巡回相談員の面接が必要だといわれた。たまたまタイミングが良く、その日に相談員が区役所に来ていたため、即日面接が行われ、「寝るところがないんです」と伝えた。その日は入所できなかったが、翌日に、近くの無料低額宿泊所に入所することになり、ここで1週間ほど過ごした。その後、アセスメント型の自立支援センターに空きが出たので移動し、7月9日に入所した。

<現在の生活状況や本人の思いなど>

現在は貯えがないので生活は大変苦しい。母親と弟（三男）は大阪府内にまだ住んでいるが、実家とは三重に移った頃から全く連絡をとっておらず、今後も戻るつもりはない。

就職への希望はあり、自分にはパチンコ屋が合っていると思っているが、最近では年齢制限に引っ掛かる。

またセンターに入所した後、病院でMRI検査を受けたところ、ヘルニアを4カ所患っていることが判明した。歩くと脚の筋などが痛み、ひどい時にはじっとしているだけで痛む状態である。長時間同じ体勢でいることもきつい。現在は求職よりもとりあえず体を治すことが優先で、職員の方とも自立支援センターを出た後はどうするかという話はしていない。体の状態によっては生活保護を受けることになるかもしれない。

社会に対しては特に不満はない。自分自身が今まであまり仕事が長続きしたことがなく、職を転々としてきたので「貧しいのは本人の責任」だと思っている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：44歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退
- 就労の有無：病気治療中 ■直前職：建設業、建設・土木関係職、日雇い ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：アセスメント型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 造園会社・庭師（正社員、7年） 個人経営の傘部品製造工場・生産（正社員、5年） 建築会社・工事施工（正社員、2年） 国民健康保険料滞納で差し押さえ・サラ金・大病ノアパートから夜逃げ 中古パソコン取扱会社・修理販売（アルバイト、5年） 自動車メーカー・組立（登録型派遣、6カ月） 無職（3カ月） 船舶機器メーカー・住宅建材メーカー等製造業の登録型派遣を転々（7年） 建設会社・建設土木作業員（日雇い、6カ月） 無料低額宿泊所（2週間） 現在、アセスメント型の自立支援センター入所中（4カ月）ノ病気療養中・生活保護申請中

<仕事に就くまで>

1965年、大阪府生まれ。

生後10カ月のころに父親が亡くなり、5歳の時に母親が再婚した。養父と母親と、養父と母親の間でできた妹と弟の5人家族で暮らしていた。養父からはよくいじめを受け、仲が悪かった。弟と妹とも親しくなかった。養父は、持ち家をもち、大工仕事の工務店を営み、数人の職人を雇っていた。しかし、養父が保証人となっていた友人が自殺したことによってその借金を肩代わりせざるをえなくなり、返済のために家を売ることになった。それでも多額の借金が残っていたし、仕事もうまく回らなくなったため、職人を解雇して自分一人で大工仕事をしていった。さらに中学校3年生の時、養父が脳血栓を患い体が不自由になった。仕事は続けていたが、体の自由が利かないことから工事の途中で仕事を投げ出したり、他の業者に頼んで代わりにやってもらったりしていたため、事業はうまくいっていなかった。母親はパートの仕事しかなく、生活が大変苦しかった。

養父が借金だらけで、高校の授業料を納めることができなくなり、高校1年生（16歳、1981年）の時に中退せざるをえなかった。なお、18歳の時に、仲が悪かった養父とは離縁した。

<初職からの経験>

高校1年生で中退を余儀なくされた16歳（1981年）求人雑誌や新聞の求人広告で職を探し、造園業の仕事を見つけ、正社員として就職した。自分で地元のアパートを借りて暮らした。

社会保険については、健康保険はなかった（国民健康保険に自分で加入）し、20歳を超えてからも厚生年金への加入はなかった。給料は日給月給制で、当初は日給6,000円くらいであったが、23歳（1988年）のころには日給が9,500円に上がり、一番多い時で月に30万円の給料をもらうようになった。しかし、その造園会社は、官庁の公園管理部署の業務委託を受けた会社のさらに下請会社であったことから、公園の芝刈りや清掃などの単純作業しかまわってこなかった。そのため、造園の技術が身につく職場ではなかった。また、日給月給制のため、雨の日には給料がなく、ボーナスも一切なかったので、そのままでは将来食べていけないと思った。これらを理由に、23歳（1988年）の時、7年間勤めた会社を辞めた。

その後、住んでいたアパートから通える同じ市内にある個人経営の傘部品（傘の柄）の製造工場に正社員として勤めるようになった。月給は20万円で、社会保険は年金を含めてなかった。5年後工場が倒産し、退職した。

28歳（1993年）の時、工場倒産後すぐに、知人の紹介で、同じ市内にある建築施工会社に正社員として就職した。この会社は、新築されたマンションの手すりを溶接により取り付ける作業を専門にした会社で、ある程度技術が身につけられる仕事だった。この会社も社会保険は一切なかった。

この当時、若い時から加入していた国民健康保険の保険料がずっと未納のままであった。29歳（1994年）の時にはその未納額は100万円ほどにまで膨らみ、市役所が裁判を起し、預貯金はもちろん家財道具や固定電話なども差し押さえられてしまった。おまけに、お酒や賭け事などで遊ぶためにサラ金から借りた負債が、当時残っていた。

30歳（1995年）になって睾丸腫瘍という癌にかかり手術を受け、50日間入院した。市役所をお願いして、期間限定の国民健康保険証（執筆者注：資格証明書か）をつくってもらい、医療費全額の負担は免れたが、後日多額の支払いが必要となった。

退院してアパートに戻っても、すぐに働ける状況ではなかった。預貯金は全くなかったし、サラ金の借金が120万円残っていた。

そのため、アパート代や借金の利息が払えなくなり、アパートから夜逃げせざるをえなくなった。

なお、健康保険は、サラ金に追われることを恐れて住民票を移していないこともあって、それ以降加入したことはない。

同年、東京にいる中学時代の友人を頼って上京し、その友人が自営でやっている小さな会社で働くことになった。この会社は、廃棄されたパソコンを仕入れてきて修理・再生して中古パソコンとして販売する事業をしていた。給料はよくなかったが、身分を証明するものがなかったため、他の会社に就職したくてもできなかった。

しかし、5年後（35歳、2000年）この種の事業が次第に大手企業に集中していく中で、友人は廃業せざるをえなくなり、これによって他の仕事を探さなければならなくなった。

同年、求人誌で就職先を探していたところ、たまたま愛知県の派遣会社で人材募集があるのを見つけ、寮に住みながら働けるということでその会社に登録した。運転免許証も取っておらず、住民票や保険証もなく、何の身分証明も

ない自分にとっては、ここで働く以外に働き場所はなかった。この派遣会社からは、愛知県にある自動車メーカー組立工場に派遣された。4輪駆動車のドア部分の組付ラインの作業を担当した。しかし、半年の契約期間が満了した時には、「新しい派遣仕事はない」と言われたため、当該派遣会社への登録を辞めた。

36歳（2001年）、愛知県で派遣労働を探すのをあきらめ、大阪府の日雇い労働者の街に行って仕事を探すことにした。しかし、ここでも、3カ月ほどはうまく仕事を見つけれなかった。多少の貯金があったので、ドヤ（簡易宿泊所）やビデオボックスに泊まって寝ることはできたが、食事は100円のカップラーメンやおにぎりで耐え忍んでいた。このビデオボックス（1泊1,500～1,800円）は、個室でベッドがあり、シャワーもあり、ネットカフェに比べ快適だった。

大阪に来て3カ月たったころ、ようやく（当時36歳、2001年）、45歳まで働けるといふ派遣会社を見つけ、登録した。その派遣会社を皮切りにいくつか派遣会社を変わりながら、滋賀県にある様々な工場に派遣され、7年間仕事をした。たとえば、船舶機器メーカーの小型船舶のエンジンの検査、住宅建材メーカーの工場、電気機器メーカーの冷蔵庫組立ラインの仕事などをした。これらの仕事を2008年（43歳）9月まで7年間続けた。

2008年に入ると、次第に残業がなくなってきていたが、9月の金融危機の影響で、10月に入ると派遣の仕事がまったく回ってこなくなった。仕事がなくとも、派遣会社からは寮費を請求されたため、収支は赤字となった。そのため、登録型派遣の仕事辞めることにした。

一般的に登録型派遣には年齢制限がある。自動車関係や電気機器関係では35歳を過ぎると派遣先から体力がないと判断され、なかなか派遣を受け入れてもらえないことが多かった。また、45歳を過ぎると、どんな派遣会社に登録しても仕事がまわってこなくなってしまうようだった。しかし、2008年10月以降は、40歳過ぎの人たちはおろか20代の若い人にも仕事がまったくない状況だった。

2008年10月後半、もはや登録型派遣の仕事はないと考え、滋賀県から再び大阪府の日雇い労働者の街に行くことにした。ここにある寄せ場でたまたま知り合った人夫出し業者から仕事もらい、建設日雇いの仕事に就くことができた。おもにビデオボックスに泊まりながら、「現金仕事」（一日単位で雇用契約し日払いの日雇い労働）のある日には仕事に出た。日給は8,000～9,000円であったが、必ずしも毎日仕事があるわけではなかった。多い月は25日くらい仕事があったが、2008年末から翌2009年2月にかけては1カ月に10日も仕事はなかった。この状態では、収入よりも生活費などの支出のほうが大きく、収支は赤字であった。また、体調面の悪化もあり、十分な仕事ができなくなってきたため、結局人夫出し業者から2009年3月初めごろ（44歳）には、仕事もらえなくなった。

その後、1カ月半ほど、ビデオボックスに泊まりつつも、何回か野宿しながら、建設日雇いや登録型派遣の仕事を探した。しかし、何日かの建設日雇いの仕事があったが先の展望がまったく見えなくなって、2009年4月後半に大阪府内の区役所に相談に行った。そこでは、巡回相談員を紹介され、日雇い労働者の街にある無料低額宿泊所にひとまず入所することができた。そして2週間後の5月7日、現在入所しているアセスメント型の自立支援センターに空室ができたので、移ってきた。

<現在の生活状況>

現在、この自立支援センターに入所しているが、自分の稼ぎがまったくないので生活は大変厳しい。さらに、入所後の健康診断で「気胸」という肺の病気を患っていることがわかった。「これを直さないと仕事ができない」と医者に言われ、6月30日に手術を受けた。手術はうまくいったが、現在その後遺症で脇下の神経が麻痺しており右腕が上げられなくなっている。完治するまで6カ月以上かかるそうである。

手術を受けることができたことには感謝しているが、いまはこの病気の治療に専念せざるをえず、就職活動ができないことに、苛立ちを感じている。

また、精神科にもかかっている。前から不眠症であったが、ここでは集団生活のためますます不眠症がきつくなった。

この自立支援センターは原則1カ月の滞在で、アセスメントを受けた後、就労支援を受ける別の自立支援センターに移ることになっている。しかし、そこでは最長6カ月しか滞在できない。現在、このセンターには例外的に4カ月滞在しており、通院中で完治するまであと6カ月かかることから、行政のほうでは、ひとまず（生活保護の）居宅保護の申請を進めてくれており、その返事を待っているとこである。

16歳から今日までずっと一人暮らしでやってきており、18歳で養父と離縁して以降は、この養父とは連絡を取っていない。母親には時々連絡をしている。養父と母親はずでに離婚し、母親は弟と一緒に家賃の安い府営住宅に住み、母親のパートで収入（月約8万円）を得つつ、わずかの年金をもらって暮らしている。弟はヘルニアをもっており、働けない状態である。したがって、母親は「自分たちの生活は相当厳しい」と言っている。妹は、結婚して子育て中であるが、夫が低賃金であることから経済的に厳しく、母親を援助できない状況にある。

<将来への不安>

自分の将来については、強い不安をもっている。その理由は、一つは健康問題である。また、すでに44歳であり、45歳という派遣の年齢制限のために、「この先、仕事があるかどうか分からない。おまけに年金には入っていない」。

若いころにもう少しきちんとやっておけばよかったと反省している。30歳の時、多少遊びすぎて借金をつくってしまったこと、また国民健康保険料の滞納による差し押さえを受けたこと、および、偶然とはいえ癌になり多額の医療費を支払わなければならなかったことなどである。それらの結果として「逃げだして、それから（人生が）おかしくなった」。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：39歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退
- 就労の有無：臨時就労 ■現職：臨時就労（就労機会提供事業） 清掃関係職、就労体験（臨時職員扱い）
- 直近の収入：月9万6千円 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：統合型の自立支援センター^{（注）}
- おおまかな職歴：高校中退 建築会社・内装見習い（アルバイト、1年） 靴屋・店員（アルバイト、1年7カ月） 運送会社・運転手（1週間） 建築会社・内装手伝い（アルバイト、3年） 建築会社・内装の自営（事業主、9年） 廃業・自己破産 拘置所（3カ月） 入院（1カ月） 生活保護受給（1年） 刑務所（2年） 建築会社・内装手伝い（アルバイト、半年） その後の仕事不明（2年半） 労役（3カ月） 現在、統合型の自立支援センター入所中（臨時就労中）

<仕事に就くまで>

1969年、大阪府生まれ。

2歳くらいまで母親と暮らしていたが、その後は母親とは離れ、祖父母との3人暮らしとなった。母親は、再婚し近くに住み子どももいて、遊びにも行っていた。小学校6年生までは母親のことを姉だと思っていた。本当のことを知ったときは「ショックだった」。

小学校6年生の頃、いじめられた。中学校1年生のとき暴力を使うことでいじめられることから脱出したが、それがきっかけで非行に走るようになった。12～19歳までほぼ毎日、シンナーを吸っていたし、たばこも吸っていた。つるんでいた人は多かったが、親友はいなかった（大阪府内の暴力団からスカウトされたこともあった）。

中学校に入学し、4月は学校に行っていたが、その後はあまり行かなくなった。中学校3年生の3学期にまた学校に行きだし、なんとか卒業できた。卒業式には出席した。

高校に入学したけれども、1学期で中退した。原因はタバコとケンカだった。

<初職からの経験>

16歳（1985年）高校中退後、半年ほど遊んだ後、近所の人の紹介で内装見習いとして1年間働いた。「技術は負けなかった」が、給料は少なかったので、退職した。

18歳（1987年）内装見習い退職後、大阪府内の繁華街にある靴屋に就職した。「ひたすら仕事だった」。

同年、結婚したが、20歳（1989年）のとき離婚した。妻との間には子どもが一人いたが、妻が引き取った。離婚の原因は、妻の浮気もあったが、昔の暴力団の知り合いからお金のことなどで助けてくれと言われ、断り切れずに付き合いが続いていたことも影響した。そのため、「僕が原因かも」。

離婚と同時期（20歳）に、靴屋を辞めた。理由は、店長の正社員にするという約束が実行されないこと、給料もあがらないなど、「話が違う」と感じたからであった。

その後、運送会社に就職するが、昔の仲間から内装の仕事を手伝ってほしいと言われ、1週間で運送会社を辞め、内装の手伝いを開始した（20歳、1989年）。

23歳（1992年）のとき、内装関係の自営業を始めた。

同年に2度目の結婚をした。自営業を始めた頃はとても順調で、月に60万円、多いときは100万円ほど売り上げ（本

人の収入として）があった。当時は従業員を4人雇っていた。

30歳（1999年）くらいの頃から、会社の経営が厳しくなってきた。従業員の給料も借金をして払うようになり、銀行、サラ金などからの借金が、1,600万円にまで膨らんだ。

そのため、32歳（2001年）のとき自営業を廃業し、自己破産した。事業の失敗を苦に自殺を何度か試みたりした。睡眠薬を大量摂取したときも死ぬはず未遂に終わった。

33歳（2002年）のとき、覚せい剤関係で逮捕された。執行猶予がつき、3カ月拘置所にいたが、そのときは「反省しなかった」。その後また覚せい剤を使用してしまい、妻からは、「薬をやめてくれたら離婚しない」と言われ、治療しようと自分から精神病院に行き1カ月入院した。

しかしながら、34歳（2003年）のとき離婚した。当時小学校3年生の子どもがいた。

この頃からうつ気味になった。大阪府下で生活保護を受給しながら生活するが、食費が5,000円/週と決められていたので生活が苦しく、自分の銀行口座や覚せい剤を売るなど「チンピラみたいなこと」をしてお金を稼いでいた。

35歳（2004年）のとき、電車への当て逃げと覚せい剤で再び逮捕され、2年間服役した。当時は「薬でおかしくなっていた」。

37歳（2006年）で出所し、半年間内装のアルバイトをした（執筆者注：その後の仕事は不明である）。彼女がいたがうまくいかず、また覚せい剤は使用していた。

2009年1月、売った銀行口座が悪用され逮捕された。罰金40万円が払えず、3カ月労役についた。その後、1週間は野宿したり、友達の家泊まったりしており、覚せい剤も使用したが「すっかりしなかったのでやめた」。「もうやりたいとは思わない」。その後市役所に行って相談し、統合型の自立支援センターに入所した。先月1カ月は、臨時就労で草刈りの仕事をしていた。

<現在の生活状況>

自立支援センターでの生活は、自由にお金を使えなかったり、意見が言えなかったりするなど、「束縛されるのでいやだ」と思っている。

仕事はハローワークに行き探している。面接に行くときなど、交通の便が悪く大変である。

母親は、自立支援センターに入所したことを知っている。母親には家族や子どももいるので、あまり近づくのは良く

ないと思っている。他に相談できる人はいない。昔の悪い友達に「信用できない」。

5年ほど前からうつ気味で、幻聴がある。病院では、薬物使用の後遺症ではないかと言われている。精神障害者保健福祉手帳をとることも可能と聞いているが、親戚からはあまり良い心象がないため手帳の取得はせず、通院することで抑えている。現在、生活保護の医療扶助を利用している。

<本人の望みや不安>

以前していた内装関係の仕事は、お金の流れなどが全部分かるのでしたくない。今は、誰でもできる清掃などの仕事を希望している。そして将来的には、一時的に光ファイバーの設置事業に人を派遣する会社をやろうと考えている。それでお金を貯めて、看護、介護業界に外国人を派遣する事業をやりたい。「社長になりたい」という希望を持っている。

また、現在彼女はいない。守るものがないと何もできなくて、一人だとどうでもいってしまう。前向きに、

人間らしくやっていきたいと思っている。失業率の高さが問題になっているが、今の自分の現状を、そうした経済問題のせいにはしたくない。

(注) 自立支援センターを活用したホームレスの就労に向けた支援には、ケースレポート大阪5～23のように、アセスメント型の自立支援センターと就労支援型の自立支援センターを連携させながら実施している自治体と、これらの機能を一つの自立支援センターの中で一体的に実施している自治体がある。後者をひとまず統合型の自立支援センターと呼び、前者と区別しておきたい。

ケースレポート24～38は、この統合型の自立支援センターである。ここでは、入所後にまずアセスメントと臨時就労(就労機会提供事業)が1カ月行われ、その後ここに居住しながら就職活動そして一定期間の就業活動を行う。アパート自立が可能となった段階で、ここを退所する。この場合、滞在期間は、原則6カ月である。

調査番号：大阪25

調査日：9月4日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：20歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：製造業、生産職、アルバイト ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 製粉会社・生産(正社員、2カ月) 菓子メーカー・生産(アルバイト、10カ月)
電気機器製造会社・検査(登録型派遣、半年) スーパー・店員(アルバイト、4～5カ月) 現在、自立支援センター入所中(2カ月) (入所後)臨時就労1カ月を経てゴミ袋製造会社・生産(アルバイト、1カ月弱)

<仕事に就くまで>

1988年、大阪府生まれ。

両親、弟、および自分の4人家族。

中学時代は真面目に学校に通っており、授業内容も苦手科目以外はよくわかるほうだった。しかし進路指導などはあまり適切でなく、教師は授業を教えるだけは教える、受験は本人次第という姿勢だった。信頼できる先生などはあまりいなかった。

その当時、両親は自営業(現在は廃業)で共働きしており、父親は看板を販売する仕事、母親はその看板を作る仕事をしていて。生活はやや苦しく、ガスなどが止められたこともあった。

高校時代は、朝起きた時に遅刻だと思えばそのままサがるということも多かったが、出席日数が危くなるほどではなかった。大学へ進学するつもりだったが、やはり先に就職して手に職をつけようと思うようになった。高校では進路指導がしっかりしており、高校あての求人から仕事を見つけて就職した。仕事は実家から近いことを考えて探していた。

<初職から現在までの流れ>

18歳(2007年)に高校卒業し、大阪府下にある製粉会社の工場に正社員として就職する。月収は社会保障費など引かれて手取り11万円だった。当時は実家住まいで、手取り11万円のうち「最低でも8万円ぐらい入れよう」と思って、自分で決めた8万円を家に入れていた(そのため、貯金はほとんどなかった)。工場での仕事は製造ラインの機械管理等だったが、単純作業なのでこの作業はきつかった。収入が少ないと思い、2カ月働いて辞めた。退職金はなかった。

次は菓子メーカーの工場、アルバイトとして働いた。時給は750円だった。10カ月ほど働いたが時給が安いので辞めた。

19歳(2008年)の時、派遣会社に登録し、中小の電気機器メーカーに派遣された。スポット派遣ではなく応募時に当該電気機器メーカーに派遣されることを知って応募したものの。仕事はインターネット関連の部品を検品する仕事だった。時給は950円で、1日に7～8時間働いた。社会保険はなかった。半年の契約が終わり、契約は更新しなかった。

同年、派遣会社の契約が切れる時に、友人からスーパーのアルバイトを手伝ってほしいと頼まれた。人が足りないのて来てほしいと友人に紹介されたもので、すぐに決まった。

その友人とは高校からの友人で、交友関係が続いており、仕事を探す際にはこのように友人に紹介してもらったり相談に乗ってもらったりすることが多かった。一方で、親に相談することはなかった。親は「自分の人生だから自分で決めたい」という考え方であり、あまり関与はしなかった。

スーパーでは青果部門で働いた。野菜などを陳列したりする仕事で時給は750円、1日5～6時間の勤務だった。月収は5～6万円程度。社会保険はなかった。しかしやはり時給が安かったことや、やりがいあまりなかったこと、家庭の問題で家を出なければいけなくなったこともあり、4～5カ月働いて辞めた。

20歳（2009年）実家を出た。実家を出る直前に家業が廃業となり、1戸建てからマンションに移ることとなった。この時期に電気やガスなどのライフラインを止められることもあった。

実家を出ると、友人と夜に遊び歩く生活がしばらく続いた。その間は祖父の家に荷物を置かせてもらい、着替えなどしていた。路上で生活した経験はない。保険証などなかったが、病気をして困ったことは特になかった。

生活保護の制度は知っていたので、市役所に相談しに行ったが、年齢的に受給できないのでこの統合型の自立支援センターを紹介され、2009年7月10日にこのセンターへ入所した。現在は8月半ば頃から始めたゴミ袋製造工場でのアルバイトをしている。ハローワークでの紹介で見つかった仕事で、自立支援センターから自転車まで10分ほどの場所である。時給は900円で1日12時間（8～20時）土日以外毎日働いている。（執筆者注：調査時点では勤め始めてまだ3週間だったので、これを1カ月に換算すると月収は20万円弱か）

<現在の生活状況や本人の思いなど>

2週間ほど前に親から携帯電話に連絡があった。「今

に住んでいるから」と言われ、顔を出しに行った。親からは顔を見て「生きとったから安心した」と言われたため、親もやはり心配していたことがわかった。しかし現在、両親は新しく事業を始める準備中であり、実家に戻れる状況ではなく、また自分自身も戻るとも思わない。両親はまだ40歳台なので、面倒を見なければならぬという心配はない。しかし仕事を辞めてから荷物を置かせてもらっていた祖父には、自立支援センターにいることは伝えていない。

現在健康状態は良好。将来的には別の仕事を探したいが、現在は仕事も雇用形態や勤務時間にこだわりはなく、アルバイトでもいいので仕事をしてお金を貯めたいと考えている。年齢が若いこともあってか、自立支援センターに入るまでは仕事を見つけるのに時間がかかったことはあまりない。1カ月程度で次の仕事に就いている。

社会保険については、健康保険や労働災害保険の内容は大体わかるが、雇用保険や国民年金などはあまりよくわからない。年金を納めたのは、高校卒業後に工場で正社員として働いていた時だけである。現在は健康保険や年金保険に加入しているかどうかはわからない。

<不安や社会への要望>

将来にはやや不安を感じているが、現在の状況が安定していないので、「将来よりも今のことで精一杯」である。また2008年（19歳）秋以降、社会の状況が悪化した意識があった。特に2009年（20歳）に入ってから、実家の仕事も減ってきていると感じることがあった。

貧しいことに関しては、自分と社会の両方に責任があると感じている。社会の問題を政府の責任として任せるのは納得できないとも考えている。

政府や行政に対しては、具体的には最低賃金などの労働条件の引き上げや、派遣労働に対する規制の強化、再就職支援の充実、生活保障の充実を望んでいる。

調査番号：大阪26

調査日：9月4日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：38歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高等専修学校卒業
- 就労の有無：求職中 ■直前職：建設業、事務職、アルバイト ■直近の収入：勤労収入なし
- 家計における役割：家計補助者 ■家族構成：同居する親1人 ■住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高等専修学校卒業 縫製会社・生産（正社員、4年） クリーニング会社、作業員（正社員、7年） 腎臓疾患のため退職（その後、人工透析・移植手術を受ける） 生活保護受給（約6年、この間土木会社で週1～2回程度体調の良いときにアルバイト） 生活保護廃止（腎臓移植終了後） 府営住宅強制退去 現在、自立支援センター入所中（2カ月）/求職中

<仕事に就くまで>

1970年9月、大阪府生まれ。

父親が31歳のときの子どもで、一人っ子である。母親は13歳（中学校1年生）のときに医療ミスで亡くなった（そのため医者嫌いである）。以後、父親と二人暮らし。

中学生の頃、勉強は嫌いだったが、学校は休むことなく、楽しく通っていた。当時の友人との関係は現在でも続いている。「ヤンキー」の友人が多く「結束はかたい」。

中学校3年生（15歳、1986年）の頃、父親は大手重工業メーカーの下請工場での正社員として働き、玉掛け、荷物の積み下ろし等の業務を行っていた。

当時の住居は、風呂なしの文化住宅（賃貸）を二部屋借り、大家さんも了解のうえ、2つの部屋を「ぶち抜き」、改装して暮らしていた。暮らしぶりは、「悪くなくまあまあだった」。

中学卒業後（15歳、1986年）は、高等学校の卒業資格が取れる洋裁の専門学校（高等専修学校）に進学した。「頭が悪かったんで他に入れる学校がなく」推薦で入学した。専門学校は4年制で、最初の3年間は高等学校の授業で高校課程、4年目の1年間は専門課程を学んだ。当時、その学校は開校したばかりで、自分は2期生として入学した。1学年には4クラスあり、3クラスは服飾関係の女子ばかりのクラス、後の1クラスはコンピューター関係でほとんどが男子で数名女子が在籍していた。

専門学校4年生（最終年次、18歳、1989年）のとき、父親が当時勤めていた重工業メーカーの下請会社が神戸の会社と合併することになり、リストラされ失業した。

同じ頃、父親と住んでいた文化住宅が、立て替えて新しく分譲マンションにするという話がもちあがった。そのため府営住宅への転居を考えたが、住んでいた市には府営住宅が少なく空きがなかった。父親の知り合いを通じて別の市の府営住宅に「優先」して入居させてもらえることになった。おそらく当時、父親が失業中（失業手当を受給中）であったため、入居を優先してもらえたのではないと思う。

父親の収入が安定していなかったため、学費は自分でアルバイトをして払い、高等専修学校を卒業した。

その後父親は、ボイラーの会社に勤め始めたが、工場内には煙などが蔓延し体にあまりよくない仕事だったため、3カ月で辞めた。

ボイラー会社退職後、父親は自転車の工場に勤め始めた。父親はこの工場に60歳（1999年）まで勤めた。退職後1年間は失業手当をもらい、61歳（2000年）より年金受給を開始した。家の中の家事は、父親がすべて行っていた。それは現在でも続いている。

<初職からの経験>

19歳（1990年）専門学校を卒業して大阪府内にある縫製会社に正社員として勤めた。仕事内容は、ミシン掛け、洋服の型紙の裁断、仕分け、検品などであった。

22歳（1993年）のときに、職場に「そりの合わない」女性の職員がやってきて、一緒に仕事するのが嫌になり「もういいかな」と思い、辞めてしまった。

辞めてからしばらくは、失業手当を受給した。

23歳（1994年）のとき、家の近くにあるクリーニング工場に就職した。正社員として就職し、社会保険もついていた。仕事内容は、アイロンがけ、仕上がった商品の折りたたみ、各店舗への仕分けなどであった。

30歳（2001年）のときに、突然病気になった。その前から咳がとまらないなどの症状が続き、風邪かと思っていたが、倒れるまで医者に行かなかった。職場で急に倒れ、救急車で病院に運ばれ即入院となった。1日遅かったら命の危険があったと言われた。病気は腎不全であった。入院してまる1日は意識がなく、意識が戻ったときにパニックを起こすことを防ぐために個室に入っていた。入院中に医師から、治療方法は腎臓移植か人工透析しかないと言われた。治療のことは退院してから、もう一度考えることにし、勤めていたクリーニング工場は、約7年勤めたが、職場に迷

惑がかかると思い退職した。その後、失業手当を受給した。

自分が病気になる以前から、住んでいた府営住宅の家賃は滞納が続いていた。

府営住宅の家賃は、前年度の所得により家賃決定される仕組みとなっており、父親と二人で働いていたときは約9万円（おおよそ1999年ぐらいまで）、父親が定年となり父親の年金収入と自分の収入のときは約3万円だった（おおよそ2000年以降）。

また、この頃、自己破産をした。その際、府営住宅の家賃も一緒に自己破産に含めるかという話があった。しかし、友人から紹介してもらった弁護士と相談したところ、「家賃を含めて自己破産してしまうと、住んでいる住宅に継続して住むことができなくなる（当時、自分自身でも府営住宅の担当者にも確認した）。次の住居に移る資金（敷金・礼金）があるならそれでもいいが、家がなくなるから、自己破産に家賃を含めるのはやめたほうがいい」と言われた。それに従い家賃を含めずに自己破産した。

家賃の分割返済の話をまとめるために、倒れる直前（30歳、2001年）に裁判所に出向く予定を立てていたが、その裁判所の予定日にちょうど入院してしまい、結局行けずじまいだった。入院中に病院から、事情を説明しようと裁判所の担当者に電話をかけた。はじめは直接話しても信用してもらえず、医師と看護師に電話を代わって説明してもらい、ようやく納得してもらえた。その結果、治療が落ち着いてから、改めて分割返済の話をすることになった。

退院後、滞納分の返済計画を組み直してもらうことになった。また、退院後は、自分と父親の2人世帯として生活保護を受給することになった。父親は61歳（2000年）から年金の受給を開始しており、年金額は2カ月合算で23万円だった。世帯の生活保護の最低生活費は17～18万円となり、父親の年金が控除されたのちの保護費の支給は7～8万円であった。

保護受給後の家賃は住宅扶助（約3万円）で支払われたが、家賃の滞納額は保護費とは別で支払わねばならなかった。年金や保護費以外の収入があるわけではなかったため、そのまま滞納を引きずることになった。

生活保護のケースワーカーは、家賃の分割返済の件について認識していたものの、「そこまでは（面倒を）みることができない」と言われ、それについての助言・指導はなく、「がんばって払っていくように」という程度だった。

最初の入院以降、しばらくは人工透析の治療を行っていた。透析の治療には、月・水・金の1日おきに行った。1回の透析は約3時間かかり、その帰りは自分ひとりでは帰れないほど、からだがだるく、友人に車で迎えに来てもらったりしていた。透析を行った次の日も起きることができないことが多かった。土日は透析がなかったので、返済のために「家の中でできる内職をすることも考えた」が、実際には体がだるくて起きられない状態だったため仕事どころではなかった。

分割返済になった滞納家賃の支払いは、月約1万円であった。返済計画が始まってから半年ぐらいは、がんばって返していたが、次第に追いつかなくなった。

体調が少し落ち着きはじめた頃に、そんな事情を知っている友人（小・中の友人）からの依頼で、体調の良いときのみ、週1～2回（インシュリンの投与のない土日）、土木会社の事務の手伝い（アルバイト）をした。収入は月3万円程度で、福祉事務所には伝えていた。滞納している家

賃の返済にあてようと思った。この仕事は後に自立支援センターに入所する1カ月くらい前まで続けた。

32歳(2003年)頃、家賃を一括で全額支払うようにという督促状がきた。あわてて父親と二人で府に状況を説明しに行った。「いきなり一括支払いは無理だし、生活保護を受けている」ことを告げたところ、担当の職員は、「督促状は出したけれども、もう少し猶予を与えるのでがんばって支払うように」と「取り下げ」てくれた。

同年、最初にかかった病院は、透析治療をやめることになったため、自宅から近いクリニックを紹介された。そのクリニックでは市内の大病院から来ていた医師(1カ月に2回)の検診を受けていた。

33歳(2004年)のときに、その医師から父親の体調が許せば、父親からの腎臓移植が可能だと移植の話をもちかけられた。

その後、父親からの移植にむけて治療を受けていたが、移植の準備のための免疫抑制剤が適応せず、2度ほど倒れたりした。移植のために自分に適応する抑制剤を探したり、身体に抑制剤を慣らすために時間がかかった。その間の治療は透析でつないだ。結局、移植の話が出てから移植手術までは3年経ったが、父親から腎臓移植を受けることができた。

2007年6月(36歳)に手術を受け、7月に退院した。この間の医療費は医療扶助より支給された(現在は、抑制剤の影響でインシュリンを投与している。そのため低血糖には注意が必要である)。

また、腎臓移植する直前に、医師にすすめられ障害者手帳の申請をした。その理由は、移植したら一生必要になる免疫抑制剤が保険外適応であるため(1回約10万円かかる)生活保護が廃止になった場合に手帳を保持していると支払いが免除になるからであった。もうひとつの理由は、腎臓の病気はいつ再び悪くなって透析を受けるかもしれないからであった。

申請により障害者手帳1級を得られたが、障害者年金は受給していない。生活保護受給中だったが、受給前の働いていた期間に国民年金の保険料が払ってなかったため、障害基礎年金の受給資格を満たしていないためである。

なお、生活保護受給中の国民年金の保険料は法定免除で、後に生活保護が切られてからは免除申請し、全額免除となっている。

2007年8月(36歳)腎臓移植後、日常生活が可能になり体調が良くなってきたために、「もう働けるととられた(みなされた)」ようで生活保護が廃止となった。そのため、父親の老齢年金のみで生活することになった。これ以降、自立支援センター入所まで、生活保護は受給していない。何度か、生活が立ち行かなくなり、生活保護を役所にお願いしに行ったものの、申請を受理されなかった。内臓疾患のため見た目は健康そうに見えるのと、年齢的に就労可能と判断されたと思う。障害者手帳を持っていることを伝えても無理だった。それ以降も引き続き、友人の土木会社での事務のアルバイトで、なんとか家賃を返そうとしたものの、一向に滞納額は減らなかった。月々送付されてきたのはいつもの納付書と分割の納付書のみであった。

ところが2009年1月(38歳)になって、「知事が代わってすぐ」に、いきなり一括で全額返済を要求された。請求額は約100万円になっていた。

同月、裁判所に行き、代理人の弁護士と話をしたが、金

額も相当多額になっており、分割返済への組み直しも一度行っているのに、再度の支払いの猶予は難しいとのことだった。代理人の弁護士からは、「仕事もしていないから、家はすぐに追い出すことはしないので、こっち(家賃)は払わなくていいので、お金をためて新しい家を探すように。世帯員が傷病者と高齢者なので、可能な限り時期を延ばせるようにはする」と言われた。

同月以降、数え切れないくらい、「府営住宅を出されそうなのでなんとかならないか」と区役所に相談に行った。通院時は病院が区役所の隣なので必ず立ち寄り、1週間に2~3回相談に行った。

区役所では生活保護の相談もするが、当座のお金(1万円、5千円)を貸してくれるだけであった。知人から、生活保護を受給している人は、新しい住宅に引越すための敷金や支度金が支給されるという話を聞いたので、生活保護の相談員に尋ねてみると、その時点で生活保護を受給している人だったら可能だが、生活保護を受けていない人にはそれは出せないと言われた。

これまで、家賃の支払いのためにヤミ金に借金をしたことがあった。携帯電話一本で銀行の口座に振り込みしてもらったものだった。現在は携帯電話も繋がっておらず、連絡がつかないので、貸し手は「逃げた」と思っているのではないかと。借りた額は2~3万円と少額なので、追いかけてこない。

それとは別に、自立支援センターに入所する直前に父親の年金を担保にヤミ金からも借金をした。借りるときにヤミ金に、通帳とキャッシュカードを預け、暗証番号を教えなければならなかった。それ以上悪用されないように、入所してからは銀行に通帳とキャッシュカードの紛失届を出して、勝手に出金されないようにしている。

2009年7月(38歳)に裁判所からの最終の強制退去の通知が来た。それを持って区役所に相談に行ったが、「その通知が来ていたらもう無理(対処の仕様が無い)」と言われた。

区役所は、府営住宅を追い出されても、自立支援センターがあるから「行くところはある」という言い方であった。

そのため、自立支援センターに入所するつもりで同月、区役所に行った。

巡回相談員とはじめて会ったのは7月6日の夜(入所の際)だった。夕方にセンターの巡回の職員が来るのを待ち、同日の21時頃、自立支援センターに移動し、そのまま入所した。

この統合型の自立支援センターの入所に際して、荷物をできるだけかばんにつめ、カート、リュック、斜めがけの鞆3つの荷物を持って来た。

その他の府営住宅にある家財道具は、部屋に置いたまま出てきた。

本来であればこれらの家財道具は処分されるはずであるが、代理人の弁護士と執行官が「いい人」で、事情を理解したうえで、期限を延長して荷物をそのままおいてくれている。自立支援センターを退所し次に行くとき、新たに家財道具を買わなくてもいいようにとの配慮である。冷蔵庫などもまだ新しく、ありがたい。

<自立支援センターでの生活>

最初は、男性ばかりかと思いきや不安があった。しかし同世代の人も頻繁に入所しており、話しやすい人ができたため

気分的に楽になってきた。現在、父親と同室で夫婦用の二人部屋を使用している。

現在は自分で近くのハローワークに出向いて仕事を探すと同時に、ハローワークから自立支援センターに来る職員（月・水・木）の情報で仕事を探している。現在は病院のベッドメイキング、ビル清掃などを申し込んでいる。通院している病院周辺での仕事を探している。履歴書の住所は自立支援センターにし、求職活動のための交通費はセンターから出ている。

病院へは月1回通院している。

今後はなんとか仕事を見つけ、父親と二人で新しい家で暮らしたいと思っている。父親も年齢的には難しいが、簡単な仕事でも見つければいいと思っている。

<友人・家族との関係>

アルバイトを頼んでくれた土木会社を営む友人とは連絡をしている。この友人だけには自立支援センターに入所していることも伝えている。

他に連絡している他の友人は5～6人いるが、自立支援センターに入所していることは伝えていない。

結婚はしたことがない。しようと思ったこともない。付き合ったことはあるが、お互いタイミングが悪かった。父親（現在70歳）は、臓器提供の手術後、特に体調の変化や病気はない。父親はタバコもお酒も飲まない。

調査番号：大阪27

調査日：9月4日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：22歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：製造業、生産職、パート ■直近の収入：月6～7万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 無職（半年） 空調設備会社・現業（アルバイト、1年数カ月） カラオケ店・店員（アルバイト、3カ月） 家族の「解散」/求職活動（4カ月） 現在、自立支援センター入所中（入所後）ビニール製造会社・生産（パート）

<仕事に就くまで～高校時代>

1987年、大阪府生まれ。

両親と2つ上の姉の4人家族だった。小・中学校の時は勉強はおもしろくなかったのであまりしなかったが、成績は中程度だった。親からは小学校の時は勉強しろとも言われたが、中学からは特に注意されなくなった。遅刻や欠席などは特にしなかった。

2002年（15歳）高校は地元の公立工業高校に進学。2年次までは全日制（昼間部）に通っていたが、急に同級生が子どもっぽく見えて、雰囲気に合わなくなったと思い、一度中退のかたちを取り、2003年（16歳）同校の定時制（夜間部）に入学し直した。入り直す際の試験や面接はなかった。夜間では友人らと概ね楽しく過ごした。学校は昼間部も合わせて電気科に通い電気工事やパソコンを習い、2006年（19歳）3年で卒業した。

高校昼間部在学中の1年生から2年生（15～16歳）の時、回転寿司のチェーン店でアルバイトをした。週6～7日とほぼ毎日、平日は17時から22時まで、休日は9時から22時までアルバイトした。時給は750円で1カ月16万円ほど稼いだ。定時制に移って（16歳）からは9時から15時までアルバイトをし、その後学校に17時から21時まで通った。収入は一部遊びにも使ったがあまり使うこともなく、貯金もした。仕事内容はシャリにネタを乗せて形を整える仕事で、事業所に社員は1人で他はアルバイトとパートだけだった。

定時制高校2年生（17歳、2004年）の途中から、知り合いに紹介してもらったパチンコ屋で働くようになった（高校卒業まで継続）。時給もよく長時間働けるうえ、休みも

取りやすかったため、寿司屋からアルバイトを替えた。時給は1,100円で9時半から16時半まで働いた。授業開始時間までギリギリだったが学校と近かったので問題はなかった。週4～5日働いて月18～20万円になった。アルバイトのため社会保険、雇用保険などはなかった。

生活はかなりハードだったが、家で「ボーっとしているよりは（良い）」と思いアルバイトしていた。高校卒業時には貯金は100万円ほど貯まった。

<初職からの経験>

19歳（2006年）で工業高校を卒業してからすぐには就職せず、高校の時の友人たちと半年間ほど遊んでいた。地元の青年団に所属しており9～10月の地元の秋祭りに向け、7月頃から毎日地元の友人たちと毎日練習していた。バイクが趣味で、原付きの免許を高校1年生の時に取得したが今は失効している。普通免許は持っていない。

20歳前（2007年）に埼玉の叔父に誘われ、空調設備会社でアルバイトとして働くことになり、埼玉に行った。その時は昔叔父が暮らしていた一軒屋にひとりで、家賃不要で住まわせてもらっていた。仕事は企業や一般家庭のエアコンの取り付けや機械の図面引きなどであった。日給制で1日8,000円、原則8時から17時までであったが、現場が遠いと早朝に出て夜中まで働くようなこともあり、勤務時間は日によってバラバラだったが17時で終わることはほぼなく、勤務時間は週で50時間は超えていた。会社の従業員は、自分以外は全て正社員で人数は15人ほどだが全国各地で仕事をしていた。残業代は支給されており、社会保険も加入し

ていた。収入は手取りで月18～20万円、年2回のボーナスもあったことや家賃がいらなかったことで暮らしは楽だった。仕事では高校での知識も役に立ち、仕事は要領よく覚えられた。この仕事は2008年12月（21歳）まで続けた。

比較的安定した生活を送っていたが、2008年12月（21歳）父親の体調が悪くなり地元に戻ってきてくれと言われたため、仕事を辞め大阪に戻った。父親は2008年の秋頃からうつ病にかかり医者にも入院を勧められたが父親は拒否していた（現在は回復している）。大阪に戻った時、父親はそれまで働いていたトラック運送の仕事を辞めており、自分が家計を支えるために深夜のカラオケ店でアルバイトをした。収入は月12万円ほどだった。母親は家で父親の面倒を見なければならず、母親の稼ぎはわずかだった。

2009年春、大阪に戻って2～3カ月で両親の仲が急速に悪化し、突然離婚した。父親が家族の「解散」宣言をし、家族は「全員バラバラに住むことになった」。もとの実家の一軒家には父親が住み続け、同居は断られた。母親は埼玉の叔父のところに住むことになり、母親も「第二の人生を歩む」と言い、こちらも同居させてくれなかった。2つ年上の姉も同様に放り出される状況になったが、結婚予定の婚約者と同居することになった（結婚は2009年10月の予定）。

その後大阪府内で家賃38,000円のワンルームマンションに住み始めた。大阪に戻ってから働いていたカラオケ屋のアルバイトは引っ越してすぐに辞めてしまった。次の仕事を求人情報誌から探していたが、10社以上応募するが全て断られた。その当時、自分もうつ気味になっていたため、それが面接で落ちた理由ではないかと思っている。仕事を探すもなかなか決まらず家賃が払えなくなり家賃を3カ月分滞納したため、2009年7月30日に退去させられた。

<現在の生活状況>

マンションを退去する前、不動産屋は父親あてに家賃滞納の連絡をしたため、父親からは、「福祉事務所に行け」と言われた。また、両親から、「自分のところには来るな」と言われた。福祉事務所に行き、この自立支援センターを紹介され、その日のうちに入所が決まった。家賃滞納分は弁護士を通して処理する予定である。

自立支援センターに来所して2週間ほどで、現在のパートの仕事が見つかった。ビニール製品の工場で、はじめの頃の勤務時間は8時から17時までで、残業が3時間ほどあったが、最近は人員が増えたため昼までで仕事が終わるようになり、週20時間ほどの勤務になっている。賃金コストの削減のためではないかと思っており、現在の仕事ではお金が貯められないため次の仕事を探している。

<本人の希望や不安>

希望する職種は、資格などないため特にはなく、時給が800円以上で勤務時間も8時から17時で月に16～17万円稼げる仕事であれば、正社員などのこだわりはない。勤務地はなるべく近場がいいが府外でも構わないと思っている。

高校時代などの友人にも連絡していない。友人関係でも地元へのこだわりもない。家族関係については父親や母親との同居も考えておらず、今後、家族からの経済的な援助は期待できない。父親とは入所以来連絡もとっていないが、母、姉とは現在も連絡は取り続けている。父親に至っては、こちらから連絡する気はないし相手からの連絡もないだろう。

調査番号：大阪28

調査日：9月4日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：42歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：就労中
- 現職：臨時就労（就労機会提供事業）清掃関係職、就労体験（臨時職員扱い） ■直近の収入：月10～15万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 食品加工会社・生産（アルバイト、1年） アルバイトとサーフィンの繰り返し（12年、各種工場を20回近く転職） 土木会社・作業員（正社員、1年） 造園会社・造園師（正社員、2年半） プラスチック製品製造会社・生産（アルバイト半年、正社員9年） 建設会社の飯場・建設作業員（日雇い、8カ月） 現在、自立支援センター入所中（現在、臨時就労中）

<仕事に就くまで>

1967年、大阪府生まれ。

9人兄弟の末っ子として生まれ、両親と11人家族であった。父親は漁師であった。

中学校3年生の頃、父親はすでに体をこわしており、働けなくなっていた。母親はタオルの箱詰めなどの内職をしていたが、父親が働けなかったので生活はかなり苦しかった。夫婦仲も悪かった。自分は働かない父親が嫌いだった（父親は19歳の時（1986年）母親は41歳の時（2008年）に亡くなった）。姉たちにかわいがられて育った。

学校は無遅刻無欠席だったが、授業中は寝ていた。成績は体育と社会科以外はよくなかった。地元の友人と中学校1年生からサーフィンを始め、その後もずっとプロサーファーになりたいと思っていた。

中学卒業後高校に進学したが、サーフィンが好きで、高校1年生（16歳、1983年）の時に中退した。

<初職からの経験>

16歳（1983年）高校を中退したことをきっかけに兄から「働くように」言われ、兄が働いていた地元の湾岸地域の

コンビナートにある食品加工会社の工場を紹介され、アルバイトとして就職し、1年ほど働いた。

中学校1年生の頃から友人に誘われて始めたサーフィンが好きだったこともあり、高校を中退して以降は、アルバイトでお金を貯めてはサーフィンに行くという生活を繰り返すようになった。その生活は、28歳(1995年)まで12年間続いた。サーフィンでは、近くは和歌山や四国、東は静岡まで行ったこともある。その期間は、地場産業であるタオル製造会社のプリント工場、八百屋、コンビナートにあるいろんな工場で、様々なアルバイトをした。転職の回数は、20回近くになるだろう。どの仕事も、兄弟姉妹や知人の“つて”で紹介してもらったものである。「正社員で働かないか」と誘われたこともあったが、「サーフィンがあるのですぐ辞めて迷惑を掛けるから」と言って、アルバイトで働き続けた。ずっとプロサーファーになりたいという思いがあったが、自分よりうまい人を見て、プロになるのは断念した。こうして、サーフィンとアルバイトの繰り返しの生活をやめた。

28歳(1995年)の時、付き合っていた彼女の兄が土木業の小さな会社を立ち上げ、正社員として働かないかと誘われたため、同社に正社員として入社した。その会社はしばらくして公園の草刈りなどの仕事が増えたことにともない、造園業に転業した。

そして、同年にその彼女と結婚し、これを機に妻の実家であった1戸建ての家に住むようになった。義兄の造園業の会社では(会社が土木業だった時代も含めて)正社員として3年半働いた。当時、日当9,000円で仕事も忙しく、ずっと続けるつもりだった。各種保険にも加入していた。

同年、第1子が誕生し、31歳(1998年)の時に第2子が誕生した。上の子どもが幼稚園に通う年齢になった頃、その子どもが「雨でお父ちゃんが仕事に行かないんやったら、僕も幼稚園に行かへん」と言い出した。造園業は雨が降ると休みになるが、それを子どもがまねするようになったため、これでは困ると思い、子どものことを考えて、32歳(1999年)の時、不規則な働き方をする造園会社を辞めた。

同年、造園会社退職後、新聞の折り込み広告に入っていた求人チラシを見て、個人経営でやっているプラスチック製品製造工場の仕事を見つけて、転職した。この会社では、最初はアルバイトだったが、半年後に正社員となり、1年でプラスチック成型の加工ラインの主任になった。本社と工場があったが、あわせて20人に満たない小規模な会社だった。工場は昼夜2交替制の勤務であったが、自分は昼勤務で、朝6時から14時まで休憩なしで働いた。休憩を取らせてくれなかったのは、今から思えば労働基準法違反だったと思う。しかし、昼過ぎには仕事が終わったので、学校から帰ってきた子どもたちの面倒を見るには都合がよかった。

2006年(39歳)になって、妻から様々な理由を並べられて、離婚を迫られた。自分では妻が持ち出したどの理由も離婚までつながるようなものではないと思っていたので、なぜ離婚話を持ち出したのかわからなかった。しかし、結局は妻に押し切られる形で離婚してしまった。ずっと後になって、子どもから聞いてわかったことだが、妻が離婚したかった理由は妻の浮気だった。今も、自分に落ち度はないと思っている。

2006年11月に離婚してからは、同じ市内の賃貸アパートに単身で転居した。子どもの面倒をみることもなくなったので、残業もして、1日12時間働くこともあった。プラス

チック製品製造のこの会社は、厚生年金・健康保険は掛けてくれたが、雇用保険は掛けられていなかった。会社側は、「厚生年金は仕方なく掛けてやっているという態度で、従業員に対して全体的にひどい扱いをしていたと思う」。自分はライン管理の主任をしていたため、1万円の手当が付いていたが、社長が息子に交代したことで、5,000円に下げられるということもあった。

また、離婚したことを契機に、会社の社長、その奥さんそして工場長の奥さんをはじめ職場の人々が自分のことを悪く言うようになって、「ほんまにもうこれはいびり(...)でしたわ」。2年弱ずっと我慢したが、ついに工場の主任も降ろされ、もうどうにも我慢できなくなって、2008年9月中旬(41歳)「辞めてやる」と言って、退職した。退職金はなかったし、雇用保険は掛けてくれなかったので失業手当はもちろん出なかった。

しかも、離婚・退職に加えて、その直後母親が亡くなったことも重なって、本当に精神的にまいってしまって、「死のうかな」とまで思った。しかし、子どものことを考えたら、死ねなかった。

仕事を失くしたからといって、いつまでも何もしないでいるわけにはいかなかったので、同年11月初めに、知人のある社長に頼んで、その社長が経営する建設人夫出し業者の飯場に入った。飯場は、今まで暮らしていた市の近くにあった。

2009年1月まではそこそこ仕事があったが、不況の影響もあり2月には仕事は2日に1回程度になった。飯場では日当8,500円だったが、毎日寮費が3,500円かかった。仕事が急激に減った結果、収入より寮費の借金が膨らむ一方という状況になった。社会保険などはなかった。相当のピンハネがあるとも聞いていた。飯場での仕事は通いの古参のメンバーが重視され、入って間もない自分にはなかなか仕事が回ってこなかった。2月以降は収入が少なかったため、食事を我慢したり、携帯電話の利用を止められたり、ローンや借金が払えなかったりした。飯場には2度と行きたくないと思っている。

このままではますます借金が膨らむだけだと思い、飯場の生活から逃れたいと思って、あちこちのハローワークで職探しを行ったが、うまく職を見つけることができなかった。

同年6月中旬(42歳)に、町役場に相談に行き、「生活保護を受給しながら住居を見つけ、他の仕事に就きたい」との要望を伝えた。すると、「飯場に住んでいる場合は定まった住所がないということになるので、すぐに生活保護を適用することはできない。誰か知人にお金を借りてアパートを借りた上で、申請してくれば生活保護を適用することはできる」と言ってくれた。しかし、自分は、「知人に迷惑を掛けたくないのもそれはできない」と言ったところ、その代わりということで、自立支援センターを紹介してくれた。「少しの期間考えさせてくれ」と返事を保留したが、やはり「ここからやり直そう」と一念発起して入所することにした。飯場を出てセンターに入所したのは、2009年7月8日であった。

<現在の生活状況>

自立支援センターから紹介されて、民間の清掃会社のもので「就労体験」「就労訓練」として公園清掃の仕事に就いている。まだ20日程度しか働いていない。1日7時間、

週3日で1カ月平均13日の就労である。収入は月に10~15万円程度である。この仕事をしながら、ハローワークやジョブカフェなどで求職活動を行い、加えて、この自立支援センターが行っている職業相談にも参加している。しかし、求人数が少ないことに加え、どうも42歳という年齢が中途半端で、高齢でもないし若年でもないことから、仕事がなかなか見つからない。また、学歴は不問のところが多いとはいえ、高校中退であることも不利に作用していると感じている。

現在、相談できる相手は一つ上の姉だけである。センターに入所していることも姉だけにしか伝えていないが、他の兄弟にも伝わっているだろう。地元の友人からどこにいるのかと兄弟等親族に問い合わせもあるようだが、センターにいることは内緒にしてもらっている。そのため友人との付き合いも控えている状況である。

国民健康保険、国民年金に加入しているが、いずれも保

険料を免除されている。

<本人の望みや不安>

現状に不安を持っている。早く仕事を見つけたい。造園業、プラスチック製品製造工場など、経験を生かした仕事に就きたいが、仕事があれば何でもいい。ここで再起して仕事を見つけ、高校に入ったが自閉症である子どもの応援をしたい。子どものためを思ってやり直そうとセンターに入所を決意した。今は子どもに会いに行くこともできるし、電話でのやりとりもできる。ひとまず、この自立支援センターに来てよかったと考えている。

行政には何も期待していない。誰がやっても一緒だと思う。

また、造園業を続けていたら今のような状態にはなっていないかと思う。

調査番号：大阪29

調査日：9月4日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：31歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：和歌山県 ■学歴：高校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：飲食業、飲食関係職、アルバイト ■直近の収入：月約15万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 ソース製造会社・生産（正社員、1週間） 自動車部品販売会社・整備（正社員、1年半） 飲食店・店員など（アルバイト、数カ月） パチンコ店・店員（アルバイト、5年） 自動車部品メーカー・生産（登録型派遣、4年半） 建築会社の飯場・建設作業員（日雇い、約半年） 現在、自立支援センター入所中（1カ月）（入所後）飲食店・調理（アルバイト、1カ月）

<仕事に就くまで>

1978年、和歌山県生まれ。

父親とは小学校6年生のとき離別し、以後、祖母・母親・二つ上の姉と暮らした。姉は、あまり家にいなかった。母親のパート収入での生計で生活は苦しかった。

小・中学校、高校と成績は普通で毎日通学していた。塾等は通ったことがなく、家計のことを考えて高校を出たら就職すると決めていた。高校をきちんと卒業したことは今にしてみれば（就職にとって）良かったと思うが、高校は中学の進路指導により就職を目指すなら就職率が高いという理由で公立の全日制工業高校に進学。このときに、就職について、何がしたいのか、それならどのような進路に進むべきか教えて欲しかった。

高校では特に資格を取ることもなく、高校の進路指導では、自身の意志ではなく高校の就職率を上げるために決められたところへ就職した。きめ細かい進路指導はされておらず、ほとんどの生徒が就職だったため全員に目が行き届いていなかった。面談でも進路を早く決めるように迫られたりして、ゆっくりと考える時間がなかった。また、高校時代には特に免許を取る必要性も知らず何も取らなかったが、専門学校等で学んで、したい仕事を見つけて就職すべきだったと今は思う。親や家族には相談できなかった。生活するのに相当のお金が必要なことも知らなかった。

<初職からの経験>

高校卒業（19歳・1997年4月）と同時に和歌山県内のソース工場に正社員として就職した。しかし、給料は手取り10万円と安く、同僚が給料が安く生活するためにアルバイトをしていると聞き、自身のしたいことも異なったこともあり、1週間で辞めてしまった。

ソース工場を辞めてすぐ親に仕事を探すように言われていたことや、自分で仕事をしたかったこともあり、求職活動をした。求人誌で見つけた自動車部品販売会社に、正社員として就職（19歳・1997年）。仕事内容は車の整備だった。そこでは月15万円前後の収入があり、家に月2万円ぐらいつづ入れていた。約1年半働き、ボーナスも1回もなかったが、辞めてしまった。

車の免許がなかったので、皿洗いなどのアルバイトをしながら、車の免許を取った。車の免許は、免許停止措置を受けていた最中に（20歳）運転をしてつかまり、免許取消となって以降持っていない。健康保険は親の扶養に入っていた。国民年金は20歳を過ぎて最初の頃は自分で納めていた。

21歳（1999年）のときから5年間パチンコ屋でアルバイトをした。時給1,200円、週6日2交替制で、午後2時~午後10時の勤務で手取り22~23万円になった。このときも健康保険は親の扶養であったが、国民年金は未納であった。

国民年金の納付通知は来なかった。

26歳（2004年）のとき、求人誌で岡山県での自動車部品組立工場での登録型派遣の仕事を見つけて、仕事を始めた。半年か1年毎の更新で4年半勤めた。工場の寮に入り、大手自動車メーカーの車の部品組立の部署だった。この会社は、下請工場であったが、大手自動車メーカーの関連会社ではなかった。

週休2日だったが土曜日にも出勤したり夜勤をしたりで、手取りは22～25万円だった。ボーナスはなかった。社会保険はあった。雇用保険の有無はわからなかった（おそらく入っていた）。退職時に離職票などはもらわなかった。失業手当が出るのかどうかはもちろん、雇用保険制度自体もよく知らなかった。その会社自体はまだ良かったが、周りの人が「派遣」という雇用形態が不安で辞めていく人が多く、自分に仕事の負担がかかってきたので、2008年8月（30歳）のリーマンショック直前に辞めた。

その後、2008年9～10月の2カ月間、ハローワーク等で求職活動をしたが、次の仕事がなかなか見つからず気分が沈んだり、ゆううつな気持ちになった。このとき、決まった住居はなく、友人の家に泊めてもらったりした。またこの頃、和歌山でネットカフェに泊まったり、野宿経験もした。野宿は、河川敷など、あまり人がいない場所で寝た。人が多いと人の目が気になったりした。

30歳（2008年11月）のとき、大阪府内の建築現場の飯場に住み込み、日雇いで働くようになった。契約期間というものの特になく、日当7,500～8,500円程度で、そこから寮費1日3,500円を差し引かれ、手元に残るのは1日4,000円程度となった。社会保険は自分で国民健康保険の保険料を支払ったが、国民年金は支払えなかった。そこに半年ぐらいたが、まるまる仕事があったのは最初の1カ月程度で、全部合わせても2カ月しかなく、残り4カ月は仕事がぱったりなくなり、収入がないのに寮費の支払いをしなければならなくなった。

2009年7月（31歳）に生活できなくなり、大阪府内の市役所に相談したところ、自立支援センターを紹介された。

センターに入所（2009年8月）後、仕事を探すと、建築関係では仕事がなかったが、2009年8月に現在の飲食業の仕事がすぐ見つかった。就労して1カ月になる。週6日勤務で午後から11時間労働で月15万円になる。社会保険・雇用保険はなく、労災保険は不明である。国民年金は未払いとなっているが、収入が安定したら検討する。給料はタイムカード制によるが、自身の出勤（就労）時間数の計算と比較すると2万円くらい少なく、賃金の未払いがあると思うが、タイムカードのコピーがないため反証できない。仕事はきついが、最長3カ月の研修期間を終えると正社員への登用があるそうなので希望を持っている。正社員になれば基本給が20万円あると聞いている。将来のことを考えると、調理の経験があれば調理関係の仕事を探すときに有利になると聞いているし、景気が後退してもなくなる業界だと思うので、これからは飲食業で経験を積んでいきたいと考えている。今は、自分のしたい仕事など選んでいるときではないと思うので、飲食業でやっていきたいと思っている。しかし、あえて聞かれば、服飾業等にも興味はある。

<本人の考え>

仕事は6回替わっているが、親に相談はせずに、あるいはできずにいつも自分で決めてきた。これまでの転職の主な理由の多くは、人間関係がうまくいかないことであった。

自立支援センターの生活は禁酒となっているので、仕事が終わってからの飲み会は断ってきた。センター退所後のことを考えると、仕事を本格的に始めると交際費が必要になり生活は苦しくなっている。

センターの職員や入所者に仕事の相談もできるので助かっている。困ったことがあっても友人には相談しない。高校時代の友人などがいるが、相談の結果のよしあしで友人関係を損なってしまうこともあるので、話をする程度で、あてにはできない。

家族が岡山県に引っ越して以来6年間、家族とは音信不通となっており、その理由については話したくない。母親と姉と一緒に住んでいると思うが正確な状況はわからない。将来落ち着いたら連絡してみたいと思う。援助は望めない。

<将来について>

結婚はしたことがないし、現在交際相手もない。現在は安定した収入もなく必要性も感じないので結婚しようとは思わないが、仕事と収入が安定すれば将来は考えたい。

今「ホームレス」の人は、人の世話にはなりたくないというプライドがあるからホームレスをしていると思う。仕事に生きがいを持っている人たちなので、仕事の紹介があれば良いと思う。そうでなければ、行き場を失って、むなしくなるのではないか。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：29歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：緊急雇用対策事業、職種未回答、臨時職員 ■直近の収入：月約20万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 アルミサッシ製造会社・生産（正社員、7カ月） ゲームセンター・警備等のアルバイトを転々（4年） メッキ会社等での生産職を転々（正社員、2年） 鉄工所・生産（正社員、2年）
メッキ会社・生産（正社員、数カ月） 現在、自立支援センター入所中（入所後7カ月）（入所後）緊急雇用対策事業にて就労中（1カ月）

<仕事に就くまで>

1980年、大阪府生まれ。

家族は父、母、二つ上の姉、脳性麻痺の双子の兄があり、大阪府にある実家で暮らしてきた。

父親はトラックの運転手。正社員ではなくアルバイトである。自分が子どもの頃、父親はアルコール依存症で、精神科（アルコールの専門）クリニックに通院していた。

母親は、ずっと脳性麻痺の双子の兄のほうに手を取られていた。

また、自分は保育所ぐらいから母親からの虐待を受けていた。

10歳の頃、家庭の環境が悪くたびたび家出を繰り返すようになり、そのたびに父親から暴力を受けた。父親はアルコール依存症が治まってからは、自分に対する態度が厳しくなった。母親は兄にかかりっきりで、兄弟の中で唯一の女子である姉を可愛がっていた。「親としては、愛情を注いでくれたのだからうけど...」

思春期に、自分と兄・姉に対する親の態度の違いに葛藤した。

親との折り合いの難しさから、薬物（シンナー）に手を出してしまった。16、17歳のとき、薬物（シンナー）が見つかり、親にひっぱたかれた。

高校は定時制に通い、昼間はアルバイトをしながら卒業した。

<初職からの経験>

19歳（1999年）高校卒業後は、学校から推薦を受けたアルミサッシ枠組み工場に正社員として就職した。給料は額面15～16万円で、手取りにすると11～13万円だった。雇用保険、健康保険に加入していた。

しかし、工場の仕事が合わないと感じはじめ、そのことによるストレスや精神的に若かったこと、家の環境がよくなかったことなどが重なり、7カ月後（1999年10月）に辞職した。

また、同年7月からは大阪府の精神保健福祉の医療相談センターの心療内科に1年ほど通院した。精神安定剤、睡眠薬を多く飲む癖があり、別の精神科病院に緊急入院したこともあった。

アルミサッシ工場を退職後は、4年ほどゲームセンター、警備員等のアルバイトを転々とした。月の収入は10万円くらいだった。

21歳（2001年）の頃からは、また精神科クリニックに通

院しはじめた（27歳、2007年8月まで通院）。

23歳（2003年）からはメッキ工場や高架の切断などの仕事に正社員として就いた。しかし身体が細いためか、力がないと勝手に判断されて、2～3回解雇された。

25歳（2005年）から鋼管加工を行う鉄工所に正社員として就職した。就職と同時に家を出て大阪府下で一人暮らしをはじめた。この会社では2年近く働いた。

27歳（2007年）のときに、「フラッシュバック的に」シンナーを吸い始めてしまった。9月に中毒を起こしてしまい、それが原因で鉄工所を辞めた。

28歳（2008年）になり、シンナー中毒の症状も落ち着いたため、メッキ会社に就職したが、長続きしなかった。

家では吸ったことがなかったシンナーだが、そのうち、家にいるときでも吸うようになってしまい、薬物（シンナー）依存が強くなった。

2008年末になってシンナーを吸っていたことが父親に見つかり、家を追い出された。1週間ほどして家に戻ったが、また吸ってしまい家を叩き出されてしまった。

行くところがなくなり、地元で教会の牧師を頼った。

2009年1月末に、自立支援センターに入所した。

高校卒業後、仕事を探すときは、派遣登録はせず（したことがない）、なるべく正社員で採用してくれること、社会保険もついていることにこだわって求職活動をしていた。

<現在の生活状況>

現在は、自立支援センターの紹介で7月1日から大阪府の緊急雇用対策事業に就労している。半年契約で月19～20万円、「給料は普通よりやや少ない」。健康保険に加入しているが、雇用保険は入っていない。2010年2月末まで仕事があるので、現在は求職していない。

現在は、本音で語れる友人はいない。あまり友人をつくらない。相談できる相手はカウンセラー1人だけである。

<本人の望みや不安>

お酒はアルコール依存症だった父親を見ているので、付き合い程度しか飲まないことにしている。現在の健康状態は「普通」。今は通院していた精神科クリニックには通っていないが、近々自立支援センターを出所する予定なので、その後は医療相談センターに通っていた頃からの知り合いにどこかのクリニックを教えてもらおうと思っている。

通院を避けていたときに、親しくしてくれたソーシャルワーカーが精神科にかかるよう忠告してくれていたので、

そのとき逃げずに行っておけばよかったと後悔している。
将来には強い不安を感じている。

政府や行政には、再就職支援の充実や、健康保険・公的な年金制度の充実を望む。

調査番号：大阪31

調査日：9月5日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：42歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：長崎県 ■学歴：高校卒業
- 就労の有無：臨時就労中 ■現職：臨時就労（就労機会提供事業）清掃関係職、就労体験（臨時職員扱い）
- 直近の収入：月11～12万円 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 ホテル・調理師見習（正社員、数カ月） ホテル・調理師（正社員、15年） 給食会社・調理師（正社員、4年） 給食会社・配送（正社員、1年） 食品加工メーカー下請会社・配送（正社員、1年） 現在、自立支援センター入所中（1カ月、現在臨時就労中）

<仕事に就くまで>

1967年、長崎県生まれ。

小学校の頃、新聞配達を行い、家計を少し助けていた。両親ともに漁師として、生計を立てていたが、15歳の頃の暮らし向きは、やや苦しかった。

中学校では、授業内容もよくわかっており、病気以外には遅刻・欠席もしなかった。信頼できる先生も友人もあり、進路指導も適切に行われていた。「うちの家は貧乏なので、働いた方が良いか」という思いから、進路を就職か進学かを迷っていたとき、先生の勧めで、就職先が安定しているという、愛知県の工業高校への進学を決めた。

高校は、全国から生徒が集まる全寮制の工業高校であり、卒業後の進路としては、自動車メーカーなどの製造業が主であった。

<初職からの経験>

18歳（1985年）高校卒業後、大阪府内の大手ホテルの調理師として就職した。仕事は日給制であった。「仕事が休みになると、収入がなくなる」日給制には不安を感じていた。そのため入社後間もなく退職した。

「安定している」月給制の仕事を探し、月給制の条件にこだわりを持って求職活動を行い、以後の仕事はすべて正社員として就職した。

同年、正社員の調理師の見習いとして就職した。職場は「チーム体制」をとっており、洋食のチームに所属した。雇用保険、厚生年金、健康保険などの社会保険は完備していた。

26歳（1993年）のときに結婚した。この結婚を機に、それまでのアパート暮らしから、市営住宅へと引っ越した（以後、自立支援センターに入所するまで、市営住宅に住み続けた）。

30歳（1997年）の頃、長男が誕生した。

33歳（2000年）の頃、所属するチームがチームごと勤務先を移動することになった。当時、長崎に住む父親が体調を崩しており、万が一の際にすぐ戻れる場所での勤務を希望したが、チームの移動先は、長崎にすぐに帰れるような

場所ではなかった。会社側から、「チームを外れるなら、退職するように」と言われたために、退職した。この職場では就職当時、月給5万円から始まり、退職時には18万円まで上がっていたが、退職金はなかった。

34歳（2001年）のとき、病院の中の厨房で患者の食事を作る調理師（正社員）として民間の給食会社に就職した。社会保険はあった。会社は20～30人規模だった。最初は大きな病院で3年ほど勤めた。大きな病院で働いた後に地方の小さな病院で調理師として働くのが、この会社の一般的な方針であり、自分にも転職の話がきた。転職先は、寮もなく、家から通うにはかなり遠かった。しかし、家から通うことにした。朝早くに家を出て、夜遅くまで帰れない日が続いた。

35歳（2002年）の頃から、妻と衝突を繰り返すようになった。その理由のひとつは自分自身が「責任感が強く、物事をきっちりこなさないと気がすまない」ためだった。その頃、徐々に妻の家事に対して口を出す頻度が増していった。さらに、月に2～3回程度、精神科にうつ病の治療のため通院するようになった（現在も月に1度は通院している）。

38歳（2008年）の頃、寝る時間も少なくなり、このまま仕事を続けるのは体力が持たないと思い、自ら退職した。

39歳（2006年）のときに、別の給食会社の配送の仕事（正社員）に就いた。ハローワークで探した仕事であった。社会保険はあった。80人規模の会社で、大阪府下の南部地域が営業区域であった。会社が、営業区域を増やすために和歌山県にも支店を設けたが、すぐに地元企業との競争に負け、撤退した。これを機に、他社に現場をとられるようになり、しだいに会社の業績も悪化していった。

40歳（2007年）の頃、会社自体の規模が縮小することに伴い解雇された。

同年、大手食品加工会社のグループの下請会社に就職した。社会保険はあった。仕事内容は加工食品の配送（正社員）であった。日によって、配送の量が違ったため、2トントラックや4トントラック（普通免許で運転できる）を使い、まぐろ丼を配送していた。

41歳（2008年）の頃、まぐろの価格高騰が原因で、グループ会社全体の業績が悪化した。この影響をもちに受けて、

2008年7月にこの会社が解散したため、解雇された。

この後は、失業手当90日分やサラ金での借金で生活をしてきた。また、妻との間に長年の不満が積み重なったのか、言い争いの回数が増えた。

2009年（42歳）6月に離婚した。長男が学校を転校するのはかわいそうということで、自分名義の市営住宅を妻の名義に変更することを2人で話し合っただけで決めた。しかし、市営住宅を妻の名義に変えるためには、自分が新しい住居を設定することが条件になっていた。そのため、福祉事務所に生活保護や住居相談へ行った。生活保護を受給するには年齢が若すぎるとのことで、却下された。住宅相談では、自立支援センターへの入所という方法があることを教えてもらい、2009年8月11日に入所することとなった。

<現在の生活状況>

現在の生活状況は、「やや苦しい」が、「働きたい」という気持ちは強い。

自立支援センター入所後、2009年9月1日から就労体験として、大阪府が提供しNPOが管理運営している清掃の仕事を行っている。土日は休みで、1カ月間限定の仕事である。この間は求職活動を続けることが難しいが、まずはお金を得たいとの思いから、この仕事を始めた。

<本人の望みや不安>

母親に心配をかけたくないとの思い、そして、子どもの誕生日にプレゼントを買ったり、進学するときには何かを買ったりしてあげたいとの思いが今の支えになっている。

自立支援センター入所前から、積極的にハローワークに通い、職を探していた。

希望の仕事は、直近まで働いていた配送関係の仕事である。当面の目標は、配送の仕事を見つけて、住居設定することである。しかし、実際は職種にこだわらず、どんな仕事でもいいから、「きちんと生活できるだけの収入」がある仕事に就きたいとの気持ちがある。今は、「仕事を選ぶ時代ではないので、自分ができそうなことならなんでもやる」との気持ちも強い。

また、将来に対しては、「不安がある」。リーマンショック以降、ハローワークに通う人の数が見えて増えたことが不安の原因である。

ハローワークの相談窓口でも、ずっと順番を待っていなければならない。また、自分が生活できるだけの収入（10万円以上を目安に）を条件にしているのだが、検索にひっかかる件数が少ない。もし自分に経験がなくても、面接をしてくれるのであれば、どんな面接でも行く。しかし、実際は年齢が合わない等の理由から、面接すら受けられないことが多い。たとえば、年齢不問が条件でも、窓口で電話してもらおうと、面接の前から断られることが多く、困っている。

調査番号：大阪32

調査日：9月5日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：32歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：中古パソコンリサイクル業、現業職、アルバイト ■直近の収入：月12万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 電気機器メーカー・組立（アルバイト、数カ月） 定時制高校入学・卒業（4年）
+ 解体会社・作業員（アルバイト、4年） 解体会社・作業員（アルバイト1年、在学中より継続） 母親の看病（2～3カ月） 建設会社・作業員（アルバイト、8年） 電気機器メーカー・生産（登録型派遣、2年8カ月） 電気機器メーカー・生産（登録型派遣、3カ月） 無職（3カ月） 現在、自立支援センター入所中（1カ月）（入所後）中古パソコンリサイクル会社・現業（アルバイト、1カ月）

<仕事に就くまで>

1977年、大阪府生まれ。

両親と2歳年上の兄の4人家族であった。

父親は大工であったが、病気がちであったため、生活は大変厳しかった。それが原因となって、両親は、中学校3年生（14歳、1991年）の時に離婚した。離婚にともなって、自分は父親の方へ行くか、母親の方へ行くか、その選択を迫られたことが「ほんまにしんどかった」。最終的には母親と一緒に暮らすことにし、それまで暮らしていた市の近隣市に、母親と兄の3人で移り、暮らすことになった。

当初は民間賃貸アパートで暮らしたが、その後同じ市内の府営住宅に引っ越した。しかし、兄は、この離婚を機に高校2年生で中退して、家を離れ大阪府外に働きに出た。

その後、兄は、家に寄り付かなくなり、兄とはそれ以降連絡が途絶えたままになっている。また、父親は自分が18歳（1995年）の時に亡くなった。詳しい原因は聞いていない。

中学校3年生の頃は、離婚をめぐる両親の激しい口論や、離婚して家族がバラバラになることへの不安などで、高校受験のための勉強はほとんど手につかずに過ごすことになってしまった。その結果、自分がめざす高校への入学をあきらめ、別の定時制高校の普通科に入学した。

<初職からの経験>

15歳（1992年）の4月に定時制高校普通科に入学したが、この普通科では何も技術が身につかなかったことから「もっとしっかりしなければ」と考え、同年7月に退学した。ひ

とまずきちんと収入を得ようと思い、当時住んでいた市内にある扇風機やこたつを製造する電気機器組立工場のラインで、アルバイトとして働くことにした。工場には、自宅から通った。時給は700円で1日7時間、週5日の労働であった。未成年であったので、残業はさせてもらえなかった。したがって、月に10万円程度稼いでいた。

しかし、母親からは、学校を辞めたことをきつく叱られ、「学校にはちゃんと行きなさい」と毎日のように言われたため、再度、高校に進学することを考え、数カ月後にはアルバイトを辞めた。

翌1993年4月(16歳)には、きちんと技術を身に付けようと定時制の工業高校に入学し、機械科で勉強するようになった。定時制高校の4年間は、昼間は地元の市内にある建築解体会社でアルバイトとして働いた。けっこうきつい仕事であったが、日給8,000円と高く、月額にすると24~25万円を稼いでいた。母親の手をわずらわせることなく、なんとか高校を卒業することができた。また、この4年間に、解体作業に必要なガス溶接免許を取得し、普通運転免許も取得した。

20歳になった1997年3月に、定時制の工業高校を卒業した。しかし、1997年は、景気が良くなく、定時制高校を出たといっても、正社員で雇ってくれる会社はあまりなく、しかもこれまで勤めてきた解体会社での月収に匹敵する給与を支払ってくれる会社はなかった。このため、卒業後も、同じ解体会社に勤め続けた。

同年、母親が脳溢血をおこして入院することになった。その時はなんとか大事に至らずにすんだ。

しかし、翌年(1998年、21歳)母親が同じ脳溢血で再び倒れた。パートの仕事だとはいえ、働きすぎがたたっての過労であった。この2回目の脳溢血によって、母親は寝たきりとなり、意識も定かでなくほぼ植物人間状態となってしまった(母親はそれ以降現在も入院生活を続けており、入院費は生活保護の医療扶助を受け続けている)。

離婚後別居していた父親はすでに亡くなり、兄とも音信が途絶えていたことから、母親の面倒をみるのは自分しかいなかった。また、つき切りの看病が必要であったため、やむをえず解体会社でのアルバイトの仕事を辞めることにした。その後、2~3カ月は母親のそばでずっと看病をした。この時期は、両親の離婚の時と同様に「ほんまにしんどい時期」であった。

同年、いつまでも無職のままにいるわけにいかず、母親の生活保護受給決定を受けて、仕事を探すことにした。友人に相談したところ、彼の友人の親が経営している建設会社がアルバイトとして雇ってくれることになった。しかし、建設関係の資格は何も持っていなかったことからやらせてもらえたのは、雑用がほとんどであった。おまけに、おりの建設不況のあおりを受けて、会社の仕事もどんどん減り、だんだんと仕事のない日が多くなっていった。

2005年11月以降は、本当に仕事がなく、収入も減ったため、府営住宅の8万円の家賃の支払いさえ滞ようになっていた。

29歳(2006年)の3月になって、8年間勤めたこの建設会社を辞めることにした。

もう少し稼げる機会を得ようと派遣会社に登録し、同年4月から近隣の市内にある電気機器メーカーの下請会社のエアコンディショナー製造工場に派遣され、ろう付け溶接の仕事をした。この溶接は、鉛と錫を主な成分とした合

金「はんだ」をろうのように溶かして接着剤として利用し、金属と金属を接合する作業であった。また、電子部品をプリント基板に固定する作業も行った。工場の現場では、1人の現場担当者(正社員)が80人の派遣社員を監督していた。労働条件は、時給1,200円で1日7時間労働、月に最低でも20日は仕事があった。月の稼ぎは、18~20万円程度であった。

しかし、2008年10月(31歳)になると、この下請会社にあまり発注が回ってこなくなり、経営状態が悪化したため、同年12月末の契約期間満了にともない、契約が更新されなかった。

同じ派遣会社からの紹介で、2009年1月からは府営住宅から自転車で通えるところにあった別の電気機器工場に派遣され、前と同じように電子部品をプリント基板にろう付け溶接する仕事を始めた。しかし、3カ月の契約期間が終わると契約は更新されず、2009年3月末には無職となってしまった。

2009年4月(32歳)から6月までの3カ月間は、複数の派遣会社に登録したり、近隣の市にあるジョブカフェやハローワークに通って求職活動をしたが、仕事は全く見つからなかった。定時制高校卒業、建設業での職歴、そして登録型派遣社員では、どこも相手にしてくれなかった。こうして、この3カ月間は、残っていた貯金を取り崩して、なるべく無駄をしないようにぎりぎりの生活を送った。

しかし、同年7月には、預貯金も底をつき、府営住宅の家賃8万円が払えなくなった。仕方なく市役所に相談に行った。市役所では、自立支援センターを紹介してくれ、家賃が払えなくなった府営住宅を引き払って、2009年7月21日に自立支援センターに入所した。

<現在の生活状況>

自立支援センターに入所後は、ハローワークで雇用期限のない常用雇用の仕事を探した。しかし、住所がこのセンターであることを理由に9社に採用を断られた。

自立支援センターが実施している職業紹介によって、やっと応募10社目にしていま勤めている会社から常用のアルバイトとして採用してもらえた。この会社は、廃棄されたパソコンを修理・再生しリサイクル商品として販売する会社で、入荷された廃棄パソコンの仕分け作業をしている。時給は850円で1日7時間労働。週5日の勤務で、月に約14万円を稼いでいる。

なお、2009年7月末から8月中頃までハローワークにひんぱんに通っていたが、求職者が異常に多く、2~3人の募集枠に対して50人以上の応募が殺到していた。とくに40歳代の求職者が目立っており、こうして仕事に就けたのは、運が良かった方かもしれない。

登録型派遣社員として働き出す29歳までは、ずっと国民健康保険に加入し保険料を納めていたが、登録型派遣社員になってからは保険料を払っていなかった。しかし、いまはアルバイト先の健康保険にきちんと加入している。

この自立支援センターに入所してしばらくのち、歯が痛み出し、通院をしていたが、現在は健康状態に異常はない。

母親は現在も入院したままであり、週に3~4回面会に行っている。

<今後の展望>

これからは、まだどんな安定した仕事に就けるか不安はあるが、なるべく安定した仕事に就きたい。いまの仕事を一生懸命にやって、それがなんとか評価してもらえるとう

れしい。

数年前から恋人がいるが、彼女の両親など周囲の人たちの反対があるため、結婚には至っていない。彼女の両親にも評価してもらえるように、仕事をがんばっていきたいと思う。

調査番号：大阪33

調査日：9月5日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：35歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：滋賀県 ■学歴：高校卒業
- 就労の有無：臨時就労中 ■現職：臨時就労（就労機会提供事業）、清掃関係職、就労体験（臨時職員扱い）
- 直近の収入：月11万5千円 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 パチンコ店・店員（正社員、2年） 風俗店・店員（正社員、10年） 風俗店・店員（短期で転職を繰り返す）（正社員、2年） 窃盗で捕まる（期間不明） 製造会社や引越会社の登録型派遣を転々（3年） 強盗で捕まる（拘置所に4カ月） 更生保護施設（1週間） 現在、自立支援センター入所中（1カ月、現在臨時就労中）

<仕事に就くまで>

1974年、滋賀県生まれ。

両親と3人家族であった。しかし、理由はよくわからないが生後まもなく大阪にある児童養護施設に預けられた。当時、実父母は健在だったが、2～3歳のときから、高校3年生の中頃まで、大阪府にいた養父母のもとで暮らした。したがって、実の両親のことはあまり覚えていないし、実父の仕事などもわからない。中学校3年生当時の養父母のもとでの生活は、普通の暮らしであった。養父は自営業、養母は専業主婦であった。

17歳（1991年）高校3年生の9月以降は実の両親が暮らす滋賀県に戻り、実の両親と暮らしていた。しかし、高校卒業後（18歳から）は、就職のため、また実の両親と離れ、1人暮らしをすることになった。

高校を出てすぐに就職しようとは考えていなかったため、高校の就職指導はほとんど受けずに卒業してしまった。

<初職からの経験>

18歳（1992年）で高校を卒業して、最初に就いた仕事は、スポーツ新聞の求人広告で見つけた大阪府にあるパチンコ店だった。この会社は、店舗を7つ持ち、結構大きな会社であった。そこで正社員として就職し、会社の寮に住み込み、2年ほど働いた。1日平均8時間労働であったが、結構残業もあった。仕事は、パチンコ台の管理やお客さんの接客であったが、開店前の床磨きの仕事から、閉店後の片付けまで、仕事は結構忙しかった。給料が21万円で厚生年金と健康保険に加入していたが、雇用保険には加入していなかった。店舗が多かったことから、何回か別の店舗への転勤があったが、それは自分の意向とかは無視されたため、使い回されているような気がして、あまり好きではなかった。

20歳（1994年）のころ、なじみの客で風俗店の店長に声

をかけられ、風俗店で働こうと誘われた。パチンコ店の転勤の頻度が多くなってきたことに嫌気がさしてきたこともあって、パチンコ店を辞め、同じ大阪府にあったその風俗店に正社員として就職した。風俗店では、受付やお客さんへの飲み物の準備、女性従業員のシフト管理などの仕事をした。毎日の勤務時間は8時間であったが、たまに開店時間の朝10時前から閉店の夜間12時過ぎまで働くこともあった。結構立ち仕事が多く、残業のあるときはきつかった。しかし、給料はよかった。基本給は20万円であったが、がんばり次第で歩合給がついた。10年勤めた30歳のころ（2004年）には、月に40～45万円を稼ぐようになっていた。しかし、厚生年金や健康保険はなく、自分で国民健康保険、国民年金に加入していた。また、雇用保険もなかった。なお、この風俗店勤務の期間は、アパートで1人暮らしであった。

高校を卒業して家を出てからは、養父母はもちろん、しばらくは実の父母とも連絡を取り合っていた。しかし、25歳（1999年）になって以降は、実の父母とは全く連絡を取らなかった。やはり、一緒に暮らした経験が乏しいので、会いたいとか、声を聞きたいとか思うことはめったになく、自分の生活のリズムができてしまうと自然と連絡が途絶えていった。後述の通り、32歳（2006年）のころ、コンビニで窃盗をして、警察に捕まえられた。そのとき、住所だけでなく両親のことなどいろいろ聞かれ、警察が両親を探し当てたところ、実の父母がどちらも亡くなっていることがわかった。ショックだった。

30歳（2004年）のとき、風俗店のオーナーが亡くなり、店が売りに出されてオーナーが替わり、店長も替わった。しかし、この新しい店長の営業や従業員管理の方針は、高い成果を要求するものであったことからついていけず、退職した。

しかし、30歳からの再就職は、うまくいかなかった。はじめはいくつかの風俗店をスポーツ新聞の求人広告などで見つけて正社員の仕事に就いたが、新しい店の雰囲気や人

間関係などになかなかなじめなかった。したがって、風俗店での短期の仕事と無職を繰り返すようになり、気づいたら貯金もほとんどなくなっていた。

32歳（2006年）のある日、コンビニで窃盗を働き、警察に捕まえられた。

これ以降は、前科者となったことから、風俗店の正社員の仕事もなかなか見つけられなくなり、登録型派遣の仕事をするようになった。派遣先は、主に電気機器組立のライン作業や引越作業だった。電気機器などの製造業では、年齢が高くなるにつれ、時給が下がった。軽いヘルニアを持っていたが、引越作業の辛さに耐えることはできた。しかし、出勤日数が次第に少なくなり、週に2日くらいとなり、2009年（35歳）になるとひどいときにはまる1週間仕事がないときも出てきた。

30歳（2004年）から35歳（2009年）にかけての5年間に、約10回職場を変えた。

この5年間の様々な仕事の中で一番いやな思いをしたのは、ハローワークで紹介された住宅解体業の土建会社での仕事であった。ハローワークのパソコンで仕事を検索して、求人票に「軽作業の作業員募集」と書いていた土建会社を見つけ応募した。電話をかけて、軽いヘルニアがあるため「腰が弱いので、重いものが運べないが大丈夫か」と言ったら、「軽作業だからだれでもできる」と言われた。しかし、実際に現場に出て働いてみたら、ハローワークでの求人登録票に書かれた内容と相当異なった大変きつい仕事であった。ここでは最初の1カ月に30万円を貰ったが、軽いヘルニアを抱えた身にはあまりにきつかったので、1カ月で辞めた。ハローワークでは、こんな仕事しか見つからないのかと思い、ハローワークで仕事を探すのがいやになった。風俗店の方が、求人広告で示された賃金などの募集条件が変わったら、採用面接のときにきちんとそれを教えてくれたように思う。

こうして、35歳（2009年）までの5年間は、不安定な雇用が続いた。最後に就いた引越業の派遣でも仕事はほとんどなくなり、寮費の方が高かったため、にっちもさっちもいかなくなってしまった。そしてつい出来心とはいえ、強盗事件を起こし、逮捕されて4カ月間拘置所に入れられてしまった。

拘置所を出て更生保護施設に入れられたが、そこには1週間ほどしか滞在できなかつたし、再就職の支援もなかった。そこで、更生保護施設を出た後、市役所に相談に行ったところ、この自立支援センターを紹介してもらい、2009年8月はじめに入所した。

思い起こせば、30歳のとき（2004年）に長年勤めた風俗店を辞め、「それからおかしくなった」と思う。

<現在の生活状況>

この自立支援センターに入所して1カ月が経過した。今の生活も大変苦しいが、ひとまず安心して寝るところがあるのがうれしい。

今、歯科医に通っているが、健康をきちんと回復させて、就職に臨みたい。

このセンターの紹介で、あるNPOが就労体験としてやっている公園清掃・草刈りの仕事を、アルバイトとして1週間前からはじめたばかりである。日給5,700円で1日6時間、週5日の仕事である。契約期間は20日間だけだが、

なにも仕事がないよりはずっといい。

定期的にハローワークへ仕事を探しに通っているが、自分にできる仕事はハローワークの求人ではなかなか見つからないと思う。むしろスポーツ新聞の求人広告の方が、パチンコ店や風俗店など自分に合った求人を見つけることができるように思う。

とにかく就職先を探したい。就職にあたっては、車の運転免許があると就職口が広がると聞いている。したがって、ぜひ免許を取りたい。しかし、普通免許の教習所に通える人数は限られていて、10月に入るとその抽選が行われる。ぜひ受かりたいと思う。

<将来への不安と望み>

将来については強い不安がある。ひとまずなにかの仕事でお金を貯めて、風俗の仕事をしてきた経験を生かしたい。将来的には「自分の風俗の店を持って、結婚して子どもが育てられるように仕事をしていきたい」と考えている。

自立支援センターに入るのに苦労した。もっと多くの困っている人を支えるために、自立支援センターに入る条件を緩和してほしいと思う。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：25歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：和歌山県 ■学歴：中学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：清掃業、清掃関係職、アルバイト ■直近の収入：月7万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：中学校卒業 無職（4カ月） 運送会社・仕分け（アルバイト1年半、準社員半年） レストラン・ホール接客（アルバイト、3年） 運送会社を中心に登録型派遣を転々（登録型派遣、4年） 無職（3カ月） 自立支援センター（4カ月）+（入所中）清掃会社・清掃（アルバイト、5カ月） 運送会社・運転助手（アルバイト、5カ月） 無職（2カ月） 現在、自立支援センター入所中（4カ月）（入所後）清掃会社・清掃（アルバイト、数カ月）

<仕事に就くまで>

1984年、和歌山県生まれ。

両親と2歳下の妹との4人家族であった。両親は、地元で小学生と中学生を対象にした学習塾を営んでいる。

両親は、仕事柄、子どもたちの成績を気にし、いつもうるさく「勉強しろ!」とばかり言っていたが、ずっとそれに反発を感じて暮らしてきた。とくに中学校になってその思いはますます強くなり、中学校3年生の時には体育祭や文化祭などの大きなイベント以外は学校に登校しなかった。確か4日しか登校しなかった。いつも学校の授業をさぼって、数人の友人と集まってはブラブラしていた。勉強は全くせず、家には寝るためだけに帰るような生活であった。

その上、たばこはもちろん麻薬にまで手を出してしまった。この時、そんな自分の行動を知った小学校からの同級生の友人から「お前そんなこと続けてたら死んでしまうぞ」と言われ、思いっきり殴られた。自分のことを一生懸命考えてくれる友人がいることに気づき、麻薬をやめることができた。また、それによって、心も体もボロボロにならずに、踏みとどまることができた。この友人には、本当に感謝している。

しかし、家族との険悪な関係は、その後も続いた。そして、中学校を卒業するとすぐに、両親だけでなく父方と母方の祖父も集まって親族会議が開かれ、両親から勘当された。この時は、「親に捨てられた」と思った。

<初職からの経験>

1999年（15歳）3月に中学校を卒業し、親に勘当されて家を追い出された後、しばらくはどうしてよいかわからず、中学時代の友人たちの家に、その友人の親には内緒で、世話になったりしていた。こんな状況が4カ月ほど続いた。

ある日、比較的やさしかった父方の祖父が声を掛けてくれ、その祖父の援助で大阪府にワンルームのアパートを借りることができた。こうして、両親のいる地元を離れることができたし、ひとまず自分の居場所を確保することができた。この祖父にも感謝している。

大阪府に出てきてからは、アルバイト情報誌を見て、運送会社で荷物の仕分け作業のアルバイトを見つけた。時給は800円で一日8時間労働、月20日以上働き、14~15万円を稼いでいた。1年半ほどして準社員になり、時給は950円まであがり、社会保険にも加入した。

しかし、17歳（2001年）の時、不況で運送の荷物が減っ

てきたことを理由に、人員整理が行われ、解雇されてしまった。結局この運送会社では2年間働いた。

同年、運送会社を解雇された後、中学時代の友人が懐かしくなっていて、比較的頻繁に会えるところに行こうと思い、和歌山県の地元の隣の大きな街に引っ越し、そこで仕事を探そうとした。求人情報誌で、レストランでのホールの接客のアルバイトを見つけ、働き始めた。このレストランでは、自分の父親くらいの年齢の店長が気に入ってくれて、接客のほか伝票整理などの仕事もさせてもらえるようになった。また、親から勘当されことで生活に困っているだろうということで、通常の所定内労働時間（1日8時間）を超えて多い時で13時間くらい働かせてくれた。それによって、賃金は、多い時で月に30万円近く稼げるようになった。なお、雇用保険と社会保険はなかった。このレストランでは約3年間働いたが、その間に、勘当された当時に一人暮らしするために父方の祖父や友人・知人から借りた借金70万円をすべて返済した。残ったお金は飲食だけでなく好きなカラオケなどで相当使ってしまった。自分は金遣いが荒く、浪費癖があると反省している。

19歳（2003年）の中頃、レストランの周辺に住む人たちが、「このレストランは未成年者を長時間労働させている」と言い出し、労働基準監督署に告発された。このため、監督署から摘発を受けることになり、客足が遠のくとともに、店長が入れ替わって従業員との関係もギクシャクしたものとなってしまった。そうこうしている間に、レストランは倒産してしまい、退職せざるをえなくなった。「(最初の)店長は自分のことを心配してくれ、いろいろ面倒を見てくれた」にもかかわらず、結果的にそのことがきっかけでレストランの経営がうまく回らなくなったようであり、申し訳なく思った。

20歳（2004年）の時に3年間働いてきたレストランを退職し、しばらくして3年間暮らしたアパートを引き払って派遣会社に登録するようになった。主に運送会社に派遣され、運送助手や荷物の仕分け作業などの仕事をしていった。勤務場所は関西方面を中心に愛知県や広島県までであった。住所は派遣会社の寮であった。その後、14回くらい派遣先の職場を変えた。仕事が途切れた時はマンガ喫茶やネットカフェなどに寝泊まりしていた。結局は、目的をもつことができず、また「地元とは遠くにいた方がよいのかなあ」と思いながら、「ダラダラした」生活を4年間続けた。

2008年（24歳）に入って、登録型派遣の仕事が徐々に少なくなっていった。ついには2月頃から仕事は一切なくなった。無職状態が3カ月近く続き、生活費が底をついた。

どうしようもなくなり、2008年5月26日に行政に助けを求めつもりで大阪府のある市役所の福祉窓口にご相談に行った。そこで、自立支援センターを紹介され、すぐに入所することができた。入所後、このセンターが実施している職業相談事業の斡旋で、近くにある市の民間請負清掃会社の清掃の仕事にアルバイトとして就いた。時給800円で一日8時間労働、月25日働き、約16万円の月収があった。

ここで働いたおかげでお金が貯まり、9月中頃には自立支援センターを退所して、勤務先の会社のある市に家賃33,000円のアパートを借りることができた。しかし、この清掃の仕事は10月末でアルバイト期間が切れたため、退職した。

その後は求人雑誌で仕事を探し、学習教材を専門に運送する運送会社にアルバイトとして採用され、運送トラックの運転助手の仕事に就いた。時給は1,000円で一日6時間労働、月20日就労の条件で働くことになった。月の収入は、12~13万円であった。しかし、会社の上司と職場の人間関係の問題で口論となり、2009年3月末に退社してしまった。

その後はいくら仕事を探してももうまくいかず、仕事が見つからないまま2カ月が過ぎた。ついに生活費がなくなった。

2009年5月(25歳)に、自分から自立支援センターに行き、再入所したいと相談した。そして入所が受け入れられ、

現在ここで暮らしている。

<現在の生活状況>

現在、自立支援センターの職業紹介で、アルバイトとしてデパート内の清掃の仕事をしている。時給800円で一日8時間労働、月20日の仕事であった。しかし、2009年8月以降は、仕事が減って一日4~5時間の労働時間しかない。これによって、給与は、月13万円から月7万円程度に下がってしまった。

先行きに不安はないとは言えないが、自分ではできるだけプラス思考で考えるようにしている。これまでの生活の大変さの原因は、自分自身にあると考えている。今後は、もう少しまっとうな暮らしをしたいので、がんばろうと思う。レストランでの接客の仕事が一番性に合っていたようなので、できれば接客の仕事をしたい。

考えてみると、中学校3年生の時の友人、祖父やレストランの店長などにたいへん世話になり、感謝している。また、15歳の時に自分を助当した母親にも、いまは感謝できるようになった。

調査番号：大阪35

調査日：9月5日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：35歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退
- 就労の有無：臨時就労中 ■現職：臨時就労(就労機会提供事業)、清掃関係職、就労体験(臨時職員扱い)
- 直近の収入：月54,400円 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校中退 レンタルビデオ店・店員(アルバイト2カ月、正社員1年10カ月) 美容室・美容師見習(正社員、5年半) 刑務所(3年) パチンコ店・店員(正社員、4年) 刑務所(2年弱) 無職(母親の生活保護費で暮らす、半年強) 現在、自立支援センター入所中(1カ月、現在臨時就労中)

<仕事に就くまで>

1974年、大阪府生まれ。

幼稚園の頃に大阪府内で引っ越した。

父親は不動産業を営んでいて、規模は大きくなかったが、何人が雇いパブルの頃は相当儲かっていた。母親は専業主婦だった。

父親の友達でハワイにいた人から誘いがあって、中学校2年生の時からハワイに留学し、ハワイで高校に進学した。当時は高校を出た後は大学に進む気持ちがあった。具体的な夢はなかったが、興味があったコンピューター関係の仕事につきたいと思っていた。

しかし、父親の会社が倒産し、高校を中退して帰国することになった。高校を卒業する6月まであと4カ月というところだった。

18歳(1992年)の2月に帰国した。父親は借金から逃げるために蒸発したような状態で、連絡がとれなかったため、自分が働かなくては行けなかった。

留学前から住んでいたところは、借家だったが、安く借

りることができたため、帰国後も、そのまま母親と住むことになった。

<初職からの経験>

18歳(1992年)3月頃から大阪府内で働き始めた。最初にやったのはレンタルビデオ屋のアルバイトだった。家の近くにある店舗でアルバイトを募集していたのに、応募したのがきっかけだった。個人が経営していた何軒かのうちの一店舗の運営を任されていた。週1日休みで、途中休憩をはさんで朝10時から夜12時まで勤務した。14~15人いるアルバイトのシフトも自分が決めていた。はじめは時給制だったが、2カ月後から正社員に替わり、月給で24~25万円になった。雇用保険は掛けてくれたが、自分で国民健康保険に入り、国民年金も自分で払っていた。ビデオ屋の仕事は2年間続けた

20歳(1994年)の春から美容院で働き始めた。母親の知り合いから紹介された店舗で、自分は美容関係を希望していたわけではなかったが、「手に職をつけた方がいい」と

母親が強く勤めてくれたために就職を決めた。

正社員として契約し、給料は最初は月額18万円くらいと安かったが、最後には手取りで26~27万円あった。社会保険は全部加入してくれた。

そこで5年半勤め、技能も身につけていたのだが、ある時期から急に薬品で手が荒れるようになり、病院から仕事を辞めるように言われたため、辞めた。それが25歳(1999年)の秋だった。

この時期は母親と同居していて、働いている時は自分が母親を支えていた。母親の年金保険料も自分が払っていた時期があった。

25歳(1999年)の秋、美容院退職後は失業手当受給の手続きでハローワークに行き、そこで仕事も探した。今から10年前で、今と比べれば仕事はあった。だが、営業や販売の仕事で何件か面接も受けたがダメになって、どうしようかなと思っていた。当時、今のように駅で配っている求人情報誌はなかったが、売っている求人情報誌は見ていた。

その年の冬、悪い仲間ができてしまい、事件を起こして刑務所に入るようになった。初めは執行猶予だったが、誘われるままに同じことを繰り返してしまい、3年刑務所に入るようになった。求職中は正社員、定職にこだわっていたが、その時に正社員にこだわらずにアルバイトをやっていたら、罪を犯すこともなかったと思う。

刑務所の中では、職業訓練があった。定員があるため、希望しても受けられないコースもあった。自分は情報処理のコースを半年くらい受け、国家試験の第二種の資格(執筆注: 第二種情報処理技術者試験か?)を取った。

刑務所の中では、他の受刑者からいろいろ声を掛けられることもあった。「こんなせえへんか」というのもあるし、やくざもいた。「『出たら連絡くれ』とか。『こんな仕事紹介するから一緒にやってくれ』とか。やくざの人に言わせたら、メンバー集めということですね。』

「娑婆(シャバ)に出た」のが29歳(2003年)の春だった。「うれしいと言うたらうれしいけど、普通のことを普通にできない何か変な感じでした。これからどうしようかという不安はありました」。刑務所の中での作業でもらったお金があり、出所時の所持金は10万円ちょっとだった。刑務所を出てから、再び母親と同居した。

ハローワークに行くことは行ったが、思うような仕事が見つからなかった。職員に刑務所にいたことを話すと、「仕事を見つけにくくなるから、それは面接ではあまり言わない方がいい」とアドバイスしてくれた。履歴書には、その間、他のことをしていたように書けばいいとも言われた。刑務所からの就労の斡旋はなかった。「出てから職安に行ってくれ」と言われただけだった。積極的な支援はなく、職業訓練はあっても、仕事が見つかるような働きかけはなかった。「だから、いっしょにおった人でも、身寄りがなかったら更生保護施設に入るけど、そこに半年くらいいて、自分で仕事を探して出ないといけない。(刑務所や更生保護施設を)出て、いきなり借りられるところ(部屋)もないし。歳いった人でも、結局、『期限来たら出て行ってくれ』となる。窃盗で捕まったら1年で出るから、(刑務所内の作業でのお金も貯まらない。出て、何か(犯罪を)やって、また捕まるとい人がいますね。自分の場合は、母親が住んでいるところに戻ることができ、住むところがあったから、仕事を探すことができた。

仕事をしないといけなかったため、その時はパチンコ屋

に行った。経歴はあまり問われず、すぐに正社員で働くことになった。

パチンコ屋は手取りが25万円くらいあった。社会保険もすべてあった。大手ではなく、地元で何軒かやってるパチンコ屋で、勤務時間は午前9時から午後4時半までと、午後4時半から夜の11時までの交替制で、自分はホール係だった。かなり儲かっていたので、ポロイ業界だと思った。

夫婦で住み込みで働いている人や、何十年と働いている人もいた。そんな人は家族持ちが多く、昇進して店長になる人もいた。

辞める前には、手取りで27~28万円。ボーナスは、盆と正月に合わせて2~3カ月分が出た。人間関係も悪くなかったため、自分としてもそのまま続けていく気持ちはあった。

しかし、その頃、昔の仲間から連絡が入り、集団で車や重機の窃盗をまた繰り返してしまった。「お金の魅力も当然ありますが、スリル、ドキドキ感、達成感もあると思います。再び捕まったのが33歳(2007年)の時だった。

33歳(2007年)から34歳(2008年)の12月まで刑務所に入っていた。出所時の所持金が10万円くらいだった。

出所後は生活保護を受けていた母親といっしょに暮らすことになった。住んでいた場所はやはり大阪府内だった。

仕事を探したけれど、ちょうど派遣切りで騒がれている時期に重なったため、容易には見つからなかった。「職安も行ってたし、雑誌も見てました。職安には何回も行ってますけど、近くにないから交通費が片道300円かかって、一日1,000円近くもかかるので、もったいなくて、しょっちゅうは行けなかった」。とくに、住んでいた大阪府の南の方面ではなかなか仕事が見つからなかった。しかし、「大阪の北の方に行かなきゃいけないとなると交通費がかかる。面接で受かったとしても通えなくなるんです」。

パチンコ店の仕事も探したが、年齢面でむずかしくなっていた。最近、大手のパチンコ店は特に、大卒や20代を採用している。年齢のこともあるし、自分は高校中退で、学歴面でも不利である。昔はよくあった夫婦住み込みという求人も、今はほとんどない。パチンコ店も、昔は個人経営だったが、今は大手の経営で、こうした人を雇わなくなった。昔は店舗の2階での住み込みだったが、今はあったとしてもワンルームマンションに社員を住まわせる。今、パチンコはきちっとしたレジャー産業である。「昔は刑務所入った人も働いていた。ワケありの人、歳いったおっちゃんでも雇ってくれてたが、今は全然ない。従業員自体も、派遣社員が多くなってる。派遣社員で雇い入れれば、ボーナスはいらないし、いつでもクビが切れるから」。

仕事を探しても、あるのは安いアルバイトやパートばかりだった。かといって、正社員の仕事だと、免許もないし学歴も高校中退の自分には条件があてはまらなかった。本当は、自動車免許はハワイで取ってもっていたが、帰国した時、なんだかんだしているうちに失効してしまった。それに、刑務所を出た人間は警備員の仕事に就けないという法律の問題もあり、警備員にもなれない。

2008年(34歳)12月から母親の生活保護費で食べる生活が半年強続いた。保護費で生活しているから、生活を維持するのに精いっぱいになってしまい、交通費の捻出がきびしく、求職活動もできなくなった。

市町村がやっている就労支援事業というのは「聞いたとは思いますが、結局、派遣切りにあった人向けのもの

だと思っていた。」

この自立支援センターに来ることになったきっかけは、母親が生活保護を受けている、その担当のソーシャルワーカーからの話だった。「母が保護を受けていて、自分がこのままいたら母が保護を受けられなくなる」。そういう話が担当のワーカーからあり、「こういうところがあるから一回来てみないか」と紹介された。「仕事がなくなっている人、お金がなくて困っている人が行って、仕事を探して、支援してくれるところ」だという説明だった。そこで、自分で市役所に行き、巡回相談員の人を紹介されて、2009年（35歳）8月初めにこの自立支援センターに来ることになった。

<現在の生活状況>

自立支援センターでの生活は「悪くはないです」。3畳の部屋にベッドがあり、食事以外の時間は自由にしている。ハローワークの人が来て、仕事を紹介してくれる。また、それとは別に、最新の求人情報があるので近くのハローワークに自転車で行っている。スーパーの販売や製造、塗装の仕事の面接を5回ほど受けたが、まだ決まらない。面接の交通費は出してもらえる。

臨時就労という支援で、府営の施設の清掃の仕事を始めた。週に5日、月に20日分あり、日当は5,400円である。現場で10時から3時まで働いている。この仕事ができるのは1カ月だけである。

その他に自立支援センターの中を毎朝清掃して、一日200円、週に1,400円もらっているので、タバコ代に充てている。

自立支援センターにいられるのは原則3カ月で、条件が合えば最長で6カ月になる。センターの入所者と情報交換をしている。人の入れ替わりは激しくない。ここから仕事に通っている人もいて、「そのうちにお金を貯めて（自立したい）」と話している。

小中学校での友達との付き合いは、帰国後もあったが、刑務所に入っている時に友達は離れていった。現在、連絡をとる友達はいない。

現在、父親とは連絡はとれるが、どこにいるかはわからない。

相談できる相手は、主に母親である。親に今援助はできないし、援助を受けることもできない。他に相談できる相手としては、美容院に勤めていた時の先輩がいる。

20代後半、パチンコ屋で働いていた時期に結婚を考えたことはあるが、「踏ん切りがつかなかったというか、タイミングが合わなかった。特別に、結婚したかったわけでもないし、したくなかったわけでもない。どうしてもという状態じゃなかった」。

以前の趣味といったらパチンコで、その他、酒を飲みに行ったりしていた。

<本人の望みや不安>

今後の見通しは、正直きびしいなと思う。「面接に行っても、他の人もたくさん面接してるし。もっと若い人、経験ある人もいる。むずかしいかなと思っています。どうしようもないみたいです。一つの仕事に何十人も来るような状態だから。紹介してもらえるように頼んでも、電話しても、『今こういう状態だからダメです』と。募集してる人

数自体が1人とか2人。条件のいい人から採られていって、僕らのように条件の悪い人間は（取り残される）」。

自動車免許やフォークリフトの資格の取得について、自立支援センターの職員と話をしている。資格取得のための費用をみてくれると聞いている。今行っている清掃作業の仕事が週5日だから、それが終わってからでないと具体的な活動ができない。今、動けるのは土日しかないが、土日は近くのハローワークも閉まっている。

できれば仕事が見つけれられて、不自由がない生活ができるというのが理想である。将来の仕事については、「正直、希望するというのがないです。希望できる状態ではないと自分でわかってる。それだけならってても無理ですから。自分の最低限の条件で行けるところがあればなと思ってます。もらった給料で生活できる。部屋を借りたり。それくらいの給料があったらいいと思う。できたら正社員の方がいいのかなと思います。今の状況では、派遣とかパートとかでは暮らしていくのにむずかしいと思う。バイトで働いても、ここにいる限りは衣食住はなんとかかなるけど、出たら、何とかかなるのか、心配...」。

気分が沈むこともある。しかし、「極力そうならないようにしてるので、しばしばではない。暗くなってもしょうがないし」。たいていのことはうまくやれるかどうかは、「自信と言うほどでもないですけど、普通に（できると思っている）」。

この施設にいる間に就職が決まるかどうかはわからないが、何とかかなるかなと思っている。「決して楽観視じゃないけど」。

今の社会の状態だったら、「立場の弱いというか状態が悪くなったら、その状態がどんどん悪くなる一方で、浮かび上がる機会というものがないなと思う。そういう人達を守るというのが必要だと思うし、そういう人達が、自分で何とかしないといけないのは当然だし、何もしないとよくなるはずはないし。何て言うんですかね、もっと機会があればと思う。機会を与えてもらったら何かできることがあるんじゃないかな。機会が与えられればつかめる」。一般の人に言わせれば、「やらないのは自分の勝手」だし、「自分の責任だ」となるが、自分もそう思う。自分も、状態が悪くなっているのは自分に原因があると思う。自分のこれまでの生き方を振り返れば、「もっと違ったやり方があったと思う」。自分の場合、「結局、罪を犯したからそういう状態になっている。原因をつくったのは自分だと思う」。「最近だったら、親が貧しかったら子どもが教育を受けられないという問題が取り上げられて、支援しようという動きが出てきている。収入がなかったら教育を受けられないのはかわいそうだと思う。それを自分達のせいと言われればそうとも言い切れないとも思う。教育を受けられなくしている制度、教育を受けるのに金がかかるのもおかしい。平等に教育を受ける権利があるじゃないですか。お金がなかったら教育を受けられないというのはおかしい。それがどんどん世代で伝わっていったら、格差も当然広がって行く」。

自分の場合、親の事業の倒産で高校を卒業できなかった。「最近では、最低でも高卒が必要じゃないですか。だったら、高卒まで国が面倒みてもいいんじゃないかと思えますよね。やり直せばやり直したいと思いましたし。（ハワイの高校を中退した後、日本に）帰って来てから勉強し直して大学に行ったりとか、できたらやりたいという気持ちはあっ

たけど、結局、生活に追われて...」それでも一方で「まあ、やろうと思えばできてたのかな」と思うこともありました。しかし、その頃には、相談できる人もいなかった。「定時

制への進学という道はあったかもしれませんが、その時はそういう余裕もなかったですね」。

調査番号：大阪36

調査日：9月5日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：31歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：富山県 ■学歴：高校卒業
- 就労の有無：臨時就労中 ■現職：臨時就労（就労機会提供事業）清掃関係職、就労体験（臨時職員扱い）
- 直近の収入：月約10万円 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高校卒業 石膏ボード製造会社・生産（正社員、3年半） 交通事故・リハビリ（3カ月） 無職（3カ月、失業手当受給） 新聞販売会社・新聞配達と集金（正社員、1年半） 無職（3カ月、失業手当受給） 電子機器メーカー・生産（登録型派遣、5年2カ月） 無職（1年2カ月） 3カ所の製造会社・生産（登録型派遣、9カ月） ネットカフェ（1カ月） 野宿（2週間） 現在、自立支援センター入所中（1カ月弱、臨時就労中）

<仕事に就くまで>

1978年、富山県生まれ。

両親と、2歳年下の弟と6歳年下の妹との5人家族であった。

父親は自営業の大工で、母親は専業主婦をしていた。父親は、ギャンブルとお酒にお金をつぎ込んでばかりで、浪費癖があった。家の生活は、決して豊かではなかった。どちらかと言えば苦しかった。「正直、（父親の）ギャンブルとお酒がなければ苦しくなかったんだけどね」。しかし、父親の収入だけが頼りだったので逆らえなかった。

中学生のときは数学が得意であった。その能力を活かしたくて商業高校に進んだ（15歳、1993年）。成績は普通であったと思うが、「よほど勉強ができないと大学には行かせられない」と父親に言われていたこともあって、大学進学をあきらめ、就職をした。なお、弟は勉強ができたので大学に進学し、その後正社員として就職している。

高校ではコンピューター部に属していたこともあり、高校卒業後はコンピューター関係の仕事に就きたかったが、高校の進路指導によって就職先の人数枠が決められており、おまけにバブル経済崩壊後の就職氷河期に入ったこともあってその枠が絞り込まれていた。このため、希望の仕事に就くことができず、自宅から近い会社の工員として就職することになった。1996年3月（18歳）に、全日制の商業高校を卒業した。

<初職からの経験>

18歳（1996年）で商業高校卒業後、富山県の石膏ボード製造会社に正社員として就職した。この会社は、大手石膏メーカーの下請けをしていた。従業員は40～50人くらいであった。仕事は、製造ラインでの組立や検査の仕事をしてきた。勤務形態は三交替制であった。給与は手取りで月15万円、ボーナスは年間80万円くらいだった。健康保険、厚生年金に加入していたし、労働組合にも入っていた。

就職してから、念願であった乗用車を5年ローンで買った。そして、酔った父親を車で迎えに行ったり、父親の仕事用の車を代わりに運転して帰ったりすることがよくあった。

勤めて3年4カ月が過ぎた1999年8月（21歳）に、居酒屋で酒を飲んでいて父親を車で迎えに行く途中で、他の車にぶつけられて交通事故に遭い、脳挫傷を負った。入院して数日間は意識がなかったが3週間ほどで退院できた。しかし、その後の半年間以上も、通院で仕事を休まなければならなかった。職場は、三交替制で人数がギリギリであったため、1人抜けると仕事がうまく回らなくなかなかない厳しい状況だった。当初は「休職扱いであったと思うんですけど、後遺症も少し残ってしまって、医者からは完全に治すまでは働けないということだった」ので、会社や職場の人たちの迷惑になると思い、1999年10月末に退職した。3年以上は勤めたので、退職金も少しではあるが出た。退職後は失業手当を受給した。

退院して3カ月間は自宅から通院しながらリハビリをし、その後富山県内で正社員の仕事を探し始めた。しかし、なかなかいいところが見つからなかった。仕事をしないまま家にいるのはつらくなり、寮のある仕事を探そうになった。

2000年5月（22歳）、新聞の折り込み求人チラシを見て、千葉県で寮付きの新聞配達などをする仕事を見つけ、そこに正社員として就職した。新聞販売会社だった。手取りで月15～20万円前後だったため、お金を貯めるまでにはいたらなかったが、福利厚生はしっかりしていた。寮ではワンルームの部屋が用意され、朝晩の食事が付いていた。仕事内容は、朝4時頃からはじまる配達準備と配達作業、それが終わってのちの午前は睡眠時間、午後は営業や集金などの仕事をした。集金は主に月末から月はじめだったが、不在だったお客さんには、休みの日や、通常睡眠時間にあてられている午前に、お客さんの都合に合わせて集金に回る必要があった。そうしないと、給料は確保できなかった。この仕事は拘束時間が長く、思ったようには休み

は取れず、完全に休みとなるのは結局月1日くらいだった。時間管理のうまいベテランは、毎週きちんと休みを取っていたように思うが、自分にはできなかった。

1年半後の2001年11月頃(23歳) 地元にいる祖母の妹が亡くなり、久しぶりに里帰りしたときに、父親から「帰ってきてこっちで仕事探さんか」と言われ、やはり地元がいいという思いがあったことから、千葉県での仕事を辞め、富山県に戻ることにした。

2001年末に富山県に戻り、年明けから求職活動をはじめた。しかし、3月末になっても正社員の仕事は見つからず、焦りを感じるようになっていた。また、酒癖の悪い父親との暮らしは耐えられず、できれば自宅を離れたいという思いも強くなった。

そんな状況の中で、求人誌で「寮付き派遣の仕事」を見つけ、富山県内にある派遣会社の事務所に行って面接を受けた。そこでは、勤務エリアや希望職種、寮付きか否かなどのアンケートに答えたところ、ある会社を紹介してくれた。

2002年4月(24歳)に、福井県内にある大手電子機器メーカーのセラミックコンデンサーを製造する工場に派遣された。工場では、製品をパーツごとに製造する工程で作業をした。勤めて最初の3年間は、工場内の一部の工程作業を派遣会社が請け負う形態での仕事であったが、指揮・命令は請負先会社の正社員から直接に出されていたため、不思議に思っていた。そうこうしている間に、偽装請負問題が新聞やニュース番組で取り上げられるようになり、その直後、雇用形態が請負労働者から派遣社員に変わった。たぶん、派遣会社(形式的には請負会社)に正社員として採用され、当初は請負労働者として扱われ、途中から登録型派遣社員になったんだと思う。この派遣会社では、社会保険と厚生年金、雇用保険に入っていた。それらの加入は、請負労働者であった最初の3年間は自主加入だったが、派遣社員になった4年目(2006年、28歳)からは強制加入に変わった。仕事は、2年目までは夜勤に固定されていたが、3年目からは仕事が増えて昼夜のいずれかのシフトに入るようになった。時給は約1,100円、2交替制で、1日約4時間の残業が織り込まれていて、拘束時間は12時間であった。月の給与は、残業代込みで24~25万円であった。寮費や社会保険料などが差し引かれて、手取りはだいたい15万円くらいだった。住民税は自分で払い、水道・光熱費は上限を超えると自己負担となっていた。計5年2カ月(2007年6月、29歳)働き続けた。

この工場働くようになって4年が過ぎるようになってくると(2006年、28歳) 派遣社員の中では長期勤続であったため古株ということになり、その工程では責任者といった立場に立たされ、他の派遣社員の面倒を見なければならなくなってしまう。しかし、自分は気を遣いすぎるところがあり、精神的にしんどくなってしまった。しかも、その分の手当は時給40~50円に過ぎなかった。おまけに、派遣先会社の正社員とは、仕事上の人間関係でうまくいかないところが出てきた。「自分は精神的に脆く自分自身のことと精いっぱい、『人の面倒を見る』と言われるのは、精神的につらかった。こうしたことを理由に、2007年6月頃(29歳)に、この派遣会社を退職した。

退職によって健康保険証を返却し、国民健康保険に切り替えなければならなかったし、厚生年金は国民年金に切り替えた。雇用保険もその時点で切れた。失業手当を申請す

ればもらえたと思うが、そこまで気が回らず、放置してしまっただけだった。最初の石膏ボード製造会社を辞めたときも、千葉県の新聞配達会社を辞めたときも、周りの人に言われて失業手当の受給を申請したのだが。また、この大手電子機器メーカーには、派遣社員から正社員に移る道もあったが、派遣先会社の課長の推薦と試験の合格が必要で、可能性はほぼゼロであった。

2007年6月頃に仕事を辞めて実家に戻り、2008年9月頃までの1年あまりの間、正社員の仕事を求めて求職活動をした。しかし、地元には、派遣社員を長年やってきた者を正社員として採用してくれる企業は、どこにもなかった。

景気が悪くなり派遣切りがはじまった2008年10月頃、同じ派遣会社から仕事を紹介してもらった。この派遣会社の登録がそのまま残っていて、週1回携帯電話に情報がメールで流れてきていた。1年間の正社員の求職活動がうまく行かなかったことを受けて、これをあきらめ、また派遣の仕事をしよと考へた。

こうして、2009年6月末までの9カ月間、この派遣会社の紹介で、西日本方面の3つの製造会社で登録型派遣社員として働いた。

2つ目の派遣先会社を辞めた2009年4月(31歳)に、なにかと連絡を取っていた弟と相談して、自己破産の手続きを行うことにし、それが認められた。

自己破産することになった原因は19歳(1997年)の頃にはじめて職に就いてまもなくして、ローンで買った車の返済である。当初は毎月の返済とボーナス時に返済していた。しかし、1999年10月末に怪我で正社員を辞めざるをえなくなり、ボーナス分の返済ができなくなったために、消費者金融で借金することになった。それもきちんと返済できず、かえって利息が積もって借金が膨らんでしまっていた。

2009年5月からは、岡山県にある半導体メーカーの子会社の半導体製造工場に派遣され、仕事に就いた。しかし、工場内で使われていた黄色蛍光灯が体にあわなかったし、トラブルにはいたらなかったとはいえ人間関係がうまくいかなかった。ここでの仕事をはじめた頃に工場内での配置換えを希望したが、求職者が殺到するほど多くいたこともあって、強く言えずにいた。そのうち、どうしてもいづらくなり、6月末に辞めることにした。

しかし、自分が正社員の仕事に就けないことで小言を言う父親の世話になりたくないという思いがあったため、実家には帰りづらかった。そこで、7月に、寮や住み込みの仕事を探すために大阪府にやってきた。住所登録が岡山県となっていたのでハローワークは利用できないと思い込み、ネットカフェのパソコンや携帯電話のインターネットで仕事を探し、複数の派遣会社に登録したが、結局見つかることはできなかった。大阪府に来てから1カ月ぐらいの間はネットカフェで過ごした。

8月になり、お金もついになくなってしまったので、公園で野宿したのを皮切りに、2週間あまり南の方へ向かって転々と野宿生活をした。携帯電話の充電もできなくなった。暑い盛り時期だったので、昼間は本屋や図書館などエアコンの効いているところで時間をつぶし、夕方涼しくなったら公園で寝泊まりする場所を探した。さらに南にある大きな市に移動し、最終的にその市役所に相談に行った。そして、相談窓口で、この自立支援センターを紹介してもらい、すぐに入所することができた。それは8月17日のことであった。

<現在の生活状況>

9月はじめからは、自立支援センターの紹介で大阪府の緊急雇用対策事業によって実施されている臨時就労に、就労体験ということで、1カ月契約の仕事に就いている。仕事内容は、府立の公園などの草刈りや片づけ作業である。1日6時間、週5日の就労で、月20日働いて10万円強になる予定である。就職活動については、現在は求人誌を見ているが、本格的な就職活動は1カ月後、今の仕事が終わってからしようと思っている。

無一文だとはいえ、ここでは食べていけるので、野宿生活に比べれば現在の生活はややゆとりがあるといったところである。今まで、借金もあり、お金がなくて食事をがまんしたり、医者にかかれなかったり、税金を払えないこともあった。先行きが見えないので、精神的には不安定だと思う。

富山県の実家にいる弟とは携帯電話で連絡を取っており、相談したり実家の状況を聞いたりしている。富山県には高校時代のコンピューター部の友人がおり、たまに連絡を取っている。弟によれば、父親も大工の仕事が減って最近土木の仕事もしているらしい。しかし、週に1~2日しか仕事がないときもあり、実家の生活は弟にかかっており、精いっぱいな状況のようである。弟に電話やメールをする、「お兄ちゃんはいいいね、離れていて」と言われ、生活が大変なようだ。

苦労してきた母親には、なんとか力になってあげたいと思う。弟にも迷惑をかけていると思う。こんな母親や弟の

思いの受け皿になりたいという気持ちが、今の自分の支えになっている。

<本人の望みや不安>

これまでの経験から見て、派遣社員と正社員の間に壁を感じる。自分は、このままではずっと派遣労働を続けることになりかねない。派遣労働には派遣切りがあり、生活設計ができない。この年齢になると正社員になりにくい、正社員でないと将来のめどが立たないし展望がひらけないので、不安である。自分には、配達や営業よりも製造業の方が合っていると思う。大阪府のある地域にたくさんある優秀な中小工場に、正社員の職があれば就きたい。しかし、製造業はこれから国内では縮小するのではないかと心配している。したがって、製造業以外で仕事を探そうかどうか迷っている。また、方向転換して手に職を付けるなら、若い今のうちだと考えている。

今まで経験してきた製造業での派遣労働は、短期の雇用ばかりで技能が身につかなかった。中には優秀な人もいますが、そんな人まで解雇されてしまっている。これでは、日本は中国などに負けるのではないかと思う。

この自立支援センターという施設を知らない人が多いと思う。自分も知らなかったし、知らない人は知らないままで、自分よりもっと困っているだろう。そういう人は多いんじゃないかと思う。もっと情報が困っている労働者に行き届くようにしてほしい。

調査番号：大阪37

調査日：9月5日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：44歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高等専修学校卒業
- 就労の有無：臨時就労中 ■現職：臨時就労（就労機会提供事業）、清掃関係職、就労体験（臨時職員扱い）
- 直近の収入：未回答 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども1人（離婚後別居中）
- 住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：高等専修学校卒業 アルミ製品メーカー・生産（正社員、7年） アルミ製品メーカー・生産（正社員、3年） 無職（失業手当受給） アルミ製品メーカー・生産（正社員、数カ月） 運転手等のアルバイトを転々（自営業と合わせて9年） 中古車等取扱会社・自営（事業主、アルバイトと合わせて9年） 物流センター・梱包（登録型派遣、2年） ベアリングメーカー・生産（登録型派遣、2年） 農業機械メーカー・生産（登録型派遣1年、契約社員2年） 車中生活（4カ月、失業手当受給） 現在、自立支援センター入所中（1カ月弱）/現在、臨時就労中

<初職につくまで>

1965年、大阪府生まれ。両親と三つ下の弟との4人家族だった。

父親は、自分が物心ついた頃までは「やくざ」をしていた。近所に兄弟分などもいて、家にはそうした人の出入りがあった。小学校の頃に「やくざ」を辞めて堅気になり、中学生の頃は運送会社の正社員として運転手の仕事をしてきた。父親の機嫌が悪かったり「キレた」とときには、壁に

ぶつけられたりするなどの暴力を受けていた。父親は対照的に弟にはどういうわけか怒ることが一回もなく、かわいがっていた。そのため、子ども時代から父親のことが嫌いで、今もその感情は変わらないし、関係も悪い。

母親はスーパーマーケットでパートをしていた。

子どもの頃は貧しく、差押えの紙を張られたこともあり、親戚にお金を借りて返済していたようだった。

勉強はやる気がなかったが、無断欠席や遅刻はしなかった。小学校のときは教室に一番早くつかないと気が済まな

い性分だった。中学校のときも、その性格は続き、いつも三番目には教室に到着していた。「ちょっと不良っぽかった」が、一人「熱血先生」がいて、よく「そんなことをしたらアカン」と指導してくれた。

中学校卒業後（1980年、15歳）は、高校卒業の資格が取得可能な高等専修学校の普通科に進学して、簿記などの資格を取った。

<初職からの経験>

高等専修学校卒業後（18歳、1983年）は、学校の進路指導により府内にあるアルミ製品の生産工場に正社員として就職した。工場の仕事だったので、学校で取得した資格は役に立たなかった。仕事は、金型にアルミを溶かして流し込み、枝きり鋸みの柄などを生産したりするものだった。取引先は大手メーカーが多かった。約120人の従業員がいたが労働組合はなかった。自宅から通っていた。雇用保険、健康保険、厚生年金はすべて加入していた。

25歳（1990年）、7年勤めた頃、辞める直前は加工課の係長になっていたが、社長のワンマンなやり方に不満を持ち退社した。当時は、退職しても「仕事がいくらでもあった」ため不安もなく、すでに次の仕事を見つけて就職した。失業手当も貰わなかった。

次の仕事は、府内にある大手製鋼会社の子会社だった。ここも前職と同業種で、アルミ製品を生産する工場だった。正社員として勤務した。

社会保険に加入していたし労働組合もあった。パブルの終わりごろだったので仕事は次第に少なくなっていった。

27歳（1992年）のとき、交際していた女性と結婚した。それまでは実家から通っていたが、結婚のため家を出て、妻と公団住宅に住み始めた。まもなく息子が生まれた。

28歳（1993年）のときに、製鋼会社を退職。自宅の近所に会社の労働組合の書記長の息子が住んでおり、その息子とも同じ職場で、趣味がお互いにパチンコということもあって仲よくしていた。しかし、その息子とパチンコを一緒にした際、何度か1万円を貸すことがあった。かれはお金を返すとき、いつもテーブルに投げてよこした。あまりに失礼な態度であったため、息子が3回目にお金を投げつけてきたときに、とうとう我慢できなくなり、後ろからその息子の首を持って「ちょっとまてや」と、大声で叱った（けんかはしなかった）。その光景を多くの社員達が食堂でコーヒーを飲みながら見ていたため、すぐに書記長の耳に入ったようだった。翌日、書記長に「仕事をやらなくてもいいから、おもての草むしりをやっとして」、「会社の外側の溝を掬ってといてくれ」と言われた。こうした明らかな嫌がらせを受けたため、自分から退職した。

同年（28歳、1993年）退職から1カ月後、仕事を探していたときに、ハローワークの前に張り出されていた求人の張り紙を見たら、偶然初めて勤めたアルミ製品製造会社の取引先の求人が出ていた。その会社は自分が勤めていた会社とは、すでに取引をしていないと聞いたので、わずらわしいこともないと思い、応募して正社員として就職した。その会社は、アルミ製品を製造する小さな会社で、家族経営的で経営者の親戚が5人も従業員となっていた。失業手当は1カ月分受給したが、すぐに仕事が決まったため、それ以降は受給しなかった。

同年（28歳、1993年）その職場に入って1年も経たない

ある日、仕事中に40キロの商品を運んだ際に、ぎっくり腰になり腰を痛めてしまった。病院に行ったが、腰の病気がいつから発症したものが証明しにくいということで、労災は認められなかった。1カ月は休業補償を使いながら仕事を休んで通院していたが、1カ月後に会社に翌月の休業補償の手続きをしに行くと、会社から「休まれると困るから辞めてくれ」と言われた。「自分では辞めへん」と粘ったが、次の職場に就職をしやすくするために「社長推薦」をつけることを条件に、退職願を書かされた。納得がいけないまま、辞めさせられた。会社は小さなところで家族経営だったため組合もなかった。

アルミ製品製造会社を退職後は腰の痛みもあって病院に通院したりしていたので、正社員の仕事は探さず、アルバイトを転々とした。この間の健康保険は、しばらくは前の会社の健康保険に任意継続で加入していたが、その後は収入が低かったため国保の減免申請をしていた。子どもがいたために健康保険だけはきちんとしていた。

アルバイトの内容は車に関係することが多く、軽トラックでの配送、コンビニの食品配送、車で土方の労働者を現場へ運ぶ仕事や、車部品の検査などのアルバイトをした。若い頃から車が趣味で夜中に友人と車に乗り、カーブをスピードを落とさずに曲がることを競い合ったりして遊んでいた。車のレースにも参加したこともある。

アルバイトや趣味を通じて平日頃、自動車部品を扱っていたことがきっかけで、友人と組んで車に関する古美術の商売を始めた。二つ分のガレージの広さの店を立ち上げ、車の整備士も雇い、モデルカーを作って展示をしたりした。しかし、その店の開業や運転資金で赤字が増え借金が膨らんだ。

37歳（2002年）商売は立ち行かなくなってしまった。その借金は妻の親が代わって返済してくれた。しかし、それと引き換えに、同年（37歳、2002年）妻と離婚させられた（息子は小学校4年生だった）。

離婚するのは自分の責任だと思ったが、子どもと引き離されたことに、強いショックを受けた。

離婚してから数カ月後、妻と子どもと住んでいた公団を引き払い大阪府下の実家に戻った。そのとき実の母親は実家を出ており、いなくなっていた。3年前に父親の暴力に耐えきれずに、パート先の男と家出をしていたのである（母親は今でも行方不明のままである）。父親はその後、他の女性を家に招き入れており、実家に戻ってからはその女性と住まいを共にしていた。

実家に戻って数カ月は「うろろろして」いた。友人からの誘いで、高級車を借りて車を走らせて遊んだりしていた。一方で、小遣い稼ぎのために、債権の取り立ての手伝いをした。そのうち、とうとう、父親にも怒られ、仕事を探した。

同年（37歳、2002年）、再就職した。登録型派遣の仕事で、仕事内容は物流センターでの夜勤専属の梱包作業だった。実家から職場に通い、その職場は2年ほど働いた。

39歳（2004年）物流センターを辞めた。その仕事を辞めたのは二重派遣されていたことが原因だった。自分は派遣会社に登録したため、派遣会社から当該物流センターに派遣されたと思っていた。しかし、1年半ほど働いたある日、同じ派遣会社からの派遣労働者の時給が自分より200円高いことがわかった。おかしいと思い調べたら、実は派遣会社に登録した際、派遣会社の規定で35歳までと

いう年齢制限があり、その年齢制限にひっかかったため、自分の知らないところで勝手に派遣会社に登録されていた。その事実を知らないまま、自分は派遣会社に雇われたことになっていた。つまり、派遣会社から派遣会社を経由して当該物流センターに派遣されていたのである。派遣会社だけでなく、派遣会社の分も手数料を一定割合を差し引かれていたために、派遣会社からの派遣労働者よりも時給が低かったのではないかと思う。そうしたことに加え、担当業務は本来5人体制で仕事をするはずだったが、一人が辞めた後、補充がなく、4人体制で無理な仕事をさせられていた。

これらの事情が重なったことから、派遣会社に賃上げを求めた。派遣会社は何度も「(時給を)上げます」と言いながらも、とうとう半年が経っても賃金があがらなかったため、諦めて仕事を辞めた。

その職場を辞めた後、父親と大げんかした。実家に戻ってからの自分の給料は父親に預けており、貯金してもらっていたが、実際には父親がパチンコや旅行などでそのほとんどを使ってしまったからだ。そのため、家を出て寮のある仕事を探した。

同年(39歳、2004年)以前の派遣会社の担当者が独立起業しており、その派遣会社を通じて府内にあるベアリング工場に派遣された。住むところがなかったため、その担当者についで住宅を借りた。当該住宅は派遣の寮ではなく民間の賃貸住宅で、駐車場込みで45,000円だった。2年ほどベアリング会社に勤めたが、急に仕事の量が減ったため2006年(41歳)に退職した。

同年、別の派遣会社に登録し、大手農業機械部品メーカーに派遣された。耕運機のトランスミッションの製造組立を担当した。派遣会社が借りているワンルームマンションの寮に入った。寮費は駐車場込み(自家用車を所有)で45,000円だった。一般の人には29,000円で借りられるところなので、敷金なども上乘せされていたようで、地域の相場から見ると高かった。

そのメーカーとの派遣契約は1年だったが、当時、そのメーカーは、行政指導を受け、派遣社員が働き始めて1年経過した後は全員を直接雇用することになった。仕組みとしてはまず期限付きの2年の契約社員(社会保険あり)として雇用し、その2年後に試験を受けて、合格した人は1年間の期間従業員の契約を結び、1年経過後、社員の推薦があれば一部の人々が正社員として雇用されるとのことだった(実際には大抵の契約社員は2年後の期間従業員登用試験に落ちていた)。

2007年(42歳)のときに、雇用形態が派遣社員から契約社員に変更になった。

2009年(44歳)1月になり、期間従業員登用試験を受験するはずだったが、試験の3日前に、インフルエンザにかかり、高熱が出たために試験を受験できないと会社に連絡した。インフルエンザという理由があったので後日テストを受けさせてくれるかと思ったが、受験しなかったことで、契約の意思がないとして扱われた。

同年3月、その後も全く受験や更新の話が来ないまま、契約満了となり寮から出なければならなかった。

また、1月に膝の関節炎を患い1月から2月にかけてほとんど出勤できなかったのと、メーカーの輸出量が減ったために残業もなくなり、収入が大幅に減っていた。そのため辞めるときには、次のアパートを借りられるほどの貯金

はなかった。

メーカーを辞めた後は、「道の駅」等に、所有していた車をとめて寝泊りをしながら仕事を探した。食事はスーパーで買ったものを食べて、入浴は友人の経営している銭湯に、車を走らせて3日に一度通っていた。しかし、仕事を辞めたときはまだ甘く考えており、退職金代わりの期間満了金20万円が支給されたことと、3カ月分の失業手当の受給権もあったため、再就職についてそれほどあせっていなかった。仕事は「ゆっくり探せばいいと思った。まさかこんなに仕事がない状況になるとは思わなかった」。

しかし、失業手当が切れても仕事は見つからなかった。ハローワークにも行き、仕事を紹介してもらって、面接希望の連絡をしても会社側からは「面接に来ては無駄ですよ」とはっきり断られることもあった。このときはハローワークより求人雑誌で仕事を探したほうが、面接が受けられる可能性が大きいと感じた。

結局、車での生活は8月11日まで続いた。この間、車で寝泊まりし不自然な体勢で寝ることが続いたため、ひどい腰痛になった。

2009年7月初旬(44歳)にもう一回ガソリンを入れたらお金がなくなるというときになって、農業機械部品メーカーで知り合った友人に相談した。その友人は宗教団体と政党の活動をしており、同じ宗教団体の仲間に自分の事情を話して相談してくれた。

数日後に友人からメールが来て、地元の区役所の生活支援課に連絡を入れてあるので、とにかく相談に行くようにアドバイスされた。しかし、福祉の世話になることや施設の集団生活に抵抗があり、このときは区役所には行かなかった。

8月に入り、大阪府内の派遣会社に登録をしてもらおうと出向いて行った。しかし、派遣会社の担当者に「年齢的におそらく待っていても仕事が見つかるのは無理だろうなあ」と言われた。その時点でお金がわずかしか残っておらず、「このままでは、死ぬか、悪いことをするしかないと思った」。携帯電話で大阪府の生活支援のサイト(いのちの電話)を見て、死にたくなり電話をかけようとしたが、「子ども(息子)の顔を見たい」という思いがふと頭に浮かんだ。思い直して、携帯電話の「住込みの仕事のサイト」をまたクリックして、見直した。

息子とは、2009年3月に来て以来、ずっと会っていない。それまでは会うたびにゲーム機やゲームソフトを買ってあげたりしていた。

8月10日、どうにもいなくなり区役所に相談に行った。「真夏にガソリンが切れた状態で車の中での寝泊まりは生死に関わるので、とにかく屋根のあるところに行きましょう」と区の担当者に言われ、面接を受け自立支援センターを見学した。その翌日に自立支援センターに入所した。

寝泊まりしていた車は自立支援センターにそのまま預かってもらっている。廃車にするにもお金がかかるし、後に活用できるかもしれないためしばらくセンターに置いてもらおうと思っている。

<今の状況と不安>

腰の痛みがある以外は健康だ。ひとまずここでは、このセンターの紹介で、あるNPOが就労体験の取り組みとし

てやっている公園清掃の仕事を、やれる範囲でやっている。

今でも友人と会ったりする。自分の将来にやや不安がある。年齢が40歳を超えたので、仕事が見つかるかどうか特に心配である。親は自立支援センターに入所していることは知らないし知らせたくない。住民票は夫婦で暮らしていたところにそのままにしている。

<政府への要望>

最低賃金を上げてほしい。

製造業派遣を禁止してほしい。40歳を超えると製造業の派遣しか行くところがないからだ。

また、派遣会社の取り分に上限をつけることを立法化してほしい。

調査番号：大阪38

調査日：9月5日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：36歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：中学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：交通広告業、電車の広告吊り、アルバイト ■直近の収入：月12万円程度
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：統合型の自立支援センター
- おおまかな職歴：中学校卒業 建設会社・作業員（正社員、3社、計10年） 飲食店・接客（正社員、3社、計5年） 風俗店・店員（正社員、1年） 建設会社の飯場・建設作業員（日雇い、5年） 野宿生活（1カ月弱） 現在、自立支援センター入所中（入所後）交通広告会社・電車の広告吊り（アルバイト、1カ月）

<仕事に就くまで>

1973年、大阪府生まれ。

両親と4人の姉の7人家族であった。自分は末っ子である。家は公営団地であった。父親は水商売関係の店で働いていた。母親は専業主婦であった。しかし、15歳の頃（1988年）、父親は身体を壊して仕事をしていなかった。母親もずっと家にいた。とはいっても、生活水準が下がることはなかった。はっきり覚えていないが、上の姉たちが生活を支えていたのだと思う。

勉強する気がなかったため、中学校はさぼりがちで、たまにしか行かなかった。また、中学校を卒業した後は進学せず建築関係の仕事に就こうと考えていた。両親は好きなように働けばよいという方針だった。4人の姉のうち3人は高校を卒業している。

<初職からの経験>

1988年3月（15歳）に中学校を卒業して、しばらくしてから求人情報誌で探した建設会社に就職した。この会社は、ビル建設やマンション建設などを行っていた。最初は、土工の見習いとして働いた。一応正社員だったので、日払いではなく月払いで賃金をもらっていた。社会保険に加入していたかはよく覚えていない。というよりも、あまり意識していなかった。

その後、3～4年おきに建設会社を替わり、建設業の仕事辞めた25歳（1998年）までに3社を渡り歩いた。建築業では、下請け関係ができていて、最初に就職した会社は孫請けのような小さな会社であったが、仕事の腕を上げるとその上の会社や条件のいい会社から引き抜かれた。いずれの会社でも、建築現場の軽作業が中心であったが、アスベスト除去の資格や高所作業の資格などを取得した。ただし、自動車の普通免許はとっていない。

はじめて就職した頃は大阪府にある実家から通っていた

が、18歳（1991年）のとき、近くの市内にアパートを借りて、1人暮らしをはじめた。20歳（1993年）になってある女性と付き合うようになりその人と同棲をはじめた。3カ月ほど同棲した後に、同年、正式に結婚した。しかし、なかなかうまくいかず、2年後に離婚した（22歳、1995年）。

他方、バブル経済が崩壊して建設業はいったん仕事が減っていたが、1995年1月の阪神淡路大震災が起きたことで、その後仕事が急激に増えた。たぶん、今までの経験の中ではもっとも仕事のあった時期だと思う。収入も、月に最大で60～70万円を稼いでいた。

しかし、仕事が忙しくなるにつれ、職場での人間関係がギクシャクしはじめ、最終的に相当にもつれてしまったため、その会社に居づらくなってしまった。そこで、25歳（1998年）のときに、会社を辞めることにし、別の業界に転職することにした。

また、この頃に父親が亡くなった。しかし、父親の葬儀には、呼んでももらえなかった。

建設会社を辞めてからは、建設の仕事で時々行ったことがあり土地勘のある和歌山県のある市で飲食関係の仕事を見つけた。一応正社員扱いで、その会社の寮に住んだ。仕事内容は、調理ではなくフロント業務であった。その後5年間に、和歌山県で2カ所の飲食店で2年間仕事をし、あとの3年間は東京に出て同じような飲食店関係の仕事をした。いずれも正社員の扱いとはいえ、なにかと職場の人間関係トラブルの多い世界で、定着して働けなかった。また、以前の建設業に比べ給料は低いし、休みが少ないこともあり、この業界に見切りをつけることにした。また、やはり長年暮らした大阪府が恋しくなったこともあって、30歳（2003年）になって、大阪府に帰って、仕事を探すことにした。

地元に戻った当初、一番上の姉に無理を言って、姉名義でアパートを借りてもらい、そこに1人で暮らした。仕事は、ひとまず風俗関係の店で正社員として働くことにした。しかし、収入は必ずしも多くなかった。そこで、以前も経

験のある建築業で仕事を探すことにした。

翌2004年(31歳)に、建設業の飯場に入り、大阪府南部を中心にいくつかの飯場を転々として、建設日雇いの仕事をした。仕事探しでは、スポーツ新聞の求人広告や、建設日雇い仕事の寄せ場も何度か利用した。

このため姉名義のアパートを出ることになり、建設飯場や、たまに日雇い労働者が集まる街にあるドヤ(簡易宿泊所)などを利用するようになった。それ以降は、家族とほとんど連絡をとらなくなった。2005年(32歳)に母親も亡くなったが、葬儀には出席しなかった。

こうして、2009年5月末(36歳)まで、建設日雇いの仕事で、大阪を中心に転々と飯場を移動する生活が続いた。2008年のはじめの頃からは、大阪府南部で人夫出し飯場が比較的密集している地域の飯場で寝泊まりしながら、ある建設会社で1年半くらい日雇いのかたちで勤めていた。

しかし、2008年の年末以降、仕事が急激に減少し、週に1~2日しか仕事が出ない日もあった。仕事がなくても飯場代は毎日3,000円ほどかかり、赤字になるようになってきた。そして、ついに2009年5月末には、解雇され飯場を出ざるをえなくなった。

飯場を出てからは、お金が底をついたため、公園などで野宿をすることになった。ネットカフェは利用したことはない。野宿生活を2週間ほどした頃、飯場の同僚たちが話していた自立支援センターについての噂話を思い出した。そこで、近くの市役所に行き、巡回相談員を紹介されて相談することができた。その結果、この自立支援センターに入所することとなった。自立支援センターには、6月末に入所した。

<現在の生活状況>

入所後2カ月ちょっと経つが、やはり自分がこれまでやってきた建設関係の仕事を探して、求職活動を行っている。しかし、うまく見つからずにいる。したがって、将来については、やや不安を感じている。

現在は、ひとまず電車内に吊り広告を掛けていく仕事をやっている。8月はじめに、自立支援センターの職業相談で、この事業をやっている会社の人と面接をし、その後会社での面接を経て、アルバイトとして採用された。仕事は、1日7時間労働で週6日である。賃金は、今までもらった中で最低額の時給800円弱である。「ほんとに最低に近い金額や」と思う。したがって、この収入だけでの生活は難しい。この仕事で1カ月働いても、建設労働の安定していた時代の稼ぎには程遠く、賃金に相当不満をもっている。したがって、しっかりした建設関係の仕事を探している。しかし、週6日労働のためハローワークに行く時間はとれないので、求人誌をみて探している。年齢はまだ36歳のため、採用に問題はないだろう。もっと稼げる仕事があればちがうところで働きたい。勤務時間や条件等にこだわりはない。

4人いる姉たちとは、母親が亡くなる前(2004年頃から)から連絡をとっておらず、結婚式にも呼ばれなかった。

中学校時代の友人や昔の友人との付き合いは、今ではほとんどない。しかし、自立支援センターや前にいた飯場で親しくなった人の中には、遊び友達はある。また、現在付き合い合っている彼女もいる。

調査番号：大阪39

調査日：11月19日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：24歳 ■住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：就労中
- 現職：製造業、生産職、パート ■直近の収入：勤労収入月5~10万円/生活保護受給
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども1人 ■住居：母子生活支援施設
- おおまかな職歴：キャバクラ・ホステス(アルバイト、1年<中学在学時>) 高校入学・中退(1年) 飲食店のアルバイトを転々(数カ月) 定時制高校入学・中退(1年) 電気機器修理会社・修理(登録型派遣、数カ月) 電気機器修理会社・修理(アルバイト、6カ月) 自動車内装整備会社・クリーニング(パート、1年未満)+焼肉店・店員(アルバイト、1年未満)、かけもち 電子機器メーカー・生産(登録型派遣、6カ月) 飲食店・ボーイ(アルバイト、6カ月) 飲食店・パーテンドー(正社員、1年) 結婚・出産・離婚 現在、母子生活支援施設入所中(1年)+生活保護受給中(1年) (入所後)パソコン入力、厨房、コールセンター等のアルバイトを転々 プラスチック製造・生産(アルバイト、6カ月) 現在に至る

<仕事に就くまで - 中学卒業まで>

1985年、大阪府生まれ。

地元の公立小・中学校に通っていた。

現在、母親と兄が2人いるが、長男は母親と実家で暮らしている。次男は結婚してすでに家を出ている。父親と母親は小学校1~2年生のときに別居・離婚しており、父親とは以後連絡を取っていない。

中学生の頃(1998~1999年ごろ)から、学校に内緒で、

キャバクラでアルバイトをしていた。そのため、どうしても遅刻気味で学校には昼から登校することも多く、欠席も多かった。当時は「夜の仕事」でも身分証明書を提示する必要がなかったので、「年齢をごまかして」働いていた。親からはお小遣いをもらったことがなく、自分の分は自分で稼がなければならないと思っていたこともあり、「お小遣い」稼ぎに働いていた。キャバクラの時給は、1時間2,500円~3,000円で、客がドリンクを注文してくれたらその売上げが上乘せされて支給される仕組みだった。

15歳（2000年）高校進学を考えたとき、当時組立や工業関係のことに興味があったため、中学校の先生に工業高校に行きたいと相談したら、「女の子やのに」と言われた。当時の認識としては、男子学生が工業科に進学するものという固定概念が強く、先生や親にも反対されたため、言われるがままにあきらめた。

工業高校の進学をあきらめたが他を選ぶにも興味がわかず、受験勉強するのが嫌だったため「レベルの低い」ところを選ぼうと思い、当時の親友もその高校に進学することを決めていたこともあり、親友と同じ私立高校に進学を決めた。

<高校入学～初職>

16歳（2001年）高校入学。その高校では、自分が入学した学年までは女子校であり、先輩の学年に「レズ」が多かった。当時、バレー部に所属し、髪の毛がショートで男の子っぽく「ヤンキーみたいな感じ」に見られていた。そのためか、女子から「キャーキャー言われる」ことが多く、靴箱には、頻繁にラブレターが入っていた。そうしたことに嫌気がさし、「もう無理だから…」と母親を強く説得して、高校1年生の夏で中退した。その後、飲食店でアルバイトを始め、同じような飲食店を転々としたり、掛け持ちでアルバイトをしていた。

17歳（2002年）公立工業高校の定時制に入学した。しばらくは通学していたが、アルバイトなどで夕方の1時間目の授業が間に合わなくなり1年も経たず中退した。

定時制に通っていた当時、17歳（2002年）のときに登録型派遣社員として大手電気機器メーカーの下請会社で働いた。そこでの仕事は、客が持ち込んだ故障したテレビやDVDを修理して届ける仕事であった。派遣会社の社員にいるんな取引先や仕事場を見せてもらっていたときに、同系列の関連会社の修理部門の責任者に気に入られ、転職し、アルバイトとして働き始めた。勤務地は大阪府内で、時給は800円だった。6カ月ぐらい経った18歳（2003年）の頃、もともとバレーボールで膝を悪くしていたこともあったが、作中に膝を壊し、手術が必要になりそのまま辞めた。会社からは労災などの保障はなかった。

<沖縄での暮らし>

修理会社の仕事を辞めた18歳（2003年）のとき、母親の出身地でいとこなどもいる沖縄に行けばなんとかなると思いい、沖縄県で職を探すことにした。沖縄に行った当初は、いとこの家に泊まっていたが、仕事が決まったと同時に一人暮らしを始めた。車関係の仕事にパートとして就くことができ、仕事の内容は中古車の内装をクリーニングする仕事であった。時給は620円と安く、それだけでは生活していけなかったため、夜は掛け持ちをして焼肉店で働いた。焼肉屋の時給は604円で当時の最低賃金を下回っていた。友人に「焼肉店を訴えたら勝つ」と、アドバイスされたが、とくにそれほど争う気もなく、反対に仕事や勤務の融通がきき居心地がよくなったので訴えるようなことはしなかった。そこでは半年から1年働いた。

沖縄では、一人暮らしの後、現地で知り合った男性と同棲をした。その際男性との間にDVがあった。自分の口調が大阪弁のためケンカ口調に聞こえるらしく、それが腹

立たしかったらしく、いつも怒っていると間違われ、暴力をふるわれた。

仕事をしているとき、上司に「車のことを勉強するなら車の免許を取ったほうが理解が深まるのではないか」と車の免許を取るよう勧められた。自分も車の免許を取りたかったが、沖縄に住民票を移していなかったため、免許取得のために一旦大阪に戻った。大阪に戻ると、実家の生活が安心して居心地が良かったため沖縄に戻る気がなくなり、そのまま大阪にすることにした。

<派遣先での生活～妊娠中絶>

大阪に戻り、免許取得後、19歳（2004年）のとき、登録型派遣社員として京都府にある派遣会社の寮に住み込みながら、工場で働いた。その派遣会社の寮は山奥にあり人里から離れていた。仕事は電子機器メーカー関係の下請けの仕事で、作業は立ち仕事でグループごとに分かれ、小さい筒に樹脂を入れるという細かい作業であった。

同年（19歳、2004年）その職場で、ある男性と出会い妊娠をした。その男性とは寮の部屋が隣同士で、4歳か5歳年上だった。その男性はお酒を飲むと暴力をふるった。母親に男性のことと妊娠を相談したらおなかの子を「墮ろせ」と言われたので、その通りにした。結局、その男性とは結婚まで至らず、「先を見越した付き合いではなかった」。

その派遣の寮を出て男性のもとから大阪に逃げて帰ってきた後、男性は、大阪の実家を探しだし追いかけてきた。男性に子どもを墮ろしたことを告げると「へこんで帰って行った」。その男性とはそれっきりで以後連絡はない。結局、派遣も半年で退職することになった。

妊娠中絶して3～4カ月後の20歳（2005年）の頃に、「夜の仕事」をはじめた。場所は大阪の高級繁華街で男性スタッフ役の「ボーイ」として働いた。ボーイとして働こうと思った理由は、中学生のときにアルバイトしたキャバクラの経験のなかで、「酔っ払ったおっさん相手が嫌」だったり、女性としての接客に嫌気がさしたためであった。ボーイの仕事の内容は、客から「女の子をかえてと言われたら好みの女の子にかえたり」、氷を作ったりといった接客であった。時給は900円から1,000円程度で、同じ店の女性のホステスの3分の1程度の賃金であった。ボーイの仕事は、繁華街内のお店を転々と変わりながら、半年間ぐらい続けた。勤務時間ははっきり覚えていないが、深夜の仕事であった。

<結婚～離婚>

21歳（2006年）のとき、接客であるボーイの仕事から、ダーツバーのバーテンダーになった。バーテンダーになって仕事の内容は変わり、ボーイより経験が必要とされたが、給料は上がらなかった。身分は個人経営の店舗の「正社員」で、店長候補であった。給料は固定給18万円でそれほど高くなく、健康保険等の社会保険はついていなかったが、ダーツバーで働くのは「楽しかった」。

22歳（2007年）で、「店長になる直前」と言われていたとき、元夫と知り合った。元夫と付き合ってからすぐ同棲し、1カ月も経たないうちに妊娠した。元夫は自分の働く店（ダーツバー）の姉妹店である、近くのダイニングバー（本店）の従業員であった。姉妹店の従業員同士は閉店後、ダーツ

パーに来て食事をしながら、ダーツバーとダイニングバーとの合同ミーティングをするのが日課であった。そんななか、元夫も仕事が終わった後ダーツバーに立ち寄り、いろいろと手伝ってくれているうちに仲良くなり、付き合うようになった。

しかしながら、元夫は浮気性であり、付き合っただけで1カ月目で筆箆をあげたら、女性の下着を発見したり、前の彼女の写真が出てきた。

妊娠3カ月頃(22歳、2007年) 別れようと思ひ始め、子どもは一人で育てるしかないと思ひ、大阪の実家に戻った。実家に戻ってからの連絡は、かろうじてメールと電話のやりとりだけがあったが、そのときはすでに、心のどこかでよりを戻してやり直す気は失っていた。

そう思ひながらも妊娠していたため、再び数週間後に、もう一度元夫と一緒に住むことになった。仕事を辞めていたため、元夫が生活費を入れてくれるのかと思ひしたが、机に1万円だけおいてあり、「これで1カ月やっていって」と言われたり、帰ってきたら「めし」と言うだけであった。家にはほとんど帰ってこなかった。この頃は自分がそれまで働いて貯めた貯金を切り崩して生活していたが、生活するのに大変困った。

妊娠9カ月目(22歳、2007年) 陣痛がきた日に婚姻届を出した。婚姻届は2人で役所に行って提出したわけではなく、無理やり元夫に「書いといてな」と婚姻届を渡して、元夫に提出してもらった。元夫は、それまで32歳と言っていたが、そのときになって実年齢は39歳か40歳であることがわかった。

このときには、別れようと思っており、全く結婚する気がなかった。それにもかかわらず婚姻届を出した理由は、子どもの父親をはっきりさせたかったからであった。父親(元夫)と会うことがなくても子どもの血の繋がった父親を証明するには婚姻届しかないと思ひたことと、はっきりとした形でわかるように残したかったからであった。

22歳(2007年)のときに男児を出産した。元夫は子どもが産まれた次の日と退院の日だけ病院にやって来た。しかし、自分の子どもへの愛情など全くなく、退院の日には、車で迎えに来たのはいいが、そのまま母子ともに家に連れて帰ってもらえると思ひたら、実家で降ろされ、元夫はそのまま職場へと向かっていった。元夫との間にはDVはなかった。

出産以後は実家に住んでいたが、出産して3カ月後(23歳、2008年)に、離婚届を夫に送りつけた。出産のあとようやく一人で動けるようになったので自分自身で役所に離婚届を出しに行き、離婚が成立した。離婚はそれほどめめることもなくスムーズに行えたが慰謝料はゼロだった。離婚時には、元夫が今後子どもと会う約束はしなかった。元夫は子どもに興味がない様子で要求もしてこなかった。

出産してからは、ずっと実家で暮らしていた。母親は子育てに関しては、「親は(子どもより)先に死ぬからいいけど、(親が子どものために)何もできひんかったら残された子どもが悲しむで」と言い、自分で子どもを育てる苦勞を味わったほうが良いという考え方であった。母親は、同居しながらも、子育てにはほとんど手をかさなかった。元夫からの経済的支援は全くなかった。

しばらくは自分と子どもの食費もなく、母親の老後の貯金を崩しながら生活していた。子どもが産まれてから実家にいる間は、母親に食費・医療費等を負担してもらって生

活していた。

子どもが6カ月になった頃(23歳、2008年) 大阪府内の福祉事務所に相談に行った。生活が厳しいことを告げると、窓口で「保育所で子どもを預かってもらえれば働けるでしょ」と言われた。反対に担当者から「どうやって生活しているのか」と尋ねられ、母親に援助してもらっていることを言うと「追い返された」。

離婚してからも児童手当受給などの書類は元夫のもとへ案内がいついたため、元夫に書類関係の手続きはしているかと聞いたら「している」と答えたものの、実際は行なわれていなかった。住民票の変更手続きをしていなかったため、書類関係は全て元夫のもとへ届いていたのである。

母子生活支援施設に入所するときに、書類関係は調べて全て手続きを終えた。

<母子生活支援施設入所の経緯>

23歳(2008年)のときに、大阪府内にある母子生活支援施設に入所した。2008年7月に緊急一時保護委託にて入所し、8月に本入所となった。

当時、母親は実家で和裁の仕事(パートも掛け持ち)をしていたが、子どもが大きくなるにつれ家のなかを動き回り、床などに針が落ちていたら子どもに危険なので、母親から、自分で家を探して「自立してみないか」と言われたことがきっかけで、引越し代や生活を立て直すためのお金もなかったために、地元の福祉事務所に相談したところ、母子生活支援施設に空き室があることを聞き、入所を考えた。

福祉事務所の紹介で施設の施設長に面談し相談したところ、これまで子どもと2人で住んだ経験がなかったので、1週間練習として「お試し期間」で住んでみないかとアドバイスされ緊急一時保護委託の扱いで入所した。DVなどに使われる緊急一時保護を使って入所したが、本来の「緊急ではなかった」。実家では暮らすことが不可能になり住居を求めていたため、緊急の理由には該当しなかった。入所まで話がとんとん拍子にすすんだので、施設の担当者から運が良いと言われた(執筆注:本ヒアリング調査実施当時、同施設では入所待ちがでていた)。

入所時から生活保護費を受給しているが、施設の利用料はない。

また、国民年金の保険料は親がずっと払っていた。現在は免除(生活保護による法定免除)されている。健康保険は生活保護を受給しているため加入していない。

施設に入所した当初(23歳、2008年) 施設の担当者とハローワークに行き、職を探したが「全然良いのがなく意味ないな」と思った。ハローワークが役に立った記憶はない。当時のハローワークはまだ求職に来ている人が少なかった。

職探しの方法を代え、仕事は携帯のアルバイトサイトで探した。仕事は短期間のもが多く、パソコン入力・厨房補助・コールセンター等いろいろな仕事をやってきたが、子どもが風邪を引いて1週間休んだりしてクビになることが多かった。

<現在の暮らし>

現在の仕事も携帯のアルバイトサイトで探したもので、自営業主のもとでのパートでプラスチックの製造加工の職である。現在で6カ月か7カ月ぐらい続いており、時給850

円で月曜日から金曜日の9時から5時まで働いている。雇用保険らしき保険料が数百円引かれている。2009年6月と7月は収入が生活保護の最低生活費である12万円を超えたため、7月だけ生活保護が一時切れた。しかし、子どもが風邪を引いたり、自分が風邪を引いたりして数日休んでしまうことが多く、8月の収入は3万円だったため、その後生活保護は給付されている。そういうときにお金がないと困るから生活保護をつなげておこうと生活保護の担当者に言われ、生活保護をそれ以降も継続受給している。

施設には母親が訪れたり、反対に週末に実家に帰ることも多い。現在、母親は和裁の仕事がほとんどなく、収入もない。和裁は仕上げるのに時間がかかるわりには、労賃は安い。月に4万円稼げれば良いほうである。パートもしていたが、体力が続かず辞めている。母親も生活が厳しく時々「食料、どないしょ？」と言われる。雨が降っていないければ、毎週末自分の残った野菜等を実家に届けている。

母子生活支援施設の雰囲気は明るいと思っている。現在は寮の同一フロアの入居者の班長を担っており、毎月会議などに参加している。その会議は寮のルールや入所者の悩みを共有したり相談したりする場である。

母子生活支援施設はすぐに相談できるし、子どもをすぐ預けられる。子どもと口ゲンカをしたら、保育士が仲裁に入ってくれ、保育士から子育ての専門的な説明を受け、納得できるため、安心できる。他のことで、相談したいときには、中学校のときの友人か今の職場の友人に相談することが多い。2歳になる子どもとの関係は、今のところ問題ない。

<将来の展望>

施設を「来年ぐらいには出たい」。仕事をしながら子育てをしたいと考えている。生活保護は切りたいという思いがあるが、一方で子どもの体調も変化しやすいので、本格的に仕事を始めても受けてもいいのなら安心感のため受け続けたい。外に出て働くのは苦にならないが、できるだけ子どものそばにいたい。

現在、これといった資格は持っていない。とくに取りたい資格はないが、できるのならピーズ等でアクセサリーを作る技術が欲しい。細かい作業が好きで先日、通信教育の資料請求をしたところである。趣味の範囲で行い、ネット販売等をして副業としてやっていきたい。

調査番号：大阪40

調査日：11月19日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：20歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：就労中
- 直前職：飲食店、飲食店関係職、アルバイト ■直近の収入：勤労収入月5～10万円 / 生活保護受給
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども1人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校中退 妊娠・出産 母子生活支援施設入所（2年）+ 生活保護受給開始（現在も受給）
（入所後）介護ヘルパー資格取得講習（4カ月） 老人ホーム・ヘルパー（アルバイト、半年） プール・監視員（アルバイト、1年） 飲食店・店員（アルバイト、10カ月） 民間賃貸住宅転居、現在に至る（引き続き生活保護受給中）

<仕事に就くまで>

1989年、大阪府生まれ。

小さいころは母親と兄妹4人、自分の合計6人家族で大阪府内に住んでいた。父親は顔も覚えていない。自分は末っ子で、高校生のころにはすでに上の兄妹3人は独立しており、一歳年上の姉と母親の3人暮らしだった。母親が働き、生計を立てていたが、生活が苦しいと感じたことはほとんどなかった。しかし、「あんまり苦しくないと感じてただけかもしれへん」。

15歳（2004年）自転車で行ける範囲にある近くの高校に入学したものの、行っても遊ぶだけだったため留年し、それ以降あまり通っていなかった。そのため、一緒に遊ぶのは学校の友人よりももっぱら地元の友人だった。生活は昼夜逆転していた。この当時に居酒屋でアルバイトをしたことがあった。

17歳（2006年）のときに母親に妊娠しているのではないかと指摘され妊娠に気づいた。その後、高校を中退した。

18歳（2007年）のときに、子どもが生まれた。子どもが4カ月になったころ、母親から、家の近所にある母子生活

支援施設に入り、生活を改めるように言われ、入所した（あわせて生活保護の受給を開始した）。

同年、「将来的に役に立つかな」と思い、介護ヘルパーの資格を取得するため、専門学校に4カ月通って資格を取得した。

<初職からの経験>

18歳（2007年）のとき、母子生活支援施設のすすめで介護ヘルパーの資格を取得した後に、施設の隣にある老人ホームでアルバイトとして働き始めた。勤務時間は一日8時間で週5日程度だ。仕事が大変だとは思わなかったが、高齢の人たちは風邪やインフルエンザをひきやすく、自分経由で子どもたちにもそれをうつす危険性もあり、この危険の割に賃金が時給800円と安いことが不満であった。そこで、この仕事は半年程度で辞めた。「病気を移されるんですよ。風邪とか、インフルエンザとか。免疫力低いから、おじいちゃん、おばあちゃんは...」。

しかし、仕事をしていないと施設の保育園が子どもを預かってくれないし、融通が効かなくなるため、19歳（2008

年)のとき、繋ぎとしてプールの監視員のアルバイトを始めた。この仕事も時給が安かった。

プールで一年ほど働いた後、2009年(20歳)2月から全国展開している飲食店でキッチンのアルバイトを開始(現在も就業中)し、プールのアルバイトを辞めた。時間は10時から15時までの5時間、平日だけ働いている。この仕事を選んだのは「時給が高いから」だ。今は一部の調理しかできないため時給は900円。賄いもあるし、食事を自宅にもらって帰れるのも都合がいい。

<現在の生活状況>

施設に入所後は、生活保護を受給しながら、児童扶養手当、児童手当、アルバイトの収入で生活していた。生活していて苦しいと思ったり、困ったりすることはほとんどなかった。現在の生活状態も「ふつう」だ。不便な点は保育園が遠いことである。施設に入所してからは生活も規則正しくなり、身長もだいぶ伸びた。「産んだときは18歳やから、まだ伸び盛りでしょ。ここに入って夜はしっかり寝るし、朝はちゃんと起きるし、三食食べるし。」

子どもは産まれたばかりのころから、夜泣きもぐずることもなかった。育てるのはそれほど大変ではなかった。子どもが生まれてからはずっと子どもと過ごしており、友人とはほとんど遊ぶことはなくなった。子どもと遊ぶほうが楽しいからだ。「子どもを連れてどこでも行くようになったよ」「今は産んでよかったかなと思う。以前はまだ、遊びたいというほうが大きかったけど。」

母親とはとても仲が良く、娘をとてもかわいがってくれている。女子の孫が初めてなので、「(母親は孫を)そうとう甘やかしてます」。兄姉とはあまり仲は良くないが、姉に娘を会わせることもあり、全くの疎遠というわけではない。子どもの父親とは、たまに連絡を取る程度で、現在は

ほとんどつきあいが無い。

2009年8月(20歳)に、家賃5万5千円、駅から三分、新築の一軒家、という良い賃貸物件を見つけ、施設を退所した。子どもの保育園が電車で四駅分くらい離れており、送り迎えが大変なのが難点である。「でもいいかもしれない。帰りしなに寄り道ができるから。ここ(施設)だったらすぐ帰ってこなあかんから」。

<本人の望みや不安>

困っていることは、それほど思いつかない。大きい荷物を運ぶのが大変など、日常的に生活するうえで困ることは多少ある。

仕事については今は子どもが小さいので、あまり長い時間働けないし、今の仕事量くらいでいいと思っている。子どもが小学校にあがったら、介護の資格を活かして老人ホームで正職員として働きたいと考えている。資格を取得しようと考えた理由も、正職員になりやすく、将来役に立つだろうと思ったからだ。

老人ホームで働いていたころ、正職員とアルバイトがほとんど同じ仕事をしているのに給料が全然違うことに不満を感じた。「ありえへんと思った」。

家賃の安い市営住宅に住みたいと思い、何度か応募しているが、競争率が高いので実現していない。

将来は正社員の仕事を見つけて市営住宅にうつり、生活保護を切りたいと思っている。一方で、「(子どもが)大きくなって生活保護切れたときに、正社員の仕事につけていなかったら生活が」やっていけるか不安という気持ちもある。

「『市営住宅を作って』って(行政に)言って(ほしい)。(民間の賃貸住宅は)家賃高いもん、ほんまに」。

また、児童手当を三歳で減額するのは早いので、もっと期間を延ばしてほしいとも思う。

調査番号：大阪41

調査日：11月19日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：49歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：専門学校中退
- 就労の有無：就労中 ■直前職：インターネット販売業、事務職、アルバイト
- 直近の収入：勤労収入なし/生活保護受給 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども2人
- 住居：母子生活支援施設
- おおまかな職歴：高校卒業 専門学校中退 デザイン事務所・デザイナー(正社員、1年) スーパーマーケット・会計事務など(アルバイト、4年) デザイン事務所・デザイナー(正社員、1年半) 電気機器メーカー・図面処理(登録型派遣、4年) 工務店・会計事務など3つのアルバイトの掛け持ち(8年) テレホンアポイント(アルバイト、2年) 母子生活支援施設入所+生活保護受給開始(3年)、現在に至る(入所後)ネット通販会社・入力事務(アルバイト、3カ月) 現在求職中

<仕事に就くまで>

1960年、大阪府生まれ。

実家は、父親は自営業、母親がその会社の手伝いをして

いた。中学校3年生(15歳、1975年)のとき、家庭の暮らし向

きは苦しかった。

父親が経営する会社の事務を手伝うために、不本意ながら商業高校に進学(15歳、1975年)したが、高校3年生(18歳、1978年)のときに父親の会社が倒産した。

美術が好きで、漫画を描き、漫画雑誌に応募したことがあった。

商業高校を卒業後（19歳、1979年）昼間はアルバイトをしながら、夜間は専門学校でグラフィックデザインを学んでいた。半年間通ったものの、後期の授業料が払えず（アルバイトで貯めたお金を父親に貸したが、父親が返してくれなかった）退学した。

同年、仕事を探すため大阪府にあるデザイン事務所に自分の作品を持ち込んだところ、運よく正社員として就職できた。

<初職からの経験>

19歳（1979年）デザイン事務所に正社員として入社。仕事が忙しく、21時、22時までの残業がよくあった。仕事が終わるのが遅く実家に帰ることができなかったため、同年、一人暮らしを始めた。一人暮らしを始めてから同級生だった恋人と一緒に住むようになった。

同年、その男性と結婚した。結婚してからも勤務していたが、残業で帰りが遅かったため、夫の両親に仕事を辞めるように言われ、仕方なく退職した（19歳、1979年）退職後は、大手スーパーで主に店内放送と会計処理のアルバイトをしていた。

23歳（1983年）のとき、妊娠したためスーパーでのアルバイトを辞めざるを得なくなった。24歳（1984年）長女を出産。

夫は調理師で、20代前半で給料が高くなかったため、長女が2歳（26歳、1986年）のときに、家計を補助するため再び、デザイン事務所に正社員として入社した。このときは求人雑誌で職探しをした。会社では、イラストデザインと文字の構成デザインを担当した。

「そのころは仕事が好きで残業をよくしたため、子どもの面倒を見てあげたりするような、子どもとゆっくりと接する時間がなかった」。子どもの面倒は夫や近所の友達に任せることがよくあった。帰るのが遅いときには夫が子どもに料理を作ってくれることもあった。近所の友達にはときどき長女の保育園の迎えを頼んでいた。

27歳（1987年）イラストデザインの仕事を始めてから1年半後に、大手電気機器メーカーで働いていた友達に自分の会社に来て手伝ってほしいと頼まれた。新人が2次元の図面をコンピューターで3次元にすることができないため、手伝ってほしいとのことだった。「だれにもできる仕事じゃないと言われると、好奇心が湧いた」。イラストデザイン会社を辞めて登録型派遣社員として大手電気機器メーカーで働くことにした。その会社では4年間働いた。

31歳（1991年）のとき、長男の出産のため、電気機器メーカーを辞めざるを得なくなった。

33歳（1993年）のとき、夫がリストラされ、夫と離婚した。この当時は、子どもたちを養うために3つのアルバイトを掛け持ちしていた。主に働いていた職場は工務店で、仕事の内容は会計事務だった。会計事務の仕事はよくこなせていた。この時期は会計士の国家資格をとろうと思っていた。

41歳（2001年）この当時付き合っていた男性との間に子どもができ、出産のため仕事を辞めることにした。妊娠が判明するまでは相手の男性と結婚する気はなかったのだが、子ども（次男＝再婚相手との初めての子）ができたために再婚することにした。

同年、出産後、子育てのため、働く時間が自由に決めら

れるテレホンアポインターの仕事を見つけ、そこで2年間働いた。給料は900円からのスタートで、成績がよければ給料が増えていくシステムだった。

43歳（2003年）のとき、時給は1,350円になっていたが、次女（再婚相手との二番目の子）を妊娠したため退職した。「人生の中で、結婚、出産などで自分の意思で行動できない場合が多々あった」。

同年、次女が生まれて少し経ったころ、夫が上司とけんかし、解雇されてしまった。その後夫は大阪府内の日雇い労働者が集まる街で建設業の日雇い仕事などをしていたが、仕事がきつく、長く続けられなかった。次第に夫は、自分と次女に暴力を振るようになった。

2006年（46歳）のある日、夫に殴られた次女は、保育園に逃げた。保育園の先生からの連絡を受け、保育園に向かい次女を引き取ったあと、子どもたちにとって大切なもの（衣類など）や貴重品を家から持って出て、母子生活支援施設に入所した。

入所後、生活保護の受給を開始した。

また、入所してすぐに子宮腫瘍が見つかった。夫の暴力で精神的に落ち込んでいたこともあって、このときは心身ともにフラフラの状態だった。更年期に入ったこともあり、人との付き合いを拒むようになり、うつ状態に陥った。あるとき11階建てのビルに登ったとき、飛び込もうと思ったことがあった。「死にたい人の気持ちがよくわかった」。しかし、幼い子どもを残しては逝けないと思い直した。「子どもは私の命だ」からだ。

体と精神が次第に回復してきたころ、最初の夫との間にできた長男と会ったとき、「あのとき、社交的だったお母さんが抑えられていた、殺されていた（状態だった）」と言われた。

同年、弁護士を通して離婚手続きを行い、離婚が成立した。

その後、子宮腫瘍の摘出手術を受けた。

2009年（49歳）入所から3年目になってやっと、昔の社会的な自分が回復してきたと感じた。友達の紹介で、インターネットサイトをつうじてネット販売をしている会社にアルバイトとして就職した。社会保険はなく、給与は分単位で計算される仕組みだった。全員女性アルバイトで、職場の雰囲気はよかった。主に入力事務（お客への感謝メールなど）と電話の応対をしていた。毎週月曜日から金曜日まで勤め、給料の面も人間関係の面でも満足していた。

しかしこの職場は長くは続かなかった。毎日保育園に次女を迎えに行くため、仕事は5時40分までで終えなければならなかったのだが、社長はもっと残業することを望んでいたのだ。ある日、次女がおたふく風邪にかかり、保育園には預けられないため、一週間の休暇を申請した。次女の風邪が治り一週間ぶりに出勤すると、新しい人を雇ったと言われて突然解雇された。仕事を失って残念だったが、「子どもと一緒に風呂に入りたいし、コミュニケーションをとりたいし、弁当じゃなくて、ご飯を作ってあげたい。正社員並みに夜7、8時まで残業し、休日に家でパソコンで仕事をするような働き方ができない」。

ネット販売の事務をしている間に、ある出来事があった。夏休みのある日、次女が家出をし、児童相談所に行ったのだ。「お母さんが振り向いてくれないからだ」ということだった。ちょうど勤め先を解雇されたところで、「もうお母さん仕事を辞めたから」と手紙を書き、次女を呼び戻し

た。次女は父親（二番目の夫）から暴力を受けた経験があるため精神的に不安定で、暗くなると一人でいるのが怖いのだ。学校の先生から、次女には手を洗うときにひじより上の部分も洗うという奇行があると聞いた。この奇行は寂しさの現れらしい。そのことが気がかりだったが、仕事があったために、次女のそばに長くいてあげることができなかった。「そこまで寂しい思いをさせてたんだなあ」と思った。

<現在の生活状況>

今は生活保護で暮らしている。生活は、「贅沢さえしなければ、暮らしていける」。しかし、次女が間もなく小学校に入る年齢のため、教育費が必要になる。働かないと貯金できない。

それに、社会に取り残されたくないで、近いうちに生活保護を終了し社会に貢献したいと考えている。

不安なことは、自分の身体と次女のことである。昔、癌で膵臓と脾臓のほとんどを摘出した。入所したあとには子宮の手術を受け、今でも毎日病院に通っている。定期的に癌検査もしなければならない。ネット販売の事務をしていたとき、仕事を終えて電車に乗るとかなりの疲れを感じていたため、再び働きだしたときに身体が大丈夫なのだろうかと心配している。また、仕事をすれば次女のそばにいる時間が少なくなる。次女は精神的に不安定で、心のケアをしなければならないため、働きたくても働けない状態だ。

子どもの面倒と両立できる仕事を探しているが、なかなか見つからない。事務のアルバイトの場合、午後3、4時に帰れる仕事がない。飲食店の仕事であれば早く帰れるが、ヘルニヤになりかけているため体に負担のかかる仕事ができない。

いつか自分で事業を起こすことができたらと考えている。

調理師か栄養士の資格をとって自営業をしたい。店の上に部屋を借りて、子どものそばにいながら仕事ができればと思う。

「ひとり親としてどうすればいいか」、「この体でいつまで生きられるか、子どもが成人するまで頑張れるかなあ」、「高齢になると雇ってくれるところがなくなるのではないか」と悩むこともあるが、そうしたときは友達と食事に出かけ、ストレスをやわらげている。

両親はすでに亡くなり、兄弟とは疎遠である。

<政府への要望>

「小さい子どもを抱える大変さを知っているの、（社会は）母子家庭のお母さんにもっと優しくしてほしい。働きたい母親が働けるように、保育園をもっと増やしてほしい。

また、「遅い時間でも子どもを預けられる、病気にかかっても診てもらえる保育園など、育児に関する情報をもっと優しく教えてほしい。どうすればいいかわからずとまどってしまうお母さんがかなりいる」。

そして、利用できる保育サービスに関する情報を周知徹底してほしい。「このような情報を全然知らない若いお母さんがたくさんいる」。

それに、「複雑な手続きを嫌うお母さんがたくさんいる」ため、特別なサービス（例えば、急に発熱した子どもの受け入れや長時間の保育など）を受けるための手続きを簡素化し、手続きの仕方をお母さんたちに十分優しく教えてほしいとも思う。

仕事の環境に関しては、子どもを保育園から迎えに行ったり、子どもが急に病気にかかったら（熱が出るなど）休みをとって看病したりすることができるような仕事環境がほしい。

調査番号：大阪42

調査日：11月13日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：41歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：岡山県 ■学歴：短期大学卒業
- 就労の有無：病気療養中 ■直前職：製造業、事務職、正社員 ■直近の収入：勤労収入なし / 生活保護受給
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども3人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：短期大学卒業 レジャー産業会社・営業事務（正社員、1年） 母の看病（3年） 鉄鋼会社・経理（正社員、1年） 妊娠・出産・子育て（2年） 訪問販売会社・事務（正社員、半年） ねずみ講（5年） 事務（正社員、1年） 靴下製造販売会社・営業事務（正社員、1年） 事務（派遣社員、1年半） DVで緊急一時保護所 母子生活支援施設 + 生活保護受給 タオル会社・事務（正社員、4カ月） + 生活保護廃止 母子生活支援施設退所 現在、居宅にて生活保護受給中 / 病気療養中

<仕事に就くまで>

1968年、岡山県生まれ。

実家は自営業を営んでおり、家電販売の他、水道工事も行っており、「穴も掘るような“まちの電気屋”」だった。父母と6歳上の兄と弟の5人家族。

19歳（1987年）のときに父親が死亡した。このとき大学を出て企業に勤めていた兄が帰ってきて家業を継いだ（現

在も兄が経営し、社員もいる）。

自分は高校までは岡山県で過ごし、短大入学を機に、大阪府にきた。短大は商学部商学科を専攻し、簿記3級を取得した。バブル期だったので、景気のいい企業に入ろうと思い、簿記や秘書、ワープロ等の資格も取れるものは自分で勉強して取得した。

<初職からの経験>

20歳(1988年) 短大卒業後、大阪にあるレジャー産業会社に就職し、正社員として営業事務を担当した。月収は約18万円、ボーナスもかなり支給された。

21歳(1989年)のとき、母親が白血病を患い、看病をするために一旦岡山に戻るようになった。母親の病気は、高齢になるほど薬を飲みながら長く生きながらえる人もいと医師に言われた。その時点では、母親の余命や自分の仕事をいつまで休むべきかの見通しもつかず、会社からは長期休暇を勧められたが結局退職した。

その2年後、23歳(1991年)のとき、母親は亡くなった。母親が亡くなってからは、兄弟のいざこざが絶えなくなってきた。兄は結婚をされていて子どもが2人いて兄嫁が気を使っているのも感じるようになり、実家の居心地が悪くなった。また、岡山にもあまり魅力がなかったため、家を出て再び大阪に戻った。

24歳(1992年)頃、大阪府内の鉄鋼会社の経理担当(正社員)として働き始めた。手取りは21~22万円。福利厚生は良く、昼食代、別に皆勤手当1万円ほどが出て、一人暮らしするには十分な収入であった。会社は近くにあり、自宅から自転車で行けるような距離だった。

当時、様々な趣味があり、単車や中古の自動車を趣味にしていた。よく行く単車屋の常連客らで、「みんなで遊ぼうよ」という話になり、そこで離婚した夫と出会い付き合うようになった。

25歳(1993年)のとき、夫と結婚した。夫は結婚当時29歳で、コンピューター関係の会社に勤めていた。コピー機の修理やメンテナンスの仕事をしていた。

夫は交際中にDVはなかったが、「ちょっと変な人やな」と思うところもあり、夫の父母に対しても「ちょっと変な人やな」と思った。結婚を辞めようかと思いつ友人に相談したこともあったが、「ただのマリッジブルーだ」と言われて納得した。結婚後すぐに妊娠し、つわりがひどかったため座っていられなくなり、会社を辞めた。

結婚後すぐに、夫からのDVが始まった。暴力は身体的暴力だけでなく、常に行動を監視したり、他の人と会うのも嫌がられた。無理に他の人に会いに行こうとすると暴力を振るわれた。

また、夫は勤務時間中に、絶えず家に電話をかけてきた。たまたま買い物などで留守にしていると(夫の)実家に電話をし、夫の親が自分を探し回った。帰宅すると、夫の親が家にいて、「どこ行ってたんよ! すごく息子が探してたのに」と大変な剣幕で言われ、親も異常だと思った。夫は「(家と職場の往復だけで)伝書鳩みたいに帰ってくるし、なんてゆうんやろ、『友達いてないん?』みたいな」人だった。

26歳(1994年) 第1子(長男)を出産した。

27歳(1995年)のとき、長男が8カ月になったので、下着の訪問販売の会社に正社員として再就職した。この会社は「託児所があるから行け」と言われ、夫が選んだ。

この会社だけではなく、結婚以降、自分の仕事は、いつも夫が選んだものしか就けなかった。夫が新聞の求人広告にいくつか赤丸をつけて、受けていい会社を指示した。しかし採用されたのち、残業で30分でも帰宅が遅れると怒られ、会社に電話してきたり、会社までやって来たりして、辞めさせられた。そして、求職するときは再び赤丸をつけ

て、という繰り返しであった。夫はいつも「お金が欲しいから働いてこい」という態度だった。

また、経済的暴力もあった。夫は、夫自身の給料だけでなく自分の給料も一緒に管理していた。給料が振り込まれる口座のキャッシュカードは全て夫が持っており、自分が稼いだお金であるにもかかわらず自分にはお金を渡さなかった。夫からは1日1,000円だけ渡され、三度の食事を用意するように言われた。欲しいものがあったとしても、夫が無駄と判断するものにはお金を出してくれなかった。その上化粧もしなくていいと言われた。「そのくせ、自分のゲームとかにはドンと買ったり」していた。

訪問販売会社に就職したが、半年後には、夫が気に入らなくなったので、辞めざるを得なかった。

同年(27歳、1995年) 会社を退職後、長女(第2子)を出産した。

28歳(1996年)のとき、夫が突然退職した。職場で人間関係が上手くいっていなかったためだった。夫はその後約2年間は「ブータロー」だった。その間に夫はねずみ講を始めた。そのうち、夫は自分にもねずみ講をやるよう強要した。結局、自分がねずみ講で家計を支える形になってしまった。

夫が退職した頃(1996年頃)から、夫自身が暇になったためか監視がひどくなり、ますますDVがひどくなってきた。

29歳(1997年) 長男が3歳、長女が2歳のときに一度、夫がいない間に逃げようとした。しかし玄関を出て2歩ほどのところで夫が帰ってきて止められた。制止を振り切って行こうとしたところ、「ボコボコに」され、「下の子の足を持って振り回したりして、『これでもまだ行くんか?』」と言われた。子どもに対する暴力はこのときだけだが、ある日、夫が大事にしているゲームを子どもが触っていたときに、子どもを突き飛ばしたこともあった。

同年、夫から性的暴力を受けて次女(第3子)を妊娠。うつ状態になり、子どもを保育園に送って行けなくなるほどに落ち込んだ。「絶対に、ここからは逃げられへん」みたいなことを言われ、「恐怖でしたよね、『言うこと聞かへんかったら子どもに何かされる』というのが植えつけられた」。

33歳(2001年) 次女が3歳になったとき、「ちゃんとしたところへ働きに行きたい」と言うと、夫が近所の会社を探してきて、事務職の正社員として仕事に就いた。この頃、亡くなった夫の祖母の空き家に一家で引っ越した。それまで住んでいた家は近所の人に貸し、家賃収入を得ることにした。

1年後(34歳、2002年) また夫が、自分の勤務先を気に入らなくなったために辞めさせられた。次も夫が選んだ仕事で靴下の製造販売会社で営業事務の正社員になった。手取りの収入は約15万円だった。その会社は、コンピューターシステムが導入されておらず、数字が合わないと事務も残って原因を探さなければならないなど、残業が多いにもかかわらず、残業代が支払われなかった。すると夫が「キレ」て、会社に電話したり、会社にやって来ては、「上のもんを出せ」などと言い放った。あるとき、さすがに我慢できず、「いい加減にして! これは何社目やと思うの、こんなんやったらやってられへん」と初めて反抗した。すると夫はさらに激情し、かなりの脅迫を受けた。仲の良い近所の奥さんの名前を出して、「殺す」と言ったり、「実家

に火をつけてやる、実家の商売をできないようにしてやる」、「会社の同僚を刺す」、「チラシをばら撒いてやる」などと言われた。「言わしてんのは、お前が悪いねん」とまで言われた。それでも、我慢して会社に出勤していると、仕事中にいきなり会社にやって来て、「反抗するっていうのがおかしい」と言い放ち、精神科に連れて行かれた。医師が夫に対して、「彼女は別におかしくないし、どこも悪くない」と告げると、今度は「先生もおかしい」と言った。

脅迫が続いたので、警察に行ったこともあった。その頃はDV防止法の施行前で、まだDVに対する世間の認識も薄く、警察からは、「ここは刺されてから来るところだ」と言われ、「がっかり」して帰った。

異常がないと診断した精神科医が気に入らないからと、別の精神科にも連れて行かれた。そこでも異常はないと告げられた。医師はさらに夫に「火をつけると言っちゃだめだよ」と諭すと、その言葉に夫は、逆に「ものすごくキレて」、矛先をこちらに向けられ「ボコボコ」にされた。そうしたことが重なり会社は1年間で退職した。

このように転職を繰り返した原因は、夫が直接会社に来たり、電話をかけてくるので、居づらくなるからだった。飲み会にも絶対に行けなかった

夫はとにかく自分が「ロボットみたいに」なることを望んでいた。結婚当初から1日の生活は夜9時消灯、朝6時起床と、決められていた。夫は夜中にゲームをするにもかかわらず、自分が洗い物をしたりテレビを見るために夜に起きていと怪しまれた。夫の用事を言いつけられることもあり、夫の友達にゲームを借りに行かせたり、返却に行かせたりもさせられた。

夫の用事をさせられて夫の友達のところへの行き帰りのときもそのたびに夫からメールが入り行動をチェックされた。何を話したのか、どこにいるのかを尋ねられて、「そんな話ちゃうや」と問い詰められた。それ以上何を聞きたいのかわからずに内容を尋ねると、「自分で考える」とにかくお前は報告が足らんねん」と怒鳴られ、朝まで寝かせてくれなかった。そうしたことはほぼ毎日続き、限界を感じて別れを切り出すと、「ボコボコに」暴力を受けたり、部屋に閉じ込められたりした。

あるとき、近くの河川に夜中に連れて行かれて河原に投げ飛ばされたときは、「私、ここで死ぬな」と思った。

DVがひどいときも、実家に相談はできなかった。言ったことが「バレると大変なことになる」と思ったからだ。しかし逃げる直前には、夫から実家に対して、「妻の頭おかしいねん」という電話があったそうで、それを受けた兄は「お前の方がおかしいんじゃ、仕事中に電話してくんな、こんな昼間になんで電話できんねん」と怒鳴り返したようだった。反対に兄嫁は怖がってしまい、子どもの学校が非常に近いのに送り迎えしていた。兄が心配して、どこかに相談するよう電話してきた。この頃からDVの相談は、大阪府の施設である配偶者暴力相談支援センターに電話するようになった。

この頃(35歳、2003年)から夫の言うことを聞く気がなくなってきた。それまで、外出することも禁じられていたので、子どもに送り迎えが必要な習い事をさせていなかったが、子どもも大きくなったので夫を無視して習い事をさせるようにした。また、夜の夫婦生活も拒むようにした。

靴下メーカーを退職後1年間は失業手当を受給しながら、職業訓練を活用してパソコンの勉強もした。パソコンの勉強

強をすることに対しても夫は文句を言っていた。

36歳(2004年)のとき、派遣会社に登録し、大阪府内にある会社で1年半ほど事務の仕事をした。社会保険はなく、このとき年金は払っていなかった。

37歳(2005年)頃から、夫は外で女の人ができ、家に帰って来なくなった。これでもう自由だと思ったが、「それでもどっかで見られているような気がした」。夫はたまにお金だけ取りに来た。それまでは給与口座は夫が管理していたが、この頃には自分の給与の振込口座と児童手当の入金口座を作り、生活費はそこから出金していた。しかし夫は振り込み日を把握していて、きっちり振り込み日にお金を取りに来た。

夫はしばらく無職であった。その後、軽トラによる配達の仕事をはじめたが、何度か転職していた。別れる前の6年間は、パン製造メーカーのパンを軽トラで配達していた。半年ごとの契約社員で、最初は30万円だった給料も、不況で給料が下がり離婚前後には20万円ほどになっていた。

2006年2月(38歳)に、家を出ていた夫から離婚の話をしたいと電話がかかってきた。今まで夫に何十回と離婚したいと言っていたが、常に夫は拒否していたから、「ちょっとヤバイんちゃうかな」と思った。相手の女性に事情があって夫は子どもを引き取りたいらしく、その上、夫が子どもを引き取ったら自分が養育費を払うように、自分が引き取ったら夫は養育費は払わないとの条件をつけてきた。そのときは「1週間後にまた行くわ」と言われ、電話を切られた。

すぐさま配偶者暴力相談支援センターに電話をし、「ちょっとでも気にいらんことをすると殺されそう」「何も言わなかったら旦那の好きなようにされると思う」と言ったところ、すぐに家を出るように言われた。仕事のことや子どもの学校のこと等で迷っていると、「間違ったら、あんたも殺されてしまうかもよ」と言われた。そしてまだ夫との話し合いまで時間があるので、まず市役所へ行くように指示され、子どもにはどこへ行くのか秘密にしたまま、子どもを連れて市役所へ向かった。市役所で約30分間、この14年間の結婚生活と「今現在やばい、殺されそう」などの現状を全て語ると、すぐに家を出て逃げるように言われた。仕事のことを考え、3日後の夜8時に市役所に行くと言えた。

家を出ると決めてから、仕事は、翌月分までの提出予定の請求書などをパソコンに入力してわかるようにし、1カ月先までの仕事を仕上げ、仕事内容を全てノートに書き置き、他の人が見ても困らないようにしてきた。職場からは印鑑だけを持ちだし、職場の誰にも何も告げなかった。偶然、児童手当支給日だったので、銀行にお金を出金しに行ったり、家を出る準備を進めた。

家を出る日、子どもが友達の家からなかなか帰ってこなかったの、電話してすぐに帰ってこさせた。大急ぎで黒のゴミ袋に子ども服を入れ、子どもに大事なものはランドセルに詰めるように言った。タクシーを家の前に止め、荷物に乗せられるだけ乗せて市役所へ向かった。市役所に着いて初めて緊急一時保護所へ行くように指示され、緊急一時保護所に入所となった。

保護されてすぐ、仕事のことを気になりだし職場へ行きたいと相談すると、警察から電話があり、絶対行くなと止められた。勤務先には電話をかけ、DVの事情、仕事は整理していることを伝え、突然の退職を謝罪し、もし夫が会社に来たらすぐ警察に電話してほしいと伝えた。会社は

「事故に遭ったことにしておく」と言ってくれた。子どもの学校にも電話をすると、学校と市役所の連携が取れていたため、すでに校長先生は事情を知っていた。他の先生はなぜ来ないのかと慌てていたが、言わないようにしてくれていた。

緊急一時保護所の入所中はとても快適で、食事も出て、「あんな幸せな場所があるのかってくらい、いいところ」だった。子どもにも学習をさせてくれ、職員も専門的な知識があり安心できた。施設のなかでは、同じようなDVで逃げてきた人と知り合い、お互いの境遇を話して仲良くなった。今でもたまに電話をする仲である。入所者のなかには、何度もDVの避難を経験している人が多く、母子生活支援施設の様々な情報を教えてくれた。おそらく母子だと、母子生活支援施設に入所になるという話を入所者から聞いた。

いくつかある母子生活支援施設から、地理的な理由で、緊急一時保護所の近くにあった施設に入所したいと希望を伝えた。

2006年3月(38歳)、母子生活支援施設に入所となった。入所してから、離婚調停中の1年間は生活保護で暮らした。調停手続きは夫の方からの申請で、調停費用も夫が負担した。ただ、弁護士代は、調査依頼者の負担であったため、合計約50万円の費用がかかった。

入所中に、年金のことが心配になり、市役所に尋ねに行った。年金はあと9年分、保険料を払わないと受給権が発生しないとのことだった。正社員で働いているときは厚生年金を払っていたが、ねずみ講をしていた頃は国民年金に加入していたものの、保険料を滞納したり、自分の分だけ払ったこともあった。年金は「ぐっちゃぐちゃです。わけがわからんようになってます、正直!」。離婚年金分割制度の手続きは行った。

母子生活支援施設では、ルールや管理が厳しく、DVについての知識もあまりなかった。入所中に男性から電話がかかってきて施設職員から夫ではないかと言われたが、受信した電話は着信履歴やナンバーディスプレイもなく全く確認のできるものではなく、DVには全く無防備であった。相談したいことがあるときは、施設の職員よりも配偶者暴力相談支援センターや緊急一時保護所に電話していた。

2008年5月(40歳)に、調停が終わり、離婚が成立した。同月、タオル製造会社で事務の正職員として働き始めた。給料は悪くなく、手取り21万円で、社会保険も加入できた。生活保護の最低生活費を越えたため、生活保護は廃止となった。会社は、タオルやふとんを中国で生産し、日本で販売していた。社長は怒鳴りまくる人だった。中国で箱入れや袋入れをするが、間に合わないとは日本でその作業をすることになり、残業が異常に増えた。それを社員全員で手伝わされ、帰る時間が夜中の1~2時になる人もいた。子どもがいるので帰らせてほしいと申し出たが、それでも退社は22時だった。忙しい日が続くとこのような残業が毎日続き、次の日は朝6時に出勤するという過酷な働き方であったが、早く出勤してもその分の手当は出なかった。採用時の面接では、「少しは残業があるが、土日は休みだ」と聞いていたにもかかわらず、当然のように土曜日出勤を求められたが、休日出勤の手当も出なかった。働き出してからすぐの7月頃、社長が従業員全員を集めて「全員、3万円カット」と言い出し、給料が下がった(この会社は、とくにリーマンショックの影響はなかったと思う)。

過酷な勤務状況が続いたが、仕事や子育てに追われ、疲労を感じていたが病院に行く時間もなく3カ月ほど我慢していた。ある日「とにかくすごい疲労。ガンとかの病気になったんかと思った」ため、2008年10月中頃(40歳)病院に行った。病院の長椅子に横になりたい状態だったが、どこも悪くないと言われ、最終的に精神科に回された。精神科では、これまでの出来事を話しカウンセリングを受けた結果、「長期にわたる夫のDVから、心理的な後遺症が今頃症状となって現れている」と言われた。その頃、歩けないくらい疲れているのに、夜眠れなかったり、突然起きられなくなる状態だったので、会社を辞めることを決心した。職場では、重要な役割の仕事をしていたので、急には辞めず1週間に1~2回出勤して引き継ぎをしたのち、10月末に退職した。就労した期間は4カ月間だけだったので、雇用保険は加入していたものの失業手当は支給されなかった。

2008年11月から、しばらくは貯金で生活していたが、年末に市役所に行き、生活保護の再申請をした。2009年1月(41歳)から受給開始となった。生活保護が支給されはじめても2カ月間は、まだ母子生活支援施設に住んでいた。当時、母子生活支援施設の入所者のなかでは働いている人はなく、生活保護受給者ばかりだった。就労支援などはなく、施設は入所者に「働くように」といつも言っていたが、自分が体調を崩したときは、施設長にも心配され、生活保護受給を勧められていた。

再度、生活保護を受給できるようになってから、福祉事務所の担当のケースワーカーから、施設に入所して「2年やから、出ていくことを考えましょか」と言われた「寮長さんからは何年でもいていいよ」と言われていて、実際何年も住んでいる人もいたため、退所したい希望はあったが伝えていなかった。施設の狭さや設備では住みづらく感じていたので、それならばと思い、自分で引っ越し先を探した。引っ越し費用は生活保護から出ると聞いたが、なぜか出なかったのを不思議に思っている。2009年3月(41歳)に母子生活支援施設を退所した。引っ越し先の民間の賃貸住宅は、3DKで、家賃は5万5千円、共益費は7千円である。

<現在の生活ぶり>

仕事を辞める前後はうつ病がひどかったが、現在は和らいている。また緊急一時保護所の職員からのアドバイスで、子どもは母親が父親に殴られているのを見ていた場合には、いつか思い出すときがあるので、子どもの様子にも注意するように言われている。自分自身にもフラッシュバックが起きることもあると聞いたので注意している。

結婚生活をしていて市には自分にも子どもにも友達が多くいたので、出て行くことに抵抗があった。新しいところで子どもが慣れないかもしれないことが一番不安だった。しかし、今は家族みんなで楽しく暮らせるようになった。近所に子どもの関係で仲良くなった奥さんやタオル製造会社で知り合った人など、話ができる人ができた。子どもたちを、地元の祭りにも参加させている。

最近、障害者手帳3級を取得した。手帳を持っていると各種サービスが利用できるが、生活保護の担当のケースワーカーから、たとえば「食事を作ってもらう程度のことで、安易にヘルパーを利用することはできるだけ控えてほしい」と言われた。受診する病院も自転車で行ける範囲の病院にしてくれと言われている。喘息を持つ長男は、今の

市に来てからは空気がよく発作はほとんどでない。しかし、ひどい風邪になると救急車を呼ぶこともあり、市外の病院に連れて行くと、「なぜこんなところまで行ったのか」とケースワーカーに言われる。カウンセリングを受けたいが有料で、その費用は生活保護からは出ない。

<本人の望みや不安>

今後はまた働きたい。事務職の正社員を希望している。元気だった頃の自分に戻りたい。逃げる前の、夫がいない1年間は、子ども会に入ったり、長男が入っているソフトボール部の部長をしたりして、多少なりとも楽しかった。

無料のカウンセリングを受けたことがあり、自分の好きなことをやってみましょうとアドバイスされた。だが、夫から今まであれもこれも止められていたので、自分は何が好きなのかを考えてしまう。化粧をして買い物をしましょ

うと言われても、そのお金がない。花を植えてみようと言われても、夫に無駄だと言われた昔の記憶が蘇る。今は夫に言われたことに対して、メンタル的に乗り越える練習をしているところである。しかし病院でうつ病が一生直らないと言われて少し絶望している。「過去の嫌だったことを忘れる薬」をずっと飲んでいる。肝心なことまで忘れてしまい、その薬の影響で眠たくなることもある。うつ病自体も物覚えを悪くするので、再び働けるのが不安である。今になって、看護師など資格を取っておけばよかったと思う。逃げてきた当初は「これからは私の人生だ」と思ったのに。

母子生活支援施設では、規則づくめで窮屈で、「塀に囲まれた場所」に入っているように感じた。

普通の生活（居宅での生活）に戻るにつれ、過去の記憶に縛られしんどくなる。カウンセリングの人には、「働いていてもDV被害者はみんなしんどい」ということを聞き、まだまだ回復は遠いのかと思っている。

調査番号：大阪43

調査日：11月26日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：33歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：短期大学卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：医療サービス業、医療職、正社員 ■直近の収入：月20～25万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども1人 ■住居：持ち家（一戸建て）
- おおまかな職歴：短期大学卒業 民間医療検査センター・検査技師（正職員、2年） 結婚・出産・育児（3年） 健診センター等・検査技師（登録型派遣、2年） 個人病院・検査技師（正職員、6年目） 現在に至る

<仕事に就くまで>

1975年、大阪府生まれ。

子どもの頃の暮らし向きは普通であった。

地元の小学校、中学校を出て、学区内にある進学校の公立高校に進んだ。昔からいわゆる「いい子」で成績もよかった。

「いい学校」に進学したけれど、全員が勉強のできる生徒ばかりだったので、そのうちついていけなくなった。

高校卒業後の進路について考えたが、高校では成績が良くなかったため、他の生徒が目指すような国公立大学に行くのは無理だと思った。「2流」の大学に行くなら資格を取りたいと思い、検査技師の資格がとれる医療系の短期大学に進学した。進学先は、3年間の修学で、検査技師のほかに看護師などの国家資格を得られる短大であった。

<初職からの経緯>

21歳（1996年）で医療短大を卒業し、民間の医療検査センターに、検査技師として就職した。正職員で社会保険はついていて、仕事内容は、患者の検査をしたり、データの整理だった。

23歳（1998年）の頃、付き合っていた男性とのあいだに、子どもができたために、約2年勤務した職場を結婚退職した。結婚当初は、大阪府内の賃貸マンションに住み、生活した。夫の仕事は医療関係ではなく、サラリーマンだった。

24歳（1999年）の時に男児を出産した。子どもを出産後しばらくしたら保育所に預けて、再び仕事をしようと考えており、派遣会社に登録をしていた。しかし、1人目を出産後すぐに2人目を妊娠したため、しばらくは育児に専念した。

26歳（2001年）のときに第2子を出産。女兒だった。2人目の子どもを出産した頃は、現在住んでいる市内に持ち家を購入した。自分の親との2世帯住宅で、一家で引っ越してきた。親とは、日中はそれほど行き来せず、生計も全く別にした。落ち着いた頃に仕事を始めようとしたが、引っ越してきた市では、保育所になかなか入所できなかった。

保育所に入所できなかったため、子どもが小さい頃（26～28歳、2001～2003年頃）は、登録をしていた派遣会社を通じて検査技師として不規則の仕事をした。派遣された先は、市町村等の健診センターや健康診断、企業健診の検診業務で、忙しい時だけ声をかけられるものであった。多い時で週に2～3日、少ない時では月1日程度であった。収入は1回行くと約4,000円程度であった。登録型派遣の仕事は2年ほど続け、保育所など預かってくれるところがなかったため、仕事が入った時は母親に預かってもらい仕事に行った。子どもが大きくなるまでは母親に毎日預けるわけにもいかず毎日の仕事ができなかった。

ようやく、2人目が1歳から2歳になる頃（2003年）子どもを保育所に預けることができた。

同時に28歳（2003年）頃、出産以来、辞めていたフルタ

イムの仕事を再び始めることにした。結婚前同様の検査技師の仕事に就き、個人病院に正職員として採用された。この仕事を現在も続けている。

離婚

29歳（2004年）子どもが3歳と5歳の時、離婚した（現在で5年になる）。

離婚の原因は、夫の浮気だった。夫から浮気の話聞き、はじめは夫から「離婚よりも別居がしたい」と持ち込まれたが、すでに愛情はなく関係をはっきりとさせた方がよいと思い、自分から離婚を切り出した。離婚まで、少しもめだが時間はそれほどかからなかった。浮気の話が出てから6カ月後には離婚が成立した。しかし、離婚に際して、慰謝料もなく、養育費の取り決めをした公正証書を作成したものの、養育費は全くもらえていない。

離婚の際に公正証書を持ち出し養育費について話しても、元夫は、養育費の必要性を理解していないようで、「そっちで育てるんだったら、そっちで（お金を）だして育てるもんだ」と言い張るばかりだった。これ以上もめると離婚もできなくなってしまいそうだったのと、自分もストレスを感じてきたことが重なり、とりあえず別れること（離婚）を優先し、それ以上養育費については交渉しなかった。子どもとの面会は、約束していないし、会わせたくない。離婚以後会いたいとも言っていないし、連絡もしていない。離婚前後の半年から約1年のあいだ、元夫とは衝突したので、話もしたくないし会いたくもない。しかし、こちらの連絡先は元夫に把握されている。

母子家庭になってから

離婚の話が出る前に、家（持ち家）を建てていたが、離婚により元夫が家を出て行くかたちを取った。元夫の実家は大阪府内だったが、関東方面に行きたがり、大阪での仕事を辞めて上京した。元夫はお金のない人だったから、現在も経済的に苦しいと思う。

元夫が出て行った家は2世帯住宅で、親の世帯と自分と子どもの世帯とで住むことになり、残されたローンは、親と自分が背負うことになった。残った家を名義変更するためには、いったん残ったローンを繰り上げて全額返済して、再度ローンを組み直さなければならなかった。繰り上げ返済はいったん親に借りたりして、全額返済しその後35年ローンを組み直すという方法をとった。後30年のローン返済が残っている。

生活が苦しく、市役所に相談に行ったことがあるが、それまで保育所のことで相談していたため、保育料の減免のために児童育成課に相談に行くと、生活保護課に行ってくれと言われてたり、生活保護課に行くと住宅ローンを抱えているから（資産形成とみなされる）駄目だと言われてたり、「たらいまわし」にされた。結局、持ち家やローンがあることによって、支援の範囲ではないと判断されてしまった。

<現在の暮らし>

現在は、2世帯住宅の2階に長男10歳（小4）長女8歳（小2）と暮らしている。1階には両親と祖母が住んでいる。両親の世帯とは生計（光熱費も）を全く別になっている。たまに子どもをみてもらうこともある。

仕事は、離婚の前からの病院勤務で、仕事は検査技師で

ある。月曜日から土曜日まで週6日勤務し、夕方は6時前まで働いている。通勤時間は約1時間である。

所得

正職員として働き、社会保険もあるが、それでも生活は厳しい。1カ月の収入は約25万円であるため、ある程度安定しているように思われるが、そうでもないと思う。ローンを抱えていることに加え、各手当や税額控除の所得制限を僅かに超えてしまったために、可処分所得が大幅に減ったためである。具体的には、児童扶養手当の所得制限（一部受給230万円）をたった1万円超えただけで、児童扶養手当の支給が途絶えた。廃止される直前は、所得に反比例して少額になっていたが、あるとないとでは安心感が違う。

また医療費に関して大阪府の母子医療制度は月2回まで一回500円の自己負担だったものが、いきなり3割負担になった。そのため、自分が風邪をひいたくらいだとがまんしたり、流行しているインフルエンザの予防注射は節約した。医療費はばかにならないからである。

「母子家庭はいろいろ援助があってもいいわね」と言われるが、いったん所得制限を離れてしまうと、その直前の暮らしより苦しくなることが知られていなくて矛盾を感じる。

今勤務しているところは、個人病院なので、専門職であっても、昇給は期待できない。少しでも手取りを増やしてほしいが、経営面からも今は残業したくてもさせてもらえない。また、明らかに男女間で賃金差がある。

自分が意識しているだけかもしれないが、「母子世帯」と言うと、「離婚した女性」という見方をされて辛い。何かしら母子世帯へのまなざしの厳しさや女性蔑視も感じる。

子ども2人には大学に行ってほしい。しかし、高校、大学に進学するための学費が払えるかどうか、先行きが不安になる。高校や大学に行くための教育支援資金貸付（福祉貸付資金）があるが、低所得者向けで、今の自分だとこれも所得制限にひっかり利用できない。子どもが小さいうちの日々の暮らしは何とかなっても、進学させることを考えると、少し時間の余裕が出てきたら、「個人病院の仕事（検査技師）が終わってから別のアルバイトをしたい。結局そうでもしないと…」と考える。

友人関係

学生時代の友人や前の職場の友人には連絡を取っていない。まだ離婚に対する負い目がある。楽しく割り切れるまでに、しばらく時間がかかりそうである。友人とも会いたくないし、いろいろ詮索されるような気がして気持ちがすまない。「離婚ってあまりいいことではない」し、やはり劣等感はある。

今は、友人・知人も数人いるが、こちらの状況を理解した人のみと付き合っている。

子どものこと

子どもは、手がかからなくなってきている。

母子家庭ということで、子どもに何か悪い影響を及ぼさないか、素直に元気に育ってくれるか、これから思春期に入っていくためいつも心配である。自分が疲れていたら、家が粗雑になるし、ちらかったり、気持ちにも余裕がなくなったりする。

周囲の子どもを見て、比べてしまう。塾に行っている子どもは、家庭に経済的、時間的な余裕がある。残念だけど、

学校の成績の悪い子どもは、家庭環境が悪いように思える。やはり、学校の成績はよい方でいてほしいし、塾にも行かせたいが、経済的余裕はない。今、ドリルなどを買って家でやらせたりしている。習い事やおけいこ事にも行かせてやりたいが、行かせられない。

要 望

養育費については、制度的にきちんと取り立ててもらえるようにしてほしい。元夫がそうだったように、「離婚したら払わなくてもいい」と思っている人が多いのではないか。今は、相手の職場がわからないと請求できない。国や行政等、責任のあるところが代わって取り立ててくれると

いいと思う。日本の養育費に対しての甘さに腹立たしさを感じる。

母子家庭に対して様々な制度があるのはいいが、所得制限のボーダーラインにいる人は、非常に振り回される状況にある。「所得制限がいいような悪いような」状況で、どこかで所得制限をつけなければならないが、それが各制度でほとんど同じラインになっており、急激に可処分所得が減ることもあり、生活に影響する。もう少し結果として緩やかなものにしてほしい。

離婚や母子家庭になって、いったん落ちてしまうと上がれないような世の中だと痛感している。

調査番号：大阪44

調査日：12月4日

プロフィール

- 性別：女 ■ 年齢：39歳 ■ 現住所：大阪府 ■ 出身地：大阪府 ■ 学歴：短期大学卒業
- 就労の有無：就労中 ■ 現職：製造業、事務職、パート
- 直近の収入：勤労収入月約3万円、他に養育費と社会手当 ■ 家計における役割：家計維持者
- 家族構成：子ども1人 ■ 住居：公営住宅
- おおまかな職歴：短期大学卒業 飲食店・接客（アルバイト1年、在学中より継続） 布団圧縮袋製造会社・事務（正社員、3年） 飲食店・接客（アルバイト、1年） 自動車メーカー・事務（アルバイト、2年） 親族経営の自動車販売会社・管理職（正社員、1年） パン製造会社・事務（パートタイマー、5年）、現在に至る

<仕事に就くまで>

1970年、大阪府生まれ。父・母・弟の4人家族。

父親は大企業の自動車メーカーに勤め、母親は、家とは別の場所にて飲食店を営んでいた。

地元の小・中学校卒業、高校も地元の公立高校に進学した。卒業後は大阪府内の短期大学に進学し英文学を専攻した。学生時代は「ごく普通に過ごしていました。真面目ではなかったけど...」。短大在学中から大阪府内の繁華街の寿司チェーン店でアルバイトをしていた。

<初職からの経過>

1990年（20歳）短期大学卒業後も、寿司店の店主に「気に入られ」、そのまま引き続きアルバイトを続けた。時間給を900円から1,350～1,400円に上げてもらい、卒業後1年間働いた。

その後、1991年（21歳）のとき、アルバイト情報誌にて大阪府内の布団圧縮袋製造会社の子会社の求人に応募し、正社員で事務職として雇われた。給料は、残業を行って月15～16万円であった。当時、バブル経済期であったため、夏のボーナスは約50万円であった。

1994年（24歳）のときに結婚した。実家から大阪府下の別の市へ移り住んだ。夫は自分より10歳年上であった。父親は、大手自動車メーカーを退職した後、会社から独立して事業を行っていたが、結婚相手の夫は同業の関連会社に勤務しており、独立した父親とは顔見知りの関係であった。

自分は時々父親の仕事を手伝っており、他の自動車会社に勤務していた夫と、父親の仕事の手伝いの際に出会い交際し結婚へと繋がった。結婚も決まったため、3年間続けた事務職にも「飽きた」ところだったので、結婚してまで通勤する距離ではないと考えたため1994年（24歳）に退職した。「事務をやっていたらウエイトレスみたいな仕事がしたくなる」し、前に寿司チェーン店に勤めていたときは事務の仕事にあこがれるなど、やってみたい仕事が、その都度こころと変わった。

布団圧縮袋製造の子会社を退職した後はしばらく専業主婦をしていたが、1996年（26歳）から親戚が営む食事処で1年程、フロア担当のアルバイトをした。

1997年（27歳）にはそのアルバイトを辞め、夫が勤めていた自動車会社でお茶出しなど、事務のアルバイトを2年間務めた。

父親の会社独立と新たな職

父親は、大手自動車メーカーに勤務していたが、自分が大人になった頃に独立し、自ら自動車販売会社を立ち上げた。

1999年（29歳）以前から独立したがっていた夫に対して「父親の会社にくれば？」と声をかけたことがきっかけで、夫は父親と共同で大阪府内に新たに自動車販売会社を立ち上げることとなった。新しく立ち上げた会社は「新車、中古車、国産、外車なんでも（扱っていた）、車検も」。そのときの職員構成は、父親が会長、夫は社長、自分はマネージャー、事務の部下が1人というものであった。夫の自動車会社でアルバイトをしていた経験もあり、仕事のノウハウ

ウは把握していた。会社独立後は、全く落ち着かず、「むちゃくちゃ」忙しかった。また、商品の単価が高く大金を扱うために、お金の感覚がマヒしていた。

出産と離婚

1999年（29歳）7月、長男を出産した。出産に備え、部下に仕事を引き継いでいる途中に陣痛が始まった。予定日より11日早かった。陣痛が始まってからも予定を見越して仕事をしており、出産直前まで働いた。出産は「壮絶」だった。

出産4、5日後に、医師から、子どもはダウン症であることと心臓病の重複障害があると宣告された。出産当時、ダウン症についての知識がなく、障害を持っているということに、ただただ不安で深く悲しんでいた。退院後、医師に紹介状を書いてもらい、すぐに母子センターに向かったが、そこにいた多くのダウン症の子どもたちの姿を見て「かわいいやん！ これ（この障害）なら育てられるわ」と思い、前向きに立ち直ることができた。

仕事は、出産後1週間で復帰する予定であったが、子どもの検査があったため、結局2週間後に復帰した。退院後は、子どもを連れて出社し、職場に寝かせて、仕事をした。子どもは、「とても扱いやすく」、「ミルクの時間を調節すれば、いいタイミングで寝てくれた」。

子どもは、生後5カ月で心臓の血管を縛る手術を行った。心臓に奇形が見られ、現在も穴が開いている状態のため通院している。将来も、手術はその都度受けなくてはならず、ダウン症より心臓の病気を心配している。

2000年6月、30歳の頃に夫と離婚した。仕事における夫の金銭感覚に不満があり、父親との関係も良好ではなくなっていた。出産前から夫のそんな性格に気付き、出産する1年前ぐらいから離婚するための資金を密かに貯めていた。離婚の話や手続きはスムーズに進み、それほど時間がかからず離婚できた。離婚後、夫からの養育費は月5万円もらっており、今のところきちんと支払われている。「恵まれている」ほうだと思っている。現在、夫とは用事があれば連絡を取り合い、食事にも行ける関係である。

現在に至るまで

2000年（30歳）6月、離婚後すぐに実家に戻った。同時期に両親も離婚した。また、父親と夫の自動車販売会社も解散した。実家に戻った当時、母親と弟（現在は結婚し家を出ている）との4人暮らしであった。

実家のため家賃はいらぬものの、家計は別にして、養育費と1年間貯めていた貯金と子どもの手当等で暮らしていた。

長男が0歳から6歳まで、実家のある市内の肢体不自由児通園施設に通っていた。その施設では、親子共々、教育訓練を受ける方針のため、働く時間はなかった。

2004年（34歳）子どもが5歳になると、保護者は毎日通わなくてよくなり、アルバイト情報誌で探し、市内にあるパン屋の工場事務のパートの仕事を始めた。シフト制で、時給は850円である。現在もこの仕事を続けている。

<現在の暮らしぶり>

暮らし

離婚後の1年間は実家で暮らしていたが、2001年（31歳）

から、子どもと2人で、実家にも近い市内の府営住宅に暮らしている。家賃は月13,000円である。最近まで10,000円だったのが値上がりした。収入は、パートで働いた給料月3万円ほど、元夫からの養育費の5万円、そして長男の社会手当が月10万5千円ほど（特別児童扶養手当、児童扶養手当、児童手当、自治体独自の障害者手当）で、生活をやりくりしている。しかし、暮らし向きは大変苦しい。子どもが通う支援学校の下校時間が午後1時半なので、平日週2、3日、9時から13時までの4時間働いている。土曜日は「タイムケア」（障害児専用のデイケアサービス）に子どもを預けて働いているが、施設を利用することで利用費の支出が大きく、結局家計収支にはプラスになっていない。

子ども

子どもは現在10歳で、近隣の支援学校の4年生である。働くときや急用のときは、タイムケアを利用している。タイムケアは、市が補助金を出し民間が運営しているもので、障害児の学校の放課後や休日、夏休み等の長期休暇中に活動の場を確保し、生活経験の場を増やしたり、友人を作ったり、保護者の就労支援を行ったりする場として設けられたものである。料金設定は施設によって異なり、よく利用している施設は施設独自の料金設定で1日1,400円程度である。もう1カ所利用しているが、そこは知的障害者の入居施設が事業運営しているところで、利用料は国が定めた基準設定で1日800円程度である。その知的障害者施設は以前、大人中心に受け入れていたのだが、障害者自立支援法が制定された2006年4月からは児童も受け入れられるようになった。自分の子どもは、自立支援法が施行されて間もない頃からその施設に通い出した。当初、施設としては子どもが施設にやってくるのが初めてで珍しく、他の大人の利用者から興味を持たれたり関わろうとされたため、子どもが怖がっていた。しかし現在は、その頃とは違い他の子どももいたりして、その施設に通うことを楽しみにしている。また、支援学校もバス通学になり、友人と下校できるようになり「学校が大好き」になった。日々の気分転換は、子どもと過ごす時間である。相談事などは母親や、子どもの同級生の母親同士で話すことが多く、その結果、強い繋がりととなっている。

年金保険

布団圧縮袋の工場では社会保険（厚生年金と健康保険）に加入、親戚の食事処では厚生年金に加入、夫の自動車会社でのアルバイトでは社員扱いで厚生年金保険に入っていた。現在、国民年金は加入しているが、離婚後に全額免除手続きを行った。

<仕事・社会・政治・生活への意見や思い>

障害者自立支援法は精神障害者へのサービスが手厚くなったが、他の身体障害と知的障害のサービスは低下したと思っている。直接的なものとしては利用料の値上げなどで生活が厳しくなり、障害者自立支援法が施行される前の施設料金体制に戻してほしいし、サービスの支給額は上げてほしいと考えている。「自立支援法という名前に腹が立つ」、「とりえず名前を変えてほしいですね、何が支援か」と思っている。利用料が上がって施設に行けない人も増えたことに憤りを感じている。

さらに、「母子家庭の手当より障害者の方（分野）をしっ
かりやってほしい」と思っている。障害者の居場所をもっ
と増やしてほしいし、それができたら親も働くことができ
るよ。

< 将来の展望 >

現在は、子どもが病気になったときなど休みが取りやす
いようパートで働いているが、将来、子どもが作業所など
に行くようになれば、正社員になろうと考えている。

調査番号：大阪45

調査日：12月4日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：33歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：福祉サービス業、介護職、パート ■直近の収入：月10～12万円 / 生活保護受給
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども1人 ■住居：公営住宅
- おおまかな職歴：高校中退 定時制高校入学・卒業 歯科医院・歯科助手（正職員、数ヶ月） 歯科医院・歯
科助手（パート、1年）+スーパー・店員（アルバイト、1年）、かけもち 妊娠・出産・育児 生活保護受
給（現在も受給中）（受給開始後）パセドウ氏病気発症・手術 訪問介護事業所・ヘルパー（登録ヘルパー・
5カ月）+訪問介護事業所・ヘルパー（登録ヘルパー・5カ月）かけもち 訪問介護事業所・ヘルパー（パー
ト、2年）現在に至る

< 初職に至るまで >

1976年、大阪府生まれ。両親と妹が一人いる。

小学校に上がる前に、父親のローンで一軒家を買った。
父親は、大手企業の関連会社の正社員として働き、母親は
家の近くで自営業（夜が主体の飲み屋）を営み、生活はや
やゆとりがあった。小学校、中学校は地元の公立学校に通
い、中学生の頃は病気以外での、遅刻・欠席が多かった。

中学校卒業後（15歳、1991年）地元の公立高校に入学し
たが、あまり勉強に熱心ではなくアルバイトばかりしており、
2年次に出席日数不足になってしまい、留年になるの
が嫌で自分から中退した。

16歳（1992年）中退後、同じく地元の公立高校の定時制
に編入した。そこには、中退や再入学するなどの同じ状況
の生徒がたくさんいて、中退した同じ高校からきた生徒が
3人もいた。定時制高校では商業を専攻し、簿記の資格を
取得しワープロの検定にも合格した。定時制高校編入後は、
（公立高校を）一度中退してしまったため「親に学費を出
してもらおうも申し訳なくて」学費を自分で払おうと、事
務やスーパーでアルバイトをしながら高校に通った。

< 初職から妊娠まで >

19歳（1995年）高校卒業後、歯科医院で歯科助手として
正規採用されて働いた。同年（1995年）両親が離婚し、家
族は別れて暮らすようになり、自分は父親と2人で、妹は
母親について暮らすようになった。父親と2人で暮らすよ
うになったが、父親は出張が多い仕事で、母親や妹がいな
くなり、自分だけが家事をしなければならなくなったので、
勤めていた歯科助手の雇用形態を正職員からパートに代え
てもらった。すぐにあわせて、時間の融通がきくスーパー
のアルバイトも始め、約1年間続けた。

< 妊娠～同棲 >

20歳（1996年）の時に、友人に紹介してもらった男性と
交際を始め、21歳（1997年）の頃、妊娠が発覚した。交際
していた男性とは、大阪府内で同棲を始めたが、借金や
ギャンブル癖があったり、働かないなどの様子が見られた
ため、同棲していたものの「籍を入れることはなんかいや
やった」ため、結婚は考えず、籍を入れることはなかった。
当時、男性と一緒に暮らしながらも「いつか別れるだろ
うな、見切りをつけよう」と考えていた。同棲男性は、家計
に家賃と生活費約1万円程度を入れてくれるだけだった。
そのため、妊娠中でありながら、食事を取れない時があ
たり、妊娠のための定期健診にも行けなかった。しかし、
子どもを堕そうとは全く思わなかった。すでにこの頃、父
親とは男性との交際・妊娠などとは異なる理由（執筆者
注：詳細は語らず）で絶縁状態になっており、母親とは両
親の離婚後も連絡をしていたが、男性との交際のこと
で意見が食い違い、それ以来疎遠となった。そのため、両
親からの援助は得られなかった（妹とは現在も連絡を取
っている）。

出産を控えた頃、男性の顔を見るのも嫌になり、同時に
家賃が払えなくなったこともあって、自然の成り行きで別
居することになった。ちょうど父親の家が空き家になっ
ていたので住むことになり（父親は住宅ローンが払えなくなり、
出て行った）交際相手は違うところに住むことになった。

友人が市議員とつながりのある職場にあり、見かねて
議員を紹介してくれた。相談に乗ってもらい、出産の助成
金をもらえるように、手続きをしてもらった。

22歳（1998年）の時に市民病院で男児を出産した。出産
に際しては出産費用（出産扶助）、出産後の児童扶養手当
や出産一時金などを受給した。出産一時金は、それまで滞
納していた国民健康保険の保険料を払うのに使った。

出産後も父親の空き家に戻った。男性とは事実上、別居
していたが、別れる別れないでもめた後（男性は別れたく

ないと主張)、やはり別れようと思い、男性を相手に、子どもの認知と、慰謝料と養育費について調停を申し立てた。男性は子どもを認知し、慰謝料と養育費についての命令も一応は出たが、実際には慰謝料や養育費はほとんどもらえなかった。養育費は2~3回はもらったが、そのうち払わなくなったし、その後男性は行方不明になった。借金の多かった人なので、追われていたのではないかと思う。子どもが1歳の頃から連絡を取っていない。

<母子での生活>

出産後、子どもが6カ月になるまでは、まだ生活保護も申請せず、養育費もほとんどなく、児童扶養手当、児童手当(当時はまだ障害はわからず)の4万5千円で暮らしていた。また、自分名義の借金があったが、それは、男性と同棲していた時、男性が消費者金融の借金をするために、名前を勝手に使われていたものであった。借金は自分の名義になっていたためにずっと返済していた。とてもではないがまともな生活ができていなかった。借金があると生活保護が受給できないと聞いていたので、申請しても断られると思っていた。しかし理由を話し、借金は名前が使われたことを伝えると、生活保護が受給できた。

23歳(1999年)の時に、父親の家が差し押さえを受け、府営住宅に引越した。同時期に生活保護が受給開始となった。

<子どもの障害>

23歳(1999年)子どもが9カ月の時に、知的障害が判明した。しかし、子どもの障害についてはすぐ受け入れることができず、療育手帳の申請をしないでした。障害児に支給される特別児童扶養手当については、療育手帳を取得しなくても支給されるが、2歳半になるまでは申請していなかった。その間、作業療法や理学療法などを受けていた。25歳(2001年)子どもが3歳になった時、子どもの療育手帳Bを取得した。子どもが小さいうちはまだ障害が「確定」せず、軽度に判定(B)された。各種手当の支給額も半額程度であった。

療育手帳を取得した後半年後、子どもの障害が1つではないことが分かり(自閉症・広汎性発達障害・知的障害)療育手帳もBからA(重度)になった。この頃から、市が独自でおこなっている、障害児の療育施設に子どもを通わせ始めた。

子どもは現在10歳で、支援学校の4年生である。通学は専用バスで通っており、バスは家の近くまで来て、送迎してくれる。子どもは、全介助で、自傷の傾向もある。支援学校の保護者同士の結束は固い。

<自分の病気>

24歳(2000年)で突然、甲状腺機能の病気(パセドウ氏病)を発病した。怠け癖なのかと思っていたら、だんだんさらに「しんどく」なり、普通に歩いているだけでも、100メートルを全速力で走った後のような息切れやだるさに見舞われるような症状や、疲れが日常的にあったり、汗をかいたり、体重が減ったり、手が震えたりという症状だった。医師から動いたらだめと言われ、しばらくは薬で対処して

いたが、発病して半年後、同年(大きくなりすぎた甲状腺腫を)手術して取り除いた。経過も良好で、毎日定時に薬を飲めば日常生活ができるようになるまでに回復している。当時は、生活保護と各種手当で生活し、ちょうど子どもの障害が分かった頃でもあり、自分のからだも療養しながらの生活で、仕事はできる状態ではなかった。

<再就職>

31歳(2007年)4月、ヘルパー2級の資格を取り、訪問介護事業所を2つかけもちしながら働き始めた。事業所には雇用形態が常勤(正社員)、パート(時間給)、登録ヘルパー(一つの訪問で時間給)がある。当初は登録ヘルパーとして働き始めた。

同年10月に、そのうちの一つの事業所だけにし、雇用形態をパートに変更して続けることにした。

<現在の生活>

現在(33歳、2009年)パート勤務は、時給制で、AM9時からPM4時半までである。パートなので、仕事がない時は、事務所にいれば時間給が発生し、いないと発生しないことになるが、用事があれば帰宅も可能である。

ヘルパー2級の資格を持っているが、キャリアアップのための介護職員基礎演習を受けている。現在、基礎演習週1回を含め週5回働いている。仕事の収入は、1カ月休まずにがんばって働き多い時で月約12万円足らずである。

収入は、ヘルパーの収入と児童扶養手当と特別児童扶養手当、児童手当、障害児手当(療育手帳Aのなかでも最重度の障害児に支給され、金額は13,000円)で生計を立てている。

先月、最低生活費を上回る収入があったため、生活保護をいったん「中止」にしている。生活保護のケースワーカーと相談し、最低生活費を超えたけれども急に生活保護を廃止するのではなく、中止にして、しばらく様子を見ていくことになっている。事実、収入には変動があったり、生活が苦しい時もあったりする。今の収入では、生活保護を廃止しても社会保険を支払うことは、低収入なので厳しいし、過去1年間で、公共料金を止められたこともあった。

徐々に、収入は増えてきているが、過去に、収入が最低生活費の基準をオーバーした分を返せと言われたことがあり、生活保護の担当とけんかしたこともあった。現在の担当は、知人や市議員・職場とも顔見知りで話がしやすい。

時々子どもを妹に預けたりして、職場の友達と飲みに行ったりすることがあり気分転換になる。

住宅は生活保護受給当初からの家賃17,000円の府営住宅に住んでいるが、別の府営住宅で、子育て応援世帯としての公募がありそれに応募したところ当選したため、来月(2010年1月)引越しの予定である。入居予定の府営住宅の居室は、バリアフリー仕様で、間取りも広くなっている。家賃は、2万円ちょっとである。

<今後の予定>

現在は訪問介護ヘルパーであるが、再来年、実務経験が5年に達した段階で介護福祉士の国家試験の受験資格が得られるので受験するつもりである。

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：27歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：福祉サービス業、介護職、登録ヘルパー ■直近の収入：月5万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：子ども1人 ■住居：(父親所有の)持ち家(一戸建て)
- おおまかな職歴：高校卒業 喫茶店・接客(アルバイト6カ月、在学中より継続) 絵画販売会社・キャッチセールス(2カ月) 妊娠・出産・育児 緊急一時保護所(2週間) 同施設再入所(3カ月) 現在、母子生活支援施設入所中 (入所後)ホームヘルパー2級取得 デイサービスセンター・ホームヘルパー(パート、4年9カ月) 母子生活支援施設退所 訪問ヘルパー(登録ヘルパー、5カ月) 現在に至る

<仕事に就くまで>

1982年、大阪府生まれ。地元の小・中学校を卒業。

父親(1955年生まれ)は現在54歳、給食会社の調理員をしている。母親(1959年生まれ)は50歳、大手スーパーでパートをしている。実家は昔からの地主であり、田畑も所有している。幼い頃から比較的裕福だと感じて育ち、「何不自由なく暮らしてきた」。

高校は公立の美術系高校に進学した。入学後、高校の専門領域である造形の勉強に興味がわなくなったため、学校に行くのも単位取得のためだけに登校するようになり、休みがちになった。卒業後の進路を考えたとき、何もやりたいことがなかったため進学も就職も考えず、フリーターになろうと思った。

<初職からの経験(結婚・離婚)>

高校時代から大阪府内の繁華街にある喫茶店のアルバイトをしており、高校卒業後もしばらくはそのまま続けた。卒業半年後、喫茶店のアルバイトを辞め、繁華街の路上で誘われた、キャッチセールスの仕事を始めた。仕事の内容は、歩いている人に声をかけて、高額(40~100万円)な絵画を売る仕事であった。2カ月後に辞めた。

2002年(20歳)のとき、妊娠したため結婚した。相手はキャッチセールスの仕事の同僚だった2歳年上の男性だった。結婚後は、奈良県にある男性の実家で生活した。このとき、実家を飛び出したかたちで結婚したために、自分の両親とは不仲になった。

夫の実家では、夫の母親と3人暮らしであった。夫はキャッチセールスの仕事を辞めたがそれ以降働かず、母親(看護師でパート勤務)の収入で暮らしていた。結婚後、妊娠期間中も、夫からの身体的・精神的な暴力(DV)を繰り返し受けていた。さらに、自分あての郵便物やメールなどは全てチェックされたり、24時間監視されていたため外出もできない状況であった。夫以外の人との連絡も制限されていて、両親や友人にも接触することができず、夫から「実家に帰ると家に火をつけるぞ」などと脅迫されていた。さらには、夫の母親も、夫から暴力を受けていた。

2003年(21歳)3月、女兒出産。

出産後も暴力はエスカレートし、夫は自分が子どもに手をかけるのが気に入らず、子どもが邪魔だと思っていたようだった。そのため、子どもにも暴力が及びそうになったので、同年11月に、夫が寝ている隙を見計らい、とにかく逃げようと着の身着のまま家を出て、子ども(8カ月)

と早朝の始発電車に乗り込んだ。そのとき荷物はほとんど持っていなかったが、保険証と通帳のみは持って出た。

どこに行くかはそのとき決めていなかったし頼るあてもなく、とりあえず実家のある地元の市に向かった。地元の市に着き、すぐ近くの警察署に飛び込んだ。

逃げる以前もDVについての相談は、夫の隙を見て、奈良県の行政の相談機関に、何度か電話をかけたことがあるが、その度に相談機関からは「担当者がいない」とか、「時にかけ直してください」等、電話をかける時間を指定された。しかし、夫に常に監視されている状態で自由に電話をかけることは不可能であった。そのときは、相談機関といっても「全然役に立たなかった」し、「腹が立った」。

警察に飛び込んだ後、大阪府内にある民間施設で、緊急一時保護として2週間過ごした。緊急一時保護の期間が終わった後は、引き続きその施設で、利用料を払いながら3カ月間、次の自立のために過ごした。この頃、自分名義の預金通帳には、独身時代からの預金や、出産手当金等が150万円程あった。有料ではあったが、居心地が良かったため同施設に滞在することにした。この施設とは、現在も交流は続いており、クリスマス会などの行事にも参加している。「一番に相談にのってもらえ、温かい施設」だった。

<新たな仕事までの経緯

(母子生活支援施設での暮らし)>

2004年3月(22歳)からは民間施設から大阪府内の母子生活支援施設に行政の措置で入所した。民間施設に入所しているときに、母子家庭の支援を行っている別な民間団体が就業支援のための講習会を行っているという情報を教えてもらい、すぐに就職したかったため、保育をしてくれる施設に入りたいと希望していた。

母子生活支援施設に入所し、4月からはホームヘルパー2級講座を受講し始めた。高卒で取得できる資格として、ヘルパーが、一番期間が短くて取得でき、しかもすぐに仕事につながり、将来的にも実務経験で上の資格(介護福祉士)を取れると聞いたからだ。

ヘルパー講習は6月で修了予定だったが、その頃子ども(当時1歳)が肺炎で入院してしまい、事情を話し講習期間を9月まで延長してもらった。しかし、母子生活支援施設側からは、就労するように強く言われ、ヘルパー講座終了前であったが、すでに6月から働きに出た。この頃の日常は、1日のうち講座受講・子どもの入院見舞、仕事という日課を毎日こなしていた。当時は「もう嫌」と思っていたが、休めない日々だった。

2004年6月(22歳)からの仕事は、施設の近くのデイサービスセンターのパートだった。1カ月のパート収入は約10万円になり、その他、児童扶養手当・児童手当(合わせて約4万5千円)の収入があった。当時、施設生活で住居費が不要であったため、生活に余裕があった。子どもが0歳から2歳までの間は、施設内にある保育室に預け、3歳からは地域の保育所に預けて働いていた。勤務先のデイサービスセンターからは、正社員になることを勧められたが、子どもが幼いのと子どもがよく病気したため、パートのままだった。

社会保険は、国民健康保険に加入し、国民年金は免除申請していた。

デイサービスセンターの実務経験が3年経過し、介護福祉士の受験資格が得られたため受験することにした。資格取得のための勉強は、収入や時間がないため試験対策の講習などは受講せずに、仕事から帰り子どもを寝かせてから毎日1時間ほど行っていた。わからない問題は、社会福祉士の資格を持っている施設の職員に教えてもらったり、勉強方法をアドバイスしてもらったりしながら行った。そうして本年(2009年)1月(27歳)に介護福祉士国家試験を受験、無事に合格し資格を取得した。

結婚当時、反対されて家を飛び出した状態だったことから、両親とはずっと不仲であった。しかし、施設で頑張っている姿を見て、両親は徐々に態度をやわらげ、「家は建てたるから。子どもも小学校1年生になるし、いつまでも施設にいるのも…」と言われ、ほぼ関係は修復した。両親は自分と子どものために、実家の近くに父親名義で家を建ててくれた。

その家に移り住むことになり、2009年4月(27歳)に施設を退所し、引っ越した。施設には助けられたし、試験も合格したからよかったが、設備のことを言えば、お風呂もなかったし、決まり事も多くてストレスが溜まっていた。「よく5年も居れたなあ」と思っている。施設は平均的に入所期間は3年程度であるが、事情があれば特別に延長が可能であった。

<現在の暮らしぶり>

退所後、実家の近くに引っ越し、子どもと2人で2009年4月(27歳)から父親が建ててくれた新築の家で暮らし始めた。現在の暮らしは、住宅があることが一番助かっている。

それまで勤めていた施設の近くのデイサービスセンターも、引っ越しに伴い勤務地が遠くなるため、2009年3月(27歳)で退職した。4年9カ月間、勤務した。

実家の近くに暮らすようになり、4月から市内の自動車学校に通い、6月に自動車運転免許を取得した。

自動車学校に通うのと並行して、ハローワークで、新たな就職先を探していたが、2009年6月(27歳)から訪問介護の登録ヘルパーを始めた。登録ヘルパーの仕事は、生活援助は時給1,000円、身体介助は時給1,200円である。登録制のヘルパーなので利用者からキャンセルが出ると突然仕事なくなることもある。訪問介護の雇用形態は、正社員、パートおよび登録ヘルパーの3種類があり、登録ヘルパーは雇用形態としていちばん不安定である。1カ月の給料は5万円程度である。それに加え、児童手当・児童扶養手当の4万5千円があるが、デイサービスセンターで勤務していたときと比較すると、収入は減少した。そのため、まだ家の

固定電話も引かず、節約生活をしている。

職場からは、人が少ないから休まれると困ると言われているが、子どもが喘息持ちであるため、子どもの調子が悪くなると大変で、かかりつきりになる。現在は子どもがまだ幼いため、土日祝日は働きに行けない。

両親はまだ若く仕事を持っているため平日は忙しい状況であるが、仕事が遅くに入ったときは、預かってもらったりするなどして、可能な限りのサポートも受けている。両親からは、家を与えてもらったほか、子どもの学資保険や、現在の住まい(父親名義の住宅)の固定資産税などは全て支払ってもらっている状況で、「今もすごく恵まれている」と思っている。

<仕事・生活についての意見や想い>

働くことができる職場(介護・ヘルパー・施設等)はたくさんあり、自分自身も、介護福祉士の資格も取得したのに、子どもがいて、時間があまりないという理由だけでたくさん断られた。「子どもがいるだけで、はじき出されてしまう」ことを実感した。保育付きの職場(施設)であっても、子どもが5歳まで(就学前)などのところが多い。小学校1年生になれば保育は不要ということだろうが、「小学校1年生でも、まだひとりで家にいることはできないのに」と思っている。採用時の面接では、いつも子どもの受け皿がないということが引っかかっている。

母子生活支援施設のあった市は財政的に厳しいと言われている市であるが、施設に入所していたとき、福祉は充実していたように感じた。地元の市に帰ってくると、福祉に不十分さを感じ、「なんでもっとちゃんとせえへんの?」と思っている。行政は、「子どもを一人にしたらかわいそうや、やれ虐待や言うくせに、(福祉施設の)設備が整っていない。腹立たしい」と思う。

施設にいた頃、生活保護を受けて働かない人が多くいた。「生活保護を受けている人の方が生活にゆとりがある」ように思えたのと、働いていないのに退所して、居宅設定し月4万円の住宅扶助と生活保護費を受けて、「自立」したといわれる人がいて、一方で自立するために必死で働き、結果的に退所できていない自分たちが、自立に手間取っていると周囲に思われ、そのことにとても矛盾を感じた。

<未来への展望>

子どもが大きくなるまで、あと3~4年は、今の雇用形態(登録ヘルパー)でやっていくと決め、それ以上働くのを我慢している。そのため、現在、働けない時間を利用して、ケアマネジャーの資格取得のための勉強を行っている。2010年9月頃に受験する予定にしている。「合格率は30%くらいです。(資格が)取れたら月収もかなりアップするんで、長い目で見て取れたらいいなって」と思っている。3~4年後には正職員を目指し、将来、フルタイムで働きたいと思っている。

再婚や出産は、もうする気はない。「男性にこりこりって感じです。経験してるだけに無理だと感じてしまう。ようやく先が見えてきているのに、逆戻りしたくない」。自分自身でキャリアを積んで、子どもを大学に入れたい。「子どもは好きやけど、ゆとりがない状況で育てるのは子どもがかわいそう」だと感じている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：23歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：レジャー関連業、専門職、アルバイト ■直近の収入：月5万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 芸能事務所・お笑い芸人（高校在学中より活動開始）+レジャー関連会社・添乗および物販（アルバイト、9カ月）現在に至る

<初職に就くまで>

1986年、大分県生まれ。両親と兄1人、自分の4人家族である。

両親について

父親は大分生まれ。九州の国立大学卒業後、大手スーパーに入社。同じ職場の女性（自分の母親）と社内結婚した。当時は同期の中でも業績がトップであり将来を期待されていた。当時の社長から「自分の後継者が出てきた」と言われ、かわいがられた。父親が宮崎店勤務の時（父親26歳、自分1歳の時）、激務がたたって脳卒中で倒れ、その後遺症で左半身不随となった。その時社長が、会社を辞めさせないように配慮してくれ、さらに入院中の費用などを私費で全額出してくれた。

母親は、物心ついたところから18歳まで、宮崎県のキリスト教系の児童養護施設で育った。母親の両親の居所は今もわからない。高校は県立高校の家政科に入学した。施設から通える範囲には高校が2～3カ所しかなく、その高校に合格しないと、「マリア（修道女）になるしか道がない」と言われていたため、その高校にがんばって入学した。卒業後、父親と同じ大手スーパーに就職した。職場で父親と知り合い20歳で結婚、同時に退職した。

両親との生活

自分が2歳（1988年）の時、一家で大阪府に引越してきたが、その時のことは両親ともに全く語らないし、大阪に出てきた理由はわからない。来阪してしばらくは、母親と兄と自分のみで暮らし、父親は自分が4歳（1990年）ころに同居となった記憶がある。大阪で初めて住んだのは小さなアパートだった。

父親は、府内の支店を経て、府内の別の支店に現在も勤務している。現在52歳。障害年金を受給中で、障害者手帳を持っている。

母親は、結婚後しばらくは内職などをしていたが、自分が小学校2年生のころ（7歳、1993年）に保育士の資格を独学で取得し保育所に就職した。現在も府内の保育所で働いている。

2～3年前に、一度、母親の身内らしき人から電話がかかってきた。自分が電話を取ったが、母親のことを尋ねられ「元気になっていますか」と聞いてきた。きっと母親の母親（自分の祖母）であると確信した。

兄は公立大学を卒業後、商社に入り現在中国に赴任中である。給料も悪くなく実家に毎月15万円ぐらい送金している。両親は、何年かのうちには大分に帰ろうか（引越そうか）と考えている。

大学卒業まで

地元の小・中学校、公立高校を経て、私立の福祉系大学に入学した。小学校のころから、母親も保育士として働き始めたので、ずっと「かぎっ子」だった。ひとりが好きで中学校、高校は一人でお弁当を食べるような子どもだった。幼稚園から高校まではサッカーを続け、高校時代は、地元の市の選抜に選ばれた。そのため、実業団から誘いがあるかと思っていたが、なかったため、その時点でサッカーは辞めた。

高校の時、周囲から、「お笑い芸人になったらええねん」とよく言われていたので、その気持ちが強くなった。高校3年生（17歳、2003年）の4月、クラス替えがあった次の日に突然、芸人をやろうと思いついて今の芸能事務所に向かった。その時の動機は覚えておらず、気がついたら建物の前にいて、意外と警備もなくすんなりと建物に入ることができた。「エライ人」が一番上の階にいるものと思い、エレベーターに乗り上まで着くと、出会った男の人から、どこに行くのかと尋ねられた。事情を話し「自分はどうしてもお笑いがやりたくて学校を休んできました」と伝えたら、学校に行きちゃんと就職しろと諭され、出口まで付いてくれた。帰り際に、「もう一回この世界で出会ったら、面倒見たる」と言ってくれた。

その後（高校3年生、2003年、17歳）お笑い芸人になるにはネタを書いて人に見せないといけないと思い、友人とコンビを組み、インディーズライブに頻繁に出た。インディーズライブは自分で出演を申し込み出ることができた。現在そのころ一緒にやっていた人達は全員辞めているが、自分は大学に入っても続けた。

大学は、福祉系大学に一般入試で進学した。どのような大学か知らずに入学した。大学では、部活をやるより、芸人を目指して「人生で無駄な時間を作ろう」と思った。大学時代は、学費を稼ぐためにスポーツ店のアルバイトと、競馬ばかりしていた。1年生の終わりには100万円ちょっと貯まり、全て2年次の学費に回した。アルバイトをしてそれを学費に充てるという生活を3年生まで続けていて、4年生の学費を支払い終えた4年生の時は暇になってしまった。

大学4年生（2008年）の時、卒業したら時間がなくなるし、きちんと自分の生まれたところを見ておこうと思い、九州の父親の実家や父親の母校の大学、母親の育った児童養護施設を訪問した。とりあえず自分の目で見ておかないと、後々、誰にも話せなくなるので、もったいないと思ったからでもある。

とくに、母親の育った児童養護施設の訪問は印象深かった。母親がいつも「古くて汚い施設」と言っていたが、建物はきれいになっていた。母親のことを知る先生（職員）

が一人だけだいて、その先生に、その場で施設から母親に電話をかけてもらった。お互い二十何年ぶりに話をし、後日、母親は施設を訪ねて行った。とてもいい親孝行をしたと思った。母親は、児童養護施設時代の友人とまだ連絡を取り合っている。

大学4年生の11月(2008年、22歳)高校時代から組んでいたお笑いコンビの「相方」が急に結婚したいと言い出し、コンビを解消した。

しばらくは、どうしようかと思っていたが、自分はまだお笑い芸人を続けていこうと思い、これまでの知り合いやコネをたどり、卒業の2~3カ月前(2007年、22歳)から、芸能事務所の関連子会社でのアルバイトをすることになった。そこで、現在の相方と出会い、新しくコンビを組むことになった。その「相方」は現在所属している芸能事務所のお笑い芸人の養成所の出身だったが、一緒にオーディションを受け続け、現在の芸能事務所に所属するに至った。

<現在の生活状況>

生活・仕事

2009年3月(22歳)大学の卒業式のすぐ後(3月21日)一人暮らしをするために、実家から引越した。引越しの費用は自分が生まれてからずっと親がそれまで貯めてくれていたお金(48万円)をもらって、充てた。

現在は、芸能事務所(本社)にコンビを組んで「タレント」として「所属」しながら、子会社でアルバイトをしている。

芸能事務所に所属しているタレントは、相当数いて、自分はお笑い芸人としての仕事はほとんどゼロである。入る時に契約書らしきものにサインをしたが内容はあまり覚えていない。内容の一部はコンプライアンスのようなもので、この会社に入るのだったら、法律で禁じられている行為(薬物など)を犯してはならないといった主旨のことが書かれていた。通常の会社のようなちゃんとした契約はしていないように思う。親の収入を書く欄があったが、どういう意味なのかはわからなかった。

ピラミッド式のオーディションを受けて、そこで上位の成績を残すことで、テレビ等に出ることができる。そこまですべていなくてもある程度の実績があれば、会社から謝金程度の出演料を払ってくれるので、振込口座を作ってくれと言われる。

しかしテレビ等に出演するだけでは、「所属」したことにならず、それに加えてスケジュール管理されるようになれば(実際には仕事が全くなくても)一応、「所属」のタレントとして、認められたことになると思っている。そうした意味では自分はまだ「所属」するには至っていない。

社員証のようなものもないし、社会保険もない。雇用保険という言葉ははじめて聞いた。

専用劇場に出演している商品価値のあるタレントをまとめているマネージャーが2人いるが、仕事が入った場合には、そのマネージャーから電話がかかってくる。その他、会社にはあいうえお順の各タレントのスケジュールファイルが並べられている部屋があり、仕事があれば、そのファイルに記入され、多くの「所属タレント」はそのファイルで自分の仕事を確認する仕組みになっている。

収入は、今月はゼロだった。先月は800円が振り込まれていた。800円は本社からの営業で岡山県まで行った時の報酬である。漫才をして宿泊して、翌日にビンゴ大会の司会をしてバスで帰ってきたところ、収入は800円だった。もともと出演料がいくらで何がどのように引かれたのかはわからない。労働者という考えは捨てなければならないと考えている。800円もらって岡山に行くことができ好きなことができたと考えている。事務所には、バス代金の清算などの用事で行くぐらいである。

本社からの収入は1カ月0円~数百円なので、現在芸能事務所の子会社でアルバイトをしている。仕事内容は、バスの添乗と物販である。劇場鑑賞にくる団体顧客専用の観光バスに添乗員として同乗し、その劇場を鑑賞するための話題提供や「前説」をしたり、顧客の鑑賞ムードを盛り上げたりする。その後キャラクターグッズやおみやげを車内で販売する。1回添乗すると報酬は5,000円程度だというが、諸経費がずいぶん引かれる。物販の成績はアルバイト仲間のなかではいちばんよい。

子会社での収入は、2009年4、5月は入ったばかりで仕事もなく2万円、6月はずいぶん仕事もわかってきたので5万円、7、8月は10万円、9、10月は5万円程度だった。

他に収入はなく、他の仲間が本業の仕事がない時によくやっているような飲食店でのアルバイトはやっていない。そのかわりバスの添乗をやっている状態である。月の収入は、いい時で15万円。悪い時で5万円ぐらいである。仕送りは一切もらっていない。

住居は、私鉄の主要駅まで自転車ですぐ5分の便利なところにあり、家賃は36,500円で水道、ガス、電気料金込みである。間取りは6畳一間である。ルームメートはいない。携帯電話代は毎月1万円程度。新聞はいやでも取るようになった。食事は先輩と一緒にもらって出してもらえる。自分だけが貧乏なわけではなく、仲間同士で食事は助けあっている。

健康保険は、それまで国民健康保険に加入していなかったが(無保険状態)、最近、親が手続きを確認してくれ、月2,500円支払えば加入できると確認したため、これからは保険料を払う予定である。

国民年金は、学生の時は納付特例を申請していたが、現在は一切払っていない。母親が払っているかもしれないがわからない。

友人・先輩・後輩とのつながり

2009年2月(22歳)に、子会社で仕事をさせてもらうために挨拶をしにいった時に、向こうから「覚えてるか」と声をかけてきた人がいた。それは高校3年生の時に本社に行った時に出合った男性で、この子会社の役員だった。運命的な出会いだと思った。現在でも「よく面倒を見てもらっている」。毎回(オーディションなどで)結果を出せていないので、申し訳ないと思っている。

お笑い芸人をはじめて5年目になるが、もうすでに同期が辞めていっていなくなっている。現在付き合っている先輩や後輩は、売れない先輩が、今からがんばろうとしている後輩しかいない。いちばん「谷間世代」である。自分も東京に行ったら売っていたかと思うし、いずれ、東京に行こうと思っている。「東京に行く」というのは命令で行くのではなく、自分達の意志でいくことになる。「こっち(大阪)では光あびない」と思うか、「一発勝負かけた

い」と思った人たちが、会社の「エライ人」に言って、大阪を辞めて、東京に所属しなおすことになる。大阪からの紹介状を持っていけば東京に籍だけは置いてくれる。「めっちゃ売れている人が東京に行ってもゼロ口から（スタート）なので、周りは誰も知らない。また（新しく）大阪の子が来た」程度にしか見られない。

会社には労働組合や、労災保険はないと思う。番組先では絶対怪我をしてはいけないと思っている。会社からは何も出ないから。よく見る火花を出したり、何かにぶつかったりするのは、何十回とりハーサルをして、絶対に怪我をしないようにしている。

また、所属している芸人が、極貧になった場合や地方から出てきて身寄りもない場合等には、会社はお金を低金利で貸してくれる。ギャンブルで借金したり、サラ金に手を出し借金まみれの人に対して、会社が肩代わりしてくれることもある。そのかわり会社が本人と融資の契約を結ぶ。借金といっても数百万円までが限度である。そのぶん仕事をくれたりもする。ちょっと生活に困った時も貸してくれるようで、後輩もよく借りている。

仲間のなかには借金を抱えている者も多いが、それらの借金は仕事がなく生活に困ってサラ金に手を出したというより、周囲の先輩がギャンブル好きで、それに付き合わされて借金が増えるケースが多い。なぜなら、出会った先輩が、「売れて」いてギャンブルが好きだと、金銭感覚に差があるなかで先輩の言い値で賭け事をやらされることがあるからだ。コインの裏表を当てるゲームで、1回で1万円とかで賭ける。それらも先輩の言うことなので付き合わなければならない。自分も60万円貯金を持っていたが、もともと自分自身マージャンが好きで、賭けマージャン等に付き合わされて80万円損をした。その時初めてお笑い芸人を辞めようと思った。生活ができなくなったら終わりだと考え、そのギャンブル好きの先輩とのつながりは切った。関係が悪くなったわけではなく、付き合わないようになっているだけである。先輩達は遊び感覚だが、それで辞めていった人も多いと思う。そこで辞めていくようでは、今残っている人からすれば、そこまでと見られるだけである。

長くこの世界にいる人は、神経が磨り減るぐらい人に気を使っているように見える。先輩との関係は「絶対」で、例えば、先輩と食事をする時も先輩が口にしてからでないし、食べられないし、エレベーターのボタンは後輩が押して先に行ってもらいようにしなければならない。先輩に対するマナーができずに、関係が悪くなって辞めていくお笑い芸人も多い。自分もこの会社に入って一度だけ先輩と関係が悪くなったことがあった。先輩とマージャンをする時には、後輩は最初勝っていても場を盛り上げるためにわざと負けなさいといけないという不文律がある。ある日、先輩とマージャンをしていて、「ゲームなのだから」と勝ってばかりいたら、空気を悪くすると怒られた。矛盾を感じ、その時はもう芸人を辞めてもいいと思い、その先輩と殴り合いをしそうになった。周囲全員から、「お前が悪いから謝れ」と言われたが、なぜ悪いのかわからず謝らないでいたら、自分の代わりに相方や後輩が先輩のところに謝罪に行ってくれ、その場は収まった。それ以来、自分を前に出すのは一切やめた。

大学時代の友人とはつながっているし、応援してくれている。たまにライブも見に来てくれる。

家族関係は円満である。今までは月3回は家に帰ってい

たが、最近は帰れていない。両親は「がんばれ」としか言わない。母親は急に心配して「くいもん1万円ぐらい送ってきたりする」。

つい先日遠距離で交際していた彼女と別れた。メールを送っても返事が来なくなった。自分も忙しくて、あまり会いにいけなかった。結婚については、今の収入が少ない状態では相手に迷惑をかけるだけなので考えていない。

< 本人の望みや不安 >

この「世界」は、「お笑いを続けたいという気持ちがないと生きていけない。好きなだけでは辞めてしまう。鉄のハートがないと無理」。自分しか信じていない。「いつか自分の力で売れる」と思っている。いやなこと多いけど、楽しいことも多い。

年上の後輩もいるが、1日でも先輩なら絶対に食事はおごらないといけない。後輩を連れて食事に行くと1回2万円ぐらいの出費になるが、それだけの食事代を払っても、面白い話が聞けるので、もったいないとは思わない。「お金なんかいらないと心底思える」職業である。一般人と異なる価値基準ができてきてしまっていることは自分自身で気づいている。

徐々に応援してくれる人が増えてきているし、今は、オーディションの成績もいいところにある。一定のファンも付いてくれていて差し入れなどももらう。相方とも仲がいいし、別のお笑い芸人からどうしても組んでくれと言われて組んだ。昔の自分からは想像できないほど努力をしており、次第にうまくなってきた。

現在の暮らしは、金銭面は苦しいが、「気持ちは裕福」。これからもお笑い芸人としてがんばっていきたい。

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：25歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：高知県 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：福祉サービス業、福祉職、契約社員 ■直近の収入：月12万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：同居する親1人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校卒業 社会福祉法人・福祉（契約職員、4年7カ月）現在に至る

<仕事に就くまで>

1984年、高知県生まれ。

両親と三人姉妹、その末っ子で、5人家族であった。

父親は鯛やハマチの養殖業を営んできた。父親の仕事は天気によって漁獲量が左右されるため、台風などで大きな損害を受け、家計がたいへんなこともあったが、子どものころに生活が苦しいと感じたことはなかった。

高校生のころ、将来資格を取ろうと考えていたが、歯科系の資格を取るか、社会福祉系の資格を取るかで悩み、進学する専門学校について迷った。福祉職に就きたいと強く思ったわけではないが、将来性を考えて地元の福祉系専門学校（3年制）に進学した（18歳、2002年4月）入学した専門学校には社会福祉と保育の2つのコースがあり、保育士コースを選択した。その結果、保育士資格を取った。また、学校では保育のほか、社会福祉を勉強する機会があり、障害者福祉や介護福祉にも興味を持つようになり、あわせてヘルパーの資格も取得した。この専門学校を卒業するまでは、父母のもとで暮らし、そこから通学していた。

専門学校を卒業するころ、先生の勧めにしたがって、大阪府で開催された「福祉フェア」（介護・福祉関係職の就職先となる法人や企業が一堂に集まって行う紹介とセミナー）に2度参加した。このフェアには福祉関係の法人や企業がたくさん参加しており、そこで複数の福祉法人の方針や理念を聞いたところ、自分に合うと思った2つの福祉法人があった。これらの福祉法人はいずれも大阪府にあってどちらにするか迷ったのだが、最終的に、繁華街に近い福祉法人を選んだ。

本当は東京に出て働きたかったが、当初、両親は実家や地元を離れることに反対していた。姉に赤ちゃんが生まれ、両親にとっての初孫であったため喜んだ。そのためか、少し気持ちに変化が生じたようで、大阪であれば地元からも近いのでそこなら就職してもいいと許しをもらうことができた。

<初職からの経験>

21歳、2005年4月に、専門学校を卒業して、大阪府の社会福祉法人に契約職員として就職した。現在まで、ここで4年7カ月働いている。

この福祉法人には様々な部署があるが、入社当初は大人相手の福祉相談業務を担当した。高齢者や様々な障害を持っている人々の入所相談や福祉制度利用についての相談を受けた。

1年後（22歳、2006年）に現在の業務に配置換えになった。現在担当している仕事は、障害のある18歳までの子どもの保育と支援である。契約期間は定まっていないが、毎年上司との面接を経て契約を更新している。契約書などは

交わしていない。今の状況では契約が打ち切られることはないと思う。職場であるデイサービス施設は市からの業務委託を受けているため、市がこのサービスを打ち切らないかぎり仕事はある。たとえ打ち切られても、大きな法人のため、解雇よりもむしろ他の部署に回る可能性のほうが高いと思う。現在の部署は7人だが、正職員は1人で、他の6人は契約職員である。

このデイサービス施設で世話をしている子どもは30～40人だが、彼らは寮に入っているわけではなくデイサービスを受けるために通いでやってくる。学校の放課後に子どもたちを迎えに行き、施設のパソコンなどで一緒に遊び、帰宅時間になると車で自宅に送り届けている。所定の勤務時間は午前11時から午後7時15分までである。子どもたちは昼間は学校へ行っているため、子どもたちが施設に来るのは午後3時くらいであり、それまでは事務作業などをこなしている。学校とは違うので勉強を教えているわけではなく、一緒に遊ぶなどして彼らの様々な能力の育成を手助けする仕事である。

出勤日は月曜日から土曜日（指定休日7日あり）および第二・第四日曜日の半日で、休日は7日間の指定休日と第一・第三日曜日である。実際に拘束される時間は休憩時間を合わせて1日平均10時間くらいで、ほぼ毎日2時間の残業がある。長期休暇などまとまった休みを取るのが難しく、3カ月ほど前に申請しなければならぬ。入社当初1年間担当した福祉相談業務では、午前9時開始で午後5時半くらいに仕事が終わったため、比較的ゆとりがあった。しかし、現在の業務に配置換えになってから4年間は、一度も有給休暇を取れていない。また、給料は月平均手取りで12万円である。しかも、冬場には子ども向けデイサービスの休みが多くなるので、給料が月9万円くらいに減ってしまう。生活は、結構厳しいものがある。入社当初は毎月給料のうち1万円は財形貯蓄をしていたが、最近は2カ月に1度くらい下ろしているため、この貯蓄も底をついている。しかし、親にお金を借りるつもりはない。

給料が安いので、仕事を始めた1～2年のころ、わずか3カ月くらいの期間であったが、勤務が終わってから近所の別の福祉施設でヘルパーのアルバイトをしていた。現在の給料でなんとか生活していくことはできるが、好きなものを買うことも貯金することもできない。だから、今でもできればアルバイトをしたいと思っている。今年に入って、6カ所ほどアルバイトの面接を受けた。施設の終わるのが午後9時過ぎと遅いので、希望する勤務時間は午後10時から終電までと短くなる。面接では、勤務時間が短すぎるので「これでは使えないと言われて」、すべて落とされた。世の中、「こんなに不景気やったかな」と思う。

同僚のなかで1人暮らししている人は、自分を含めて2人である。他の人たちには、住居の遠い人が多いが、たいい家族と一緒に住んでいるので、今の給料でもやって

いけるのだろう。

ちょうど先月（2009年10月）「生活が苦しいので正職員にしてほしい」と上司に申し出た。そして、来年（2010年）の3月に正職員になるための面接を受けることになった。去年（2008年）は仕事を辞めたいと思っていたが、上司に思い直すように説得されることがあった。今は、この仕事をもっと続けていこうと思っ直している。

この仕事を選んだのは、やりがいのある仕事だと思えたからだ。しかし、今の仕事は楽しいと思う一方で、他の仕事もやってみたくて思っている。「やりたいことがいっぱいあるけど、今の仕事も楽しいから、どうしようかなって考えている」。ただ、「ずっとこの仕事をやりたいとは思わない」。その理由の一つは、この仕事の給料があまりにも安いということにある。もう一つは、この福祉の仕事は新卒で入ってからずっとやってきたが、他の仕事も経験してみたいからだ。「福祉だけに染まりたくない」と思う。具体的には、出版社など、本に関係する仕事に携わるのが夢である。本を読むことが好きなので、出版の仕事をしてみたいと思っ直している。

< 現在の生活状況 >

勤務先から自転車で7分くらいの場所に風呂付のワンルームのアパートを借りて住んでいるが、すごく古い。手取り月12万円の給料のうち、家賃が5万円、携帯電話代が1万円、専門学校のとときの奨学金の返済が1万円、光熱費5,000円、化粧品1万円、残りの3万5,000円はタバコ代と食費で消える。お金がなくなって米が買えなかったときがある。ただし、上司が食事をおごってくれたり、先輩夫婦にご馳走になったりするのので、ご飯に困ったことはあまりない。財形貯蓄では簡単にお金が下ろせてしまうので、友達に10万円ほど預けている。現在の生活はすごく苦しいときもあり、基本的にゆとりがない。「ゆとりがあったことは一度もない。平均的に言ったら、やや苦しい」。

1年ほど前までは携帯電話代（月1万円くらい）を親に払ってもらっていたことはあるが、それ以外は親に借金したり仕送りをしてもらったりしたことはない。いちど病気で入院したことがあり、そのとき親に9万円の入院費を支払ってもらった。

友達に飲み誘われても、よく「給料が入るまで待って」と言っている。

本が好きであるが、書店での立ち読みが趣味なので、趣味にお金を使うことはあまりない。本を買うときは古本で済ませてしまう。今の勤め先に入ってから、部落差別や障害者差別に関心をもち始め、これらの本を読むことが増えた。

職場では年齢が一番下で、プライベートで職場の同僚とつきあうことはあまりない。一緒に遊ぶ友達は同郷の、主に高校時代の友達だ。友達たちはだいたい自分よりも5万円くらい給料が高い。最初は友達の給料と比べると自分の給料が低かったの、とても恥ずかしかった。「すごいな、これで生活できるのか？」と言われるのが嫌だった。しかし、とても節約しているかのように思われるが、自分としてはそれほどでもないと思う。欲しいものは買わずに食事に費やせば、ゆとりはある。

< 本人の望みや不安 >

困ったことや悩みを相談できる相手は、親やきょうだい、恋人、友達、職場の上司など、たくさんいる。親は生活に余裕がないと思うので、困っても経済的支援を受けたいとは思わない。「本当に困ったら...、もっと働きますわ」。

同じように地方出身で1人暮らしの彼氏がいるが、自分の倍くらいの給料をもらっている。彼に経済的にサポートしてもらうことはない。彼に言われたらすぐにでも結婚するつもりだが、28歳くらいまではこのままでいいと思っ直している。

「明るい貧乏」と自認しているので将来のことはあまり考えないが、収入面ではやや不安がある。保険料の高い民間の医療保険には加入できないので、ケガをしたり病気を罹ったときのことが不安だ。あと2万円は給料が増えたらいいと思う。以前バイトしていたときは簡単に10万円くらい貯まったので、今もバイトがしたい。

今の仕事のいい面は、自分が企画したことが実現できるし、新しいことができるようになることだ。したがって、仕事自体には満足している。しかし、年に1~2回気分が落ち込むことがある。そのときには、この低い給料で働くのが苦しいと思っ直してしまう。だいたい、毎年11月くらいになると、このままこの仕事を続けていけるのかどうか考える。現在はとても元気だが、3カ月ほど前には仕事への興味さえ失ってしまったこともあった。働きに見合った給料が欲しい。

もし来年2010年3月の昇進についての面接がうまくいって正職員となり、給料が満足できるものになったら、この生活に甘んじてしまうのだろうか、それともそれが仕事を変えるタイミングとなるのだろうかと思っ直してしまう。

将来、結婚しても仕事は続けていきたい。人と関わる仕事が楽しい。将来は、好きな仕事をしながら、おいしいものを食べて、おいしいお酒を飲んで、楽しく生活したい。この好きな仕事とは、今の仕事ではないが...

それはともかく、現在のデイサービスの仕事は国と市からの委託を受けているが、市よりも国からの支援のほうが多い。市にはもっと障害児に目を向けてほしいと思う。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：26歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：人材サービス業、専門職（就労支援指導）正社員 ■直近の収入：月17万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 飲食店・接客やコンビニ・レジ打ちなどのアルバイトを転々（1年） 建設会社・作業員（日雇い、2年）+アルバイト（2年）、かけもち 役所・地域就労支援事業相談員（嘱託職員、4年） 就労支援を行う社会的企業・就労支援指導（正社員、1年半）現在に至る

<仕事に就くまで>

1983年、大阪府生まれ。

両親と、兄、弟の5人家族であった。父親と母親はともに地元の市の公務員の現業職員であり、また地元の団体の役員をやっていた。両親との関係は、幼少期からたいへんよかったし、現在もよいと思う。

小学校6年生のとき、生徒会長に立候補し、「教室にクーラーを付ける」という公約をしたら、当選してしまった。結局、学校からは「無理だ」と言われ、付けることはできなかったが。

生まれた区にある地元の小学校から中学校に進学したが、中学校2年生2学期の終わりに家族の転居にともなって別の中学校に転校し、生活が崩れていった。学校の環境が変わり、友達が変わった。転校生という立場上、「多少気張らなあかん。目立ってかなあかん」という思いから、タバコを吸ったり、授業に出なかったり、朝寝坊して昼から学校に行ったりしていた。授業はほとんど聞いておらず、先生が何を教えていたのか全然覚えていない。家庭科の授業のときには、皆がざぶとんを縫っていたのに、自分は制服に女の子の名前を刺繍していたのを覚えている。「学校のトイレにタバコを捨てるのは詰まるので辞めて欲しい」と中学校の先生から言われて、代わりにドラム缶を用意してくれた。それでも先生とは仲が良かった。

中学校3年生の頃の家庭の暮らし向きは、親がともに公務員なので、借金もあったが、ややゆとりがあったと思う。

高校に行けたのは、「担任の先生のおかげ」と感謝している。中学生の頃から新聞配達をしていたので、卒業したら働こうと思っていた。ただ単に「お金を稼げればいい」と思っていた。実際に、地元の友達や先輩は中学校を卒業して働いている者が多かった。あるとき、担任の先生から、書類を持ってある高校に行くように言われ、それを持ってその高校に行き、紙袋を開けてみると入学試験の願書であり、それを提出することになった。事前に、高校に願書を出しに行くことを知らされていなかった。中学校に戻って担任の先生に「何で高校を受けなあかんねん」と聞くと、その高校は女子高校から男女共学に変わったときであり「女の子がたくさんいるぞ」と言われ、「それなら行こう」と、その全日制の私立高校に進学した。

その後成人して就労支援の仕事に携わることになったが、これには「高校卒業」の学歴が最低限必要であった。後になってわかったことだが、中卒では仕事を見つけるのがきわめて難しいし、今では高校に行っておいて良かったと考えている。

そうとはいえ、実際の高校時代は、学校にほとんど行か

なかった。しかし、なんとか卒業させてもらったのは、公立高校ではなく、私立高校だったからだと思う。毎年履修単位を落としながら仮進級制度のおかげで卒業することができた。

しかし、高校を卒業した2001年3月は、就職氷河期であり、学校への求人はほとんどなかったように思う。高校を卒業しても正社員になるのは難しいとわかったので、アルバイトを自分で探すことにした。高校時代にも、すでにいくつかのアルバイトをした経験があった。

中学校のときの友達で高校に進学せずに就職した者たちの中には、日雇い仕事で、日当8,000円を稼いでいた者もいた。さまざまな自営業主の手伝いや、親の知り合いの紹介などで建設日雇いの仕事などで働いていた。彼らは、中学生のときから新聞配達をしたり、皿洗いなどの仕事をしてきた。たしかに、家庭の生活がすごく苦しい人もいたが、それとは別にひとまず自分で自由に使えるお金が欲しいという人も多かったと思う。いわば、小遣いは、親にもらうものではなく、自分で稼ぐものという感覚であったと思う。

高校生のときは、祭りのときに屋台を出しているその元締めの子屋のもとで働いていた。市内のヤクザが、その子屋を経営していた。そこに、中学校時代の先輩たちがよく出入りしていて、「カネが欲しかったら来い」と誘われたことがきっかけではじめた。稼ぎは、日当8,000～12,000円くらいあった。夏場はあちこちに祭りがあるので、結構な儲けになった。夏休みのアルバイトとしてはいいが、9月に入って授業が始まって大阪府南部の各地ではだんじり祭りがたくさんあるので、学校に行かずに子屋のもとで仕事をしてきた。屋台の中でも、飲食店を任せられると忙しすぎて大変だが、自分は「スーパーボールすくい」の店などだったので比較的楽な仕事であった。とはいえ、やはり時間的には相当きついものがあった。2日連続の出店が基本で、1日目は朝4時から現地に行って屋台の組立から仕事をはじめ、24時に終わる。2日目は朝8時に現地に行き、片づけをして終了は朝方の4時くらいになる。祭りが続いて近くで行われるときには、そのまま寝ることなく車で現地に駆け込み、屋台の組立から同じように準備作業が始まった。

こうして稼いだお金の使い道は、中学校3年生のときからはじめたスロット・マシーンだった。朝から喫茶店かファーストフード店で友達と待ち合わせ、スロット・マシンをしに行っていた。勝てば奢られた。そして、高校時代もこんな生活が続いていた。合計するとこの遊びでは負け越していた。今から考えると、「アホ」なことをしていたと思う。ただし、親に「小遣いをくれ!」と言った

ことはなかった。

2001年3月末（18歳）全日制の私立高校を卒業した。

<初職からの経験>

18歳（2001年）で高校卒業後、3年間はさまざまなアルバイトをし、10回近く仕事を変えた。1年目は、主に飲食店の接客、コンビニ等のレジ打ちの仕事などをした。仕事は求人誌や友達の紹介などで見つけた。2年目（19歳、2002年）くらいから、「洗い屋」と呼ばれる建物清掃の日雇い仕事と、他のアルバイトを掛け持ちで働くようになった。

「洗い屋」の仕事は、建設工事がすべて終わった後、顧客にその物件を渡す手前の段階で、建物をきれいに清掃して最終仕上げをする仕事である。朝4時に現場に着いて作業を開始し、帰ってくるのは17時か18時であった。また、22時から、オフィスビルやパチンコ店などで、夜中できない床清掃を行うこともあった。これらの仕事があるときに声を掛けてもらって、行けるときに行くという日雇いの形態であった。とはいえ、「洗い屋」の仕事は結構忙しく、月に2回くらいしか休みがなかった。社会保険や雇用保険は一切なかったが、給料自体はよかった。実際には、昼間に「洗い屋」の仕事をして、それが終わって夕方から飲食店のアルバイトに出かけるといった形で、仕事をしていた。アルバイト生活の3年間の月の給料は、少ないときで11万円、2つの仕事をしていたときは40万円近く稼いでいた。

21歳（2004年）のとき、地域にあるコミュニティ施設で働いている知人から、若者を中心に地元住民の事情をよく知っているからという理由で誘われて、その施設が行政と協力して取り組んでいる就職困難者向けの地域就労支援事業^(注)にアルバイトとして参加した。そして、就職相談員となるための試験を受けて合格し、行政の嘱託職員として、地元で就労支援の相談活動を担当することになった。仕事自体はおもしろかった。

行政が作成した就労支援の枠組みは、さまざまな困難を抱えた就職希望者に、1カ月目はコミュニケーション能力の開発・向上、2カ月目に技能の育成、3カ月目に職場体験、そして3カ月の支援メニューが終了するとハローワークへ（ときにはいっしょに）行って求職活動をするようになっていた。しかし、実際には、3カ月のこれらの取り組みだけで就職に結びつくのなら、支援センターに来なくても普通に就職できるのではないかと常々感じていた。そういう意味で、この行政の制度はうとうしいものであった。また、就職相談員が実際に就労支援で成果を上げたなら、それに見合う報酬をもらわないと仕事をした気にならないという思いもあった。しかし、行政という枠組みではそれはできなかった。

25歳（2008年）のとき、マニュアル化された行政の就労支援事業に限界を感じ、前々から就職先の紹介などを通して交流のあった地元のある会社に採用してもらった。こうして、地元の住民のニーズに応えることを目的としてさまざまな事業を展開しているいわゆる社会的企業に4月1日に入社した。その事業は、就職が困難な若者等に対して、単に職場体験をさせるのではなく、協力企業から仕事をもらってきて、「働き」ながら、「働くこと」および「働くために必要なこと」を学んでいくことをめざすものである。

仕事の達成度に応じて「訓練手当」を支給する。要は、働きたいという若者といっしょに、自分で仕事を探してきて、その仕事をする中で、稼ぎを得ることができるという仕組みである。また、支援の期間も、3カ月に縛られず、それぞれの状況に応じて場合によっては1年、2年と関われることも、よいところだと考えている。この事業は1人で担当している。入社と同時にワンルームマンションを借り、1人暮らしもはじめた。

今は、「地元の兄ちゃん」という感じだと思う。若い人と話すのも好きだし、やりがいもあるし、自分はこの仕事に適していると思う。

<現在の生活状況>

現在の生活はやや苦しい。月の給料は税込17万円、手取り15万円で、現在の会社は住宅手当などの手当が一切付いていない。社会保険には勤務先で加入している。ボーナスはあり、年収は240万円である。生活必需品の購入を控えたり、出費を減らしたりしている。

中学校3年生のときから11年間付き合った彼女と、つい最近別れた。相手は「専業主婦がいい。仕事と家事を両立するのがどうしても嫌だ」と言っていたが、自分一人の今の稼ぎでは結婚しても経済的にやっていけないことは目に見えている。とてもつらいが、お金のことはどうしようもない。

2008年（25歳）新しい事業の立ち上げなどの仕事や、プライベートのことで悩むことがあって、うつ気味になり、2カ月休みをもらったことがあった。今は精神的には大丈夫だが、健康状態はあまりよくない。腰痛があり、皮膚病もあって、病院に現在も通っており、薬を飲む回数も多い。「いちびとったから、体にガタが来ているのかも」と思う。

引越した後の中学校時代の友達などとは仲がよい。両親は近所に住んでおり、金銭的な援助は受けていないが、御飯を食べさせてもらうこともある。

<本人の望みや不安>

将来にはとても不安がある。まだ26歳なので、今後はなんとかなるかもしれないとも思うが、経済的な不安を持っている。経済的な面で結婚できなかったこともショックだ。

仕事の関係で、就労支援のサービスを利用している人の中に生活保護をもらっている人もおり、生活保護をもらう方が働くより収入がいいという現状があることがわかった。働いている人の給料が上がるのが一番いいが、もう少しまい制度設計ができないのだろうかと思う。

担当している事業そのものは“独自の財産”であると思うし、自分たちで収益を上げ、存続させないといけない。提供できる仕事があれば、就労支援サービスを利用している人にお金を払えないし、事業が回らない。支援をしている若者の中には、発達障害、ADHD（注意欠陥・多動性障害）あるいは人格障害を抱えている者もいる。この若者たちといっしょになって稼ぐというのは、なかなか難しい。当初この仕組みを利用して働いていたのは4人であったが、今は7人に増えている。地域の駐車場管理や、福祉現場の仕事の開拓や、地域の食堂でおでんなどを売って

る。民間企業などへの就職は難しく、行き場がないので、ここが仕事付きの居場所になっている。比較的遠方から来ている人もいて、もともと引き込みりの若者などを支援するNPOを利用していた者が多い。

また、地元の青年たちによる自主的な組織がかつてに比べて衰退しており、これを何とかしたいという思いも持っている。

(注)大阪府と府内各市町村が2004年から実施している就職困難者向けの就職相談窓口で、各市に最低1カ所、政令指定都市においては各区に1カ所以上設置している。また、そこで就職問題やさまざまな就職に先立つ生活問題について相談を受ける職員として、コーディネーター(就職相談員)が配置されている。

調査番号：大阪50

調査日：11月25日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：30歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：医療サービス業、事務職、パート ■直近の収入：月3万円
- 家計における役割：家計補助者 ■家族構成：同居する親1人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校卒業 書店・店員(アルバイト半年、専門学校在学中より継続) ドラッグストア・店員(アルバイト、1年) 無職(2カ月) 調剤薬局・店員(アルバイト、2年) 学習机販売会社・事務(登録型派遣、3年) 院内薬店・現業(正社員、半年) 調剤薬局・事務(パート、2年)、現在に至る

<仕事に就くまで>

1979年、大阪府生まれ。

家族構成は、母、兄1人、姉1人そして自分の4人で、自分は3人きょうだいの末っ子である。

保育所に通っていたころに両親が離婚し、以来母親ひとりに育てられた。母親は看護師として働いており、経済的には不自由はなく、欲しいものも買ってもらえた。兄とは14歳離れ、姉とも13歳離れていたため、小学校に入学する6歳のころには、兄と姉はすでに高校を出て、自分でアルバイトを借りて住んでいた。また、母親は仕事をしていたので、放課後や夕食時も家で1人になることが多かった。兄や姉はたびたび家に遊びに帰ってきて、会っていた。

普通高校を卒業後、2年制の英語の専門学校に入学した(18歳、1997年)。高校時代もそうだったのかもしれないが、この専門学校時代は、奨学金の給付を受けて通学していた。

英語の専門学校を出ても、英語に関係した仕事に就こうとは思っていなかった。その資格ではなかなか就職先が見つからなかったし、他になにかよい就職先があればと思っていた。しかし、当時は就職難の時代であり、結局、就職先が決まらないまま卒業してしまった(20歳、1999年3月)。卒業時に仕事が決まっていなかったとはいえ、とくに焦りは感じなかった。なんとかやっつけていけるだろうと、楽観的に考えていた。

<初職からの経験>

専門学校を卒業した(20歳、1999年3月)が、就職先が見つからなかったため、専門学校在学中から続けていた書店のアルバイトを卒業後も続けることにした。この仕事は書店の店頭に張り出されていたアルバイト募集の求人チラシを見て、応募し採用されたものであった。主に、販売、

本棚の整理や在庫チェックなどの仕事をしていた。

週5~6日働いていたが半年ほど勤めた後、日曜日が休みでなかったため日曜日に休める仕事を探そうと思い、書店のアルバイトを辞めた(1999年秋頃)。

その後、住まいのあった区内のドラッグストアがアルバイトを募集しているのを求人誌で見つけ、採用された。仕事内容は支払い窓口でのレジ打ちが主なものであった。この仕事は、週5日で土曜日と日曜日は休みにしていたが、朝9時から昼午後1時まで働き、その後夕方4時から夜8時まで働くという変則的な勤務時間だったため、自分の時間を確保するのが難しく、あまり好きになれなかった。このことを理由に、この仕事を1年間余り続けた後、辞めることにした(21歳、2000年12月)。

この仕事を辞めてから2カ月は、あまり積極的に求職活動はしないで過ごした。しかし、翌年2月(22歳、2001年)になって、友人と一緒にハローワークに通い、仕事先を探した。しかし、自分にできそうな仕事はあまりなく、調剤薬局にアルバイトとして就職した。以前と同じように、週5日で午前の部は9時から午後1時まで働いて時給850円、夕方は午後4時から8時までの勤務で時給900円であった。月に16万円の収入であった。この調剤薬局も居住していた区内にあったため、午後1時から4時まで空いた時間は家に帰って過ごした。冬の風邪が増える時期や春の花粉の季節などの忙しい時期に仕事を次々に処理していくのが好きで、やりがいを感じていた。

しかし、2年後(24歳、2003年)このアルバイトを辞めた。その理由は前と同じであった。仕事の合間に自由な時間があるとはいえ、出勤時間を朝夕の2回も気にしながらであることから基本的には朝9時から夜8時まで拘束されている気分が陥り、自分のやりたいことにほとんど時間を割けなかったことであった。

1カ月ほどしてから、求人情報誌で見つけた派遣会社に登録し、仕事を探した。仕事にあたっての希望条件は、自

宅から自転車で通える距離にある事業所や会社であった。その結果、派遣会社から、学習機を受注・販売をしている会社に事務職として派遣された。勤務先はやはり同じ区内であった。勤務は、朝9時から夕方5時半までの7時間30分労働で、月曜日から金曜日の週5日であった。時給は1,000円で月約16～17万円、健康保険や厚生年金もあった。この登録型派遣では、派遣期間に定めがなく、派遣会社からは「働けるのならいつまでも」と言われていた。また、この会社では、一定の事務仕事を任せられ、自分の裁量で仕事を進めることができたので、やりがいも感じていた。

この学習機の会社には4年間ほど派遣されていた。しかし、不景気により会社の経営が悪化したため、2007年（27歳）の前半に派遣社員全員が解雇された。以前から経営悪化と人員削減についての噂が出ていたため、解雇は予想されていたので、派遣社員の間では解雇による動揺はあまりなかった。

なお、この会社で働いている時に友人から誘われてダンスを習い始めた。

また、24歳の時（2003年）に知り合った男性と交際を始め、その後その人が親元から離れて単身で住んでいた賃貸マンションで同居を始め、27歳（2006年）の時に、その人と結婚した。

先の派遣社員を辞めた後、ハローワークで正社員の仕事を探した。自分にはやはり薬局の仕事がぁっていると思い、家から近い同じ区内にある病院の中の薬局に、正社員として就職した（27歳、2007年前半）。しかし、そこでの仕事は、希望していた以前のような事務仕事ではなく、薬局内の様々な薬の補充作業であった。これは、体力のいる仕事であり、かつ基本的に単純作業であったことから、やりがいは感じられなかった。朝9時から夕方6時まで残業1時間を含む8時間労働で週5日の勤務であった。健康保険や年金保険、雇用保険もあった。しかし、月の給料は、前の派遣社員の時よりも下がり、月14万円弱であった。この病院内の薬局での仕事は半年で辞めてしまった。仕事内容が、自分が求めているものとは異なっていたことが最大の理由であった。

その後すぐに、友人が、ある薬局の店頭でパート募集の広告が掲げられていることを教えてくれた。これまでの経歴を買われて、この薬局に就職することができた（28歳、2007年12月）。ここでの仕事は、お客さんが病院等でもらってきた処方箋の情報をパソコンに入力する事務仕事であった。勤務時間は1日8時間、週5日勤務で、月12～13万円ほどの給料であった。

ここでの仕事内容には不満はないが、賃金が低いためもう少し給料の高い正社員か派遣の仕事望んでいる。

とはいえ、現在もこの薬局にパートとして勤務を続けている。とくに、2009年（30歳）8月に体調を崩し、それ以来勤務時間を午前8時半から12時半までの4時間で週2日か3日働くことにしてもらい、無理を聞いてもらっている。しかし、給料は月3万円まで減少してしまった。

なお、これまで経験してきた仕事の中では、調剤薬局と学習機販売会社での事務が自分に合っていると感じている。

<現在の生活状況>

2009年8月から体調を崩し仕事を減らしたために、給料は月3万円程度まで減ってしまった。夫の収入を合わせた過去1年間の世帯所得は250万円程であり、自分の収入が減ってからは貯蓄をすることが難しくなっている。

現在の賃貸マンションは、地元の区にあり、家賃が安いし比較的新しいのでおおむね満足しているが、キッチンが狭いことが不満である。

母親と兄もこの区内に住んでおり、月に1回程度は会っている。姉も隣の区に住んでいる。親やきょうだい近くに住んでおり、友人もほとんど遠くに移っていないこともあって、今後も地元の区から離れるつもりはない。

<本人の望みや不安>

「あまり将来のことは考えていない」が、生活に不安がないわけではない。これからも働き続けたいと思っている。しかし、もし子どもができて仕事を辞めれば、夫の収入だけとなり、年収は200万円以下に減少する。そうなると、ギリギリの生活水準になってしまい、やはり不安である。

子どもを産んでも育てながら働きたいと考えているので、政府には、保育所を増設するなどの子育て支援を充実して欲しいと考えている。

少子化対策を考えるならば、子どもを持ちたくとも持たず、費用が高くて不妊治療を受けられずに困っている人たちの不妊治療に健康保険を適応して欲しい。

また、仕事に関しても、子育てが終わった後、労働市場に戻る段階で良い条件での再就職が難しいことに不安がある。

夢としては、将来なにかのお店を開いてみたいと思っている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：22歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：就労中
- 現職：福祉サービス業、介護職、契約職員 ■直近の収入：月10～15万円 ■家計における役割：家計補助者
- 家族構成：同居する親1人 ■住居：民間賃貸借家住宅
- おおまかな職歴：高校中退 スーパー・鮮魚取扱（アルバイトのちにパート、2年） ホームヘルパー2級取得（2カ月） 求職活動（8カ月） 社会福祉法人・介護（契約職員、3年10カ月） 現在に至る

<仕事に就くまで>

1987年、大阪府生まれ。現在住んでいる家で育った。両親と1歳年下の妹との4人家族であった。

徳島県出身の父親は、建設業とくに建築解体業などの仕事をしてきた。稼いでいたときは月に40万円あったと思うが、働いている土建業者を頻繁に変えて、仕事をしたりしなかったりという状況であった。なぜ仕事を辞めてばかりなのかを聞いたことがあったが、いつも言い訳ばかりしていた（その上、母親名義で、10年ほど前（1999年頃）には1,000万円以上の借金をつくってしまった。両親は2008年に離婚した）。

母親は、現在住んでいる地域の出身で、ずっと女性用履物製造の内職やスーパーのレジ打ちのパート仕事をしてきた。

地元の小学校・中学校を卒業した。中学校では、先生をいじめたり、女の子のスカートめくりをしたり、自転車の空気を抜いたり、ずる休みしたり、やりたい放題だった。どれも警察沙汰にはならない程度のレベルで遊び半分でやっていた。勉強はほとんどダメで0点を取ることも多かった。とくに、作文は全然できなかった。当時の文章は、ほとんどひらがなで「。」や「、」は打たなかった。「200字以上で書きなさい」と課題を出されても3行で終わってしまった。一方で、理科や数学は70～80点だった。

機械をいじるのが好きだったので、高校は工業科に行きたかった。第一志望だった私立の工業高校の入学試験を受けたとき、国語の問題で最後に作文の問題があることを見落としてしまい、そのまま解答が終わったと思って寝てしまい、試験終了時間の5分前に解答を点検して答案用紙の裏面に作文の記述欄があることに気付いた。時間があってもなにも書けないことから「もういいや」と思ってしまいあきらめてしまった。その試験は不合格になった。この工業高校に行っていたら、車の整備士を目指していたかもしれない。

私立の工業高校の試験に落ちて、公立の工業高校を受けた。入りたいと思った公立の工業高校があったが、先生には入りやすい別の工業高校を受けるように勧められ、そこに入学した。

高校は地元に近いところにあったが、中学校のときと同じようにあまり勉強はしなかったし、休んでばかりいた。そのため単位が足りなくて1年目で留年し、勉強がどうでもよくなり中退した。

この高校1年生のときは、家でゲームをしたり、友人の家などに遊びに行ったりしていた。しかし、従兄にあたる年上の「お兄ちゃん」が、介護の仕事をしており、その仕事の話の話を聞いたり、実際にその仕事ぶりを見せてもらった

りして、その仕事がしたいと思うようになった。「おじいちゃんやおばあちゃんのこと好きやし」。その仕事にそこがれを持ち、自分でもやってみたいと思った。もし、この「お兄ちゃん」に出会っていなかったら、今頃は建設業の職職か、父親と同様の解体業の仕事をやっていたと思う。

<初職からの経験>

16歳（2002年）高校を中退した後、母親の紹介で、スーパーマーケットに入っている魚屋（水産部）でアルバイトとして働きはじめた。途中で雇用形態がパートタイマーに替わった。

介護の仕事をするには資格がいるが、その資格を取るための講座を受けたり専門学校に入るための資金が必要だと思って、働いてお金を稼ごうと思った。

勤務先は年中無休のスーパーで、休みは指定休日を取る仕組みだった。朝8時から夕方17時までが定時だが、残業をして18時から19時まで働いた。収入は、残業代を含め、月に16～18万円を稼いだ。魚をさばいてお造りにしたり、パックに詰めて店頭並べたり、お客さんからの注文があったらその魚をさばいたりといった仕事であった。それまで魚をさばいたことはなかったが、先輩から教えてもらい、さばけるようになった。休憩時間1時間の間に、先輩が「あんこうを3匹さばいてみる」、「ぶりを3分以内に3枚おろしにしてみる」などと指示しながらいろいろ教えてくれて、鍛えられた。仕事は「めっちゃ面白かった」。スーパーマーケットの水産部の職場の人間関係はとてもよく、たまに先輩たちと一緒に居酒屋に行って、自分はジュースだが、先輩たちと朝までいろんな話をして、そのまま仕事に行ったこともあった。正直、「死にものぐるいで働いていた」と思う。

このスーパーで丸2年働き、18歳（2005年）の3月末に、「介護の仕事をしたいので辞めさせてもらいます」ときちんと理由を告げて辞めた。その間に300万円くらい貯めた。そのお金で専門学校に週1回のヘルパー2級の講座を受けに行き、2カ月と5日でその資格を取った（2005年6月、19歳）。

自宅から自転車やバイクで通える範囲で、介護職の求人を出している福祉施設を探すことにした。方向音痴なので、遠くの施設に通うのが不安であった。ハローワークに通ったり、求人誌を見たり、パソコンや携帯電話のサイトで調べたり、友人に尋ねてみたりした。しかし、うまく見つかることができずに困っていた。この求職期間中は、アルバイトなどは一切せず「ニートみたいな生活」をしていた（8カ月間）。最終的に、母親から「仕事を探しているのなら、地域にある社会福祉施設に行ってみたら」と言われ

た。この施設には、市が市内各地で実施している地域就労支援事業の相談窓口があり、そこに相談に行くことにした。母親も以前にこの相談窓口で仕事を見つけたことがあったそうだ。そこに相談に行ってみると、求人があるのがわかり、その求人を出していた福祉法人で面接を受け、契約職員として採用された。地元にあったこの社会福祉施設は、これまでも地域の行事があったときに何度か利用したことがあった。

19歳（2006年）の2月、地域就労支援事業の相談窓口で紹介された福祉法人に契約職員として採用された（現在も勤務中）。デイサービスの部門で、65歳以下の知的・身体障害の人たちの入浴・食事・トイレ介助・送迎などの仕事をしている。朝9時から夕方17時15分までの7時間労働で、週6日勤務である。しかし、給料は、月12～13万円と低く、休憩時間が十分にとれず、力仕事が多いにもかかわらず男性のスタッフが少ない。とくに給料が少ないことが本当に苦しい。今まで3年働いてきたが、時給は20円しか上がっていない。年収は150万円程度である。ボーナスは夏・冬の2回あるが、数万円程度である。

職場では、スタッフは女性より男性の方が少ない。休憩していても、男性利用者からトイレ介助を求められると、同性介助なので、男性スタッフが行かなければいけない。風呂サービスの提供は12時に終わり昼ごはんが12時からとになっているが、実際にはお風呂サービスは12時半にしか終わることができない。したがって、昼時は大忙しである。しかも、職場には派遣社員の人たちもいるが、彼らは必ず昼に1時間休憩を取らないといけなくなっているのので、あとの正職員・契約職員・非常勤職員が手分けして昼時の忙しい仕事をするようになる。

前に在籍していた先輩は、勤め始めた最初の頃は普通に扱ってくれたが、その後3年近く嫌がらせを受け続けた。同じ職場の他の職員が辞めていき、新しく入ってきた職員と話をするとその先輩に嫌な顔をされ、質問をしても答えてくれないなどの嫌がらせを受けた。最後にはこちらから「お前がおったら邪魔や」と言い、その先輩を辞めさせた。

<現在の生活状況>

生まれてからずっと民間の1軒家の小さな借家に住んでいるが、2008年に両親が離婚してからは、母親と2人暮らしである。母親は、女性用履物であるパンプスのヒールの革を巻いたり貼ったりする内職をしてきたし、今もしている。母親は、多いときは月に4件ほど製靴事業者から仕事をもらっていたこともあったが、仕事量には変動がある。したがって工賃は月によってバラバラであるが、通常は年収にすれば自分とあまり変わらず150万円程度であった。しかし、2008年秋以降、内職の仕事が激減したため、収入が大きく減っている。

家族の暮らし向きは「大変苦しい」。自分の収入は全て家計に入れており、母親が管理している。2人の生活費は自分の稼ぎでまかない、母親の収入は父親が母親名義で借りた借金の返済にあてている。これまで10年かけて1,000万円以上返済をしてきたが、未だに返済を続けている。毎月決まった小遣いは一切なく、母親からは「いるときだけ言ってくれ」と言われている。タバコを吸いたいときは、そのたびに「320円ちょうだい」、ジュースを飲みたいときには「120円ちょうだい」という生活だ。15歳から働いてい

るので、遊ぶこともあまりしない。彼女が家に遊びに来ても、お金もなく、どこにも行かないことが多い。それから、同居はしていないが、母親には新しい恋人がいる。その人を含め自分の恋人と4人で、相互に貸し借りするなどして、経済的には何とかやりくりしている。しかし、電気・ガス・水道・電話などを止められたり、家賃の支払いが遅れたり、友人とのつきあいを控えたりしており、娯楽を楽しむことはほとんどない。

妹も、高校に入学してわずか1週間で退学した。妹はその後、キャバクラやバーで働いた後、グループホームで認知症の高齢者の介護をしたりして、さまざまな仕事を経験してきた。現在は、実家で母親と同じ内職をしている。20歳になった1年前（2008年）に実家を出て、現在は彼氏と同棲中であり、もうすぐ結婚する予定である。

相談できる相手には、母親、母親の恋人、自分の恋人、地元の友人・知人、職場の上司や同僚、妹などがいる。先輩や友人たちとは、お酒を飲みに行くことも多い。これらの人たちが、自分の支えになってくれている。

<本人の望みや不安>

将来、この給料でやっていけるのかどうか不安だらけであり、自信がない。

スーパーの魚屋に勤めていたときから給料が下がったこともあり、母親からも「いつになったら仕事を変えるの？特別養護老人ホームで働けば20万円はくれるのに」と言われている。すでに現場経験が3年になるので、介護福祉士の試験を受けて資格を取得する予定でいる。前回の試験実施時期には、現場経験が19日間足らなくて試験を受けられなかった。働いている福祉法人で試験を受けることになっている。

今の職場は、給料が少なく、休憩時間がとれず、スタッフの人員体制も少ない。したがって、労働条件を良くして欲しい。給料やボーナスを上げて欲しいし、スタッフを多くしてもらいたい。今はとれないでいる休憩時間も普通に1時間は欲しい。しかし、これらは無理なようなので、有料の福祉サービスを提供している施設や特別養護老人ホームなどの労働諸条件の良いところへの転職を希望している。

契約職員から正職員に変わるためには試験があり、それはもうすぐ行われる。しかし、受けようと思わない。それよりは、介護福祉士の資格を取って、給料がいい福祉施設や民間企業で正社員として働きたい。一方で、職場の上司や利用者からは、よそに替わらないで欲しいと言われている。この職場には男性スタッフで3年勤めている人は他にいないので、さまざまな責任のある仕事も任されている。

これまで、ずっと仕事をしていたので、女性との付き合いはほとんどなかったし、結婚にも興味はなかった。しかし、20歳も過ぎてそうしたことを考えないといけなそうと思い、接骨院で働いている女性とつきあうようになった。この女性とは、2010年の前半に籍を入れることにしている。母親と彼女の父母はすでに挨拶を交わしており、母親からは「あとはお前しだいやで」と言われている。2010年1月から2月には先方の父親に挨拶に行く予定である。いずれはきちんと結婚式もしたいが、お金がない。子どもは欲しいが、経済的にやっていけるのかどうか不安がある。結婚すると、共働きとなり、少しは小遣いをもらえと思うが、実際どうなるかはわからない。車の免許を来年2月に取り

に行く予定だが、仮に車を持ってガソリン代が心配である。

社会のことにいづつか感じていることがある。暴走族に対して、増える殺人事件に対して、警察の対応が甘いと思う。子どもを産み捨てること、高齢者の介護にお金

がかかること、訪問販売で高齢者に法外に高くモノを売りつけることなどが、なくなって欲しい。障害者の介護に関わって思うのは、障害者が出かけられるところを増やしてほしいと思うし、障害者も利用できるプールなどをつくってほしい。

調査番号：大阪52

調査日：11月24日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：26歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：愛媛県 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：福祉サービス業、福祉職、契約職員 ■直近の収入：月10～15万円
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：専門学校卒業 社会福祉法人・福祉（契約職員、3年8カ月）現在に至る

<仕事に就くまで>

1984年、愛媛県生まれ。

家族は、両親と、弟、妹との5人家族であった。父親はタンカーの船員、母親はパートタイムの仕事をしていた。経済的に不自由な思いをしたことはなかった。

高校時代に、地元の社会福祉協議会でケースワーカーとして働いていた叔母から、その仕事についていろいろと教えてもらい、興味を持ち、自分も社会福祉の仕事をしたかった。そこで、高校卒業後は福祉の専門学校への入学を希望し、また地元よりは都会で学びたいと思った。

地元の高校を卒業した2002年4月（18歳）に、大阪府にある4年制の福祉専門学校に入学した。その学校は新設の学校だったため、1期生にあたり、1学年80人くらいだった。学生生活は楽しかったが、新設校であったため、カリキュラムの提供が十分にそろっておらず不十分だったことが不満であった。この専門学校で取得した資格は、ホームヘルパー2級である。また、社会福祉士と精神保健福祉士の受験資格も取得した。後者の2つについては、卒業後、資格試験を受けたがまだ合格には至っていない。学生時代の生活費は実家よりの仕送りに頼っていて、経済的に困窮した経験はなかった。しかし、学費や生活費の足しにするために、ときどき派遣会社に登録をして日雇い型派遣の仕事をしていた。

4年生になって（21歳、2005年の4月頃）から、就職活動を始めた。専門学校には就職課があり、就職指導を受けた。しかし、それは、就職活動に際してのマナー（履歴書の書き方や面接の受け答えなど）を教える程度で、福祉法人や福祉系企業などの採用動向や広く就職情報などの提供はほとんどなかった。新設の専門学校であったこともあり、学校に直接に求人票が届くことはほとんどなく、いくつかある系列校から求人票を回してもらっていた。学校に届いていた求人票の中から今勤めている福祉法人の求人票を見つけ、応募しようと考え、また先生もそれを勧めてくれた。他の学生たちも、就職先を探すのに自分でいろいろと情報を集めて活動をしていたが、就職に苦労していた。卒業時点（2006年3月）でも、確か半数以上の者は、就職が決まっていなかったと思う。

<初職からの経験>

2006年4月（22歳）に大阪府にある社会福祉法人に契約職員として就職した。現在は、ここに在籍して3年8カ月になる。当初の1年間は、福祉法人が市から指定管理を受けている障害者向け福祉施設内で障害を持つ児童のデイサービスを担当していた。2年目からは同じ福祉法人が運営する精神障害者の支援センターの相談業務に異動した。ただし、相談実施場所である事務所は、3カ所替わっている。

所定内労働時間は1日当たり7時間で、拘束時間は朝8時45分から夕方5時までの8時間15分である。しかし、実際の仕事は夕方5時までに終わることはほとんどなく、とくに事務仕事は5時以降にサービス残業としてやっていることが多い。月の勤務日数は、だいたい22～23日である。契約職員の休日は、職務規定で4週7休となっており、指定休日を取るようになってきている。正職員には指定休日とは別に祝日の休暇はあるが、契約職員にはそれがない。休みたいときは有休を使うしかない。

「いつから」という境目ははっきりわからないが、ここ1年で見ると仕事の量が増えたように思う。利用者数の多さに対して人員が足りないと感じている。したがってサービス残業がさらに増えることになった。職場の人員数を増やしてほしいと思う。

給与は時給制で、1時間870円程度である。入った当初より増えているとはいえ、微増したにすぎない。月の収入は14万円程度で、税金や保険料などを引くと手取りで12万円ほどにしかならない。仕事の量と給与額が見合っていないのは、とうてい思えない。高校時代の友人などには、「そんなに低い給与のところでもよく続けていけるね」と言われる。健康保険、厚生年金、雇用保険そして有給休暇などの福利厚生制度はきちんとある。

職場での上司や仲間との関係はとてもよく、同期採用された仲間ともよく話をする。

<現在の生活状況>

2002年に専門学校への入学にともなって大阪府に出てきてからは、ずっとワンルームマンションで一人住まいを続

けている。仕事に就いてからは、生活費は全て自分の収入でまかなっている。

この福祉法人に入ったときの健康診断によって、1型糖尿病を患っていることがわかり、以来ずっと治療が続いている。これには、定期的にインシュリン注射が必要であり、医療費が結構かかる。普通に家賃と食費などに支出するだけでも、12万円というのはきついが、これらと別に治療費が必要なわけで、この給与で一人の生活を維持するのはギリギリのラインだと思う。

家族とは、電話では月1回程度しか連絡を取りあっていないが、メールでは頻りに連絡を取っている。帰省は、なかなか休めないこともあって、お盆か正月のいずれかで年に1回程度である。

職場の人間関係はとてもよいが、休日がシフト制を取っていることから、職場の友人、とくに同期で入った友人と休みを合わせて一緒にどこかへ出かけるといことは、物

理的にできない。学生時代の友人たちとは、たまに一緒に食事に行ったりしている。しかし、結婚してしまった友人などには、相手の家庭の事情などを考えると、連絡が取りづらくなり、次第に疎遠になっている。異性の友人はいるが、恋人はいない。

<本人の望みや不安>

生活についていうと、不安がある。今の給与では本当にギリギリのラインだと思う。病気のこともあり、一日一日を乗り切るだけで精一杯という感じである。このため、社会のことや周りのことを見たり、考えたりする余裕がもてない。政治や社会の変革といったことには、正直に言って不信感を持っており、なにも期待していない。

今の福祉の仕事にはやりがいを感じており、今後も続けていきたいと考えているし、正職員になることを望んでいる。

調査番号：大阪53

調査日：11月24日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：33歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：徳島県 ■学歴：大学中退 ■就労の有無：就労中
- 現職：福祉サービス業、介護職、契約社員 ■直近の収入：月10～15万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：社宅
- おおまかな職歴：大学中退 宅配ピザ店・調理と宅配（アルバイト2年、在学期間を合わせて4年） 自動車部品製造会社・機械操作（登録型派遣、1年） 自動車部品製造会社・機械操作（登録型派遣、1年） 電気機器メーカー・生産（登録型派遣、1年） 物流倉庫会社・運搬（登録型派遣、半年） 自動車部品製造会社・生産（登録型派遣、3年） オーストラリア語学留学（1年） 物流倉庫会社・運転（登録型派遣、2年） 社会福祉法人（特別養護老人ホーム）・介護職（契約社員、8カ月） 現在に至る

<仕事に就くまで>

1976年、徳島県生まれ。

両親と自分の3人家族であった。父親は地元の中小企業の正社員として働き、母親はパートの仕事をしていた。家庭の暮らし向きは、けっこうゆとりがあったと思う。

徳島県の地元で小学校から高校までを過ごし、1994年4月に同じ県内の大学に入学し、自宅から通学していた。

大学時代は、2回生から1年間休学し、もう一度2回生をやり直した3年目のとき（1997年、21歳）に中退した。その理由については、触れたくない。また、それをきっかけとして両親との関係も悪化した。

<初職からの経験>

大学1年生の終わり頃（1995年、19歳）からピザ屋で調理と宅配のアルバイトをしていたが、中退した後（1997年、21歳）もこれを2年間続けた。通して4年間、このアルバイトを続けた。

1999年（23歳）に、家を出てもう少し稼げる仕事はないかと思い、地元の派遣会社に登録したところ、自動車部品として使うベアリング製造工場に派遣された。工場では金

属加工の機械操作の仕事、具体的には自動機械のボタン操作の仕事を担当した。時給は1,100円であった。また、住む場所も、親の家を出て、派遣会社が所有するアパートに住むようになった。ここでは1年働いた。派遣契約期間の満了にともなって、2000年（24歳）から次に別のベアリング製造工場に派遣され、ここでも約1年間同じようなベアリング製造の加工の仕事をした。時給も同じ1,100円であった。

この派遣契約が終わった後2001年（25歳）大手派遣会社の系列の派遣会社に登録して、滋賀県にあった大手電気機器メーカーの工場に派遣され、1年間ここで働いた。これを機に地元徳島県を離れることになった。週6日出勤で、1週間おきに昼勤と夜勤を繰り返す交替勤務であった。ここでの時給は、昼勤で1,100円、夜勤はその2割増しで1,210円であった。この頃は、月にして26～27万円を稼いでいたと思う。住宅は、派遣会社の契約したアパートで、家賃は月4万円であった。

1年後の2002年（26歳）滋賀県での工場の派遣期間が終わると、同じ系列の別の派遣会社から今度は大阪府にある物流倉庫に派遣された。倉庫内での手荷役の仕事で、製品仕分け、荷積みと荷降ろし、コンテナへの積み降ろしといった本当に体力勝負の仕事であった。これは、半年の派遣労働であった。

翌2003年（27歳）になると、京都府にある自動車のガラス製品製造工場に派遣された。ここでは、フロントや窓のガラス製品の製造・加工の仕事に携わった。勤務は3交替制であった。時給1,450円と他に比べて高かったことから、3年間（2006年、30歳まで）働いた。この期間に、会社の承認のもとにフォークリフトの免許も取得した。

2001年（25歳）から2003年（27歳）までに派遣先会社を紹介してくれた派遣会社はその都度変わったが、いずれも大手派遣会社の系列の派遣会社であった。系列の派遣会社の紹介であると、派遣先会社についての情報があらかじめわかったりと、何かと便利であった。

2003年から派遣された自動車ガラス製品製造工場での収入が悪くなかったため、以前から憧れていた語学留学のために資金を貯金した。実は、これまで、派遣期間が満了した後などに、たびたび海外旅行に行っていたが、1年間の海外生活を夢みて、それを実現しようと思っていた。そこで、2006年（30歳）に派遣労働を辞めて、語学留学の制度を使って、オーストラリアで1年間暮らした。

帰国した2007年（31歳）にふたたび大阪府に戻り、派遣会社を通じて前とは異なる物流倉庫での派遣労働に就いた。そこでは、取得した免許を活かしてフォークリフト作業の仕事に従事した。

これまでの業種・職種はもっぱらモノ相手の仕事であったが、それが物足りなく思えてきて、やりがいも感じなくなった。そのため心機一転して、人とコミュニケーションをとる対人サービスの仕事がしたくなり、ホームヘルパー2級の資格を取得した。

こうして、2009年4月（33歳）に大阪府の社会福祉法人に契約職員として就職し、そこが経営する特別養護老人ホームで働くことになった。現在はそこで高齢者介護の仕事をしている。

ここでは、朝8時45分から午後5時までの所定内労働時間7時間であるが、残業1時間を含めて9時間の拘束時間である。時給は、入社時（4月）に7月には時給単価が少し上がると聞いていたが、実際には何も変わらなかった。

税込みで月14万円、手取り12万円程度をもらっている。健康保険、厚生年金、雇用保険もきちんと加入している。

<現在の生活状況>

現在の暮らしは苦しい。以前の登録型派遣社員ときよりも、月の収入は大幅に減少した。生活必需品の購入を控えたり、遊ぶのも控えている。海外旅行が好きで、2006年のオーストラリア語学留学以前にも、短期の海外旅行に何度も行った経験がある。アジア、アメリカ、南米を中心に、ヨーロッパにも行った。しかし、いまの仕事の稼ぎでは海外旅行の資金は到底稼げないし、時間も取れそうにない。

住まいはいまのところ、福祉法人が持つワンルームの自宅で、一人暮らしである。

年齢も30歳を超えているので、結婚を考えたことがあるが、交際の相手ができてもこの収入では結婚生活をやっていくことはできないと思う。

大学中退後、家族関係に亀裂が入り、それが解消されないまま現在に至っている。したがって、現在も両親との交流は一切ない。もっぱら大阪の以前の職場で知り合った友人たちと付き合っている。

いまの仕事については、最初はうまくやれるか不安があったが、次第に「これは向いているかもしれない」と思うようになってきた。これからも、この仕事を続けていきたいと考えている。

<本人の望みや不安>

これまで長い間登録型派遣労働の仕事を経験してきたこともあり、派遣労働の労働条件の引き上げをしてほしいと考えているし、派遣労働の規制をするのがよいとも思う。

いまの介護の仕事を開始して8カ月なので、ひとまずこの仕事を大事にしていきたいと考えている。また、以前の派遣労働のように、働く勤務先を何度も変える生活には戻りたくないと考えている。

調査番号：大阪54

調査日：11月24日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：21歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：就労中
- 現職：飲食店、飲食店関係職、アルバイト ■直近の収入：月6～7万円 ■家計における役割：家計補助者
- 家族構成：配偶者、子ども1人 ■住居：公営住宅
- おおまかな職歴：高校中退 ファーストフード店・店員（アルバイト2年、高校在学中から継続） 接骨院・受付（アルバイト、1カ月） 妊娠・出産 ファーストフード店・店員（アルバイト、6カ月） 現在に至る

<仕事に就くまで>

1988年、大阪府生まれ。

家族は、両親、2歳年上の兄との4人家族であった。父親は団体職員、母親は学校給食の調理員（公務員）であった。生活状況は普通だったと思う。

中学校3年生のときに両親は離婚した。これは、自分に

としては「離婚をしたいのなら、したらいい」という程度のもので、さほどショックではなかった。「親には親の人生もあるし」という感じで見ていた。ちょうど高校受験と重なった時期なので、「どちらについていこう？」などと考えず、とりあえず家にいようと思っていた。結果的に、母親が出て行ったので、父親と一緒に暮らすことになった。

中学校は、歩いて10分くらいのところにあったが、欠席

することが比較的多かった。友達はいた。

中学校を卒業して、2003年4月（15歳）に全日制の公立高校の普通科に入学した。1年生のときは、クラスの雰囲気もよかったし、陸上部に所属して活動もしていた。また、自宅から近いファーストフード店でアルバイトをしていた兄に誘われて、同じ店でアルバイトをするようになった。アルバイトは、小遣い稼ぎという軽い気持ちで始めた。アルバイトは、学校に行く平日は放課後午後5時から10時まで5時間、土日は朝5時あるいは6時から午後1時あるいは2時まで8時間働いていた。時給800円で月に100時間以上働いていた。それによって、月に8～9万円を稼いでいた。自分の周りには、それくらい稼いでいる人は、けっこういたように思う。このアルバイトに次第に毎日行くようになり、それが忙しくなってクラブ活動を辞めた。

2年生になってからは、兄も含めアルバイト先の人たち

そこには、フリーターのような社会人、大学生そして高校生などいろいろな人がいたと一緒によく遊ぶようになった。平日でも、アルバイトが終わってからの夜に、みんなで一緒に食事に行ったり、カラオケに行ったりしていた。お酒などには全く興味はなかった。そして、この頃から、学校には行ったり行かなかったりということが増えた。

さらに、ファーストフード店でアルバイトをしながら、友達に誘われて、中華料理店でもアルバイトを始め、掛け持ちで働くことになった。こうして、アルバイトに明け暮れることになり、学校に行かない日が次第に増えていった。

2年生を終えるとき、進級に必要な出席日数はギリギリ足りていたが、試験の成績がよくなかったため、進級できず留年することになった。両親には、「勉強しろ」とよく言われていたが、あまり聞く耳をもたなかった。アルバイトを紹介してくれた兄は、高校を卒業したが、自分には勉強のことをとやかく言わなかった。なお、兄は、高校1年生から始めたこのファーストフード店でのアルバイトを高校卒業（2004年3月）後も続け、2007年頃に正社員に採用された。

留年後、もう一度2年生を歩き直すことにした。しかし、「卒業後にこうしたい」とか「こんなことをしたい」とかいう思いがなにもなかった。ただ、アルバイト先での人間関係が楽しいという思いだけであった。その結果、自然と学校に行かなくなり、すぐに中退した（17歳、2005年6月）。勉強がおもしろくなかったこともあるが、学校という環境自体が楽しくなかった。むしろアルバイトをしている方がずっと楽しかった。その仕事もそうだが、アルバイト先の同僚たちと一緒にいるときの方がずっと楽しかった。

高校には、友達がいなかったわけではないし、いじめとかがあったわけでもない。ただ、学校まで、自転車でも40分もかかり遠かったので、通うのが億劫であった。また、友達といっても数人であったし、浅い付き合いでしかなかった。学校では友達と遊ぶより、自分一人で時間を過ごす方が好きであった。だから、あまりみんなと一緒に出かけるといふこともしなかったし、自分の方から積極的に友達を誘うということはほとんどしなかった。

< 初職からの経験 >

最初の仕事は、高校1年生（2003年、15歳）のときからしていた地元にあるファーストフード店でのアルバイトであった。

中退してから2008年3月（20歳）まで、このアルバイトを続け、中退してからは働く時間を増やした。たぶん月に9～10万円くらい稼いでいたと思う。

なお、高校を中退してからは、離婚後、隣の区で暮らしていた母親と一緒に暮らすようになった。

また、同じ地域に住んでいて、小学校のときからよく知っていた同級生の男性と、たまたまある集まりで一緒になって付き合いが始まった。彼は、母子家庭出身であり、違う高校に通っていた。その後、彼は高校を卒業してすぐに、自動車関係の機械部品を製造する会社に正社員の工員として採用され、働くことになった。

こうした中で、この人と結婚の約束をし、結婚後の自分たちのアパートを借りる資金を、生活費を節約してつくるということになり、母親がこの人も一緒に住むことを認めてくれたので、母親のアパートで3人で暮らすことになった（2008年2月、20歳）。こうした新しい生活が始まる中で、これまで夜間も含めていたような時間帯で仕事をしてきたファーストフード店の仕事では家庭生活に支障が出ると思い、このアルバイトを辞めることにした。その代わりに、近くで昼間働ける別のアルバイト先を探した。接骨院の受付の仕事を見つけることができた。しかし、勤めて1カ月後に妊娠していることがわかったので、その仕事を辞めることにした（2008年3月）。その後まもなくして、その男性と入籍した。

なお、この期間に二人でためた貯金は40万円ほどであったが、それは出産費用にあてた。

2008年10月（20歳）に女の赤ちゃんを出産した。その後もしばらくは、母親のアパートで一緒に住んだが、運よく生まれ育った区で応募していた市営住宅の抽選に当選したので、2008年12月にいま暮らしている市営住宅に移ることになった。家賃は3万5,000円である。

赤ちゃんが6カ月になった2009年6月から、以前働いていたファーストフード店で、アルバイトとして再び働くことにした。時給は850円で、勤務時間はもっぱら昼間の4～5時間で、週4日働きに出ている。収入は、月約6～7万円である。働きに出ている間の子どもの面倒は、当初は夫の母親が見てくれていた。また、10月に夫が希望退職してからは、夫が面倒を見ている。

この仕事に就いた理由は、自宅から近く通勤に便利だからであり、赤ちゃんがいるので、勤務時間や出勤日に比較的融通をきかせられるからである。いまの勤務先には、十分満足している。

< 現在の生活状況 >

現在、夫、1歳の女の赤ちゃんとの3人家族である。子どもはまだ保育所に入れていない。来年2010年4月からの入所を希望している。

現在の生活状況は普通であると思う。

しかし、自動車部品の製造会社に交替勤務で働いていた夫（21歳）は、この10月20日に希望退職により退社した。景気が悪くなるにともなって会社の経営も苦しくなったので、会社が正社員にも希望退職を募り、夫はいまの会社の将来に不安を抱くようになって、この募集に応じた。11月はまだ給料が出る。また、退職金として180万円が支給された。

二人の収入は、2009年5月までは、毎月夫の収入20万円

弱と児童手当1万円だけ(合計21万円)であった。アルバイトを開始した6~11月はこれにアルバイト収入月6~7万円を加えて、月27万円となった。しかし、ひとまず退職金180万円があるとはいえ、今後は夫の就職が決まるまでは、毎月6~7万円の収入しかない。2009年の世帯年収は320万円程度であるが、今後の見通しは、わからない。

いままでは家計の収支はトントンで、なんとかやってきた。市営住宅(3部屋)に入っているので家賃が少なくすんでいる。

また、両親は離婚しており、近くに住む父親は仕事が忙しくめったに会うことがないが、隣の区に住んでいる母親の家には毎週土日に泊まりに行っている。そして、ご飯をごちそうになったり、一緒に買い物をして母親が支払ってくれたりしてくれる。夫の実家は、近所なので月に1回ほど、家に行き一緒に食事をしたりしている。このように、それぞれの親に支えられている部分が多い。

両親、夫、兄、友達などとは仲がよい。しかし、親友と呼べる人は決して多くない。

社会保険には、これまで夫の扶養家族として加入してき

た。アルバイトなので雇用保険はない。

<本人の望みや不安>

夫が、この10月20日に会社を退職したので、今後の就職がどうなるのか、いささか不安である。自分としては辞めてほしくなかったが、夫は、三交替勤務で夜勤が頻繁にあって仕事が大変なことに嫌気がさしていた。また、会社の将来性がないと考えていたようだ。さらに、夫は、将来、居酒屋など自分の店をもって仕事をしたいと考えており、いまその見習いをするために居酒屋のアルバイト先を探している。しかし、年末に入るこの時期、飲食店はどこも忙しい時期で、新規採用者はかえって足手まといなので、採用はあと数カ月は無理だと思う。

とくに、生活でこれといった望みはないが、子どもがいるので、いまのような平穏な生活がそのまま続けばよいと思っている。

政府に対して、生活に関わる政策などで、とくに要望をもっていない。

調査番号：大阪55

調査日：11月25日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：34歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：専門学校卒業
- 就労の有無：就労中 ■現職：飲食店、飲食店関係職、アルバイト ■直近の収入：月5~10万円
- 家計における役割：家計補助者 ■家族構成：同居する親2人 ■住居：公営住宅
- おおまかな職歴：保育士専門学校卒業 知的障害児施設・福祉(契約職員、5年) 求職活動(8カ月) 特別養護老人ホーム・介護職(アルバイト、5カ月) 介護専門学校(1年、介護福祉士資格取得) 高齢者デイサービスセンター・介護(契約職員、7年) 求職期間(5カ月) たこ焼き屋・店員(アルバイト、2カ月) 現在に至る

<仕事に就くまで>

1975年、大阪府生まれ。

両親と自分の3人家族。

父親は、革靴の表部分を製造する職人(甲靴師)であった。地元にある中小の靴メーカーから仕事を請け負う自営業(個人請負)として行っていた。母親はその手伝いをする家族従業者であった。両親は今もその仕事を続けている。

中学校3年生の頃の生活は、普通であり、家計その他の点で際立った困難はなかった。

生まれ育った家は市営住宅であったが、今もそこに両親と一緒に住んでいる。

地元の中学校、高校を卒業後、2年制の保育士専門学校に入学し、1995年3月(20歳)に卒業した。

<初職からの経験>

専門学校卒業後(1995年4月、20歳)大阪府にある知的障害児のデイケア施設に契約職員として就職し、5年間そこで仕事をした。しかし、なかなか正職員になることができず、2000年3月(25歳)に契約職員のままで退職した。

やはり福祉関係の専門的な資格がないと、いくら経験を積んでも評価してもらえないということがわかった。

退職後7カ月間は、同じような福祉関係の仕事や、保育士資格を活かした仕事で、条件の良い施設に就職しようと求職活動をしたが、どれもうまくいかなかった。

そこで、2000年11月から、ひとまず地元にある社会福祉法人の特別養護老人ホームでアルバイトとして5カ月間雇ってもらうことにし、同時に介護士資格を取得するための専門学校への入学をめざして、準備をすることにした。

2001年3月(26歳)にこのアルバイトを辞め、4月から1年間介護専門学校に通い、介護福祉士の資格を取得した。そして、ハローワークで仕事を探し、契約職員採用ではあったが、高齢者介護の仕事を見つけることができた。

2002年4月(27歳)この専門学校を卒業してすぐに、大阪府内にある高齢者向けデイサービスセンターに契約職員として就職し、7年間勤めた。しかし、ここでも契約職員のみで、正職員にあがることができなかつたため、2009年3月(34歳)に退職した。

退職後、やはり福祉関係の仕事をしたという思いは変わらず、求職活動を行ってきた。しかし、就職活動を開始した時期がちょうど新規採用が終わった4月であったことか

ら、なかなか新たな就職先を見つけることができずにいた。

こうして、しばらく無職の状態が続く(5カ月)中で、ひとまず何でもよいからアルバイトをしようと思い、友人から紹介してもらったたこ焼き屋で2009年9月からアルバイトとして働くことにした。このお店は、家から10分ほど歩いて行ったところにある。時給750円、1日6時間、週4回で、月8万円程度を稼いでいる。この仕事は、同僚の人たちに恵まれ、楽しくやっている。

<現在の生活状況>

現在の世帯の生活状況は普通であると思うが、親の収入がどの程度なのかはよく知らない。しかし、2008年秋以降は、靴の受注が減っているようで、結構大変になってきているようである。また、生まれてからこれまでずっと市営住宅に住み続けているが、ここに暮らし続けているということは、両親の収入は決して多いとはいえないだろう。

20歳のときに保育士の資格、その後26歳のときに介護福祉士の資格を取り、これまで3カ所の福祉関係の施設で働いたが、契約職員、アルバイトとしての雇用であり、なかなか正職員になるのが難しいことがわかった。今は、福祉関係の仕事を探して求職活動をしているが、なかなかうまくいかにいない。

遊ぶためのお金の出費を減らしたり、預貯金を取り崩さざるをえなくなっていることが、心配である。しかし、親

からは少しは援助を受けることができるので、ありがたい。

そうした中で、地元の友人が声を掛けてくれて、たこ焼き屋でアルバイトとして働けるようになった。収入は決して多くないが、やってみると結構楽しいし、いろいろコツがいることもわかった。また、2000年のときの特別養護老人ホームでのアルバイトも友人の紹介によるものであった。紹介してくれた友人には感謝している。こうした友人関係に支えられていると思う。

中学生や高校生のときからの友人関係が地元であり、そうした人たちとのつながりはしっかり持っている。しかし、結婚となるとなかなかそれにふさわしい人と巡り合う機会がない。

年金や健康保険は、自分で国民年金、国民健康保険に加入している。雇用保険は、今まで加入したことはなかったし、今もアルバイトなので加入していない。

<将来の展望>

これまでは、ごく普通に平凡な人生を送ってきたと思う。しかし、仕事ではそこそこがんばってきたつもりであるが、なかなか安定した正規の仕事に就けずにいる。これが、悩みの種だ。

仕事は、福祉関係の仕事を希望しているが、いきなり正職員は無理なようなので、正職員になれる可能性のある契約職員の口を探そうと思う。

調査番号：大阪56

調査日：11月28日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：35歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：島根県 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：教育業、学習塾講師、アルバイト ■直近の収入：月8~10万円 ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：大学卒業 回転寿司店・店員(アルバイト、1年) 芸人養成学校(1年)+コンビニエンスストア・店員(アルバイト、1年)+家庭教師(アルバイト、1年) かけもち コンビニエンスストア・店員(アルバイト、6年)+家庭教師(アルバイト、6年) かけもち 家庭教師(登録型派遣、2年) 学習塾・講師(アルバイト、2年) 現在に至る。ただし、芸人養成学校終了後、劇団で俳優活動を継続(10年)。

<仕事に就くまで>

1974年、島根県生まれ。

両親と、弟の4人家族であった。

父親は電気店を営んでおり、母親は経理や店番などの手伝いをしていた。子ども時代、中学生の頃を通して、経済的には普通であった。とくに困窮した経験はない。また、学校の成績は、そこそこよかった。

地元の中学校、高校を卒業した後、1年浪人をして、1993年(19歳)に島根県内の大学の教育学部に入學し、1997年3月(23歳)に卒業した。実家から大学に通うにはあまりにも遠かったので、アパートでの一人暮らしをはじめた。大学生の頃は、野球部に所属し、地方大会を勝ち抜いて大学野球の全国大会に行ったことが一番印象に残っている。

また、大学生の頃の授業料や生活費は、両親に頼ってい

たとはいえ、3年生の頃から家庭教師のアルバイトをはじめ、大学での生活費などに充てていた。

教育学部だったこともあり、周囲は教員志望が多く、多くは教員採用試験を受けた。このため、就職指導というものはなかった。在学中に中学校の理科の教員免許を取得した。当時は、教員の採用が増えていた時期なので、教員採用試験の合格率はけっこう高かった。しかし、大学3~4年生の頃、将来は「お笑い」の仕事をしたいと思うようになったため、自分は教員採用試験を受けなかった。

「お笑い」の仕事をするためには、卒業後は大阪にある芸能事務所の芸人養成学校に1年間通って、お笑い芸人としての技能を磨こうと思った。そのためには、この芸人養成学校に入學し授業を受けるための入学金と授業料を工面しておく必要があった。また、大阪での当面の生活費を確保しておく必要もあった。こうした資金を稼ぐことが先決

だと思い、卒業後地元でアルバイト先を探すことにした。なお、自分がお笑い芸人という進路を選択したことについて、両親は賛成してくれなかった。しかし、反対したところでどうなるものでもないといった感じで、黙認してくれた。

<初職からの経験>

1997年4月(23歳)に、地元の回転寿司店にアルバイトとして就職した。知り合いが働いており、その人の紹介がきっかけだった。寿司飯は、基本的には機械が握ってくれるが、寿司ネタを切ったり、盛りつけたりという仕事は、人間が行わなければならない、けっこう気を使う仕事であった。とくに、お昼や夕方からの食事時などは、機敏にこなさないといけなかったのが、大変であった。もちろん、衛生面への気配りも必要だった。同僚との関係はとくにトラブルもなく、うまくいっていた。時給は、昼間は800円であったが、夕方からは900円にあがった。週6回シフトに入っていた。この時の月収はいくらであったか詳しくは覚えていないが、大阪に出るための資金の目処と考えていた目標額100万円を、1年かけてためた。

1年後、1998年(24歳)4月に、この回転寿司店を辞めて、大阪府に引っ越し、1年間の芸人養成学校に入学した。

また、この養成学校での活動と両立できる仕事として、なにかアルバイトをはじめることにした。引っ越したアパートの近所のコンビニエンスストアで、たまたま求人広告のチラシが貼られていたのを見て、アルバイトとして雇ってもらった。養成学校での活動がどの程度忙しいのかもわからず、またそれに集中したいと思ったので、近所であって便利がよい、この店を選んだ。時給は750円で、深夜給が850~900円であった。週5回ほどシフトに入って、月収は8~10万円ほどだった。

また、コンビニエンスストアでのアルバイトと並行して、ときどき家庭教師もやっていた。

1999年3月(25歳)に、1年間のお笑い芸人養成学校を卒業してからは、芸人養成学校とは全く関係のない劇団に所属して、俳優活動をはじめた。

劇団所属以降、芸人としての収入はほとんどない。若干の収入は芸人活動を続けていくうえで必要な諸経費に消えているというのが実情である。また、演劇活動の場合、公演が入ると、定期的な稽古とは別に、公演に向けた集中的な稽古があり、加えて、数日間は休みなく続く本番の舞台がある関係で最低でも1~2週間は仕事ができなくなる。そのため、安定した職に就くことができないであり、アルバイトが欠かせない。

なお、実際に舞台に立つようになったのは、この劇団に入って3年目の2001年(27歳)頃からである。

芸人養成学校に入学以降7年間続けてきたコンビニエンスストアでのアルバイトは、2005年(31歳)に辞めた。郊外のあまり立地場所のよくない店舗だったせいもあって、閉店することになり、それにとまって仕事を失うことになった。

これを機会に、それまでの住まいのすぐ南にある大きな都市のワンルームのアパートに引っ越した。劇団活動をするうえで、より利便性がある、家賃が安いことが魅力であった。

コンビニエンスストアのアルバイトを辞めてから3カ月ほどは無職であった。そんなこともあって、家庭教師派遣

会社に登録し、数件の家庭教師の派遣の仕事をした。家庭教師はもともと大学3年生の頃からやっていたため慣れていたし、大阪に出てきてからのコンビニエンスストアでのアルバイトと並行してときどきやっていた。ただし、2005年からの2年間は、もっぱら複数の家庭教師を掛け持ちでするアルバイトのみであった。

家庭教師を2年間続けた後、2007年(33歳)頃より、小中学生向けの学習塾の講師のアルバイトをはじめた。以前からの知人が学習塾をはじめた際に講師として誘われたことがきっかけである。時給1,000円、1日当たり夕方から夜にかけて4~5時間の労働時間であり、週5回ほどシフトに入っている。月収は8~10万円ほどであるが、夏期講習の時期は月収15万円ほどになる場合もある。

社会保険については、健康保険は実家の父親の被扶養者となっている。国民年金の保険料は納めていない(両親が納めているかは不明)。雇用保険にも未加入である。健康保険では親の世話になっているが、生活費は自分の収入だけでやりくりしている。

<現在の生活状況>

現在の生活状況は、苦しいと言えそうであるが、ぜいたくをしなければ十分にやっけていけている。好きなことをやっているの、納得している。

大阪府に出てきてからは、3回引っ越したが、ずっとワンルームで一人暮らしを続けてきた。現在のアパートは、家賃39,000円、ガス・水道・共益費は一律で7,000円、これに電気代は別であるが、全部あわせて5万円以内で収まっている。

劇団活動をしている同僚との関係は良好である。劇団の仲間とは稽古や公演の時はずっと一緒に過ごしているの、それ以外は、あえて顔を合わせようと思わないし、みんなアルバイトに忙しくしているというのが現状である。

両親とは、今でも月1回は必ず電話で連絡を取っている。仕送りを受けたことはない。両親は、今の自分の状況を心配しているようだが、説教じみたことは言われない。これはありがたい。

<本人の望みや不安>

現在、演劇というやりたい活動をしていることもあり、現在の生活状況に対して不満はもっていない。しかし、大学卒業後、演劇にたずさわってきて、それで十分稼げるようになっていないことを考えると、将来に不安はある。今後も、これまでのようなアルバイトと演劇活動の両方を続けていくことになるだろうと思う。ただ、大学を出たこともあり、塾講師という比較的安定したアルバイトが確保されていることが、少なからず安心につながっている。

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：24歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：大学卒業 ■就労の有無：就労中
- 現職：福祉サービス業、事務職、契約社員 ■直近の収入：月10～15万円 ■家計における役割：家計補助者
- 家族構成：同居する親2人 ■住居：親所有の持ち家
- おおまかな職歴：大学卒業 木材デッキ製造会社・営業事務（正社員、1年7カ月） 求職活動（4カ月）
社会福祉法人・事務（契約職員、8カ月） 現在に至る

<仕事に就くまで>

1985年、大阪府生まれ。

両親と1歳年上の姉の4人家族である。父親は、自動車タイヤメーカーの下請けの中小企業に勤め、営業の仕事をしてきた。この会社に30年ほど営業社員として勤めていたが、「退職金がいよいようちに辞める」と言って、2001年に50歳で退職した。その後、自転車メーカーでパートを6年ほどしていた。ここ2年間は自転車の販売・修理の自営業を営んでいる（現在58歳）。母親（52歳）も、もとは父親と同じ会社に勤めていて、職場恋愛で結婚した。現在は、父親がパートで働いていた自転車メーカーの関連会社から自転車の部品組立の仕事をもって内職をしたり、木製表札を飾るキャラクターをペイントする内職などを10年続けている。小さい頃の生活は、普通であったと思う。

地元の小学校、中学校を卒業後、公立高校の普通科に進学した。小さい頃から花屋を自分でもちたかったので、できれば園芸や農業関係の高校に行きたいと思っていた。また、高校卒業後は種や苗を扱える園芸関係の専門学校に進学したいと思った。しかし、いずれも、親に反対されて断念した。親からは、「大学に行け」と言われた。そこで、大阪府の私立大学の環境学科に、指定校推薦で進学した。農学関係の大学に進学したいと思ったが、学力が足りなかったし、浪人してまで入ろうとも思わなかった。親が大学進学を勧めた理由は、姉の友人で専門学校に進学した人たちがみんな辞めていたからであり、短大は就職が厳しいからということであった。小さい頃から親に「勉強しろ」と言われた覚えはない。高校を卒業して働くという選択肢は考えたことがなかった。

大学2年生まではエコロジーの研究をしていたが、大学3年生以降は指導教員の専門に合わせて植物の研究を中心にしていた。大学時代は3～4年生のときにコンビニで2年間アルバイトをしていた。多いときは週に5回、月に10万円くらい稼ぎがあり、その仕事は楽しかった。

大学4年生（2006年、21歳）のときの就職活動では、エコロジーの知識を活かした仕事ができる企業のほか、コンビニでアルバイトをしていたのでスーパーマーケットの会社も受けてみたが、これらの希望業種にはうまく就職できなかった。プラスチック製品製造会社に内定が決まったが、神奈川県勤務になるということだったので、内定を断った。大阪府か近畿圏で自宅から通える範囲で働きたいということだわりのあった。両親はもちろん親戚の9割以上が大阪府に暮らしていたし、大阪から外に出て働くという友人もいなかったため、自分も大阪を離れたくなかった。こうして、最終的には、卒業時点では就職先は決まっていなかった。

<初職からの経験>

2007年3月（22歳）に大学を卒業後、求人広告を見て、自宅からバイクで通えるところにある会社に正社員として就職した。主にマンションなどのベランダやバルコニーなどの床に敷くための木材デッキのキットを製造販売している会社で、従業員規模は15人ほどであった。発注や納品の関係の営業事務を担当していた。

会社は家族経営で、社長の息子が専務であり、その人が自分の上司だった。今から思うと、この人から、パワーハラメントあるいはモラルハラメントを入社後しばらくしてからずっと受け続けていた。その上司から、職場の中で自分だけが無視されるようになった。また、20年くらい勤めている女性の常務からも、「記憶力が悪いから病院に行ってみてもらえ」と言われることもあった。自分は性格が比較のおおざっぱで、たくさんある商品の名前などがなかなか覚えられなかったことも原因だったかもしれない。専務が忙しいときに声をかけると、「話しかけるタイミングを見計らって声をかけろ」と言われ、専務の機嫌が悪くなった。その上、会社では、名前と呼ばれずに「お前」「アンタ」と呼ばれた。これらのことが、嫌でたまらなかった。

同期入社はおらず、一番年齢が近い人は29歳の男性であったが、その人には相談はできなかった。会社に貢献していないと言うことで、他の人には出ていたボーナスがもらえなかった。会社に行きたくないと思う日々が続くようになり、次第にうつ状態になっていった。

こうした中で、2008年10月（23歳）になって、会社の業績が急激に悪くなり、「辞めてくれてもいい」「（会社の）利益になるような存在ではない」と言われ、会社にとどまり続ける理由もなかった。進んで辞めることにした。2008年10月末に退職した。退職金はなかった。いずれにしる、これは、上司のパワーハラメント、モラルハラメントによる退職であったと思う。退職後は失業手当をもらった。

退職後、1カ月弱ほど旅に出て、気持ちをリフレッシュさせ、11月から求職活動をはじめた。ハローワークやジョブカフェに通ったり、民間の職業紹介会社にエントリーシート・自己PRなどを提出して登録し、仕事を斡旋してもらった。この職業紹介会社では、履歴書・自己PRなどを添削して、それを企業に紹介してくれる仕組みになっていた。この会社の営業担当者からは、「会社が合わなかっただけなので、前の仕事を活かせるものにしましょう。住宅資材などの業界の事務の仕事にしましょう」と言われ、タイル関係の会社などを勧めてくれたが、面接までたどりつけなかった。また、前の就職先があまりにひどい職場

だったので、自分に合う職場をじっくりと探したいという気持ちもあった。

2009年1月頃、ハローワークに福祉関係の法人や企業の就職説明会のポスターが貼ってあり、15社くらいが参加するということが書かれてあるのを偶然に見つけた。前の職場を退社後、新しい分野にチャレンジしたいと思い介護事務の勉強をはじめていたこともあって、応募できるところがないか探してみた。そうすると、1社だけ介護事務員を募集していたので、応募することにした。就職説明会に参加し、「介護事務を勉強しているところです」と話した結果、後日に採用面接を受けることになった。面接の結果、契約職員として就職が決まった。最初から正職員としての採用はなく、すべての新規採用者が契約職員として採用された。

2009年(24歳)3月後半から、大阪府にある社会福祉法人が管理運営している障害者施設で事務の仕事をしている。社会福祉法人全体の規模は大きく、正職員80人、契約職員100人、非常勤職員100人くらいいる。今いる施設では、40人くらい職員が働いている。週5.5日の勤務で、残業はほとんどない。賃金は、時間給計算であるが、月に12~13万円をもらっている。年収では、150万円を少し上回る金額である。雇用保険はないが、健康保険や厚生年金には入っている。

以前のパワーハラスメントのあった職場に比べれば、別世界である。前の職場は同じ世代の人がいないのがつらかった。今の職場は、働きやすいし、同世代の人がいるので、仕事は楽しい。とげが刺さるようなひどいことを言う人はいない。しかし、月の給与は、前の職場に比べ2万円程度下がったので、たいへん痛い。

<現在の生活状況>

父(58歳)・母(52歳)・姉(25歳)と4人で同居している。一軒家の持ち家で、6部屋ある。前述通り、父親は自営業で、母親は内職をしており、姉も働いている。世帯全

体の収入は、400~450万円くらいである。貯金も少しはできている。親と同居しているので、食事などは親の世話になっているが、生活費として、毎月の給与の一部を両親に渡している。短大卒で働いている1歳年上の姉も同じように生活費を入れている。現在、契約職員ということで、前職よりも給与が月2万円減ったので、家に入れる額を減らしてもらった。生活必需品の購入を控えたりもしている。

相談できる相手は必要だと思うが、現在は特別な相手はいない。また、あまり相談したいと思わない。しかし、気軽に話のできる友人はいる。小学生の頃からの友人に介護士や看護師をしている人がいるが、福祉の仕事をはじめて、彼女たちと話が合うようになったのがよかった。

人と接する仕事に向いているかもしれないと最近感じる。職場で働く者みんなと話しながら仕事をするという点で、大学時代のコンビニエンスストアのアルバイトの環境と、現在の環境が似ているように思う。自分にとっても、寡黙に仕事をするのではなく、みんなと話をしながら仕事するのが楽しいし、合っている。今は、「福祉の仕事もいいなあ」と思うようになっている。

<本人の望みや不安>

将来についてはやや不安がある。

早く正職員になりたい。正職員になる試験(ディスカッション・作文など)が毎年2月頃にある。1年に1回だけだが、何年に渡っても受けられる。現在はその試験に合格し、正職員になることを目標としている。契約職員1年目で採用されたという話は聞いたことはないので、通常は数年かかるようだ。

また今の職場の環境は良いし、今の仕事が好きなので、この仕事は結婚しても続けていきたい。結婚は30歳くらいまでにしたいと思うが、子どもは欲しくない。自分と似たような性格の子が生まれるとかわいそうだと思う。老後の一人は寂しいとは思いますが...

調査番号：大阪58

調査日：12月17日

プロフィール

- 性別：女 ■年齢：46歳 ■現住所：大阪府 ■出身地：大阪府 ■学歴：高校中退 ■就労の有無：就労中
- 現職：小売業、販売員、自営業(個人請負) ■直近の収入：月7万円程度/生活保護受給
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：子ども2人 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：中学校卒業 電気機器メーカー・生産(正社員2年、定時制高校入学・中退) 喫茶店・店員(アルバイト、数カ月) 魔法瓶メーカー・生産(正社員、2年) アルバイトを転々(5年) 結婚・出産・育児・離婚(13年) 無職(6年、多重債務を抱える) 現在、乳酸飲料販売会社・販売(個人請負型の自営業、2年)+生活保護受給中(2カ月、多重債務の任意整理実施)

<仕事に就くまで>

1963年、大阪府生まれ。

父親と母親、兄、弟との5人家族であった。父親は、建設関係の鉄筋工であった。設計図の作成からとび職もこなす高度な技術を身につけていたと思う。ひとり親方(個人

請負業)で、建設会社から仕事を請け負い、ときには若い職人を引き連れて仕事をすることもあった。しかし、職人氣質の厳格な性格だったので、人づき合いが上手でなく、職場でよくトラブルを起こしていた。そのためか父親の勤務地変更に合わせて、主に市内で転居することも多かった。また、稼いだお金をすぐに使ってしまうがちで、家庭では

夫婦喧嘩も頻繁であったし、父親の暴力もあった。母親はパートの仕事に就くなどして家計を助けていた。また、兄には軽い知的障害があった。

中学校時代の生活はやや苦しかったように思う。遅刻や欠席もある程度あったし、授業内容もあまりよくわからなかった。

<初職からの経験>

1978年3月(15歳)に中学校卒業後、中学校からの紹介で大手電気機器メーカーに正社員として就職し、オーディオ機器の製造ラインで組立作業の工員として働いた。半田付けやノイズ検査の仕事をしていた。週5日勤務で月収8万円であった。

安定した就職先であったが、やはり高校は出ておきたいという思いから、同年、定時制高校に入学した。しかし、クラブ活動への参加が必須であり、そうした規則がたまらなく嫌で、間もなくして中退することになった。それまでも、親に厳しく言われてきた環境であったことから、また同じような厳しい環境だと思い、嫌になった。

また、お酒が入ると人格が変わる父親に対する反感が強く、就職してからは、あまり家に帰ることはせずに、友達のアパートに居候することが多くなっていった。

1980年、17歳になったころ、2年間勤めたこの会社を退職した。仕事自体は好きであったが、職場の同期の友達がイジメにあったので、その同期の味方をしたことで、自分まで村八分扱いをされてしまった。それで職場の人間関係がギクシャクし、居場所が見つけれなくなって、辞めることにした。

その後、知人の紹介により喫茶店で店員として数カ月間アルバイトをした。

同年、求人誌で、魔法瓶メーカーに正社員の工員として就職した。前の電気機器メーカーでの仕事と同様に、流れ作業の製造ラインで組立作業に従事した。給与も前とほぼ変わらず、週5日勤務で月収8万円だった。ただし、年2回ボーナスが支給され、それは合計で15~20万円程度であった。

この仕事は、1983年、20歳のときに辞めた。辞めた理由は、よく思い出せない。

これ以降1988年(25歳)に結婚するまでは、短期のさまざまな職に就いては辞めることを繰り返した。主な職としては、喫茶店の店員、前の大手電気機器メーカーの下請会社での作業員、下着販売の電話アポインターの仕事(電話でアポを取って、営業と一緒に顧客を訪ねて販売する仕事)、スナックの店員などである。当時、友達に「なんで、仕事続かへんの?」と笑われたこともあった。きっと、なにか問題があるときっぱりとそれを指摘したり、同じ勤め先に執着しない性格のせいだったと思う。

23歳(1986年)ごろ、スナックで働きだした際に、収入がよかったこともあって一人暮らしをはじめることになった。

スナックで1年ほど勤めたころ(24歳、1987年)、お店の客として来ていた男性と交際をはじめ、妊娠したので、翌1988年、25歳のときに結婚した。

結婚して、大阪府内の別の区に転居し、そこで長男を出産した。その2年後(1990年、27歳)次男が誕生した。また、同年、夫が両親の面倒をみなければいけないというこ

とになり、すぐ近くの別の区に引っ越した。

結婚当初、夫は、配電工事を中心に送電線工事、発変電工事などを行う大手電気工事会社の下請会社の作業員として働いていた。しかし、それを辞めた後、道路工事現場のガードマンの仕事をしていたが、夫の叔父から声を掛けられ、叔父が経営していた食肉卸売会社に正社員として入社した。また、叔父はラーメンチェーン店もやっていて、その後には、このチェーン店のある店舗の店長になったこともあった。夫と結婚してからは、経済的に徐々に安定していったので、主婦業に専念していた。

しかし、叔父の食肉卸売業の経営が1996~1997年頃から悪化し、給料の未払いが続くようになると、家計に影響が出始めた。やむなく夫は近所の親戚などから借金をし、しかもそれが増え出した。そのこともあって夫婦喧嘩も多くなってきた。叔父の会社も、1998年には倒産してしまい、夫はその後、別の仕事に就いた。また、この1998年(35歳)には長女が誕生した。

2001年(38歳)になって、夫から突然離婚の話を持ちかけられることになった。家庭の経済事情はよくなかったが、夫から離婚話を持ちかけられるほど夫婦の関係が壊れているとは思えなかった。夫は、借金をした責任を夫本人ではなく自分のせいだと言ったり、自分の話しぶりなどを離婚の原因とした。しかし、理由は他にあるのではないかと思いつつも、夫の側からはっきりした理由が明らかにされることはなかった。

ついに夫との話し合いに疲れ、同年、協議離婚に応じることにした。慰謝料はもらえなかったが、これまで住んできた賃貸の一戸建ての家には、3人の子どもと一緒に暮らせるようにするというので、夫の母親が家賃を払ってくれることに決まった。後でわかった話であるが、夫が離婚を求めた理由は、他の女性と交際をはじめその女性との間に子どもができたことにあった。

いずれにせよ、夫からの思いがけない離婚話を持ちかけられ、結局離婚せざるをえなかったことに、相当ショックを受けた。深刻な人間不信に陥り、その後数年間、家に引きこもり、身動きの取れない状態が6年間も続いた。

なんとか就職して所得を得ようと思い、ホームヘルパー3級の資格を取得した。しかし、就職して社会に出ることが怖く、就職できないままであった。離婚以降は母子世帯ということになったので、児童扶養手当がもらえた。また、2人の上の子どもたちは、高校に通いながらアルバイトで家計を支えてくれた。これらのお金で細々と生活をやり繰りしていた。しかし、電気・ガスなどが止められたり、生活に必要なものが買えなかったりといった時期もあった。その上、次第に借金をするようになり、多重債務となり、ついに借金は相当に増えてしまった。

2007年(44歳)離婚して6年目に、友達に勧められてひとまず乳酸飲料の販売員となった。しかし、持病の腰痛が悪化し、すぐに辞めてしまった。

しかし、そうも言われていられる状況ではなかったし、友達に励まされて、2007年10月から、もう一度この販売員になることにした。販売員といっても社員ではなく、個人請負の自営業という扱いである。商品を会社から買い取って、自転車に積みこんで訪問販売をしている。就業時間は1日6時間で、週5~6日の勤務で、月収は7万円程度になる。子どもがいるので勤務時間が比較的短くて済むこと、営業から配達まで一通りのことが自分のペースでできること、

また職場には多くの友達がいることなどの理由で、この仕事に就いている。いまではこの仕事が好きである。

この仕事をはじめのきっかけは、ある日突然この会社の店長が家に尋ねて来て、「ここでは（あなたの）友達も働いていますよ」と販売員になることを誘われたことにある。後で、その友達が1万円を渡してくれた。最初、わけがわからなかったが、この会社では、友達を販売員として紹介した販売員には2万円の奨励金が出るそうで、友達が気を使ってくれたのであった。いずれにしろ、この友達に対しては、働きに出るきっかけをつくってくれたことに感謝している。

現在の仕事は自営業扱いなので雇用保険はない。国民健康保険と国民年金は、生活保護を受給（2009年10月から受給開始）しているのので、保険料を免除されている。

<現在の生活>

離婚は協議離婚だったため慰謝料はなかったものの、夫本人ではなくその母親が月々の家賃を支払ってくれることになっていた。しかし、その支払いが2008年から滞った。まったくそのことを知らなかったために、2009年1月に裁判所から「家賃滞納のため半年分の家賃（8万円×6カ月）を支払って退去せよ」との通知を受けることになった。その上、多重債務も重なったことから、「もう無理や」と思い、まず多重債務の任意整理をし、これまでの住宅も出ることにした。

地域の社会福祉施設にある総合相談窓口に行って、相談をした。多重債務処理では、自己破産という方法も提案されたが、借りたものはたとえどんなに大変であってもきちんと返したいと思い、任意整理の道を選んだ。借金は、銀行と消費者金融会社のあわせて3社からの借金とクレジット会社への商品代金未払いの4つがあった。利息の過払い分が返ってきたため、それを使って返済できるものは返済するというところである。

住居については立ち退きのため1990年から住んでいた一戸建ての民間賃貸住宅から2009年内に同区内にある民間アパートに転居することになっている。ここは2部屋しかないのので、3人でうまく生活していけるか不安である。

また立ち退きをきっかけに、生活の立て直しを図ろうということで、多重債務処理の手続きと合わせて2009年10月から生活保護を受給することにした。

これから、任意整理後の借金の返済が始まる。これらのことを考えると、先行きが非常に不安である。

現在、長男（21歳）、次男（19歳）、長女（11歳）の3人の子どもがいるが、長男は就職して別居している。次男と長女と一緒に3人で暮らしている。次男は今年2009年3月に高校卒業してすぐに鉄工所に就職したが、環境が大きく変わったことにパニック障害を患い電車に乗ることができなくなって、2009年9月末に退職せざるを得なくなった。しかし、次男はいまは落ち着いており、退職したことを後悔している。「働くことに意欲がわいてきたのだから、それでいいよ」と言ってあげているが、遠くに用があってもまだ電車には乗れず、自転車で行っている。人と普通に話をすることはできるが、人の多くいるところに行くと呼吸困難に陥ってしまう。

次男の退職によって2009年4月から次男が月13万円もらっていた給与収入もなくなり世帯収入が大きく減った。この

ために10月から生活保護を受給することになった。生活保護費のほか乳酸飲料販売員の自営業による収入7万円、児童扶養手当などで合計25万円の収入である。しかし、それまでは生活保護の受給もなかったために、過去1年の年収となると、250万円に満たない額である。

両親はすでに他界している。いま住んでいる地域の中に支えてくれる友達がいる。また、子どもたちの存在は、やはり生きていく上で大きな励みとなっている。

<将来の展望>

現在、乳酸飲料販売員の仕事による収入に加え、多重債務を整理し生活保護費をもらいはじめたことで、ひとまずこれからの安定した生活に向けての第一歩が踏み出せた。しかし、債務額の大きさや収入の少なさを考えると、将来について強い不安があり、前途は多難である。

いまから思うと、離婚のとき以降相当落ち込んでしまった状況をどうしてももっと早く切り替えて、仕事をしようとしなかったのか、それを本当に後悔している。いま残っている借金は、そうしたことができなかった自分へのシッペ返しだと思う。自分は甘かったと思う。

プロフィール

- 性別：男 ■ 年齢：51歳 ■ 現住所：愛知県 ■ 出身地：岩手県 ■ 学歴：高校卒業 ■ 就労の有無：求職中
- 直前職：運輸業、倉庫関係職、アルバイト ■ 直近の収入：勤労収入なし ■ 家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■ 住居：路上生活
- おおまかな職歴：高校卒業 木材会社・生産（正社員、25年） 電気機器メーカー組立（登録型派遣、1年）
製造業の登録型派遣を転々（5年） 路上生活（2年、途中で倉庫作業員等の短期アルバイトを経験）、現在に至る

<仕事に就くまで>

1958年、岩手県生まれ。

1964年、自分が6歳の時に、父親が死亡した。その後、母親と2人の弟（1歳下と6歳下）との母子家庭で育った。母親は家計を支えるために林業でパート労働に従事していた。そのため、家庭の暮らし向きは大変苦しかった。しかし、生活保護は受けていなかった。住居は借家の一軒家で、岩手県を離れるころの家賃は月3～4万円だった。岩手県内には現在も親戚がいる。

中・高校時代は、遅刻・欠席もなくまじめに通っていた。信頼できる先生・友人もいて、進路指導も適切に行われていた。高校は公立高校の普通科に進学した。

<初職からの経験>

1976年（18歳）高校卒業後、岩手県の木材会社に正社員として就職した。高校からの紹介ではなく、家に近かったので自分で出向いて採用してもらった。従業員100人規模の会社で、主にパレットやチップの製造に従事した。社会保険にも加入していた。仕事は実家から通い、母親を扶養していた（弟2人はそれぞれ高校卒業後に岩手県を離れた）。

1998年（40歳）の時、母親が逝去した（すでに家を出ていた弟2人とはその時に会ったきりで、その後どちらの弟とも音信不通である）。

高校卒業から勤めた木材会社は25年間働いたが、2001年（43歳）に倒産したため、退職した。退職金はほとんどなく、退職する直前の月収は28万円だった。

退職から約1カ月後（2001年、43歳）岩手県の派遣会社に登録し、製造業で組立の仕事をした。すぐに仕事を始めたので失業手当は受給しなかった。派遣会社の寮に入るため、幼少から暮らしていた実家の借家を手放した。家財道具を整理し、2つのバッグに最低限の荷物を詰めてこれを持ち歩き、生活を始めた。

2002年（44歳）4月、岩手県の派遣会社に登録してから1年後、派遣会社から「こっちには仕事がなくなってくる。愛知県のほうで人を募集しているから、そっちのほうにまわってください」と言われ、愛知県に移った。

愛知に来てから、愛知の派遣会社に登録し、2007年（49歳）までの5年間、愛知県を中心に派遣先を転々とした。最初は、携帯電話の組立の仕事をした。

その次は、ガス機器製造会社で、ガス器具の組立を行った。その他、倉庫からの食品の出し入れの仕事などをした。

愛知県に来てから2年ぐらいいは同じ派遣会社で働いていたが、それから徐々に仕事がなくなって、次の派遣先を紹

介してもらうために待機している間に「仕事がなくなったから（寮を）出て行け」と言われた。

そのためそれ以降は、一つの契約が終われば、次の契約を待たずして、次の派遣会社を探した。

派遣会社ではいずれも健康保険には加入していたが、保険証は病院に行く時だけ手渡され、用が済むとまた会社に返却する形を取っていた。愛知県での住まいは派遣会社の寮で、派遣会社が変わるたびに、寮も転々と変わっていった。

最後の派遣会社からの仕事は、愛知県内でのテレビ部品の組立の仕事だった。契約満了前に、「だいたい半月ぐらいい様子を見て、『仕事がないからもう辞めてほしい』と言われ」て、退職した。同時に会社の寮からも出るようになった。

2007年（49歳）に派遣の仕事を辞めるまでに計4つの派遣会社に登録して仕事をした。

仕事を辞めた時は、貯金もほとんどなかった。それでも、辞めた直後は、所持していたお金で2週間ほどホテルや安い宿で寝泊まりしていた。ネットカフェや24時間の店などに泊まることまでは考えが及ばなかった。仕事を探すために、一度ハローワークに行き、紹介された会社へ面接に行ったが、その会社の担当者に「住所とか身分証明書とか、なければだめ」と言われ断られた。ハローワークには、「その時から、あまり行かなくなった」。

数日後、ついにお金がなくなり、路上生活を始めた（現在も路上生活を継続中）。

当初は、地下街で寝ていた。寝ていた時に「自転車を投げつけられたことがあった」。それで危険を感じ、「そこはだめだと思って、ビルとビルとの間のあまり人の目につかないところに移動した」。

路上生活を始めてからは炊き出しにお世話になって、食事をしている。炊き出しをつてに、愛知県内の福音教会に通うことになり、「何かあったらいけないので」と教会関係者に勧められ、教会がカード式の携帯を購入してくれた（現在は交通費がないため、この教会には行っていない）。

ビルの中で路上生活を始めてから間もなく、「（仕事を）斡旋する人」に声をかけられ、アルバイトの話を持ちかけられた。その仕事は、電気店子会社において電気製品の倉庫出し入れと配達アルバイトだった。断る理由もなかったためアルバイトを引き受け、1カ月に15日間働き、最終日に約5万円の現金を支給された。アルバイトの条件は、「お金は食べるくらいはあげますよ」と言われたのみで、書面での契約や賃金の約束は全くなかった。

2008年9月（50歳）になり、その仕事も「もう、行かなくてもいいから」と言われたため、収入を得るものがなく

なった。仕事を紹介してくれた人は誰かはわからないが、路上生活をしていて安く働いてくれる人を斡旋することを専門にしている手配師だった。アルバイトをしている間は、声をかけられた人に会うことはなかった。仕事の連絡はいつも電気店のほうから電話がかかってきた。15日で5万円程度だから、食べるだけで精いっぱい、からだを休めるためにホテルに泊まることもなかった。たまたま銭湯にも行っていた。

それとは別に、単発のアルバイトをしたこともあった。炊き出しに行った時に、声をかけられた。仕事は「建設現場でばらした材料を運ぶ」仕事で、1日約7,000円であった。2年間の路上生活中に、4回のアルバイトを経験した。

<現在の生活状況・暮らしぶり>

現在の暮らし向きは、大変苦しい。過去3カ月の間に収入は全くない。貯金もない。現在は愛知県内のビルの間で路上生活をしている。荷物はバッグ2つで、ビルの隅のほうに人目につかないように置いている。食事は、近隣の教会や路上生活者の支援を行っているNPOによって実施される炊き出しを利用している。近隣の行政区ではほぼ毎日何らかの炊き出しが行われているため、今のところ何とか食事はできている。

現在は、近隣のカトリック系の教会に出入りをしていて、定期的に礼拝に行く。シャワーは教会で週に1回程度、また時々教会から風呂券をもらい銭湯に行くこともある。洗濯は週に1回教会で行っている。

愛知県に来てから最初に行った教会の名義で購入した携帯電話は、現在も利用している。利用料金は現在通う教会から支給されるプリペイドカードで支払っている。携帯等の電化製品の充電は公共施設で行う。

現在、相談できる人は、炊き出しでできた仲間、そしてNPOの人たちである。

月曜日・木曜日は通っている教会の炊き出しで、車の荷物を下ろすボランティアをしている。理由は、「やりがいがあるというのではなくて、自分が今まで仕事がなくで助けられたから、そういうところで手伝って恩というかそういうのを返したい」ためである。

現在の健康状態はあまり良くない。過去に高血圧と脳梗塞を患ったことがあり、その後遺症のために、月に1~2回区役所から医療券をもらい紹介された病院に通院している。

生活は苦しいが、生活保護は受けたくないと考えている。自分から生活保護の相談をしたことはない。医療券をもらいに区役所に行った時に、生活保護の担当から、「生活保護という方法もあるが」と勧められたが、「性格的に、あんまり面倒見られたくないな」と思って、自分から断った。「それについては、炊き出しでも結構言われていてわかっているけど、私は受けたくない。まだ生活保護を受けるには若い」と考えている。

25年間正社員として働いていたため、2年前に社会保険事務所に行って、年金受給権があることは確認している。しかし、現在は年金の免除申請などはしていない。

現在までずっと未婚である。

<本人の望みや不安>

自分の将来について強い不安がある。貧しいのは本人の責任だけではなく、「行政」と「仕事がないこと」の責任であるとも考えている。

政府や行政に対しては、「もっと仕事をふやしてほしい」「働ける会社をふやしてほしい」「住みよい生活が出来るようにしてほしい」と希望している。

仕事については、「やっぱり製造関係の仕事とか。派遣会社からその仕事が出てきたら、そういうところで働きたい」と考えている。理由は「派遣会社だと察もあるから」である。

調査番号：名古屋2

調査日：11月2日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：46歳 ■現住所：愛知県 ■出身地：長野県 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：製造業、生産職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし ■家計における役割：家計維持者
- 家族構成：単身 ■住居：緊急一時宿泊施設
- おおまかな職歴：高校卒業 パン製造会社・生産（正社員、3年） ミシン製造会社・販売（正社員、10カ月）
無業（3カ月） 食品製造販売会社3社・生産および販売（正社員、計14年） 以降、派遣会社13社で製造業の工場（24工場）を渡り歩く（登録型派遣、計10年） 路上生活（2カ月） 緊急一時保護施設（4カ月）
実家 現在、緊急一時保護施設入所中（2カ月）/求職中

<仕事に就くまでの生活（家庭・学校）>

1962年、長野県生まれ。

<初職から現職までの職歴>

1980~1982年（18~20歳）

長野県の普通科高校を卒業後、神奈川県内のパン製造会社に正社員として勤めた。全部で60人くらいの工場、チームごとに分かれて作業していた。自分は、5人チームでフランスパンの製造にあっていた。そのほか、洋菓子や菓子パン（30人）を作るチームもあった。ここでは、他のパン会社のパン製造も受託していた。

会社の勤務時間は、5:00~15:00くらいで、月給は約

12万円くらいだったように思う。この当時、生活は楽だった。働いているときは、会社の寮に入り、4畳半の2人部屋で暮らしていた。工場に食堂がなく、社員寮に食堂があったため、昼食はみんな社員寮に食べに来ていた。ただ、工場で働いているところはパンを作るだけだったので、性格も暗かった。そのため、仲のいい会社の同僚もおらず、できるだけ夕食のときは社員寮に居ないようにしていた。「工場の人と百貨店で勤めている人とは、性格が違いますね。やっぱり、サービス業の人のほうが明るい。いまま仕方なく派遣やっているけど、サービス業のほうがいいですね。できれば、サービス業に就きたいです」。この会社には、労働組合があり、正社員はすべて加入しなくてはならなかった。ただ、労働組合とほとんど付き合うことはなかった。そのほか、雇用保険・健康保険・厚生年金に加入していた。

自分の所属していたチームのリーダーと仲が悪く、会社を辞めることにした。そのとき、都内にある工場に移るよう勧められたが、断った。少しお金を貯めていたので、千葉県にある公団住居に応募して入居した。会社を辞めたとき、会社から離職票はもらったが、失業給付の申請をしなかった。「失業保険だといろいろ聞かれるが、そういうのは嫌だから、働いたほうがいいと思っていました。すぐにくれるわけでもないから。(ハローワークには)行ったことがないからわからないけど。仕事があれば、仕事をしたほうがいい。自分は失敗しちゃいましたけど」。退職時には中小企業退職金共済制度による退職金を少しもらったように思う。

1983年(21歳)

その後、住んでいた千葉県で、マシン製造会社に勤め、マシンのセールス(訪問販売)をするようになった。この仕事は、「騙されて、お金がなくなって、10カ月くらいやっていた。10カ月で辞めたのは普通の営業の仕事だと思っていたら、給料が歩合制だったからだ。「募集には、書いてなかった」。最初は、先輩が自分の売り上げ分を分けてくれたりしたので、それなりに給料が出ていたが、だんだん完全な歩合制になって、給料がほとんど出なくなった。この会社では、雇用保険・厚生年金・健康保険など、加入していた記憶がいつさいない。

訪問販売を辞めたあと、2~3カ月は仕事をせずに、遊んでいた。そのあいだは貯金を取り崩して、生活していた。そのあと、新聞広告で販売員募集の広告を見て、それに応募した。

1984~1991年(22~29歳)

次に、食品製造・販売会社に正社員として勤めた。サラダや総菜を作る会社で、自分の仕事は、営業や製造・販売(店舗スタッフ)などを行った。勤務地は、東京都市部や神奈川県内だった。東京都の職場では、店舗のなかで総菜を作り、そこに付設された飲食スペースで食事を提供していた。そこで仕事は、店長がいないときは代理として働いていたので、平の店員というよりは、マネージャーに近かったと思う。この会社で働いたとき、「東京都食品衛生管理者」の資格を取得した。

この会社での勤務はシフト制ではなく、9:00~20:00くらいまで働いた(店舗の仕事がすべて終わるまで)。ただ、千葉県に住んでいたため、通勤に時間がかかり、6:00に

は家を出ていた。残業代が出ていたかどうかは覚えていない。当時の給料は、月給が18万円、ボーナスが10万円くらいだった。このころ家賃は3.5万円くらいだったから、生活は苦しくなく、朝も夜も外食することが多かった。この会社では、雇用保険・厚生年金・健康保険が整っていたと思う。

ただ、大手の食品製造会社に吸収されてしまい、会社が無くなってしまったことになった。そのため、自分も辞めさせられることになった。

1992~1994年(30~32歳)

その後、知人の紹介で、また食品製造・販売会社の正社員になった。この会社は、オムレット・ケーキ・プリン・グラタン・サラダなどを製造販売するところで、よくデパートの催事にも出店していた。東京都区内にある百貨店で働いた。勤務時間は、9:00~20:00くらいで、給料は前の勤め先より少し低いくらいだった(執筆者注:月給17万円程度か)。ただ、この職場では、上司との関係が良くなかった。お歳暮などの時期になると、店長に商品券を贈るよう、なかば強制的に仕向けられた。ここでも、雇用保険や厚生年金は整備され、健康保険は「東京都洋菓子健康保険組合」に加入していた。

だが、店舗が撤退になり、「辞めてくれ」と会社から言われ、辞めることになった。それにもかかわらず、自己都合退職として扱われた。

1995~1997年(33~35歳)

上司に紹介されて、新しい食品製造・販売会社に正社員として勤めることになった。ここでは、東京都内の百貨店にある3つのテナントで働き、弁当や総菜を製造・販売する仕事に従事した。職場は小さくて、自分と女性派遣社員の「マネキンさん」の2人だけだった。勤務時間は、8:30~20:00くらい。いつも50~60食の弁当を作るので、仕事はたいへんだった。給料は、前の職場と同じくらいだったと思う(執筆者注:月給17万円程度か)。ここでも、雇用保険や厚生年金はあった。また、中小企業だったので、政府管掌健康保険に加入していた。

ただ、ここでの仕事も店舗の撤退で、辞めざるをえなくなった。このときも、失業給付はもらっていない。

1998~2008年(36~45歳)

失職したので、長野県にある実家に帰ることにした。当時は、すでに母親は亡くなり、父親が再婚相手と暮らしていた。しばらくしてから、長野県にある派遣会社に登録して、働くようになった。「ここからは派遣会社を転々として、定かではないです。出たり入ったりで」。一つの派遣会社で仕事を探し、仕事が無くなったなら別の派遣会社に移る暮らしだった。派遣会社を駆けもちで登録することはなかった。派遣社員として働いているあいだは、いつも社員寮に入り、だいたい日払いで給料をもらって生活していた。

まず、長野県にある電気機器製造会社の半導体工場で働くことになった。このときも社員寮に入った。1年ほど働いたあと、減産のため「もういらぬ」と言われ、辞めた。

その次は、茨城県のCD-Rの製造工場働くことになった。ここでも、社員寮に入った。ただ、この仕事も6カ月ほどで減産のため辞め、そのあとの仕事が紹介されな

かったので、また故郷である長野県に帰った。

夏には、遊園地でのアルバイト、冬には、建築作業員の仕事をして、急場をしのいだ。

年を越えて、長野県の新しい派遣会社 の面接を受け、3カ月後に仕事を紹介してもらうことになった。福井県の電気機器製造工場で、携帯電話の部品加工を1カ月半行った。これは、座り仕事なので、比較的楽だった。ただ、工場を海外に移転するというので、首になった。

そのあと、富山県の半導体工場で、シリコンウェハーの運搬作業に1年半くらい従事した。工場内にステーションがいくつもあり指示書に沿って台車で運搬した。この作業は、いろいろな人とやり取りすることになるので、自分に合っていたと思う。このときの仕事は、4勤2休の1日12時間交替勤務（食事1時間、休憩1時間）だった。時給がおそらく1,100円くらいで、月給が20万円強だったと思う。

その次に、長野県のパソコン製造工場で、パソコン基盤に部品を取り付ける実装機のオペレーターを半年くらいやった。ここでの仕事は、「暑いなか走り回っていました。鼻血とかが出て、辞めたんです。けっこう、実装機ってたいへんなんです。むこうの会社の人にもいらないうて言われて」。ここでは、土曜日でも働き、社員寮費が6万円、光熱費が1万円くらいで、手取りは12万円ちょっとだったと思う。

その後、再び富山県の半導体工場に戻って、搬送仕事とたまに機械のオペレーターを半年ほどやった。この仕事はやりやすかった。「いまは35歳以下しか取らないです。たぶん、物覚えの問題だと思います。機械が英語表記だったり、コンピュータを使ったりするので」。この仕事が終了したあと、仕事が見つからず、いままでの派遣会社 を辞めることになった。

新しい派遣会社 に登録して、富山県にある半導体工場に行き、機械のオペレーターとして働き始めた。ただ、「仕事が遅い」と言われ、3カ月で辞めさせられることになった。

その後は、なかなか仕事が見つからなかったため、故郷の長野県に帰った。そして、長野県にある派遣会社 に面接に出かけ、2カ月後茨城県のDVDの製造工場働くことになった。ここでは、月曜日から土曜日まで夜勤で3カ月のあいだ、DVDの梱包作業を行った。その後、また仕事が見つからず、しょうがなく実家に再び帰ることになった。

長野県で再び別の派遣会社 の面接を受け、電気機器製造会社の仕事を紹介された。だが、二日間のテストを受けた結果、「うまくドライバーが使えない」という理由で、「いらぬ」と言われた。

このあと、自動車メーカーの面接を受けた。このとき（2002年ののち）自分の年齢が40歳を超えていたため、派遣会社から年齢をごまかして伝えるよう指示された。ただ、結局、面接に落ちてしまった。

このあと、神奈川県にある重工業メーカーの工場に勤めることになった。ただ、1週間働いたところで、重いものが持てないからという理由で、辞めさせられてしまった。

次に、神奈川県にある自動車部品工場働くことになった。しかし1日間勤めただけで、帰り際に「もういらぬ」と言われた。このころ、派遣会社が、もう会社を辞めるように迫ってくるようになった。

結局、仕事が見つからないので、再び長野県の実家に帰ることになった。そこで、長野県にある派遣会社 の面接を受けた。そして、携帯電話製造工場で、カメラ部分の検

品作業にあたることになった。だが、1カ月ほどで、工場の中国移転のため首になった。

その後、広島県に移り、自動車のシート製造工場働くことになった。ただ、10日ほど働くと腰が痛くなり、職場の変更を求めたが、聞き入れられず、辞めざるをえなくなった。このあと、2社ほど面接を受けたが、うまくいかなかった。

そのあと、また長野県の実家に帰り、そこで新たな派遣会社 に登録することになった。そして、山口県の半導体工場に行き、1カ月ほど働いた。だが、また仕事が無くなった。

しょうがないので、愛知県に行き、そこで派遣会社 の面接を受けた。そして、岐阜県にあるパソコン製造工場、1カ月ほど基盤を作ることになった。

そのあと、また仕事が無くなったので、別の派遣会社 に行くことになった。そこで、愛知県にある給湯器の部品加工工場働くことになった。ただ、1週間しか仕事は無かった。

そのあと、別の工場に移って、ファンヒーターの製造にあたった。ここの仕事は、梱包した製品を積んで、配送するために運搬することだった。ここのライン長はいい人だった。1日も休まずに勤務していると、そのことが評価されて、別の職場に移されるほどであった。

そのあとは、住宅メーカーの住宅部品加工工場、鉄板塗装の機械オペレーターをすることになった。

そして、フォークリフト製造工場に移り、パネ作りに従事した。ただ、ここで働いていたとき、高血圧が理由で、健康診断にひっかかってしまった。血圧は昔から高かった。そのため、2008年2月頃、健康問題を理由に仕事を辞めた。

そのあと、また別の派遣会社 に行き、愛知県にある自動車メーカーの部品配送センターで働くことになった。ここでは、2カ月ほど働いたが、かなりの重労働だった。

また、別の派遣会社 に移り、食品製造工場で働いた。ここでは、6:00~18:00まで、週6日、2カ月間働いた。この職場は、中国人やベトナム人など、外国人が多かった。

そして、また別の派遣会社 に行き、愛知県にあるパン工場働くことになった。ここに3カ月くらいいた。この職場を辞めたのが、2008年9月である。「ここも、最後は、朝8:00ごろ電話がかかってきて、いまずぐ出てくれと派遣会社から言われ、それで朝まで通して働いた。そんなことが続いた。そのため頭にきて（辞めた）」。

2008年9月～現在（45～46歳）

このころ、仕事が見つからないようになった。いつも社員寮付きの派遣仕事をしていたので、仕事が無くなるととても困った。最初は、カプセルホテルに泊まって、しのいでいたが、それもできなくなった。仕方なく、夜は野宿するようになった。ちょうどこのときに、携帯電話を盗まれてしまい、ますます仕事を探しづらくなった。

2カ月ほど野宿をしたあとの2008年10月20日に、愛知県にある緊急一時宿泊施設（シェルター）に入居することになった。

このころ、高血圧になって、病院に行くよう言われた。特に、「症状はなかったけれど」。ただ、身体のことには仕事にも関係する。「面接するときに言わないと。だから、雇ってくれるところが厳しいと思うんですよ。隠しちゃうと、いつ倒れるかわかんないから。派遣会社は（病気であるう

がなかるうが関係なく、人を)使いますけど。『血圧が高い』って言っても、聞いてくれやしない。配属も変えないし。でも、これから仕事を探すとき、面接するときには言わないと。こういうネックもあるんです」。高血圧のために、仕事を首になったことはないが、職場で力が出ないのは、病気のためだと思う。

2009年2月になって、入居期限が来てしまい、シェルターを出ないといけなくなった。仕事も見つかっておらず、職員もあまり親身になってくれなかった。しょうがないので、また野宿をしながら、仕事を探し始めた。だが、うまく行かず、2009年4月に長野県の実家に戻った。

そのあと、2009年7月に再び愛知県に出てきた。また仕事が見つからず、2009年10月にシェルターに戻るようになった。シェルターは、職業紹介をしてくれないので、ハローワークで仕事を探している。いつもは仕事を見つけるために、フリーペーパーを通じて派遣会社を探していたけれども、住む場所もなく、携帯電話もないので、応募することすらできない。また、40歳を超えると、肉体労働は難しいと感じている。

< 仕事に就いてからの生活 >

派遣社員はやりたくないけれど、正社員の仕事はない。そうすると、やっぱりアルバイトか、派遣の仕事しかない。でも、40歳を過ぎると、派遣会社でも仕事がなくなってしまふ。派遣社員だと、社員寮に入って、そこから送迎バスに乗って職場に行かざるをえない。本当なら、家があるときに、正社員になっていればよかったと思う。最初の派遣会社に行ったとき、実は派遣会社だとわからず、会社名を見てエンジニアリングに関する製造会社だと思い込んでいた。だから、派遣会社には意図せずに入ったことになる。

派遣の仕事でも、ラインの仕事はできない。やはり、自分には運搬作業が向いていたと思う。ただ、派遣会社で働

いていたとき、食べるのに困ることはなかった。去年の2008年になって初めて、食べるのに困るようになった。

派遣会社は、中間マージンをけっこう取っているのではないか。以前、工場の職員と話したとき、工場が払っている金額と自分が派遣会社からもらっている給料が違っていった。

いくつかの派遣会社では、雇用保険に入っていた。でも、仕事を辞めたあと、失業給付をもらうことは一度もなかった。

生活保護を受けるにしても、親がいるから。親は、うるさくて、何かというと親戚に電話したりする。以前、親が捜索願を出したことがあった。故郷である長野県の村では、ぜんぜん仕事がない。親は、生活保護をもらっている。こんな事情だから、生活保護を申請したことは一度もない。だいたい、生活保護にしても、親は関係ないと思う。ただ、いまは生活保護を考えている。

現在も、高血圧で身体の具合が悪く、シェルターで診療を受けている。病院に行けて、薬をもらえるようにしてほしい。

結婚については、いままで機会がなかった。若かったときも、仕事に忙しくて、そんな余裕がなかった。

< 社会に対する意見(政治・労働組合・NPO)>

いままで、公共機関にいい印象は持っていない。以前、区役所に行ったとき、その職員がとても偉そうな口ぶり、とても嫌な言い方をしていた。なんだか、こっちが大人しくしていないとダメなように感じる。だから、あまり公共機関に行きたいとは思わない。

NPOと関わりを持ったのは、ホームレス支援NPOが初めてだ。労働組合とは、関係を持ったことはない。また、いままで仕事で同僚になった人たちとも、仕事について話し合うことはあまりなかった。

政府に対して言いたいことは、生活保護はすぐに受けられるようにすべきということである。

調査番号：名古屋3

調査日：11月2日

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：47歳 ■現住所：愛知県 ■出身地：茨城県 ■学歴：高校卒業 ■就労の有無：求職中
- 直前職：運輸業、倉庫関係職、登録型派遣 ■直近の収入：勤労収入なし/生活保護受給(月12万円)
- 家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身 ■住居：民間賃貸住宅
- おおまかな職歴：高校卒業 露天商(3年、高校在学中より継続) 造園会社・造園師(正社員、7年) 土木建設業の飯場・建設土木作業員(日雇い、11年) パチプロ(無職・5年) 倉庫会社、倉庫整理(登録型派遣、3年半) 現在、生活保護受給中/求職中(7カ月)

< 仕事に就くまで >

1962年、茨城県生まれ。

父親と母親と2つ下の妹の4人家族。父親は土木作業員。小学校1年の時からアルコールを口にしていた。

高校時代の16歳(1978年)の時から、友人の誘いで露店商で働いていた。ひとつの露店を任されていて、二人の女性を使っていた。出していた店は、団子汁など簡単な食事

とお酒が飲めるような露店だった。16歳の頃からフィリピン人の女性と約3年同棲していた。

< 初職からの経験 >

18歳(1980年)で高校を卒業したが、引き続き露店商を続けた。その傍らでパチンコでもよく稼ぎ、よく玉が出た日はパチンコ台を3台打ち止めて、1日で28万円稼いだ

こともあった。

21歳（1983年）の頃、県内で露天商をしていた時に知り合ったお客さんに「今頃、露天商じゃ、まともなことはできないだろう。おれとこ来いや」と誘われ、その親方が営んでいた造園業の仕事に就いた。給料が30数万円あったのと、時々パチンコでも稼いでいたので、暮らしは余裕があった。社会保険などは、給与から天引きされていた。親方からは絶対に信頼されていた。その親方には息子と娘がいたが、娘婿になり仕事を受け継いでほしいという話もあったが、乗り気がせず断った。

28歳（1990年）の時、親方が肝硬変（59歳頃）で亡くなったために、約7年続けた造園業は辞めた。今、考えると、結婚して後を継いでいたらよかったと思うこともある。

同年、東京に行った。東京では土木の手配師から仕事をもらい、建設・土木作業の仕事を転々とした。住まいは、仕事場に依りて設置されていた「土方（ママ）の寮」（飯場）だった。仕事は20日契約や1カ月契約等様々な期間の日雇い契約で、関東周辺のなかでも千葉方面の仕事が多かった。手取りは千葉県の仕事が一番よくて、日給1万8,000円だった。契約期間が終わって東京に戻り、次の仕事を待っている間は、よく浅草の1泊9,000円ぐらいのホテルに泊まった。野宿はしたことはないが、浅草のホテルのチェックアウト後に公園に行き、ホームレスの人とも話をしたりして仲良くなった。数週間の飯場の仕事から帰ってくると、迎えに来てくれたりもした。「東京のホームレスは人情深い」。

こうした建設・土木作業員は11年ほど続け、現場で若い人をまとめる「職長」にまでなったが、39歳（2001年）頃に辞めた。当時は社会保険には何も加入していなかった。

39歳（2001年）頃から、東京を離れ、パチンコの流業者として、「旅打ち」に出た。ワンボックスカーを借り、「若いもん」を連れて多い時には27人ぐらいの集団で、彼らの面倒を見ながら各地を渡り歩いた。パチンコ台を見たら「勝てる台」がわかったので、打ち止めになるまで打った。プロだと店側に知られる場合もあるが、うまくかわしたり店を変えたりしながら行った。パチンコの勝ち収入は、多い時で1日70～80万円稼ぐこともあった。パチンコで各地を回っている時は、ホテルや、カプセルホテルに泊まった。節約する時はネットカフェなどにも泊まったりした。こうしたパチンコでの生活が5年ほど続いた頃、パチンコ屋も安易に玉の出る台を置かなくなってきたり、コンピュータパチンコに切り替わってきたりして、収入が見込めないと感じはじめ、パチンコ仲間を養うことができなくなり自然と解散した。一緒に回っていた仲間は、一旦は離れたが、結束があるため今でもすぐ連絡がつくようになっている。

44歳（2006年）の時、仕事を探そうと愛知県に来た。愛知県に来た特別な理由はなかった。

新聞広告を見て派遣会社に電話したら、すぐに面接となり、「住むところもあるから明日から来てくれ」という話になった。派遣先は、大手自動車メーカーの下請会社で、仕事内容は倉庫の仕分け作業だった。登録型派遣社員として働きはじめた。住まいは会社の寮に入り、職場から自転車で約15分のところで、家賃6万円だった。

会社からは社会保険に入るように言われたが、給料が少なかったため、あえて加入しなかった。家賃、生活費の他、交際していた女性との交際費にもかなり使っていたので、加入すると余裕がなくなるからであった。給与は、月額約

18万円で、働いた当初から2009年に派遣切りになるまでそれほど収入の変化はなかった。

派遣社員の頃に交際していた女性は、当時36歳で昼間は理容師として働き、夜は居酒屋でアルバイトをしていた。自分はその居酒屋に毎日のように通った。同棲はしていなかったが、ほとんど「女房」のようで、土日はずっと家に来ていた。理容師だったため散髪もしてもらっていた。

2009年（47歳）1月末ぐらいに、職場の上司から「もう仕事がないから、出て行ってほしい」と言われた。「もうちょいまってくれ」と上司に伝えしたが、「仕事がない。家賃も払えないだろうから出て行ってくれ」と再三言われた。そういうやりとりが2カ月ぐらい続き、2009年3月20日に会社より解雇され、同時に会社の寮も追い出された。持っていた荷物は、必要なもの以外は置いてきた。

その時、自分の本業は造園業だから、何とかなるかという気持ちも少しあった。しかし、家もなくなったので、女性とも別れた。派遣切りにならなかつたら、「ちゃんと所帯を持っていたと思う」。今も時々、その女性に公衆電話から連絡することもある。

2009年3月22日（47歳）、愛知県内の福祉事務所に行った。その後、別の役所に行き、紹介されたアパートに、生活保護を受けながら2カ月ほど住んでいた。

5月21日からは、現在の民間賃貸アパートに住んでいる。役所からの紹介で、不動産業者から斡旋を受けた。家賃は5万2,000円である。

現在、生活保護費は12万500円で、現金支給されている。

<現在の生活状況>

土木業をしていた父親は（父親が）56歳の時に脳梗塞により亡くなった。母親は自分が29歳の時に59歳で食道がんにより亡くなった。

現在、実家には独身の妹と愛犬が2匹住んでいる。1～2カ月に1度は帰っている。愛犬のチワワに会うのを楽しみにしている。

路上生活者等の支援を行うNPO団体の炊き出しがある時（月、木、第5土曜日）は利用している。部屋にいる時は、自炊している。健康は「いたって健康」であるが、「夜が寂しい」。支援団体の世話人は「きょうだい」のように思っている。

<本人の望みや不安>

今でも「（パチンコの）兄弟分」とは付き合いがある。先日、「兄弟分」が遊びにきて血圧を測っていたら血圧が高かったため、「兄弟」らに強く勧められ病院に行った。2009年6月頃に2日続けて病院に行き、痛風の可能性があると言われた。それ以後、健康に気をつけており、毎日2回、血圧計で血圧を測り、毎日青汁を飲んでいる。2週間ぐらい前に、無料の結核の診断を受診し、結果待ちである。

仕事は探しているが、ハローワークに行ったりしても年齢で断られる。昔の知り合いの「若いもん」に探してもらったりするが、住み込みの仕事ばかり勧めてくる。こっちで独立して部屋を借りているので、通える仕事をしたいと思っている。

プロフィール

- 性別：男 ■年齢：36歳 ■現住所：愛知県 ■出身地：愛知県 ■学歴：専門学校中退
- 就労の有無：求職中 ■直前職：建設業、建設・土木関係職、日雇い
- 直近の収入：勤労収入なし／生活保護受給 ■家計における役割：家計維持者 ■家族構成：単身
- 住居：更生施設
- おおまかな職歴：高校卒業 専門学校中退 電気機器メーカー・生産（期間従業員、半年）パチンコ店・店員（正社員、4年）鉄鋼メーカー（構内請負）・間接業務（契約社員、3年弱）建築業・建設土木作業員（日雇い、1年強）路上生活（日雇い派遣・日雇い、1年）土木建築業・作業員（アルバイト、2年）路上生活（日雇い派遣・日雇い、2年）自動車部品メーカー・生産（登録型派遣、4カ月）路上生活（日雇い派遣・日雇い、数カ月）自立支援センター／倉庫会社・仕分け（アルバイト、半年）路上生活（雑業、1年）建築業・建設土木作業員（日雇い、3カ月）現在、更生施設入所中＋生活保護受給中（2カ月）／求職中

<仕事に就くまで>

1973年、愛知県生まれ。

家族構成は両親、弟、祖母、本人の5人家族だったが、小学校2年生の頃に両親が離婚。4歳年下の弟とともに母親に引き取られ、祖母を含め4人家族となった。母親は離婚前に夫の父親（父方の祖父）の経営していたプレス工場に働いていたが、離婚前に辞めて地元の大型スーパーで販売の仕事をするようになった。

小学校は真面目に通っていたが、中学校に入ると学校を休みがちになった。担任の先生は勉強を見てくれたり、いろいろと相談に乗ってくれたり、夏休みなどは友達と一緒に釣りにつれて行ってくれたりするなどお世話になったが、教科担当の先生とは反りが合わなかった。授業中に友達としゃべっていることが多く、そのことが原因で怒られたり、時には体罰を受けることもあったためである。それゆえ、学校に行っても授業には出席せず、保健室にいたことが多かった。

中学校3年生の頃は受験のために一応は学校に通ったが、学力不足のため県内に進学できる高校がなく、1988年（15歳）、となりの県の全寮制の高校に進学した。学費は母親の収入だけでは払いきれなかったため、一部はおじ（母親の姉の夫）が負担してくれた。近くにいる親戚が母親の姉夫婦（おじ、おば）だけで、姉夫婦には子どもがいなかったため、子どもの頃からよく遊びに行き、おじにはかわいがってもらっていた。おじは産業用ロボットを作る会社を経営していたので、高校卒業後はおじの経営している会社に就職するよう勧められ、ロボット工学の専門学校に通うことになった。

1991年（18歳）専門学校に入学したものの、もともと数学は苦手だったうえ、物理の公式などが全く理解できず、ハンダごてやテスターを作っても正常に動かず、実験をしても結果として出てくる数値の意味も分からないなど、勉強についていくことができなかった。母親や専門学校の先生からは情報処理系の学科に移るよう勧められたが、教科書を一式そろえるだけで何十万円もかかるし、間もなく弟も専門学校に入学することになっていたため、余計な出費を避けるために中退することを決めた。

1992年（19歳）新聞の求人で大手電気機器メーカーの期

間工の仕事を見つけ、面接を受けたところ採用されたので、就職することを理由に退学した。

<初職からの経験>

就職後、職場を転々とする

1992年（19歳）電気機器メーカーに期間工として入社。社員寮に入寮した。

仕事はパソコン用モニターの組立作業で、モニターの外側に小さな部品を接着剤で付けるという単純なものだった。半年で契約満了を迎えたが、「延々と単調な作業を繰り返すことに飽きてしまった」ため、契約を更新せずに辞めた。期間工として働いていた間は三交替制だったため収入もかなりの額になった（具体的な金額は忘れた）。あまりお金を使わなかったためそれなりに貯金ができただけで、仕事を辞めて実家に戻った後、専門学校時代の学費を母親に返済した。

期間工を辞めてから2カ月ほどは無職であったが、「契約満了金」を使って生活していた。

1993年（20歳）「パチンコが好きだった」ためパチンコ店で正社員として働き始めた。パチンコ店で働いていた期間は4年間に及び、合計4店舗を渡り歩いた。給料はおおよそ手取りで23万円で、大きく上がることも、下がることもなかった。また、最初の店舗に勤務していた頃に、祖母が介護が必要な状態になったため、母親が不在の時には祖母の介護をしていた。

最初の店に勤めていた頃は実家から通っていたが、2店舗目以降は実家から距離があったため寮に住むようになった。店を移ったのは、職場で話が合わない人がいたり、少しでも条件の良い店があるという話を聞いたりしたからであった。生活面では、飲みに行ったり遊びでパチンコを打ちに行ったりして、給料をほとんど使ってしまうことがしばしばあった。そのため、月に5万円の貯金があれば良い方だった。最終的にパチンコ店で働くのを辞めたのは、24歳の時である。パチンコ玉の入った箱を運んでいる時に腰の痛みを感じ、その後も腰や背中がなかなか取れなくなったためである。

1997年（24歳）パチンコ店を辞めてから再び実家に戻り、1カ月から2カ月の間は仕事をせずに貯金を取り崩し

てパチンコを打っていた。その時にパチンコ店の店員時代の常連客と偶然出会い、大手鉄鋼メーカーの構内請負会社の仕事を紹介してもらった。実家からは通えないため、会社の寮に入った。業務内容は多岐にわたり、ベルトコンベアからこぼれた鉄鉱石を除去する作業、活性炭をふるいにかけて細かい粒子にする作業、設備の油さしから草刈りまで、「本当に何でも屋だった」。

この仕事は、二十日契約を更新する契約社員として、2年から3年ほど続けた。辞める直前には溶鉱炉内の作業を担当していた。ある時、溶鉱炉で作業をしていると「鉄が真っ赤になって流れているところのうえにずっとおったもんで、肌がもう、ぴりぴり、ぴりぴりするくらい熱くて、最後は熱中症になって、脱水症状もおきて、気持ち悪くなりすぎて水も飲めなくなって、一応休憩だつて外に出たらそこで倒れて」病院に救急搬送された。一週間後に体調が回復してから同じ職場に戻ることも可能だったが、人手が不足している溶鉱炉での作業をやってくれと言われたため、「このまま戻されて、下手なことやってまた倒れると嫌だなと思って」退職した。

寮生活と野宿生活の繰り返し

2000年（27歳）、構内請負の仕事を辞めた後は家に戻らず、最後に貰った給料で愛知県内のサウナに寝泊まりしながら生活していた。間もなく貯金もなくなり、仕事をしなければならぬと思っていたところ、駅を歩いている時に手配師に声をかけられ、愛知県内の飯場に入った。最初の2カ月間は建設の基礎工事や道路舗装の仕事があったが、その後は仕事が減っていった。これは、勤務先の企業（孫請企業）が、仲介していた会社（下請企業）を超えて元請企業と直接に契約したことが明るみに出て、このために下請企業からの仕事が入らなくなったためであった。3カ月目以降は月に2日しか仕事がない時もあり、全然仕事に行けない人もいた。その結果、最初の2カ月は手取り20万円、そこから寮費2万円を引かれて18万円ほど貰っていたが、それ以降はほとんど仕事がなかったため、月に3万円くらいしか手元に残らなくなった。社長からは寮費は払わなくていいと言われており、仕事はなくても一応三食食べさせてもらっていたので、その後1年くらいはそこに残っていた。

2001年（28歳）、その飯場を出た後は、愛知県内の橋の下で野宿生活をしながら日雇い派遣でイベントの設営・撤去の仕事や引っ越しの仕事、道路の交通量調査をしていた。携帯電話で前日に業者に電話し、翌日の職場が指示された。日雇い派遣以外では、愛知県内のハローワークに行き日雇いの仕事もしていた。当時はある程度仕事があったとはいえ、週に3日程度しか仕事はできなかった。所持金に余裕のある時はサウナに行っていたが、サウナでの生活は長く続かず、金がなくなると橋の下の野宿生活に戻った。

2002年（29歳）、同じく愛知県内の土木会社で「手元」（熟練した建設職人の補助的作業を行う未熟練の作業員）として働き始める。給与形態は日給月給、賃金は1日1万円1千円くらいであった。2年間ほど働いた後、退職して再び野宿生活に戻った（退職理由は覚えていない）。

2004年（31歳）から2年ほど、日雇い派遣や建設業の日雇いをしながら野宿生活を続けた。

2006年（33歳）、野宿生活をしていると知った友達が、「やる気があるなら」と友達が働いていた登録型派遣の仕

事を紹介してくれた。派遣先は自動車部品メーカーで、給料は手取りで約26万円であった。寮はなく、会社は最初にアパートの契約をしてくれるだけで、自分で家賃（5万円くらい）を支払っていた。業務内容は、当初は車のマフラーの組立作業だったが、3カ月後にはラインの組立作業からピッキング作業に変更された。ピッキング作業は苦手だったので断り続けていたが、人がいないからと言われ仕方なく引き受けた。最初は2人で作業を行っていたためなんとかこなせていたが、途中で1人が辞めてしまい、その後人員補充もなく残業が増えた。扱う部品の数（400～500）が多く、収納場所を覚えなくてはならないので、業務に慣れるまで時間がかかった。時間内に作業が終わらず、嫌気がさして4カ月で退職し、再び橋の下の野宿生活に戻った。

野宿生活から自立支援センターに入所、就職するが、退職して再び野宿へ

2007年（34歳）10月、自立支援センターに入所し、就職活動をしたところ、配送センターで働くことが決まった。業務内容は倉庫でのオフィス向け荷物の仕分け作業だった。この作業も部品点数が多く倉庫内のどこに部品があるかが覚えられなかったため、仕事をこなすのに時間がかかった。そのことを社長に伝えると、「時間がかかってもいいからやってくれ」と言われたので、休み時間にも作業をしてなんとか同僚のペースに追いつくよう努力した。

2008年（35歳）4月、一緒に仕事をしている同僚から、「仕事が遅いと他の仕事ができないから困る」と文句を言われて喧嘩になり、辞めてしまった。自立支援センターの入所期間は半年までだったのだが、仕事を辞めてすぐに期限が来てしまった。入所期間を延長して自立支援センターに残ることもできたが、勝手に仕事を辞めてしまったため、居づらくなって自立支援センターを出て、野宿生活に戻った（2008年5月）。

再び建設日雇いや日雇い派遣の仕事を探したが、この頃になるとなかなか見つからなかったため、アルミ缶を集めてそれを売り、生計を維持していた。アルミ缶集めの収入は1週間で約9千円、1日の生活費は1,500円から2,000円くらいだった。アルミ缶集めは主に夜間に行き、昼間はハローワークに行ったり、知人のところに行ったりして仕事を探していた。自立支援センターに入所していた際にフォークリフトの免許を取っていたので、倉庫関係の仕事を探していたが見つからなかった。

2009年（36歳）6月、知人から石川県の土木関係の仕事を紹介され、そこで働くことにした。その職場では会社の寮に住むことになっていたが、紹介してくれた知人の部屋に同居させてもらったので寮費はかからなかった。賃金は1日1万円で、支払い形態は日給月給で、日雇いだった。最初の月は25日くらい仕事があったが、7月から減り始め、8月にはほとんどなくなってしまった。そして9月にアパートのベッドから落ちてあばらの骨にひびが入ってしまったため、退職して愛知県に戻ってきた。

同年9月、愛知県内の福祉事務所へ相談に行くと、養生しながら仕事を探すように言われ、現在は更生施設に入り生活保護を受給しながら求職活動をしている。

< 家族や友達との関係 >

母親とは時々連絡を取っていたが、4年ほど前から連絡

は取っていない。自立支援センターに入所する際に自分の戸籍を取り寄せた時に母親が再婚していることが分かり、より一層連絡しにくくなってしまった。弟は現在もおじの経営する産業用ロボットの工場に勤めている。やはり時々連絡を取るくらいであったが、自立支援センター入所中、倉庫会社に就職する際に保証人になってもらったが、その後この会社を離職してしまったため連絡しづらくなり、それ以来は連絡を取っていない。

家族以外に親しいのは、12～13年来のつきあいがある同年代の友達があり、何かと相談に乗ってもらったり、電話で話したりしている。

<現在の求職活動と今後の展望>

現在は、ハローワークを中心に、「フォークリフトの免許を持っているので、倉庫関係の仕事を探しているが、なかなかめぼしい仕事が見つからない」状態である。また、祖母の介護をした経験があるので、介護補助の仕事も探している。しかし、不眠症で集中できないという問題もあり、面接には至っていない。現在入所している更生施設は、6カ月の入所期限が過ぎれば出なければならないが、なかなか仕事が見つからないので不安に思っている。

ワーキングプアに関する連合・連合総研共同調査研究報告書Ⅰ
—— ケースレポート編 ——

2010年6月11日

発行 財団法人連合総合生活開発研究所

所長 薦田 隆成

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-3-2

曙杉館ビル3階

TEL 03(5210)0851 / FAX 03(5210)0852

<http://www.rengo-soken.or.jp/>

制作 株式会社 協同社

〒162-0801 東京都新宿区山吹町314

TEL 03(3266)1420 / FAX 03(3266)1425
